富山県文化振興財団
埋蔵文化財発掘調査報告第8集

梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡
梅原安丸遺跡・田尻遺跡 発掘調査報告

―― 東海北陸自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告Ⅲ ――

第一分冊

1996年

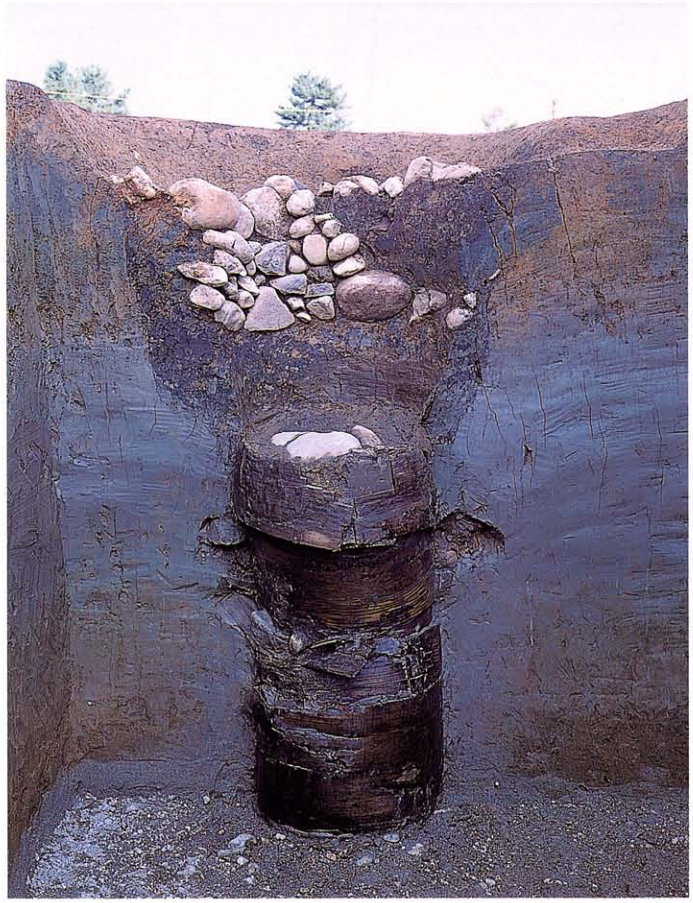
財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

遺跡遠景(北から)

梅原加賀坊遺跡　AW地区　掘立柱建物

梅原加賀坊遺跡　縄文土器

上　梅原安丸遺跡　全景(南から)
下　梅原安丸遺跡　SK07・SK15・SK19(北から)



上　田尻遺跡　第二次調査　A地区全景（南から）
下　田尻遺跡　第二次調査　SE109断割（西から）

上　田尻遺跡　第一次調査　唐津
下　田尻遺跡　第一次調査　越中瀬戸

梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡
梅原安丸遺跡・田尻遺跡 発掘調査報告

―― 東海北陸自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告Ⅲ ――

第一分冊

1996年

財団法人 富山県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 事 務 所

序

富山県下では，ここ十数年の間，高速自動車道や国道バイパスの建設に伴って，大規模かつ長期にわたる発掘調査が行われています。当財団におきましても，日本道路公団の東海北陸自動車道建設に先立ち，平成元年度から４年度にかけて，道路建設予定地に係る遺跡の発掘調査を実施いたしました。

調査した遺跡は，福光・福野両町に所在する梅原胡摩堂・梅原加賀坊・久戸・梅原安丸・田尻の５遺跡で，その総延長は約2.3kmにのぼります。こうした一連の調査のうち，梅原胡摩堂遺跡についてはすでに報告書を公にしたところですが，本書はそれを除く４遺跡の調査の成果を取りまとめたものです。調査の結果，これらは縄文時代から近世に至る遺跡群であることが判明し，それぞれの時代の文化やくらしの様子を伝えてくれる多くの遺構や遺物が発見されました。この調査の成果が，今後の学術研究の一助となり，その基礎資料として本書をご活用いただければ幸いに存じます。

終わりにこれまでの調査及び報告書刊行に御指導，御協力を賜りました関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成８年３月31日

財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
所長　岸本雅敏

例　言

1　本書は富山県西礪波郡福光町梅原に所在する梅原加賀坊遺跡・梅原安丸遺跡，同町久戸に所在する久戸遺跡，東礪波郡福野町田尻に所在する田尻遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は，日本道路公団の依頼を受けて，財団法人富山県文化振興財団が行った。

3　発掘調査の期間と本書刊行までの整理期間は次のとおりである。

調査期間　梅原加賀坊遺跡　平成2(1990)年5月7日～平成2(1990)年12月27日
久戸遺跡　平成2(1990)年4月12日～平成2(1990)年6月8日
梅原安丸遺跡　平成2(1990)年4月12日～平成2(1990)年6月8日
田尻遺跡　平成2(1990)年4月12日～平成2(1990)年10月12日
平成3(1991)年4月25日～平成3(1991)年10月17日

整理期間　平成4(1992)年4月1日～平成8(1996)年3月31日

4　本書の編集・執筆は，山本正敏，横山和美，越前慎子が担当し，執筆分担は各文末に記した。

5　遺物の写真撮影は，楠華堂（代表 楠本真紀子）及び㈱シン技術コンサルに委託した。

6　自然科学的な分析は，以下の諸機関に委託し，その成果について報文を得た。

土器胎土分析　土器胎土研究会（代表 三辻利一）
樹種同定　富山県林業センター木材試験場　（長谷川益夫，塚本英子）
骨同定　㈱パリノ・サーヴェイ　（早稲田大学 金子浩昌）

なお上記遺跡の自然科学的分析の成果の一部については『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）第二分冊』に掲載されているので、参照していただきたい。

7　発掘調査から本書の作成に至るまで，下記の方々から多大な御教示・御協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略，五十音順)

秋田裕毅，伊藤隆三，伊野近富，内堀信夫，宇野隆夫，大橋康二，鈴木正貴，塚田一成，楢崎彰一，西山要一，林　浩明，藤澤良祐，藤田邦雄，本澤慎輔，前川　要，松本建速，水野正好，山本信夫，吉井亮一，吉岡康暢，福野町教育委員会，福光町教育委員会，医王山文化調査委員会

凡　例

1　本書は２分冊からなる。第一分冊には本文，挿図及び表，第二分冊には自然科学的分析と遺構全体図，写真図版を収める。

2　遺構全体図は，久戸遺跡は1/250，梅原加賀坊遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡は1/200で示し，各遺跡毎に北から重復させて１頁に収まる範囲に分割して掲載する。

3　本書で示す方位はすべて真北である。

4　挿図の縮尺は次の率を基本とし，各図の下に縮尺率を示す。なお遺物写真図版の縮尺は統一していない。

遺構　建物：１/100，溝：1/40～1/80，井戸・土坑：1/40

遺物　土器・陶磁器：1/3～1/6，木製品1/3～1/12，石製品2/3～1/12，金属製品2/3～1/6

5　遺構の略号は以下のとおりである。

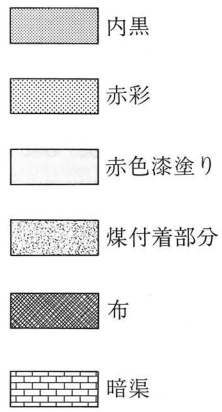
SA：柵，SB：建物，SD：溝，SE：井戸，SK：土坑，SX：方形周溝状遺構・その他

6　遺構番号は各遺跡で遺構の種類に関わらず連番号を付す。ただし建物・柵は新たに番号を付した。

7　遺物は各遺跡毎に連番号を付す。第一分冊の遺物番号は，出土状況を示した遺構実測図，遺物観察表及び第二分冊写真図版中の遺物番号と一致する。

8　施釉陶器等の釉の掛かる範囲は１点破線で示した。２種類以上の釉が掛かる場合や絵付けがされている場合はトレースの濃淡で示した。

9　遺物の煤付着部分及び漆器の赤色漆の部分は，スクリーントーンで示す。また，木製品のうち年輪方向がわかるものは，断面図に同心円状のスクリーントーンで模式的に示す。遺構図中のスクリーントーンは，それぞれの図・文を参照されたい。



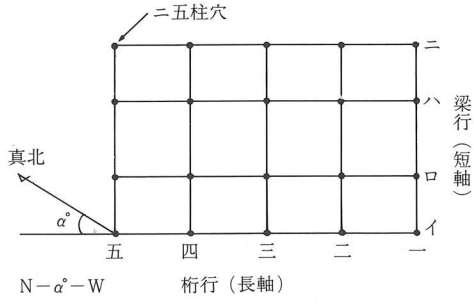
10　遺跡の略号は，梅原加賀坊遺跡「UK-地区名」・久戸遺跡「HT」・梅原安丸遺跡「UY」・田尻遺跡「TJ-地区名」である。遺物の注記は略号を用いた。

11　遺構一覧・遺物一覧は遺跡毎に各章末に掲載する。

12　遺構一覧及び本文中で用いる遺構についての用語・数値等は以下のとおりとするが，一部例外的な部分もある。

掘立柱建物　用語は「平城宮発掘調査報告Ⅶ」を参考とし，以下のように定義付ける。

- 柱間や棟方向に関わらず建物の平面図の長軸を「桁行」，建物の短軸を「梁行」とし，桁行(間)×梁行(間)の順に表記する。
- 建物の棟方位は，真北から建物の長軸の方位を測る。その角度から建物を「東西棟」「南北棟」に分ける。
- 建物の面積は長軸に短軸をかけた数値である。
- 「柱穴」とは柱位置に遺存する穴の総称とする。
- 「柱掘形」とは，掘立柱を据えつけるための穴のことで，「掘形埋土」とは柱根を固定するために柱掘形にいれた土のことである。
- 「柱根」とは，遺存している柱自体の下端部分のことで



あり、「柱痕跡」とは柱掘形の中の柱根が立ったまま腐り消えて空洞になり，そこに土が流れ込んだもので，ここでは柱根が抜き取られたものも含む。

- 柱間の呼称は，「平城宮発掘調査報告XI」にのっとり，桁行柱を漢数字とし，梁行柱を片仮名で表し，東と南から数え始めることとする。

井戸　井戸の部分名称及び形式分類については，宇野隆夫氏の「井戸の分類」[注1]を援用する。

- 各部の名称は地上の施設を「井桁」，地下壁面の施設を「井戸側」，底の施設を「水溜」とする。
- 井戸の断ち割り図面において，地山の変化がわかるものは，スクリーントーンで示した。

遺構の覆土に切り合い関係がある場合は，備考欄に新＞古のように記号で示す。

13　遺物観察表の凡例は以下のとおりである。

法量　㎜単位で示す。

重量　g単位で示す。計測は遺物の大きさによって台秤と電子秤を使い分けた。

胎土・釉調　農林省農林水産技術会議事務局監修　㈶財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」・日本規格協会「標準色票　光沢版」を使用した。なお，陶磁器のうち複数の色がみられる場合は，最も多く使用されている色を記し，その他は特記事項に記す。ただし透明釉の場合は記入しない。

特記事項　陶磁器については窯名・窯詰技法・墨書・刻印・篦記号等を，珠洲・瓦器・土師質土器は胎土中の含有物を記す。木製品のうち漆器椀は漆の色を記すが，記載がない場合は黒色漆であることを示す。

注1　宇野隆夫　1982　「井戸考」『史林第65巻第5号』

報告書抄録

ふりがな	うめはらかがぼういせき・ひさといせき・うめはらやすまるいせき・たじりいせきはっくつちょうさほうこく
書名	梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告
副書名	東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告
巻次	Ⅲ
シリーズ名	富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第8集
編著者名	山本正敏，横山和美，越前慎子
編集機関	財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒930 富山県富山市五福4384番1号 TEL0764-42-4229
発行年月日	西暦1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
梅原加賀坊 うめはらかがぼう	西礪波郡福光町 梅原 にしとなみぐんふくみつまち うめはら	16421	175	36度 33分51秒	136度 54分20秒	900507～ 901227	21,520	道路（東海北陸自動車道）建設に伴う事前調査
久戸 ひさと	西礪波郡福光町 久戸 にしとなみぐんふくみつまち ひさと	〃	176	36度 33分42秒	136度 54分27秒	900412～ 900608	1,300	
梅原安丸 うめはらやすまる	西礪波郡福光町 梅原 にしとなみぐんふくみつまち うめはら	〃	171	36度 34分00秒	136度 54分15秒	900412～ 900608	850	
田尻 たじり	東礪波郡福野町 田尻 ひがしとなみぐんふくのまち たじり	16408	28	36度 34分15秒	136度 54分27秒	900412～ 901012 910425～ 911017	10,200	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
梅原加賀坊	集落跡	縄文時代	川跡　1条 溝　2条 埋甕　1基	縄文土器・石器 中世土師器・珠洲・八尾・中国製白磁・中国製青白磁・中国製青磁・伊万里・木製品・石製品・銭貨	晩期の自然流路
		中世	掘立柱建物16棟 柵列　10条 溝　9条 井戸　6基 土坑　21基		13世紀から14世紀の集落
久戸	集落跡	中世	掘立柱建物2棟 溝　1条 土坑　17基	縄文土器・石器・須恵器・中世土師器・珠洲・伊万里	12世紀後半から13世紀の集落
梅原安丸	集落跡	中世	川跡　1条 溝　5条 土坑　15基	縄文土器・須恵器・中世土師器・珠洲・越前・中国製青磁・中国製白磁・瀬戸美濃・唐津・伊万里・金属製品・石製品・骨	15世紀から16世紀の火葬遺構
田尻	集落跡	中世	掘立柱建物26棟 溝　13条 井戸　5基 土坑　7基	縄文土器・石器・土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・八尾・越前・瀬戸美濃・中国製白磁・中国製青磁・中国製染付・土師質土器・越中瀬戸・唐津・伊万里・土錘・木製品・石製品・金属製品	12世紀後半から15世紀前半の集落
		近世	掘立柱建物4棟 川跡　1条 溝　7条 井戸　4基 土坑　8基		16世紀から18世紀の集落

目　　次

第Ⅰ章　序 章 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1
2　調査方法 …… 2
A　調査方法 …… 2
B　調査体制 …… 2
C　現地説明会 …… 3
D　整理体制 …… 4
3　周辺の環境 …… 5

第Ⅱ章　梅原加賀坊遺跡 …… 7

1　遺跡の概要 …… 7
A　概要 …… 7
B　調査経過 …… 7
C　土層 …… 8
2　遺構と遺物 …… 8
A　縄文時代 …… 8
(1)　遺構 …… 8
(2)　遺物 …… 11
B　奈良・平安時代 …… 24
(1)　遺構 …… 24
(2)　遺物 …… 24
C　中世 …… 27
(1)　遺構 …… 27
(2)　遺物 …… 51
D　近世 …… 59
(1)　遺構 …… 59
(2)　遺物 …… 59
E　古代から近世のその他の遺物 …… 63
3　まとめ …… 69

第Ⅲ章　久戸遺跡 …… 85

1　遺跡の概要 …… 85
A　概要 …… 85
B　調査経過 …… 85
C　土層 …… 85

2　遺構 …… 87
3　遺物 …… 91
4　まとめ …… 92

第Ⅳ章　梅原安丸遺跡 …… 95

1　遺跡の概要 …… 95
A　概要 …… 95
B　調査経過 …… 95
C　土層 …… 95
2　遺構 …… 97
3　遺物 …… 105
4　まとめ …… 110

第Ⅴ章　田尻遺跡 …… 117

1　遺跡の概要　第一次調査(平成2年度) …… 117
A　概要 …… 117
B　調査経過 …… 118
C　土層 …… 118
2　遺構と遺物 …… 118
A　遺構 …… 118
B　遺物 …… 162
C　その他の遺物 …… 184
3　遺跡の概要　第二次調査(平成3年度) …… 194
A　概要 …… 194
B　調査経過 …… 194
C　土層 …… 194
4　遺構と遺物 …… 195
A　遺構 …… 195
B　遺物 …… 239
C　その他の遺物 …… 245
5　まとめ …… 265

挿図目次

第1図　路線内遺跡調査区 …… 1
第2図　梅原加賀坊遺跡周辺の主要遺跡位置図 …… 2
第3図　梅原加賀坊遺跡調査区 …… 7
第4図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　埋甕 SX43 …… 8
第5図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SD01 SD02 …… 9
第6図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図1 …… 12
第7図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図2 …… 13
第8図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図3 …… 14
第9図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図4 …… 15
第10図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図5 …… 16
第11図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図6 …… 17
第12図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図7 …… 19
第13図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図8 …… 20
第14図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図9 …… 21
第15図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図10 …… 22
第16図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図11 …… 23
第17図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図12 …… 25
第18図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図13 …… 26
第19図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図14 …… 27
第20図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SB25 …… 29
第21図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SB25 SB97 …… 30
第22図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SB27 …… 31
第23図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SB28 SB98 …… 32
第24図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SB30 SB31 SB38 …… 33
第25図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SB30 SB38 …… 34
第26図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SB31 …… 35
第27図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SB32 SB33 …… 36
第28図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SB34 SB36 …… 37
第29図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SB35 SB95 …… 38
第30図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SB37 …… 39
第31図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SD04 SD05 他 …… 42
第32図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SD04 SD06 SD07 SD13 SD19 SD375 …… 43
第33図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SE39～SE41 SE72 SE73 SE374 …… 44
第34図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SK46 SK60 SK61 …… 46
第35図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SK64～SK66 SK68 SK91 …… 47
第36図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SK62 SK80 SK86 SK93 SK99 SK380 …… 49

第37図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SK96 SK402 SK405 SK409 SK417 SK418 …… 50
第38図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図15 …… 52
第39図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図16 …… 53
第40図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図17 …… 55
第41図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図18 …… 56
第42図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図19 …… 57
第43図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図20 …… 58
第44図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SK63 SK87 SK150 SK372 SK373 SK389
SK390 SK411 …… 60
第45図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図　SK397 SK402 SK404 SK410 SK419 SK421 …… 61
第46図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図21 …… 62
第47図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図22 …… 64
第48図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図23 …… 65
第49図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図24 …… 66
第50図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図25 …… 67
第51図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図26 …… 68
第52図　久戸遺跡　遺構全体図 …… 86
第53図　久戸遺跡　遺構実測図　SB01 SK01 …… 88
第54図　久戸遺跡　遺構実測図　SB02 …… 89
第55図　久戸遺跡　遺構実測図　SA03 …… 90
第56図　久戸遺跡　遺物実測図 …… 93
第57図　梅原安丸遺跡　遺構全体図 …… 96
第58図　梅原安丸遺跡　遺構実測図　SD11 SD12 SD17 SD23 …… 98
第59図　梅原安丸遺跡　SD23土層別遺物分布図 …… 99
第60図　梅原安丸遺跡　遺構実測図　SK01 SK02 SK03 SK05 SK06 SK08 SK09
SK10 SK13 SK18 …… 102
第61図　梅原安丸遺跡　遺構実測図　SD12 SD14 SD17 …… 103
第62図　梅原安丸遺跡　遺構実測図　SK07 SK15 SK19 …… 104
第63図　梅原安丸遺跡　遺物実測図１ …… 108
第64図　梅原安丸遺跡　遺物実測図２ …… 109
第65図　梅原安丸遺跡　遺物実測図３ …… 110
第66図　田尻遺跡調査区 …… 117
第67図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SB01 …… 120
第68図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SB02 …… 121
第69図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SB02（SP12 SP29） …… 122
第70図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SB03 …… 123
第71図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SB04 …… 125
第72図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SD08 SD09 SD69 …… 129
第73図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SD48 …… 131

第74図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SD61 SD62 SD63 …… 133
第75図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SD25 SD60 SD61 SD62 SD63 SD95
SD115 …… 135
第76図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SD118 …… 137
第77図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SE15 SE18 SE32 SE33 SE36
SE44 …… 143
第78図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SE46 SE50 SE51 SE57 SE59
SE64 SE71 …… 144
第79図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SE72 SE74 SE75 SE77 SE82
SE87 …… 145
第80図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SE88 SE92 SE96 SE101 SE112 …… 146
第81図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SE94 SE113 SE151 SE154 …… 147
第82図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SK13 SK14 SK16 SK19 SK22 SK28
SK30 …… 151
第83図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SK27 SK40 SK73 SK89 …… 152
第84図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SK39 SK52 SK70 …… 153
第85図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SK53 …… 154
第86図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SK49 …… 155
第87図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SK58 SK78 SK79 SK93 …… 157
第88図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SK80 SK81 …… 158
第89図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SK84 SK85 SK86 …… 159
第90図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SK104 SK122 SK126 SK127 SK128 …… 160
第91図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図　SK150 …… 161
第92図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図 1 …… 169
第93図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図 2 …… 170
第94図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図 3 …… 171
第95図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図 4 …… 172
第96図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図 5 …… 173
第97図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図 6 …… 174
第98図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図 7 …… 175
第99図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図 8 …… 176
第100図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図 9 …… 177
第101図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図10 …… 178
第102図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図11 …… 179
第103図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図12 …… 180
第104図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図13 …… 181
第105図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図14 …… 182
第106図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図15 …… 186
第107図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図16 …… 187

第108図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図17 …… 188
第109図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図18 …… 189
第110図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図19 …… 190
第111図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図20 …… 191
第112図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図21 …… 192
第113図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図22 …… 193
第114図　田尻遺跡 第二次調査　層序模式図 …… 195
第115図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB01 …… 196
第116図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB02～SB04 …… 198
第117図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB02 SB03 …… 199
第118図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB04 …… 200
第119図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB05～SB07 …… 201
第120図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB05 SB06 …… 202
第121図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB07 …… 203
第122図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB08～SB10 …… 204
第123図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB08 SB09 …… 205
第124図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB10 …… 206
第125図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB11～SB16 …… 207
第126図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB11 …… 209
第127図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB12 SB13 …… 210
第128図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB14 SB15 …… 211
第129図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB16 …… 212
第130図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB17 …… 213
第131図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB18～SB20 …… 215
第132図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB18 SB19 …… 216
第133図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB20 …… 217
第134図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB21～SB26 …… 218
第135図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB21 SB22 …… 219
第136図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB23 SB24 …… 220
第137図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SB25 SB26 …… 221
第138図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SD13 SD25 SD34 SD43 SD53 SD54
SD55 SD87 SD178 SD184 SD185
SD214 SK121 …… 224
第139図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SD13 SD25 SD34 SD43 SD53 SD54
SD55 SD87 SD214 …… 225
第140図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SD183 …… 227
第141図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SE33 SE123 SE180 …… 229
第142図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SE109 …… 230
第143図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SK20～SK23 SK56 …… 233

第144図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SK166 SK167 SK175 SK176 SK181 SK182 …… 234
第145図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SK137 SK141 …… 235
第146図　田尻遺跡 第二次調査　遺構実測図　SX49 …… 238
第147図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図１ …… 248
第148図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図２ …… 249
第149図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図３ …… 250
第150図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図４ …… 251
第151図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図５ …… 252
第152図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図６ …… 253
第153図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図７ …… 254
第154図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図８ …… 255
第155図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図９ …… 256
第156図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図10 …… 257
第157図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図11 …… 258
第158図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図12 …… 259
第159図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図13 …… 260
第160図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図14 …… 261
第161図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図15 …… 262
第162図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図16 …… 263
第163図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図17 …… 264
第164図　中世の遺構変遷図 …… 266
第165図　中世の掘立柱建物計測図 …… 267

図版目次

巻首図版１　遺跡遠景
巻首図版２　梅原加賀坊遺跡AW地区掘立柱建物　梅原加賀坊遺跡　縄文土器
巻首図版３　梅原安丸遺跡全景　梅原安丸遺跡SK07・SK15・SK19
巻首図版４　田尻遺跡 第二次調査 A地区全景　田尻遺跡 第二次調査 SE109断割
巻首図版５　田尻遺跡 第一次調査　唐津　田尻遺跡 第一次調査　越中瀬戸

表目次

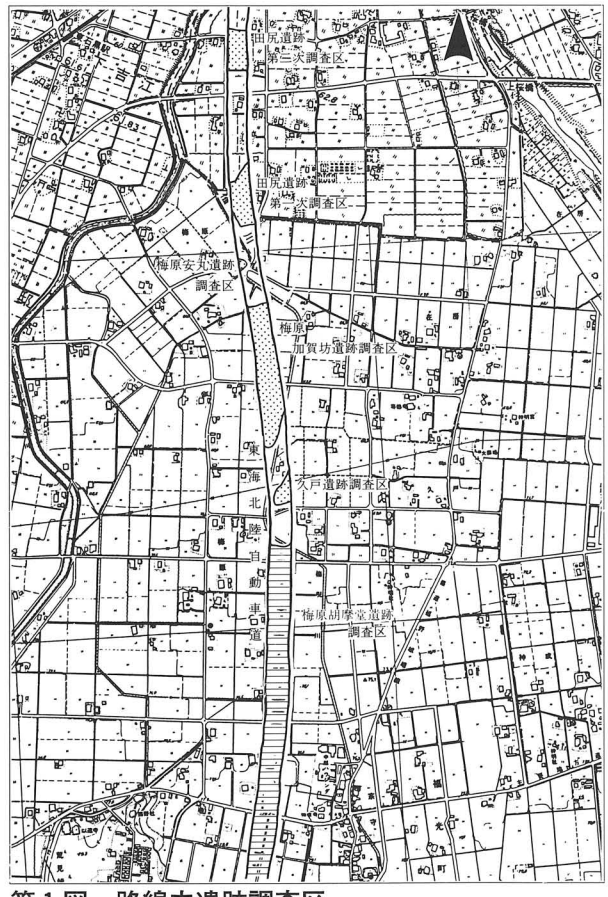
第１表　調査体制 …… 3
第２表　調査一覧 …… 3

第３表　整理体制 …… 4
第４表　梅原加賀坊遺跡　掘立柱建物一覧 …… 71
第５表　梅原加賀坊遺跡　柵列一覧 …… 71
第６表　梅原加賀坊遺跡　溝一覧 …… 72
第７表　梅原加賀坊遺跡　井戸一覧 …… 72
第８表　梅原加賀坊遺跡　土坑一覧 …… 73
第９表　梅原加賀坊遺跡　土器・陶磁器一覧　(1)～(9) …… 74
第10表　梅原加賀坊遺跡　石製品一覧 …… 83
第11表　梅原加賀坊遺跡　木製品一覧 …… 84
第12表　梅原加賀坊遺跡　金属製品一覧 …… 84
第13表　久戸遺跡　掘立柱建物一覧 …… 94
第14表　久戸遺跡　溝一覧 …… 94
第15表　久戸遺跡　土坑一覧 …… 94
第16表　久戸遺跡　土器・陶磁器一覧 …… 94
第17表　久戸遺跡　石製品一覧 …… 94
第18表　梅原安丸遺跡　溝一覧 …… 114
第19表　梅原安丸遺跡　土坑一覧 …… 114
第20表　梅原安丸遺跡　土器・陶磁器一覧　(1)・(2) …… 114
第21表　梅原安丸遺跡　石製品一覧 …… 116
第22表　梅原安丸遺跡　金属製品一覧 …… 116
第23表　田尻遺跡　第一次調査　掘立柱建物一覧 …… 269
第24表　田尻遺跡　第一次調査　溝一覧 …… 270
第25表　田尻遺跡　第一次調査　井戸一覧　(1)・(2) …… 271
第26表　田尻遺跡　第一次調査　土坑一覧　(1)・(2) …… 272
第27表　田尻遺跡　第一次調査　土器・陶磁器一覧　(1)～(4) …… 275
第28表　田尻遺跡　第一次調査　木製品一覧　(1)・(2) …… 280
第29表　田尻遺跡　第一次調査　石製品一覧 …… 283
第30表　田尻遺跡　第一次調査　金属製品一覧 …… 284
第31表　田尻遺跡　第二次調査　住居址一覧 …… 285
第32表　田尻遺跡　第二次調査　掘立柱建物柱穴一覧 …… 286
第33表　田尻遺跡　第二次調査　溝一覧 …… 286
第34表　田尻遺跡　第二次調査　井戸一覧 …… 287
第35表　田尻遺跡　第二次調査　土坑一覧 …… 288
第36表　田尻遺跡　第二次調査　土器・陶磁器一覧　(1)～(7) …… 289
第37表　田尻遺跡　第二次調査　木製品一覧　(1)・(2) …… 296
第38表　田尻遺跡　第二次調査　石製品一覧 …… 298
第39表　田尻遺跡　第二次調査　金属製品一覧 …… 298

第Ⅰ章　序　　章

1　調査に至る経緯

富山県内において，北陸自動車道に続く第二の高速道路として東海北陸自動車道の基本計画が提示されたのは，昭和46年のことである。東海北陸自動車道とは愛知県一宮市を起点に岐阜県を経て富山県小矢部市に至る総延長184㎞の高速道路である。昭和53年11月，建設大臣から日本道路公団に富山県内の福光小矢部間11.4㎞の施行命令が出された。これをうけて，富山県教育委員会と日本道路公団との間で路線周辺の未確認の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて協議が行われ，同年12月，富山県埋蔵文化財センターによって分布調査が実施された。その結果，新たに19箇所の埋蔵文化財包蔵地が発見され，THJ-01～THJ-19と仮称された。このうち福野町南部から福光町北部にかけては中世の遺物が多く採集されたため，中世の大規模な集落遺跡の存在が推定された。昭和58年３月には，福光・小矢部間の路線が発表され，昭和63年に用地買収が完了した。その年，富山県教育委員会が主体となり，富山県埋蔵文化財センターと福野町教育委員会によって，福野・福光間のTHJ-02～THJ-19遺跡の試掘調査が実施された。その結果，福光町の７箇所の遺跡推定地のうちTHJ-13・THJ-14から遺構が確認され，縄文時代・古代・中世の遺物が出土した。これらは小字名をとって梅原安丸遺跡・梅原加賀坊遺跡・梅原胡摩堂遺跡と名付けられた。福野町は11箇所の推定地のうちTHJ-12で遺構が確認され，縄文時代・古代・中世の遺物が出土し，田尻遺跡と名付けられた。平成元年，砺波・小矢部間のTHJ-01・THJ-02遺跡の試掘調査が富山県埋蔵文化財センターと小矢部市教育委員会によって実施されたが，遺構は確認できなかった。また同年，福光町のTHJ-14遺跡のうち未調査部分の試掘調査が富山県埋蔵文化財センターによって行われ，中・近世の遺構と遺物を確認した。一帯の字名をとり，久戸遺跡と名付けられた。このように，福野町南部から福光町北部にかけて，総面積101,070㎡に及ぶ５遺跡が確認されたのである。



第１図　路線内遺跡調査区

試掘調査の結果をうけて富山県教育委員会と日本道路公団が協議を行い，平成元年４月に財団法人富山県文化振興財団内に埋蔵文化財課を新設し，発掘調査を行うことになった。富山県教育委員会の指導を受けて日本道路公団と委託契約を締結し，同年５月より３箇年にわたる，５遺跡，総面積88,650㎡の調査を開始した。

本書で報告する梅原加賀坊遺跡他３遺跡は，梅原胡摩堂遺跡の北側に位置し，平成２年度と平成３年度に調査した。南から久戸遺跡，梅原加賀坊遺跡，梅原安丸遺跡，田尻遺跡の順となっており，調査経過の詳細については各章で述べる。

2　調査方法

A　調査方法

発掘調査の基準となるグリッドの設定に際しては国家座標を用い，遺跡ごとに起点を設定した。梅原加賀坊遺跡は＋62.300，－22.900，久戸遺跡は＋62.300，－23.350，梅原安丸遺跡は＋62.900，－23.400，田尻遺跡は＋63.00，－23.40をＸ０Ｙ０とし，南北方向をX軸，東西方向をY軸とした。グリッドは２ｍ方眼とし，各グリッド名は右上のX軸とY軸の座標とした。発掘範囲は梅原加賀坊遺跡ではX33～224，Y28～75まで，久戸遺跡ではＸ０～26，Y51～65まで，梅原安丸遺跡ではX17～37，Y17～34まで，田尻遺跡の第一次調査区ではX22～110，Y10～37まで，第二次調査区ではX231～295，Y17～45までとなっている。

調査は表土・耕作土の除去，包含層の発掘，遺構確認面の精査・遺構の検出，遺構の発掘，遺構の記録，写真，空中写真測量，補足作業の順で行った。人力掘削による調査の事前準備として，事業者側がバックホウによる表土・耕作土の除去を，調査員立ち会いのもとに，基本層序を確認しながら行なった。次に包含層はスコップ等を使って人力で掘削した。排土はベルトコンベヤーを使用して路線敷内の調査区隣接地に集積し，ダンプによる調査区外への排土の搬出は事業者側が行った。遺構確認面に達するとジョレンやねじり鎌で精査し，検出した遺構にはスプレーペンキ等でマーキングを行い，遺構概略図を作成した。各遺構には遺構番号を与えるが，遺跡ごとに遺構の種類に関係なく通し番号とした。遺構の掘削は柱穴・小さい土坑は長軸に沿って半截した。大きな土坑は十字あるいはそれ以上に，溝は適宜間隔をあけてセクションベルトを残し，移植ごてで発掘した。井戸は半截し，人力での掘り下げは最小限にとどめた。

各遺構の断面図は20分の１を基本とし，遺構によっては10分の１の遺物出土状況図を作成した。遺構の平面全体図作成にはヘリコプターによる空中写真測量を行った。各遺構の断面は35㎜カメラで，出土状況や個別の完掘写真・ブロック写真はブロニー判もあわせて撮影した。調査区の全景写真は４×５インチ判カメラで２方向以上から撮影している。フィルムは，35㎜・ブロニー判はカラーネガと白黒，４×５インチ判はカラースライドと白黒を使用した。

補足作業として空中写真測量終了後，人力で完掘できなかった井戸をバックホウで断ち割り，下層の層位，最終レベルと湧水面の確認，遺物の採集を行った。また，空中写真測量のために残した畦などをはずし，遺構の完掘を確認した。

B　調査体制

本書で報告する梅原加賀坊遺跡他３遺跡は，平成２年度から平成３年度に調査されたものである。平成２年度は久戸遺跡，梅原加賀坊遺跡，梅原安丸遺跡，田尻遺跡（第一次調査）が行われ，総面積は28,170㎡に及ぶ。調査期間は４月12日から12月27日に至る。調査地区は協議の上，ボックス・橋梁工事にかかる箇所を優先した。特に梅原加賀坊遺跡では細かく地区割りされ，調査終了部分から随時引き渡しを行った。平成３年度は田尻遺跡（第二次調査）が行われ，総面積は5,700㎡である。調査期間は４月25日から10月17日に至る。調査員は二名一班体制で行った。調査体制の詳細及び調査一覧は第１・２表に示した。

C　現地説明会

発掘調査の成果を広く一般に公開するため，平成元年度から年１回，調査工程とのかね合いで，対象地区を選定し現地説明会を実施した。平成元年度から平成３年度までは梅原胡摩堂遺跡が対象と

第1表　調査体制

	平成2年度		平成3年度	
総括	埋蔵文化財課課長	桃野　真晃	埋蔵文化財課課長	桃野　真晃
調査総括	係長	岸本　雅敏	課長代理	岸本　雅敏
調査員	主任	宮田　進一	主任	宮田　進一
	主任	橋本　正春	主任	神保　孝造
	文化財保護主事	安念　幹倫	文化財保護主事	安念　幹倫
	文化財保護主事	北川美佐子	文化財保護主事	島田美佐子(旧姓北川)
	文化財保護主事	高梨　清志	文化財保護主事	河西　健二
	文化財保護主事	酒井　聖子	文化財保護主事	佐藤　聖子(旧姓酒井)
	文化財保護主事	伊佐　智法	文化財保護主事	佐賀　和美
	文化財保護主事	山本　慎子	文化財保護主事	田中　道子
			文化財保護主事	伊佐　智法
			文化財保護主事	山本　慎子
庶務	主事	高嶋　忠夫	主事	高嶋　忠夫
			主事	中川　靖夫
	調査補助員	佐賀　和美		

第2表　調査一覧

遺跡	地区	略号	調査期間	延べ日数	調査面積	調査担当者	検出遺構	出土遺物
久戸		HT	平成2年4月12日 ～6月8日	22	1,300㎡	橋本　正春 伊佐　智法	掘立柱建物，溝，柱穴	縄文土器，石器，須恵器，中世土師器，珠洲，伊万里
梅原加賀坊	A	UK-A	平成2年6月25日 ～11月20日	57	10,250㎡	橋本　正春 伊佐　智法	掘立柱建物，構，川跡，柱穴	縄文土器，土師器，須恵器，中世土師器，珠洲，八尾，越前，瀬戸美濃，輸入陶磁器，伊万里，木製品，石製品
梅原加賀坊	BN	UK-BN	平成2年5月7日 ～7月2日	33	2,400㎡	橋本　正春 伊佐　智法	溝，川跡，柱穴	縄文土器，土師器，須恵器，中世土師器，珠洲，越前，越中瀬戸，石製品
梅原加賀坊	B1N	UK-B1N	平成2年6月8日 ～8月24日	31	2,600㎡	橋本　正春 伊佐　智法	溝，川跡，土坑，柱穴	縄文土器，土師器，須恵器，灰釉，中世土師器，常滑，八尾，珠洲，瀬戸美濃，輸入陶磁器，越中瀬戸，伊万里，木製品，石製品，銭貨
梅原加賀坊	B1	UK-B1	平成2年10月3日 ～12月27日	39	3,270㎡	安念　幹倫 伊佐　智法	掘立柱建物，溝，川跡，井戸，土坑，柱穴	縄文土器，土師器，須恵器，中世土師器，八尾，珠洲，越前，輸入陶磁器，越中瀬戸，伊万里，木製品，石製品
梅原加賀坊	B2	UK-B2	平成2年10月5日 ～12月27日	32	3,000㎡	橋本　正春 伊佐　智法	掘立柱建物，溝，土坑，柱穴	縄文土器，土師器，須恵器，中世土師器，珠洲，越前，瀬戸美濃，輸入陶磁器，越中瀬戸，土製品，石製品，銭貨
梅原安丸		UY	平成2年4月12日 ～6月8日	58	850㎡	安念　幹倫 酒井　聖子	溝，川跡，土坑	縄文土器，須恵器，中世土師器，珠洲，越前，輸入陶磁器，瀬戸美濃，唐津，伊万里，石製品，金属製品，骨
田尻(第一次調査)		TJ-N·C·S	平成2年4月12日 ～8月9日	58	2,500㎡	安念　幹倫 酒井　聖子	掘立柱建物，溝，川跡，井戸，土坑，柱穴	縄文土器，土師器，須恵器，中世土師器，珠洲，越前，瀬戸美濃，輸入陶磁器，越中瀬戸，唐津，伊万里，木製品，石製品
田尻(第一次調査)	拡張区	TJ-C·S	平成2年8月2日 ～10月12日	33	2,000㎡	安念　幹倫 酒井　聖子	柱穴，川跡，溝，井戸，土坑	縄文土器，石器，須恵器，土師器，中世土師器，珠洲，瀬戸美濃，輸入陶磁器，越中瀬戸，唐津，伊万里，木製品，石製品
田尻(第二次調査)		TJ-A	平成3年4月25日 ～7月22日	43	1,000㎡	神保　孝造 佐賀　和美 伊佐　智法	掘立柱建物，溝，井戸，土坑，方形周溝状遺構	須恵器，土師器，灰釉陶器，中世土師器，珠洲，瀬戸美濃，輸入陶磁器，越中瀬戸，唐津，伊万里，石製品
田尻(第二次調査)		TJ-B	平成3年5月13日 ～10月17日	84	4,700㎡	神保　孝造 佐賀　和美 伊佐　智法	掘立柱建物，溝，井戸，土坑	縄文土器，石器，須恵器，土師器，灰釉陶器，中世土師器，珠洲，越前，八尾，瀬戸美濃，輸入陶磁器，越中瀬戸，唐津，伊万里，木製品，石製品，金属製品

なっている。なお平成3年度はこれに加え，田尻遺跡第二次調査A地区でも福野町教育委員会と共催で行っている。

平成3年度(1991年)　田尻遺跡A地区

9月13日(木)　新聞記者発表

9月14日(金)　北日本新聞「38の建物跡を発見」
富山新聞　「新たに建物跡（鎌倉～南北朝を確認）」

9月15日(日)　福野町教育委員会と共催で行なわれた。対象地区は田尻遺跡A地区とその北側に隣接する福野町の調査区である。前日からの雨も上がり，約200名が現地を訪れた。鎌倉時代から南

北朝時代にかけての掘立柱建物などについてレジュメを参照しながら説明を行った。遺物も展示し，中でも溝から出土した「木」「大」と墨書された須恵器が注目されていた。

D　整理体制

出土遺物は，それぞれ調査年度内に可能な限り洗浄・注記・分類を行った。木製品・石製品・金属製品については，メモ写真を撮影して整理台帳を作成した。木製品は管理・収納の便宜を図るためオートシーラーと専用フィルムを用いてパックし，仮保管している。また年度毎の調査概要については『発掘調査概報(2)・(3)』，『埋蔵文化財年報(2)・(3)』として発刊している。

報告書刊行に向けての本格的な整理は，梅原胡摩堂遺跡を中心に平成4年4月開始した。梅原加賀坊遺跡他3遺跡については平成6～7年度に遺物の実測，平成7年度に遺構・遺物の挿図作成，写真撮影，原稿執筆，編集，印刷を行った。

遺物の実測については大部分を調査員及び整理作業員が行った。また土器・陶磁器の一部，木製品，石製品，金属製品は委託による写真実測で作成した。実測図は，遺物カードに直接書き込むか貼り込んで整理した。遺物カードは土器・木製品・石製品・金属製品の種類ごとに作成した。記入項目は出土地点・計測値・時期等の共通項目と，種類ごとに個有の追加項目を設けた。記載内容はパーソナルコンピューターを使用してデーター入力した。遺物実測図として掲載したものについては，遺物観察表として本書に掲載した。データーは人材派遣会社からオペレーターの派遣をうけて入力し，整理作業員が補足した。

遺物の写真撮影は大部分を業者委託した。撮影フィルムは4×5インチ版及び5×7インチ版を基本とし，密着焼付または引き伸ばしたものを写真図版に使用した。遺構写真及び遺物写真のうち特に重要なものについてはプロフォトCD化して保存した。

自然科学的な分析は，平成5年度から平成7年度に専門機関等に委託し，その結果報告を第二分冊に掲載した。

木製品・金属製品のうち特に重要な遺物を選出し，平成5年度から平成7年度に保存処理を元興寺文化財研究所に委託した。保存処理が完了したものは保存処理カードに処理方法等を記入し，その保管に努めている。整理体制は以下のとおりである。

第3表　整理体制

	平成4年度・平成5年度		平成6年度		平成7年度	
総括	所長	桃野　真晃	所長	桃野　真晃	所長	岸本　雅敏
	所長代理	関　清	所長代理	関　清	副所長	加藤　善吾
遺物整理総括	調査第二係長	宮田　進一	調査第二係長	山本　正敏	調査第一課長	山本　正敏
庶務	主事	大房　友明	主任	大房　友明	主任	大房　友明
	主事	中川　靖夫	主事	岩崎　証意	主事	岩崎　証意
担当	文化財保護主事	島田美佐子	文化財保護主事	佐賀　和美	文化財保護主事	横山　和美
	文化財保護主事	中川　道子 (旧姓田中)	文化財保護主事	越前　慎子 (旧姓山本)		(旧姓佐賀)
					文化財保護主事	越前　慎子

3　周辺の環境

富山県は本州中央部，北緯36°16′～36°59′，東経136°46′～137°46′の間に位置する。東を標高3000m級の北アルプスに，西を両白山地及び西部丘陵，南を飛騨高地に囲まれ，北は富山湾に面する。飛騨高原山地，音川山地から連なる呉羽丘陵は中央部の平野に突出し，東部の複合扇状地平野（狭義の富山平野），西部の主として庄川扇状地の砺波平野に二分し，また文化圏もこれに伴って分かれる。

砺波平野の北半大部分は，日本の沖積扇状地の中でも最大級の面積を有する庄川新扇状地を形成し，放射状の旧河道跡は，庄川の度重なる氾濫の証である。南西部は小矢部川の支流が南砺複合扇状地を形成している。

福光・福野両町は県南西部に位置し，福光町は北と東で福野町と接する。平野部は南砺扇状地上にあたり，田園風景の中，各戸が点在して村落を形成する散居村となっている。これらを取り巻く山々は，東南に八乙女の山々から袴腰に続く高清水山地，東北に牛岳を主峰とする呉羽丘陵が連なる。西側は，医王山や蟹谷丘陵を連ねる稜線が石川県との境になっている。医王山から氷見山地へつながる山稜部には浸食谷がみられ，源流部には峠が形成されている。代表的なものに源平合戦で名高い倶利伽羅峠，砂子坂峠があり，古来より加賀と越中の交通要所とされていた。梅原加賀坊他3遺跡は小矢部川の支流である山田川と大井川に挟まれた低位な台地上に立地している。

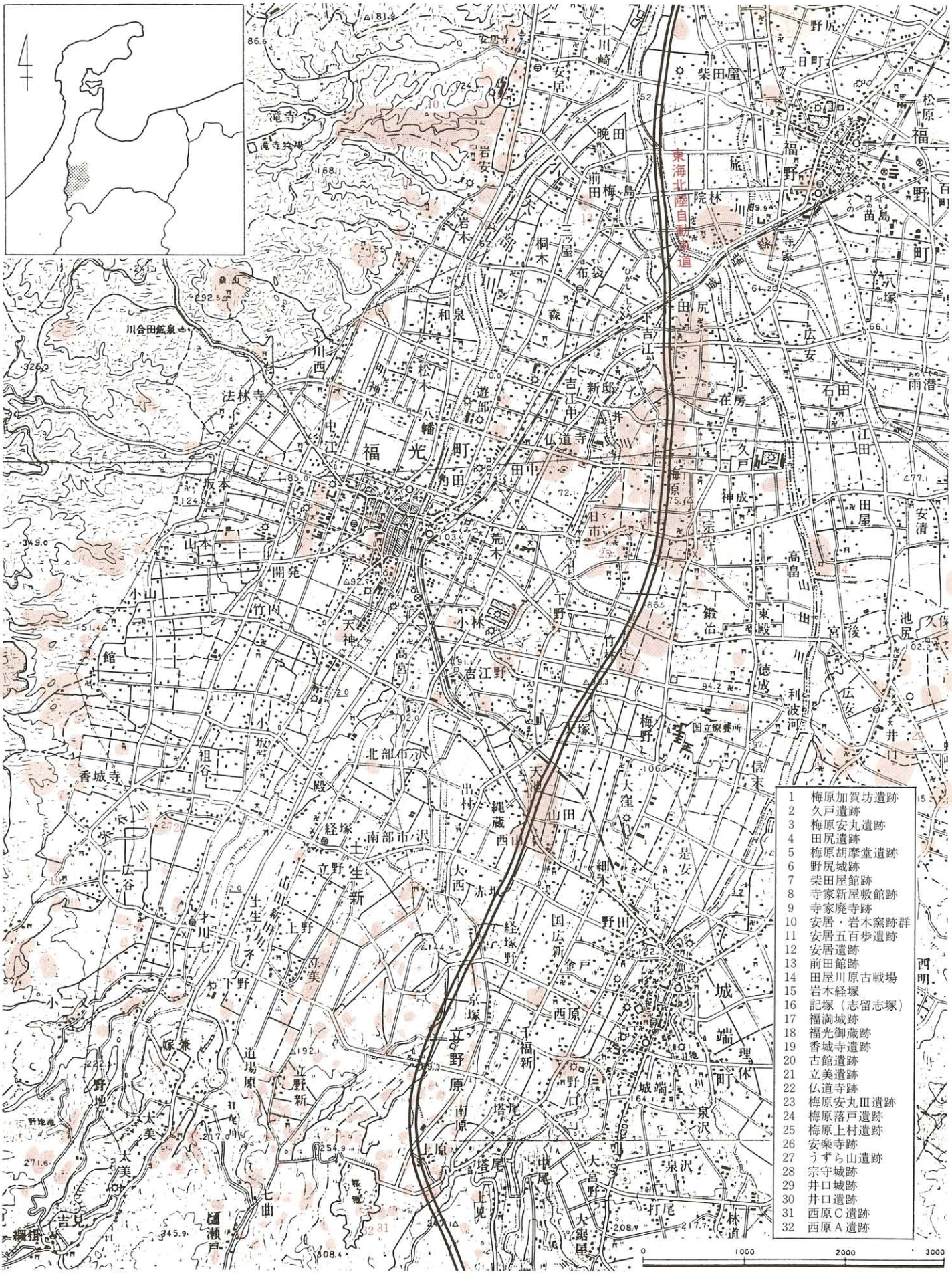
南砺地方の歴史は，立野ヶ原台地にみられる旧石器時代の遺跡群に始まり，縄文時代になると，生活域は台地に加え平野部に面する丘陵や段丘へと進出していった。早期には隅丸方形の竪穴住居を検出した城端町神明原A遺跡，前期には五瀬遺跡やうずら山遺跡などがあるが数は少ない。これに比べて中期以降は多く確認されており，安居五百歩遺跡では後期初頭の気屋式土器が出土し，また田尻遺跡では炉跡が発見され，後期後半の井口式が出土している。

弥生・古墳時代には小矢部川左岸にも遺跡の分布がみられるようになり，福野町安居五百歩遺跡，安居遺跡がある。また小矢部川の右岸の梅原安丸Ⅲ遺跡では古墳時代の竪穴住居跡が検出されている。

律令期になると礪波郡が置かれた。平野の開墾は活発化し，東大寺の墾田地領として開発されていたことが現存する東大寺の墾田地図から窺える。『続日本紀』には利波臣志留志が，東大寺への莫大な寄進を行い，昇任して越中員外介に任ぜられたとある。またこの頃，安居丘陵には須恵器窯が営まれ，医王山の山裾には天台宗惣海寺を中心に四十八ヶ寺が建立されていたと伝えられる。また一帯は『越中国官倉納穀交替帳』によると平安時代中頃に川上と呼ばれ，官倉が建ち並んでいたといわれる。これと関連するかどうか明らかではないが梅原落戸遺跡では倉庫と考えられる遺構を検出している。また小矢部川左岸では条里遺構が確認されており，古代北陸道も整備されていたことが近年の発掘によって明らかとなっている。

中世には，遺跡周辺は三庄十郷のうちの石黒庄の管理下にあり，円宗寺領山田郷に属した。地方豪族石黒氏の拠点であったが，1481年，田屋川原の戦いで一向一揆勢に完敗し滅亡，石山本願寺領有に帰した。山田川と大井川に挟まれた一帯は，低位段丘で比較的安定していたため，宗守城等の城館や，梅原地内には「胡摩堂」「加賀坊」「安楽寺」などの字名や権現堂川など信仰に関わる地名が残っている。

近世以降は，加賀藩の支配下で扇央部の開墾が本格化し，用水路等の潅漑施設も充実していった。福光町には藩倉が設けられ，年貢米の運搬によって舟運が発達した。小矢部川，山田川，大井川には四石～四石半の舟行が可能であったといわれる。また宗守は，高岡から城端に至る巡見使道でありかつ諸物資を金沢城下へ運搬する交通の要所として栄えた。　（横山和美）



第２図　梅原加賀坊遺跡周辺の主要遺跡位置図

第Ⅱ章　梅原加賀坊遺跡

1　遺跡の概要

A　概　要

梅原加賀坊遺跡は福光町大字梅原字加賀坊地内に所在する。地形的には小矢部川の支流である山田川と大井川に挟まれた微高地上に位置する。調査区は遺跡のほぼ中央部を，細長く南北に縦断するように伸びており，遺跡はさらに東西両側に広がるものと推定される。

遺跡の時期は縄文時代，古代，中世，近世に大きく分かれる。このうち比較的まとまった遺構・遺物の出土があったのは，縄文時代と中世である。

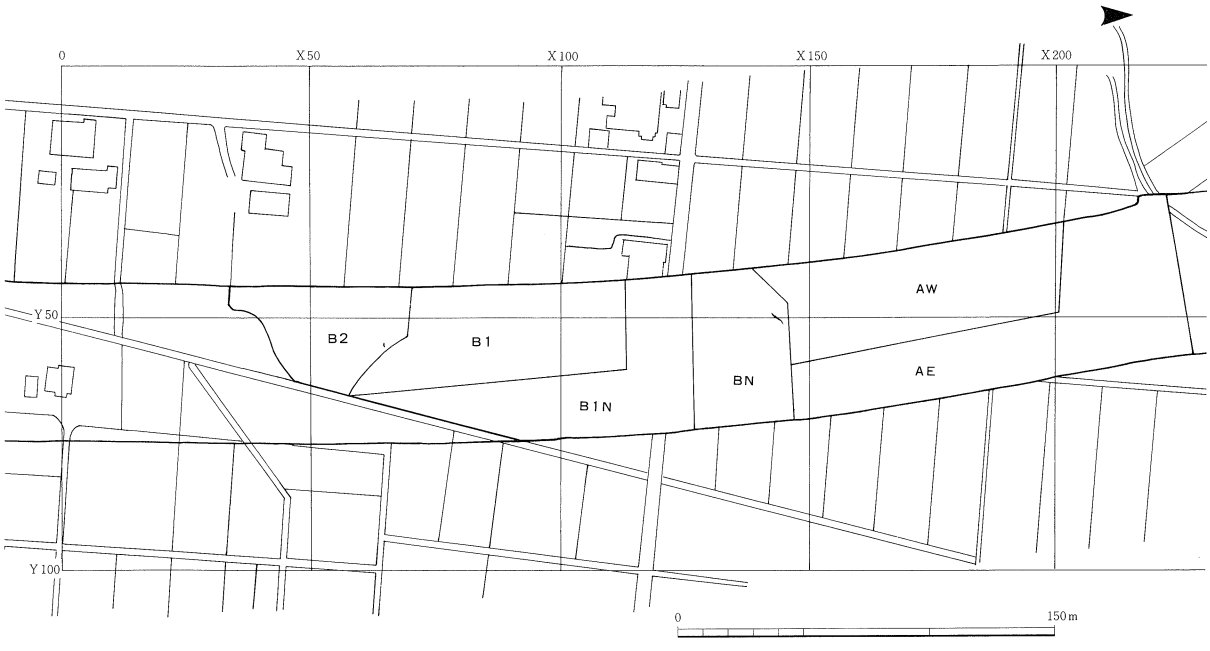
縄文時代では後期末葉から晩期中葉の土器を包含する川跡や，後期末葉ないし晩期初頭の埋甕が発見されている。遺物では縄文土器のほか打製石斧が多くみられる。

中世では大きく2群に分かれて分布する掘立柱建物群や，これと少し離れて分布する土坑群・井戸群・溝などの遺構が発見されている。これらに伴う遺物はそれほど多くないが，該期の集落遺跡に通有の中世土師器皿・珠洲・中国製磁器等の土器類や砥石・銭貨などが出土している。

B　調査経過（第3図）

発掘調査の実施にあたっては，自動車道建設工事の進捗に合わせて，調査区をAW～B2の6地区に分けた。調査の開始は平成2年5月7日で，まず最初に町道迂回路となるBN地区から表土排土・遺構発掘を行った。引き続きB1N地区も平行して調査を進め，6月末からは町道北側のAE・AW地区の調査を開始した。10月からはB1・B2地区の調査を進め，それぞれの調査地区は調査終了次第明け渡しを行った。調査がすべて終了したのは12月27日で，総発掘面積は21,520㎡にのぼる。

発掘調査では各地区とも重機による表土排土後，手掘りによる包含層の掘り下げと遺構上面での遺構検出及び遺構の発掘を行い，写真撮影と遺構実測・測量を実施した。遺構実測・測量は一部手測りの部分もあるが，大部分はヘリコプターによる写真測量を外注して実施した。



第3図　梅原加賀坊遺跡調査区（1：3,000）

C　土　層

調査地は区画された水田地帯のため，極端な高低差はなく，ほぼ平坦な地形となっている。発掘区内での層序の変化はあまりなく，標準的な土層は，Ⅰ層耕作土（層厚20～40㎝），Ⅱ層黒褐色土（層厚10～30㎝），Ⅲ層黄褐色粘質土（地山）である。Ⅱ層は古代～中世の包含層，Ⅱ層下部からⅢ層上端部が縄文時代の包含層となる。

2　遺構と遺物

A　縄文時代

(1)　遺構

縄文時代の遺構は大小の川跡・溝が3本と埋甕1基がある。

1号川跡（SD01，第5図，図版28）

発掘区のほぼ中央を大きく蛇行して北流する川跡（自然流路）である。上端での幅は570～920m，深さ約1mを測る。断面形は皿状を呈し，底面の幅は狭い。川跡の肩部は明瞭でなく，緩やかな傾斜をみせる。同じく蛇行する小さな溝（2･3号溝）より新しく，これを切っている。2･3号溝に沿うように流れ，幅を広げて形成された川跡である。覆土は，上層はやや腐植質の黒色土～黒褐色土，下層は粘質の暗黒灰色土～暗青灰色土がそれぞれ凸レンズ状に堆積している。

出土遺物は，ごくわずかの後世混入遺物を除き，縄文時代中期～晩期の土器と石器類で，中でも後期末葉から晩期中葉の時期の土器が主体的である。比較的底面近くからまとまって出土しており，この川跡の埋没時期を，晩期中葉と考えておきたい。

2号溝（SD02，第5図）

SD01の西岸に沿って蛇行しながら北流する小さな溝である。幅80～272㎝，深さ約14～30㎝の大きさである。かなりの部分はSD01に削られ，特にSD01の南側では全く消滅し，北側部分でも途中で途切れる。出土遺物は少なく，時期の不明確な斜縄文の小破片が少しあるだけである。遺構の切り合いからはSD02・SD03→SD01となるが，後述のようにSD03もSD01と土器の上では時期差はなく各遺構とも埋没時期は晩期中葉と考えられる。

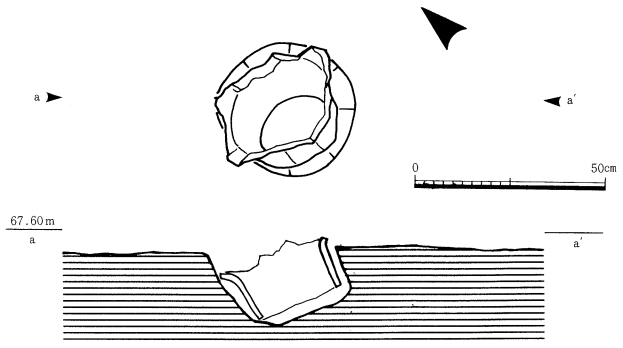
3号溝（SD03，第5図）

SD02から分流し，SD01の西岸に沿って北流する小さな溝である。幅は広い部分で44～92m，狭い所では50㎝以下，深さは8～22㎝となり，北端部は消滅する。出土土器は縄文時代後期末葉～晩期中葉の時期のもので，SD01と同じである。SD02との前後関係は不明確である。

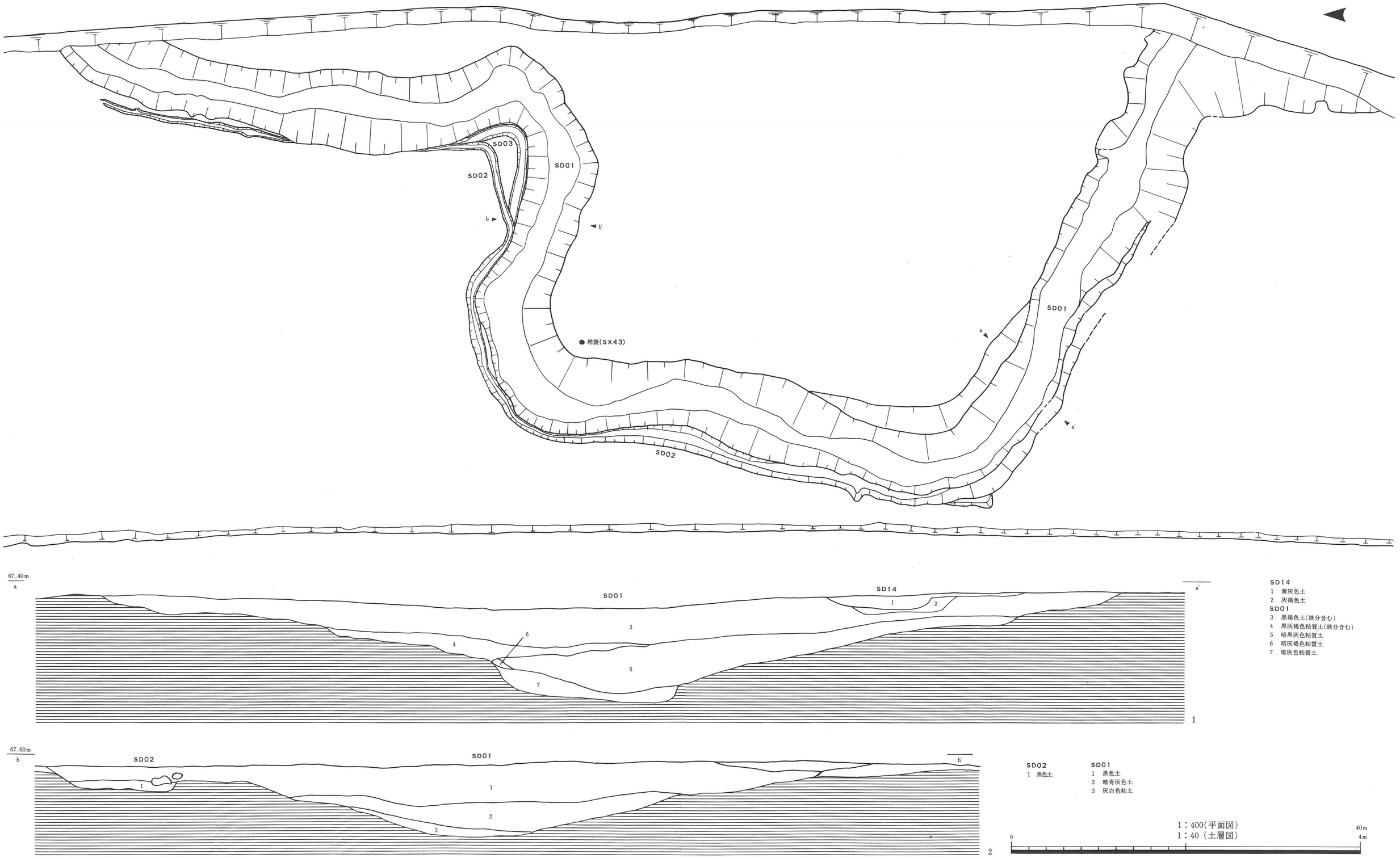
埋甕（SX43，第4図，図版28）

SD01の流路が北向きから東向きに湾曲する部分の東岸（内側）に単独で発見された。体部下半以下を欠く深鉢形土器（第10図89）をやや北向きに傾けて，正位で小ピットに埋め込む。時期は後期末葉ないし晩期初頭である。単独出土品のため，性格等は不明である。

以上のほかに縄文時代に属する小ピットが散発的に数カ所で発見されているが，まとまったものではない。



第4図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図
埋甕 SX43



第５図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図
1.ＳＤ01　2.ＳＤ01・ＳＤ02

(2) 遺　物

縄文時代の遺物は縄文土器と打製石斧・石鏃・削器等の石器類がある。縄文土器と石器類に分け，遺構単位に説明することにする。

縄文土器

1号川跡（SD01，第6図～第9図，図版39～45）

出土した縄文土器の大半は本遺構からのものである。有文深鉢（鉢形も含む），条痕文深鉢，縄文深鉢，浅鉢に大きく分類して説明する。

有文深鉢（第7図26・第8図28～53）　28は断面半円形の半截竹管文を施文するもので，中期中葉の上山田・天神山式[注1]に比定できる。29も中期の土器と考えられる。30は斜縄文に横位の沈線を引くもので，後期の土器である。

31～50は後期後葉から晩期前葉の土器である。31は外反する口縁部に細かな斜縄文を施し，斜位の太い沈線を引いている。胴上部は無文帯となる。33は波状口縁の波頂部下に円弧文を背中合わせに施文する。34・37は口縁部が「く」の字形に外反する器形で，口縁部に沈線を数条引くもので，37の胴上部は無文帯となる。35は同じく波頂部下に連結三叉文を施文する。42・43は同一個体で細い連弧文を横位に配する。47・48は胴部に三叉文が施される。50は細かな斜縄文地に，数条の横位沈線と鍵手状の沈線を引く。34・37は井口Ⅱ式（井口1・2式）[注2・5]に，33・35・36・45等は八日市新保式[注3]・勝木原式[注4]に，47・48は御経塚式[注3]にそれぞれ比定できよう。

26・51～53は晩期中葉の土器である。26は口縁部「く」の字形外反器形の鉢形土器で，口縁部と胴部の低平な隆帯上に細かな縄文を施し，口縁端部には山形の突起が付く。51は細かな縄文地に太い沈線を施すもので，「く」の字形に外反する器形の鉢形土器の胴上半部と考えられる。52は羊歯状文のみられる薄手の土器，53は口縁部直下に平行沈線と粗い刻みを施すもので，これらはいずれも中屋式[注3]の範疇に含められよう。

条痕文深鉢（第6図1～第7図22・第8図59～第9図65）　条痕文土器として一括したが，条痕の施文状態は，明瞭なものから擦痕状のものまで様々なものが含まれる。一部は無文に近いものも含まれることをことわっておく。条痕文土器は器形から3類に分類した。

1類（1～6・59～63）は口縁部が直立するか，わずかに内湾もしくは外反するものである。条痕の方向は横位（1・2・60など）・斜位（4・6・62など）・縦位に近いもの（63）など変化があるが，施文部位により，口縁部は横位に近く，胴部以下が斜位になるものもある。

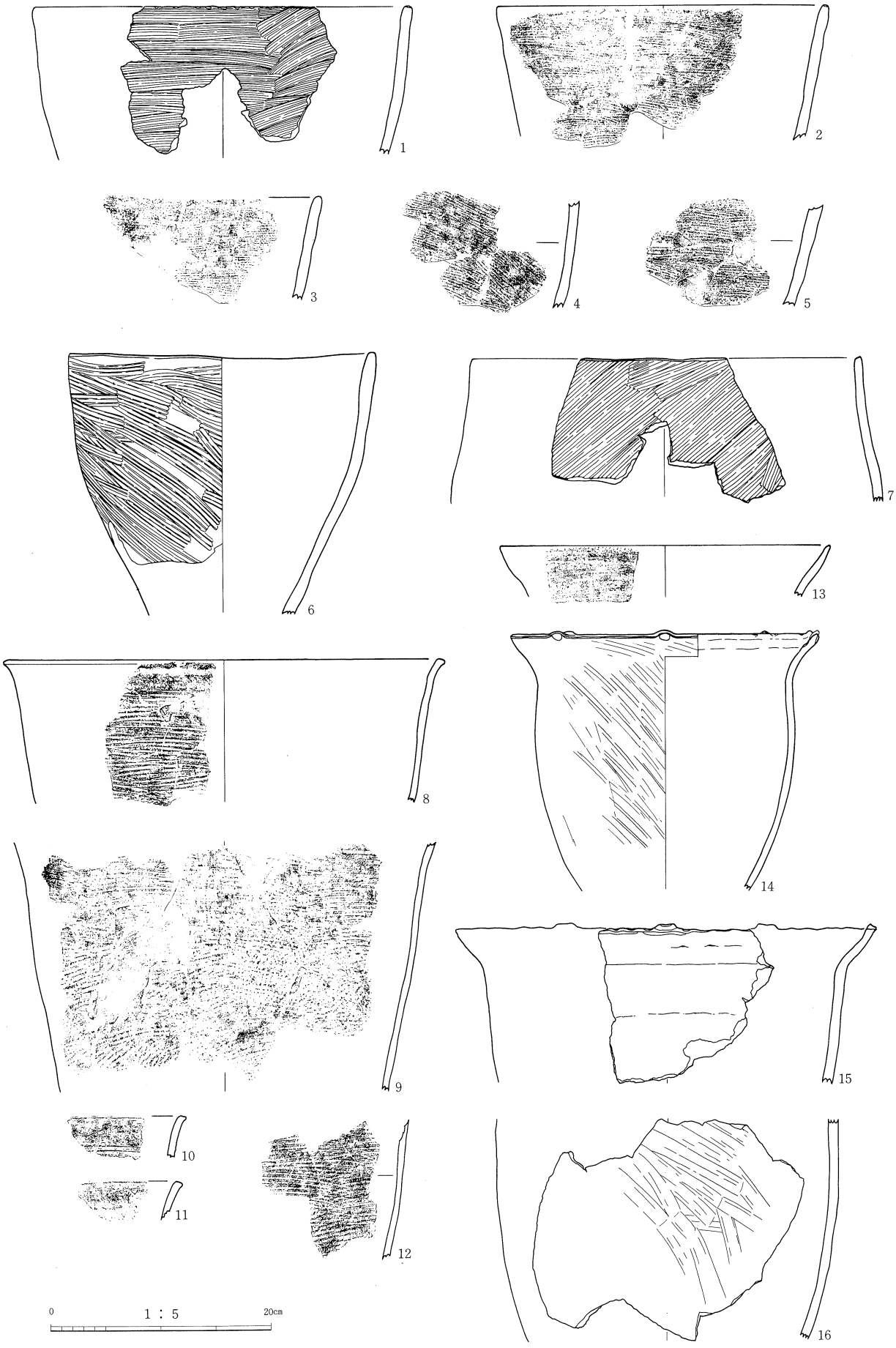
2類（8～17・65）は口縁部が「く」の字形に外反する器形のものである。8～12は同一個体。口縁部がわずかに外反し，胴部には横位の条痕文を施す。14は斜位の条痕文を施すもので，口縁端部をつまみ出して小突起をもうける。15・16は同一個体。やはり擦痕状の条痕がみられ，無文に近い。胴上半部には輪積み痕が残り，口縁端部には小突起と窪みを施す。

3類（7）は1個体のみである。口縁部が直線的にやや内斜しながら伸びる器形のもので，斜位の条痕文を施す。

縄文深鉢（第7図23・24・第9図66・67）　23・24は口縁部がほぼ直立する器形の縄文深鉢である。無節縄文（L）を施文する。67は口縁部が折れて外反する器形のもので，頸部は無文帯がめぐる。

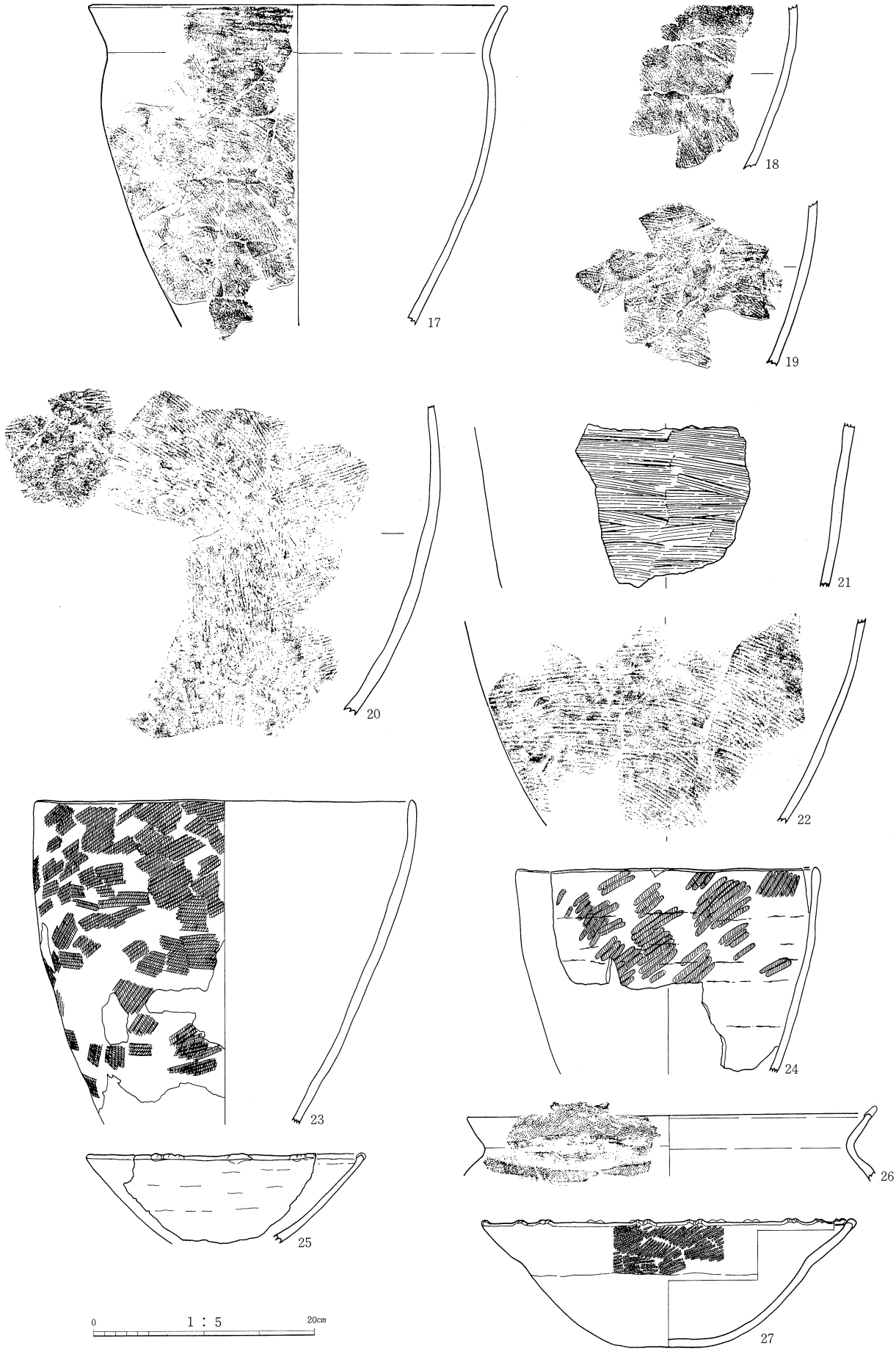
浅鉢（第7図25・27・第8図54～58）　25は無文で口縁端部に刻みを持った小突起が付く。27は胴上半部に細かな斜縄文を施し下半部は無文となる。縄文部分に赤彩を施す。54は内外両面に玉抱き三叉文を施す。57・58は同一個体で，肥厚した口縁端部に細い粘土紐を幾何学模様状に貼り付けている。

SD01



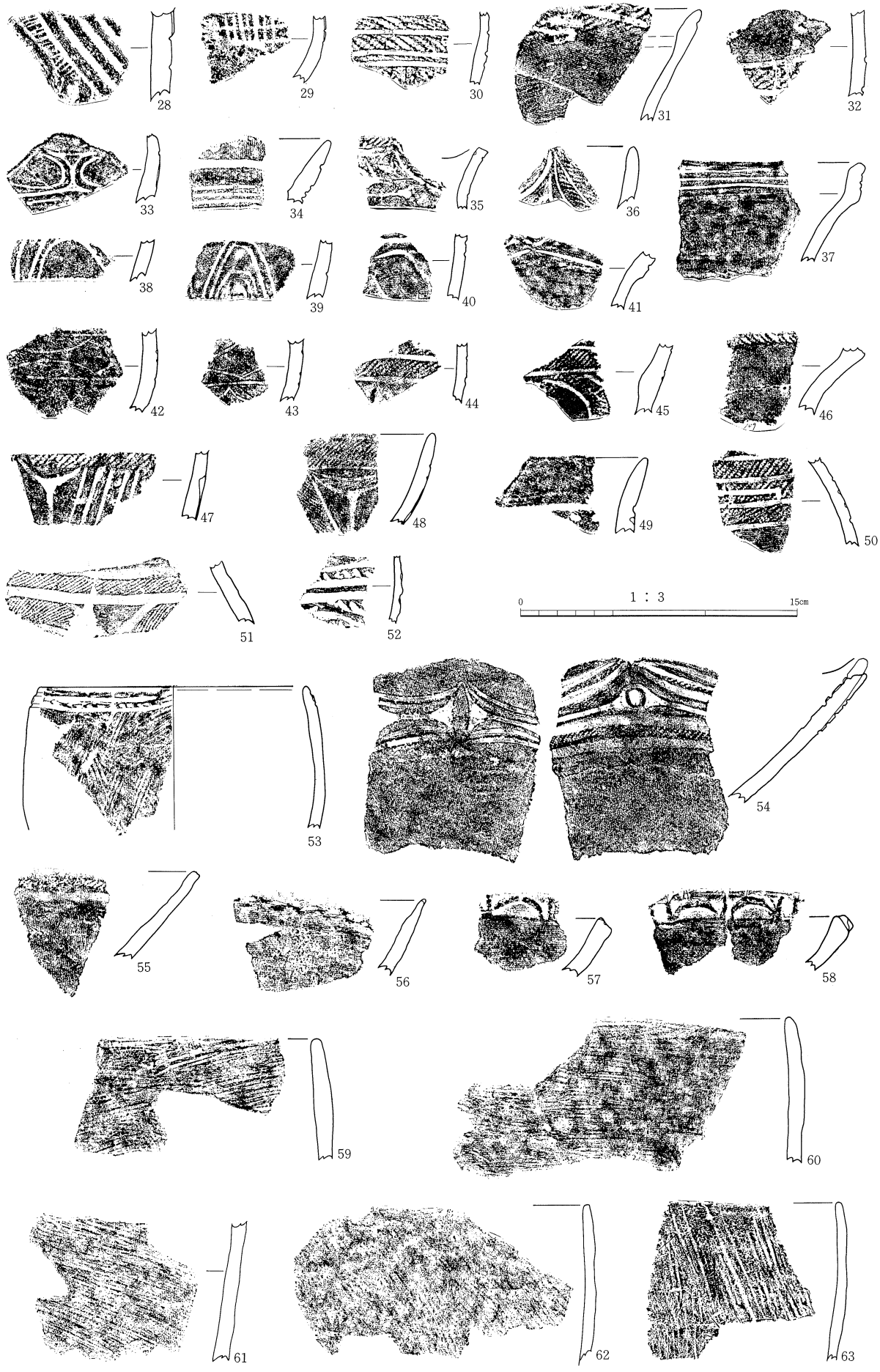
第6図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図（1/5）

SD01

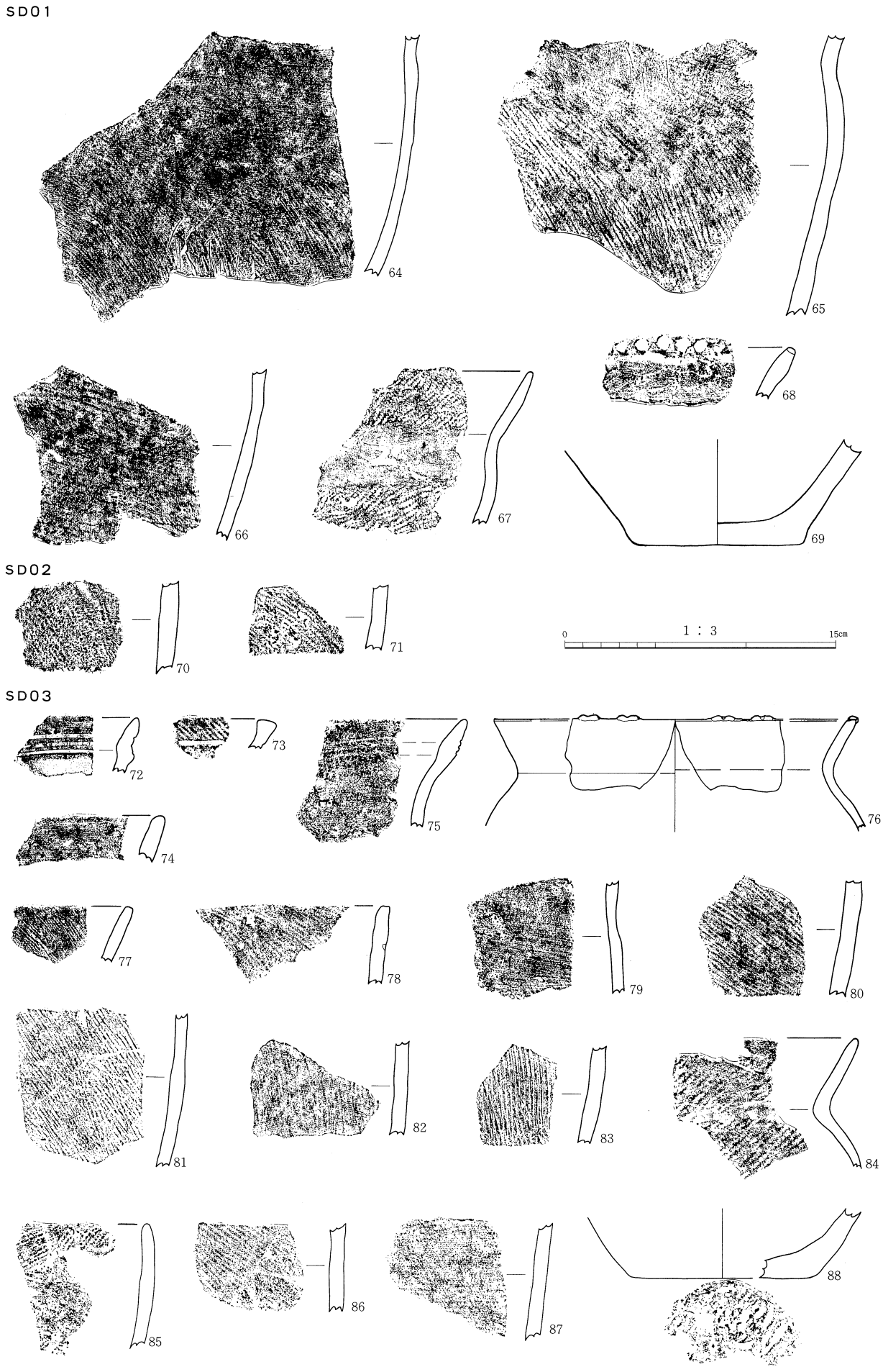


第７図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図２（1/5）

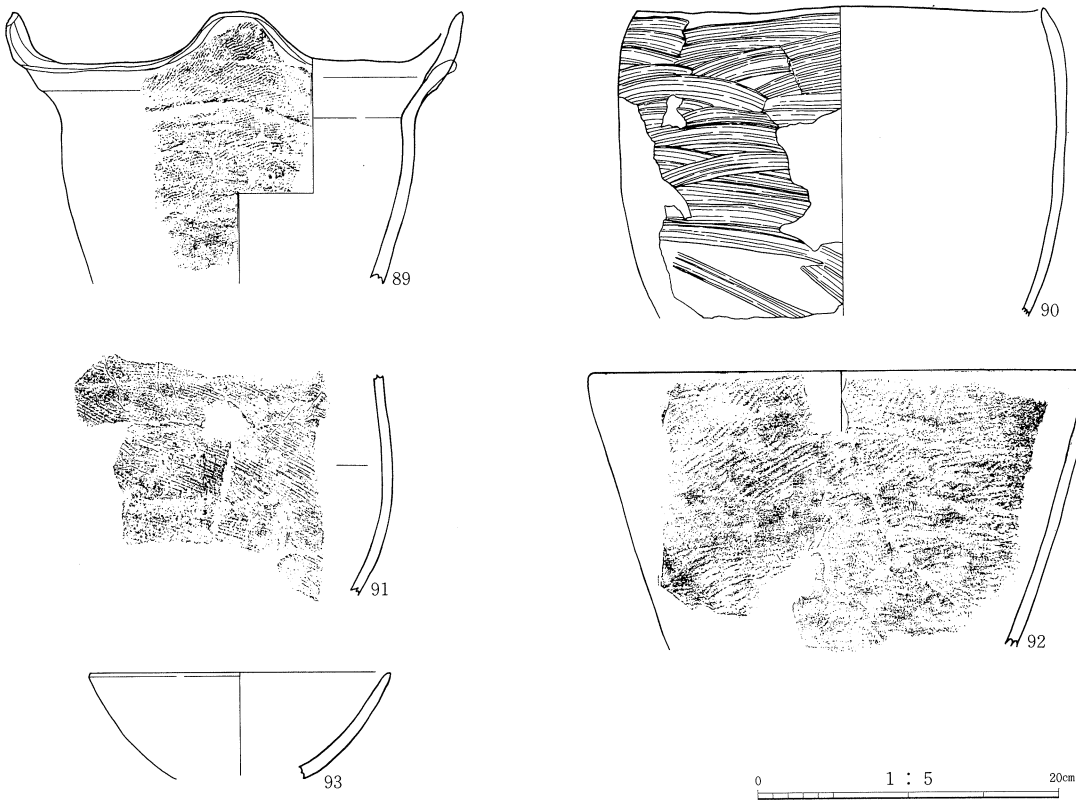
SD01



第８図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図３（1/3）



第９図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図４（1/3）



第10図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図５（1/5）

浅鉢のうち，54は勝木原式，57・58は御経塚式，27は中屋式に比定できる。

２号溝（SD02，第９図70・71）

時期のわかるものはなく，斜縄文を施す土器の小片が若干出土している。

３号溝（SD03，第９図72～88，図版46）

72・75は頸部で段を持ち，口縁部が外反する器形の深鉢である。口縁部に数条の沈線を引き，胴上部は無文帯となるもので，井口Ⅱ式と考えられる。76は無文の深鉢もしくは鉢形の土器で口縁部は「く」の字形に外反する器形である。口縁端部には二個単位の小突起が付く。時期的には晩期中葉の中屋式に比定できる。77～83は条痕文深鉢，84～87は縄文深鉢である。

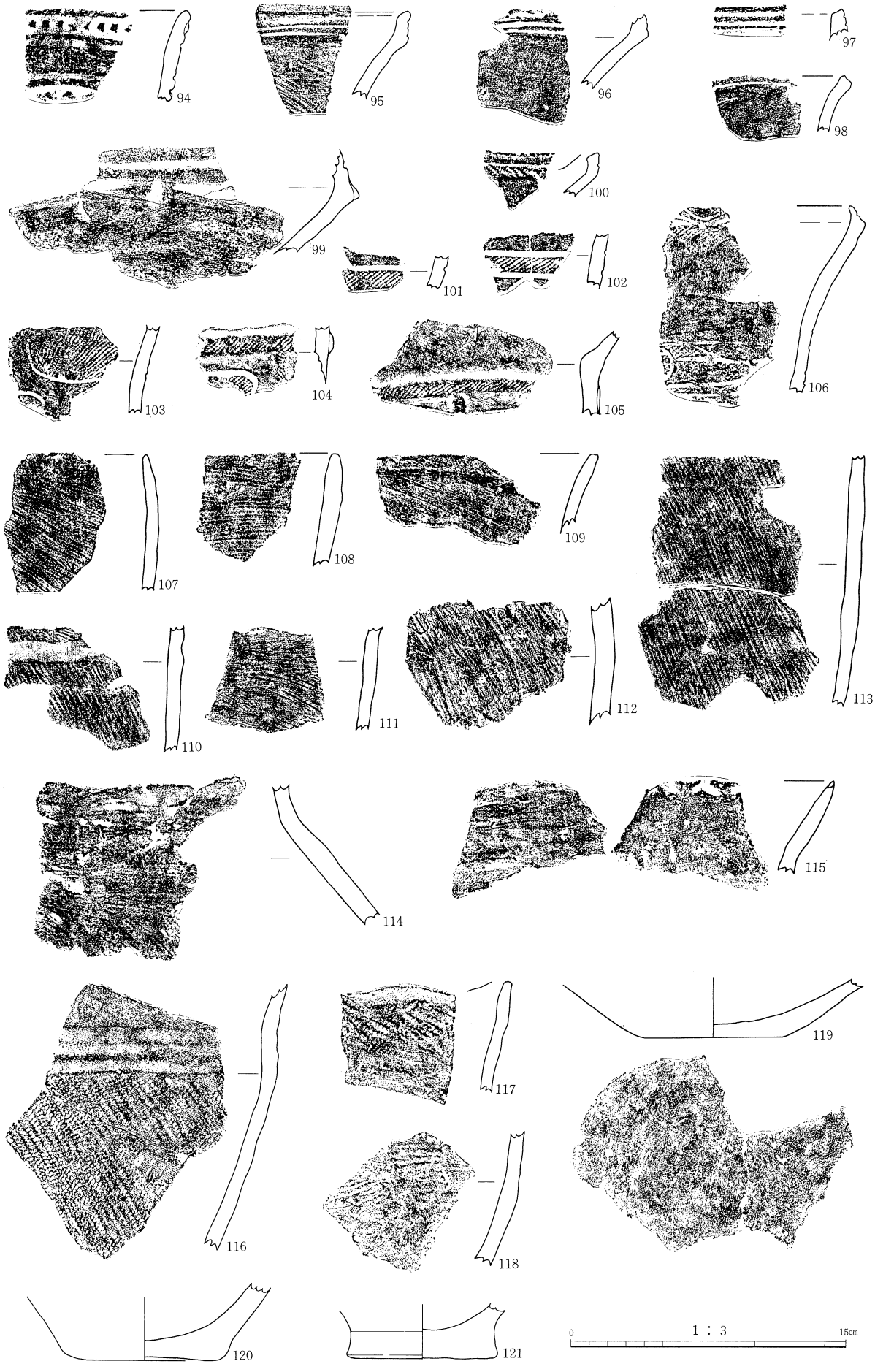
埋甕（SX43，第10図89，図版39）

89は頸部で若干折れて口縁部が外反する器形の，４単位の波状口縁をもつ深鉢で，波頂部はやや内側に窪ませる。外面には細かな斜縄文を全面施文している。文様のない土器であるが器形の特徴から後期末葉ないし晩期初頭の時期のものとしておきたい。

包含層・その他の遺構（第10図90～93・11図94～121，図版46・47）

90は条痕文土器で，口縁部はやや内湾し，胴上半部では横位，胴下半部では右下がりの条痕文を施す。91は口縁部を欠くが，同様の器形・施文のものである。92は単節の斜縄文(LR)を横位に施文する土器である。口縁部は直線的に外に開く器形である。93は無文の浅鉢である。

94は口縁部と平行に爪形文と半截竹管文，無文帯を配する深鉢形土器で，縄文時代中期前葉の新崎式である。99は胴部で段をもって屈曲し，凹線と縦の窪みを施す土器で，井口２式もしくは八日市新保１式に比定できよう[注５]。95・96は口縁部下に沈線を数条めぐらすもので，やはり井口２式～八日市新保２式期のものである。104・105は同一個体。偏平な粘土帯の上に細かな縄文を施すもので晩期



第11図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図６（1/3）

前葉と考えられる。106は胴上半部から口縁部にかけて開く器形で，口縁端部が内側に折れる。口縁部には連弧文を施し，胴上半部は無文となる。胴部には斜縄文と平行沈線文・円弧文がみられる。晩期前葉の御経塚式に含められよう。

107～114は条痕文土器である。条痕は，横位のものから縦方向に近い斜位のものまで変化に富む。110は幅広の凹線が巡るものである。115は口縁部が「く」の字形に外反する器形で，外面には無文に近い擦痕が残るものである。口縁端部内面には鋸歯状沈線文を施している。

116～118は斜縄文を施す土器である。116は胴部に浅い凹線を3条巡らせ，これを境に上部には無文帯，下部には単節斜縄文を施す。119～121は底部で，119は浅鉢器形となる。

石器

縄文時代の石器は，発掘区全体で打製石斧40点，石鏃2点，削器2点，剝片6点の計50点が出土している（接合するものが1組あり，全部で49個体）。これも遺構単位に説明する。

1号川跡（SD01，第12図122～第13図129，図版48）

打製石斧13点，石鏃1点，削器2点，剝片2点が出土している。打製石斧はSD04出土のものと接合した大型の短冊型（122）の他は，側縁が刃部に向かって広がり気味になり，基部近くでくびれを有するいわゆる撥型のものが大部分を占める。石材は砂岩が多く，凝灰岩などもある。製作技法をみると，円礫から大型の横長剝片を剝離して，これを石斧素材として用いているものがほとんどで，片面に円礫面を残し，主剝離面側には横方向の剝離痕が認められる。123の刃部には石斧長軸に斜交するように磨滅した擦痕状の使用痕が残る。129はSD01の覆土上部から出土した，流紋岩系の石材を用いた無茎凹基式の石鏃である。

2号溝（SD02，第13図130）

打製石斧が1点出土している。やはり撥型で石質は砂岩。大型横長剝片を素材とするもので，背面側には円礫面が大きく残る。

3号溝（SD03，第13図131・132，図版48）

打製石斧が2点出土している。これも撥型で石質は砂岩と安山岩である。製作技法等は一般的にみられるものと同じであるが，132の背面側には円礫面がみられず，剝離痕のみである。131の刃部と基部周辺には磨滅した擦痕状の使用痕が残る。刃部の使用痕は石斧長軸に平行して走り，上述の123と好対照である。磨製石斧の縦斧と横斧の関係[注6]に対応すると考えられ，打製石斧の使用法・着柄法を推測する手がかりになる。

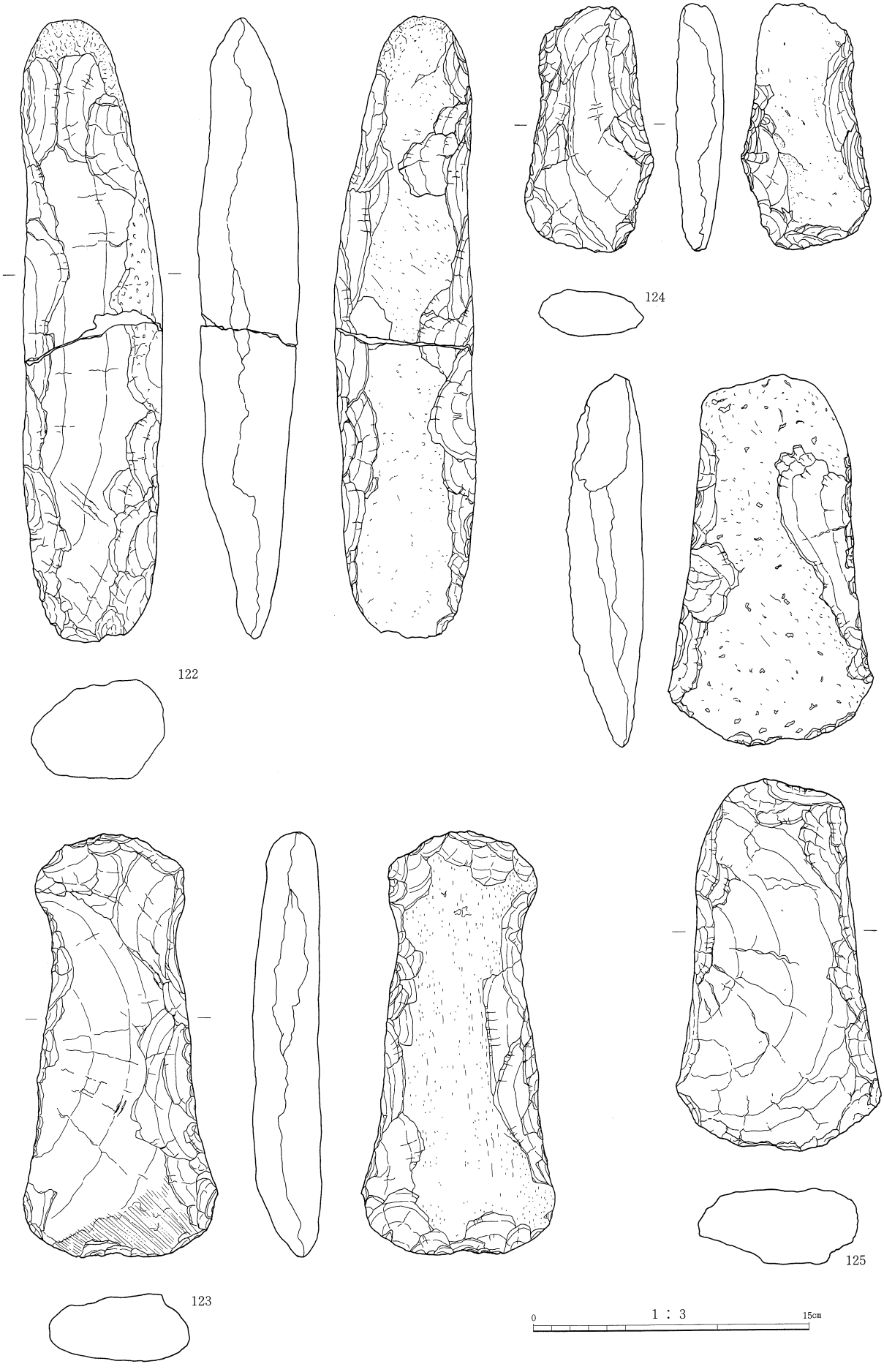
4・6号溝（SD04・06，第14図133～138，図版48）

中世の溝SD04・06からまとまって打製石斧が出土している。形態的には，両側縁が平行な短冊型（133・134）と，基部近くにくびれを持ち刃部が開き気味になる撥型（135～138）に分類できる。両面加工の素材を用いる136以外は，やはり横長剝片を用い，背面側に円礫面を残す。138の背面側が広く被熱しているが，後世的なものであろう。

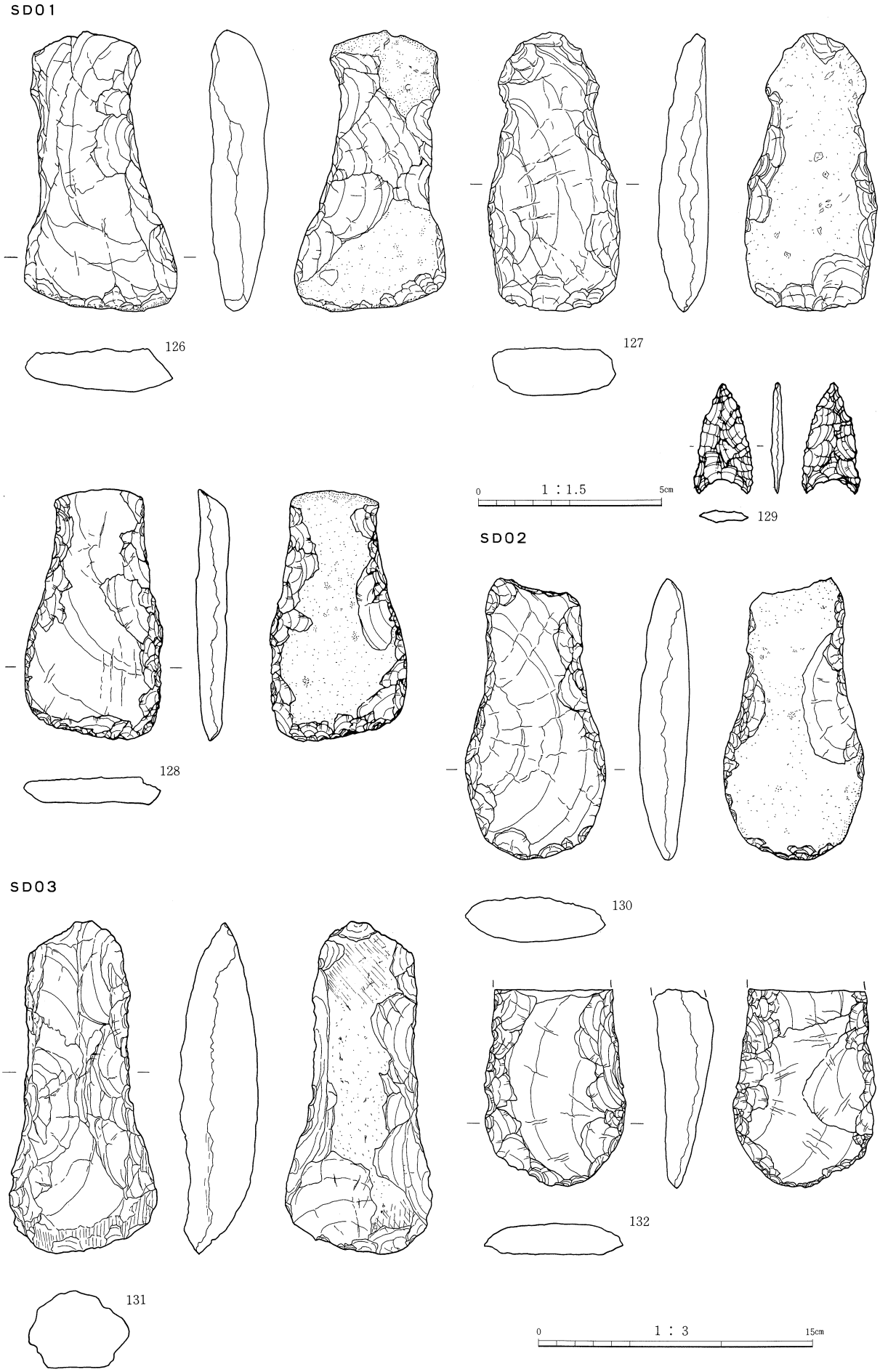
包含層・その他の遺構（第15図139・第16図152，図版48）

打製石斧の図示したものは，短冊型が1点（139）のみで，他はすべて撥型である。大きさにややバラエティーがあるが，素材の用い方や製作技法等は上述のものに共通する。150は刃部及び基部を欠損するもので全体の形状は明らかではないが，大きくくびれるもので，撥型の中でもやや分銅型に近いものであろう。151の石鏃は基部と茎部の間に抉りを入れるもので，いわゆるアメリカ式石鏃に類似する。石質はめのう。152は一側縁に刃潰し加工した，鉄石英製の削器である。

SD01

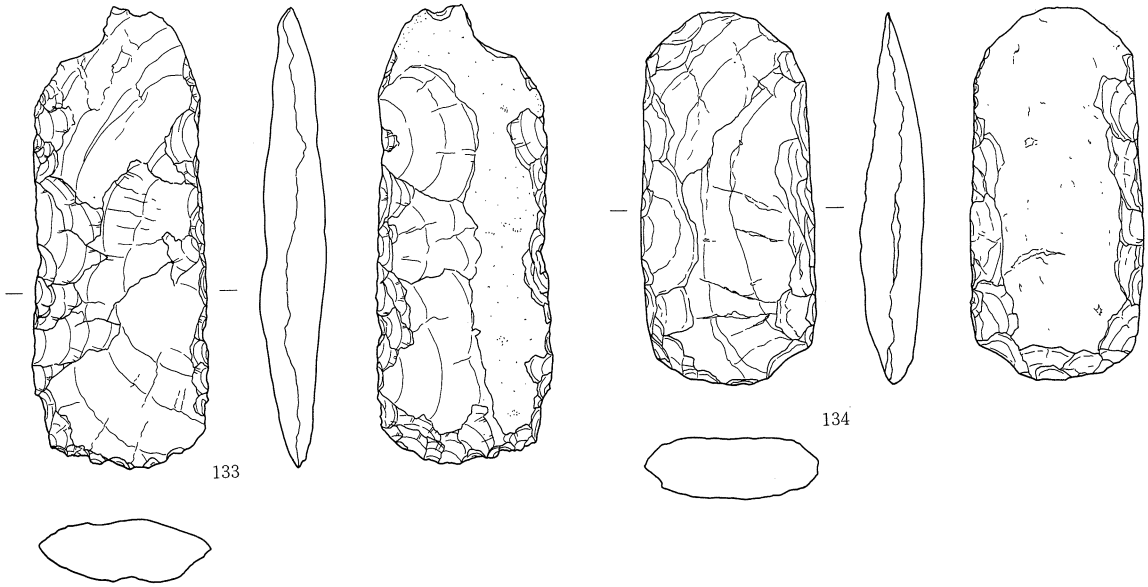


第12図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図7（1/3）

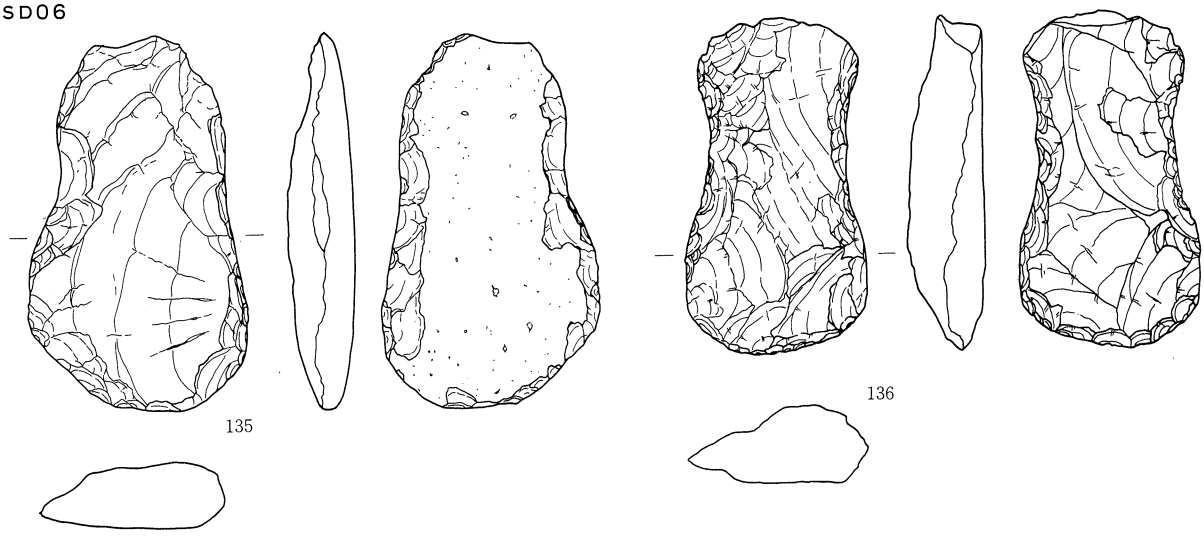


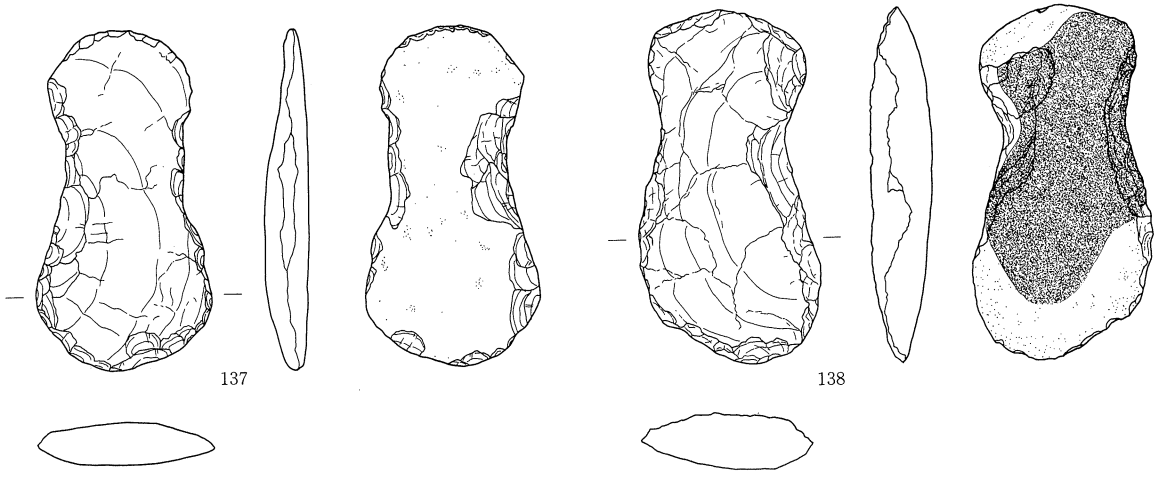
第13図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図8（126～128・130～132　1/3，129　2/3）

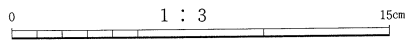
SD04



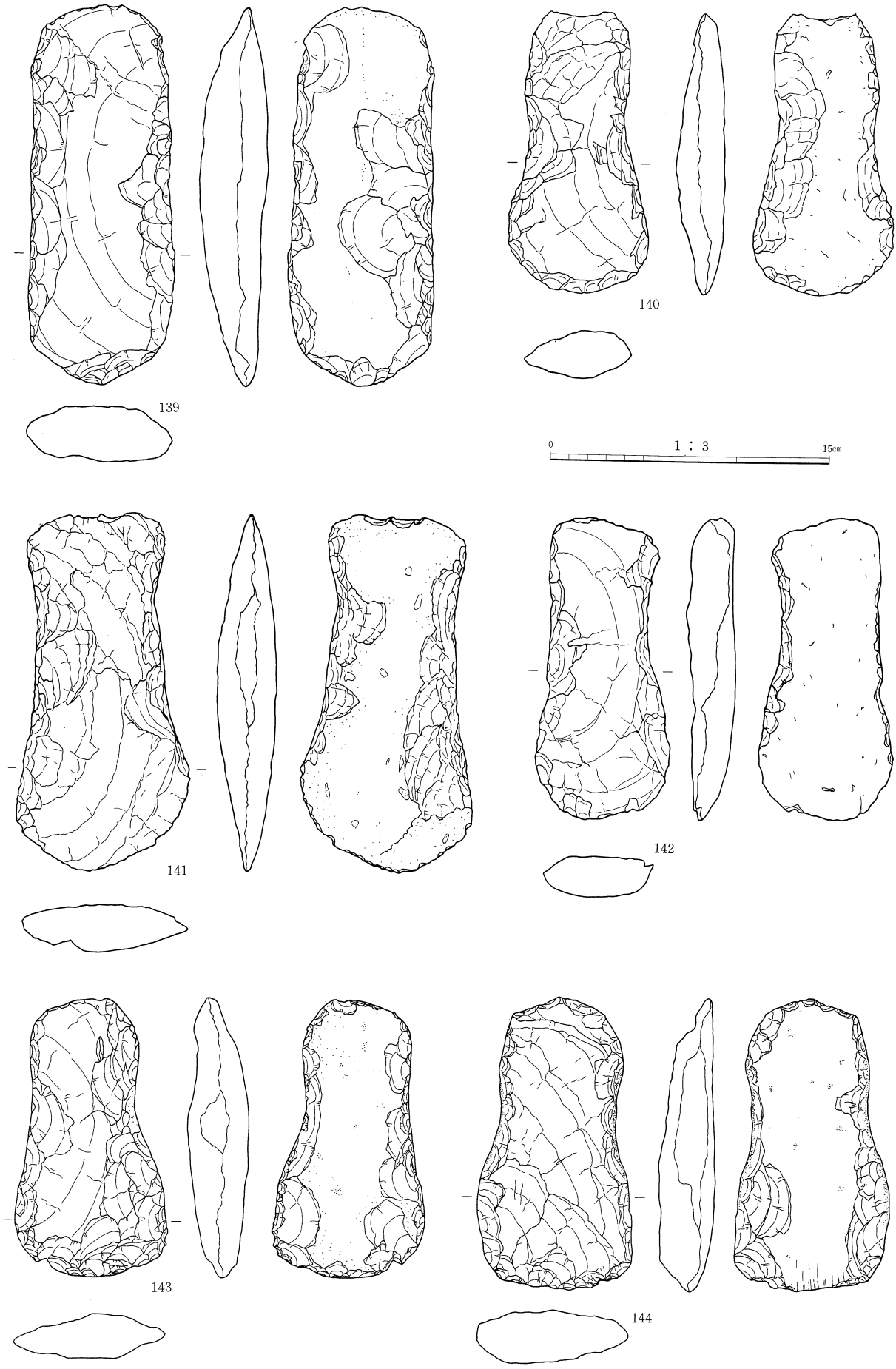
SD06







第14図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図９（1/3）



第15図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図10（1/3）

第16図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図11（1/3，151・152　2/3）

B　奈良・平安時代

(1) 遺　構

出土遺物から平安時代の遺構と考えられるものは溝が3条あり，発掘区全体に散在している。

13号溝（SD13，第31図，図版29）

発掘区の南部にある，ゆるく弧を描く東西溝である。西側は発掘区外に伸びる。東端では中世溝SD06・SD07に切られる。現存幅32～112cm，深さ5～16cmで，断面形はやや不整形であるが逆台形ないし半円形を呈する。形状等から自然流路に近いものと考えられる。須恵器・土師器・土錘などが出土しており，時期は9世紀後半～10世紀初頭と考えられる。

19号溝（SD19，第32図，図版29）

発掘区中央やや北寄りで南北に伸びる溝である。部分的に膨らんで溝筋が乱れるが，北側部分では幅10～100cm，深さ7cmでほぼ直線的に伸びる。これも自然流路に近い。須恵器・土師器が出土しており，時期は9世紀後半～10世紀初頭と考えられる。

21号溝（SD21，付図参照）

発掘区北端にある東西溝である。西側部分では不明瞭になる。幅90～134cm，深さ10～16cmである。出土遺物には須恵器・土師器があり，時期はSD13・19と同期に考えておきたい。

(2) 遺　物

ここでは平安時代の遺構から出土した遺物を遺構単位に説明する。包含層・その他の遺構出土の遺物は一括して後述する。

13号溝（SD13，第17図，図版50）

須恵器（153～173）　器種は，杯・杯蓋・瓶類・壺蓋・鍋がある。杯は，体部の立ち上がりが内湾してやや上方に向くもの（153～158）と，底部境から斜め外方に比較的直線的に引き出すもの（159～163）がある。少量であるが，器高の高いもの（165），大型のもの（166），体部中程に沈線を巡らすもの（167）がある。168～170は杯蓋で端部のかえりは丸みを持つものや，わずかに内湾するものなど末期的形態のものである。171は壺類の口縁部，172は短頸壺の蓋，173は鍋の体部と考えられる。

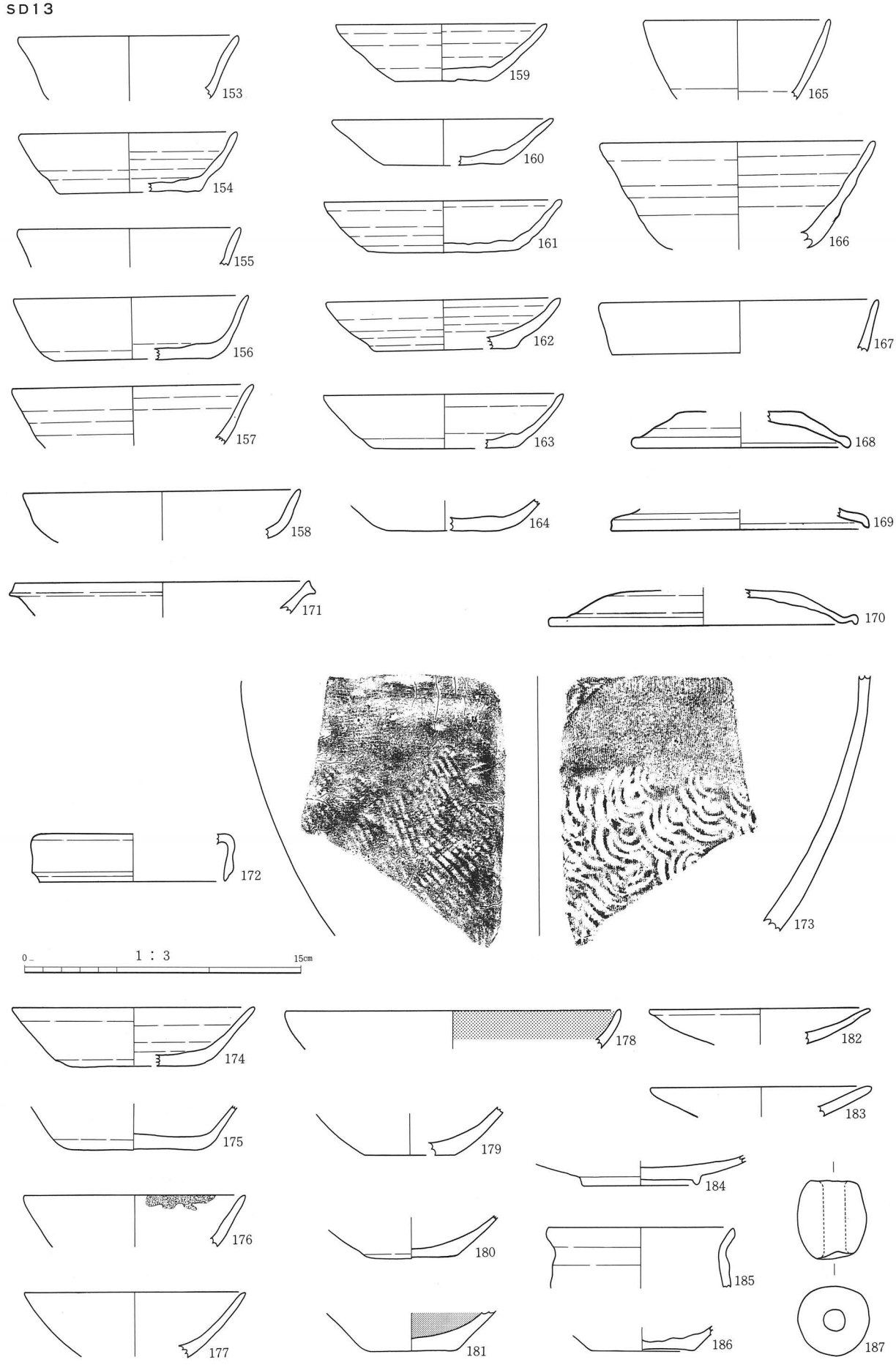
土師器（174～186）　器種は椀・皿・甕がある。174～176は体部がやや内湾して立ち上がり，口縁部がやや上方に向くもので，須恵器杯の形態に似る。177・179～181は，器表面が風化して不明瞭なものもあるが，底部糸切りで，体部が直線的に斜め外方に引き出される形態の椀である。178は鉢と考えられる。181は内面黒色土器。182～184は皿で，184には低い高台が付く。185・186は小型の土師器甕で，底部糸切りのものである。

土錘（187）　土師質の管状土錘が1点出土している。

19号溝（SD19，第18図，図版49）

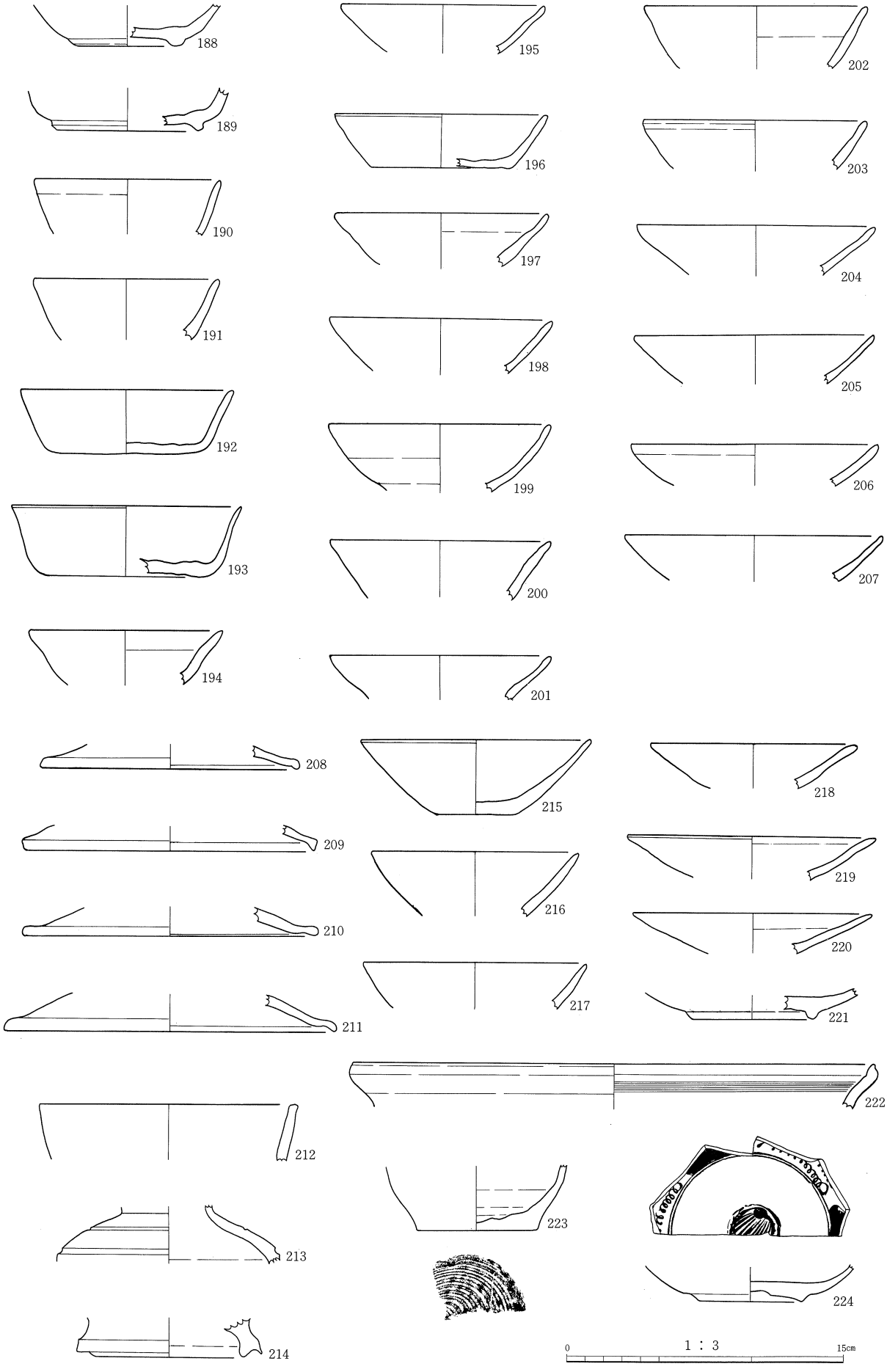
須恵器（188～214）　器種は，有高台の杯・無高台の杯・杯蓋・鉢？・壺がある。188・189は有高台の杯である。高台は低平でシャープさに欠ける。190・191・194・195・197～207は高台の確認できなかったものである。この中には有高台になるものも含まれている可能性がある。190～193は体部が内湾して立ち上がり，口縁部が上方にのびるものである。194以下は体部が底部境から斜め外方に直線的かやや内湾してのびるものである。208～211は杯蓋。端部のかえりが明瞭でなく，丸みを帯びているものが多い。212は小片で器形が明確でないが鉢形になるかもしれない。213は小型壺の肩部で，沈線が2条めぐる。214は壺の底部高台部分。

土師器（215～223）　215～217は椀である。215の底部は風化して不明瞭であるがナデ調整と考え

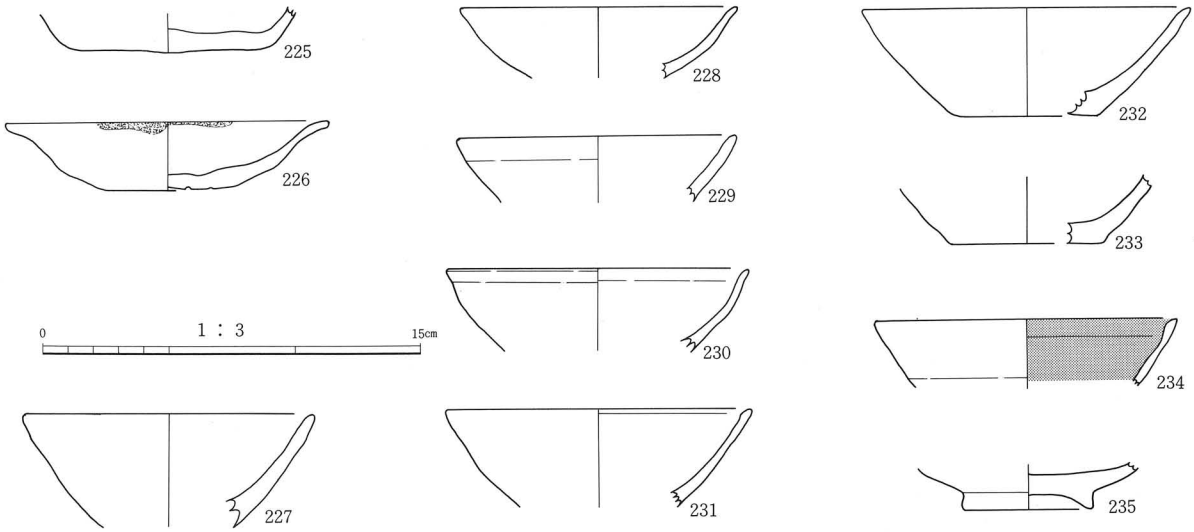


第17図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図12（1/3）

SD19



第18図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図13（1/3）



第19図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図14（1/3）

られる。218～221は皿である。低い高台の付くものもある。222は長胴甕の口縁部で口縁端部を若干内側にひねり出す。223は小型の甕で，底部は回転糸切り痕を残す。

その他，224はコバルト色の染付の磁器皿である。明治時代以降のものと考えられ，おそらく，撹乱による混入であろう。

21号溝（SD21，第19図，図版50）

須恵器（225・226）　225は無高台の杯。226は皿と考えられる。底部はヘラ切りで，口縁部には煤状炭化物が付着している。

土師器（227～235）　227～234は椀である。232・233の底部は回転糸切り痕が残る。234は内面黒色土器。235は断面三角形状の高台を持つ皿である。

C　中　世

(1)　遺　構

中世の遺構は掘立柱建物・柵列・溝・井戸・土坑がある。これらの遺構はいくつかの集中的な群を形成して発掘区全体に分布している。溝や土坑の中には出土遺物が全くないか，あってもごくわずかなものがあり，近世以降の遺構との時期区分ができないものも多い。ここでは遺構の種類，出土遺物，分布状況などから，中世と考えられるものを選択して報告する。

掘立柱建物

25号掘立柱建物（SB25，第20図）

発掘区南部でSD07の西側にある南北棟建物である。2間×2間の総柱建物で，桁行5.28m×梁行4.52m，平面積24㎡。主軸はN-11°-Eである。柱穴はほぼ円形で直径30～40㎝。

26号掘立柱建物（SB26，第21図，図版32）

発掘区南部でSD07の西側にある東西棟建物である。3間×2間の総柱建物で，桁行7.20m×梁行6.00m，平面積43㎡である。主軸はN-79°-Wである。前後関係は不明であるが，ほぼ同大の建物SB97と少しずれて重なる。

27号掘立柱建物（SB27，第22図，図版32）

発掘区南部でこれもSD07の西側にある南北棟建物である。3間×1間以上の総柱建物で，さらに西側に伸びる可能性が高い。桁行7.32m，平面積19㎡以上。主軸はN-10°-Eである。

28号掘立柱建物（SB28，第23図）

発掘区の南部でSB27の東側に位置する東西棟建物である。4間×3間の総柱建物で，桁行9.20m×梁行8.04m，平面積75㎡で，南半部の建物では最も大きい。主軸はN-78°-Wである。柱穴はほぼ円形で直径30～40㎝。柱穴から中世土師器が出土している（第38図236～238）。

30号掘立柱建物（SB30，第24・25図，図版30）

発掘区北東部に位置する南北棟建物である。SB31の南側に接している。3間×3間の総柱建物で，桁行7.36m×梁行7.08m，平面積52㎡である。建物の主軸はN-6°-Eである。

31号掘立柱建物（SB31，第24・26図，図版30）

発掘区北東部に位置する南北棟建物である。7間×3間以上の総柱建物で桁行16.52m×梁行6.76m以上，平面積112㎡以上。建物の主軸はN-5°-Eである。本遺跡中最大規模の掘立柱建物である。梁行はさらに東側に伸びる可能性がある。

32号掘立柱建物（SB32，第27図，図版30）

これも発掘区北東部に位置し，SB31の北側に接する，南北棟建物である。4間×1間以上の総柱建物で，桁行9.60m×梁行2.12m以上，平面積20㎡以上。建物の梁行はさらに東側に伸びる可能性が高い。主軸はN-3°-Eである。

33号掘立柱建物（SB33，第27図，図版30）

発掘区北西部に位置し，SB32の西側にある南北棟建物である。3間×2間の総柱建物で，桁行7.20m×梁行6.00m，平面積43㎡の規模である。建物の主軸はN-4°-Eである。

34号掘立柱建物（SB34，第28図）

発掘区北部に位置する，東西棟建物である。一部柱穴が未確認の部分があるが，3間×2間の総柱建物で，桁行6.76m×梁行5.36m，平面積36㎡の規模である。建物の主軸はN-76°-Wである。

35号掘立柱建物（SB35，第29図）

発掘区北部に位置する，南北棟建物である。2間×2間の側柱建物で，桁行5.12m×梁行4.36m，平面積22㎡の規模である。建物の主軸はN-19°-Eである。本遺跡で唯一の側柱建物で，規模も最も小さい。南側に接して小規模な土坑がある。

36号掘立柱建物（SB36，第28図）

発掘区北部に位置する，南北棟建物である。3間×2間の総柱建物で，桁行8.32m×梁行4.84m，平面積40㎡の規模である。建物の主軸はN-16°-E。

37号掘立柱建物（SB37，第30図，図版37）

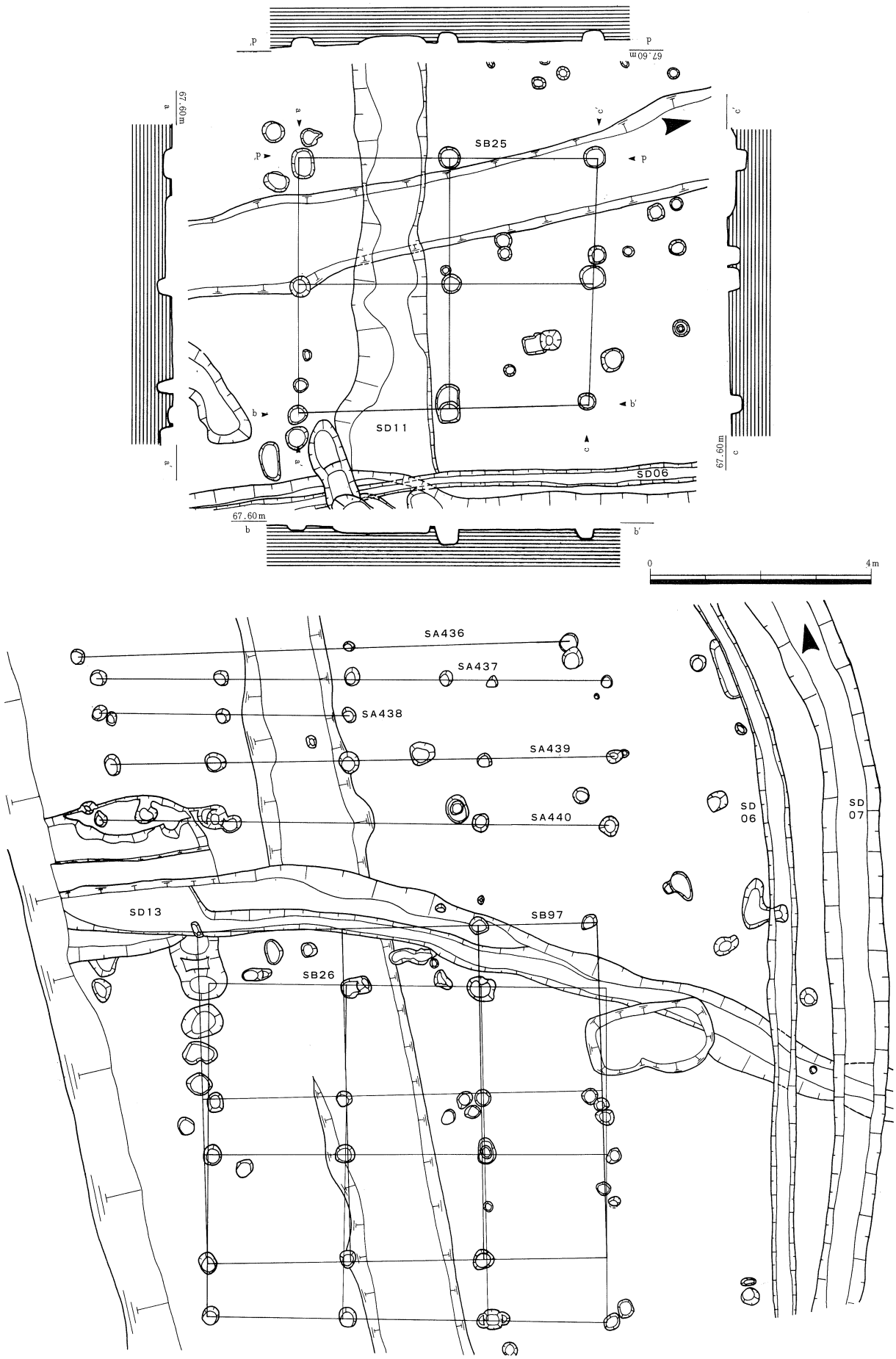
発掘区中央部やや北よりに位置する南北棟建物である。5間×3間の総柱建物で桁行12.84m×梁行7.20m，平面積96㎡の規模である。建物の主軸はN-5°-E。柱間寸法から北，東，南側の三面廂建物と考えられる。建物規模は本遺跡で二番目の大きさで，独立した建物である。

38号掘立柱建物（SB38，第24・25図，図版30）

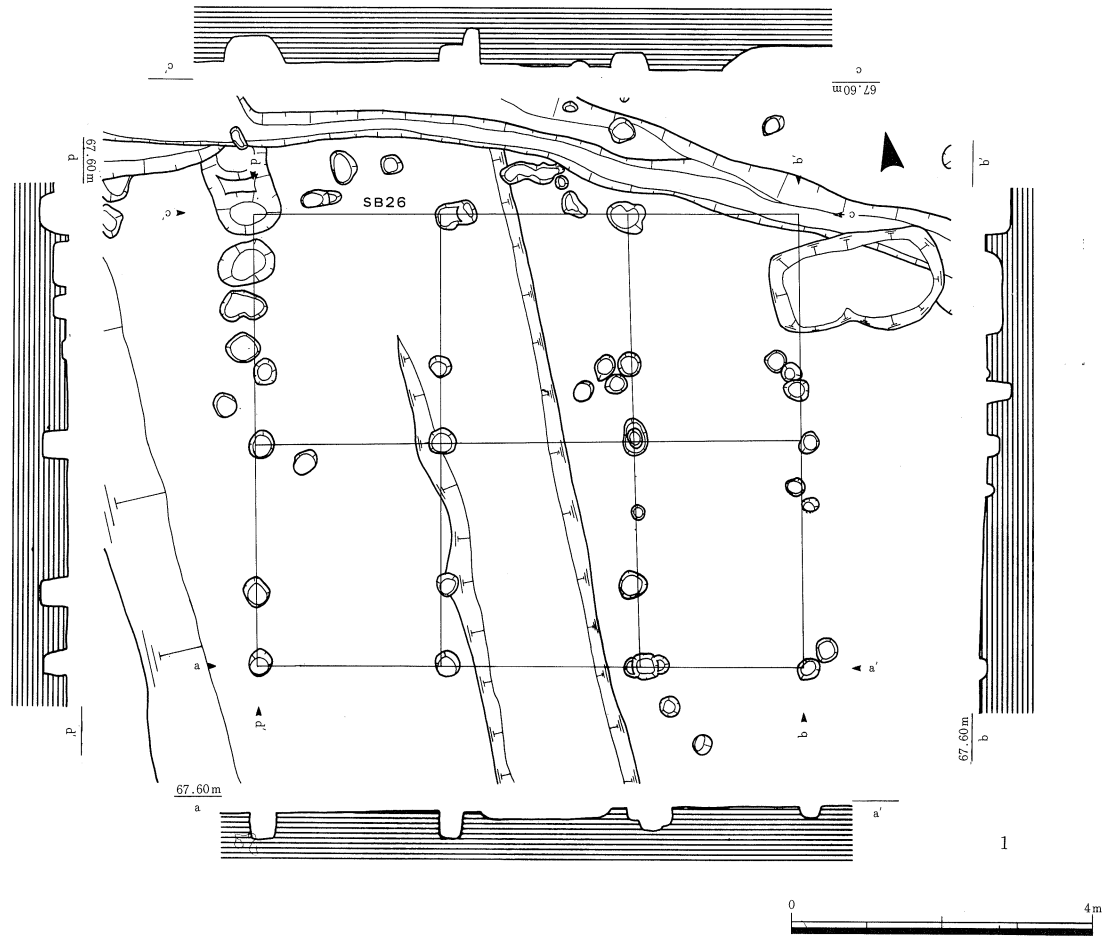
発掘区北東部に位置する南北棟建物である。一部柱穴が未確認の部分があるが，3間×2間の総柱建物で，桁行8.72m×梁行5.04m，平面積44㎡の規模である。建物の主軸はN-8°-E。SB31と重なるが前後関係は不明である。

95号掘立柱建物（SB95，第29図）

発掘区北部に位置する，南北棟建物である。2間×2間の総柱建物で，桁行5.20m×梁行4.20m，平面積22㎡の規模である。建物の主軸はN-21°-E。SB35と同じ大きさの建物で僅かに北側にずれて建つが前

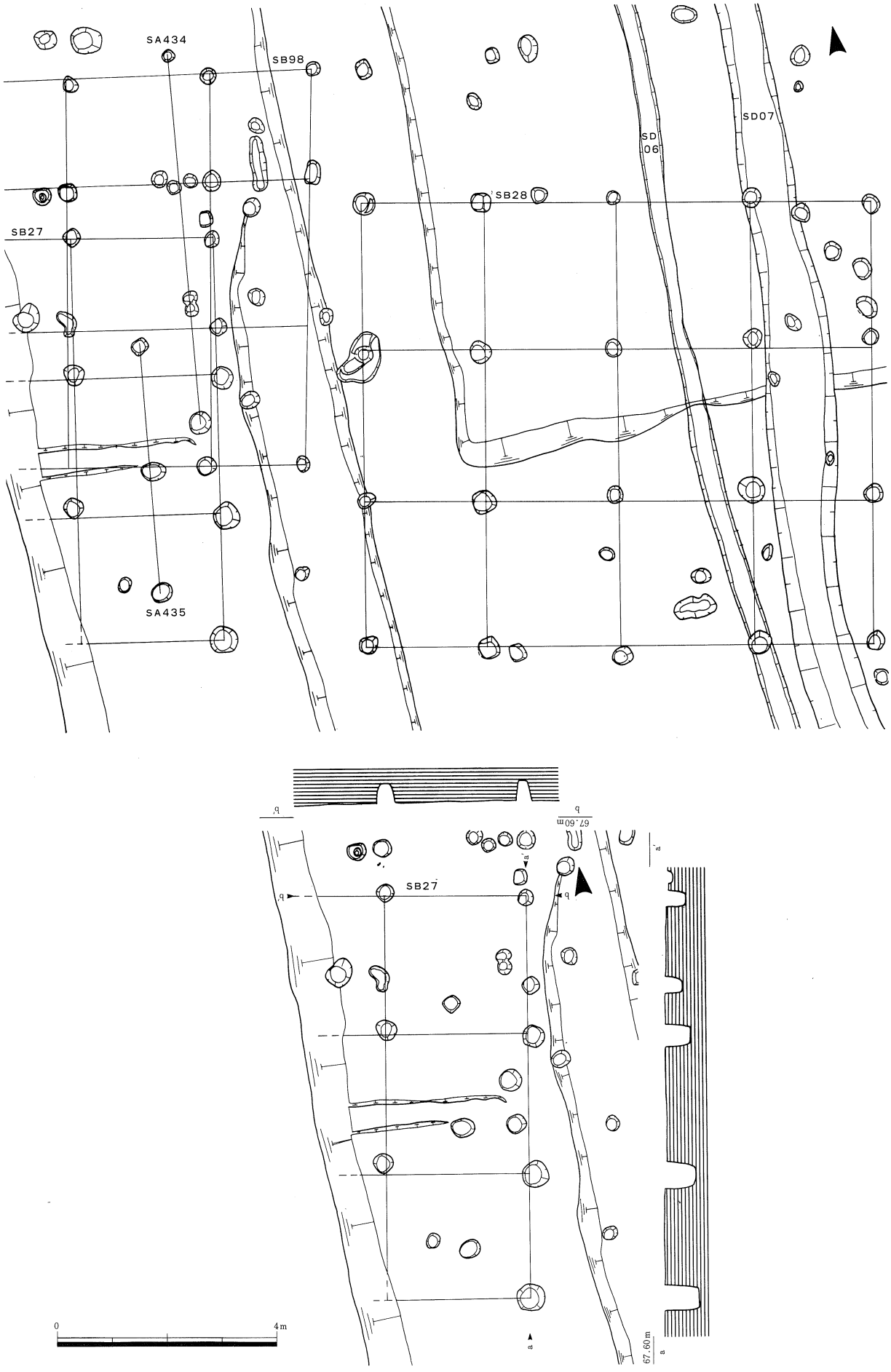


第20図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図
SB25

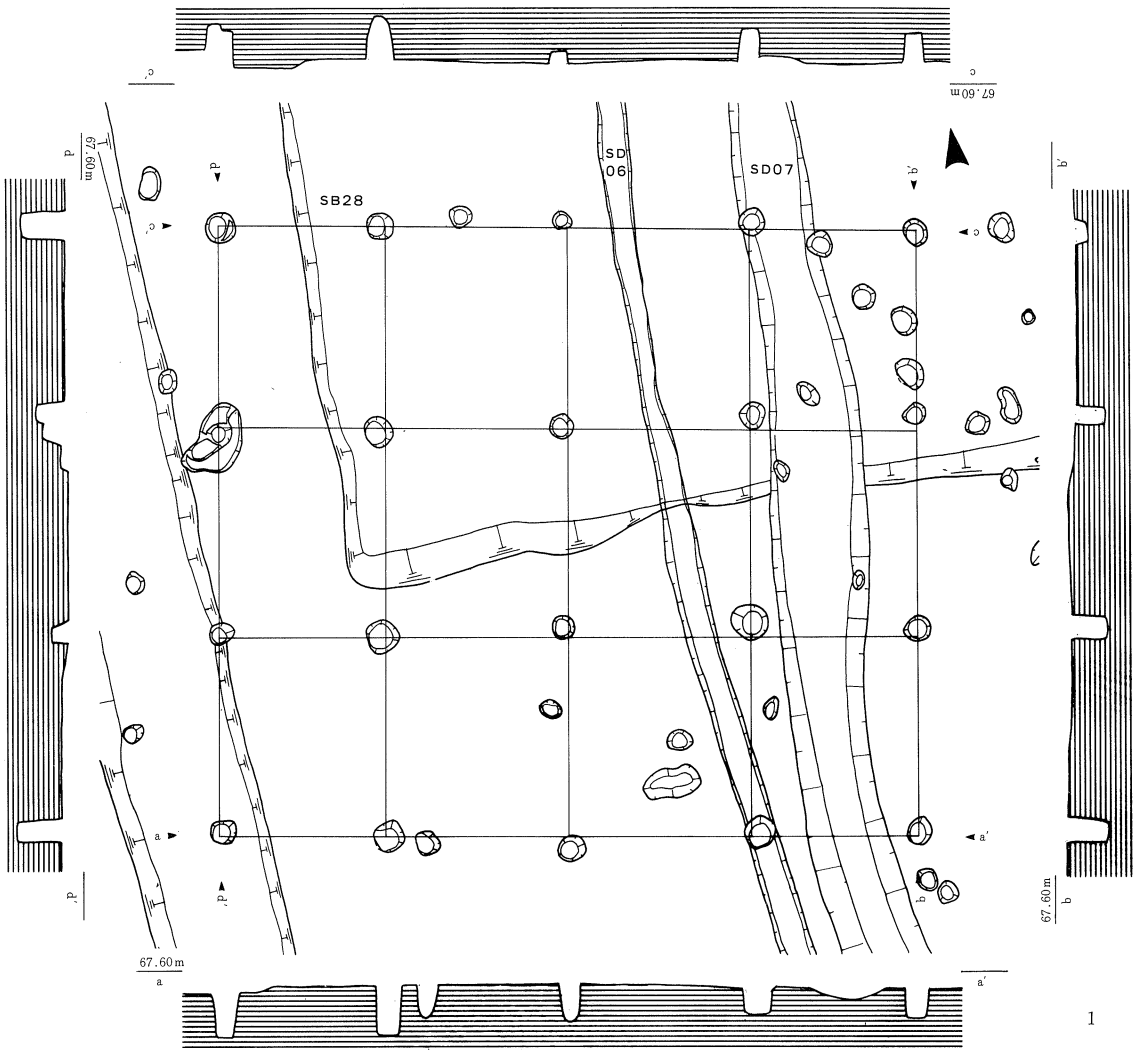


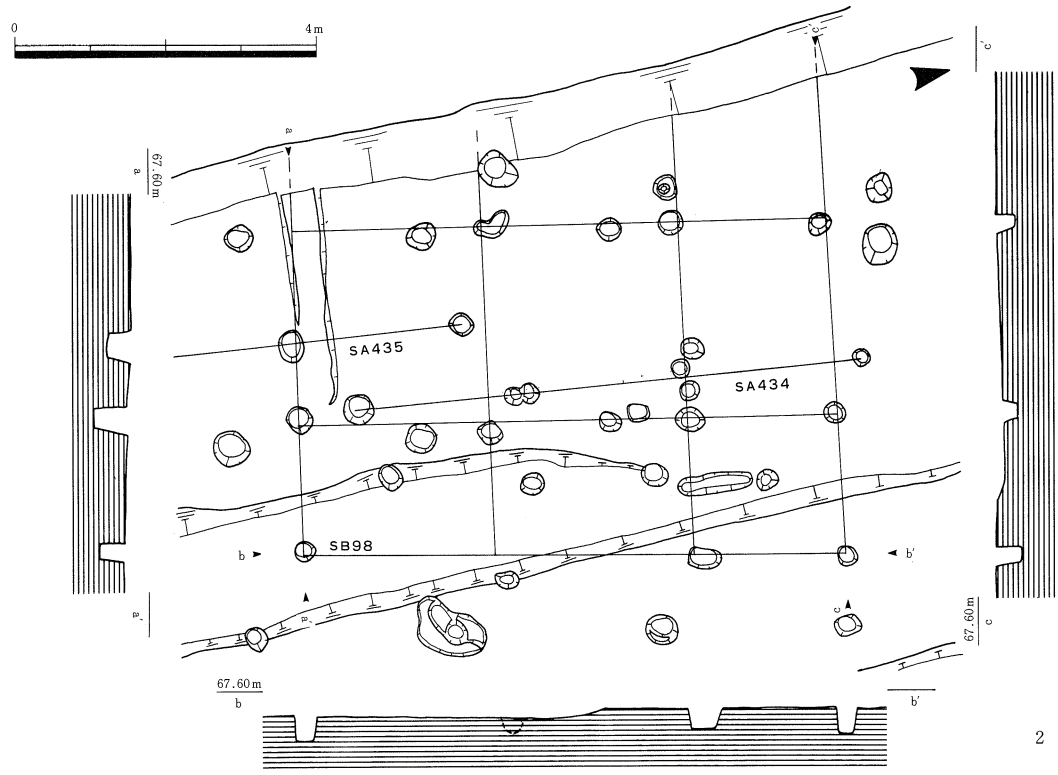
第21図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図

1.SB26　2.SB97

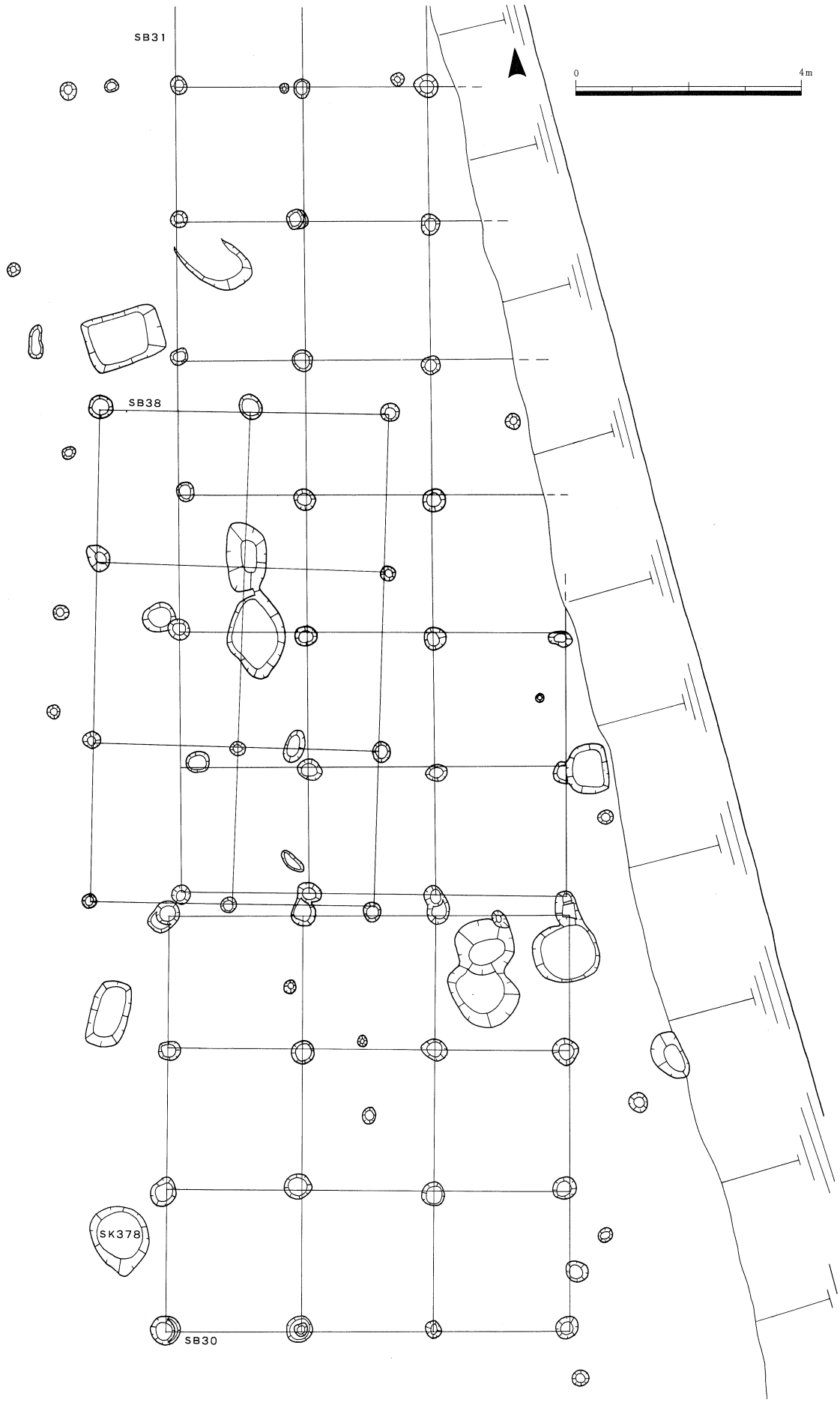


第22図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図
SB27

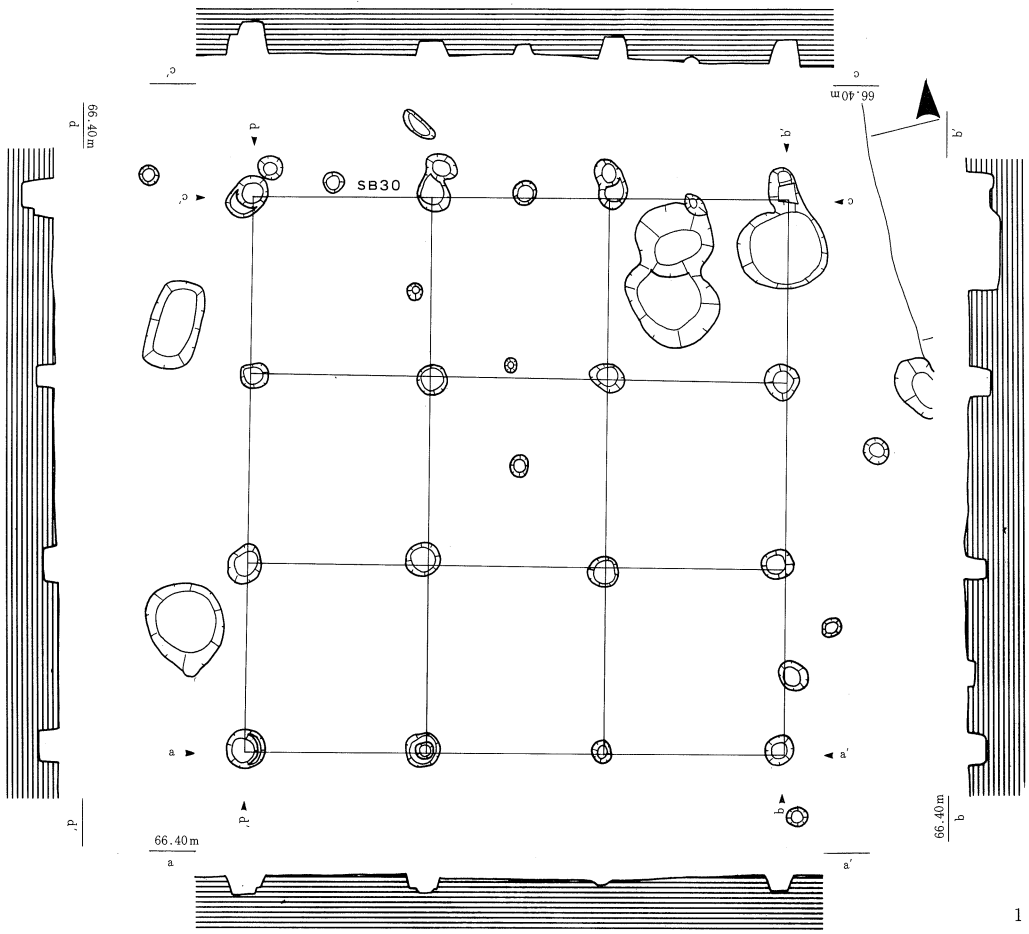


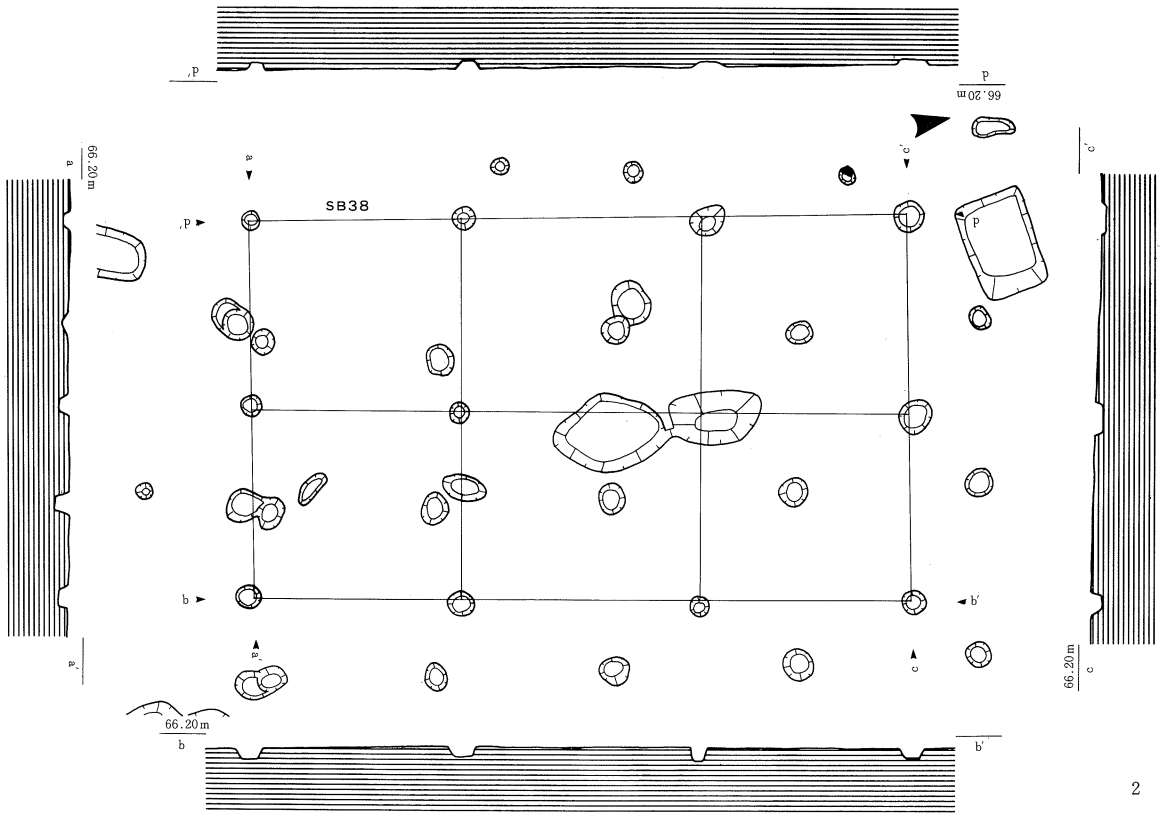


第23図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図
1.SB28　2.SB98

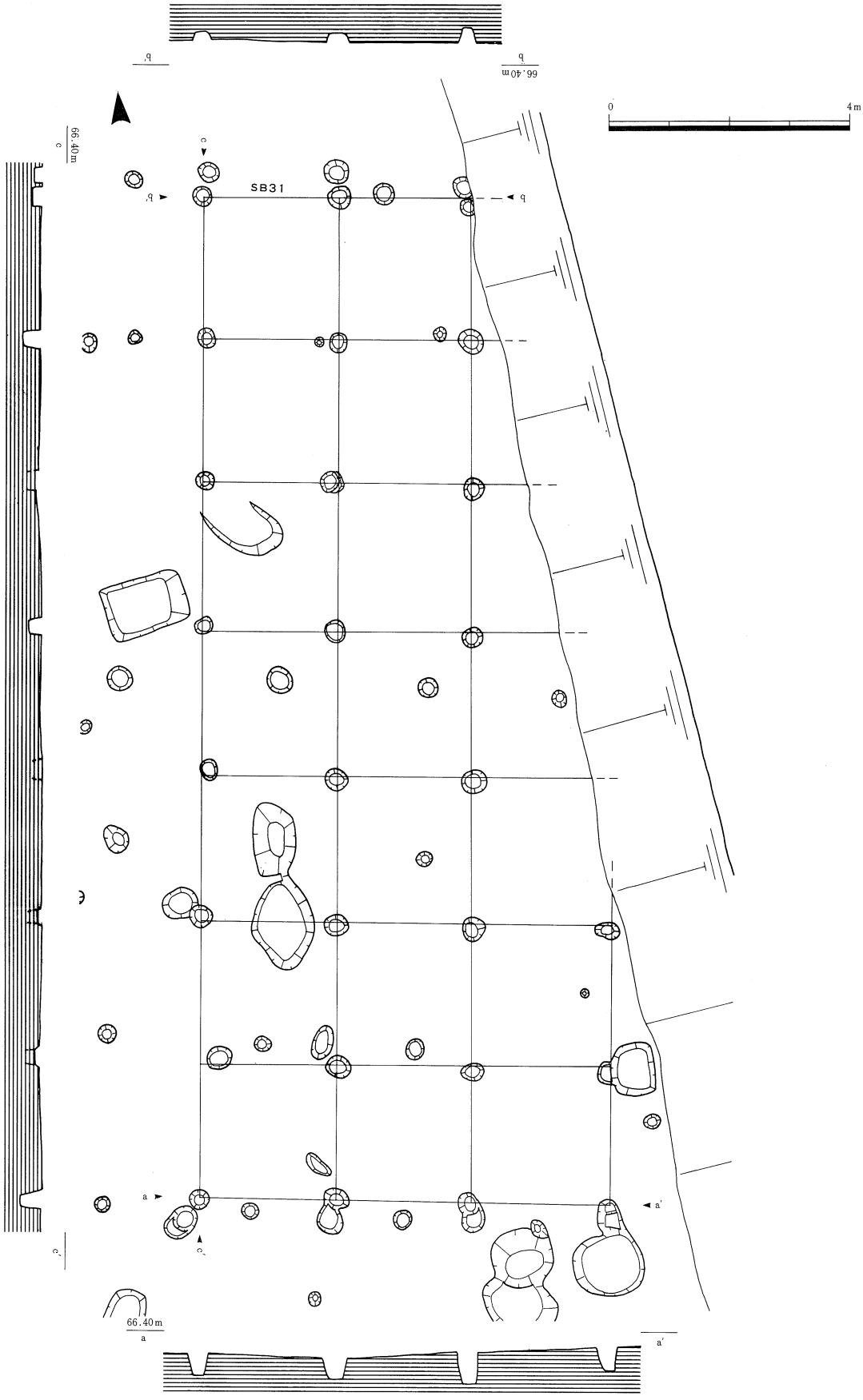


第24図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図
SB30・SB31・SB38

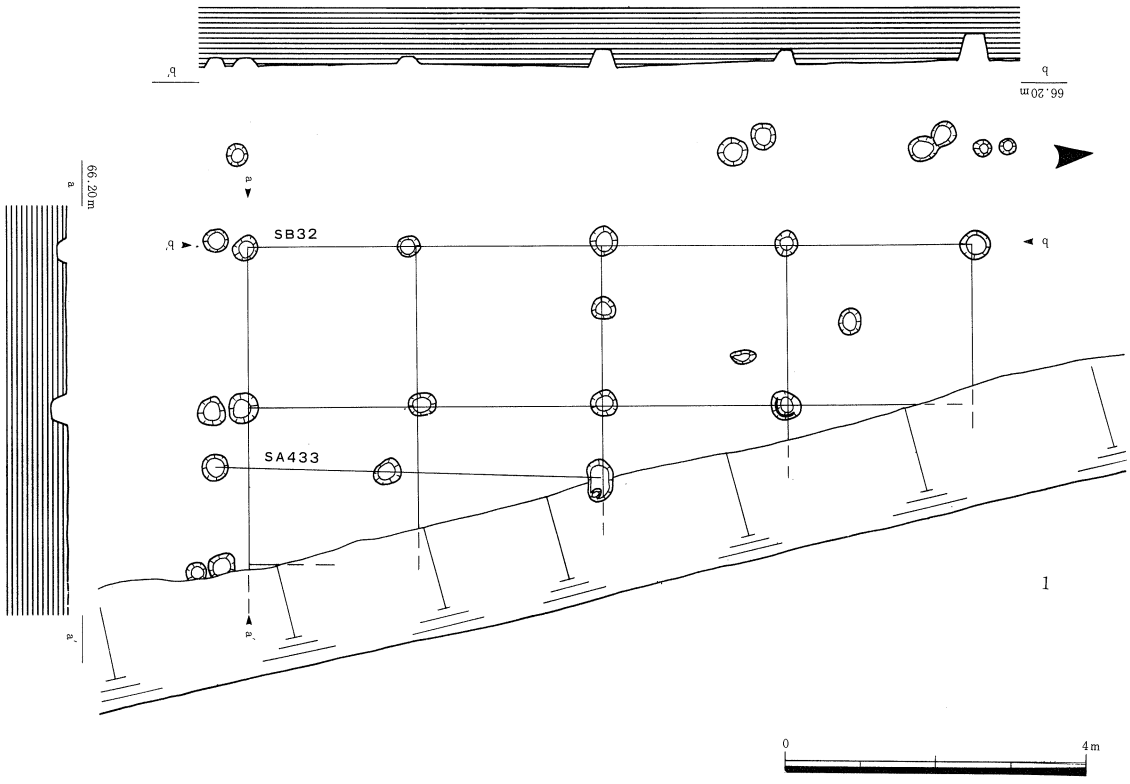


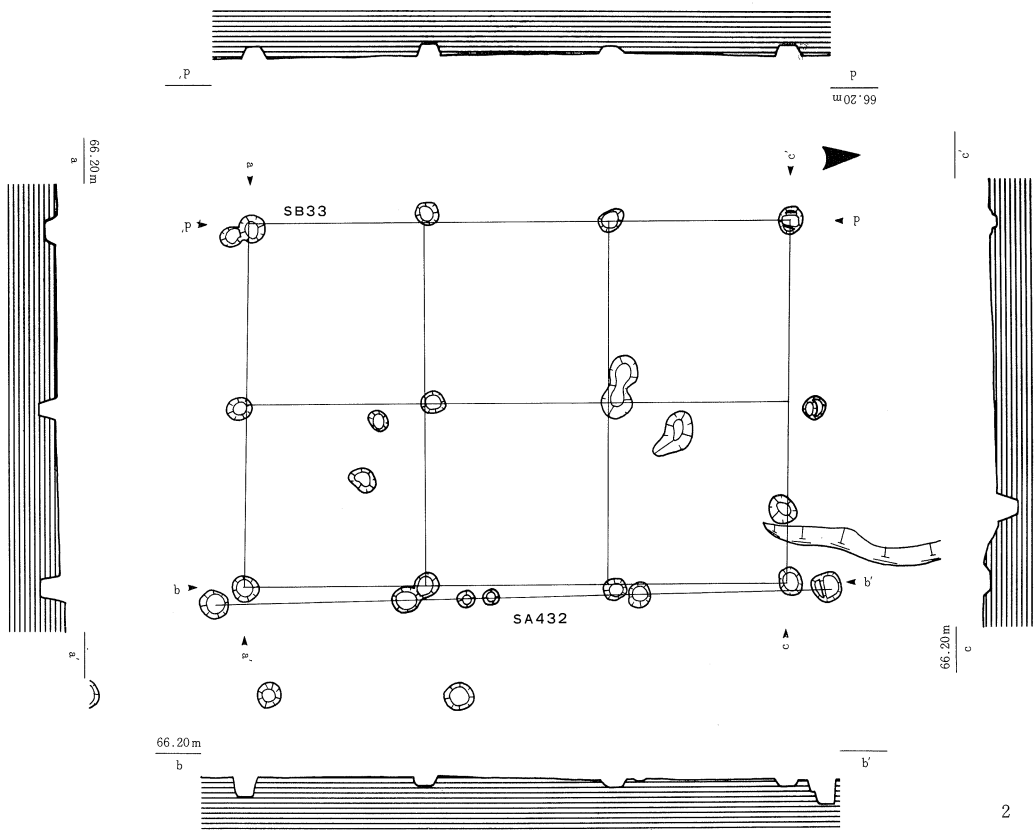


第25図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図
1.SB30　2.SB38



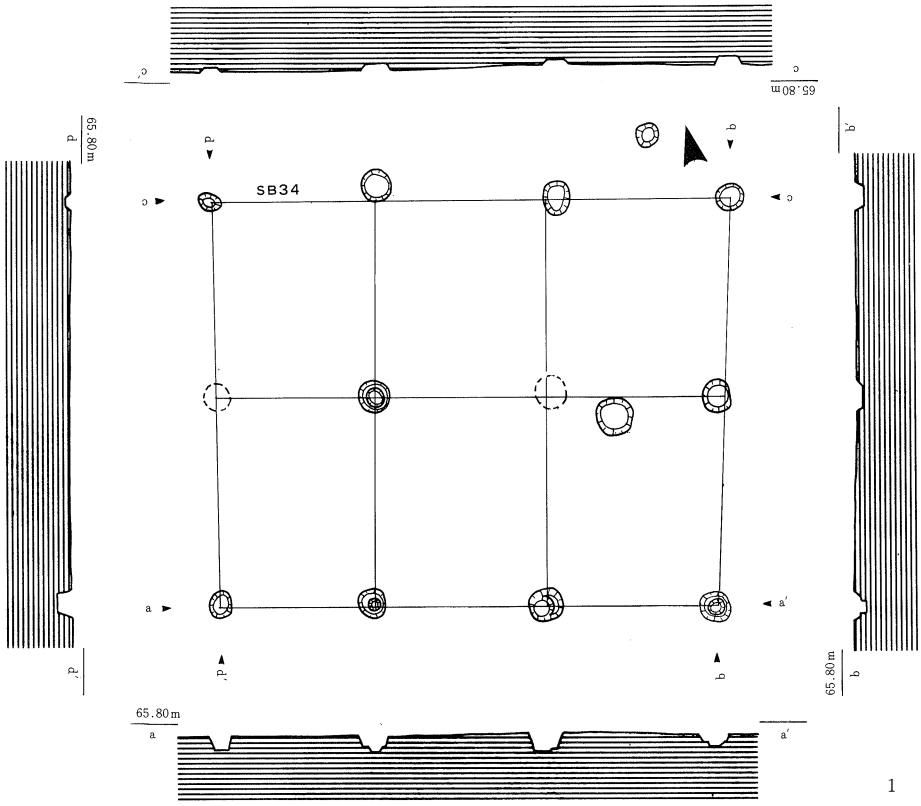
第26図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図
SB31

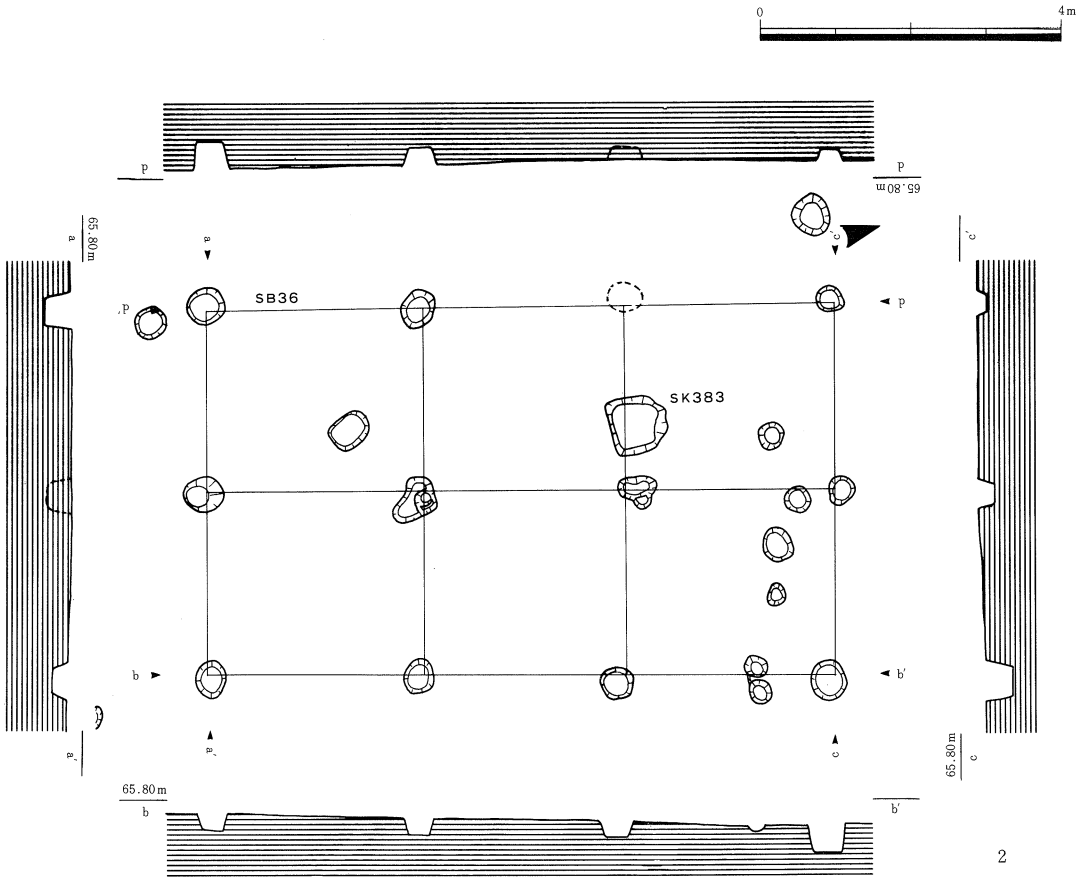




第27図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図

1.ＳＢ３２　2.ＳＢ３３





第28図　梅原加貿坊遺跡　遺構実測図
1.SB34　2.SB36

後関係は不明である。

97号掘立柱建物（SB97，第21図）

発掘区南部でSB26と重なる位置にある東西棟建物である。3間×2間の総柱建物で桁行7.20m×梁行6.00m，平面積43㎡の規模である。建物の主軸はN-81°-W。SB26と同規模の建物で建て替えたものと思われるが前後関係は不明である。

98号掘立柱建物（SB98，第23図）

発掘区南部でSD07の西側に位置する。南北棟建物と考えられる。3間×2間の総柱建物で，桁行7.08m×梁行4.40m，平面積31㎡の規模である。建物の主軸はN-9°-E。西側梁行方向にさらに伸びる可能性が高い。

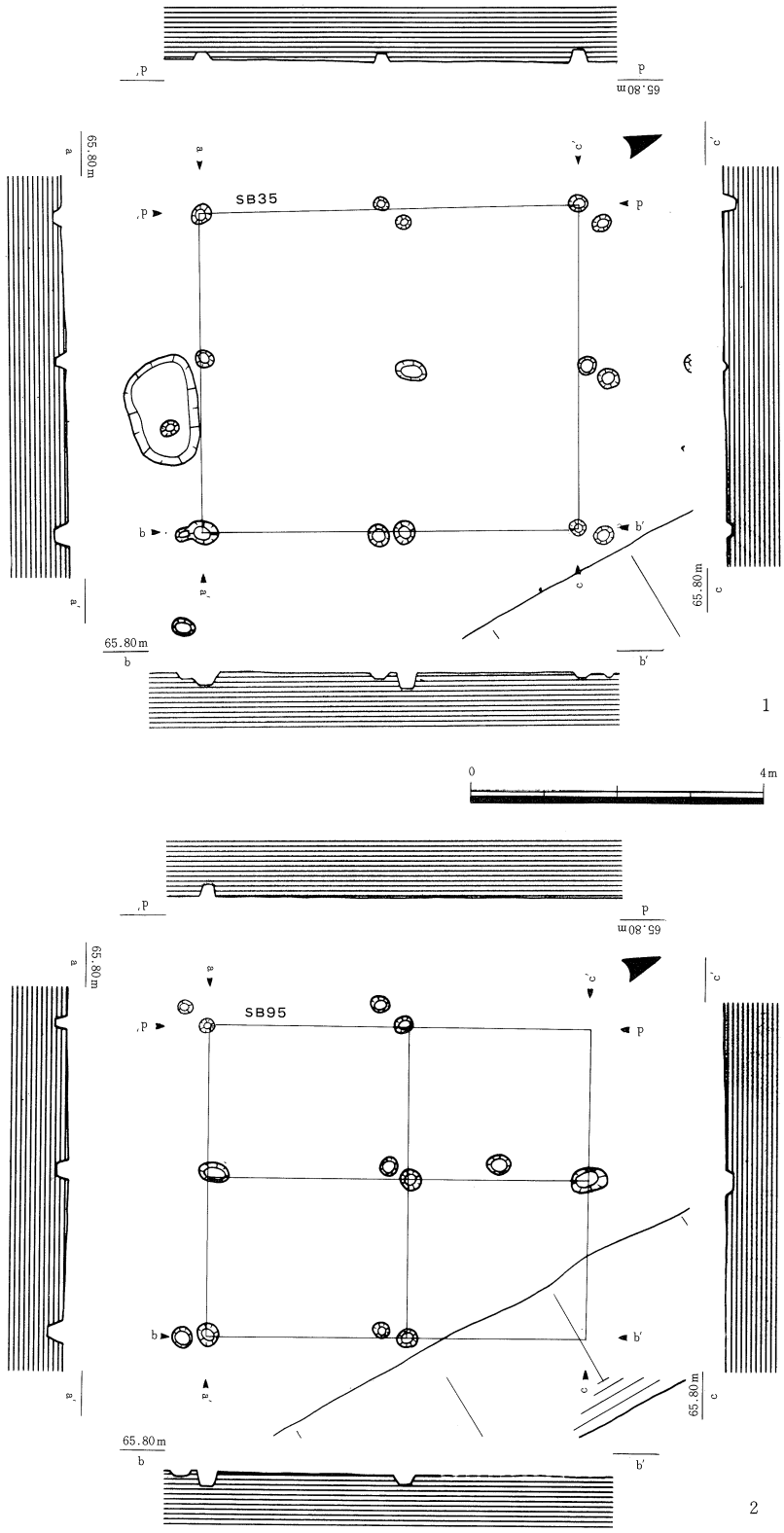
柵　列

432号柵列（SA432，第27図）

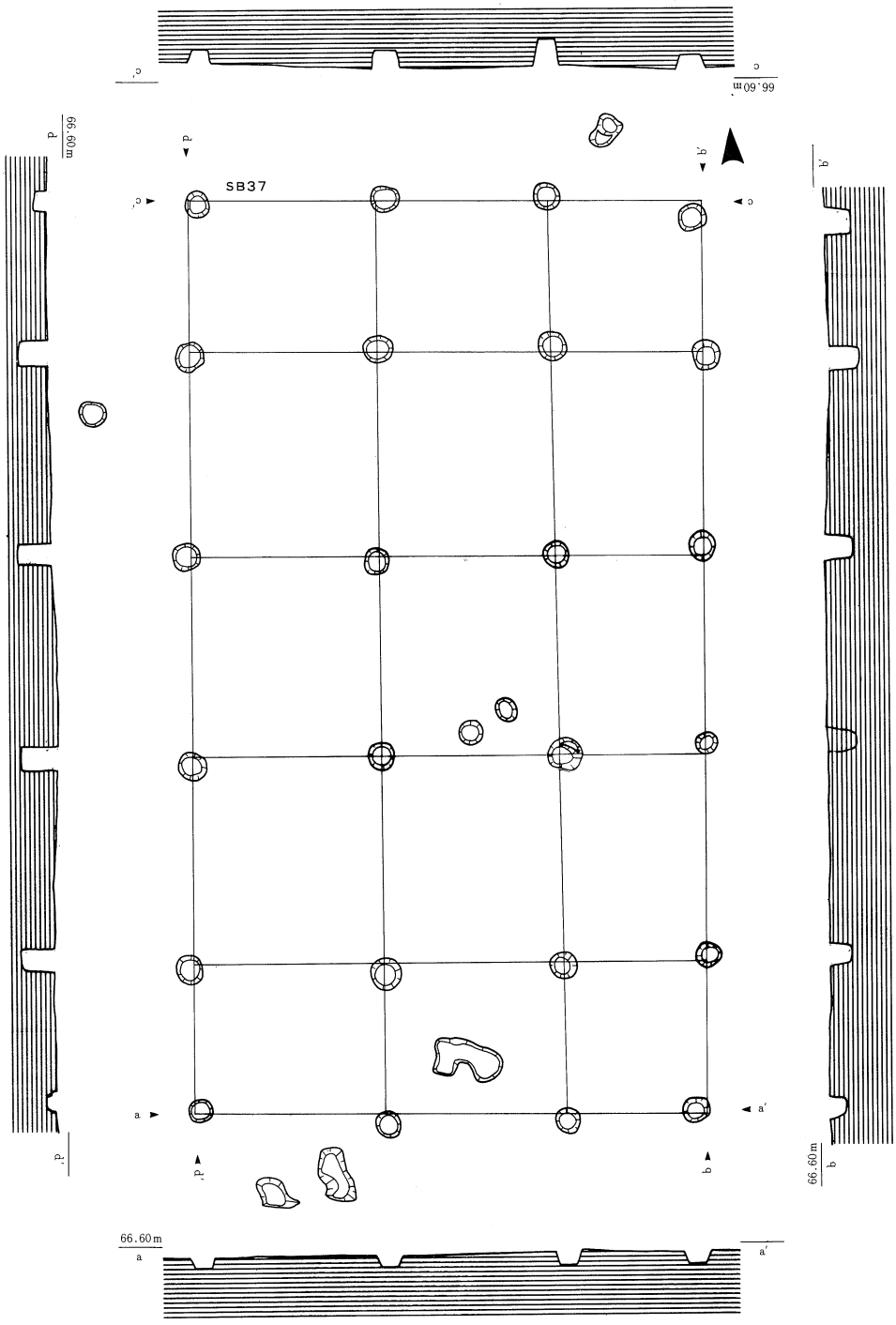
SB33の東桁行柱列に沿うように並ぶ南北方向の柵列である。3間分，全長8.12mの長さがあり，中央柱間が広い。主軸はN-2°-E。

433号柵列（SA433，第27図）

SB32に重なり，南北方向に並ぶ柵列である。2間分，全長5.00mが確認されておりさらに北側に伸びる可能性が高い。柵の主軸はN-5°-E。



第29図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図
1.SB35　2.SB95



第30図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図

ＳＢ３７

434号柵列（SA434，第22図）

SB27・98に重なり南北方向に並ぶ柵列である。３間分，全長6.72ｍが確認されている。柵の主軸はN-6°-Eである。

435号柵列（SA435，第22図）

SA434の西側に隣接して，南北方向に並ぶ柵列である。２間分，全長4.48ｍが確認されており，柵の主軸はN-7°-Eである。西側の発掘区外に伸びる掘立柱建物の一部である可能性もある。

以下440号柵列まではSB26・97の北側に，少しずつ南北にずれて東西方向に並ぶ柵列である。SB27・

28等との仕切り塀的な性格と考えられる。いずれもさらに西側の発掘区外に伸びる可能性がある。

436号柵列（SA436，第20図，図版32）

最も北側に位置する。２間分，全長8.84ｍが確認されており，柵の主軸はN-81°-Wである。

437号柵列（SA437，第20図，図版32）

４間分，全長9.20ｍが確認されており，柵の主軸はN-79°-Wである。

438号柵列（SA438，第20図，図版32）

２間分，全長4.48ｍが確認されており，柵の主軸はN-79°-Wである。柱穴配列から，東側にもう２間分伸びていた可能性がある。

439号柵列（SA439，第20図，図版32）

４間分，全長9.04ｍが確認されており，柵の主軸はN-80°-Wである。

440号柵列（SA440，第20図，図版32）

最も南側に位置する。中央柱穴は試掘トレンチで削平され，確認できないが，４間分と推定される。全長は9.20ｍで，柵の主軸はN-79°-Wである。

溝

４号溝（SD04，第31・32図，図版33）

発掘区南端から中央部にかけて，途中東側に蛇行しながら北流する南北溝である。幅52～86㎝，深さ10～15㎝で，断面形は半円形を呈する。溝の中程から北部にかけて，SD05が枝分かれするが，SD04の方が新期である。出土遺物から時期は14世紀と考えられる。

５号溝（SD05，第31図）

発掘区中央部で，SD04から枝分かれし，これに沿って北流する南北溝である。溝の規模は，幅36～84㎝，深さ２～11㎝で，断面形は半円形を呈する。SD04より古いが時期差はあまりなく，これも14世紀と考えられる。

６号溝（SD06，第31・32図，図版33）

発掘区南端から中央部にかけて北流する南北溝である。幅24～52㎝，深さ３～８㎝と浅い。溝の断面形は半円形を呈する。部分的に流路が不明瞭になるが，ほぼSD07に沿っている。SD07に近い時期と考えられる。

７号溝（SD07，第31・32図，図版33）

発掘区南端から中央部にかけて北流する南北溝で，SD06に沿って流れる。溝の規模は幅80～166㎝，深さ７～21㎝で，断面形は半円形を呈する。時期は15世紀と考えられる。

８号溝（SD08，第31図）

発掘区南側で検出されたSD07に合流する南北溝である。溝の規模は幅38～100㎝，深さ10～19㎝である。溝の断面形は逆台形を呈し，出土遺物から時期は13～14世紀と考えられる。

９号溝（SD09，第31図）

発掘区南側でSD08の西側に少し離れて北流する南北溝である。南側は発掘区外に伸びる。溝の規模は幅46～138㎝，深さ２～13㎝である。時期は14世紀と考えられる。

10号溝（SD10，第31図）

発掘区南側で検出された，途中で鍵の手状に屈曲する東西溝である。流路は不明瞭であるが西→東と推測されSD04～07より古い。溝の規模は幅18～36㎝，深さ５～12㎝と細く浅い。出土遺物は縄文土器のみであるが，SD11・12と方向が一致し，これらに近い時期と考えられる。

11号溝（SD11，第31図）

発掘区南側で検出された東西溝である。これも流路は東流すると推測され，西側発掘区外にのび，東側はSD06手前まで確認されている。溝の規模は幅108～146cm，深さ7～20cmである。時期は14世紀と考えられる。

12号溝（SD12，第31図）

発掘区南側で，SD11の北側にある東西溝である。一部のみ検出され，西側発掘区外に伸びる。流路は不明瞭であるが西→東と推測される。溝の規模は幅30～72cm，深さ7～16cmで，時期はSD11と同様14世紀と考えられる。

井　戸

39号井戸（SE39，第33図，図版34）

南側掘立柱建物群の北側に位置する，素掘りの井戸である。平面形は直径約100cmの円形で，円筒形の掘形を持ち，深さは211cmと最も深く，井戸底は下層の砂礫層に達する。珠洲，中世土師器，円形板，箸等が出土しており，遺構の時期は14世紀代と考えられる。

40号井戸（SE40，第33図）

発掘区中央部東側の土坑群中に位置する，素掘りの井戸である。平面形は120×116cmの楕円形を呈し，深さは150cmである。時期を決定する遺物がないが，周囲の状況から13～14世紀と考えておきたい。

41号井戸（SE41，第33図，図版34）

SE40の北西側に近接する，素掘りの井戸である。平面形は120×110cmの楕円形を呈し，深さは180cmである。漆器椀や曲物などが出土しているが，SE40に近い時期と考えられる。

72号井戸（SE72，第33図，図版34）

発掘区中央部の南よりで，SD04の西側に位置する，素掘りの井戸である。平面形は106×100cmとほぼ円形で，深さは62cmとやや浅い。出土遺物がないが，周囲の遺構から14世紀代と考えられる。

73号井戸（SE73，第33図，図版34）

SE72の北側に近接する，素掘りの井戸である。平面形は126×110cmの楕円形で，深さは50cmと浅い。これも出土遺物がないが，SE72に近い時期と考えられる。

374号井戸（SE374，第33図）

発掘区北側掘立柱建物群の西側に位置する，素掘りの井戸である。平面形は132×112cmの楕円形で，深さは126cmである。出土遺物がないが，掘立柱建物群と近い時期と考えられる。

土　坑

46号土坑（SK46，第34図）

発掘区南端部にある，楕円形の土坑である。規模は南北490cm，東西212cm，深さ30cmで断面皿状になる。珠洲・白磁・青白磁などが出土しており，13～14世紀代の遺構と考えられる。

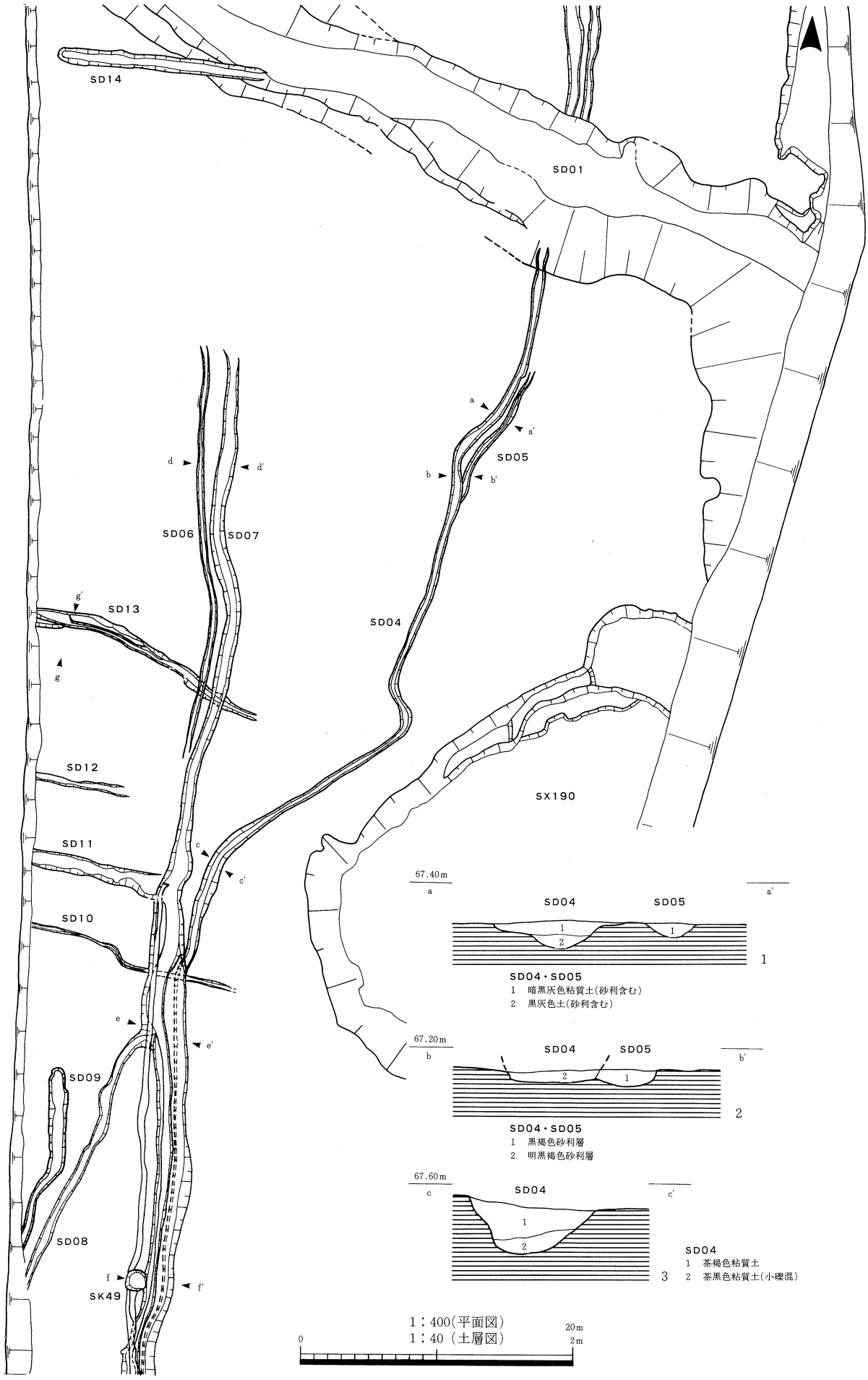
60号土坑（SK60，第34図）

SK46の南東に隣接する長方形の土坑である。規模は東西448cm，南北340cm，深さ32cmである。南東隅をSD04に切られる。中世土師器・珠洲・青磁などが出土しており13世紀代の年代が推定される。

61号土坑（SK61，第34図，図版36）

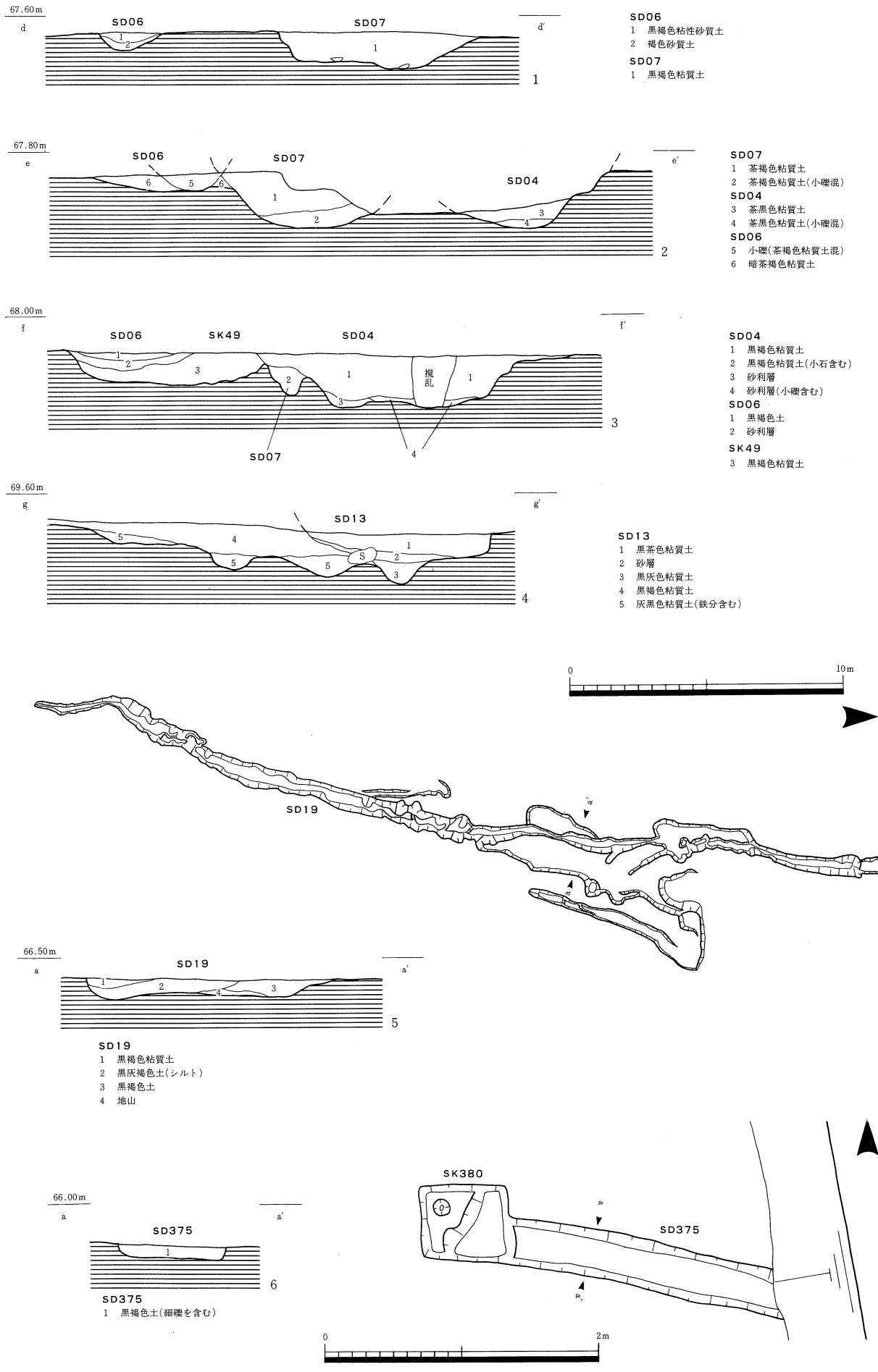
発掘区南端部で掘立柱建物群の東側に位置する長方形の土坑である。規模は東西284cm，南北232cm，深さ28cmである。中世土師器皿・珠洲・青磁などが出土しており，時期は13世紀代と考えられる。

62号土坑（SK62，第36図，図版36）



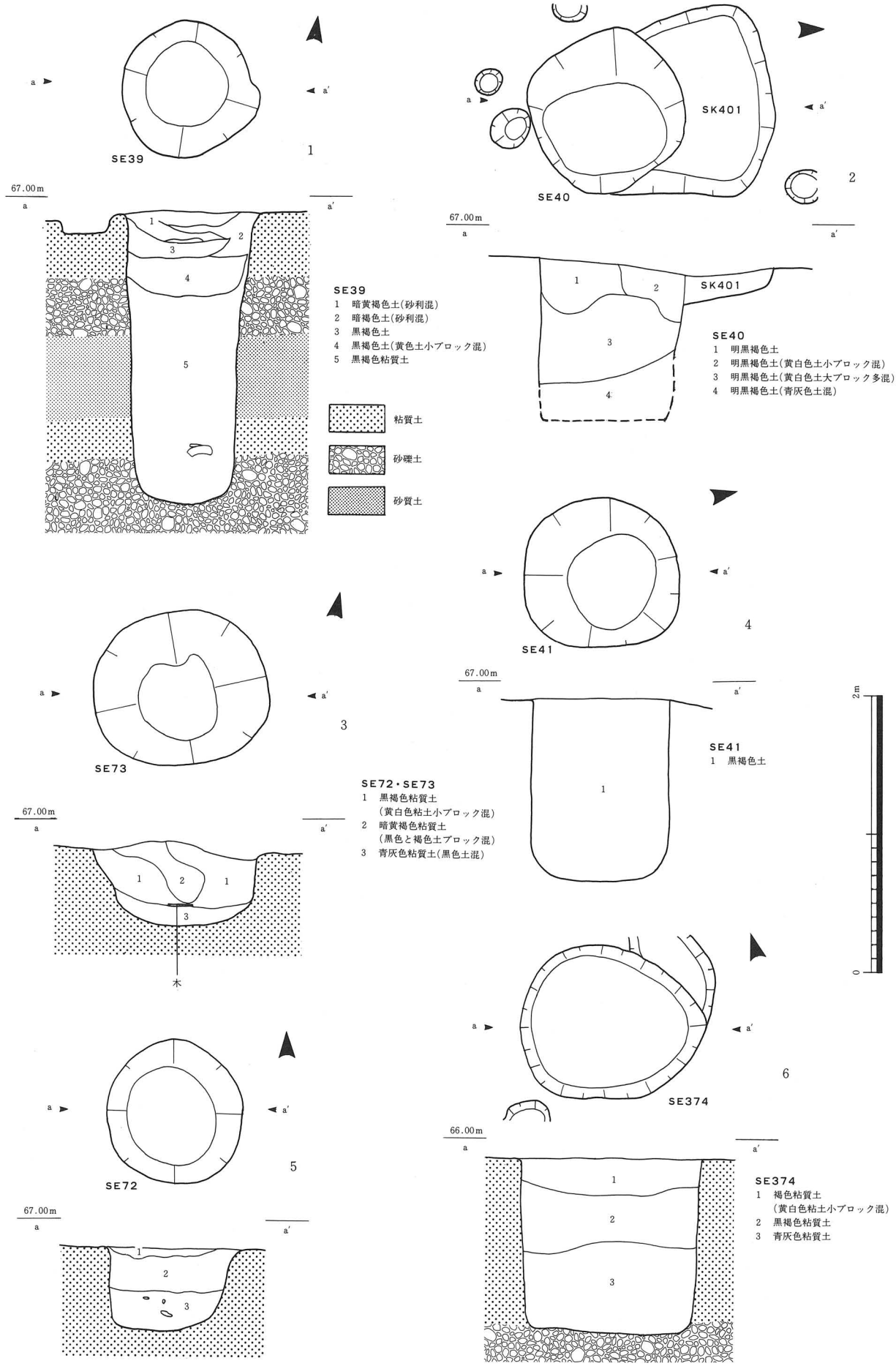
第31図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図

1~3.SD04・SD05



第32図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図

1～3.SD04・SD06・SD07　4.SD13　5.SD19　6.SD375



第33図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図

1.SE39 2.SE40 3.SE73 4.SE41 5.SE72 6.SE374

SK61の東側に隣接する長方形の土坑で，規模は東西345㎝，南北248㎝，深さ45㎝である。中世土師器皿・珠洲・土師質の火舎などが出土しており，時期は13世紀代と考えられる。

64号土坑（SK64，第35図）

南側掘立柱建物群の北東部の，重なり合った土坑群中の最も西側にあるやや不整形な長方形土坑である。規模は東西326㎝，南北320㎝，深さ37㎝。SK66より新しく，中世土師器・楕円形の石硯などが出土している。時期は13世紀代と考えられる。

65号土坑（SK65，第35図）

SK64の東側に隣接するやや不整形な長方形の土坑で，東西284㎝，南北280㎝，深さ30㎝の規模である。中世土師器・珠洲などが出土しており，時期は13世紀代と考えられる。

66号土坑（SK66，第35図）

SK65の北側にある土坑で規模・形態等は不明。現存する深さ13㎝で中世土師器・珠洲が出土。

80号土坑（SK80，第36図，図版37）

南側掘立柱建物群の北側に位置する不整円形の土坑である。規模は東西320㎝，南北310㎝，深さ28㎝で，SD06・07に切られる。中世土師器・砥石などが出土しており，時期は14世紀代と考えられる。

86号土坑（SK86，第36図，図版37）

SK80の北側にある長方形の土坑。規模は南北250㎝，東西82㎝，深さ22㎝。土師質火舎の出土から中世の遺構と考えているが，周辺には近世以降の遺構もあり，時期は不明確。

91号土坑（SK91，第35図）

SK66の東側に位置するやや不整形な長方形の土坑。東西536㎝，南北216㎝，深さ38㎝の規模で南側に隣接するSK68に切られる。中世土師器皿・珠洲などが出土しており，14世紀代と考えられる。

93号土坑（SK93，第36図）

南側掘立柱建物群の東側でSK61の南側に位置する長方形の土坑。南北104㎝，東西86㎝，深さ18㎝の小型のもので，珠洲が出土している。13～14世紀の遺構と考えられる。

96号土坑（SK96，第37図）

SK91の北側で，SD01（縄文時代の川跡）に重なり，これを掘り込んでいる長方形の土坑。南北340㎝，東西296㎝，深さ33㎝の規模で，中世土師器・珠洲などが出土。SK64～66等と同時期と推定。

99号土坑（SK99，第36図）

南側掘立柱建物群の北側に位置する正方形の土坑。規模は一辺182㎝，深さ11㎝で浅い皿状を呈する。遺物は中世土師器が出土しており，時期は13世紀代と考えられる。

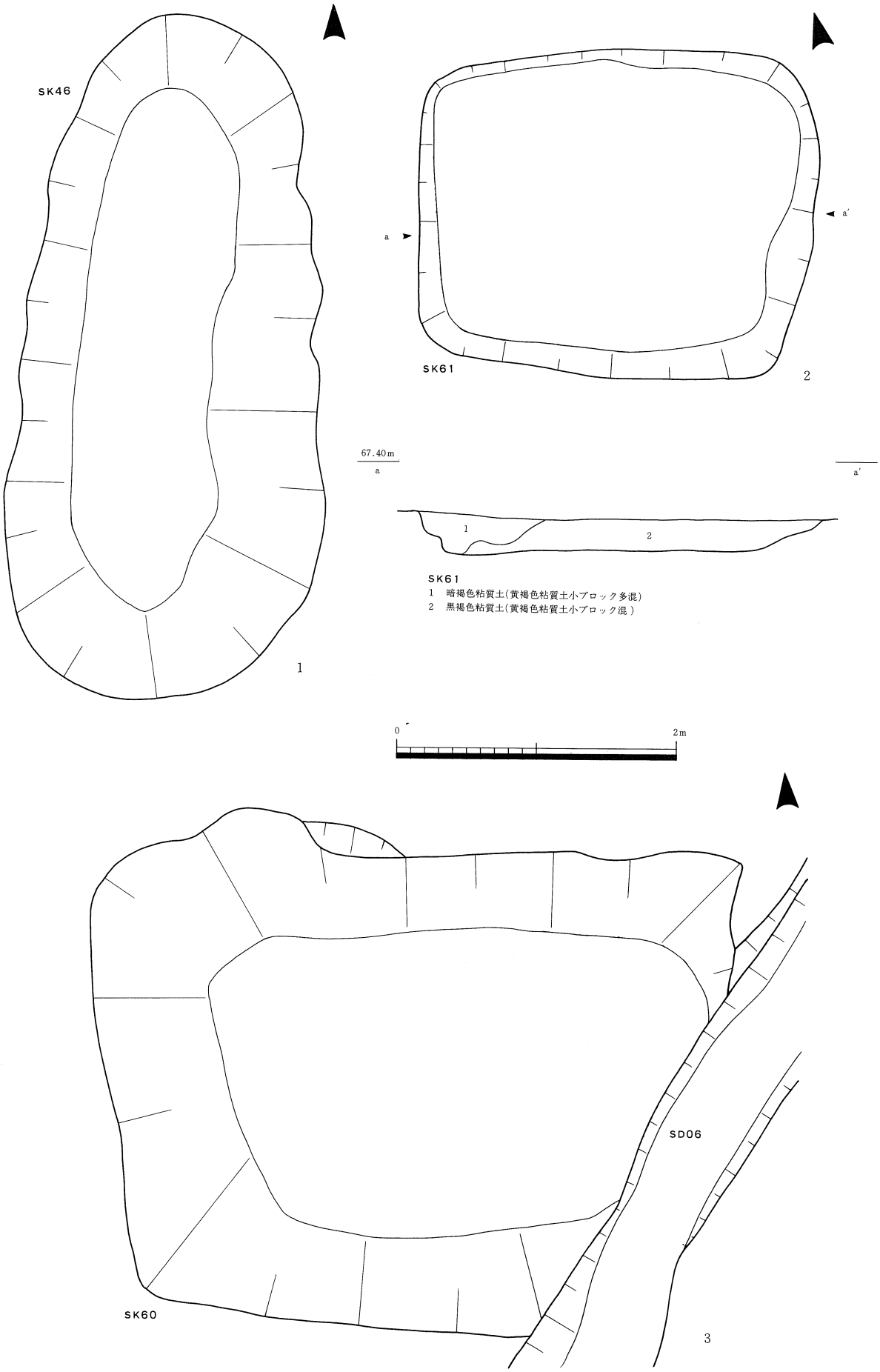
402号土坑（SK402，第37図）

発掘区中央よりやや南側の東よりで，SE41の東側に隣接する方形の土坑。規模は南北196㎝，東西160㎝，深さ26㎝で，珠洲が出土している。時期は13～14世紀と考えられる。

418号土坑（SK418，第37図）

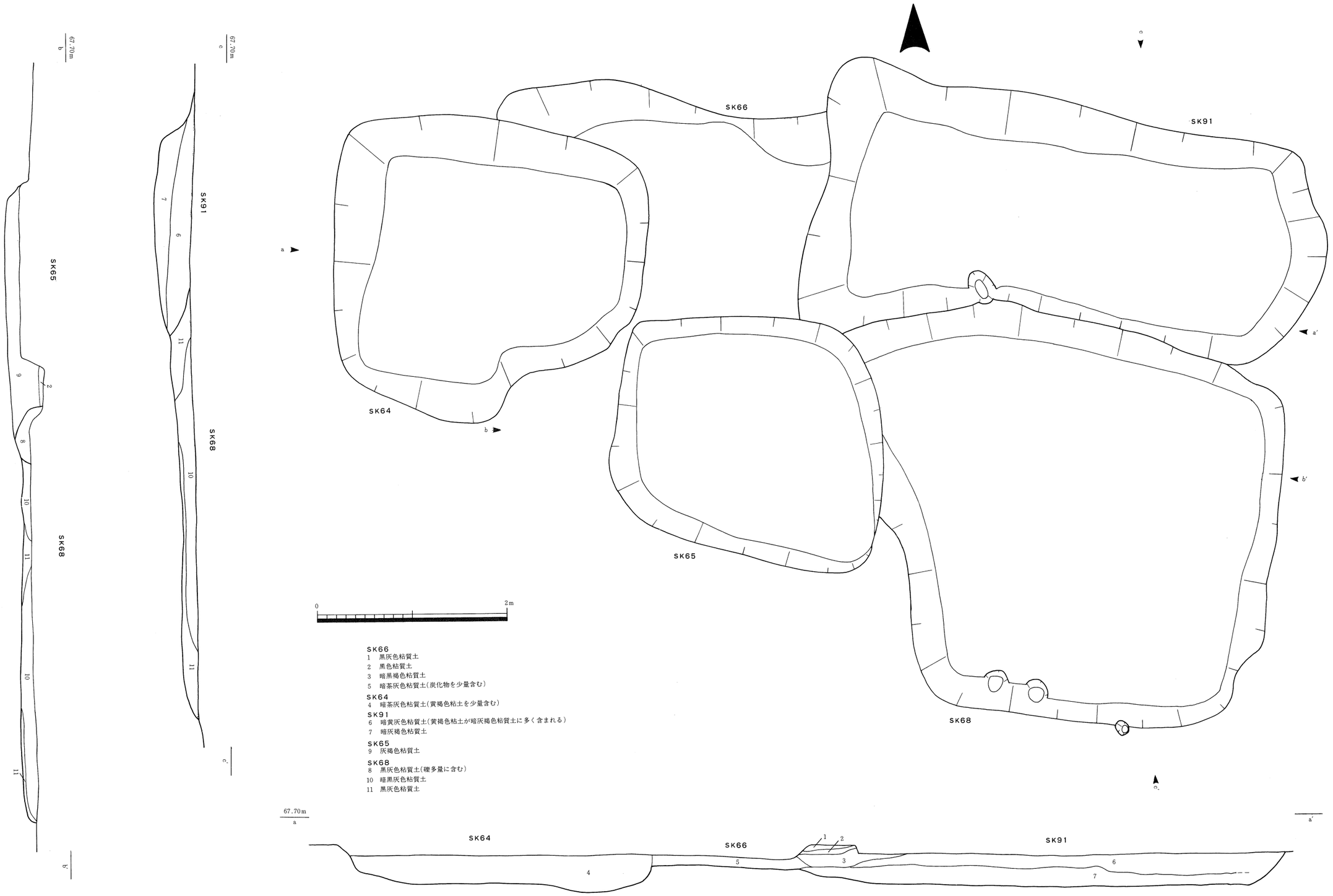
SK402の西側にある楕円形の土坑。長軸128㎝，短軸106㎝，深さ24㎝の小型のもので，珠洲が出土している。時期は13～14世紀と考えられる。

全体的に遺構からの出土遺物が少ないため，時期を確定しにくいが，以上の他に，平面形が方形のSK402，やや不整形なSK417-a・417-b・409，円形に近いSK405などが，中世前期の土坑と考えられるものである。SK68は近世陶磁器が出土していることで，近世の遺構で取り扱ったが，これらは混入の可能性もあり，遺構の分布状況からは中世前期のものとしたほうが良いかもしれない。



第34図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図

1.SK46　2.SK61　3.SK60



SK66
1 黒灰色粘質土
2 黒色粘質土
3 暗黒褐色粘質土
5 暗茶灰色粘質土(炭化物を少量含む)

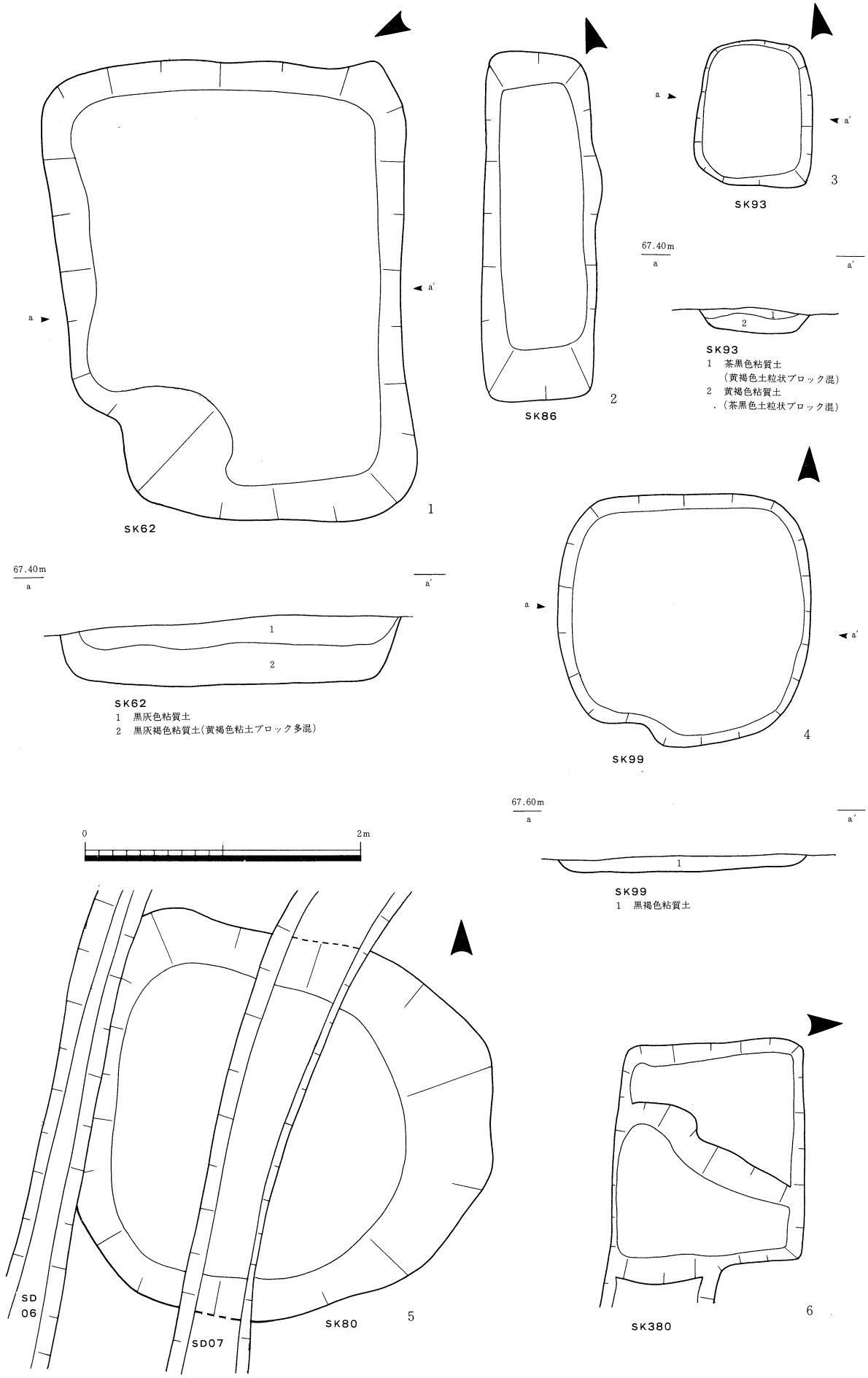
SK64
4 暗茶灰色粘質土(黄褐色粘土を少量含む)

SK91
6 暗黄灰色粘質土(黄褐色粘土が暗灰褐色粘質土に多く含まれる)
7 暗灰褐色粘質土

SK65
9 灰褐色粘質土

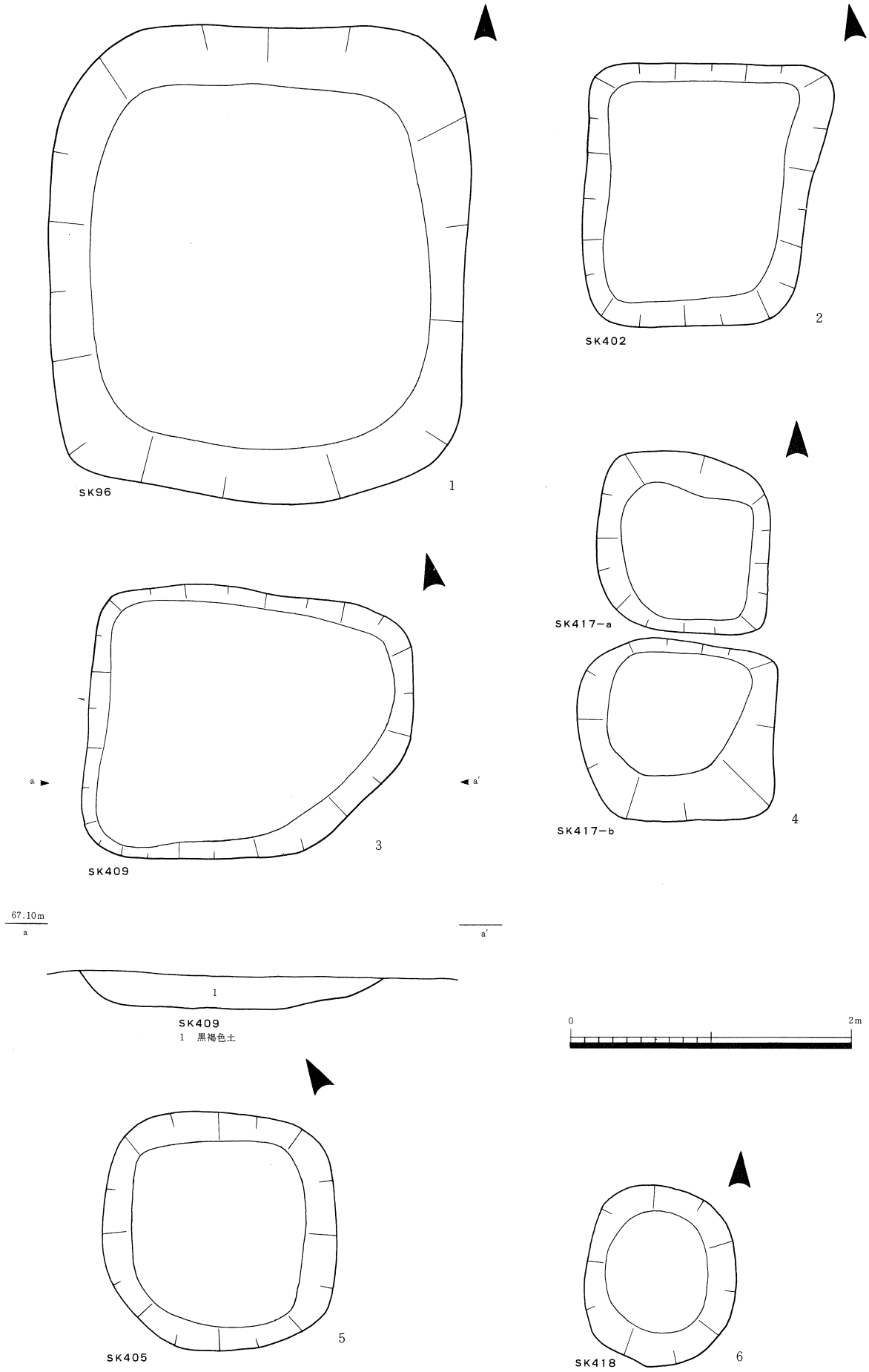
SK68
8 黒灰色粘質土(礫多量に含む)
10 暗黒灰色粘質土
11 黒灰色粘質土

第35図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図
SK64　SK65　SK66　SK68　SK91



第36図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図

1.SK62 2.SK86 3.SK93 4.SK99 5.SK80 6.SK380



第37図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図

1.SK96 2.SK402 3.SK409 4.SK417 5.SK405 6.SK418

(2) 遺　物

中世の遺構から出土した遺物についても，遺構単位に報告する。

28号掘立柱建物（第38図，図版51）

236は柱状高台の中世土師器で12世紀前葉～中葉，237・238は12世紀後葉～13世紀前葉と考えられる。

4号溝（SD04，第38・39図，図版51）

239～244は古代の須恵器で，杯（239）・杯蓋（240・241）・横瓶（242）・双耳瓶（243・244）がある。245～248は同じく土師器で，椀（245・246）・有高台の皿（247）・長胴の甕（248）がある。249は土師質の管状土錘でやや細身のものである。以上の古代の遺物は8世紀代にさかのぼる横瓶を別にすれば，9世紀後半～10世紀初頭の時期と考えられる。

本遺構の主体をなす中世の遺物は，中世土師器・珠洲・八尾・常滑・中国製白磁・土師質の羽釜などがある。250～253は中世土師器の皿である。250～252は13・14世紀，253は口縁部を外反させ薄く引き出す形態から15～16世紀代と考えられる。254～269は珠洲である。255～257の壺は口縁部形態から珠洲Ⅳ期（14世紀前葉～中葉）に比定できる[注7]。擂鉢のうち258・259・261～264などもⅣ期に比定できる。口縁部を欠くが，260はⅠ期後半～Ⅱ期，266・267はⅡ～Ⅲ期と考えられる。268は壺の底部。270は八尾の甕で，口縁部を外に強く折り曲げ，端部は上方に短く曲げる。時期は14世紀代であろう。271は常滑の鉢。高台の先端はやや丸みを帯び，内面の一部に自然釉がかかる。12世紀後葉のものであろう。272・273は中国製の白磁碗。272はやや黄色味のある白磁釉がかけられるもので，口縁部に小さな玉縁を持つ。太宰府分類ではⅡ類1に分類される[注8]。273は端反りの碗の口縁部である。同じくⅤ類4に分類される。274・275は土師質の羽釜である。15世紀代とみられる中世土師器皿（253）を例外とすれば，これらの中世遺物から遺構の時期は14世紀代と考えられる。

近世の伊万里（276・277）や土製人形（278）などは撹乱による混入とみられる。

7号溝（SD07，第40図，図版52・63）

279は須恵器杯，280は須恵器壺の底部である。282～284は中世土師器で，12世紀末葉～14世紀代と考えられる。281は中国製白磁皿で，太宰府分類ではⅥ類1bに分類される。珠洲の擂鉢は285がⅠ～Ⅱ期，286はⅢ～Ⅳ期に比定できよう。287は土師質の細身管状土錘で，平安時代の可能性が高い。その他に銅銭が6枚出土している。SD08との分岐点のやや南側で，比較的狭い範囲からまとまって出土している。銭種は皇宋通寶（290・291，初鋳1038年），至和元寶（292，同1054年），嘉祐通寶（289，同1056年），熙寧元寶（293，同1068年），永楽通寶（288，同1408年）である。遺構の時期は土器類ではほぼ14世紀代に収まるが，永楽通寶の出土を考慮すると，15世紀代に下る可能性が強い。

8号溝（SD08，第40図，図版52）

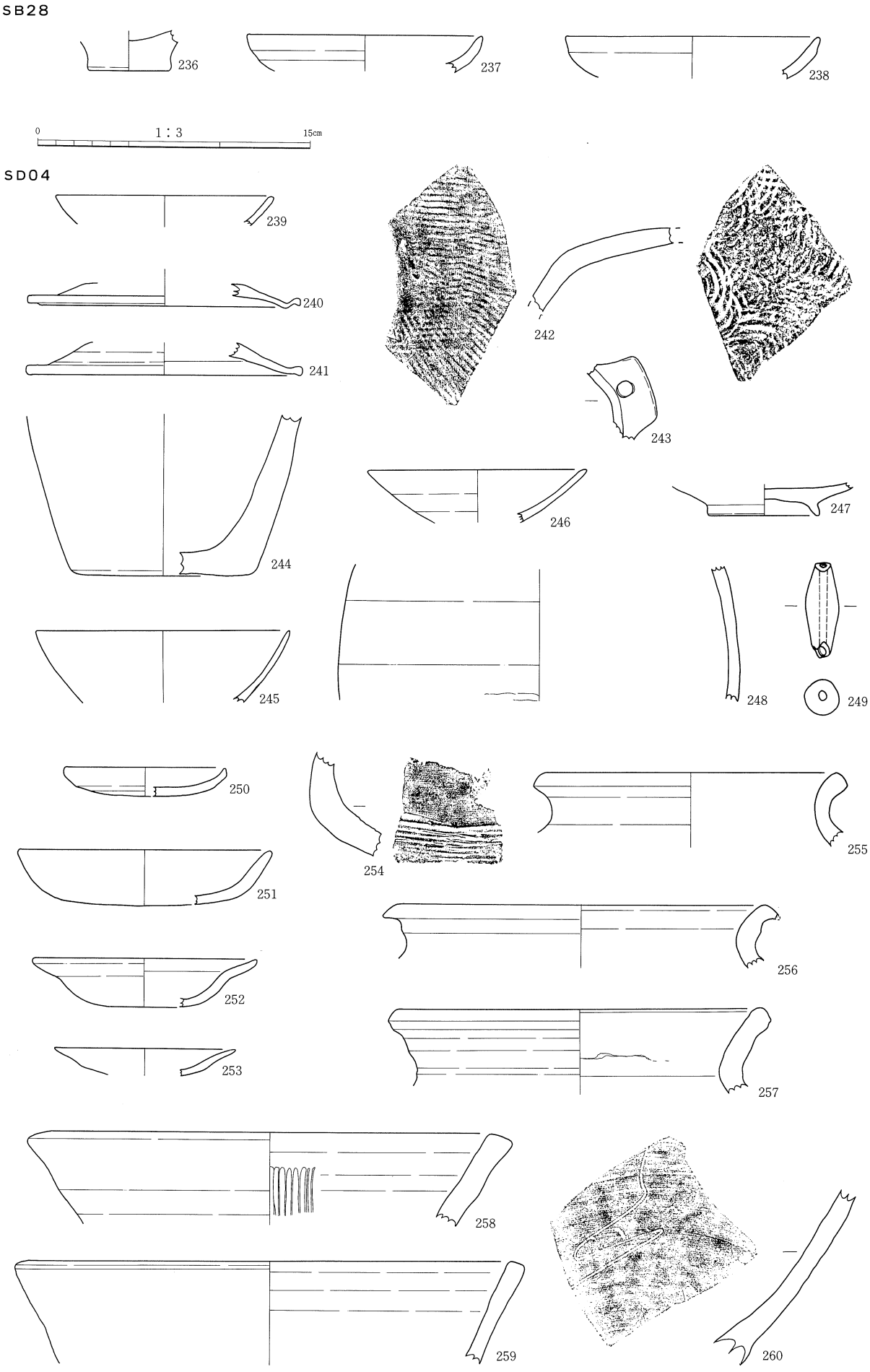
294は大ぶりの中世土師器皿。295は中国製白磁碗で，玉縁状口縁になるものである。太宰府分類ではⅣ類1に分類される。296の珠洲の壺は肩部片であるが，頸部から肩部にかけて無文帯を大きく残すもので，Ⅰ期にさかのぼる可能性が強い。出土遺物からは，12世紀後葉～13世紀前葉と考えられるが，遺構自体SD07の分流と考えると，時期は新しくなる可能性が高い。

9・11号溝（SD09・11，第40図，図版52）

それぞれ中世土師器皿（298・297）が出土している。12世紀末葉～14世紀代の時期と考えられる。

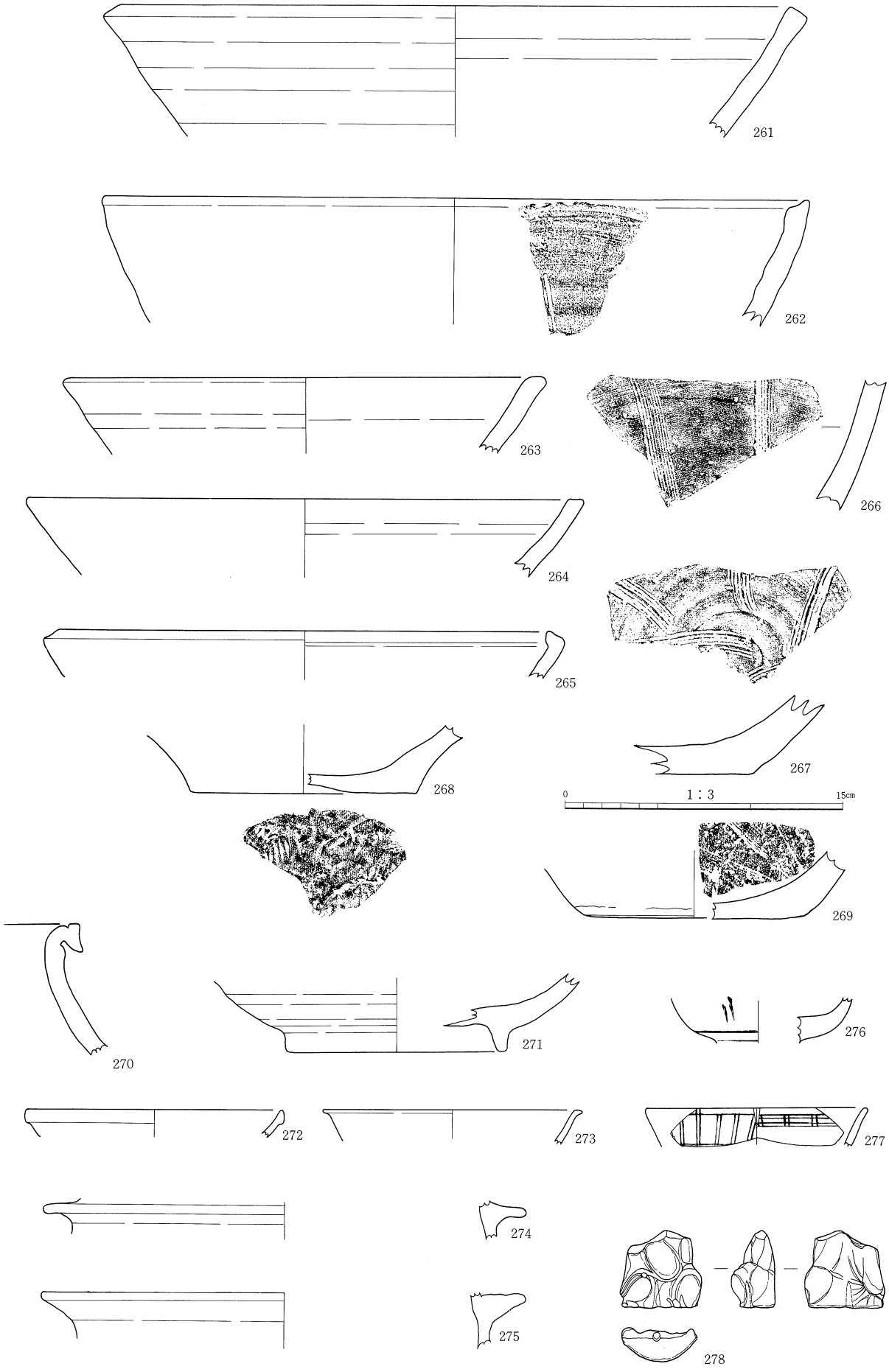
39号井戸（SE39，第40・41図，図版52・61・62）

縄文土器・中世土師器・珠洲・各種木製品が出土している。299の中世土師器はやや大ぶりで，12世紀末葉～13世紀代のものと考えられる。300は珠洲の擂鉢で，珠洲編年のⅣ期に比定できる。



第38図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図15（1/3）

SD04



第39図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図16（1/3）

木製品は円形板・加工木・柱材・箸が出土している。301は直径21.1cm，厚さ約0.7cmの円形板である。表面に細かい刃物痕のある表側から，楔が打ち込まれている。樹種はスギで柾目取り。302の加工木は一端を欠損するが，断面5.6×4.2cmの角材に貫通穴とほぞ穴をあけている。組材の一部であろうが，種類は不明。樹種はスギで二方柾。303は直径約22.5cmの柱状の丸木。一端を切断し，他端（図上側）は欠損する。切断面は，周りから芯に向かって細かなハツリを入れて，やや凸状に整形する。304～306は箸である。直径は大体0.3～0.6cmで，長さは18～21cm前後。樹種は未同定。

遺構の時期は，珠洲を手がかりにすれば，14世紀代と考えられる。

40号井戸（SE40，第41図，図版52・64）

307は須恵器瓶（おそらく双耳瓶）の口縁部である。口縁部を外反させ，端部を上に曲げる。頸部には沈線を二条めぐらす。308は泥岩質の砥石である。遺構の時期は決め手を欠くが，周囲の遺構の時期から13～14世紀代と考えられる。

41号井戸（SE41，第41図，図版52・58・60・61）

309は平安時代の土師器椀である。底部に回転糸切り痕が残る。310は最大厚1.3cm，現存幅4.3cmの櫛である。樹種はイスノキ。311・312は漆器椀・皿である。いずれも高台を欠損する。311は全体に黒漆を施し，内底面に赤色で葉文を描く。樹種はブナあるいはイヌブナ。312の皿はロクロ目がはっきり残るもので，樹種はサワグルミ。313は直径25cm，現存高19.5cmの曲物で，木釘止めした底板が付く。314は直径約22cmの円形板。片面には整形痕がはっきりとみられ，側面に木釘跡がある。樹種は不明。

60号土坑（SK60，第42図，図版52）

315～317は中世土師器皿で12世紀末葉～14世紀代のものである。318は中国製青白磁皿，319は中国製白磁碗で太宰府分類のⅡ類１にあたる。320は同じく青磁碗で，内面にヘラ描き文様がある。321～323は珠洲である。321の壺は肩部に浅い斜線を施す。322の鉢はⅡ期と考えられる。323の甕は口縁部が大きく外反するもので，口縁部内面に段がある。Ⅰ期後半のものと考えられる。324は土師質の火舎。遺構の時期は13世紀代と推定される。

61号土坑（SK61，第42図，図版52）

中世土師器皿（325）や中国製青磁（326）等が出土している。遺構の時期は13世紀代と考えられる。

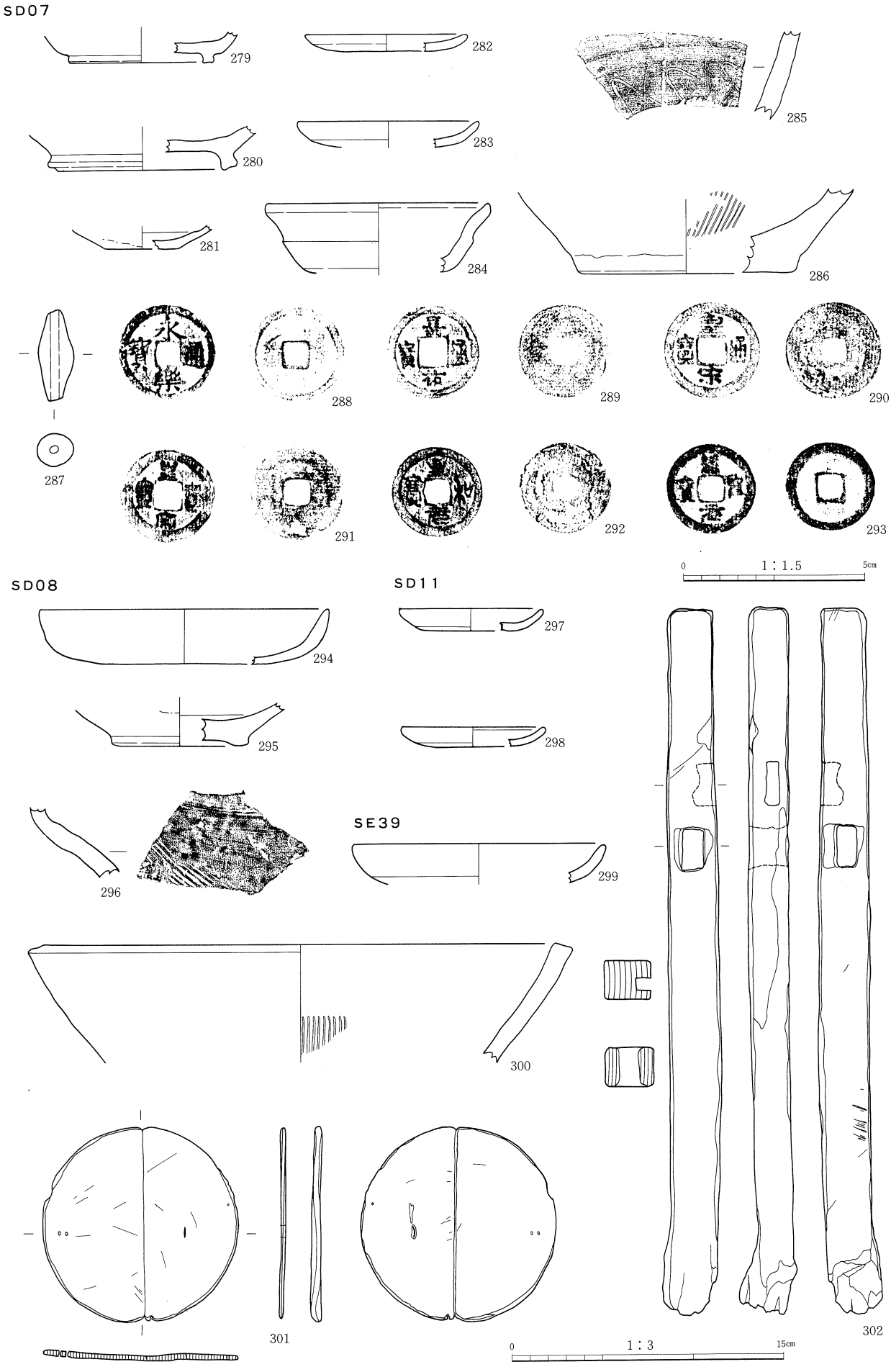
62号土坑（SK62，第42図，図版52）

中世土師器皿（327）や土師質火舎（328）等が出土している。遺構の時期は13世紀代と考えられる。

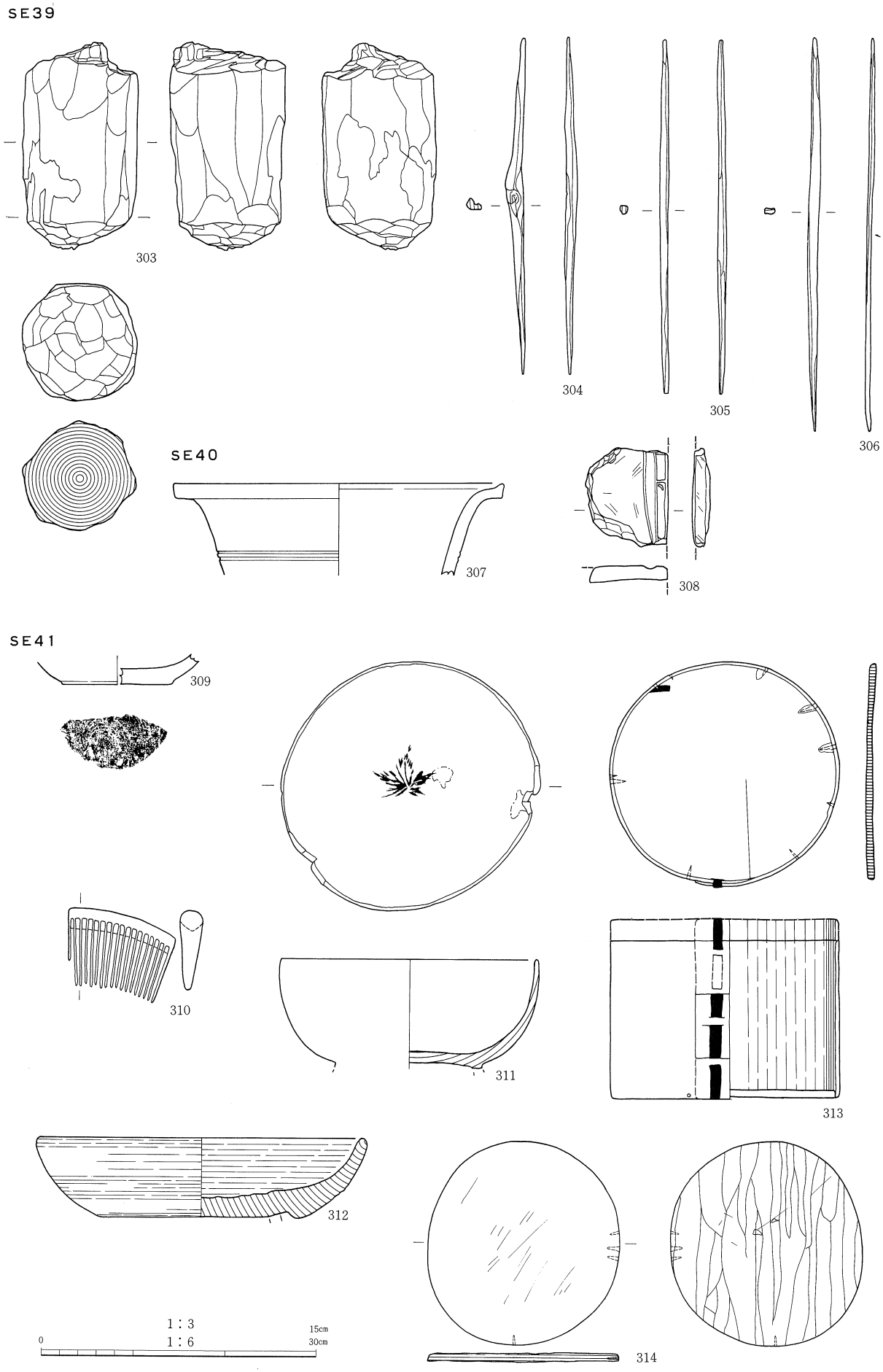
64号土坑（SK64，第42図，図版52・64）

中世土師器皿（329～334），珠洲壺（335），珠洲擂鉢（336）が出土している。中世土師器皿は12世紀末～13世紀末，珠洲の擂鉢はⅡ～Ⅲ期で，この遺構の時期も13世紀代と推定される。その他に，頭部の一部を欠損する楕円形の石硯（337），古代の土師器（338）が出土している。

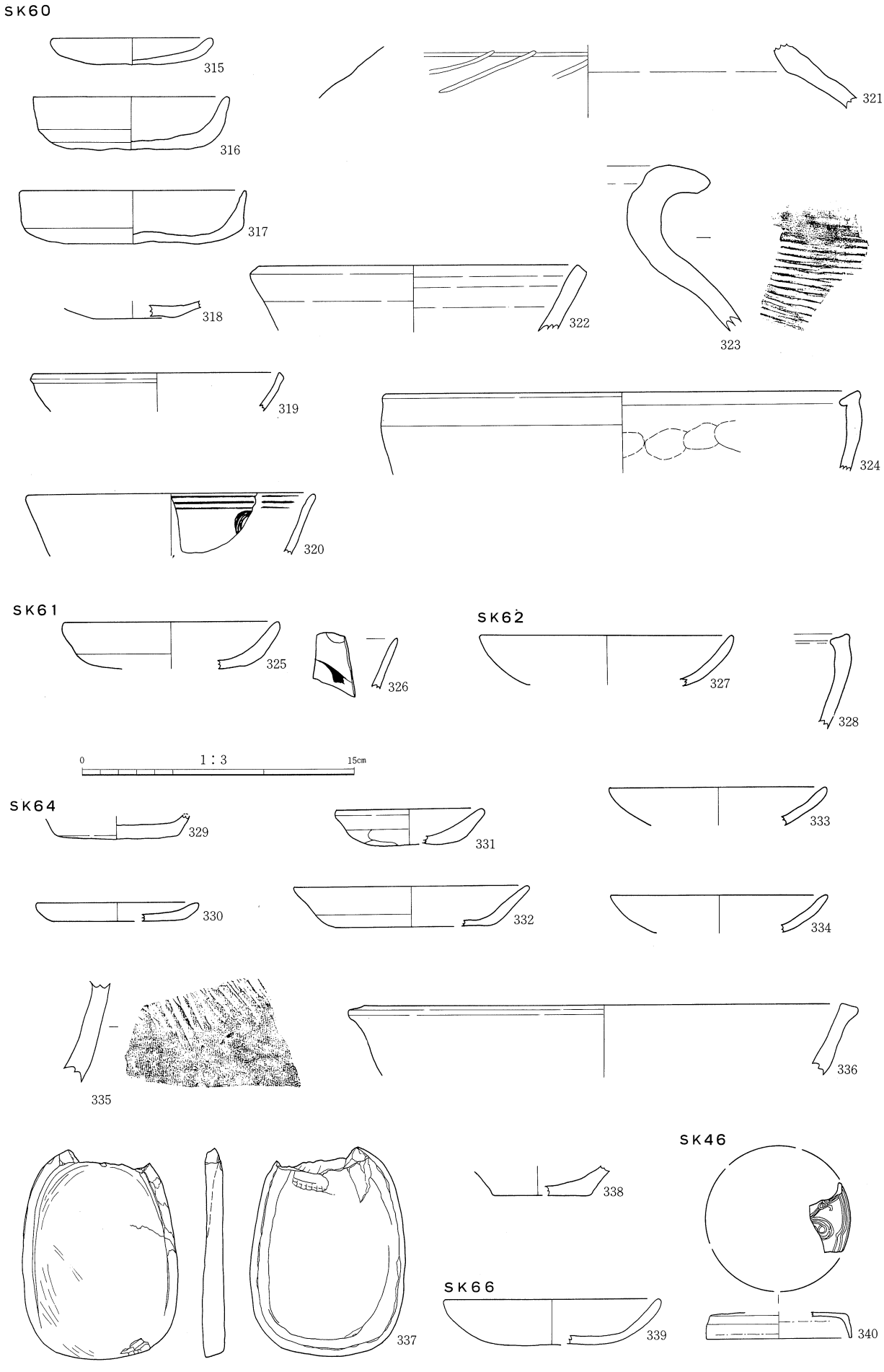
339はSK66出土の中世土師器で13世紀代。340はSK46出土の中国製青白磁合子の蓋で，上部には型押しの花文が施される。341はSK51出土の中国製白磁碗で太宰府分類のⅣ類にあたる。342・343はSK80出土。泥岩質の砥石と，Ⅳ期の珠洲擂鉢である。344はSK86出土の土師質の火舎である。345～347はSK91出土である。平安時代の高台付土師器皿もしくは椀，珠洲壺，Ⅳ期の珠洲擂鉢がある。348はSK405出土のⅢ～Ⅳ期の珠洲甕である。349はSK99出土の中世土師器皿で，12世紀末～13世紀前半のもの。350はSK415出土の平安時代の内面黒色土師器。351・352はSP122出土の中世土師器である。353はSP123出土の平安時代の土師器椀。354はSP147，355はSP157，356～358はSP182出土の中世土師器皿。359はSP182出土の珠洲擂鉢である。



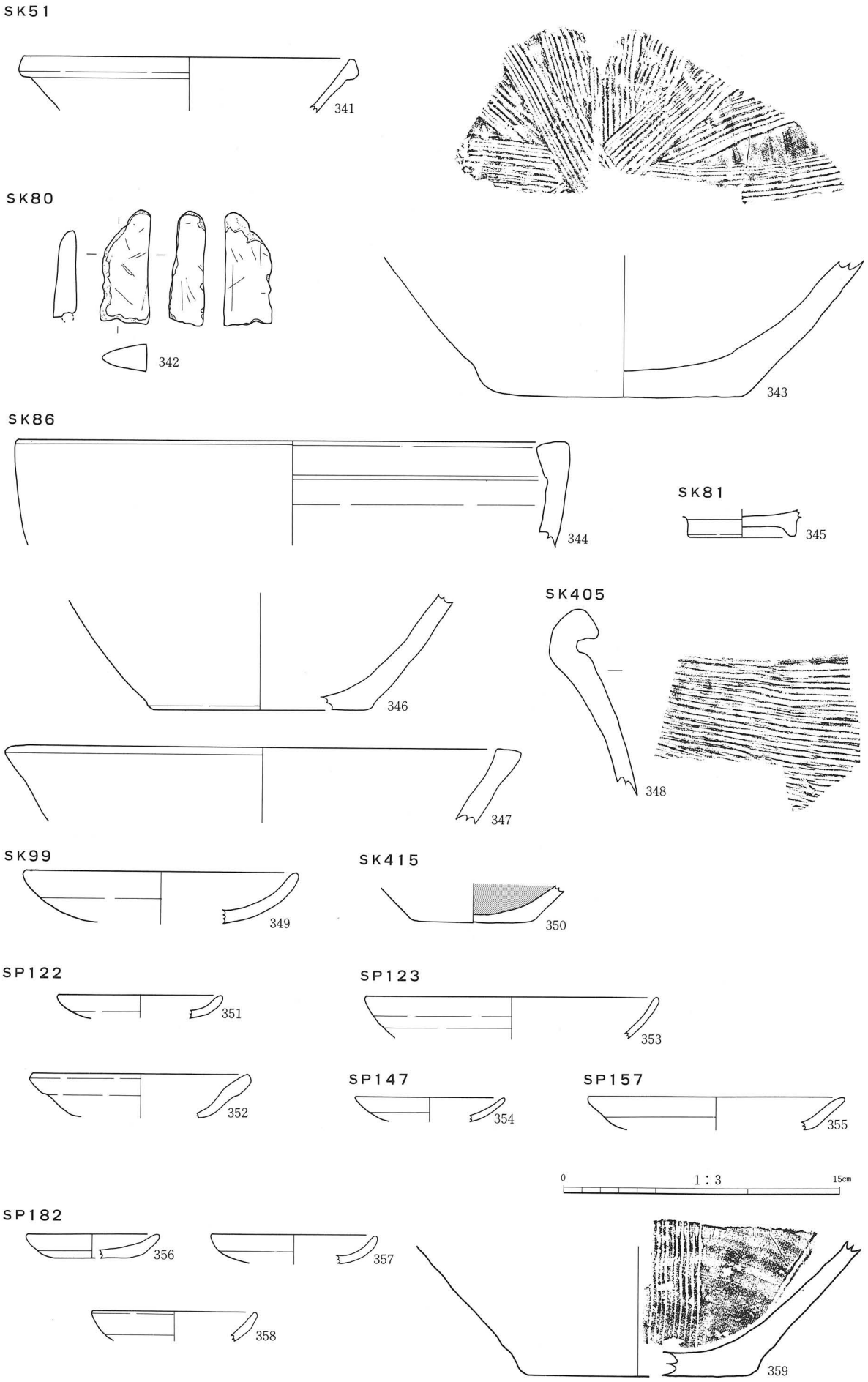
第40図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図17（279～287・294～302　1/3，288～293　2/3）



第41図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図18（304～314　1/3，303　1/6）



第42図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図19（1/3）



第43図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図20（1/3）

D 近 世

(1) 遺 構（第35・44・45図）

近世の遺構には土坑がある。土坑の中には出土遺物が全くなく，時期比定の手がかりのないものもある。遺構の分布状況等から中世の可能性があるものは前節で一部取り上げたが，ここでは近世以降の遺物の出土が目立つ遺構を報告する。

63号土坑（SK63，第44図）

南側掘立柱建物群の東側に位置する長方形の土坑。規模は南北194cm，東西100cm，深さ41cmである。出土遺物から時期は江戸時代と考えられる。

68号土坑（SK68，第35図）

南側掘立柱建物群北東側の中世土坑群中に位置する不整方形の土坑。規模は東西440cm，南北392cm，深さ27cmで，SK91より新しい。出土遺物中に近世陶磁器が2点混ざるため近世の土坑としたが，中世の遺物も多く，14世紀代にさかのぼる可能性もある。

372号土坑（SK372，第44図）

北側掘立柱建物群の西側にあるやや不整形な楕円形の土坑。底面は二段になり西側が深い。規模は東西118cm，南北72cm，深さ26cmである。出土遺物から江戸時代と考えられる。

373号土坑（SK373，第44図）

SK372の北東側にある不整形な楕円形の土坑。規模は東西90cm，南北72cm，深さ27cmである。出土遺物に近世陶器があり，時期は江戸時代と考えられる。

190号土坑（SX190）

発掘区南端部東側にある自然の大きな落ち込み。規模は全体を発掘していないので不明であるが，東西21.4m以上，南北15.4m，深さ156cmある。出土遺物から江戸時代以降に埋没したと考えられる。

この他に，時期不明の土坑としては，平面形がほぼ長方形のSK389・390・402・404，楕円形のSK397・410，不整形な楕円形のSK419・421などがある。

(2) 遺 物（第46図）

近世以降の遺構から出土した遺物は多くない。遺構ごとに簡単に触れておく。

63号土坑（SK63，第46図360，図版53）

江戸時代のものと考えられる，鉄釉を施す越中瀬戸の水滴が1点出土している。

68号土坑（SK68，第46図361～366，図版53）

361は平安時代の土師器甕。362は白磁壺の底部で高台・下底面は無釉。363は珠洲の擂鉢でⅣ期のものである。364は越前もしくは八尾の甕の底部。365は口縁部が受け口状になる灰釉の陶器鉢で，越中丸山焼の可能性がある。366は伊万里染付碗で19世紀代のものである。

372号土坑（SK372，第46図367，図版53）

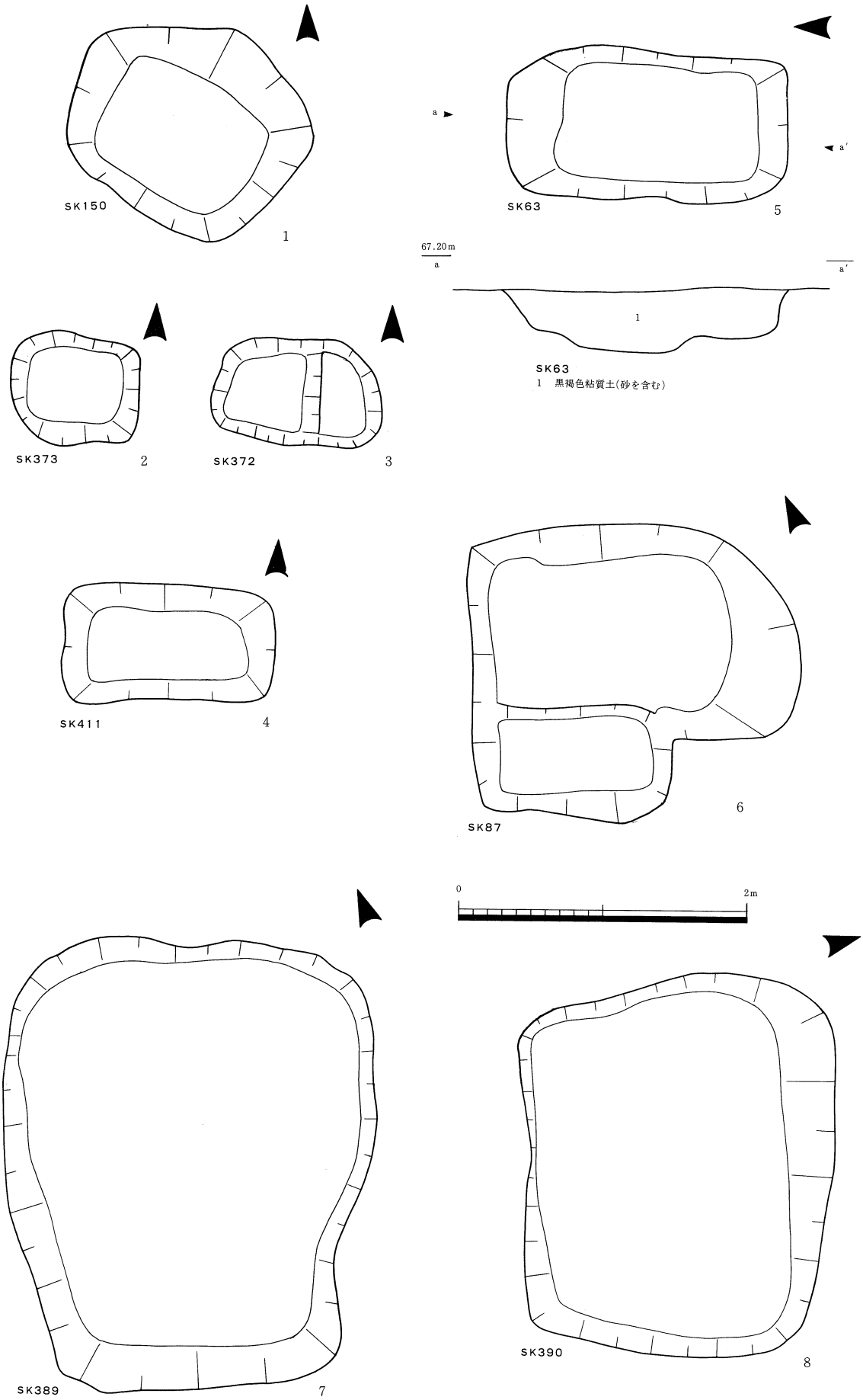
外面に鉄釉，内面に灰釉を掛ける陶器鉢。底部高台内側を深く削り込むもので，越中丸山焼と推定。

380号土坑（SK380，第46図368，図版53）

内外面鉄釉の陶器甕。肥厚する口縁部上面は無釉で目跡が残る。江戸時代のものと考えられる。

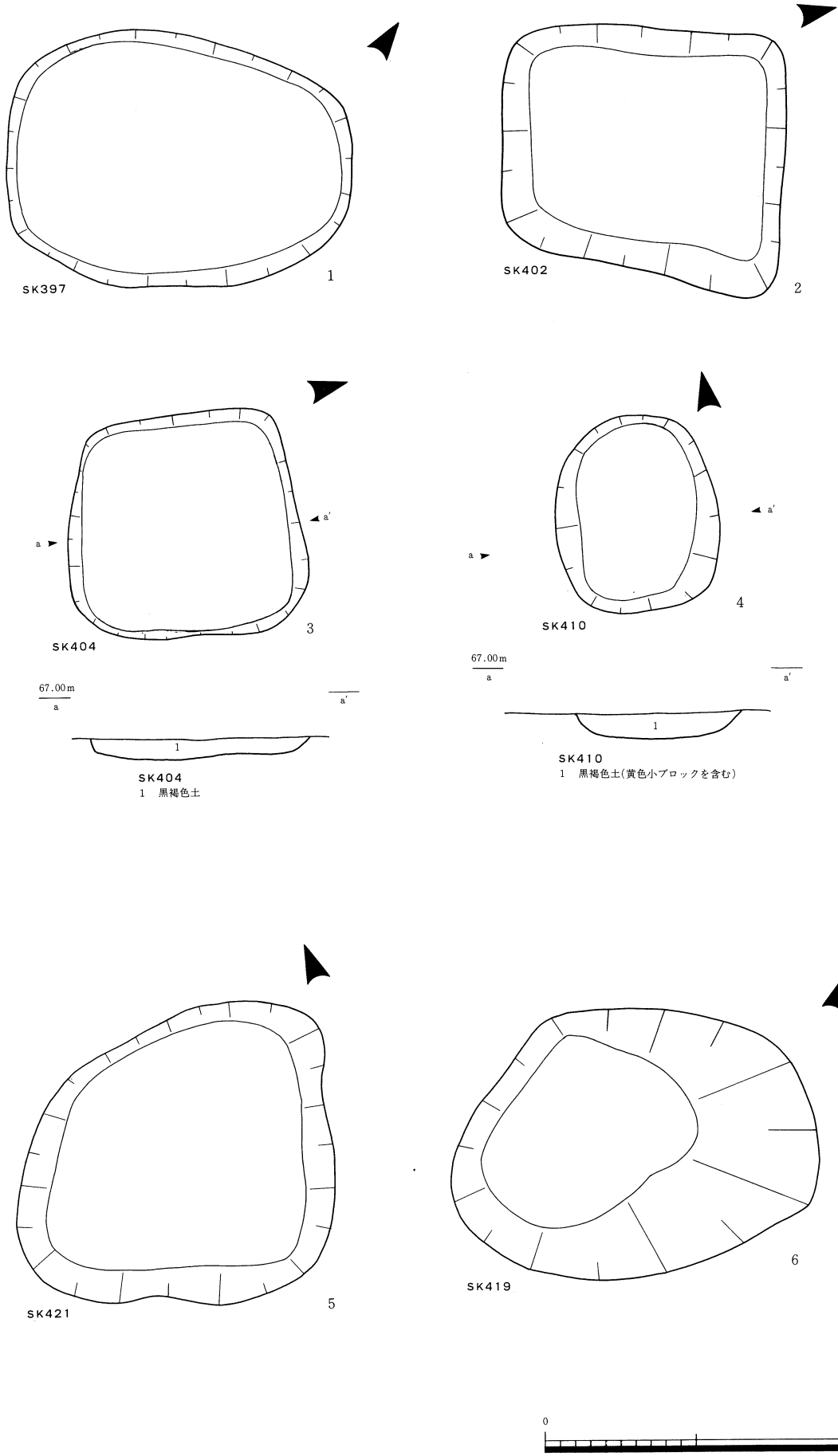
190号土坑（SX190，第46図370～375，図版53・58・59）

370は伊万里の青磁火入れ。内面は無釉で砂が付着。371は陶器の椀で内外面に灰釉を施し，底部高台は露胎。産地不明。372は漆器椀。373・374は連歯下駄である。樹種はハンノキ属とヤシャブシ。前者は後歯が後壺の前にある特殊な形態である。375は土製の人形。

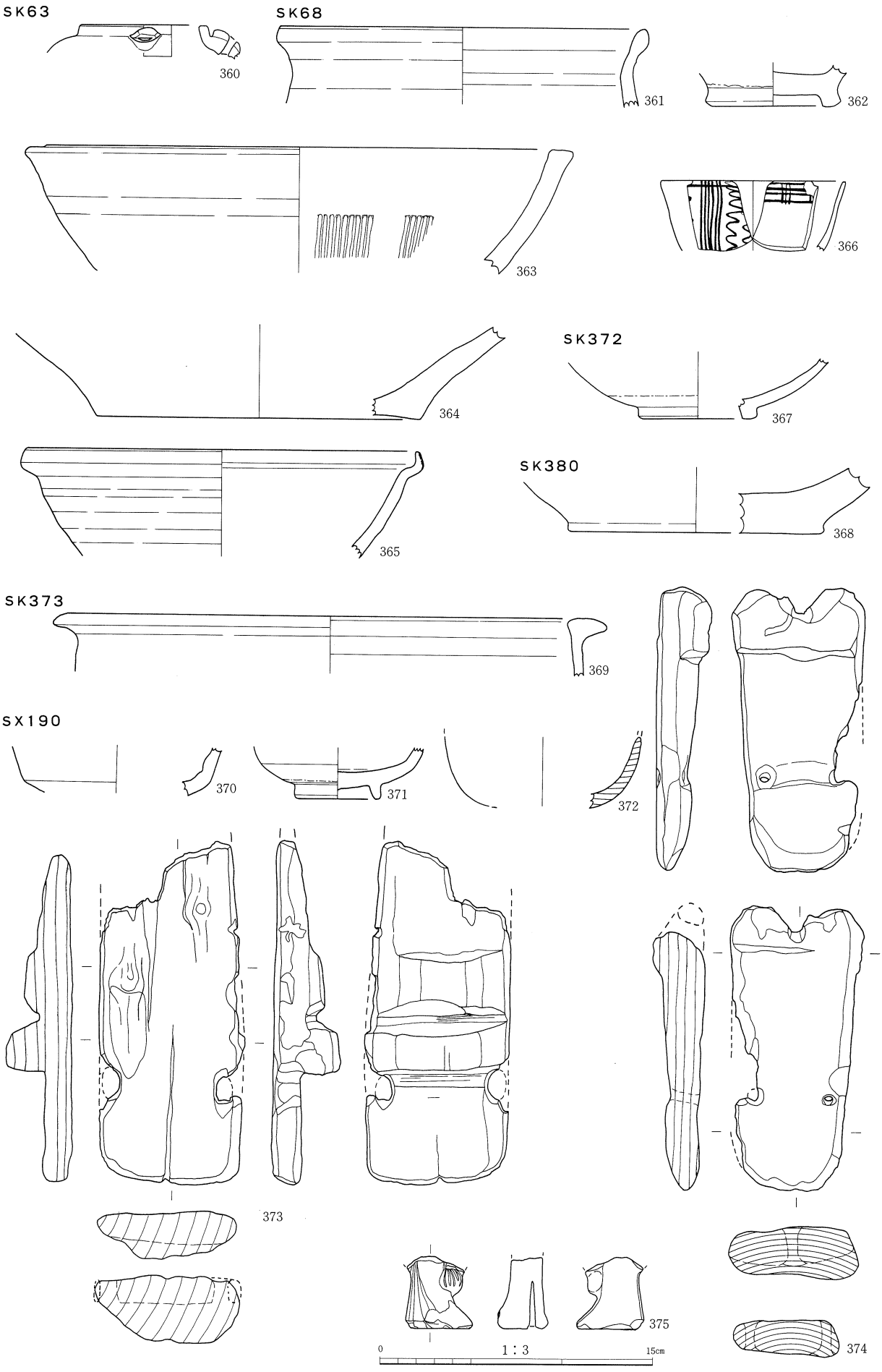


第44図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図

1.SK150　2.SK373　3.SK372　4.SK411　5.SK63　6.SK87　7.SK389　8.SK390



第45図　梅原加賀坊遺跡　遺構実測図
1.SK397 2.SK402 3.SK404 4.SK410 5.SK421 6.SK419



第46図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図21（1/3）

E　古代から近代のその他の遺物

包含層やその他の遺構から出土した奈良・平安時代以降の遺物をまとめて時期ごとに概略を述べる。

(1)　奈良・平安時代（第47図，図版54）

須恵器（376～390）　高台杯（379・380），無台杯（377・378），皿（381），壺瓶類（382～389），平瓶（390）がある。壺瓶類の中には双耳瓶になるものが多いと推定される。389は双耳瓶の耳部分である。大部分は平安時代前期9世紀代にほぼ含まれると考えられるが，平瓶は奈良時代である。

土師器（391～399）　椀（391～396），壺（397），甕（398），鉢（399）がある。椀は底部回転糸切り痕が残る。397は土師質の壺の底部で，類例の少ないものである。398は長胴型の甕。399は口縁部がわずかに内湾する器形の鉢になろう。椀・甕については9世紀代のものと考えられる。

(2)　中世（第48・49図，図版54～56）

中世土師器（400～412）　小破片が多く製作技法が不明確なものが多いが，柱状高台の1点（400）を別にすれば，ほとんどが非ロクロ整形の皿である。口径に大小あり，口縁部が直線的に外に開くものと，途中で折れて外反するもの（411・412）がある。

中国製磁器（413～421）　外面斜沈線の白磁碗（413），鎬蓮弁文青磁碗（417），青白磁皿（419），同安窯系青磁皿（418・420），白磁碗（414～415），青磁碗（416），白磁瓶類（421）がある。

珠洲（425～427・429～445）　器種は甕（425～427），壺（429～433），擂鉢（434～445）がある。珠洲編年Ⅰ期（425・434），Ⅱ期（433・435・436・438・439），Ⅱ～Ⅲ期（429），Ⅲ期（426・442），Ⅲ～Ⅳ期（431・432・440），Ⅳ期（437・441・443～445）に比定できよう。

その他（422～424・428）　瀬戸美濃の灰釉大皿（422），土師質のミニチュア（423），土師質の羽釜（424），八尾の甕（428）などがある。

(3)　近世（第50図，図版56・57）

越中瀬戸（446・447）　446は鉄釉の椀である。底部・高台を削りだし，釉は灰褐色を呈する。高台脇を面取りするので天目形になるかもしれない。447は灰釉皿である。内底面・底部は無釉。

唐津（448・449）　448は鉄絵灰釉の皿。外面の釉は口縁部付近のみ掛かる。内面には胎土目があり16世紀末～17世紀初頭の時期。449は刷毛目唐津の大鉢の底部。17世紀後半～18世紀のもの。

伊万里（453～459）　コンニャク印判の碗（453），染付筒形碗（454），内底面蛇の目釉剝ぎの皿（455），白磁小杯（456），ミニチュア？（457），紅皿（458），青磁瓶（459）などがある。

瀬戸美濃（460～464）　いずれも瀬戸美濃産と考えられる磁器である。染付碗（460～462），皿（463），染付仏飯器（464）などがあり，19世紀～明治時代のものである。

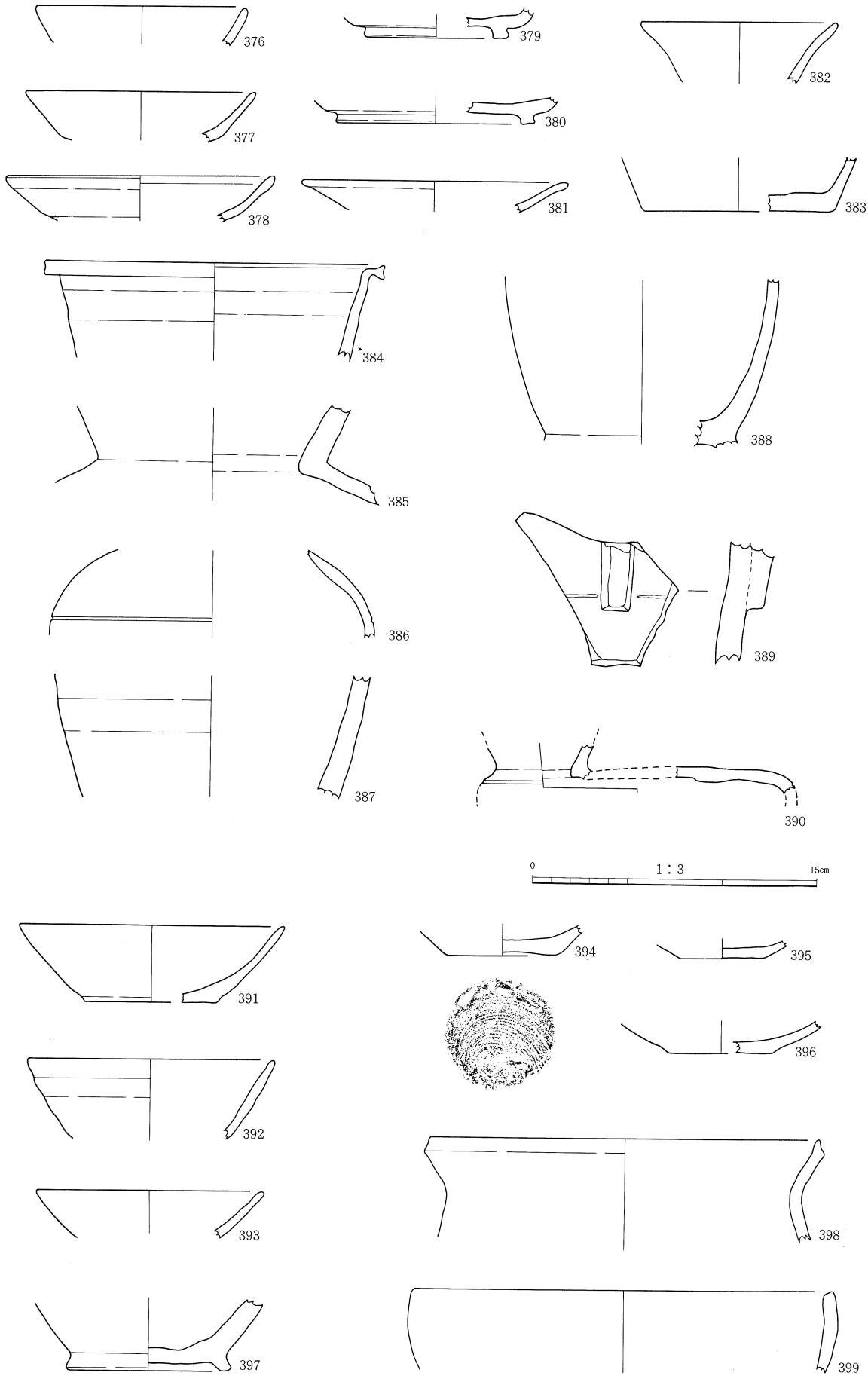
その他（450～467）　450は鉄釉の鉢。内底面に目跡が残り，外底面は露胎となる。底面には墨書がある。451・452は鉄釉擂鉢である。451は唐津の可能性がある。465は越中丸山焼の灰釉皿。466は長石釉の陶器椀，467は鉄釉の土瓶であるが産地不明。

(4)　木製品・その他（第51図，図版58～61・63・64）

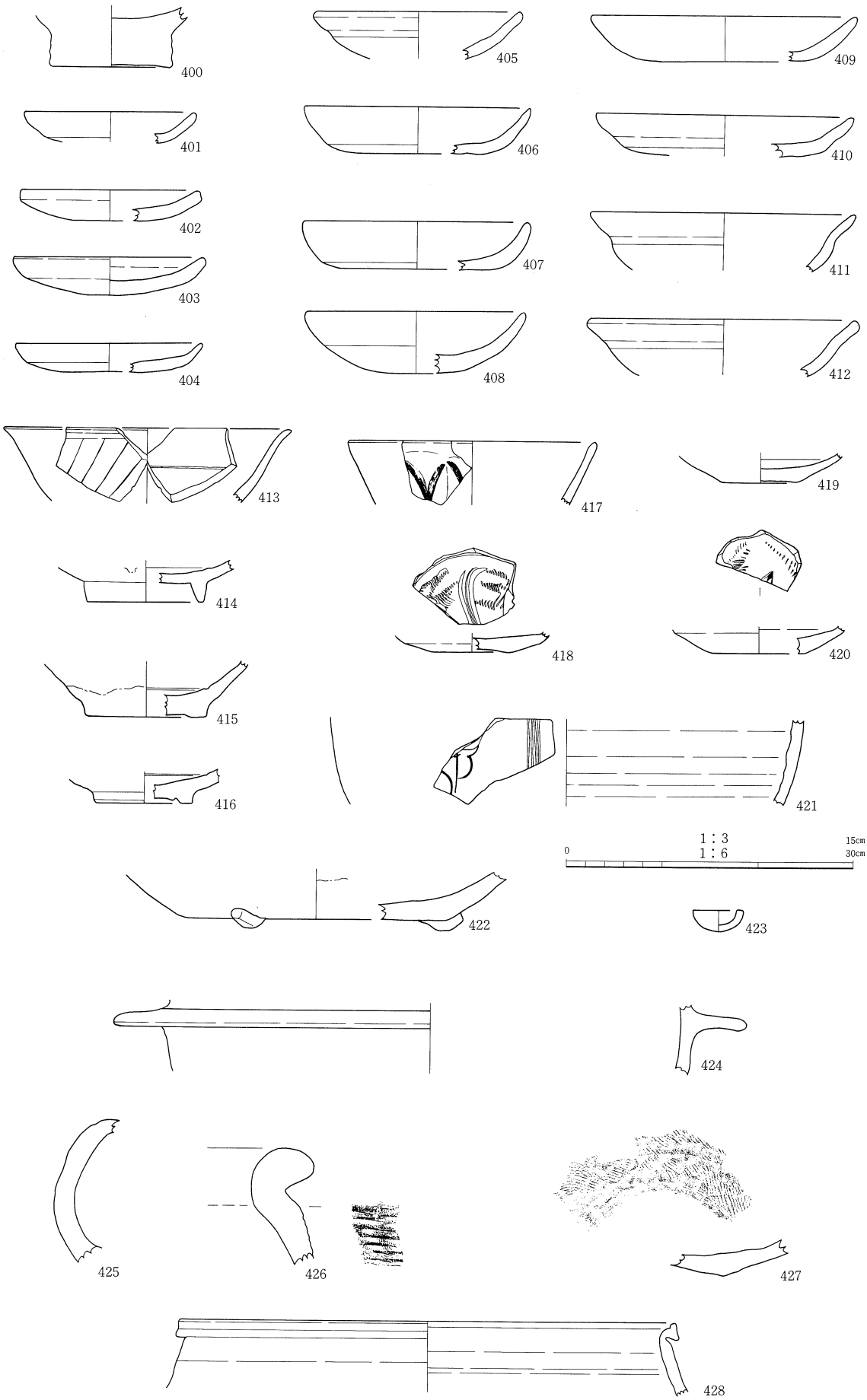
木製品（468～471・474）　漆器椀（468），提灯の一部（469），杓子形木器（470），刳物匙（471），下駄（474）が出土している。474は台裏に溝を切り，歯を差し込む構造下駄で，ホゾ穴のないいわゆる陰卯下駄である。樹種はイイギリ。

金属製品（472・473・475）　鉄製のつる状製品（475）の他，銭貨ではSP422から錆着した一塊（472）と包含層から寛永通宝（473）が出土している。

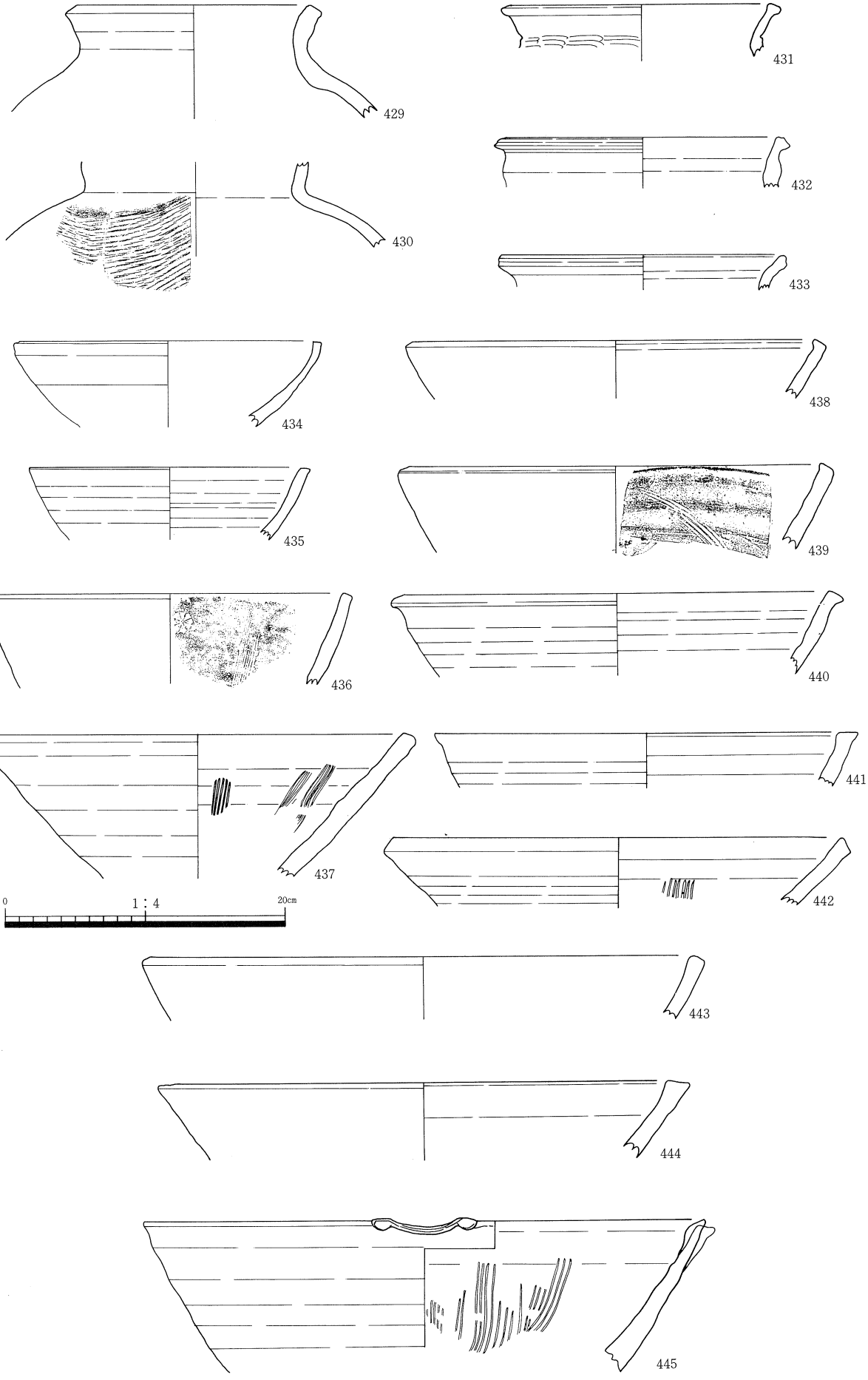
石製品（476～478）　泥岩製（476・478）と凝灰岩製（477）の砥石が出土している。



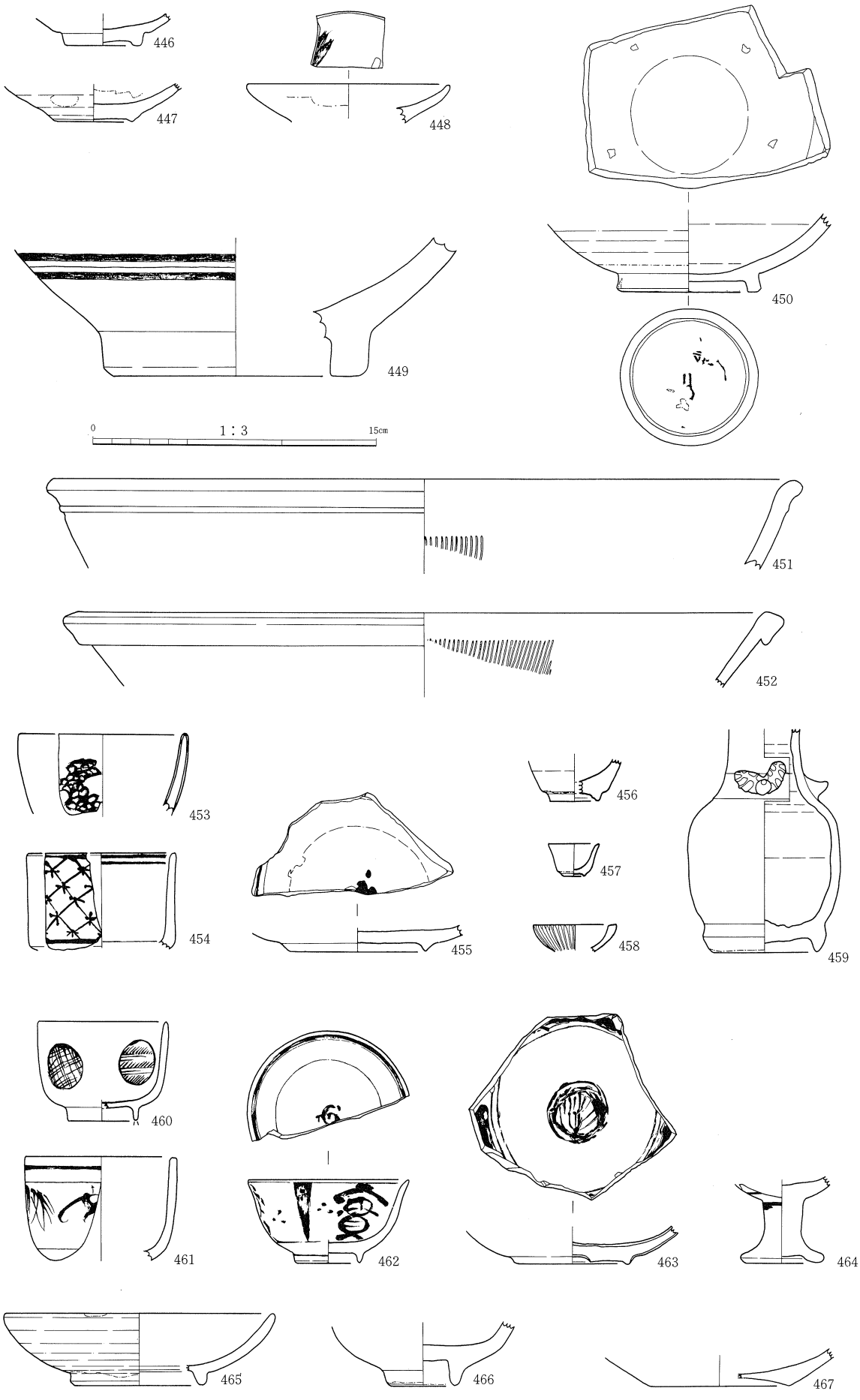
第47図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図22（1/3）



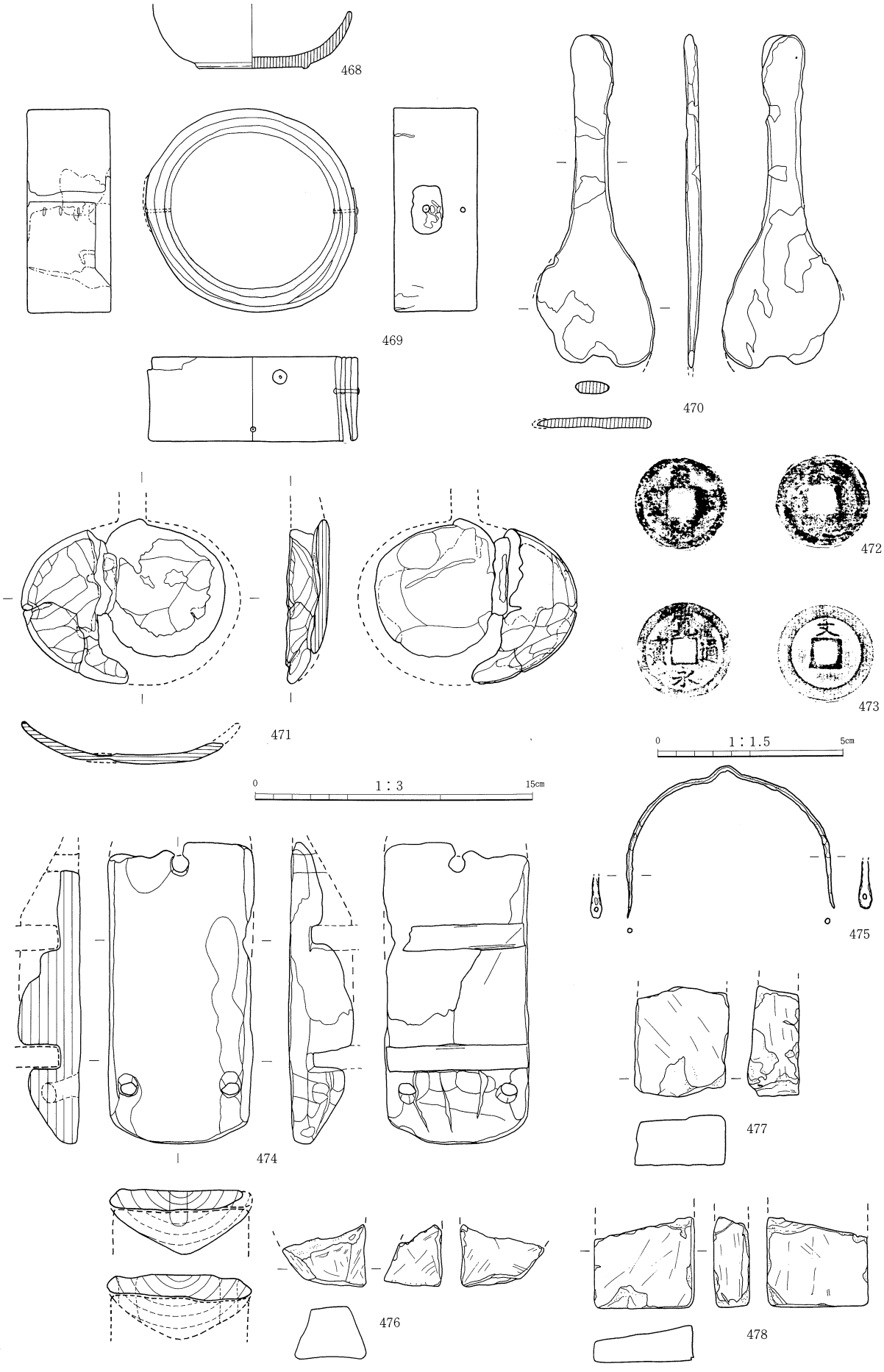
第48図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図23（400～426　1/3，427・428　1/6）



第49図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図24（1/4）



第50図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図25（1/3）



第51図　梅原加賀坊遺跡　遺物実測図26（468～471，474～478　1/3，472・473　2/3）

3　ま　と　め

前節までに述べた内容とそれぞれの調査の成果を，時代ごとに簡単にとりまとめてしめくくりとしたい。

A　縄文時代

縄文時代の遺構は，蛇行して北流する自然の川跡１条とこれに付随する小溝２条が発見された。また川跡に近接して埋甕１基が発見された。川跡の埋没時期は晩期中葉，埋甕は後期末葉～晩期初頭である。奈良時代以降の遺跡の立地により，縄文時代の遺構が削平・破壊された可能性があり，遺構の数は少ない。縄文時代の土器・石器は，川跡内とその周辺から比較的まとまって出土しており，復元できる個体もいくつかある。時期的には，ごく僅かの縄文時代中期土器の細片を別にすれば，大部分が後期後葉井口式から晩期中葉中屋式の範疇に含まれる。

遺構の分布や遺物の内容から遺跡の性格を明らかにするには資料が乏しすぎるが，おそらく小規模な集落が存在し，その主体的な分布域は調査区外にあると考えられる。土器型式については時期幅があり，継続的に生活が営まれたとみられる。大井川を望む低位段丘上には縄文時代後期前葉から，小集落がいくつも形成されはじめることが，これまでの調査で明らかにされており[注9]，これらと連動する集落展開とみることができる。

B　奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は，溝が３条発見されている。遺物は遺構内や包含層から須恵器・土師器がある程度の量が出土している。破片中心で，一般的な集落跡でみられるものである。時期的には９世紀後半～10世紀初頭と考えられ，奈良時代にさかのぼる遺物はごく僅かである。遺跡の性格は明らかでないが，調査区外に集落が分布していた可能性が高い。

C　中　世

梅原加賀坊遺跡の主体的な時代である。遺構は掘立柱建物16棟の他，柵列・溝・井戸・土坑などが発見された。遺物は中世土師器皿，珠洲，八尾，中国製磁器（白磁・青磁・青白磁），羽釜，木製品（漆器椀・櫛・曲物・箸等），銭貨，石硯，砥石などが出土している。

掘立柱建物群は約100ｍの間隔をあけて，大きく北群と南群に分けられる。北群は分布状況からさらに３群に区分できるので，これを北から順に北１群，北２群，北３群としておく（付図参照）。北１群は２間×２間・３間×２間等の小規模なものが多く，重なりから最低２時期に時期区分できる。このグループは他の掘立柱建物に比べ建物軸が東に振れる。北２群は７間×３間の大規模建物を中心に，中・小規模建物からなり，３時期以上に時期区分できる。北３群は３面廂付きの中規模建物が１棟単独に建つ。建物軸は北２群に大体一致しており，時期的に平行関係にあると推定される。

掘立柱建物北群は７間×３間の建物を中心に，少し離れて分布する合計３群の掘立柱建物群からなり，これらを区画するような溝等は発見されていない。また後述する掘立柱建物南群の様に井戸や土坑等の付属施設的な遺構も少ない。そのためもあって全体に出土遺物が少なく，時期的な手がかりに乏しい。あえて時期比定するなら，中世前期13～14世紀と幅をもたせて考えておくしかない。

掘立柱建物群の南群は復原した６棟の他にも柱穴状の小ピットが多くあり，建物の棟数はさらに増える可能性が高い。この群は建物群が比較的近接密集しており，明瞭な分離はできないが，SB27・28とSB26の中間には東西方向の柵列が集中しており，これを境に北から南１群，南２群と２群に分けることができるかもしれない。南１群は４間×３間の中規模建物をはじめ，３棟以上からなり，建物の重なりから２時期以上に時期区分できる。また南２群は３間×２間，２間×２間の小規模建物か

らなり，これも２時期以上に時期区分できる。掘立柱建物南群もこれを区画する明瞭な溝はない。わずかに調査区南端部から伸びて掘立柱建物群の東側で，さらに東側にふくらんで北流する小溝SD04・05が掘立柱建物群域の東側境界を示す可能性がある。この小溝はSB28廃絶後（おそらく集落廃絶後）15世紀以降SD06・07に流路を変えて直線的に北流するようになる。

掘立柱建物南群の時期も出土遺物が少ないが，北群と同様13～14世紀と幅を持たせておきたい。南１群の北東側には，掘立柱建物群と関連すると思われる土坑群や井戸が比較的集中する。これらの遺構群については遺物の説明でも触れたように，14世紀代と考えられるものが多い。

梅原加賀坊遺跡の掘立柱建物は，上述のように，明確な区画溝は発見されなかったが，分布状況から２大群５小群の単位に分けられる。それぞれ２ないし３時期にわたって建て替えられている場合が多く，集落の存続期間はおそらく50～100年以内であったろうと推定される。出土遺物が少なく，明言できないが，北群と南群は同時期かあるいは一部平行するように存続したとみられ，それぞれの存続年代は，13世紀から14世紀にかけての時期と考えておきたい。遺跡の一部のみの発掘成果でまとめるのは危険な面があるが，北群と南群では建物の規模・配置や，土坑・井戸等の付属施設的な遺構の分布など若干の差があるようである。南群に比べ北群の方がやや有力な階層と推定されるが，結論は今後の周辺域の調査を待ちたい。

梅原胡摩堂遺跡における中世大集落の内容はすでに公表されたとおりであるが[注10]，このような中心的集落の周辺域にはそれをとりまくように，当遺跡で明らかにされたような小規模で比較的短期間の集落が分布しているものとみられ，中世の村落景観を復原するうえでの好資料となろう。

D　近　世

近世の遺構としては溝や土坑があり，出土遺物としては唐津，伊万里，越中瀬戸，瀬戸美濃，土製人形などがある。これらは遺跡全体からまばらに出土しており，はっきりした集中域はない。時期的には16世紀末以降各時期のものが少量ずつみられる。遺構・遺物とも特にまとまりのあるものではないが，遺跡の消長を明らかにするうえで重要な資料である。　（山本正敏）

注１　小島俊彰 1974 「北陸の縄文時代中期の編年」大境第５号 富山考古学会
注２　小島俊彰 1967 「東砺波郡井口遺跡出土遺物の紹介」大境第２号 富山考古学会
注３　高堀勝喜編 1983 『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会
注４　富山県立高岡工芸高等学校地理歴史クラブ編 1967 『勝木原遺跡Ⅰ』
注５　小島俊彰・西野秀和・酒井重洋 1994 「北陸の土器編年－後期後半－晩期中葉」『縄紋晩期前葉－中葉の広域編年』
注６　佐原　眞 1994 『斧の文化史』東京大学出版
注７　珠洲の編年については下記文献を参考にした。
　　吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
注８　横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」九州歴史資料館研究論集４
　　山本信夫 1988 「北宋期貿易陶磁器の編年－太宰府出土例を中心として－」貿易陶磁研究№８
注９　梅原安丸Ⅱ遺跡（斉藤　隆・岡本淳一郎・島田修一 1992 『富山県福光町梅原安丸遺跡群Ⅱ』富山県福光町教育委員会）・梅原落戸遺跡（久々忠義・境　洋子・島田修一・河西健二 1995 『富山県福光町梅原落戸遺跡群Ⅱ』福光町教育委員会）などがある。
注10　宮田進一・島田美佐子・中川道子・河西健二 1994 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ－』財団法人富山県文化振興財団

第4表　梅原加賀坊遺跡　掘立柱建物一覧

挿図	図版	遺構番号	地区	桁行柱間	梁行柱間	桁行長			梁行長			平面積(㎡)	桁行柱間 cm(尺)	梁行柱間 cm(尺)	棟方向	方位	柱形式	備考	時期
						cm	尺	平均cm	cm	尺	平均cm								
20		SB25	B1	2	2	528	17.6	264	452	15.1	226	24	264(8.8), 264(8.8)	226(7.5),226(7.5)	南北	N-11°-E	総柱		13～14C
21	32	SB26	B1	3	2	720	24	240	600	20	300	43	224(7.5), 256(8.5), 240(8)	300(10),300(10)	東西	N-79°-W	総柱		13～14C
22	32	SB27	B1	3	(1)	732	24.4	244	(256)	8.5	(256)	(19)	252(8.4), 252(8.4), 228(7.6)	256(8.5)	南北	N-10°-E	総柱	西側に伸びる可能性大	13～14C
23		SB28	B1	4	3	920	30.7	230	804	26.8	268	75	220(7.3), 240(8), 240(8), 220(7.3)	264(8.8),276(9.2),264(8.8)	東西	N-78°-W	総柱		13～14C
25	30	SB30	AE	3	3	736	24.5	245	708	23.6	236	52	248(8.3), 248(8.3), 240(8)	236(7.9),232(7.7),240(8)	南北	N-6°-E	総柱		13～14C
26	30	SB31	AE	7	(3)	1652	55.1	236	(676)	22.5	(225)	(112)	224(7.5),236(7.9),240(8),240(8), 244(8.1), 236(7.9), 232(7.7)	228(7.6),224(7.5),224(7.5)	南北	N-5°-E	総柱		13～14C
27	30	SB32	AE	4	(1)	960	32	240	(212)	7.4	(212)	(20)	240(8), 240(8), 240(8), 240(8)	212(7.4)	南北	N-3°-E	総柱	東側に伸びる可能性大	13～14C
27	30	SB33	AE	3	2	720	24	240	600	20	300	43	240(8), 240(8), 240(8)	240(8), 240(8)	南北	N-4°-E	総柱		13～14C
28		SB34	AE	3	2	676	22.5	225	536	17.9	268	36	236(7.9), 224(7.5), 212(7.1)	276(9.2), 260(8.7)	東西	N-76°-W	総柱		13～14C
29		SB35	AE	2	2	512	17.1	256	436	14.5	218	22	244(8.1), 268(8.9)	220(7.3), 216(7.2)	南北	N-19°-E	側柱		13～14C
28		SB36	AW	3	2	832	27.7	277	484	16.1	242	40	288(9.6), 268(8.9), 276(9.2)	244(8.1), 240(8)	南北	N-16°-E	総柱		13～14C
30	37	SB37	AW	5	3	1284	42.8	257	720	24	240	96	212 (7.1), 292 (9.7), 280 (9.3), 288(9.6), 212(7.1)	200(6.7),252(8.4),268(8.9)	南北	N-5°-E	総柱		13～14C
25	38	SB38	AE	3	2	872	29.1	291	504	16.8	252	44	280(9.3), 316(10.5), 276(9.2)	248(8.3), 256(8.5)	南北	N-8°-E	総柱		13～14C
29		SB95	AE	2	(2)	520	17.3	260	(420)	14	(210)	(22)	272(9.1), 248(8.3)	204(6.8), 216(7.2)	南北	N-21°-E	総柱	東側に伸びる可能性大	13～14C
21		SB97	B1	3	2	720	24	240	600	20	300	43	220(7.3), 240(8), 260(8.7)	300(10), 300(10)	東西	N-81°-W	総柱		13～14C
23		SB98	B1	3	(2)	708	23.6	236	(440)	14.7	(220)	(31)	252(8.4), 260(8.7), 196(6.5)	180(6), 220(7.3)	南北	N-9°-E	総柱	西側に伸びる可能性大	13～14C

第5表　梅原加賀坊遺跡　柵列一覧

挿図	図版	遺構番号	地区	間数	全長			柱間寸法 cm(尺) (東もしくは南から)	方向	方位	備考	時期
					cm	尺	平均cm					
27		SA432	AE	3	812	27.1	271	248(8.3), 312(10.4), 252(8.4)	南北	N-2°-E		13～14C
27		SA433	AE	2	500	16.7	250	220(7.3), 280(9.3)	南北	N-5°-E	掘立柱建物の一部か	13～14C
22		SA434	B1	3	672	22.4	224	208(6.9), 224(7.5), 240(8)	南北	N-6°-E		13～14C
22		SA435	B1	2	448	14.9	224	220(7.3), 228(7.6)	南北	N-7°-E	掘立柱建物の一部か	13～14C
20	32	SA436	B1	2	884	29.5	442	396(13.2), 488(16.3)	東西	N-81°-W		13～14C
20	32	SA437	B1	4	920	30.7	230	212(7.1), 252(8.4), 232(7.7), 224(7.5)	東西	N-79°-W		13～14C
20	32	SA438	B1	2	448	14.9	224	228(7.6), 220(7.3)	東西	N-79°-W		13～14C
20	32	SA439	B1	4	904	30.1	226	232(7.7), 248(8.3), 240(8), 184(6.1)	東西	N-80°-W		13～14C
20	32	SA440	B1	4	920	30.7	230	232(7.7), 240(8), 240(8), 208(6.9)	東西	N-79°-W		13～14C

第6表　梅原加賀坊遺跡　溝一覧

挿　図	図　版	遺構番号	地　区	流　路	規模：幅cm	規模：深さcm	出　土　遺　物	備　考	時　期
5	28	SD01	AE·BN·B1·B1N	南→北	570～920	56～96	縄文土器・縄文石器・須恵器·中世土師器·珠洲·近世陶器		縄文時代晩期
5		SD02	BN·B1N	南→北	80～272	14～30	縄文土器		縄文時代晩期
5		SD03	BN	南→北	44～ 92	8～22	縄文土器		縄文時代晩期
31・32	33	SD04	BN·B1N·B2	南→北	52～ 86	10～15	縄文土器・土師器・須恵器・中世土師器・八尾・珠洲・中国製白磁・中国製青白磁・土師質土器・伊万里・土製人形・土錘		14C
31		SD05	B1·B1N	南→北	36～ 84	2～11	中世土師器・珠洲・越前		14C
31・32	33	SD06	B1·B2	南→北	24～ 52	3～ 8	縄文土器・土師器・中世土師器・珠洲・越中瀬戸・伊万里・陶器		14C？
31・32	33	SD07	B1·B2	南→北	80～166	7～21	須恵器・土師器・中世土師器・珠洲・中国製白磁・中国製青白磁・陶器・土錘・銭貨		15C？
31		SD08	B2	南→北	38～100	10～19	縄文土器・中世土師器・珠洲・土師質土器・中国製白磁		13C～14C
31		SD09	B2	南→北	46～138	2～13	縄文土器・中世土師器		14C
31		SD10	B2	西→東？	18～ 36	5～12	縄文土器		14C？
31		SD11	B1	西→東？	108～146	7～20	縄文土器・中世土師器		14C
31		SD12	B1	西→東？	30～ 72	7～16	珠洲		14C
31	29	SD13	B1	西→東？	32～112	5～16	縄文土器・須恵器・土師器・土錘		9～10C
32	29	SD19	AW	南→北	10～100	7	縄文土器・須恵器・土師器・(陶器・磁器)		9～10C
		SD20	AW						近世以降？
		SD21	AE	東→西	90～134	10～16	須恵器・土師器・珠洲・越中瀬戸		9～10C

第7表　梅原加賀坊遺跡　井戸一覧

挿　図	図　版	遺構番号	地　区	平面形	規模：長	規模：短	規模：深	出　土　遺　物	備　考	時　期	最終レベル	湧水レベル
33	34	SE39	B1	円形	100	100	211	縄文土器・中世土師器・珠洲・円形板・柱材・加工木・箸		14C	65.31	
33		SE40	B1N	楕円方形	120	116	150	須恵器・砥石		13～14C？	65.33	
33	34	SE41	B1N	楕円形	120	110	180	土師器・中世土師器？・八尾？・漆器椀・皿・櫛・曲物		13～14C	65.06	
33	34	SE72	B1	円形	106	100	62			14C	66.20	
33	34	SE73	B1	楕円形	126	110	50			14C	66.30	
33		SE374	AW	楕円形	132	112	126			13～14C？	64.59	

第8表　梅原加賀坊遺跡　土坑等一覧

挿　図	図　版	遺構番号	地　区	平面形	規模：長	規模：短	規模：深	出　土　遺　物	備　考	時　期
34		SK46	B2	楕円形	490	212	30	須恵器・珠洲・中国製白磁・青白磁		13～14C
		SK50	B1	不整形	166	140	24			
34		SK60	B2	長方形	448	340	32	縄文土器・須恵器・中世土師器・珠洲・中国製白磁・青白磁・青磁・火舎		13C
34	36	SK61	B1	長方形	284	232	28	土師器・中世土師器・珠洲・越前or八尾・中国製青磁		13C
36	36	SK62	B1	長方形	345	248	45	縄文土器・須恵器・中世土師器・珠洲・越前or八尾・火舎？		13C
44		SK63	B1	長方形	194	100	41	越中瀬戸		近世
35		SK64	B1	長方形	326	320	37	土師器？・中世土師器・珠洲・石硯		13C
35		SK65	B1	長方形	284	280	30	土師器(内黒)・中世土師器		13C
35		SK66	B1	不明			13	土師器・中世土師器・珠洲		
35		SK68	B1	方形	440	392	27	縄文土器・土師器・中世土師器・八尾？・珠洲・中国製白磁・伊万里・陶器		
36	37	SK80	B1	円形	320	310	28	縄文土器・中世土師器・珠洲・砥石		14C
36	37	SK86	B1	長方形	250	82	22	土師器・火舎		
		SK87	B1	不整形	228	200	48			
35		SK91	B1	長方形	536	216	38	須恵器・土師器(内黒)・高台付土師器皿or椀・中世土師器・珠洲		14C
36		SK93	B1	長方形	104	86	18	珠洲		13～14C
37		SK96	B1	長方形	340	296	33	縄文土器・中世土師器・珠洲		13C
36		SK99	B1	正方形	182	182	11	中世土師器		13C
44		SK372	AW	楕円形	118	72	26	縄文土器・須恵器・珠洲・陶器・磁器		近世
44		SK373	AW	楕円形	90	72	27	近陶		近世
		SK380	AE	長方形	160	138	19	珠洲・越前？・陶器		近世
		SK389	B1N	長方形	320	256	44			不明
		SK390	B1N	長方形	264	208	53			不明
		SK397	B1N	楕円形	226	168	22			不明
37		SK402	B1N	長方形	196	160	26	珠洲		13～14C
		SK404	B1N	長方形	154	146	12			不明
		SK405	B1N	円形	170	166	32	中世土師器・珠洲		13～14C？
		SK409	B1N	不整形	228	194	22	越前or八尾		
		SK410	B1N	楕円形	130	108	21			不明
		SK411	B1N	長方形	146	80	52	伊万里？		近世？
		SK417a	B1N	不整形	128	122	39			
		SK417b	BIN	不整形						
37		SK418	B1N	楕円形	128	106	24	珠洲		13～14C
		SK419	B1N	楕円形	240	180	39			不明
		SK421	B1N	楕円形	206	200	36	縄文土器・土師器		不明
		SX190	B1	不明	2140	1540	156	伊万里・陶器・土製品・漆器椀・下駄		近世以降

第9表　梅原加賀坊遺跡　土器・陶磁器一覧　(1)

番　号	図版	地区	遺構番号	座　標	層　位	種　類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉　薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎　土	特記事項
1～5	46	BN	SD01			縄文土器	深鉢		縄文時代	340								暗灰黄色	
6	42	BN	SD01	X127Y054		縄文土器	深鉢		縄文時代	278								にぶい褐色	外面に煤付着
7	47	B1	SD01			縄文土器	深鉢		縄文時代	350								褐灰色	
8·9·12	45	BN	SD01	X134Y067		縄文土器	深鉢		縄文時代	400								にぶい黄橙色	
10·11	45	BN	SD01	X134Y067		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
13	44	B1N	SD01			縄文土器	深鉢		縄文時代	300								灰黄褐色	
14	42	B1N	SD01			縄文土器	深鉢		縄文時代	280	232							灰黄褐色	小石含む
15·16	42	B1N	SD01	X179Y065		縄文土器	深鉢		縄文時代	380								にぶい黄橙色	小石含む
17	45	BN	SD01	X133Y066		縄文土器	深鉢		縄文時代	380								灰白色	小石含む　煤付着
18·19	45	BN	SD01	X133Y066		縄文土器	深鉢		縄文時代									灰白色	小石含む
20·11-111	46	B1N	SD01	X098Y067		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
21	47	B1N	SD01		最下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
22	47	BN	SD01	X132Y067		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	黒変
23	42	B1	SD01			縄文土器	深鉢		縄文時代	342								にぶい黄褐色	
24	44	B1N	SD01			縄文土器	深鉢		縄文時代	274								にぶい黄褐色	
25	48	B1N	SD01			縄文土器	浅鉢		縄文時代	250								にぶい黄褐色	
26	44	B1N	SD01	X095Y069		縄文土器	鉢		縄文時代	366								にぶい黄橙色	
27	42	BN	SD01	X128Y053	下層	縄文土器	浅鉢		縄文時代	330	112	70						灰黄褐色	小石含む
28	43	B1N	SD01			縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
29	43	BN	SD01	X127Y051		縄文土器	深鉢		縄文時代									黒褐色	小石含む
30	43	B1N	SD01		最下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	小石含む
31	43	B1N	SD01	X095Y069		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄褐色	骨針　石英
32	43	B1N	SD01		最下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
33	43	BN	SD01	X131Y059		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
34	43	BN	SD01		黒褐色土	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄褐色	
35	43	B1N	SD01		最下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									黒褐色	
36	43	B1N	SD01		最下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									橙色	
37	43	BN	SD01	X135Y065	黒褐色土	縄文土器	深鉢		縄文時代									灰黄褐色	102と同一個体
38	43	B1N	SD01		最下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	小石含む
39	43	B1N	SD01		最下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	小石・赤色酸化粒含む
40	43	B1N	SD01		最下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄褐色	
41	43	B1N	SD01		最下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄褐色	
42	43	B1N	SD01			縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄褐色	
43	43	B1N	SD01		最下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									灰黄褐色	
44	43	B1N	SD01			縄文土器	深鉢		縄文時代									黒褐色	
45	43	B1N	SD01		最下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	小石含む　煤付着
46	43	B1N	SD01		最下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄色	
47	43	B1N	SD01			縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい橙色	
48	43	B1N	SD01		最下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄色	
49	43	BN	SD01	X131Y065	黒褐色土	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
50	43	B1N	SD01	X095Y059		縄文土器	深鉢		縄文時代									浅黄色	
51	44	B1N	SD01			縄文土器	鉢		縄文時代									褐灰色	
52	44	B1N	SD01			縄文土器	鉢？		縄文時代									にぶい黄褐色	
53	44	BN	SD01			縄文土器	深鉢		縄文時代	144								にぶい黄橙色	
54	43	B1N	SD01			縄文土器	浅鉢		縄文時代									にぶい黄褐色	
55	48	B1N	SD01		最下層	縄文土器	浅鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
56	48	BN	SD01	X145Y070		縄文土器	浅鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
57	43	B1N	SD01		最下層	縄文土器	浅鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
58	43	B1N	SD01			縄文土器	浅鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	黒変

第９表　梅原加賀坊遺跡　土器・陶磁器一覧　(2)

番　号	図版	地区	遺構番号	座　標	層　位	種　類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉　薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎　土	特記事項
59･60	47	B1N	SD01	X095Y069		縄文土器	深鉢		縄文時代									橙色	
61	47	B1N	SD01		最下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい橙色	煤付着　黒変
62･63	47	B1N	SD01		最下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい橙色	
64	47	B1N	SD01			縄文土器	深鉢		縄文時代									灰黄褐色	
65	44	BN	SD01	X135Y067	下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
66	44	B1N	SD01		最下層	縄文土器	深鉢		縄文時代									灰黄褐色	
67	44	B1N	SD01			縄文土器	深鉢		縄文時代									橙色	
68	44	B1N	SD01			縄文土器			縄文時代									灰黄褐色	
69	48	B1N	SD01		最下層	縄文土器			縄文時代			93						にぶい黄橙色	
70･71		BN	SD02		黒褐色土	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
72	49	BN	SD03	X131Y063		縄文土器	深鉢		縄文時代									暗灰黄色	
73	49	BN	SD03	X131Y063		縄文土器	深鉢		縄文時代									灰黄色	
74	49	BN	SD03	X198Y065		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい橙色	
75	49	BN	SD03	X132Y064		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
76	49	BN	SD03	X131Y065		縄文土器	深鉢		縄文時代	200								暗灰黄色	
77	49	BN	SD03	X131Y063		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい褐色	
78	49	BN	SD03	X133Y064		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
79	49	AE	SD03			縄文土器	深鉢		縄文時代									灰黄色	
80	49	BN	SD03	X131Y063		縄文土器	深鉢		縄文時代									暗灰黄色	
81	49	BN	SD03	X133Y064		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
82	49	BN	SD03	X131Y063		縄文土器	深鉢		縄文時代									黄褐色	
83	49	BN	SD03	X131Y063		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	黒変
84	49	BN	SD03	X131Y063		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄色	
85	49	BN	SD03	X131Y050		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい褐色	
86	49	BN	SD03	X131Y063		縄文土器	深鉢		縄文時代									黄褐色	
87	49	BN	SD03	X141Y065		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
88	49	BN	SD03	X131Y063		縄文土器			縄文時代			100						灰黄褐色	
89	42	BN	SX43	X127Y054		縄文土器	深鉢		縄文時代	300								にぶい黄褐色	外面に煤付着
90	48	B2	SK42			縄文土器	深鉢		縄文時代	280								にぶい黄色	
90	48	B2	SP406			縄文土器	深鉢		縄文時代	280								にぶい黄色	
91･11-109	50	AW		X153Y046		縄文土器	深鉢		縄文時代									灰黄色	小石含む
92	50	AE		X196Y046		縄文土器	深鉢		縄文時代	340								にぶい黄橙色	小石含む　外面に煤付着
93	50	AW		X190Y046		縄文土器	浅鉢		縄文時代	200								にぶい黄褐色	小石含む　外面に煤付着
94	49	B1			表採	縄文土器	深鉢		縄文時代									灰黄色	小石含む
95	49	BN		X135Y065	暗灰褐色砂質土	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄褐色	
96	49	B2	SD11			縄文土器	深鉢		縄文時代									灰黄褐色	
97	49	B1	SK62			縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	角閃石
98	49	BN		X135Y065	暗灰褐色砂質土	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
99	49	BN		X140Y060		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄褐色	外面に黒色付着物
100	49	B1	SK132			縄文土器	深鉢		縄文時代									灰黄褐色	
101	49	B2		X074Y047		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
102	49	B2		X074Y047		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
103	49	B2	SK50			縄文土器	深鉢		縄文時代									黒褐色	石英　角閃石
104	49	B2		X074Y047		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	小石含む
105	49	B2		X073Y049		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
106	49	B1	SK87			縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄褐色	
107	50	B2				縄文土器	深鉢		縄文時代									明褐色	煤付着
108	50	B1	SK96			縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	小石含む
110･113	50	AW		X170Y056		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	

第9表　梅原加賀坊遺跡　土器・陶磁器一覧　(3)

番　号	図版	地区	遺構番号	座　標	層　位	種　類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉　薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎　土	特記事項
112	50	AW		X190Y039		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
114	50	AW		X177Y044		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
115	50	AW		X177Y044		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄褐色	小石含む　外面に煤付着
116	50	BN		X150Y060	包含層	縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄褐色	
117	50	BN		X135Y065		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい褐色	
118	50	BN	Pit中	X150Y060		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄褐色	
119	50	AW		X182Y038		縄文土器	浅鉢		縄文時代			76						にぶい黄橙色	小石含む
120	50	AW		X127Y047		縄文土器	深鉢		縄文時代			80						にぶい黄褐色	
121	50	B1		X076Y048		縄文土器	深鉢		縄文時代									にぶい黄橙色	
153	53	B1	SD13			須恵器	杯			118									
154	53	B1	SD13			須恵器	杯		平安	116	32	76						灰白色	
155	53	B1	SD13			須恵器	杯			120								灰色	
156	53	B1	SD13			須恵器	杯		奈良？	126	34	83						灰白色	
157	53	B1	SD13			須恵器	杯			130								灰色	
158	53	B1	SD13			須恵器	杯			150								灰黄褐色	
159	53	B1	SD13			須恵器	杯		平安	114	31	50						灰白色	
160	53	B1	SD13			須恵器	杯		平安	120	25	66						灰色	
161	53	B1	SD13			須恵器	杯		平安	128	28	82						灰白色	
162	53	B1	SD13			須恵器	杯		平安	126	27	76						灰白色	
163	53	B1	SD13			須恵器	杯		平安	130	29	80						灰白色	
164	53	B1	SD13			須恵器？	杯		平安			60						にぶい橙色	赤色酸化粒
165	53	B1	SD13			須恵器	杯		平安	100								灰色	
166	53	B1	SD13			須恵器	杯		平安？	148								灰色	
167	53	B1	SD13			須恵器	杯		奈良？	150								灰色	
168	53	B1	SD13			須恵器	杯蓋		平安	120								灰色	
169	53	B1	SD13			須恵器	杯蓋		平安	140								灰色	
170	53	B1	SD13			須恵器	杯蓋		平安	168								灰色	
171	53	B1	SD13			須恵器	壺		平安？	160								灰白色	
172	53	B1	SD13			須恵器	壺蓋		奈良	100								灰白色	
173	53	B1	SD13			須恵器	鍋？											灰白色	
174	53	B1	SD13			土師器	椀		平安	131	32							にぶい橙色	石英　赤色酸化粒
175	53	B1	SD13			土師器	椀		平安									橙色	赤色酸化粒
176	53	B1	SD13			土師器	椀		平安	120								灰黄褐色	煤付着
177	53	B1	SD13			土師器	椀		平安	120								にぶい黄橙色	
178	53	B1	SD13			土師器	鉢		平安	180								にぶい黄橙色	
179	53	B1	SD13			土師器	椀		平安			50						にぶい橙色	
180	53	B1	SD13			土師器	椀		平安			48						にぶい黄橙色	骨針　石英
181	53	B1	SD13			土師器	椀		平安			50						にぶい橙色	内黒
182	53	B1	SD13			土師器	皿		平安	120								灰白色	
183	53	B1	SD13			土師器	皿		平安	118								にぶい橙色	
184	53	B1	SD13			土師器	皿		平安			62						浅黄橙色	石英　赤色酸化粒 赤彩か　高台削り出しか
185	53	B1	SD13			土師器	甕		平安	100								にぶい橙色	
186	53	B1	SD13			土師器	甕		平安			56						にぶい黄橙色	
187	53	B1	SD13			土師器	土錘				43							橙色	赤色酸化粒
188	52	AW	SD19			須恵器	杯		平安			60						灰黄褐色	
189	52	AW	SD19			須恵器	杯		平安			81						灰白色	
190		AE	SD19	X083Y057		須恵器	杯		平安	100								灰色	

第9表　梅原加賀坊遺跡　土器・陶磁器一覧　(4)

番　号	図版	地区	遺構番号	座　標	層　位	種　類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉　薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎　土	特記事項
191	52	AW	SD19			須恵器	杯			100								灰白色	
192	52	AW	SD19			須恵器	杯		奈良？	115		80						灰白色	
193	52	AW	SD19			須恵器	杯		奈良？	124	38	92						灰色	
194	52	AW	SD19			須恵器	杯			104								灰色	
195	52	AW	SD19			須恵器	杯		平安	110								灰色	
196	52	AW	SD19			須恵器	杯		平安	116	29	76						灰白色	
197		BN	SD19	X145Y045		須恵器	杯		平安	114								灰色	
198	52	AW	SD19			須恵器	杯		平安	120								灰白色	
199	52	AW	SD19			須恵器	杯		平安	120								灰白色	
200	52	AW	SD19			須恵器	杯		平安	120								灰色	
201	52	BN	SD19	X145Y045		須恵器	杯		平安	120								灰白色	
202	52	AW	SD19			須恵器	杯		平安	120								灰白色	
203	52	AW	SD19			須恵器	杯		平安	120								灰色	
204	52	AW	SD19			須恵器	杯		平安	130								灰白色	
205	52	BN	SD19	X145Y045		須恵器	杯？		平安	130								灰色	
206	52	BN	SD19	X145Y045		須恵器	杯		平安	134								灰白色	煤付着
207	52	AW	SD19			須恵器	杯		平安	140								灰白色	
208	52	AW	SD19			須恵器	蓋		平安	140								灰色	
209		AW	SD19			須恵器	蓋		奈良？	160								灰色	
210	52	AE	SD19	X188Y057		須恵器	蓋		平安	160								灰色	
211	52	AW	SD19			須恵器	蓋		平安	180								にぶい橙色	
212	52	BN	SD19	X145Y045		須恵器	鉢？			140								灰色	
213	52	AW	SD19			須恵器	壺											灰色	
214	52	AW	SD19			須恵器	壺					80						灰白色	
215	52	AW	SD19			土師器	椀		平安	123	40	43						にぶい橙色	骨針　赤色酸化粒
216	52	AW	SD19			土師器	椀		平安	110								浅黄橙色	
217	52	BN	SD19	X145Y045		土師器	椀		平安	120								灰黄褐色	
218		AW	SD19			土師器	皿		平安	110								浅黄色	
219	52	AW	SD19			土師器	皿		平安	134								橙色	
220	52	AW	SD19			土師器	皿		平安	130								にぶい橙色	
221	52	AW	SD19			土師器	皿		平安			66						浅黄橙色	
222	52	BN	SD19	X145Y045		土師器	甕		平安	280								にぶい黄橙色	
223	52	AW	SD19			土師器	甕					65						にぶい黄橙色	
224	52	AW	SD19	X161Y046		瀬戸美濃	皿		明治以降			56		染付	透明釉			灰白色	染付5PB3/10青色
225	53	AE	SD21			須恵器	杯					80						灰白色	煤状炭化物付着
226	57	AE	SD21			須恵器	皿		平安	128	27	56						灰白色	杯蓋転用品か　煤状炭化物付着
227	57	AE	SD21			土師器	椀		平安	114								にぶい黄橙色	
228	53	AE	SD21			土師器	椀		平安	110								にぶい橙色	
229	53	AE	SD21			土師器	椀		平安	110								灰黄褐色	
230	53	AE	SD21			土師器	椀		平安	118								にぶい橙色	赤色酸化粒
231	53	AE	SD21			土師器	椀		平安	120								灰黄褐色	
232	53	AE	SD21			土師器	椀		平安	130	43	56						にぶい黄橙色	
233	53	AE	SD21			土師器	椀		平安			60						にぶい橙色	
234	53	AE	SD21			土師器	椀		平安	120								灰黄褐色	内黒
235	53	AE	SD21			土師器	皿		平安			50						にぶい橙色	
236	54	B1	SB28			中世土師器	皿		12C			44						浅黄橙色	
237	54	B1	SB28			中世土師器	皿		12～13C	128			14					にぶい橙色	
238	54	B1	SB28			中世土師器	皿		12～13C	138			9					浅黄橙色	赤色酸化粒

第9表　梅原加賀坊遺跡　土器・陶磁器一覧　(5)

番　号	図版	地区	遺構番号	座　標	層　位	種　類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉　薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎　土	特記事項
239	54	B1N	SD04	X145Y045		須恵器	杯		平安	118								淡黄色	
240	54	BN	SD04	X145Y045		須恵器	杯蓋		平安？	150								灰色	
241	54	BN	SD04	X145Y045		須恵器	杯蓋		平安	151								灰色	
242	54	B1N	SD04	X106Y065		須恵器	横瓶		奈良									灰色	
243	54	B1N	SD04	X106Y065		須恵器	双耳瓶		平安									灰色	
244	54	B1N	SD04	X108Y065		須恵器	双耳瓶		平安			102						灰色	
245	54	BN	SD04	X145Y045		土師器	椀		平安	138								浅黄色	赤色酸化粒
246	54	BN	SD04	X145Y045		土師器	椀		平安	118								にぶい黄橙色	
247	54	BN	SD04			土師器	皿		平安			60						にぶい黄橙色	
248	54	B2	SD04			土師器	甕											にぶい黄橙色	赤色酸化粒　煤付着
249	54	B2	SD04			土師質	土錘			20								にぶい褐色	
250	54	B2	SD04			中世土師器	皿		13～14C	88	16		11					浅黄色	石英　角閃石
251	54	B2	SD04			中世土師器	皿		13～14C	138	31	100						にぶい黄橙色	角閃石
252	54	B2	SD04			中世土師器	皿		13～14C	122	27	50	10					にぶい橙色	赤色酸化粒
253	54	B2	SD04			中世土師器	皿		15C	100			7					橙色	
254	54	B1	SD04	X088Y062	上層	珠洲	甕											灰色	
255	54	B1N	SD04	X101Y065		珠洲	壺		Ⅳ期	172								灰色	
256	54	B1N	SD04	X105Y065		珠洲	壺		Ⅳ期	218								灰色	
257	54	B1N	SD04	X104Y065		珠洲	壺		Ⅳ期	210								灰色	
258	54	B1N	SD04	X089Y063		珠洲	擂鉢		Ⅳ期	266								灰色	
259	54	B1N	SD04	X106Y065		珠洲	擂鉢			280								灰色	
260		B2	SD04			珠洲	擂鉢		Ⅰ期後半～Ⅱ期									灰色	骨針
261	54	B1N	SD04	X108Y065		珠洲	擂鉢		Ⅳ期	380								灰色	
262	54	B1	SD04	X088Y062	Ⅰ層・暗黒灰色	珠洲	擂鉢		Ⅳ期	340								黄灰色	
263		B1N	SD04			珠洲	擂鉢		Ⅳ期	260								にぶい褐色	骨針
264	54	B2	SD04			珠洲	擂鉢		Ⅳ期	300								灰色	
265	54	B2	SD04			珠洲	擂鉢			280								灰色	
266	54	B2	SD04			珠洲	擂鉢		Ⅱ～Ⅲ期									灰白色	
267	54	B2	SD04			珠洲	擂鉢		Ⅱ～Ⅲ期									灰色	
268	54	B1	SD04			珠洲	鉢？					120						灰色	
269		B2	SD04			珠洲	擂鉢					120						灰白色	
270	54	B1N	SD04	X108Y065		八尾	甕		14C						自然釉	2.5Y6/2	灰黄色	灰白色	
271	54	B1N	SD04			常滑	鉢		12C後葉			120			自然釉	5Y6/2	灰オリーブ色	灰白色	
272	54	B2	SD04			中国製白磁	碗	Ⅱ類1		138					白磁釉	2.5Y8/2	灰白色	灰白色	
273	54	B2	SD04			中国製白磁	碗	Ⅴ類4		140					白磁釉	7.5Y7/1	灰白色	灰白色	
274	54	B2	SD04			土師質土器	羽釜		14C？									橙色	石英
275	54	B2	SD04			土師質土器	羽釜		14C？	260								にぶい黄橙色	
276		BN	SD04	X145Y045		伊万里	碗		18～19C					染付	灰釉	2.5GY7/1	明オリーブ灰色	灰色	染付7.5Y6/3オリーブ黄色
277	54	BN	SD04	X145Y045		伊万里	碗		19C	119				染付	透明釉			灰白色	染付7.5B6/3青灰色
278	54	B2	SD04			土製品	人形		江戸									にぶい黄橙色	
279	55	B2	SD07			須恵器	有台杯					80						灰色	
280	55	B1	SD07			須恵器	壺					104						黄灰色	
281	55	B1	SD07			中国製白磁	皿	Ⅵ1b類				40			白磁釉	10Y8/1	灰白色	灰白色	
282	55	B1	SD07			中世土師器	皿		12～14C	59	9	60						にぶい橙色	
283	55	B1	SD07			中世土師器	皿		12～14C	99	14	60	10					にぶい橙色	
284	55	B2	SD07			中世土師器	皿		12～14C	121			21					にぶい黄橙色	

第9表　梅原加賀坊遺跡　土器・陶磁器一覧　(6)

番　号	図版	地区	遺構番号	座　標	層　位	種　類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉　薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎　土	特記事項
285	55	B2	SD07			珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期									灰色	
286	55	B2	SD07			珠洲	擂鉢		Ⅲ～Ⅳ期			118						灰色	
287	55	B2	SD07			土師器	土錘		平安		50							にぶい赤褐色	骨針
294	55	B2	SD08			中世土師器	皿	Ⅳ類1	12～13C	158	30						浅黄橙色		角閃石
295	55	B2	SD08			中国製白磁	碗	Ⅳ類1				76			白磁釉	10Y8/1	灰白色	灰白色	
296	55	B2	SD08			珠洲	甕											灰色	
297	55	B2	SD11			中世土師器	皿		12～14C	78	12	50	10					にぶい黄橙色	骨針
298	55	B2	SD09			中世土師器	皿		12～14C	78	11	60	9					にぶい橙色	骨針　赤色酸化粒
299	55	B1	SE39			中世土師器	皿		12～13C	138			17					にぶい黄橙色	
300	55	B1	SE39			珠洲	擂鉢		Ⅳ期	300								灰白色	
307	55	B1N	SE40			須恵器	瓶			180								灰色	
309	55	B1N	SE41			土師器	椀		平安			60						にぶい黄橙色	赤色酸化粒
315	55	B2	SK60			中世土師器	皿		12C末～14C	86	14		9					にぶい黄橙色	石英
316	55	B2	SK60			中世土師器	皿		12C末～14C	104	29		18					にぶい黄橙色	
317	55	B2	SK60			中世土師器	皿		12C末～14C	123	29		21				橙色		
318	55	B2	SK60			中国製青白磁	皿					40			白磁釉	2.5GY8/1	灰白色	灰白色	
319	55	B2	SK60			中国製白磁	碗	Ⅱ類1	12C	136					白磁釉	7.5Y8/2	灰白色	灰白色	
320	55	B2	SK60			中国製青磁	碗	Ⅰ類4	12～13C	157					青磁釉	2.5GY6/1	オリーブ灰色	灰白色	内面ヘラ文様
321	55	B2	SK60			珠洲	壺											灰色	
322	55	B2	SK60			珠洲	鉢		Ⅱ期？	185								灰白色	骨針
323	55	B2	SK60			珠洲	甕		Ⅰ期	740								灰色	
324	55	B2	SK60			土師質土器	火舎			260								浅黄色	骨針　赤色酸化粒
325	55	B1	SK61			中世土師器	皿		12～13C	118	26		13					にぶい黄橙色	角閃石　赤色酸化粒
326	55	B1	SK61			中国製青磁	碗		12～13C						青磁釉	5G6/1	緑灰色	灰白色	
327	55	B1	SK62			中世土師器	皿		12～13C	168								にぶい黄橙色	石英　赤色酸化粒
328	55	B2	SK62			土師器	火舎											浅黄色	
329		B1	SK64			中世土師器	皿		12～13C									浅黄橙色	石英　赤色酸化粒
330	55	B1	SK64			中世土師器	皿		12～13C	88	10		9					灰黄色	
331	55	B1	SK64			中世土師器	皿		12～13C	80			12					にぶい黄褐色	赤色酸化粒
332	55	B1	SK64			中世土師器	皿		12～13C	128	22	86	15					にぶい橙色	石英　骨針
333		B1	SK64			中世土師器	皿		12～13C	118								浅黄橙色	
334		B1	SK64			中世土師器	皿		12～13C	118			11					にぶい黄橙色	石英
335	55	B1	SK64			珠洲	壺											黄灰色	
336	55	B1	SK64			珠洲	擂鉢		Ⅱ～Ⅲ期	280								灰色	
338	55	B1	SK64			土師器	甕					60						にぶい黄橙色	赤色酸化粒
339	55	B1	SK66			中世土師器	皿		13C	118	25	64						灰白色	石英　赤色酸化粒
340	55	B2	SK46			中国製青白磁	合子蓋			80	14				白磁釉	2.5GY8/1	灰白色	灰白色	花文
341	56	B2	SK51			中国製白磁	碗	Ⅳ類	12～13C	178					白磁釉	2.5Y8/3	淡黄色	灰黄色	
343	56	B1	SK80			珠洲	擂鉢		Ⅳ期			128						灰黄色	骨針
344	56	B1	SK86			土師質土器	火舎			148								にぶい黄橙色	
345	56	B1	SK91			土師器	椀？		平安			58						灰白色	内黒
346	56	B1	SK91			珠洲	壺					122						灰色	
347	56	B1	SK91			珠洲	擂鉢		Ⅳ期	280								灰色	

第9表　梅原加賀坊遺跡　土器・陶磁器一覧　(7)

番　号	図版	地区	遺構番号	座　標	層　位	種　類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉　薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎　土	特記事項
348	56	B1N	SK405			珠洲	甕		Ⅲ～Ⅳ期	360								灰色	骨針
349	56	B1	SK99			中世土師器	皿		12C末～13C前半	148			14					浅黄橙色	赤色酸化粒
350	56	B1N	SK415			土師器	椀		平安			66						浅黄橙色	内黒　石英　赤色酸化粒
351	56	B1	SP122			中世土師器	皿			88			9					にぶい黄橙色	
352	56	B1	SP122			中世土師器	皿		15C？	118			12					にぶい黄橙色	
353	56	B1	SP123			土師器	椀		平安	158			11					黄橙色	
354		B1	SP147			中世土師器	皿			80	13							浅黄橙色	赤色酸化粒
355	56	B1	SP157			中世土師器	皿		12～13C	138			11					灰白色	
356	56	B1	SP182			中世土師器	皿		13～15C	70	13	42	9					灰白色	
357	56	B1	SP182			中世土師器	皿		13～15C	89	15	60	9					浅黄橙色	
358		B1	SP182			中世土師器	皿		13～15C	88			13					浅黄色	赤色酸化粒
359	56	B1	SP182			珠洲	擂鉢					123						灰色	骨針
360	55	B1	SK63			越中瀬戸	水滴			70					鉄釉	7.5YR4/2	灰褐色	にぶい黄橙色	
361	56	B1	SK68			土師器	甕		平安？	204								にぶい黄橙色	赤色酸化粒
362	56	B1	SK68			中国製白磁	壺					66			自然釉	2.5GY8/1	灰白色	灰白色	
363	56	B1	SK68			珠洲	擂鉢		Ⅳ期	300								灰色	
364	56	B1	SK68			越前or八尾	甕					100			自然釉	2.5Y4/1	黄灰色	褐灰色	
365	56	B1	SK68			越中丸山？	鉢		江戸	214					灰釉	2.5GY7/1	明オリーブ灰色	灰色	
366	56	B1	SK68			伊万里	椀		江戸	102				染付	透明釉			灰白色	染付5B6/1青灰色
367	56	AW	SK372			越中丸山？	鉢		江戸			66			灰釉・鉄釉	5GY7/1	明オリーブ灰色	灰色	鉄釉10YR3/2黒褐色
368	56	AE	SK380			陶器	甕		江戸			140			鉄釉			灰色	
369	56	AW	SK373			陶器	甕			304					鉄釉	10YR4/4	褐色	にぶい黄橙色	
370	56	B2	SX190			伊万里	火入		江戸						青磁釉	10Y6/2	オリーブ灰色	灰白色	
371	56	B2	SX190			陶器	椀					46			灰釉	5Y6/3	オリーブ黄色	灰白色	
375		B2	SX190			土製品	人形		江戸									にぶい黄橙色	石英　赤色酸化粒
376	57	B1N				須恵器	杯					110						灰色	
377	57	B1N		X110Y070		須恵器	杯		平安	120								灰白色	
378	57	AW		X153Y053		須恵器	杯		平安	140								灰白色	
379		B2		X073Y046		須恵器	杯B		奈良？			76						灰色	
380		BN		X145Y065	黒灰褐色粘質土	須恵器	杯B		奈良？			104						灰色	
381	57	BN			表採	須恵器	皿		平安			140						灰色	
382	57	B1		X105Y053	黒灰色粘質土	須恵器	壺			104								灰色	
383	57	B1N		X110Y070		須恵器	壺					100						黄灰色	
384	57	B1N		X107Y065		須恵器	広口壺			178								灰色	
385	57	B1N		X110Y070		須恵器	壺											黄灰色	
386	57	B1N	SK396			須恵器	壺											灰白色	
387	57	B1N		X110Y070		須恵器	壺											黄灰色	
388	57	B1N				須恵器	壺											灰色	
389	57	B1N		X098Y067		須恵器	双耳瓶		平安									黄灰色	
390	57	B1N		X105Y066		須恵器	平瓶		奈良									黄灰色	
391		AW		X162Y052		土師器	椀		平安	138	41	70						浅黄橙色	
392	57	B1N		X110Y070		土師器	椀		平安	128								浅黄橙色	内黒
393	57	B2		X049Y057		土師器	椀		平安	118								にぶい黄橙色	石英

第９表　梅原加賀坊遺跡　土器・陶磁器一覧　(8)

番　号	図版	地区	遺構番号	座　標	層　位	種　類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉　薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎　土	特記事項
394	57	B				土師器	椀					60						にぶい黄橙色	内黒　石英
395		B1N		X105Y070		土師器	椀		平安			45						にぶい橙色	
396	57	B1		X094Y059	黒灰色粘質土	土師器	椀		平安			55						にぶい橙色	石英
397	57	B				土師器	壺					87						浅黄橙色	赤色酸化粒
398	57	AW		X153Y046		土師器	甕		奈良？	210								橙色	骨針
399	57	B2		X056Y050		土師器	鉢			219								橙色	赤色酸化粒
400	57	B2		X073Y056		中世土師器	皿		12C			62						淡橙色	石英
401	57	B2			表採	中世土師器	皿		12～14C	88			14					橙色	石英
402	57	AW		X181Y044		中世土師器	皿		12～14C	92	16							にぶい黄橙色	角閃石　赤色酸化粒
403	57	AE	SB032			中世土師器	皿		12～14C	98	20		12					にぶい黄橙色	角閃石　煤付着
404	57	B2		X049Y057		中世土師器	皿		12～14C	97	15		10					にぶい黄橙色	骨針　赤色酸化粒
405	57	B2		X050Y051		中世土師器	皿		12～14C	106			14					にぶい橙色	
406	57	B2		X055Y052		中世土師器	皿		12～14C	117	24		20					浅黄橙色	角閃石　赤色酸化粒
407	57	B1		X098Y055	黒灰色粘質土	中世土師器	皿		12～14C	116			21					橙色	石英　角閃石
408	57	B1	SX189			中世土師器	皿		12～14C	112	32	30	18					にぶい橙色	赤色酸化粒
409	57	B1		X095Y047		中世土師器	皿		12～14C	138	24	86						にぶい黄橙色	赤色酸化粒
410	57	B1		X095Y047		中世土師器	皿		12～14C	134	22		12					にぶい黄橙色	石英　骨針　角閃石　紅殻？
411	57	B2		X055Y050		中世土師器	皿		12～14C	138			17					にぶい橙色	赤色酸化粒
412	57	B2		X050Y049		中世土師器	皿		12～14C	138			16					にぶい黄橙色	赤色酸化粒
413	57	B1N				中国製白磁	碗	Ⅴ類2b？	12C	150					白磁釉	N8/0	灰白色	灰白色	
414	57	B1		X093Y056	黒灰色粘質土	中国製白磁	碗	Ⅴ類	12～13C			64			白磁釉	5Y8/2	灰白色	灰白色	
415	57	B1		X107Y060	黒褐色粘質土	中国製白磁	碗	Ⅳ類	12C			60			白磁釉	7.5Y7/2	灰白色	灰白色	
416	57	B1		X104Y052	黒灰色粘質土	中国製青磁	碗					50			青磁釉	7.5Y6/3	オリーブ黄色	灰白色	
417	57	B1N		X098Y067		中国製青磁	碗	Ⅰ類Ⅴ	13C	130				鏑蓮弁文	青磁釉	2.5GY7/1	明オリーブ灰色	灰白色	龍泉窯系
418	57	AE		X200Y055		中国製青磁	皿		12～13C			40		櫛描文	青磁釉	7.5Y6/3	オリーブ黄色	灰白色	同安窯系
419	57	B1	SX094			中国製青白磁	皿					40			白磁釉	7.5Y8/1	灰白色	灰白色	
420	57	B1		X082Y047		中国製青磁	皿		12～13C			50		櫛描文	青磁釉	7.5Y6/3	オリーブ黄色	灰白色	同安窯系
421	57	B2			表採	中国製白磁	瓶								白磁釉	5Y8/1	灰白色	灰白色	
422	57	AE				瀬戸美濃	大皿					138			灰釉	5Y7/6	黄色	灰白色	
423	57	B1N		X078Y067		中世土師器	小皿			26	11							にぶい黄橙色	
424		BN		X150Y050		土師質	羽釜								鉄釉	10YR2/1	黒色	橙色	
425	57	B2		X056Y053		珠洲	甕		Ⅰ期									にぶい黄橙色	石英
426	57	BN		X126Y056	2層	珠洲	甕		Ⅲ期										灰色
427	59	AW		X161Y046		珠洲	甕					170						灰色	
428	57	B1N		X105Y066		八尾	甕		鎌倉	520								にぶい黄橙色	
429	59	B2		X050Y049		珠洲	壺		Ⅱ～Ⅲ期	182								灰白色	
430	59	B2		X050Y049		珠洲	壺											灰色	
431	59	B1N		X110Y070		珠洲	壺		Ⅲ～Ⅳ期	200								灰色	
432	59	B				珠洲	壺		Ⅲ～Ⅳ期	212								灰色	
433	59	B2		X050Y049		珠洲	壺		Ⅱ期	206								灰色	
434	58	B2		X050Y049		珠洲	擂鉢		Ⅰ期	220								灰色	
435	58	B2		X049Y049		珠洲	擂鉢		Ⅱ期	200								灰色	
436	58	B2		X052Y049		珠洲	擂鉢		Ⅱ期	260								灰色	押印
437	58	B1		X098Y055		珠洲	擂鉢		Ⅳ期	312								にぶい黄橙色	骨針
438	58	B2		X073Y056		珠洲	擂鉢		Ⅱ期	300								灰色	
439	58	B2		X048Y054		珠洲	擂鉢		Ⅱ期	310								灰色	
440	58	B1		X095Y053		珠洲	擂鉢		Ⅲ～Ⅳ期	323								灰色	
441		B1		X077Y052		珠洲	擂鉢		Ⅳ期	302								灰色	骨針

第9表　梅原加賀坊遺跡　土器・陶磁器一覧　(9)

番　号	図版	地区	遺構番号	座　標	層　位	種　類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉　薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎　土	特記事項
442	58	B1		X094Y052		珠洲	擂鉢		Ⅲ期	334								灰白色	
443	58	B1		X095Y053	黒灰色粘質土	珠洲	擂鉢		Ⅳ期	400								灰色	
444	58	B1		X106Y047		珠洲	擂鉢		Ⅳ期	380								灰色	
445	58	B1W		X109Y070		珠洲	擂鉢		Ⅳ期	400								灰色	
446	60	BN		X143Y049		越中瀬戸	椀(天目)					40			鉄釉	7.5YR4/2	灰褐色	明褐灰色	
447	60	AE				越中瀬戸	皿		江戸			41			灰釉	2.5Y8/3	淡黄色	浅黄色	
448	60	B1		X084Y047		唐津	皿		16～17C	108				鉄絵	灰釉	7.5Y7/1	灰白色	灰色	鉄絵 7.5Y3/1 オリーブ黒色胎土目
449	60	B1N		X095Y066	表土	唐津	鉢		17～18C			140		刷毛目	鉄釉	7.5YR3/1	黒褐色	にぶい橙色	白泥7.5Y8/1灰白色
450	60	B1N					鉢		江戸			74			鉄釉	10YR4/6	褐色	にぶい黄橙色	墨書
451	60	B1N				唐津？	擂鉢		1750～1860	400					鉄釉	7.5YR3/1	黒褐色	褐灰色	
452	60	AW				陶器	擂鉢		江戸以降	382					鉄釉	10YR4/4	褐色	にぶい黄橙色	
453	60	AW		X151Y044		伊万里	碗		江戸	90				コンニャク印判	透明釉			灰白色	コンニャク印判 2.5PB7/3うす青色
454	60	AE	SK379			伊万里	碗		江戸	78				染付	透明釉			灰白色	染付5PB4/8青色
455	60	B1N				伊万里	皿		江戸			72		染付	透明釉			灰白色	染付7.5B5/2暗青灰色　見込のみコンニャク印判　蛇の目釉剝
456	60	B1		X073Y062		伊万里(白磁)	小杯		江戸			26			透明釉			灰白色	
457	60	BN				伊万里？	小杯		江戸	28	17	12			透明釉			灰白色	
458	60	B2			表採	伊万里	紅皿		1800～1860	44					透明釉			灰白色	
459	59	AW		X170Y056		伊万里(青磁)	瓶		江戸			56			青磁釉	5GY7/1	明オリーブ灰色	灰白色	
460	59	B2				瀬戸美濃	椀		19C～明治	68				染付	透明釉			灰白色	染付5PB4/8青色
461	60	B2			表採	瀬戸美濃	椀		19C～明治	80				染付	透明釉			灰白色	染付10BG6/1青灰色
462	59	B2				瀬戸美濃	椀		19C～明治	86				染付	透明釉			灰白色	染付7.5B5/2暗青灰色
463	60	AW		X163Y047		瀬戸美濃(新製)	皿		明治以降			60		染付	透明釉			灰白色	染付5PB3/10青色
464	60	B2				磁器	仏飯器		19C～明治			40		染付	透明釉			灰白色	染付5PB4/8青色
465	60	B1N		X075Y066		越中丸山？	皿		江戸	142		70			灰釉	2.5GY7/1	明オリーブ灰色	灰色	
466		B1N		X072Y066		唐津	椀		江戸			36			長石釉	5Y8/1	灰白色	黄灰色	
467	60	AW		X160Y052		陶器	土瓶		江戸			74			鉄釉	7.5YR3/4	暗褐色	にぶい褐色	

第10表　梅原加賀坊遺跡　石製品一覧

番　号	図　版	地　区	遺構番号	座　標	層　位	種　類	長	幅	厚	重	石　材	特　記　事　項
122		B1N	SD01	X097Y063		打製石斧	33.8	7.6	5.5	1004.4	砂岩？	
122		B1N	SD04	X106Y065		打製石斧	33.8	7.6	5.5	1004.4	砂岩？	2点接合
123		B1N	SD01			打製石斧	23.0	10.6	3.7	1097.4	砂岩	
124		B1N	SD01		最下層	打製石斧	13.4	7.0	2.5	287.4	流紋岩？	
125	51	B1N	SD01	X097Y063		打製石斧	20.2	11.2	4.1	1033.8	花崗岩	
126	51	B1N	SD01		最下層	打製石斧	15.3	8.3	3.2	430.1	砂岩	
127	51	BN	SD01	X135Y055	黒褐色土	打製石斧	15.3	7.2	2.7	393.1	安山岩？	
128	51	B1N	SD01	X097Y063		打製石斧	13.8	7.5	1.7	250.6	粘板岩	
129	51	AE	SD01		上面	石鏃	(3.0)	1.6	0.3	1.2	流紋岩	
130	51	BN	SD02	X131Y062		打製石斧	15.4	7.7	2.7	402.8	砂岩	
131	51	BN	SD03	X128Y049		打製石斧	18.2	8.0	4.2	599.8	砂岩？	
132		AE	SD03			打製石斧	(10.8)	(7.6)	(3.2)	299.5	安山岩	
133	51	B2	SD04			打製石斧	18.3	7.0	2.6	369.7	凝灰岩	
134	51	B2	SD04			打製石斧	14.8	7.0	2.4	339.1	安山岩？	
135		B2	SD06			打製石斧	14.9	8.7	2.7	431.5	不明	
136		B2	SD06			打製石斧	(13.4)	7.2	3.1	338.2	砂岩	
137	51	B1N	SD06	X102Y065		打製石斧	13.5	7.0	1.7	204.3	砂岩	
138		B1N	SD06			打製石斧	14.05	7.2	2.5	262.7	凝灰岩	
139		AW		X181Y044	包含層	打製石斧	20.5	7.8	3.7	773.1	砂岩	
140	51	B2		X074Y053	包含層	打製石斧	15.2	7.5	2.6	312.4	不明	
141	51	AW		X191Y047	包含層	打製石斧	20.2	9.3	3.2	589.1	安山岩	
142	51	B2		X073Y049	包含層	打製石斧	16.2	7.2	2.7	318.4	砂岩	
143	51	AW		X161Y046	包含層	打製石斧	15.0	8.3	3.3	426.3	砂岩	
144		AW		X200Y036	包含層	打製石斧	15.7	8.4	3.1	553.9	凝灰岩？	
145		AW		X200Y036	表採	打製石斧	20.7	11.9	4.7	1165.5	安山岩？	
146	51	B2		X073Y049	包含層	打製石斧	16.4	10.3	3.0	498.6	不明	
147	51	B2		X073Y049	包含層	打製石斧	13.7	8.0	2.6	267.5	凝灰岩	
148	51	B2		X059Y054	黒灰色粘質土	打製石斧	11.6	7.2	2.8	247.6	砂岩	
149		AW		X149Y042	包含層	打製石斧	10.2	7.6	2.2	177.7	安山岩	
150		B1		X091Y054	黒灰色粘質土	打製石斧	(9.2)	(10.2)	3.2	320.8	砂岩	
151	51	B2		X054Y051	包含層	石鏃	2.4	(1.8)	3.5	1.25	メノウ	
152		AW		X151Y044	包含層	削器	3.1	3.2	0.5	4.53	鉄石英	
308	67	B1N	SE40			砥石	(5.4)	(4.45)	(1.0)	29.8	泥岩	
337	67	B1	SK64			石硯	(11.5)	8.5	1.2	217.7	粘板岩	
342	67	B1	SK80			砥石	6.2	2.65	1.9	36.1	泥岩	
476	67	B2		X065Y049	包含層	砥石	3.4	4.5	3.15	40.6	泥岩	
477	67	B1		X079Y052	黒灰色粘質土	砥石	(5.9)	(5.0)	(3.0)	136.3	凝灰岩？	
478	67	B1N		X114Y052	包含層（1層）	砥石	(4.9)	5.4	1.9	79.8	泥岩	
	51	B1N	SD01			削器	2.8	3.9	0.7	6.83	鉄石英	
	51	BN	SD01	X145Y070	下層	打製石斧？	(5.4)	6.2	1.6	58.58	泥岩	
	67	B1N	SD04	X101Y065		砥石	(7.6)	(3.6)	(1.2)	39.33	粘板岩	
	51	B2		X053Y049	包含層	剝片	3.4	1.6	0.8	4.3	鉄石英	
	67	B1N			表採	砥石	18.85	(6.8)	(4.9)	754.4	泥岩？	

第11表　梅原加賀坊遺跡　木製品一覧

番　号	図　版	地　区	遺構番号	座　標	層　位	種　　類	分類Ⅰ	長	幅	厚	樹　種	木取り	樹種写真	整理番号	特記事項
301	62	B1	SE039			円形板	3	21.1		0.7	スギ	柾目		900167	
302	64	B1	SE039			加工木(特殊形)	11	(77.9)	5.6	4.2	スギ	二方柾		900096	
303	65	B1	SE039			柱？	10	(22.5)		12.6				900095	
304	65	B1	SE039			箸	4	18.4	0.95	0.6				900030①	
305	65	B1	SE039			箸	4	19.35	0.5	0.45				900030②	
306	65	B1	SE039			箸	4	21.5	0.55	0.3				900030③	
310	61	B1N	SE041			櫛	2		(4.3)	1.3	イスノキ			900037	
311	63	B1N	SE041			漆器椀	3	14.2			ブナ･イヌブナ			900124	赤色漆(葉文)
312	64	B1N	SE041			漆器皿	3	18.0		(4.2)	サワグルミ			900123	
313	63	B1N	SE041			曲物	3	25.0	(19.5)	0.4 底板0.8	外側の側板不明 (樹脂細胞を有する針葉樹)		1	900141･900142	
314		B1N	SE041			円形板	3	22.0		1.1				900147	
372		B2	SX190			漆器椀	3				トチノキ			900104③	
373	61	B2	SX190			下駄	2	(18.6)	7.7	3.6	ハンノキ属		6	900104②	
374	62	B2	SX190			下駄	2	15.6	7.1	2.8	ヤシャブシ		7	900104①	
468	63	AW	SK371			漆器椀	3				不明(ブナ？)		14	900122①	
469	62	AE	SK377			提灯(一部)	6	4.6	11.6					900013	
470	64	BN		X140Y60		杓子形木器	4	(17.9)	6.1	0.8	ヤマザクラ			900007	
471	64	AW	SK371			刳物匙	4	(11.0)	(2.1)	0.4	ブナ	縦木取り柾目		900122②	
474	61				表採	下駄	2	(16.3)	7.6	3.5	イイギリ			900103	

第12表　梅原加賀坊遺跡　金属製品一覧

番　号	図　版	地　区	遺構番号	座　標	層　位	種　　類	長	幅	厚	重	材　質	特記事項
288	66	B2	SD007			銭貨(永楽通宝)	2.4	2.4	0.14	3.56	銅	
289	66	B2	SD007			銭貨(嘉祐通宝)	2.4	2.4	0.13	3.65	銅	
290	66	B2	SD007			銭貨(皇宋通宝)	2.5	2.5	0.12	3.22	銅	
291	66	B2	SD007			銭貨(皇宋通宝)	2.4	2.4	0.14	3.98	銅	
292	66	B2	SD007			銭貨(至和元宝)	2.3	2.3	0.13	3.58	銅	
293	66	B2	SD007			銭貨(熙寧元宝)	2.3	2.3	0.14	3.02	銅	
472	66	B1N	SP422			銭貨	2.4	2.4	0.16	3.85	銅	一塊出土のうちの一枚
473	66	B1N		X122Y068	1層	銭貨(寛永通宝)	2.5	2.5	0.13	2.99	銅	
475	66	AW	SK002	X153Y050		つる	20.5	0.6	0.30	8.60	鉄	

第Ⅲ章　久戸遺跡

1　遺跡の概要

A　概　要

久戸遺跡は，梅原胡摩堂遺跡と梅原加賀坊遺跡の間の台地上に立地する。調査区中央部には南東から北西方向に向かって開ける小谷があり，谷の両側は小規模の舌状台地が形成されている。調査区の北西部は台地の縁辺部に当たり，傾斜は急になっている。谷は緩やかな落ち込みとなっており，北西に向かうにつれ幅が広がり，両側の台地との標高差は少なくなっていく。遺構確認面の標高は，最も高い南東部で約69.8ｍを測り，台地の縁辺部にあたる北西端は69.1ｍで最も低くなっている。

検出した遺構は，中世の掘立柱建物・柱穴・土坑で，調査区の東半部に多い。中央部の谷は，覆土上面で中世の柱穴が検出されているので，中世には埋まっていたものと考えられる。

掘立柱建物は調査区の南東部で２棟検出した。１棟は，桁行４間，梁行３間の東西棟で，両者とも総柱建物である。建物の北側には南北方向に並ぶ柱穴があり，柵列とも考えられるが，付近には東西に並ぶいくつかの柱穴が検出されており，これらの性格は不明である。

遺物は，掘立柱建物及びその他の柱穴から中世土師器が出土した。調査区中央の谷では打製石斧が出土した。表土及び包含層の遺物には縄文土器・石器，須恵器，中世土師器，珠洲，伊万里，砥石等がある。全体的な遺物量は他の遺跡に比べて少ない。

B　調査経過

調査期間は平成２年４月12日から６月８日までで，延べ日数は22日間である。

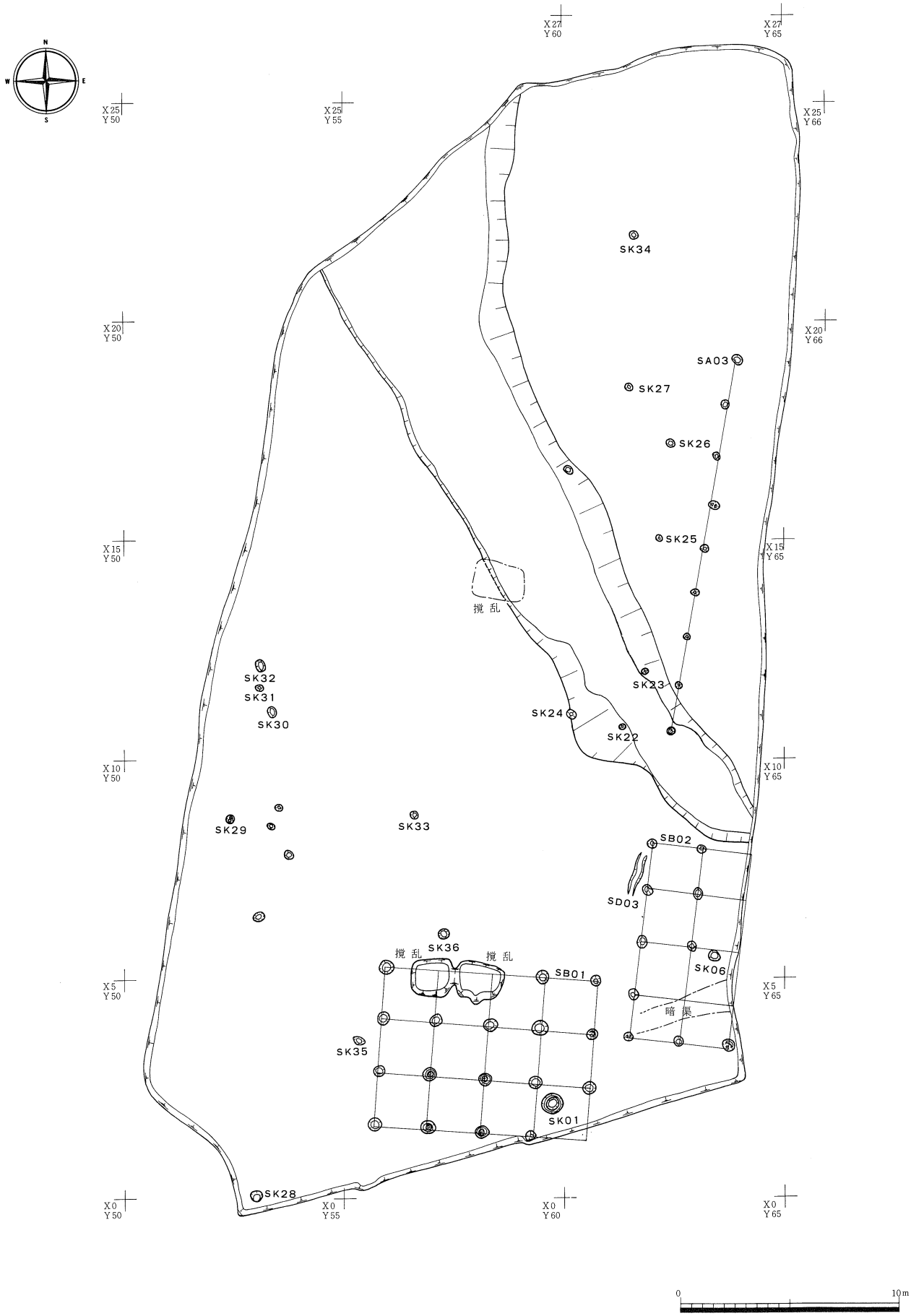
調査に先立ち，重機により表土を除去している。４月12日にベルトコンベアーを配置し，スコップを用いて包含層掘りを開始した。

４月末，北側の包含層掘削と並行して南側から遺構精査に取りかかる。基本層序の観察のため，調査区を縦断する東西，南北方向のセクションベルトを設け，５月初旬に層位を記録し除去した。同じ頃，調査区の南側の町道の付替え工事に伴い，遺構確認のための精査を行った。その結果，遺跡の広がりが認められたため，調査範囲を当初予定より拡張し，町道部分も含めることとなった。

５月14日，遺構掘りを開始した。建物については主要なエレベーションの実測及び土色注記をした。５月21日，全景写真を撮影した。５月24日に空中写真測量を行った後，補足の図化，写真撮影を行った。谷部及び表土で縄文時代の遺物が目立ったため，中世遺構面の調査終了後，重機により試掘トレンチを入れたが，縄文時代の遺構は検出されなかった。

C　土　層

基本層序は，Ⅰ層：表土及び耕作土（20～40㎝），Ⅱa層：黒褐色粘質土（10～30㎝），Ⅱb層：明褐色粘質土（10～20㎝），Ⅲ層：黄褐色粘質土である。Ⅲ層は基本的に黄褐色粘質土であるが，調査区の南西部では一部砂利層もみられた。Ⅱ層は遺物包含層であり，遺構を確認したのはⅢ層の上面である。また，谷部は，①層：黒褐色粘質土（10～20㎝），②層：褐色粘質土（10～40㎝）の水平堆積である。



第52図　久戸遺跡遺構実測図
SB01・SB02・SA03

2　遺　構

A　掘立柱建物

1号掘立柱建物（SB01，第53図，図版65・66）

調査区南端に位置する4間×3間の東西棟総柱建物である。桁行9.71m×梁行7.30m，平面積は71m²である。主軸はN-86°-Wである。桁行の柱間は，東から西へ2.40m（8尺），2.41m（8尺），2.50m（8尺3寸），2.40m（8尺）である。梁行の柱間は，南から北へ2.45m（8尺2寸），2.45m（8尺2寸），2.40m（8尺）である。このように梁行，桁行とも柱間の間隔は8尺を基準としている[注1]。

柱掘形は直径55cm前後のものが最も多く，一ハ・ニ柱穴，五ロ柱穴のみ42～45cmとやや小さい。平均値は54cmである。

覆土は黒褐色土及び暗黄褐色土が基本となっている。柱痕跡が残っている場合は掘形埋土が，また残っていない場合は下層の覆土が暗黄褐色土である場合が多い。また柱痕跡や，柱痕跡が残っていない場合の上層の覆土が黒褐色土である。このことから，SB01を構成するほとんどの柱穴において，柱穴に柱を据える際，柱掘形にいれた土が暗黄褐色土で，柱を抜き取った後に埋まった土が黒褐色土であると考えられる。柱痕跡には黒褐色土の間に暗黄褐色土が縞状に水平堆積するものもある。柱痕跡が残る柱穴は南側二列に位置するイ二三四柱穴，ロ三四柱穴である。イ一柱穴，ニ三四柱穴は撹乱のため確認できなかった。

2号掘立柱建物（SB02，第54図，図版66）

調査区南東部，SB01に隣接する総柱建物である。東西方向の柱列は，東側の調査区外へのびる可能性がある。南北方向の柱列の総長は890cmで，柱間は，南から北へ194cm（6尺5寸），246cm（8尺2寸），242cm（8尺），208cm（6.5尺）である。東西方向の柱間は，東から西へ225cm（7尺5寸），225cm（7尺5寸）である。東西の柱列の方向は，N-83°-Wであり，SB01とほぼ平行である。

覆土は，SB01と同じ黒褐色土及び暗黄褐色土であり，堆積の仕方もSB01と同様のパターンであるが，明確な柱痕跡はみられない。ハ一柱穴から中世土師器皿の完形品が割れた状態で出土した。

B　柵　列

3号柵列（SA03，第55図）

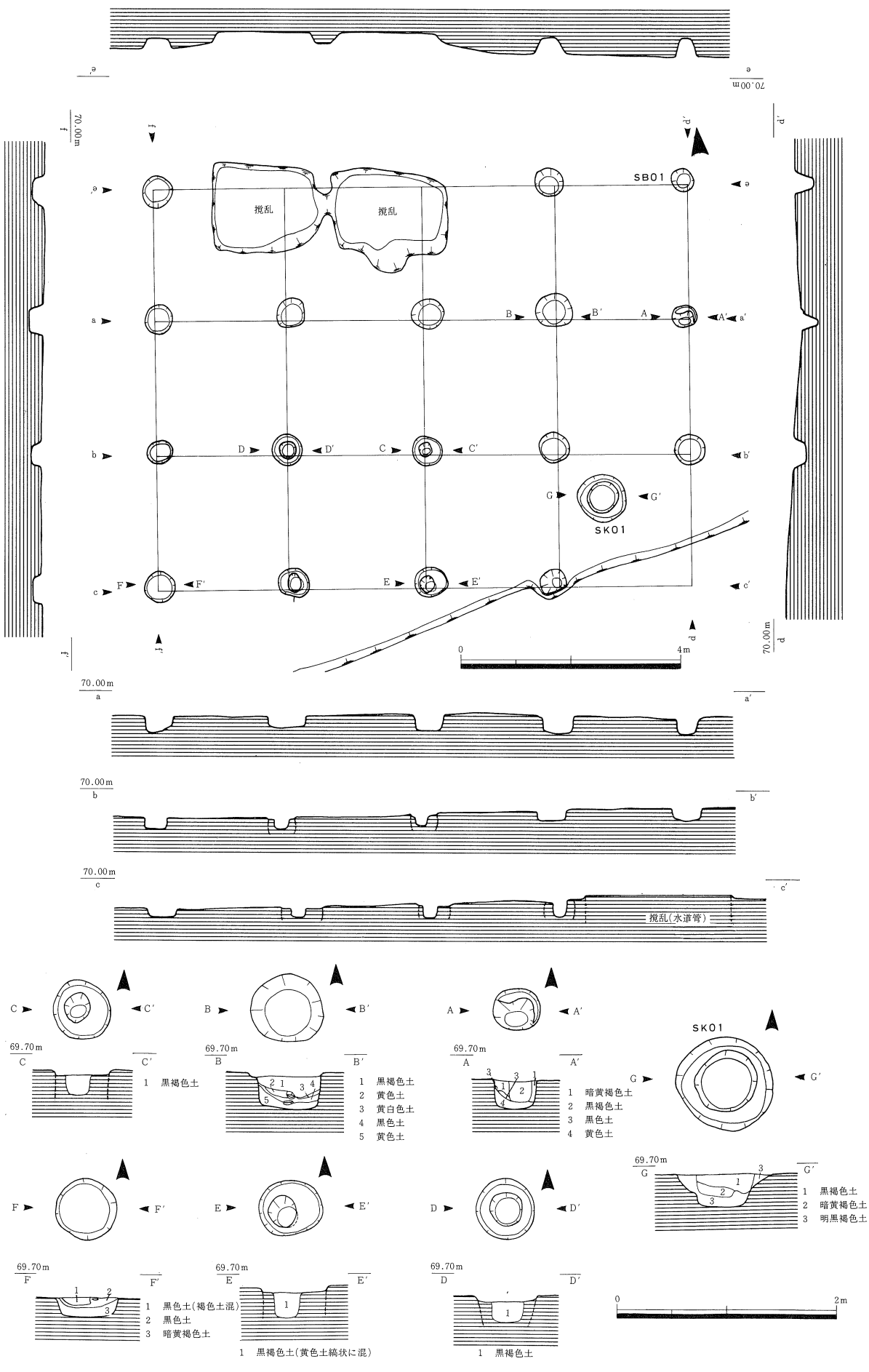
調査区の中央部東寄り，SB02の北側に位置する柱列である。柱穴はすべて調査区中央の谷の覆土の上面で検出されており，これらは谷部が埋まった後に掘られたものと考えられる。南北8間の柱列が7尺～7尺5寸の柱間で，ほぼ一直線上に並ぶ。主軸はN-9°-Eを向き，SB02の南北の柱列とほぼ同じ方向である。この一列の柱穴のみで，一つの施設を構成したと推定すれば，柵列と考えられる。しかし，この柱列に対してほぼ直角方向に，西へ向かって225cm（7尺5寸），240cm（8尺）の柱間で並ぶ柱穴(SK22～27)が検出されており，これらを含めた一連の遺構であった可能性もある。

柱穴の規模は直径25～35cmのものがほとんどで，SB01・SB02の柱穴と比較すると，小型である。

C　土　坑

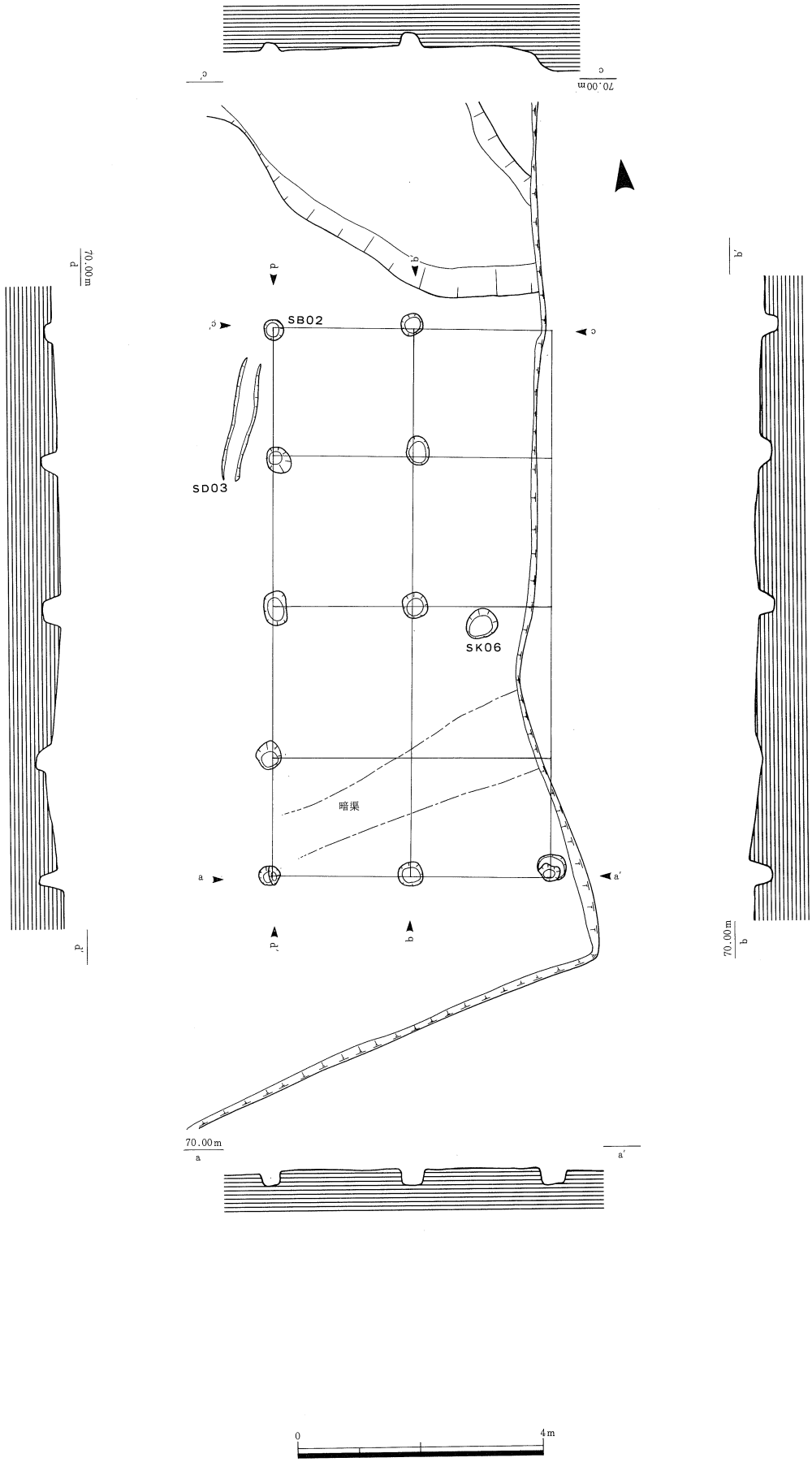
1号土坑（SK01，第53図）

調査区の南端，SB01の範囲内にかかる土坑である。平面形は円形を呈し，直径90cmを測る。検出面から約15cm下に，16cm幅の段があり，中心はさらに深い穴になっている。覆土は柱痕跡状になっているが，土坑の性格は不明である。

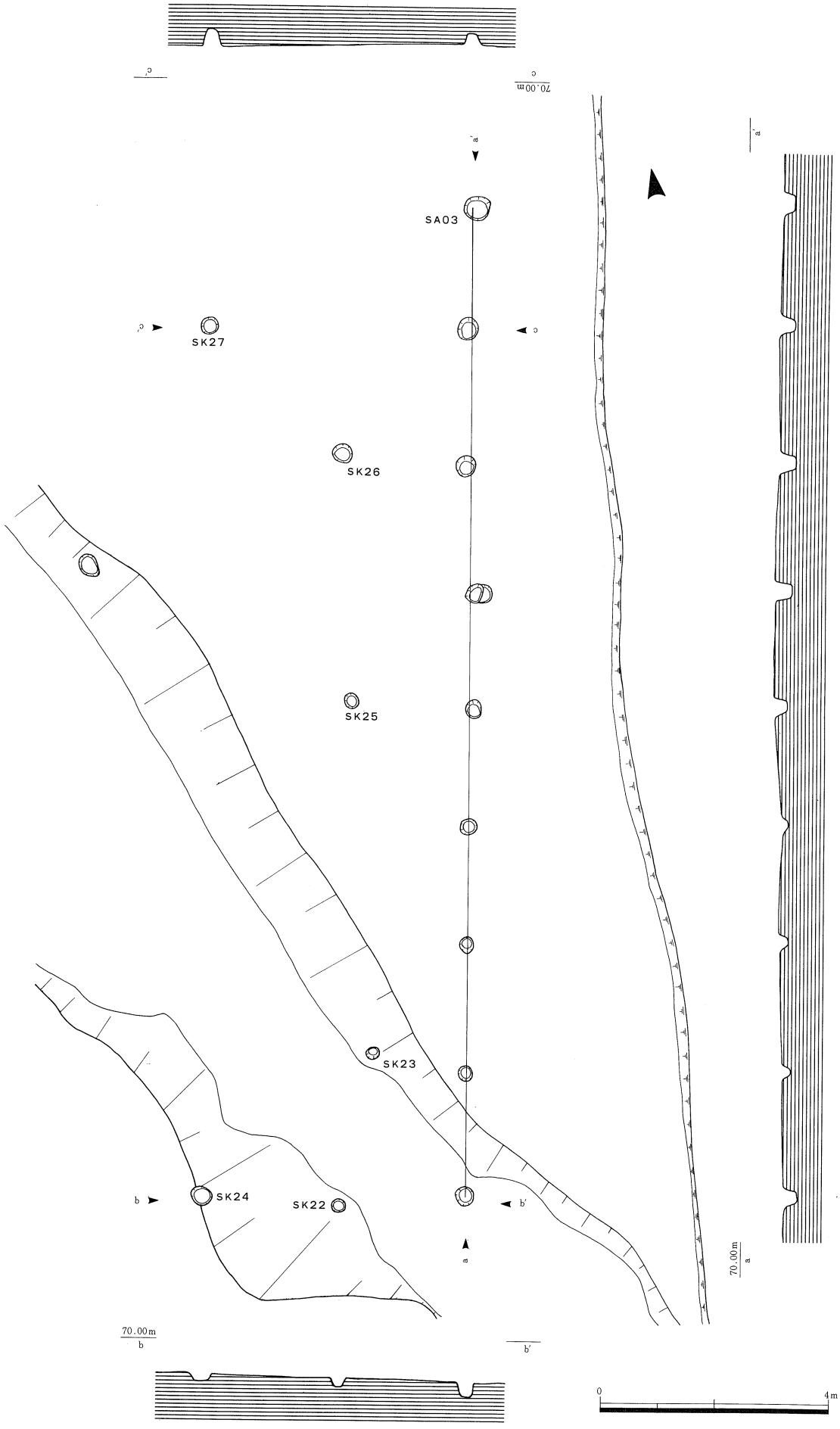


第53図　久戸遺跡遺構実測図

SB01・SK01



第54図　久戸遺跡遺構実測図
SB02



第55図　久戸遺跡遺構実測図
SA03

3　遺　物

遺物は全体的に少なく，遺構からの出土も少ない。SB01・SB02の柱穴からは中世土師器が出土しているが，1のみ図化が可能であった。調査区中央の谷部からは打製石斧(9)等が出土している。

A　遺構出土の遺物

2号掘立柱建物（SB02，第56図，図版67）

1は中世土師器皿で，ハ一柱穴から出土したものである。体部は直線的に開き，口縁端部に面をとる。ロクロ成形であるが，全体的に歪みがあり，外面の調整はやや粗雑である。底外面には右回転の糸切り痕を残す。色調はにぶい橙色を呈し，一部黒変する。胎土に赤色酸化粒を含む。12世紀後半から13世紀初頭のものと考えられる。

B　表土・包含層出土の遺物（第56図，図版67）

遺物は全体的に量が少なく，多くはⅡa～b層から出土したものである。打製石斧(9)は中央の谷部から，縄文土器(3)は谷部肩のⅡb層から出土した。

2は須恵器高台杯の底部破片である。高台は外方へややふんばる。体部内外面はロクロ撫で，底外面は回転篦切り痕を残す。焼成は良好で，胎土に海綿骨針を含む。8世紀代のものと考えられる。

3～7は縄文土器である。

3は調査区中央谷部肩付近のⅡb層から出土した鉢の口縁部で，頸部から口縁部にかかる外面に幅約1㎝の平行沈線を4条施している。内外面を撫で，一部磨いている。色調は，褐灰色を呈する。後期後半の井口Ⅱ式に比定できる[注2]。

4は深鉢の口縁部であり，波状口縁になると考えられる。突帯下には棒状工具で1条の沈線を施す。内外面に丁寧な磨きを施す。色調はにぶい橙色を呈する。後期後半の八日市新保式に比定できる[注3]。

5は深鉢の口縁部である。口縁が内折し，外面に断面四角形の棒状工具で4条の平行沈線を施している。色調はにぶい黄褐色を呈する。後期前葉の気屋式に比定できる[注4]。

6は鉢の口縁部である。内外面に磨きを施す。色調はにぶい黄褐色を呈する。後期のものであろう。

7は深鉢の底部である。色調は，橙色を呈する。器表面は磨滅しており，調整等は不明である。後晩期のものであろう。

8は越中瀬戸皿で，表土から出土したものである。内面に，にぶい赤褐色の鉄釉を施す。外面の一部にも釉が付着している。内面には重ね焼の痕跡がある。底外面に，右回転の糸切り痕を残す。

9～12は打製石斧である。すべて片面に自然の礫面が残る。

9は撥形で，側縁が直線的に広がるものである。自然礫面の基部周辺の比較的大きな割れは，加工痕ではなく，後世欠損したものである。長さは18.0㎝，幅は最大で9.1㎝，厚さは4.3㎝である。石材は凝灰岩である。

10は基部を欠損している。側縁部には細かな剝離が加えられているが，刃部には整形剝離はなく，第一次剝離面をそのまま使用している。石材は砂岩である。

11は基部を欠損しているが，短冊形になるものと思われる。側縁部及び刃部に整形剝離が加えられている。石材は砂岩である。

12は短冊形を呈する。側縁部を中心に，刃部，基部にも細かな整形剝離が加えられる。石材は安山岩である。

13は砥石である。石材は砂岩で，荒砥に使用されたものと考えられる。長さが12.7㎝，幅が7.1㎝，厚さが5.5㎝である。柱状で，側面は撥型を呈し，断面形は長方形である。端面にV字状の抉れや，

筋状の使用痕が残る。

4　まとめ

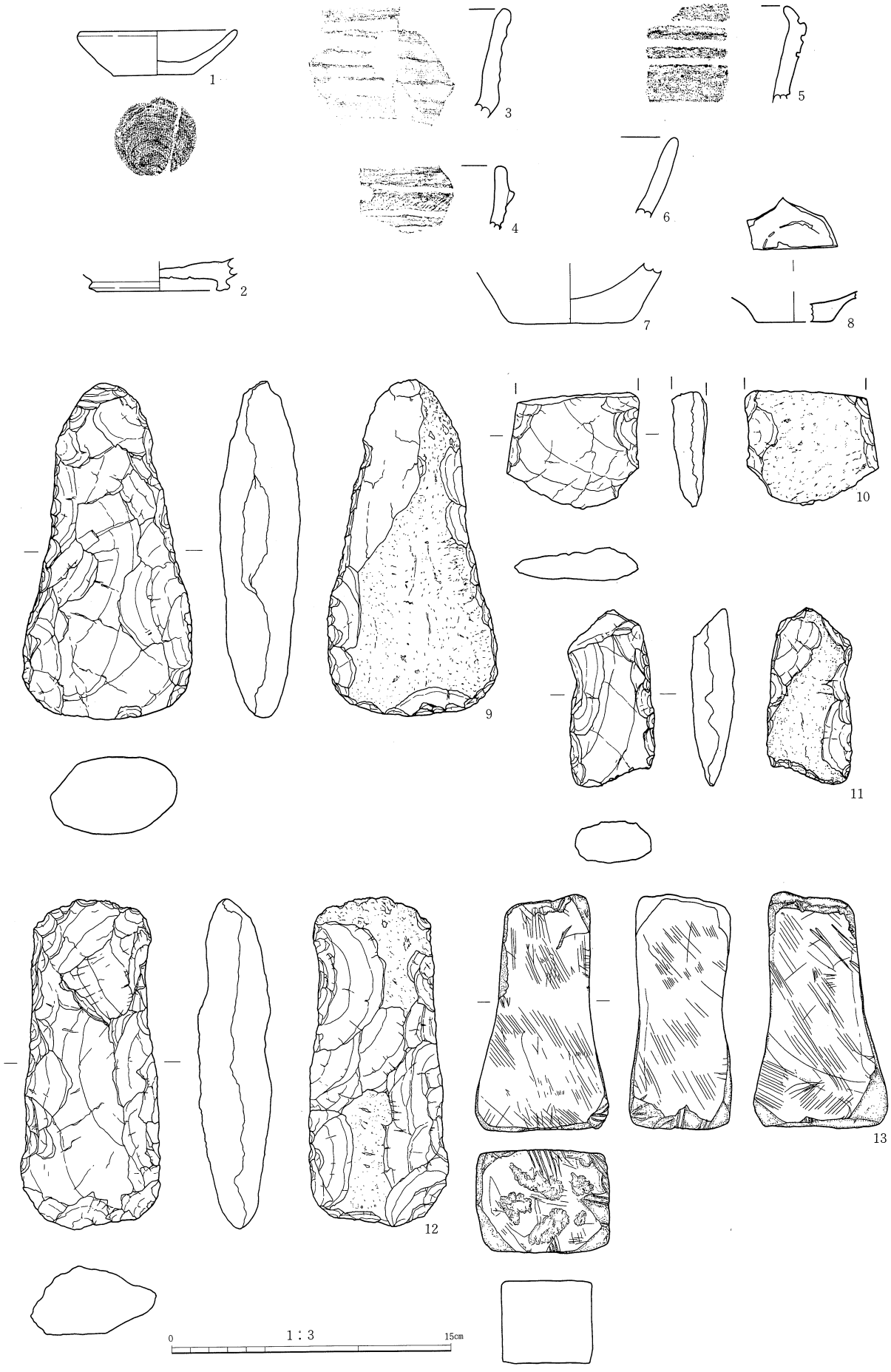
本遺跡は調査面積が1,200㎡と狭く，遺構・遺物量ともに全体量は他遺跡に比べ少ない。最も多く出土した遺物は縄文時代の土器及び石器であり，後期に比定されるものが多い。調査区中央には谷状地形があり，縄文時代以前の自然地形は，小規模の舌状台地とそれらに挟まれた小谷であったと考えられる。この谷の覆土から，後期後半に位置づけられる井口Ⅱ式の鉢と打製石斧が出土しているため，谷が埋まったのは縄文時代後期以降と考えられる。

包含層（Ⅱ層）から須恵器が出土しており，周辺では古代にも生活が営まれていた可能性はあるが，遺構として確認されたものは，中世の掘立柱建物，柵列，土坑である。このうち柵列は谷状地形の覆土上面で検出されており，谷が中世には埋まっていたことを示している。掘立柱建物は２棟あり，両者とも総柱である。また柵列としたものも西へ向かって柱間が伸び，２間×８間の建物となる可能性もある。SB01・02に比べ柱穴も小規模であることから性格の異なる建物と考えられ，推測の域を出ないが，柱間から厩等の用途も考えられる。調査区西側には小土坑が散在しているが，遺物もなく，時期や性格は不明である。

遺構から出土した遺物は，SB01出土の中世土師器片とSB02出土の12世紀後半から13世紀初頭に位置づけられる中世土師器皿のみであり，これによって建物の年代の一端が押さえられる。またSB01・SB02・SA03は覆土や軸方向がほぼ同じであり，同時期に機能した可能性が高い。当遺跡の南方には梅原胡摩堂遺跡があり，その北辺が同様の年代の集落跡であることから，ほぼ同時期の集落跡であったものと考えられる。

（越前慎子）

注１　この点については，下記文献において既に指摘されている。
　　伊佐智法 1991 「Ⅴ 久戸遺跡の調査」『発掘調査概報(2)』富山県文化振興財団
注２　小島俊彰 1985 「井口式土器様式」『縄文文化の研究 4』雄山閣
注３　高堀勝喜編 1983 『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会
注４　米沢義光 1989 「気屋式土器様式」『縄文土器大観 4』小学館



第56図　久戸遺跡遺物実測図　(1/3)

第13表　久戸遺跡　建物一覧

挿図	図版	遺構番号	桁行柱間	梁行柱間	桁行長 cm	桁行長 尺	桁行長 平均cm	梁行長 cm	梁行長 尺	梁行長 平均cm	平面積 (㎡)	桁行柱間 cm(尺)	梁行柱間 cm(尺)	横方向	方位	柱形式	出土遺物	備考	時期
53	65･66	SB01	4	3	971	32.3	242	730	24.0	241	71	240(8.0),241(8.0),250(8.3),240(8.0)	245(8.0),245(8.0),240(8.0)	東西棟	N86°W	総柱	中世土師器		12C後半～13C初
54	66	SB02	4	2	890	29.5	222	(450)	15.0	225	(40.4)	194(6.3),246(8.2),242(8.0),208(7.0)	225(7.5),225(7.5)	南北棟	N83°W	総柱	中世土師器(1)	東へ延びる可能性有	12C後半～13C初
55		SA03	8	2	1725	57.5	215.6	465	15.5	232.5	80	215 (7.0), 226 (7.5), 204 (7.0), 206 (7.0), 201 (6.5), 221 (7.5), 241 (8.0), 211(7.0)	240(8.0),225(7.5)		N9°E				12C後半～13C初

第14表　久戸遺跡　溝一覧

挿図	図版	遺構番号	流路	規模：幅	規模：深さ	出土遺物	時期
		SD03		26～38	4		

第15表　久戸遺跡　土坑一覧

挿図	図版	遺構番号	平面形	規模：長	規模：短	規模：深	出土遺物	時期
53		SK01	円	90		32		
		SK22	円	22		16		
		SK23	円	22		17		
		SK24	円	35		12		
		SK25	円	24		11		
		SK26	円	32		7		
		SK27	円	30		21		
		SK28	円	53		28		
		SK29	円	38		9		
		SK30	円	48		26		
		SK31	円	31		13		
		SK32	楕円	57	40	10		
		SK33	楕円	34	28	4		
		SK34	円	31		13		
		SK35	楕円	50	37	21		
		SK36	円	48		28		

第16表　久戸遺跡　土器一覧

挿図	図版	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
1	67	SB02			中世土師器	Ⅲ		12C後半～13C初頭								にぶい橙色	赤色酸化粒
3	67		X 09Y64	Ⅱb層	縄文土器	鉢		後期後半								褐灰色	井口Ⅱ式
5	67			Ⅱ層	縄文土器	深鉢		後期前葉								にぶい黄褐色	煤付着　気屋式
4	67			Ⅱ層	縄文土器	深鉢		後期後半								にぶい橙色	八日市新保式
6	67			Ⅱ層	縄文土器	鉢		後期								にぶい黄褐色	
7	67			Ⅱ層	縄文土器	深鉢		後晩期								橙色	石英
2	67			Ⅱ層	須恵器	杯B		8C								灰色	骨針
8	67			Ⅰ層	越中瀬戸	Ⅲ					4.0		鉄釉		にぶい赤褐色	にぶい黄橙	重ね焼痕

第17表　久戸遺跡　石製品一覧

挿図	図版	遺構番号	層位	種類	長	幅	厚	重	石材
9	67	谷部	①～②層	打製石斧	18.0	9.1	4.3		凝灰岩
10	67		Ⅱ層	打製石斧	6.2	7.2	1.8	104.9	砂岩
11	67		Ⅱ層	打製石斧	9.5	4.6	2.3	135.5	砂岩
12	67		Ⅱ層	打製石斧	17.7	7.5	3.8	586.3	安山岩
13	67		Ⅱ層	砥石	12.7	7.1	5.5	777.9	砂岩

第Ⅳ章　梅原安丸遺跡

1　遺跡の概要

A　概　要

梅原安丸遺跡は，西礪波郡福光町の北東端に所在する。遺跡の東側には，福光町と東礪波郡福野町の境界をなす小河川権現堂川が流れており，遺跡は郡境，町境に位置している。遺構確認面は標高平均63.5ｍを測り，現水田面からは10～20㎝下である。

調査区の東側約半分を占める川跡（SD23）は，権現堂川の旧河道と考えられる。調査区で検出した部分はその左岸と西側縁辺部にあたり，河道が弧状であることから当時は蛇行していたことが窺える。この川跡から五輪塔の空風輪及び地輪等が出土している。

西側の河原にあたる部分では，土坑・溝を検出した。遺跡の南側には火葬施設と思われる隅丸方形（SK14・SK15）及び円形（SK19）の土坑がある。これらの土坑からは焼けた人骨片，銅銭，五輪塔，炭化米，中世土師器皿等の土器・陶磁器類が出土した。この他にも焼骨が出土する小規模の土坑がある。他の小土坑の分布は，散漫である。遺跡の時期は，15～16世紀が中心と考えられる。

また，遺跡がある一帯は古くから「サンマイダ」と称されている。「サンマイ（三昧）」は火葬場を指すことが多く，焼けた人骨片等が出土した土坑の性格との関連性が考えられる。

B　調査経過

河川改修工事にかかるため早期の着工を要請され，調査は平成２年４月12日に開始し，同年６月８日に終了した。調査を行った延日数は58日間である。

表土及び耕作土は調査員立ち会いのもと重機によって除去した。包含層はほとんど残っておらず，水田の床土の下は遺構確認面であり，精査及び遺構掘りは人力による掘削を行った。

表土及び川跡（SD23）等の遺構から出土した遺物はグリッド別に分けて取り上げた。

SD23は，遺構確認面から約70㎝掘り下げたところで，砂質土及び粘質土が所々に混入する厚い礫層となった。礫層は相当深いようだったため，これを約80㎝掘り下げた時点で一旦掘削を中止し，空中写真測量を行った後，重機によって長さ約23ｍのトレンチ掘りを行った。その結果SD23の覆土である礫層の下に，更に古い時代の堆積と考えられる厚い礫層が広がっていることが確認された。土層観察を行った後，掘り残した覆土のみ人力によって掘削し遺物の有無を確認した。

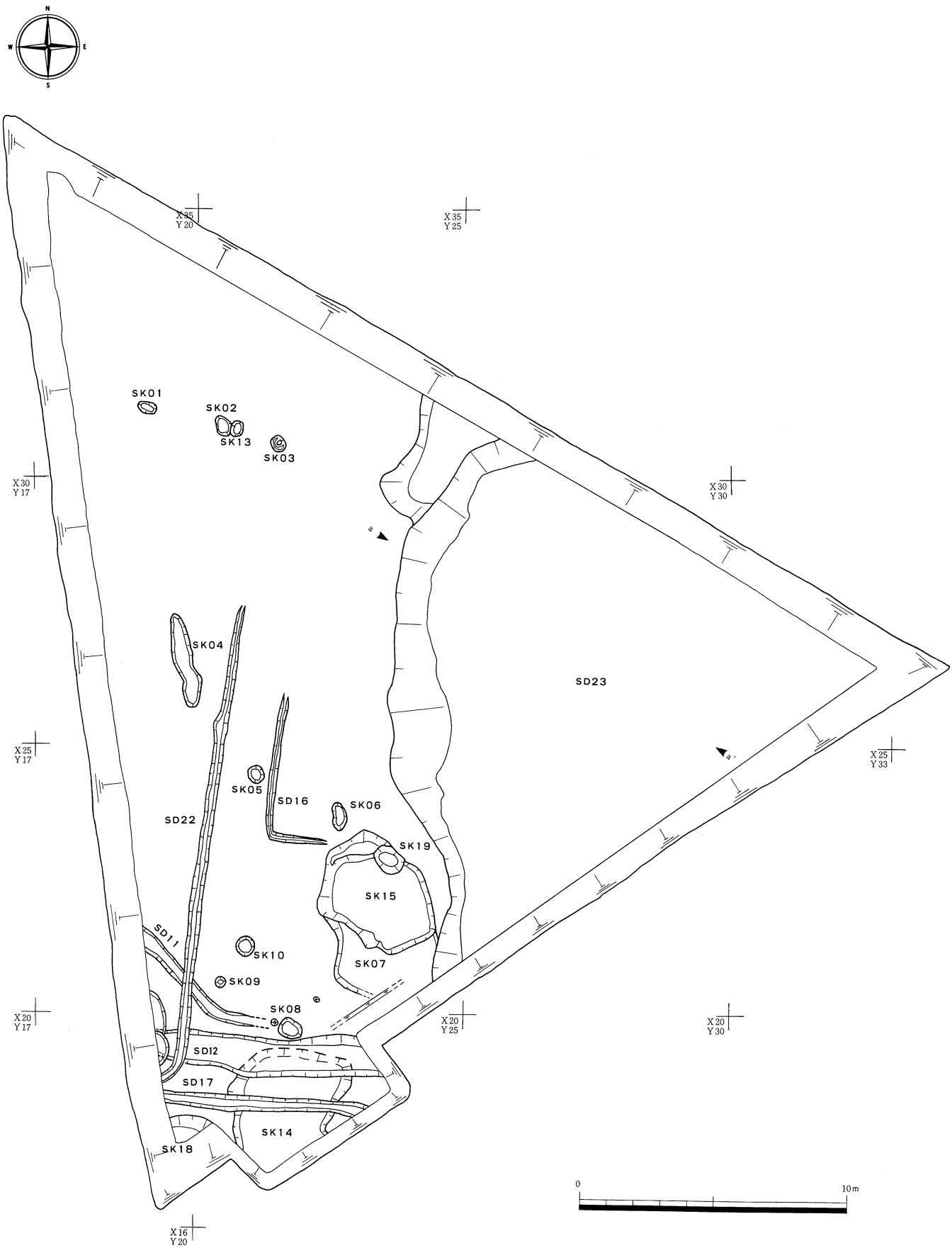
また調査区南端にかかる遺構SK14は，調査当初から遺構の一部を確認していたが，骨等が出土したため，空中写真測量後調査区を若干拡張して遺構掘りと簡易遣り方測量を行った。

C　土　層

表土及び耕作土の下に水田の床土を一枚はさみ，遺構確認面となる。包含層はほとんど残っていない。またSD23の東端では旧水田が一段下がっており，床土面は西側より約40㎝低くなっている。

遺構確認面は黄褐色粘質土である。遺構確認面から約20～40㎝下には礫層があり，この礫層が隆起して遺構確認面に表れている部分もある。その下には厚さ約１ｍの青灰色粘質土層があり，更に下は明茶褐色礫層が厚く堆積している。

SD23は明茶褐色礫層の直上に底面が達しており，そのほかの遺構は黄褐色粘質土または青灰色粘質土の層まで掘り込まれている。



第57図　梅原安丸遺跡遺構実測図

2　遺　構

A　溝

11号溝（SD11，第58図，図版69）

流路は，SD12に交差する直前で屈曲する。溝底の標高は東側がやや低くなっており，東へ向かって流れたものと考えられる。覆土の切り合いではSD22よりも古い。覆土は灰褐色粘質土である。覆土中から中国製青磁と石鉢，遺構の上面で伊万里が出土している。中国製青磁は碗の体部の小破片で，内面に劃花文があり，12世紀後半～13世紀前半のものである。石鉢は底面直上で検出された。

12号溝（SD12，第58・61図，図版69）

東西方向の溝で，幅は最大で147㎝，深さは21㎝を測る。覆土の切り合いから，SD22よりは古く，SK14よりは新しい時期のものであることがわかる。覆土は，細分すると，上面に薄く堆積するしまった灰黄色粘質土，拳大の石から細かな砂礫を含む暗茶褐色礫層，小礫を含む茶褐色砂礫層の３層に分かれるが，溝を廃棄する際に砂利を使用して一時期に埋め戻したものと推定される。

遺物は，須恵器，中世土師器，珠洲，八尾，瀬戸美濃，中国製青磁，骨がある。SK14の覆土を掘り込んでいるので，一部にもともとSK14の覆土に含まれていた遺物が混入している可能性もある。骨は混入と考えてよいであろう。遺物のうち最も年代の下るものは大窯Ⅱ期（1520～1555年）の瀬戸美濃で，溝の廃絶は16世紀前半以降と考えられる。骨はヒトの頭骨片，肢骨片等である[注1]。

17号溝（SD17，第58・61図，図版69）

SD12に平行する東西方向の溝で，最大幅は69㎝である。検出した覆土の深さは28㎝であり，底はSD12とほぼ同じ標高となる。切り合いからSK14より新しい。覆土は茶褐色砂礫層である。

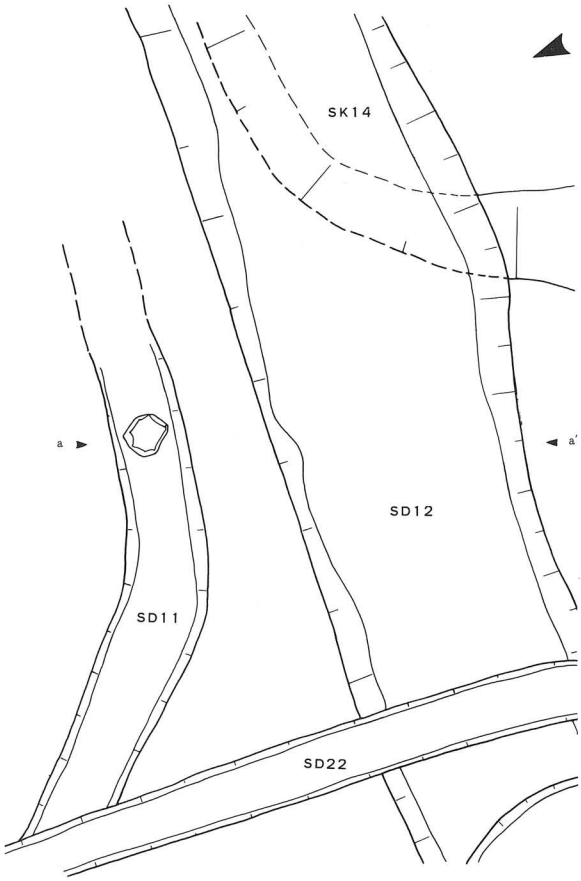
遺物は，中世土師器と珠洲が出土している。中世土師器皿の形態がSD12出土のものと同様であり，これがSK14からの混入でないとすれば，SD12とほぼ同時期の遺構である可能性が高い。

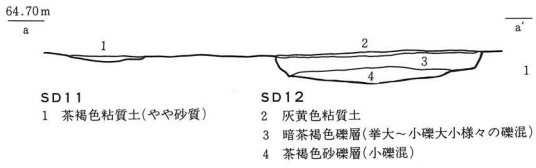
23号溝（SD23，第58・59図，図版69・70）

調査区の東側約半分を占める川跡で，現在遺跡の東側を流れる権現堂川の旧河道と考えられる。現在の権現堂川は，南から北へと流れており，SD23も同様の方角へ流れていたと思われる。

深さは，遺構確認面から174㎝である。上層は，炭混じりの茶褐色粘質土が約50㎝堆積しており，西側の肩付近では異なる色調の粘質土がブロック状に混入する。上層の粘質土と下層の礫層の間には，灰茶褐色粘質土層及び灰茶褐色砂質土層があり，約20㎝の厚さで水平堆積している。最下層は赤茶褐色礫層が厚く堆積し，部分的に砂質土や粘質土が互層になっている。

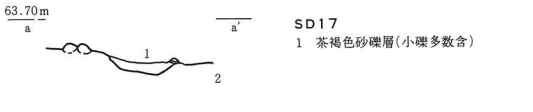
遺物を層位別にみると，上層の茶褐色粘質土からは須恵器，中世土師器，珠洲，八尾，越前，唐津，伊万里，灰茶褐色砂質土からは五輪塔の水輪が出土しており，下層の赤茶褐色礫層からは須恵器，土師器，珠洲，越前，中国製青磁，五輪塔の空風輪，鉈（なた），ウマの上顎骨臼歯が出土している。赤茶褐色礫層の遺物のうち，最も時期が下る遺物は14世紀後半～15世紀前半の中国製青磁とⅤ期（1380～1440年代）の珠洲擂鉢である[注2]。ウマの臼歯は赤茶褐色礫層の中でも上の方から出土しており，エナメル質部分のみ残存している。赤茶褐色礫層の遺物のうち比較的下位から出土したものは須恵器，鉈，ウマの臼歯で，ほかは上位から出土している。またSD23の東側は旧水田の床土面が一段下がり，覆土を掘り込んでいる部分があるが，その耕作土からヒトの焼骨（大腿骨片及び細片）が出土しており，もともとSD23の上層の覆土に含まれていた骨が掘り返されたものと考えられる。また，これらはSD23に隣接し，焼骨を多く含むSK15等から流れ込んだものである可能性が高いと考える。



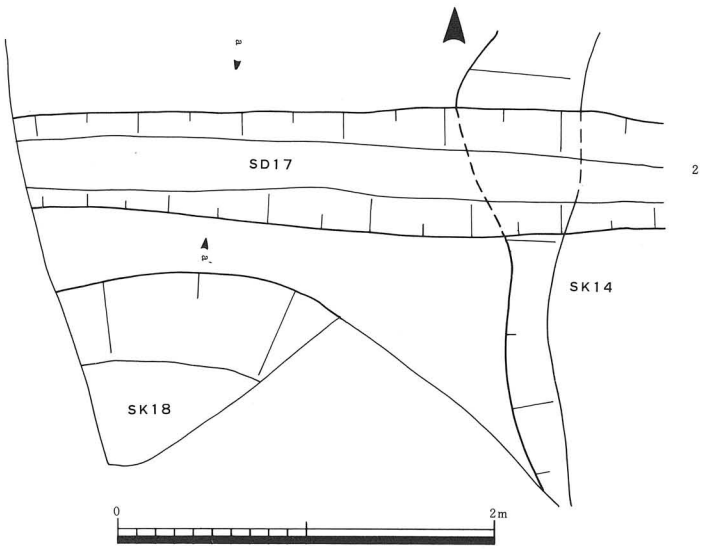


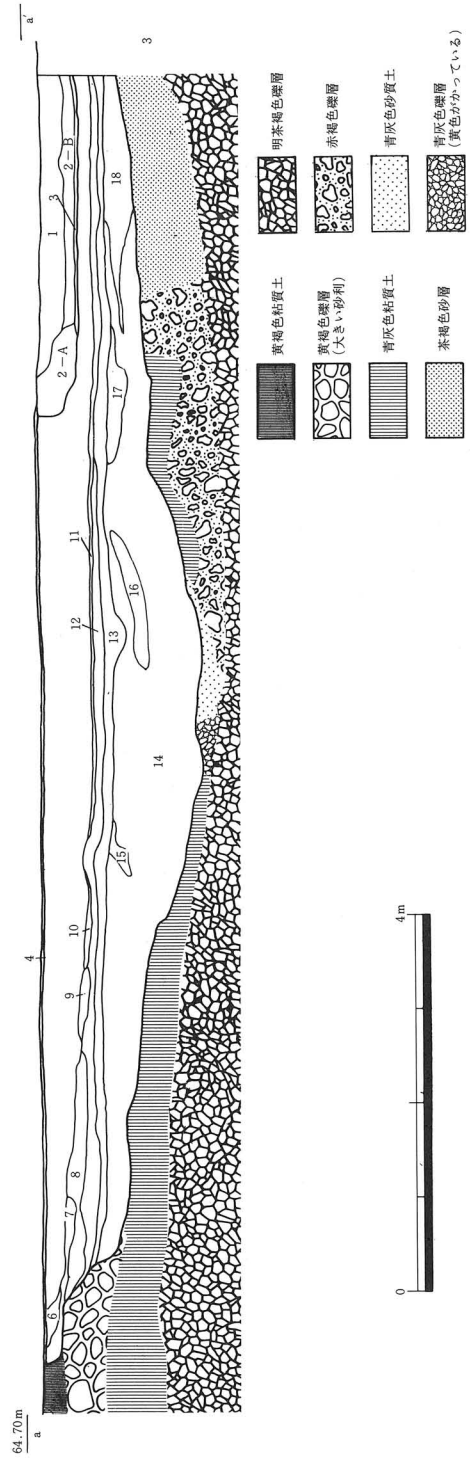
SD11
1 茶褐色粘質土(やや砂質)

SD12
2 灰黄色粘質土
3 暗茶褐色礫層(拳大～小礫大小様々の礫混)
4 茶褐色砂礫層(小礫混)

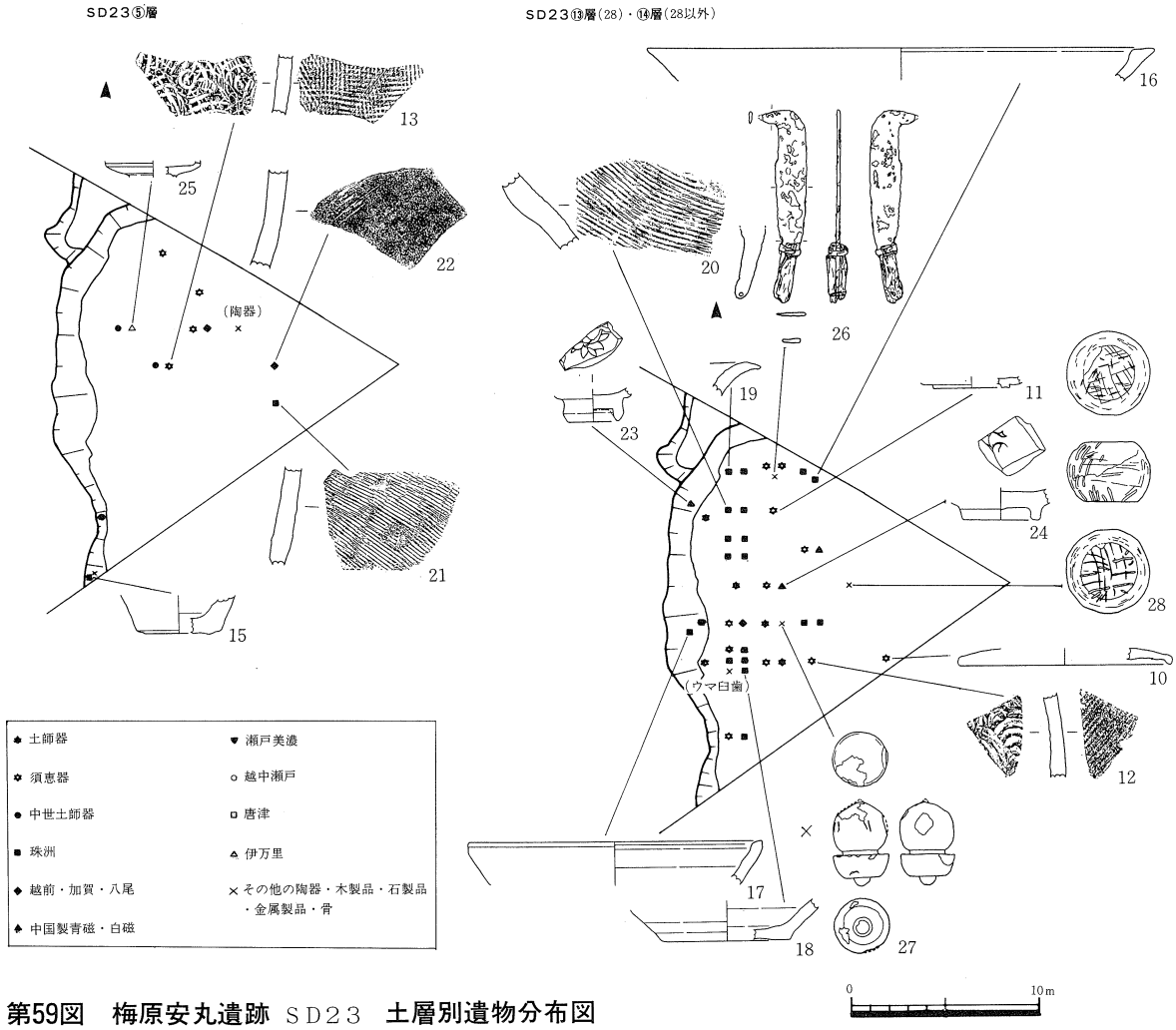


SD17
1 茶褐色砂礫層(小礫多数含)





第58図　梅原安丸遺跡遺構実測図
1.SD11・SD12　2.SD17　SD23



第59図　梅原安丸遺跡　SD23　土層別遺物分布図

SD23の覆土の堆積状況と出土遺物から，堆積の過程を次のように推測する。SD23（旧権現堂川）の流れが比較的に急であった15世紀頃までの水成堆積によって下層の厚い礫層が形成され，その後河道が徐々に東へ移っていくとともに流れが緩くなって，まず砂質土が堆積し，15世紀後半乃至16世紀から近世にかけては淀んだ上層の粘質土が堆積し，後に水田として使用されるに至ったのであろう。

B　土　坑

1号土坑（SK01，第60図）

調査区の北西部で検出した小土坑である。平面形は楕円形を呈し，長径63cm，短径38cm，深さは13cmを測る。最終レベルは63.56mである。覆土はやや砂っぽい灰褐色粘質土と黄褐色粘質土である。遺物は出土していない。SK02・SK03・SK13と直線上で結ばれ，ともにひとつの建物を構成していた柱穴であった可能性もあるが，柱痕は無く断定できない。

2号土坑（SK02，第60図）

SK01の隣で検出した小土坑である。SK03と接しこれよりは深く掘り込まれており，切り合いはない。平面形は楕円形を呈し，長径84cm，短径62cm，深さ22cmを測る。最終レベルは63.32mである。覆土は茶褐色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

3号土坑（SK03，第60図）

SK02・SK13と同じく調査区北西部で検出した小土坑である。平面形は楕円形を呈し，長径60cm，短径45cm，深さ14cmを測る。最終レベルは63.40mである。中央部が一段深くなっており柱が据えられていた部分とも考えられるが，覆土は茶褐色土の単層である。遺物は出土していない。

5号土坑（SK05，第60図）

調査区の西側中央部で検出した。平面形は直径65cmの円形を呈するが，深いところでも5cm程土を剝ぐと地山となる。覆土はやや砂っぽい茶褐色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

6号土坑（SK06，第60図）

調査区西側中央部，SK14の北で検出した。平面径は楕円形で，長径1m，短径40cm，深さ10cmを測る。覆土はやや砂っぽい暗茶褐色土の単層である。遺物は出土していない。

7号土坑（SK07，第62図，図版71）

SK15の南にある土坑で，床面はSK15より一段高くなっており，ほぼ平坦である。平面形は不整形で，東西405cmを測り，南側は調査区外へと延びている。深さは南端で24cmを測り，床面の標高は南東に向かってなだらかに下がっている。

SK15と接するが，北東側の土層（a-a′）ではSK15の灰黒色灰層の範囲が途切れずに続いており，切り合いがみられないため，埋まる過程はSK15の上層と同時であったものと考えられる。また西側及び南側の土層（b-b′・e-e′）では，SD23の上層と同じ茶褐色粘質土の単層となっており，SD23との切り合いはみられない。これらの切り合い関係からSK07の覆土の堆積過程をまとめると，SK07が機能している過程，あるいは廃絶するため埋められたのはSK15の上層と同時であり，その後のSD23上層の土の堆積がSK07の南側から西側部分にも及んだものと考えられる。

遺物は，中世土師器，珠洲，八尾，越前，瀬戸美濃，骨が出土している。骨はヒトの肢骨片（焼骨）で，中程の高さから出土している。細片であるが量は少なくない。中世土師器には非ロクロ成形の小皿の他に，小片であるがSK19等出土のものと同じ形態のロクロ成形皿がある。他の遺物の年代は15世紀後半～16世紀に位置づけられ，越前の年代から最終的にこの遺構が埋まったのは16世紀と考えられる。

8号土坑（SK08，第60図）

調査区南西部で検出した土坑である。平面形は隅丸方形を呈し，長辺で90cm，短辺で65cm，深さ15cmを測る。覆土は2層に分かれており，上層は子供の拳大の礫を含む黄褐色砂利混じり粘質土で，下層は砂利を少量含む黒褐色粘質土である。二つの層はほぼ水平堆積である。遺物は珠洲擂鉢と壺の破片，骨が出土している。骨は上・下層から多数出土している。全てヒトの焼骨で，部位不明のもの以外は全て肢骨片である。

9号土坑（SK09，第60図）

調査区の南部で検出した土坑である。平面形は円形で，直径40cm，深さ44cmを測る。覆土には柱痕跡が認められるが，他に建物を構成すると考えられる柱穴は確認されていない。柱自体は残っていないため正確な形状はわからないが，覆土の断面観察では柱根部分が地山に深く入っているので，杭状のものであった可能性が高いと考えられる。柱痕跡部分は茶褐色粘質土，掘形部分は灰茶褐色粘質土で，上層の明茶褐色粘質土は廃棄時に埋め戻した土と考えられる。遺物は，覆土の中程の高さから，焼骨（ヒトの肢骨片）が1片出土している。

10号土坑（SK10，第60図）

調査区の南側で検出した土坑である。平面形は円形で，直径72cm，深さ13cmである。覆土は炭と地

山の茶褐色粘質土がブロック状に混入する茶褐色粘質土で，この土坑を廃棄するときに埋め戻した土と考えられる。この茶褐色粘質土を除去すると，更に，遺構の北半部分に，繊維を多く含む黒灰色土が詰まった浅い落ち込みが検出された。落ち込みは長軸22㎝，短軸16㎝の楕円形で，深さはSK10の上面から測って16㎝であり，底面は緩やかに湾曲する。遺物は出土していない。

13号土坑（SK13，第60図）

SK02と接するが切り合いはない。覆土は砂っぽい茶褐色粘質土である。長辺55㎝，短辺45㎝の方形で，深さは６㎝である。遺物は出土していない。

14号土坑（SK14，第61図，図版70）

調査区の南端で検出した。遺構の南端は調査区外へ延びているが，調査区内で検出した部分では，南北465㎝，東西380㎝を測るやや不整な隅丸方形で，深さは54㎝である。覆土の切り合いでは，SD12及びSD17より古い。上層の大部分は，小礫から15㎝大の礫を含む砂利混じりの灰黒褐色土で占められ，南側の一部に灰黒褐色粘質土と黄褐色粘質土が混じる土が入る。下層は，灰黒褐色粘質土の混じる青灰色粘質土が約10㎝の厚さで水平堆積している。粘性の高い締まった感じの土である。また，下層の直上から覆土の中程の高さにかけて，礫と多数の自然木が残っていたが，意図的におかれたものかどうかは不明である。

遺物は，中世土師器，珠洲，越前，中国製白磁，銭貨，五輪塔，炉壁または鞴羽口と思われる粘土塊，骨がある。銅銭は４枚あり，このうちの３枚は重なった状態で出土した。六道銭の可能性がある。五輪塔（空輪）は土坑中央付近で，砂利混じりの灰黒褐色土中から出土した。炉壁または鞴羽口と思われるものは，細かな粘土塊が数点出土しただけで，形態のわかる破片はないが，外面は撫でて滑らかになっている。内側は二次的被熱のため灰色に変色している。骨片（焼骨）が多数あり，上層及び中層からヒトの頭頂骨片，頭蓋骨片，耳骨，四肢骨片，側頭骨片，肢骨片，上腕骨片，下顎骨片等が出土している。頭蓋骨片には，薄く若年のものかと考えられるもの，縫合未化骨が含まれる。他に獣類の四肢骨片が１点あるが，出土した層位は不明である。

年代の下る遺物はⅣ～Ⅴ期（1280～1440年代）の珠洲甕片と，初鋳1406年の永楽通宝である。遺構の性格と時期は，遺構の規模や覆土，出土遺物，骨の出土等共通点が多いSK15と同じと思われる。

15号土坑（SK15，第62図，図版71）

調査区の南部分で検出した。長軸505㎝，短軸322㎝の隅丸方形で，深さは52㎝である。

最下層は，厚さ10～20㎝の灰黄褐色粘質土と灰褐色粘質土の混合層で，土層断面（b-b′・d-d′）は東側の遺構確認面から皿状に落ち込む堆積状況を示している。隣接するSK07と同時に機能していたと考えられるが，最下層の上面はSK07の床面の高さとほぼ同レベルとなっている。その上には，灰茶褐色粘質土，茶褐色土等が堆積している。これらの層の上面からSK19が掘り込まれる。また灰茶褐色粘質土の範囲は南側のSK07に続くが，その上面には薄く広がる灰層が確認されている。上層は，黄褐色土が混入する暗茶褐色土である。またSK07から続いてくる茶褐色粘質土はSD23と切り合いのない土で，SD23の上層の堆積過程と同時に埋まった土と思われる。

遺物は，珠洲，越前，中国製青磁，還元炎焼成の産地不明陶器，骨が出土している。土器・陶磁器のうち産地不明の陶器のみ覆土の中位から出土しており，他はすべて上位のものである。骨は，焼骨で覆土の上位及び中位からヒトの頭蓋骨，側頭骨片，肢骨片等が出土し，下位からウシ（成獣）の臼歯片が１点出土している。人の骨は焼骨であるが，ウシの臼歯は焼けていない。

覆土の状況はSK14と共通点が多い。SK15の場合，下層は土色の異なる粘質土が大きなブロック状

に混じり，上・中層の覆土の様相とは明らかに異なる。ほぼ水平堆積をなし，東側では皿状になっている。SK14の場合は締まった感じの粘質土で土色も上・中層と異なり，水平堆積である。焼骨や土器・陶磁器はすべて覆土の中位から上位にかけて出土している点も同じである。このような状況から，断定はできないが，両遺構の下層は貼り床的なものであった可能性があると思われる。

SK14・SK15の性格については，多量の焼骨片の出土や遺跡の立地条件等から共同の火葬施設である可能性がすでに示唆されている[注3]。その可能性は高いと思われ，そのように仮定した場合，下層は例えばSD23の水が礫を伝って施設内に浸透するのを防ぐための貼り床であり，中層は荼毘を繰り返す過程で堆積した層，上層は廃棄の際に埋め戻した層と推察することができるのではないだろうか。

覆土の上位から15世紀後半～16世紀前半の中国製青磁が出土していることから，遺構はその年代に廃棄されたものであろう。SK14の遺物が15世紀前半代におさまることから，SK14・SK15とも15世紀頃に機能し，15世紀後半乃至16世紀前半に廃絶されたものと考えられる。

18号土坑（SK18，第60図）

調査区南西隅で検出した土坑で，調査区外へと伸びている。覆土は，灰黄色粘質土がブロック状に混じる灰黄褐色粘質土の単層で深さは24cmである。遺物は出土していない。

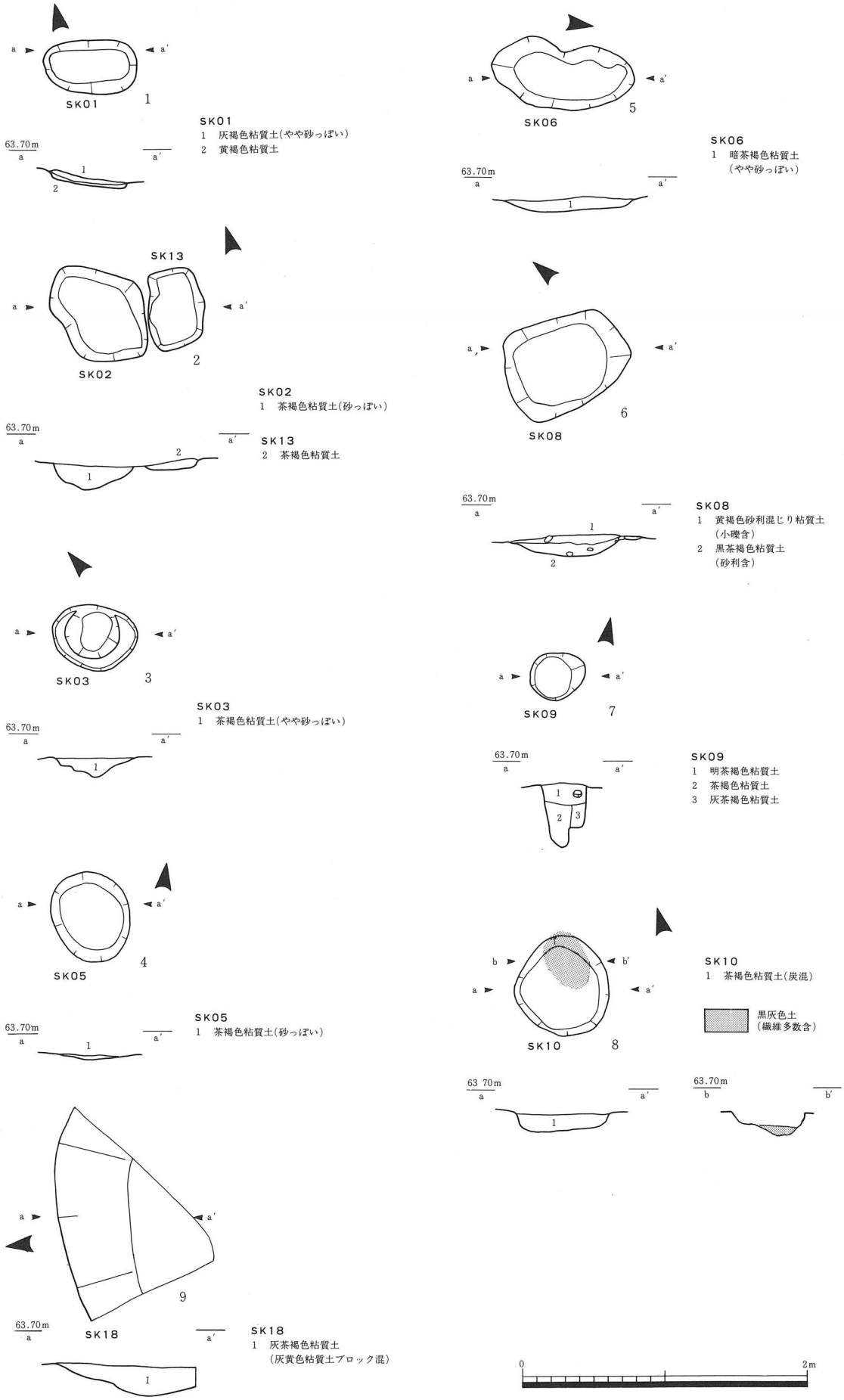
19号土坑（SK19，第62図，図版71）

SK15の北隅で検出された土坑である。楕円形を呈し，長軸115cm，短軸89cm，深さは70cmを測る。断面形は緩やかなU字形である。

SK15の中層にあたる茶褐色土の上面から掘り込まれており，SK15上層にあたる黄褐色土混じり茶褐色土が上に堆積している。覆土は緩やかなレンズ状に堆積している。上から褐色系の粘質土が2層堆積している。これらを掘り下げると，黒く焼けた藁状の植物繊維層（黒灰層）が，約15cmの厚さで穴全体に均一に堆積している。この下には青灰色の砂質土が約15cmの厚さで堆積しており，更にその下の地山の砂利層を約15cm掘り込んだ径約30cmの範囲から骨が出土した。最下層は，地山の砂利層が一旦掘り起こされ，骨が混入した後に再び埋まったものと考えられる。

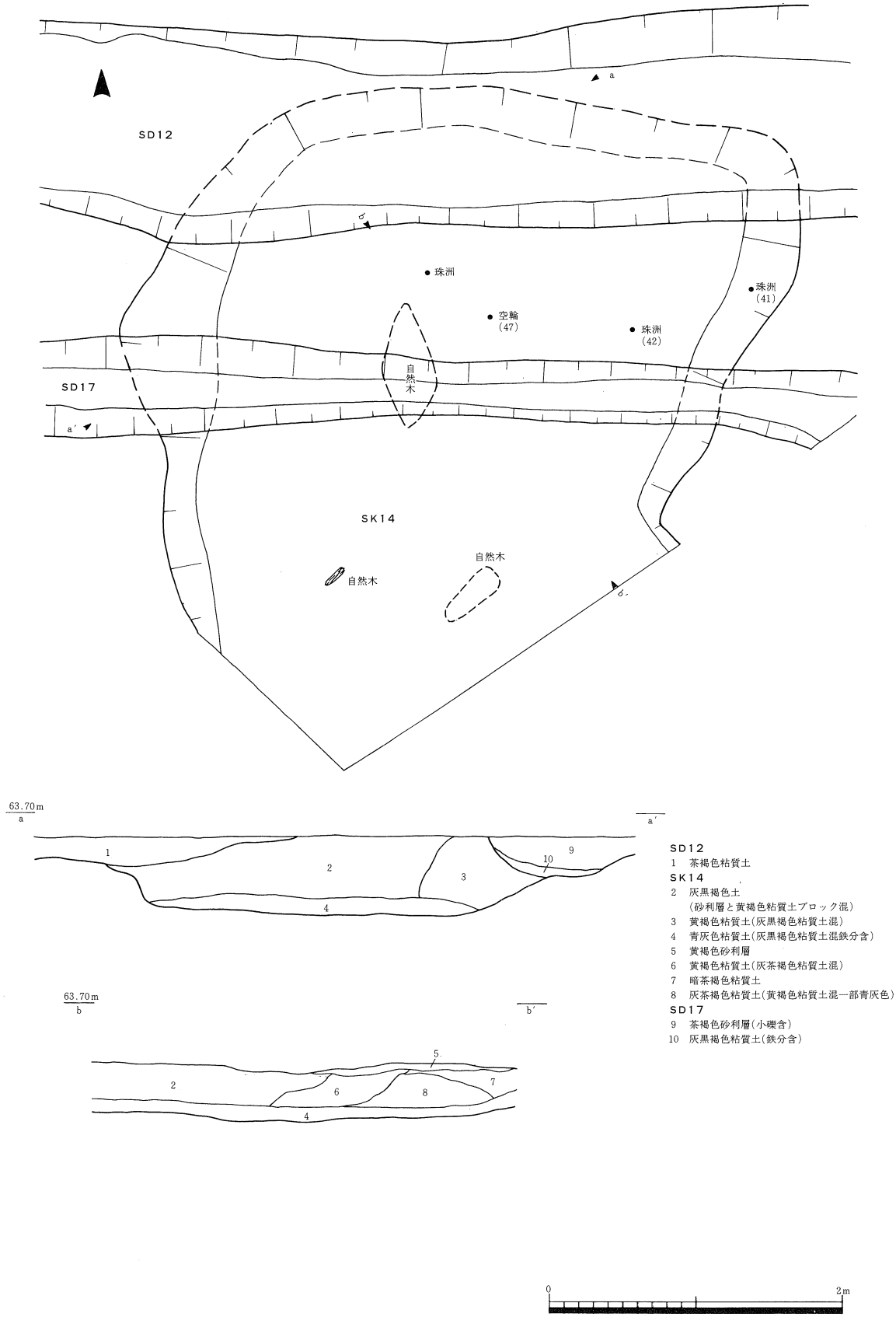
遺物は，中世土師器，骨，炭化籾である[注4]。中世土師器は，植物繊維層中とその直上から，割れた状態で出土したが，同一個体であり，接合すると完形になった。この他にも中世土師器皿の破片が1点ある。骨は，焼骨で植物繊維層，青灰色砂質土，及び最下層である砂利層から出土した。植物繊維層から出土した骨は，紛状の骨片でヒトの可能性があるが判然としない。青灰色砂質土から出土した骨は，肢骨片の海綿部分であり，焼けておらず，ヒトの可能性があるが判然としない。最下層の骨は，ヒトの上腕骨と大腿骨である。前者は焼けておらず，男性の可能性があり，後者は焼骨で，大きく，おそらく男性と考えられるものである。籾は，黒灰層を含む覆土中から多量に出土しており，すべて炭化している。炭化のため明瞭でないが，ほとんどのものは籾がついている状態のようである。数は確認したものだけで約270粒あった。

遺構の時期は中世土師器から15世紀後半～16世紀頃と思われ，性格についてはSK15を廃棄する際の祭祀に使用された土坑とする見解がある[注3]。黒灰層の堆積状況から，この灰層は藁状のものを燃やして灰にした後，ほとんど撹乱を受けないままパックされたものと思われる。祭祀の過程においては，土師器皿は黒灰層の中と直上から出土していることから燃やす前後に投入され，炭化米は同時に燃されたのであろう。骨は，SK19をつくる際にSK15を掘り起こした土に混入していたため，大きな大腿骨片のみを集めて，祭祀を行う前に地山の砂利を深く掘って埋め戻したものと考えたい。



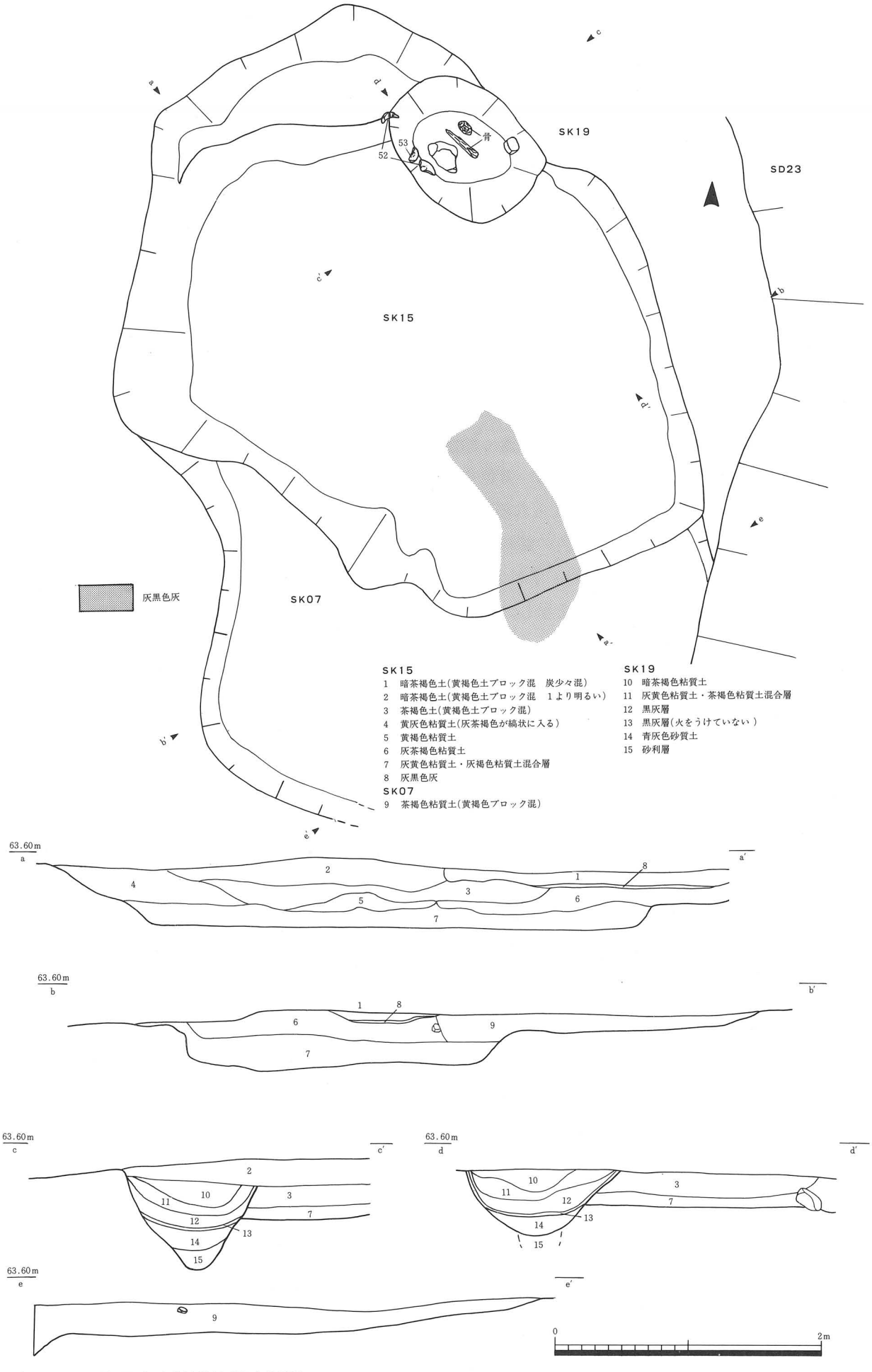
第60図　梅原安丸遺跡遺構実測図

1.SK01　2.SK02・SK13　3.SK03　4.SK05　5.SK06　6.SK08　7.SK09　8.SK10　9.SK18



SD12
1　茶褐色粘質土
SK14
2　灰黒褐色土
（砂利層と黄褐色粘質土ブロック混）
3　黄褐色粘質土（灰黒褐色粘質土混）
4　青灰色粘質土（灰黒褐色粘質土混鉄分含）
5　黄褐色砂利層
6　黄褐色粘質土（灰茶褐色粘質土混）
7　暗茶褐色粘質土
8　灰茶褐色粘質土（黄褐色粘質土混一部青灰色）
SD17
9　茶褐色砂利層（小礫含）
10　灰黒褐色粘質土（鉄分含）

第61図　梅原安丸遺跡遺構実測図
SD12・SD17・SK14



第62図　梅原安丸遺跡遺構実測図

SK07・SK15・SK19

3　遺　物

A　溝

11号溝（SD11，第63図，図版73・74）

1は伊万里碗で，覆土上面から出土したものである。内外面に染付があるが，滲みのため意匠は不明である。2は石鉢で，溝底から出土したものである。器壁は体部から底部にかけて一定で，約12cmの厚みがある。石材は凝灰角礫岩である。

12号溝（SD12，第63図，図版72・73・74）

3・4は中世土師器皿である。3はロクロ成形で口縁部から体部にかけての破片である。体部は直線的に開き，口縁部は薄く挽き出す。外面は磨滅しておりロクロ使用の是非は不明である。4は非ロクロ成形で口縁部に横撫でを施す。体部下半に篦削りを行っているようであるが，磨滅のため不明である。4はSK14との接合資料であるが，SD12はSK14の上から掘られた遺構であり，どちらかが混入したものと考えられる。両者とも器壁が薄く胎土は緻密である。5は中国製青磁碗である。外面に線描の細蓮弁文を施すもので，釉はにぶい黄色を呈し，胎土はやや黄みがかった灰白色を呈する。15世紀中葉から16世紀前半のものと考えられる[注5]。6は瀬戸美濃の天目茶椀である。内外面に黒褐色の鉄釉がかかり，体部下半には暗褐色の錆釉が施される。胎土は灰白色を呈し，緻密である。大窯Ⅱ期（1520～1555年）に比定される[注6]。7は須恵器甕である。ロクロ撫での後，外面に平行叩きを施す。8は八尾甕である。N字状の口縁を呈し，垂下した部分は丸みをもって短くおわる。にぶい赤褐色の自然釉がかかる。13世紀頃に比定される[注7]。

17号溝（SD17，第63図，図版73）

9は珠洲甕である。外面に叩き，内面に当て具痕が残る。灰白色を呈する。

23号溝（SD23，第63図，図版72・73・74）

10～13は須恵器である。10は杯蓋である。端部は折り曲げられ，やや丸みをもった三角形を呈する。口縁端部から外面にかけて帯状に自然釉がかかっており，重ね焼きをおこなったものと考えられる。11は高台杯である。12・13は甕の体部破片で，外面に平行叩き，内面に同心円当て具痕が残る。

14は中世土師器である。深身の椀型に復元されるが，小破片で，歪みのあるものかもしれない。口縁部は薄く挽き出す。器壁が薄く胎土は緻密である。

15～21は珠洲である。15は壺の底部破片である。体部はロクロ撫でを施す。底部外面には，静止糸切り痕と，板目状圧痕が残る。16～18は擂鉢である。16は，口縁端面に波状文を施し，Ⅴ期（1380年代～1440年代）に比定される。17は，方頭形の口縁部で端面がやや内傾する。Ⅱ期（13世紀前半）に比定される。19～21は甕である。19は，嘴状に引き出した口縁部で，Ⅰ～Ⅱ期（12世紀後半～13世紀前半）のものである。20～21は体部で，外面に平行叩き，内面に当て具痕が残る。

22は越前甕の体部である。黒褐色の自然釉がかかり，胎土は灰白色を呈する。

23・24は中国製青磁碗である。23は，高台をやや高めに削りだし畳付け部分は断面三角形に尖る。見込みに花文をスタンプを施す。体部内外面と高台内側側面の途中までは釉がかかるが高台内は露胎である。釉はやや薄めにかかり，発色が悪く明オリーブ灰色を呈する。14世紀後半～15世紀前半頃のものと考えられる[注5]。24は，底部は厚く高台は断面四角形に削り出す。内面見込みにスタンプを施する。高台内を輪状に釉剝ぎし，他は全面に釉がかかる。釉は厚めで緑灰色を呈する。断面に漆継ぎ痕がみられる。14世紀後半以降のものである[注5]。

25は磁器の染付碗で，生産地については不明である。小型の筒型碗の底部であろう。19世紀以降の

ものである。

26は鉈である。刃部は鉄製，柄部は木製である。一般に東日本型といわれている片刃のもので，先端に鈎のついた「ハナ付き鉈」である[注8]。柄の一部を欠損するがほぼ完形で，全長30.2cm，刃部長19.8cmである。短柄で着柄角度は11.1°である。柄の先端に孔があり，目釘で木部と鉄製部を留めている。

27・28は五輪塔である。27は空風輪である。空輪と風輪との欠首が立ち，空輪の頂部は少し欠損しているが，先端は宝珠形に突出するものと思われる。京田良志氏の形態分類に当てはめれば，南北朝時代に比定されるが[注9]，出土した層位の他の陶磁器の年代は15世紀後半頃と推定され，SK14から同形態のものが出土しており，廃棄された年代は15世紀に下るものと考えられる。石材は凝灰岩である。28は水輪である。球形の上下端を切り取った樽型の形態である。石材は凝灰角礫岩である。

B　土　坑

7号土坑（SK07，第64図，図版72・73）

29は中世土師器皿である。非ロクロ成形で，口縁部を横撫でし，底外面は無調整である。胎土はやや粗く石英を含む。

31・32は珠洲である。31は擂鉢である。口縁部は内端に幅約2cmの広い面を取り，波状文を施す。卸目は，一条の幅が広く深い原体を用いる。胎土は粗く，白色粒や8mm大の礫粒を含む。Ⅵ期（1450年代～1470年代）に比定される。32は壺である。肩は丸みをもって張り出し，頸基部より一段下がった位置から外面叩きを施す。

30は生産地不明の鉢である。口縁部は端面に丸みをもち，外端部をわずかに挽き出している。焼成はあまく，酸化してにぶい橙色を呈している。胎土はやや粗く，白色粒を多く含む。表面に細かな剝離が多く二次的に被熱しているものかもしれない。

33は越前甕である。頸部はやや長く直立し，口縁部は方頭を呈する。外面口縁部下には断面三角形を呈する稜があり，内面には沈線状の段ができている。16世紀のものである[注10]。

8号土坑（SK08，第64図，図版73）

34～36は珠洲である。34・35は擂鉢である。35は卸目が細密な原体を用い，内面のロクロ目が顕著で，Ⅰ～Ⅱ期に比定される。36は珠洲壺である。肩が張る器形で，頸基部より一段下がった位置から外面叩きを施す。

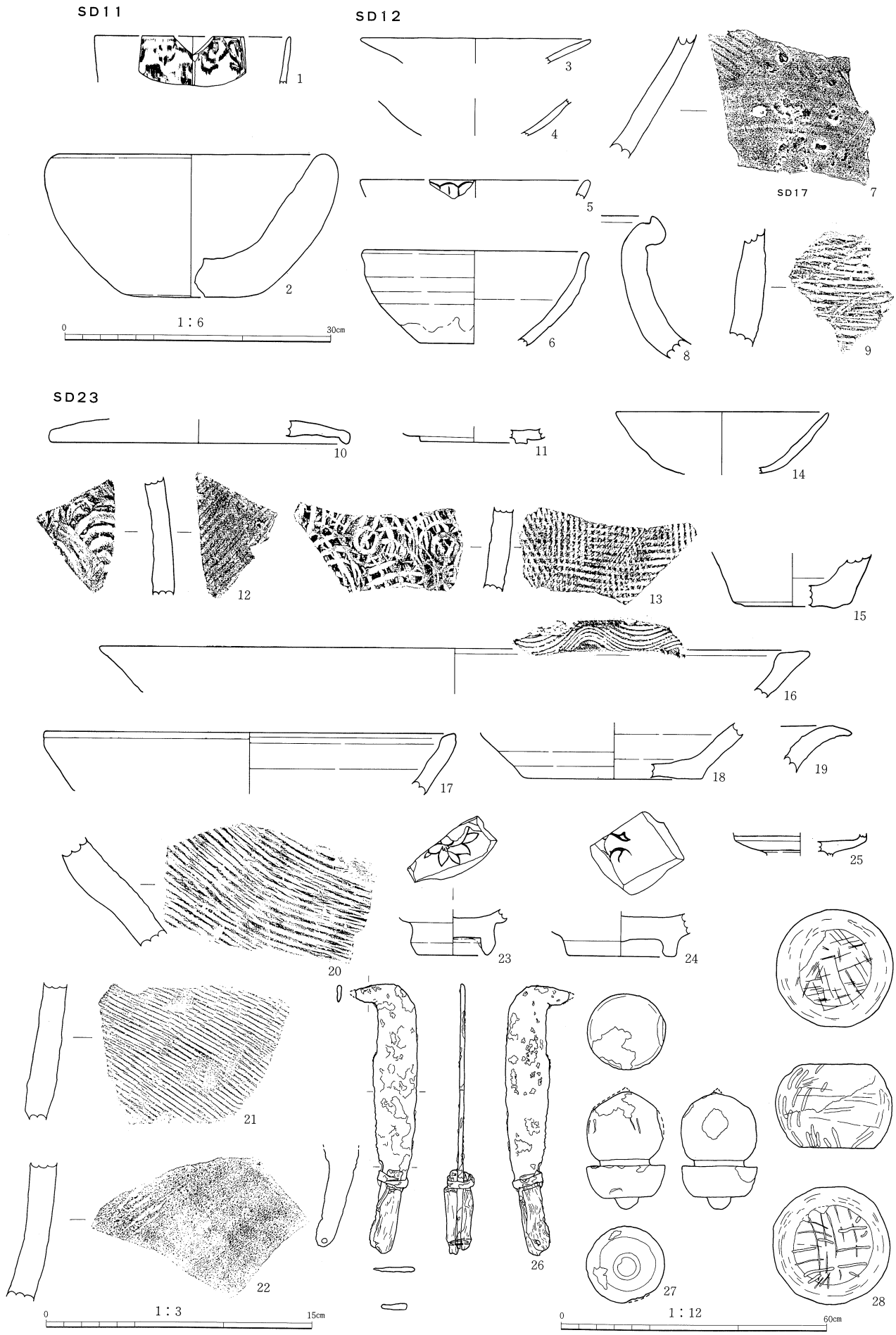
14号土坑（SK14，第64図，図版72・73・74）

37・38は中世土師器皿である。底部から口縁部にかけて緩やかに内湾して立ち上がり，口縁部は丸くおさめる。非ロクロ成形で，調整は磨滅のため明瞭ではないが，外面は口縁端部のみ横撫でし，器面の粗い無調整範囲が広いようである。

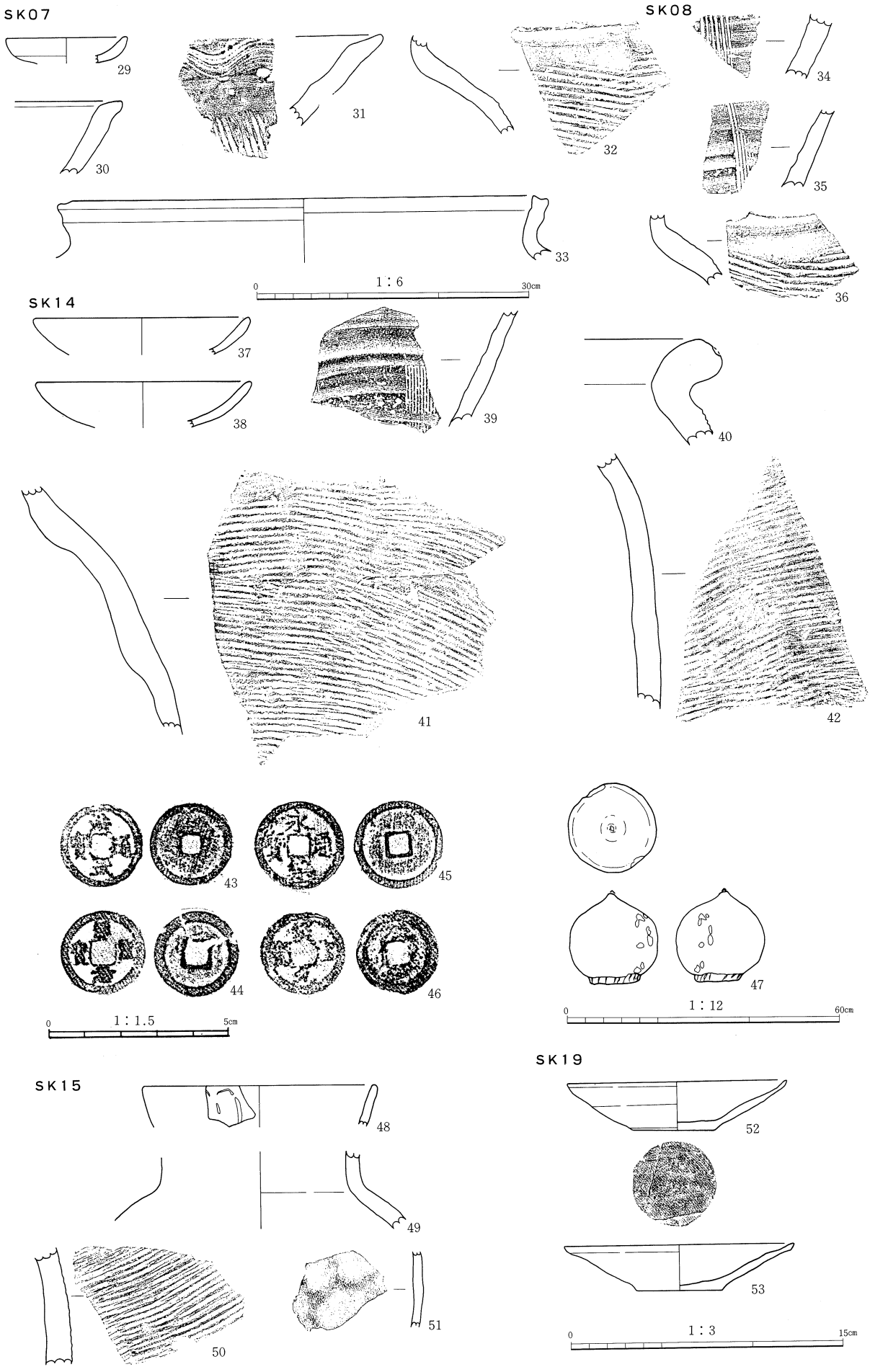
39～42は珠洲である。39は擂鉢である。卸目は細密で内面にロクロ目が顕著である。40～42は甕である。40は口縁部である。短頸で，くの字状に屈折し端部は円頭を呈する。胎土には粗い白色粒を含む。Ⅳ～Ⅴ期（1280年代～1440年代）に比定される。41・42は体部破片で外面に平行叩き，内面に当て具痕が残る。

43～46は銅銭である。43・45は明銭，44・46は北宋銭である。43は「洪武通寶」で，初鋳は1368年である。44は，錆のため上の一文字が読めないが，篆書体の「紹聖元寶」または「天聖元寶」と考えられる。初鋳は前者の場合は1094年，後者の場合は1023年である。45は「永楽通寶」で，初鋳は1408年である。46は「紹聖元寶」で，初鋳は1094年である[注11]。

47は五輪塔の空輪である。風輪部分は欠損している。欠首が大きく立ち，宝珠形頂部が突出する。

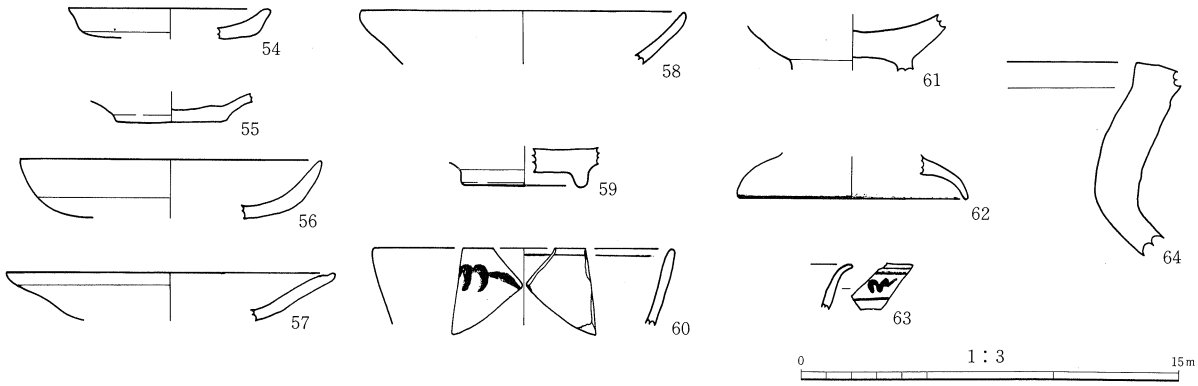


第63図　梅原安丸遺跡遺物実測図1（1/3，2・26　1/6，27・28　1/12）



第64図　梅原安丸遺跡遺物実測図２（1/3，33　1/6，43～46　1/1.5，47　1/12）

包含層



第65図　梅原安丸遺跡遺物実測図３　(1/3)

石材は凝灰角礫岩である。形態がSD23出土の空風輪㉗に近く，同時期のものと考えられる。

15号土坑（SK15，第64図，図版73・74）

48は中国製青磁の碗である。外面に線描の細蓮弁文を施す。釉調はオリーブ灰色，胎土は灰色である。15世紀後半～16世紀前半のものである[注5]。

49は須恵器広口壺の頸部である。

50は珠洲甕の体部破片である。

51は器壁が非常に薄く，内面に小礫状の当て具痕がある。外面は指押さえの圧痕を残し，器面を撫で調整している。小型の壺であろうか。還元炎焼成であるが生産地は不明である。

48～50は上層，51は中層から出土したものである。

19号土坑（SK19，第64図，図版72）

52・53は中世土師器皿である。両者はロクロ成形で，器形，法量とも近似している。体部は大きく開き，口縁端部は上方へ軽くつまむように挽き出す。全面をロクロ撫でし，見込みの圏線内を不定方向に撫でている。底外面には右回転の糸切り痕を残す。非常に薄作りで，胎土は緻密である。

C　表土及び包含層（第65図，図版72・73）

54～57は中世土師器皿である。54は非ロクロ成形の小皿で，口縁部は横撫でし，やや外湾気味に短く立ち上がる。55はロクロ成形の皿である。底外面は端の方に回転糸切り痕が残り，中央部は糸切りを撫で消しているようでもあるが煤が付着しているため明瞭でない。見込みには圏線があり，その中を弧を描くように撫でている。56は非ロクロ成形の小破片である。見込みの端をかるく指押さえし，底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。胎土は緻密である。57は非ロクロ成形の皿である。体部は大きく開き，口縁部は外反して端部を上方へ小さく摘む。調整は磨滅のため不明である。胎土は緻密である。

58は伊万里の白磁皿である。内外面に釉がかかる。

59は中国製青磁碗である。内面と，外面の高台内側側面まで釉がかかるが高台内は釉剝ぎする。

60は瀬戸美濃本業焼期の椀である。外面に竹の染付がある。胎土はやや黄みがかった灰白色で粗い。

61は京焼風唐津椀である。総釉で，器壁はやや厚手であり，いわゆる呉器手である[注12]。

62は産地不明のもので，蓋と思われる。口縁部内外面に一条の直線が染付される。

63は中国製染付で，端反りの碗である。

64は越前甕である。頸部はやや外傾気味に直立し口縁部は方頭状を呈する。16世紀に比定される[注10]。

4　まとめ

梅原安丸遺跡では，権現堂川の旧河道（SD23）とその西側縁辺部（河原）の土坑，溝等を検出した。土坑の中には火葬に関連するものがいくつかあり，また，SD23からも五輪塔や少量の焼骨が出土した。

北陸における火葬の始まりは，奈良時代末期～平安時代初期と考えられており，具体的な資料は骨蔵器の蓋に転用された須恵器杯中から和同開珎が出土した石川県加賀市の宮地墳墓，隆平永寶が出土した同県鹿島郡金丸杉谷の墳墓等がある[注13]。しかし，古代から中世前期までの火葬墓は僧侶や特別階級にある者の墓であり，一般の民衆に火葬が普及してくるのは中世後期以降で，後期前半まではまだ土葬の方が多いとの見解がある[注14]。

一般に，火葬関連の遺構は，遺体の荼毘のみを行った火葬施設，荼毘にふした後の火葬骨を埋葬した火葬墓，遺体を荼毘に付した火葬施設をそのまま墓としている火葬墓に分類される。当遺跡のSK14・SK15は，このうち荼毘のみを行った火葬施設にあたると考えられるが，県内には火葬施設と断定された土坑はみられない。また北陸の諸例をみても，当遺跡のように土坑状を呈するもので，規模や立地条件等が一致するものはほとんどないようである。例えば，石川県村井キヒダ遺跡等で検出された中世後期の火葬施設は，溝で囲まれた地域内に長辺２ｍ前後の長方形の土坑が数基検出されたもので，１個人に１基の火葬施設の形態をとり，１基の火葬施設で多人数を火葬したものではないと考えられている[注15]。また新潟県宝積寺館跡で検出された荼毘関連の土坑と推定されるものは，深さは最大で50㎝，１辺１ｍ程の正方形乃至長方形を呈するもの，不定形のものがあり，遺構の時期は17基が室町時代，３基が江戸時代と推定されている[注16]。当遺跡のSK14・SK15のような大型のものは，類例が見いだせない。しかし，前節で述べてきたようにこれらが火葬施設である可能性は高いと思われる。また，このように大型で貼り床等の構造を持つ可能性のある施設ならば，多人数が使用した共同の火葬施設と考えられよう。

富山県の火葬に関する民俗例に目を向けると，以下のようなものがある。火葬場を一般にムジョバ，サンマイ，ノーバといい，昭和20年頃はまだ近所の者が穴を掘って石を並べ，生松を燃やして焼いた[注17]。砺波市鹿島（五鹿屋地区）の昭和49年の民俗調査では，「棺桶は四角い座棺で，村の墓地にあるサンマイ(火葬場)で焼く。火葬場は野焼きの穴に上屋を立てた程度の簡単なもので，穴は長さ120㎝，幅60㎝，深さ40㎝程で，周りは野石積みである。墓は，もとは各家の脇にあったが明治の末頃共同墓地が作られて集められ，サンマイも３，４箇所にあったのがまとめられた」とある[注18]。また，同市に，佐藤聖子氏報告の次のような例もある[注19]。「まず大きい穴を掘ってそのうえに割り木を渡す。お棺（お棺のない例もある）は割木の上に載せ，藁で覆う。その上に編み俵を載せ，さらに割り木を並べ，針金で動かぬよう四隅にわたして止める。火をつけてからお棺が外にはじかぬように針金にはおもりをつけて押さえる。火葬が終わると，骨を拾い，穴はまた次に使えるように掃除される。穴は２ｍ～３ｍほどの大きさであり，ほとんどの場合，共同のものであった」。佐藤氏は「仮に（SK14・15を）こうした用途の穴と考えると，出土した骨がすべて細かいかけらであることや骨の量がそれほど多くないことが理解できる」と考察している。

SK14・SK15が火葬施設であるとすれば，このような火葬場がなぜ河原に営まれたのであろうか。佐藤氏は，網野善彦氏の指摘する[注20]，河原や中洲，浜等が，大自然あるいは神仏と人々の生活の場の境であり，そこが神仏の世界に近いため墓や火葬場をおいても「ケガレ」が人々の生活に及んでこないという観念により，この地が火葬場に選ばれたと推察した。また，権現堂川が当時も村境（集落

境）であったならば，人々が忌み嫌う火葬場や墓等はそのような村はずれに設けられたと考えることもできる。さらに，これらの観念的な要因の他に，遺体を火葬した後の骨灰を川に掃き捨て流すというような実利的な要因も考えられよう。そのような事実を示す発掘調査例はないが，火葬の骨灰を海や川に投棄する習俗があったことは，民俗例として報告されている[注21]。火葬施設（SK15）に接するSK07は，覆土の堆積状況からSK15と同時に機能したと考えられ，出土した焼骨の量も他の遺構に比べて少なくない。この土坑の南辺は，調査区内で検出した範囲では，その床面がSD23の肩まで続いている。これを，骨灰を流すために簡単に掘り窪めて整地したものと考えるとやや飛躍した推論となるかもしれないが，今後類例の増加を期待することとし，検討課題としておきたい。

SK19は，SK15を廃絶する際に数人の人を荼毘にふした「ケガレ」を払うため，何らかの祭祀を行った土坑と考えられるもので，中世土師器と炭化米が出土している。火葬関連の遺構から炭化米が出土した類例を探すと，岩手県安代町水神遺跡の15～16世紀の火葬墓，宮城県角田市横倉大久保遺跡の中世後期～近世初頭の土壙墓（火葬）から冥銭と炭化米塊が出土した例があった[注22]。しかしこれらは墓であり，むしろ頭蛇袋に米等を入れてやる現在の風習に近いものと考えた方がよく，そうすると火葬施設を廃絶する際の祭祀と考えられる当遺構の場合とは，使用過程が異なるといえる。しかし，民俗学においては，柳田国男氏が日本の葬送儀礼に米が不可欠であることを最初に指摘しており[注23]，葬送における多様な米の使用例が各地にみられることが知られている。米には特別な生命力，ある種の霊力が宿るものと考えられており，おそろしい死と直接接触せざるを得ない葬儀においては，生きている側の者の生命を守る力と，死者の霊魂を安定させておく米の力が必要とされてきた，との解釈がある。これは日本人の稲霊信仰に基づくものと考えられている[注24]。SK19の炭化米がこのような観念に基づいて埋納されたものかどうかは判断できないが，今後類例が増加すれば，出土状況と合わせてその意味を検討していくことが必要と思われる。

おわりに梅原安丸遺跡の遺構の変遷過程を整理しておきたい。

遺跡の東半を占めるSD23は，15世紀までは比較的速い流れであったものが，15世紀後半乃至16世紀頃から近世にかけては流路を徐々に東へ移しながら埋まっていったものと考えられる。

火葬施設と考えられるSK14・SK15は，使用から廃棄に至る年代が15世紀から15世紀後半乃至16世紀と考えられ，SD23が流れていた時期に合致する。SK07は機能的にはSK15に付属する遺構であり，SK19はそれらの廃棄に伴う遺構と考えられる。また周辺にみられる焼骨や黒灰層を含むやや小規模の土坑（SK08・SK10）も同時期のものである可能性が高いと思われるが，その性格は不明である。

火葬施設が廃棄された後に，SD12・SD17がつくられる。これらの溝は，出土した中世土師器の形態が同じであることから同時期に機能したとも考えられるが，SK14を掘り込んでいるためその遺物が混入した可能性があり，断定できない。同時期のものと仮定した場合，両者が間に約１ｍ程の間隔をとって平行に走っていることから道の可能性も考えられるが，調査区内には遺構の一部がかかっているだけなので，この点についても検討は難しい。遺物の年代は最も時期が下るもので16世紀前半であり，廃絶は16世紀前半以降と考えられる。

SD12・SD17が埋まった後，近世あるいは近代以降の幅狭の溝（SD22・SD16）がつくられる。これらは非常に直線的で区画性があり，暗渠など水田の用排水のための施設かもしれない。これに伴う遺構は他になく，閑散として現在の水田地帯につながっていったものと思われる。

また，形態が南北朝期のものとされる五輪塔の空風輪や水輪が，SD23とSK14から出土している。当該期に当たる遺構は検出されていないが，14世紀中頃～後半に遺跡近辺が墓所であった可能性が高

いことを示す資料と思われる。15世紀以降，壊れて無縁のものとなった五輪塔が，川や火葬施設に投棄されたのであろう。

中世後期に人を葬る地であった当遺跡の周辺には，現在も「サンマイダ」という呼称が残っている。遺跡の傍らを流れる権現堂川は蛇行してたびたび流路を変えているが，本流である大井川との分岐点に近く，村境として比較的安定していたと思われるこの一帯は，その後も荼毘を行う場所とされてきたのであろうか。（越前慎子）

注１　SD23出土のウマ臼歯の同定については富山県文化振興財団1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』，その他の遺構出土の骨類同定については本書第二分冊自然科学的分析に掲載した。
注２　珠洲の時期区分とその年代については以下の文献を参考とした。
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
注３　酒井聖子 1991 「梅原安丸遺跡の土坑について」『埋蔵文化財年報(3)』富山県文化振興財団
注４　種実遺体同定については，富山県文化振興財団1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』に掲載した。
注５　上田秀夫 1982 「14～15世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2 を参考にした。
注６　瀬戸美濃の時期区分とその年代については以下の文献を参考とした。
瀬戸市史編纂委員会 1993 『瀬戸市史Ⅳ』
注７　酒井重洋 1990 「越中における在地窯の諸問題」『中世北陸の在地窯』北陸中世土器研究会
注８　小西　均・朝岡康二 1980 「ハナ付き鉈の形態と機能」『育英工業高等専門学校研究紀要 第６号』
ハナ付き鉈の遺跡出土例を知らないが，絵画資料では狩野芳信（1596～1614）筆の川越喜多院職人尽絵にみられ，1600年前後には存在したといえる。当遺跡の鉈は，SD23下層出土の陶磁器の年代がすべて15世紀前半におさまることから，絵画資料よりも若干年代が遡るが，15世紀頃のものと考えておきたい。
注９　京田良志 1992 「池尻石塔群」『井口村史 下巻 資料編』井口村史編纂委員会
注10　福井陶芸館 1986 『越前名陶展』
北陸中世土器研究会 1989 『越前陶の諸問題』
注11　兵庫県埋蔵銭調査会 1994 『中世の出土銭』
注12　大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布－発掘資料を中心として－」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館
注13　遮那藤麻呂 1984 「日本各地の墳墓 中部・北陸」『新版仏教考古学講座 第７巻 墳墓』雄山閣出版
注14　島田美佐子 1994 「墓」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』富山県文化振興財団
注15　石川県立埋蔵文化財センター 1991 『宮丸遺跡・村井北遺跡・北出遺跡・村井キヒダ遺跡・米永古屋敷遺跡』
注16　新発田市教育委員会 1990 『三光館跡・宝積寺館跡』
注17　富山県 1973 『富山県史 民俗編』
注18　砺波市史編纂委員会 1994 『砺波市史資料編 4 民俗・社寺』
注19　前掲注３　なお，この民俗例は佐伯安一氏の御教示によるものである。
注20　網野善彦 1988 『河原にできた中世の町』
注21　野田三郎 1979 「流葬を伴う両墓制ついて－紀伊日高川を中心に－」『葬送墓制研究集成 第１巻 葬法』
注22　東国歴史考古学研究所・帝京大学山梨文化財研究所 1995 『シンポジウム 中世の火葬　－その展開と地域性－』
注23　柳田国男 1932 「生と死と食物」『旅と伝説』六の七
注24　新谷尚典 1992 「米の霊力」『日本人の葬儀』

第18表　梅原安丸遺跡　溝一覧

挿図	図版	遺構番号	流路	規模：幅	規模：深さ	出土遺物	備考	時期
58	69	SD11	西→東	36～57	19	中国製青磁，伊万里(1)，石鉢(2)	SD11＜SD22	中世
58·61	69	SD12	西→東	98～147	21	須恵器(7)，中世土師器(3·4)，珠洲，八尾(8)，瀬戸美濃(6)，中国製青磁(5)，骨	SD22＞SD12＞SK14	16C
		SD16		15～24	5			17C以降
58·61	69	SD17	西→東	39～69	28	中世土師器，珠洲(9)	SD17＞SK14	16C
		SD22		20～55	8		SD22＞SD11·12	17C以降
58·59	69·70	SD23	南→北		174	土師器，須恵器(10～13)，中世土師器(14)，珠洲(15～21)，八尾，越前(22)，中国製白磁，中国製青磁(23·24)，唐津，伊万里？(25)，五輪塔(空風輪·水輪)(27·28)，鉈(26)，ウマ臼歯，骨	旧権現堂川流路	14C後半～近世

第19表　梅原安丸遺跡　土坑一覧

挿図	図版	遺構番号	平面形	規模：長	規模：短	規模：深	出土遺物	備考	時期
60		SK01	楕円	63	38	13			中世
60		SK02	楕円	84	62	22			中世
60		SK03	楕円	60	45	14			中世
		SK04	楕円	350	59	12			中世
60		SK05	円	65		5			中世
60		SK06	楕円	100	40	10			中世
62	71	SK07	不整形	405		24	中世土師器(29)，珠洲(31·32)，八尾，越前(33)，瀬戸美濃，陶器(30)，骨		15C～16C
60		SK08	隅丸方形	90	65	15	珠洲(34～36)，骨		中世
60		SK09	円	40		44	骨		中世
60		SK10	円	72		13			中世
60		SK13	方	55	40	6			中世
61	70	SK14	隅丸方形	(465)	(380)	54	中世土師器(37·38)，珠洲(39～42)，越前，中国製白磁，五輪塔(空輪)(47)，銭貨(43～46)，炉壁？，骨	SK14＜SD12·17	15C～16C
62	71	SK15	隅丸方形	505	322	52	須恵器(49)，珠洲(50)，珠洲？(51)，越前，中国製青磁(48)，骨，臼歯		15C～16C
60		SK18	方	(83)	(56)	24			
62	71	SK19	楕円	115	89	70	中世土師器(52·53)，種子(イネ)，骨		15C後半～16C

第20表　梅原安丸遺跡　土器・陶磁器一覧　(1)

番号	図版	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
1	73	SD11	X021Y027	覆土上面	伊万里	碗			110				染付	透明釉			灰白色	染付10BG6/1青灰色
3	72	SD12		上層	中世土師器	皿			130								明黄褐色	
4	72	SD12·SK14		上層	中世土師器	皿											にぶい黄橙色	
5	73	SD12	X020Y022	上層	中国製青磁	碗	BⅣ	15C後半～16C前半	130				線描蓮弁文	青磁釉	2.5Y6/4	にぶい黄色	灰白色	
6	74	SD12		上層	瀬戸美濃	天目茶椀		大窯Ⅱ	124	52	60			鉄釉	7.5YR3/2	黒褐色	灰白色	サビ釉10YR3/4暗褐色
7	74	SD12		下層	須恵器？	甕											灰色	

第20表　梅原安丸遺跡　土器・陶磁器一覧　(2)

番号	図版	遺構番号	座　標	層　位	種　類	器種	分類	年　代	口径	器高	底径	横撫で幅	文 様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎　土	特記事項
8	73	SD12		上層	八尾	甕		13C後半						自然釉	2.5YR5/3	にぶい赤褐色	明褐色	
9	73	SD17		上層	珠洲	甕											灰白色	
10	74	SD23	X025Y030	14層上	須恵器	杯蓋		8C	169					自然釉	7.5Y5/1	灰色		
11	74	SD23	X029Y027	14層下	須恵器	高台杯					60						灰色	
12	74	SD23	X025Y028	14層	須恵器	甕											灰色	
13	74	SD23	X027Y027	5層	須恵器	甕											灰色	
14	72	SD23	X018Y024		中世土師器	皿			120								にぶい橙色	石英　黒変
15	73	SD23	X021Y025	5層上	珠洲	壺					66						灰白色	
16	73	SD23	X030Y029	14層上	珠洲	擂鉢		Ⅴ期	400				波状文				灰色	
17	73	SD23	X026Y025	14層上	珠洲	擂鉢		Ⅱ期	230								灰色	骨針
18	73	SD23	X025Y026	14層上	珠洲	擂鉢					100						灰色	石英
19	73	SD23	X030Y026	14層上	珠洲	甕		Ⅰ～Ⅱ期									灰色	
20	73	SD23	X029Y026	14層	珠洲	甕											灰色	骨針
21	73	SD23	X026Y030	5層	珠洲	甕											灰色	
22	73	SD23	X027Y030	5層	越前	甕								自然釉	7.5YR3/1	黒褐色	灰白色	
23	73	SD23	X029Y025	14層上	中国製青磁	碗		14C後半～15C前半			40		スタンプ	青磁釉	2.5GY7/1	明オリーブ灰色	灰白色	龍泉窯系
24	73	SD23	X027Y027	14層上	中国製青磁	碗		14C後半以降			60		スタンプ	青磁釉	7.5GY6/1	緑灰色	灰白色	漆継
25	73	SD23	X028Y026	5層	伊万里？	碗		19C以降					染付	透明釉			灰白色	染付10B5/4
29	72	SK07	X024Y024	中層	中世土師器	皿			66			11					灰黄色	石英
30	73	SK07	X023Y023			鉢			340						5YR7/4	にぶい橙色	にぶい橙色	
31	73	SK07	X023Y023	中層	珠洲	擂鉢		Ⅵ期					波状文				灰色	
32	73	SK07	X022Y023	中層	珠洲	壺											灰白色	
33	73	SK07	X021Y023	下層	越前	甕		16C	540					自然釉	5YR5/2	灰褐色	灰白色	
34	73	SK08			珠洲	擂鉢											灰色	
35	73	SK08			珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期									黄灰色	
36	73	SK08	X021Y021		珠洲	壺											灰色	
37	72	SK14		上層	中世土師器	皿			118								浅黄橙色	
38	72	SK14		上層・中層	中世土師器	皿			118								浅黄橙色	浅黄橙色
39	73	SK14			珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期										
40	73	SK14		上層	珠洲	甕		Ⅳ～Ⅴ期									灰色	骨針
41	73	SK14		上層	珠洲	甕											灰色	
42		SK14		上層	珠洲	甕											灰色	石英
48	73	SK15	X023Y024	上層	中国製青磁	碗	BⅣ	15C後半～16C前半					線描蓮弁文	青磁釉	GY6/1	オリーブ灰色	灰色	
49	74	SK15	X023Y023	上層	珠洲or須恵器	壺											灰色	
50	73	SK15	X023Y024	上層	珠洲	甕											灰色	骨針
51	74	SK15	X022Y023	中層	珠洲？												灰色	
52	72	SK19			中世土師器	皿			120	27	44						にぶい黄橙色	石英

第20表　梅原安丸遺跡　土器・陶磁器一覧 (3)

番号	図版	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
53	72	SK19			中世土師器	皿			122	26	46						にぶい黄橙色	石英　赤色酸化粒
54	72		X027Y026	2層下	中世土師器	皿			80	12		9					にぶい橙色	石英
55	72		X024Y028	2層	中世土師器	皿					44						にぶい黄色	煤付着
56	72		X028Y026	2層下	中世土師器	皿			119	17		15					にぶい橙色	石英　赤色酸化粒
57	72		X026Y029	2層	中世土師器	皿			130			5					橙色	
58	73		X028Y027	4層	伊万里	皿		17C後半～18C	128					白磁釉	2.5GY8/1	灰白色	灰白色	
59	73		X019Y022	2層(地山直上)	中国製青磁	碗					50			青磁釉	5GY6/1	オリーブ灰色	灰白色	
60	73		X025Y030	4層	瀬戸美濃	椀	本業		120				染付	透明釉			灰白色	染付5B3/1暗青灰色
61	73		X026Y029	4層	京焼風唐津	椀		17C後半～18C前半			40			透明釉	2.5Y8/3	淡黄色	灰白色	
62	73	表採			磁器	蓋			90				染付	透明釉	7.5Y8/2	灰白色	灰白色	染付5B7/1明青色,7.5YR6/8橙色
63	73		X025Y025	2層	中国製染付？	碗		15C後半～16C	140				染付	透明釉			灰白色	染付5B3/1暗青灰色
64	73		X024Y028	2層下	越前	甕		16C						自然釉	5YR4/2	灰褐色	灰色	

第21表　梅原安丸遺跡　石製品一覧

番号	図版	遺構番号	座標	層位	種類	長	幅	厚	重	石材	特記事項
2	74	SD11			石鉢	29.6	16.2	12.0	2770	凝灰角礫岩	
27	74	SD23	X026Y027	14層上	五輪塔(空風)		(26.4)	17.6	7800	凝灰岩	
28	74	SD23	X027Y029	13層	五輪塔(水)		18.8	26.4	15800	凝灰角礫岩	
47	74	SK14			五輪塔(空)		20.0	19.4	6700	凝灰角礫岩	

第22表　梅原安丸遺跡　金属製品一覧

番号	図版	遺構番号	座標	層位	種類	長	幅	厚	重	材質	特記事項
26	74	SD23	X030Y027	14層下	なた	30.2	5.0	0.7	本体328·柄9.7	鉄	
43	74	SK14			銭貨	2.3		0.15	3.55	銅	洪武通寶
44	74	SK14			銭貨	2.3		0.12	1.82	銅	紹聖元寶or天聖元寶
45	74	SK14			銭貨	2.5		0.1	2.86	銅	永楽通寶
46	74	SK14			銭貨	2.4		0.1	3.15	銅	紹聖元寶

第Ⅴ章　田尻遺跡

田尻遺跡は富山県西部に広がる砺波平野の南部，東礪波郡福野町田尻地内に所在する。福野町は山田川やその支流によって形成された比較的古い扇状地の地域と考えられている。早くから河道が安定していたため，水運が物資や文化交流の大動脈として発達してきた[注1]。それを象徴するように旅川沿いには野尻城跡・柴田屋古館跡・寺家新屋敷跡といった中世の城館，また一向一揆以前の集落の発達を示唆する五輪塔などの分布もみられる。遺跡は町の中心部から南東に位置し，北にはJR城端線が東西に走る。地形的には大井川と山田川に挟まれた河岸段丘上に立地する。

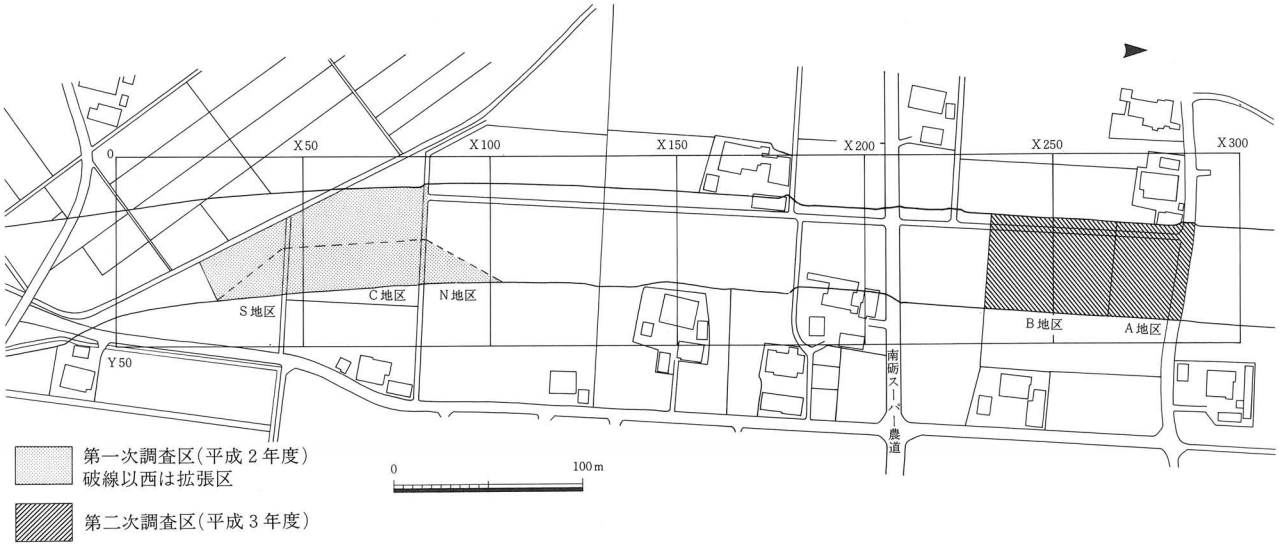
当財団では，南砺スーパー農道の南約200ｍの4500㎡を平成２年度に，北約40ｍの5700㎡を平成３年度に調査した。それぞれ遺跡の南西部分，中央部分にあたる。ここでは便宜的に前者を第一次調査，後者を第二次調査と呼称して報告する（第66図）。第一次調査区と第二次調査区間，第二次調査区の北側については，平成元年度から平成３年度にかけて福野町教育委員会が調査を行ない，縄文時代の炉跡，13世紀から14世紀を主体とする集落跡を検出している。詳細については同町教育委員会発行の報告書を参照されたい。なお付図の田尻遺跡遺構全体図にはこれらを含めて報告する。

1　遺跡の概要（第一次調査）

A　概　要

調査区は，権現堂川と大井川の合流点から権現堂川方向へ約200ｍ南の右岸から東に位置する台地上にあたる。現況は昭和40年代に圃場整備された水田であるが，元来，権現堂川の蛇行によって形成された河岸段丘に造られた水田であることが旧地形図から読みとれる。またこの東側の自然堤防に沿って「長塚」「日吉社」「化石」などの俗称がみられる。調査区は路線敷内の調査であるため，幅約50ｍ，長さ約160ｍで南北にのびる。ここには農道１本，用水１本が東西に横断しており，これらが地区割の境界となっている。調査区は北からＮ，Ｃ，Ｓ地区とした（第66図）。

確認された遺構は，建物・溝・井戸・土坑などで16～18世紀が主体である。地区の中央西側は権現



第66図　田尻遺跡調査区（1：4,000）

堂川の氾濫原で，東側はこれに流れ込む数条の東西溝によって舌状台地となっており，ここに形成された集落の一部を検出した。建物は近世掘立柱建物を4棟確認している。柱穴の大部分に，礎石あるいは根固め石を配するのが特徴である。溝は東西方向に流れるものがほとんどで，権現堂川の氾濫原に流れ込んでいる。井戸には素掘りのものと石組のものがある。後者には底面に方形の木枠を据え，左回りの螺旋状に石を積み上げ井壁を保護するものがある。土坑は方形のもの，不整形のものがあり，その配置から掘立柱建物に伴うと考えられるものがある。この中には貼床の痕跡が認められ，土間と推定されるものもある。

遺物は溝や土坑からが多く，遺構によっては縄文から近世までの遺物が出土する。木製品は桶や曲物などの容器類・柱，石製品には石臼や五輪塔が多い。金属製品は銭貨などわずかである。

B　調査経過

調査区全体を農道・用水を境に3地区に分け，農道より北をN地区，中央をC地区，用水より南をS地区とした。N地区調査終了後，農道をN地区内に切り回し，C・S地区の調査を行った。調査は平成2年4月12日に開始し，2500㎡を延べ58日間で終了した。C・S地区調査中に，遺構が西側に拡張することが確認され，河川改修工事にかかる2000㎡を急遽調査することとなった。耕作土の除去は人力掘削で行い，拡張区に関してはバックホウを用いた。航空写真測量はN地区，C・S地区，C地区（拡張区）に分けて3回行った。なおS地区拡張については，簡易遣り方測量を行った。

C　土　層

基本層序は，NからS地区を通してⅠa層：しまりのない黄褐色粘質土あるいは暗茶黄色粘質土あるいは茶黄色粘質土（盛土），Ⅰb層：茶褐色粘質土（耕作土・床土），Ⅲ層：黄褐色粘質土で，遺構検出面となる。遺物包含層（Ⅱ層）は存在しない。この面の標高は，62m前後を測り南から北へ，東から西へ緩やかに傾斜する。

2　遺構と遺物

A　遺　構

地区の西側は権現堂川の氾濫原，東側は数条の溝によって形成された舌状台地上に建物・井戸・土坑を検出した。遺構の時期は概ね16～18世紀と考えられる。溝・井戸・土坑からは縄文から中・近世までの遺物が出土する。柱穴からの出土は極わずかである。

(1)　建物

建物はN地区に2棟，S地区に2棟の近世掘立柱建物を確認した。当調査区の掘立柱建物は柱間配置が，間仕切り的なものも含むと思われ，必ずしも正確な配置を示していない。そのため，敷地範囲をスクリーントーンで示し，柱穴は個々に遺構番号を付して記載する。柱穴には，建物基礎としての根固め石をもつものが多くみられる。また敷地内には土間と推測される不整形の土坑や井戸を検出している。主体となる時期は，16世紀から18世紀と考えられる。

1号掘立柱建物（SB01，第67図，図版79）

X92～97Y29～34で検出した掘立柱建物である。北側の梁行柱列は確認できなかったが，3間×2間の南北棟を中核屋とし，敷地範囲は東にのびる可能性が考えられる。桁行7.8m×梁行6.5mで，主軸方向はN-15°-Eである。これにほぼ平行して南と西にも柱列を検出した。柱穴の平面は円形あるいは楕円形を呈する。長軸は16～132cm，短軸は22～78cm，深さは平均22cmである。ほとんどは検出面

で根固めの石を確認した。覆土は灰色系を基調とした粘質土である。SB01を区画していた可能性が考えられるSD07を南柱列に平行して検出した。遺物は土師器，中世土師器，瀬戸美濃，越中瀬戸，唐津，伊万里，柱が出土する。遺構の時期は16世紀から18世紀と考えられる。

2号掘立柱建物（SB02，第68・69図，図版79～81）

N地区X86～89Y29～32に位置する3間×2間の側柱建物である。桁行6.3m×梁行4.2m，平面積26㎡である。主軸方向はN-13°-Eである。ほとんどの柱穴は楕円形を呈し，長軸は平均96.5cmで根固め石を有する。柱根が残存する柱穴はSP24のみである。特筆すべき柱穴は，桁行方向に長さ約3mの布掘溝の南北柱穴に，根固め石をもつSP12・SP29である。柱穴部分の底面は溝部分より若干深く掘り込まれている。SP12は溝部分がSD11に切られる。覆土は灰色系の粘質土である。北柱穴は梁行方向に，南柱穴は桁行方向に長軸をとる。SP29はSE47に切られる。覆土は黄灰色系の粘質土で，溝の床面は平坦である。柱穴は桁行方向に長軸を取る。柱は方形のものが使用されていたためか，石組の中央は方形の空洞となっていた。SB02の桁行方向の柱穴は，掘形が大きく，根固め石は大きさ・形状ともバラエティーに富んでいる。柱を取り巻くようにしっかりと固定させていたことが窺える。遺物は縄文土器，中世土師器，珠洲，越中瀬戸，唐津，伊万里，円形板，柱，石硯である。遺構の時期は，16世紀から17世紀と考えられる。

3号掘立柱建物（SB03，第70図，図版81・82）

S地区北側で検出した掘立柱建物である。C地区との境界を流れる用水で寸断されるため建物配置は不明確である。SP760からSP602までの柱列とSP602で直交して北にのびると想定される柱列で中核屋を構成し，この東に位置するSK49が土間と考えられる。東西約27mを測る。柱穴の平面は円形または楕円形で長軸32～180cm，短軸28～146cm，深さは平均75cmと大型である。また，ほとんどに柱根・柱痕跡・根固め石のいずれかが認められる。SP760・SP771・SP652・SP774・SP602の4間は2.7m，3.4mを交互に繰り返すものである。SP602・SP730の柱間は7.9mを測る。覆土は褐色系の粘質土基調の水平堆積である。SP152には，柱痕跡の底部に礎石と考えられる石を検出している。遺物は越中瀬戸，曲物，柱である。遺構の時期は，SK49の遺物から17世紀から18世紀と考えられる。

4号掘立柱建物（SB04，第71図，図版81・82）

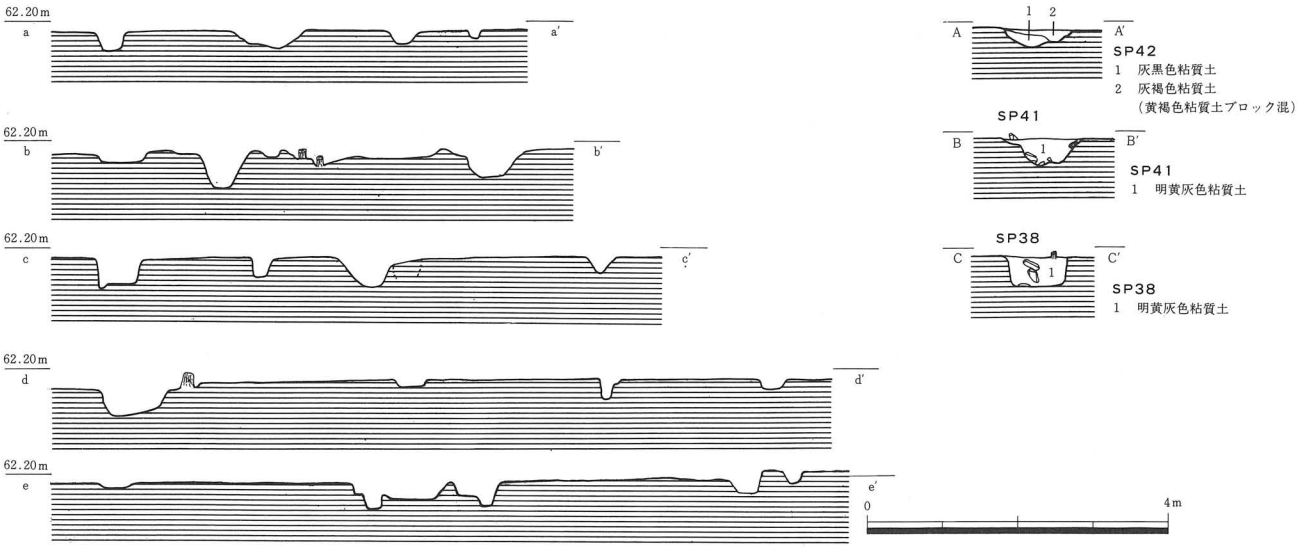
SB03に隣接する掘立柱建物である。SP704から南へSP639までの柱列がみられる。柱間は北から2.2m，5.2m，11.5mである。SP684・SP639間が長くなっており，これに直交するように柱間6.2mを測るSP120・SP738の柱列がみられる。これは空間を南北に仕切るものと考えられ，両空間とも方形の土坑を伴っている。この柱列は地区外東に広がり，そこに中心部分の存在が推測される。柱穴の平面形は円形または楕円形で長軸40～146cm，短軸20～65cm，深さは平均29cmである。柱穴の覆土は褐色系の粘質土でSP684・SP704の覆土中に礎石あるいは根固め石を確認している。遺物は柱のみである。遺構の時期は付随する土坑の遺物から16世紀から17世紀と考えられる。

(2) 溝

溝には旧川跡，区画溝と考えられるものがあり，権現堂川の氾濫原に流れ込むものがほとんどである。溝の時期は，出土遺物や遺構の配置から15～18世紀と考えられる。

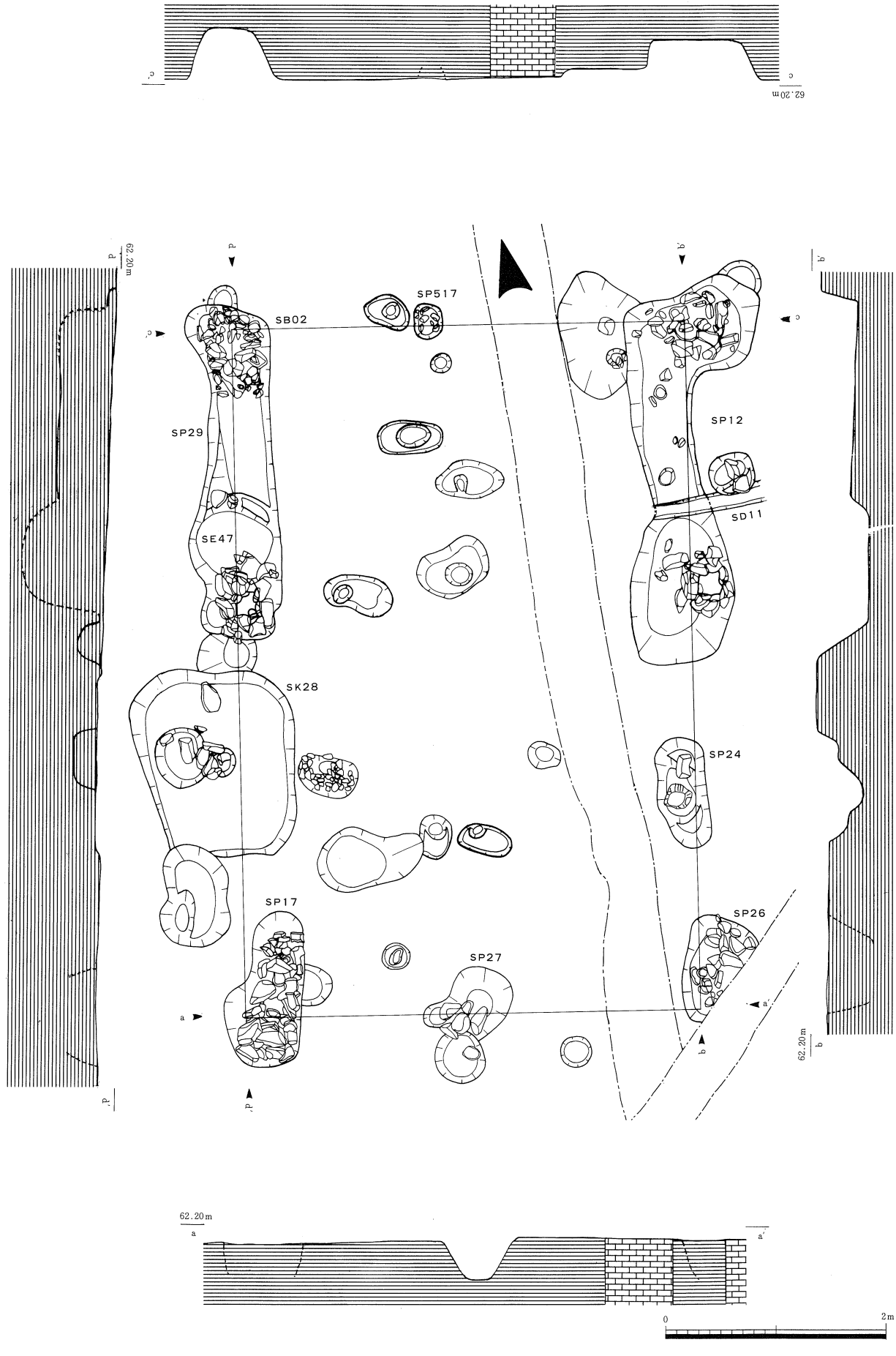
8号・9号溝（SD08・SD09，第72図）

SD08は権現堂川の氾濫原SD118に合流した時期があると考えられる，N地区の西側を南北に走る溝である。X87Y26でSD09と二股に分かれ調査区外西へのびる。両者の新旧関係は不明である。SB02の主軸方向に沿って走り，最大幅は4.54m，深さ16～102cmを測る。埋土は茶褐色粘質土の単層である。

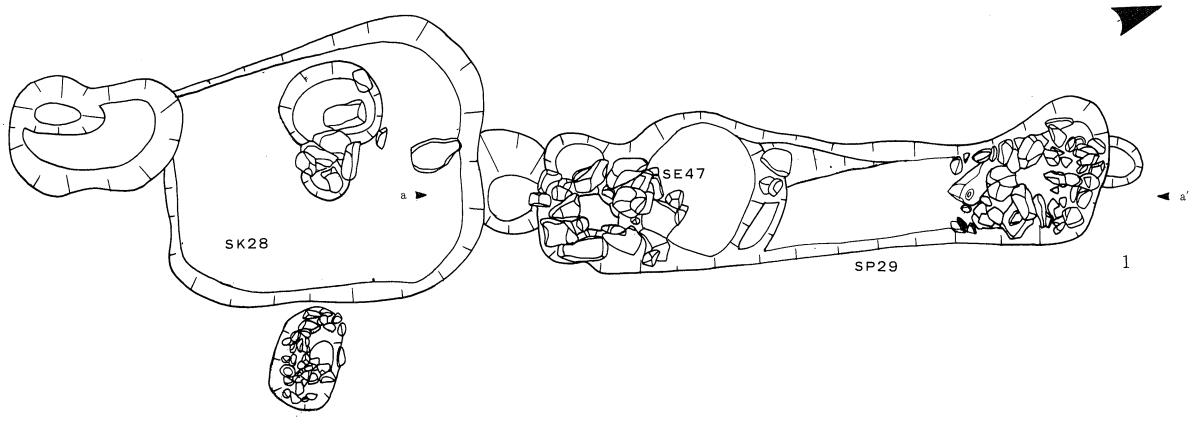


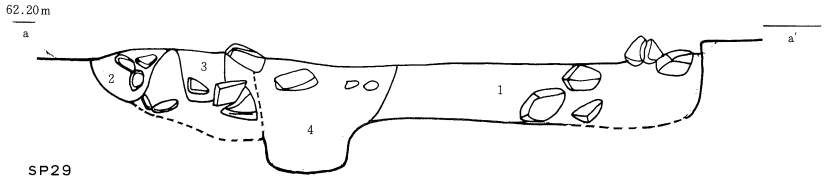
第67図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図

SB01

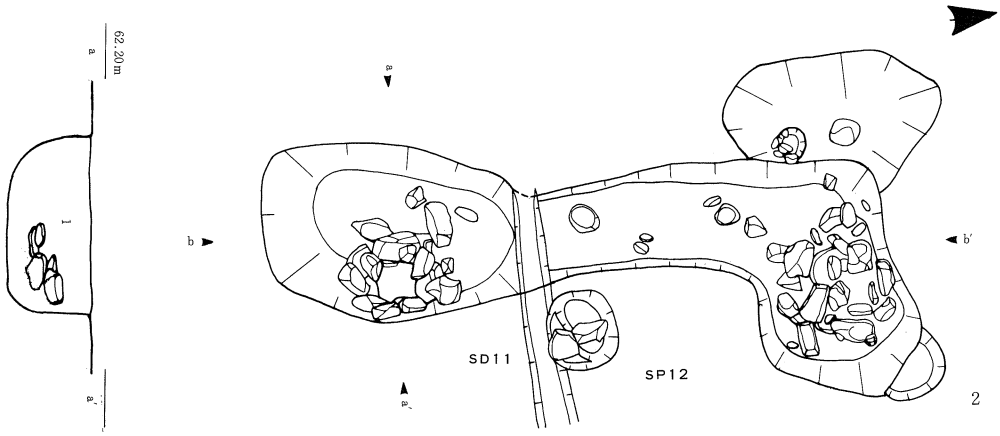


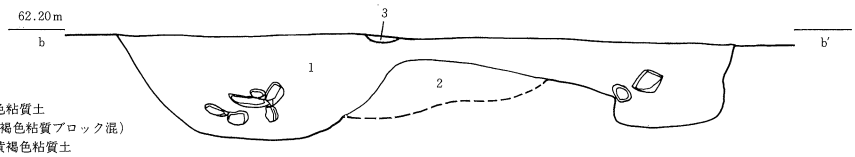
第68図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図
SB02



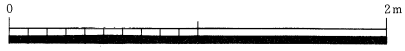


SP29
1　明黄灰色粘質土
2　黒灰色粘質土
3　黒褐色粘質土
SE47
4　黒灰色粘質土（２より粘質強）

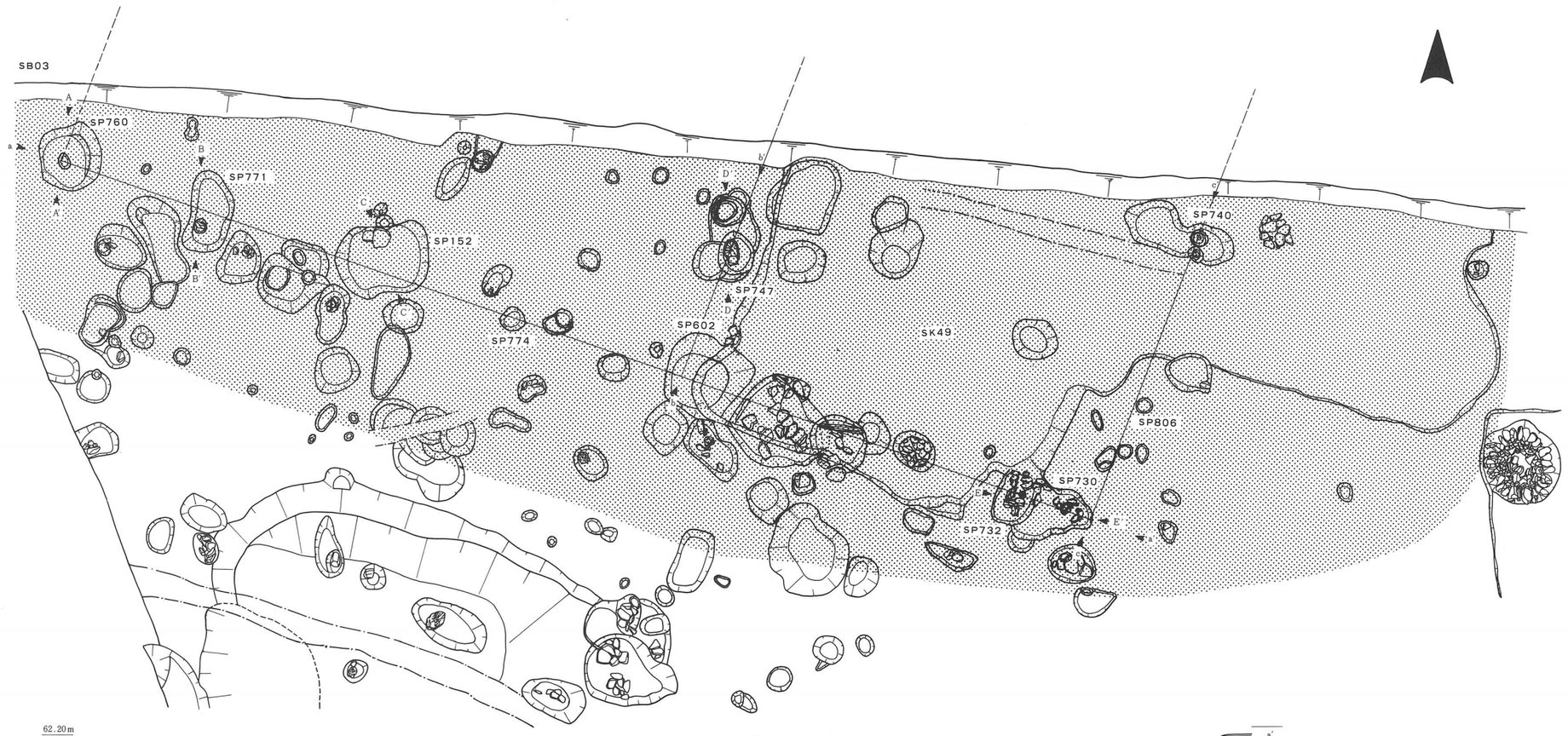


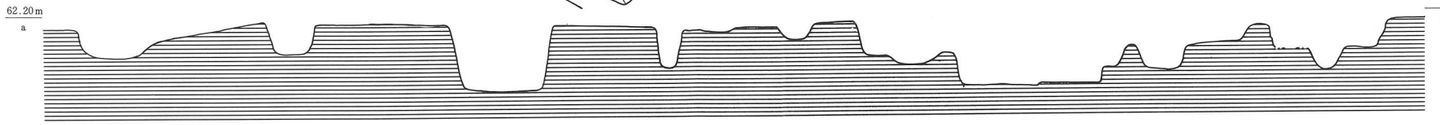


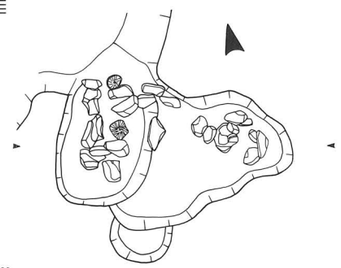
SP12
1　灰色粘質土
（黄褐色粘質ブロック混）
2　灰黄褐色粘質土
SD11
3　灰色粘質土

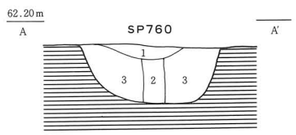


第69図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図
SB02　1.SP29　2.SP12

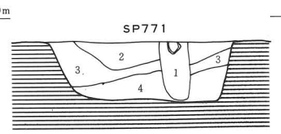




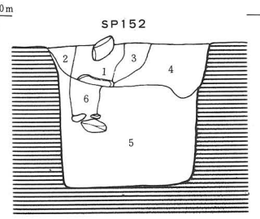




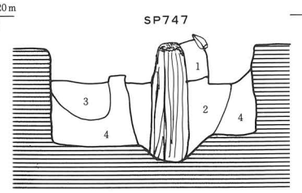
SP760
1 暗茶褐色粘質土
（暗黄褐色粘質土混）
2 黒褐色粘質土
（鉄分含む）
3 暗茶褐色粘質土
（暗黄褐色粘質土混）



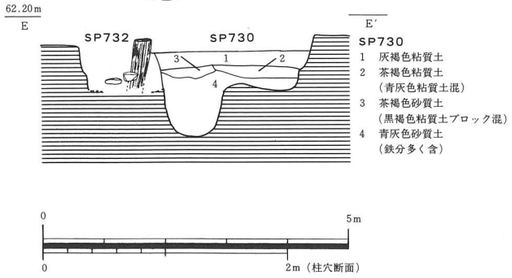
SP771
1 茶褐色粘質土
（鉄分多量混）
2 茶褐色粘質土
（黄褐色砂質土混）
3 暗黄褐色粘質土
（茶褐色粘質土混）
4 青灰色粘質土
（黒褐色粘質土混）



SP152
1 黄褐色粘質土
（明茶褐色粘質土混）
2 黄褐色粘質土
（明茶褐色粘質土混）
1よりしまっている
3 黄褐色粘質土
（茶褐色粘質土混）
4 黄褐色粘質土
（茶褐色粘質土混）
5 暗青灰色粘質土
（黒褐色粘質土混）
6 黒褐色粘質土
（青灰色粘質土混）

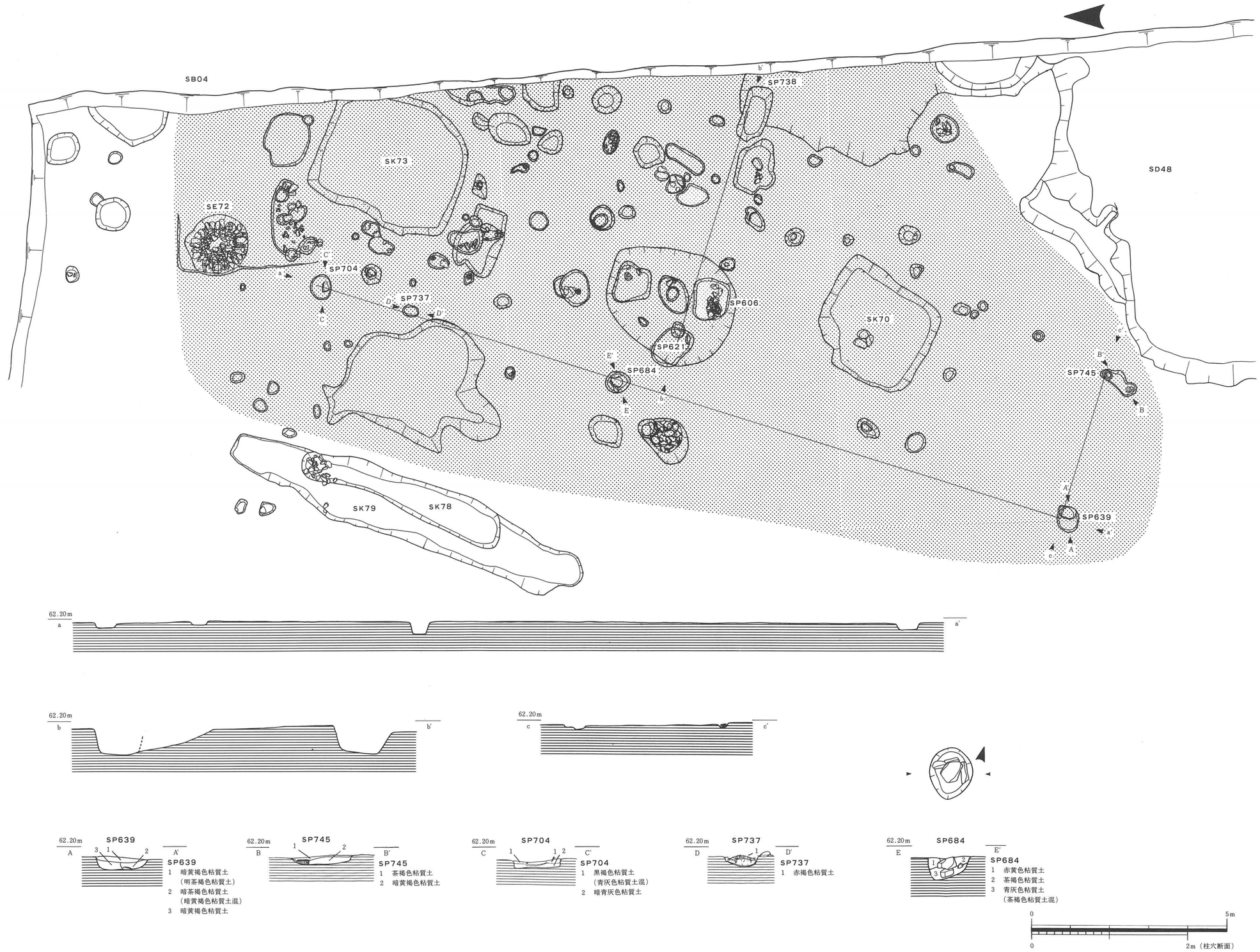


SP747
1 茶褐色粘質土
2 黒褐色粘質土
（青灰色粘質土混）
3 黒褐色粘質土
（青灰色粘質土混）
2より青灰色多い
4 青灰色粘質土



SP730
1 灰褐色粘質土
2 茶褐色粘質土
（青灰色粘質土混）
3 茶褐色砂質土
（黒褐色粘質土ブロック混）
4 青灰色砂質土
（鉄分多く含）

第70図　田尻遺跡 第一次調査 遺構実測図
SB03



第71図　田尻遺跡 第一次調査 遺構実測図
SB04

出土遺物には須恵器，中世土師器，珠洲，越前，伊万里，唐津，田下駄，箸，石臼，五輪塔，銭貨などがある。N～C地区境界では権現堂川の氾濫原によって平面プランが不明確となっている。幅3.2m，深さ33～61cmを測る。遺物は中世土師器，珠洲，越前，唐津，伊万里，円形板，石臼などである。明治時代の陶磁器も出土する。遺構の時期はともに近世から近代で，中世まで遡る可能性も考えられる。

25号溝（SD25，第75図，図版84）

N地区南東端でSK02に切られ，緩やかに南下し，権現堂川の氾濫原に合流する。最大幅7.3m，深さ49cmである。N地区南東部では，I層直下に黄褐色粘質土のブロックが混入する黒褐色粘質土を確認した。これはSD25の覆土あるいは旧水田の耕作土の可能性が考えられるが，明らかではない。ここからは内黒の土師器・珠洲・越前・伊万里が出土した。溝の覆土は上層は黒褐色粘質土，下層は砂と礫の互層になっているため，かなり急流であったと推測される。挿図中の破線は礫の流れを示している。出土遺物は，後期中葉から後葉の縄文土器，珠洲，越前，唐津がある。遺構の時期は15世紀から17世紀と考えられる。

48号溝（SD48，第73図）

S地区の南端に位置し，権現堂川旧河川の左岸側と考えられ，北端は若干浅くなる。梅原安丸遺跡調査区の東側から北流し，S地区の南端をかすめて一旦南下し，再びC地区の西側を北流する。確認した最大幅は10m，深さは35～130cmを測る。覆土は褐色系と黄褐色系の粘質土やそれらに砂礫が混入したものである。調査中にセクションが崩落した部分は，挿図中に破線で復原している。遺物は須恵器，中世土師器，珠洲，越前，瀬戸美濃，中国製白磁？，中国製青白磁，中国製青磁，土師質土器，越中瀬戸，唐津，曲物側板・桶側板，クルミ，松ぼっくり，アカマツの種子が出土した。また最下層からは半円形の曲物が出土した。15世紀から17世紀にかけての流路と考えられる。

60号溝（SD60，第75図）

C地区中央を東から西に流れる溝である。権現堂川の氾濫原であるSD118より新しい。最大幅5.65m，深さ1.29mを測る。覆土は，6・7層が砂礫あるいは礫層であり，それより上層は粘質土で埋め土である。遺物は土師器，須恵器，珠洲，越前，唐津，伊万里，近世陶磁器，石臼，金属製品，ビール瓶などが出土する。これを切り込んで暗渠が造られていることから，圃場整備前の溝と考えられる。挿図における礫層中の破線は礫の流れを示す。

61号溝（SD61，第75図）

C地区南端に位置するよどみ状の溝である。最深78cmを測り，北肩のみを検出している。覆土は黒褐色粘質土礫混じりの層が一部にみられるものの，ほとんどが灰黒色粘質土である。この層から越前が出土しており，SD62の同一層から出土したものと接合できる。この他須恵器，中世土師器，珠洲，越前，中国製白磁あるいは染付，越中瀬戸，唐津，京焼風唐津，唐津あるいは福岡？，伊万里，桶側板，曲物側板，折敷？，擂粉木，漆器椀，柱？，銭貨などがある。またオニグルミなどの種子も出土している。遺構の時期は15世紀から17世紀と考えられる。

62号溝（SD62，第75図，図版84）

SD61の北側を北西に走り，権現堂川の氾濫原に流れる溝である。X56Y30でSD63に切られる。最大幅は4.5m，最深60cmを測る。溝の断面はU字状で，灰色系の粘質土がレンズ状に堆積する。SD63との合流点では，小礫が混入する砂質土がほぼ水平に堆積する。遺物はSD61とSD62の灰黒色粘質土から出土した越前が接合できるため，同時に流れていた時期があると考えられる。X50Y32付近の下層から，長さ4mの大木が流れに沿った状態で出土した。上流から流され，深みにとどまったものと思

われる。腐食が激しくその形状については確認できなかった。他には縄文土器，中世土師器，珠洲，越前，瀬戸美濃，中国製白磁，中国製青磁，土師質土器，越中瀬戸，唐津，伊万里，下駄，漆器椀，桶側板，木簡，石臼，五輪塔，銭貨などがある。遺構の時期は15世紀後半から17世紀である。

63号溝（SD63，第75図，図版84）

SD62の北に位置しSD118に流れ込むもので，SD62より新しい。最大幅4.22m，深さ64cmを測る。断面は緩やかなU字状を呈する。SD62との合流点では北側の底部は若干深めに抉られ，底面中央はやや高くなる。覆土には鉄分を含んだ粘質土と砂礫の混合層が堆積し，砂礫が比較的多い。出土遺物には縄文土器，珠洲がある。遺構の時期は，16世紀から17世紀と考えられる。

69号溝（SD69，第72図）

N·C地区間の農道下で検出された溝で，SD09の延長上に位置する。権現堂川氾濫原の影響で平面プランは明確ではないため，SD09との関係も不明である。X81Y24で二股に分かれ，一方は南に弧を描くように，もう一方は東に流れる。SD09より小規模で，最大幅2.4m，深さ33cmを測る。覆土は上層が茶褐色粘質土，中層が砂層，下層は青灰色粘質土に黒褐色粘質土のブロックが混入する。越前の甕が出土している。

95号溝（SD95，第75図）

SD25とSD60に挟まれた台地部分を南東から北西に流れる溝である。東側はSD60に，西側は試掘坑によって切られる。最大幅56cm，深さ12cmを測り，覆土は茶褐色粘質土の単層である。遺物はない。

115号溝（SD115，第75図）

SD08の延長上に位置すると考えられる溝である。覆土は上層と下層が粘質土，中層は砂層と礫層で，出土遺物の混合層で遺物は出土していない。

118号溝（SD118，第76図，図版85）

権現堂川の氾濫原である。C地区の拡張部分のほぼ全体がこれにあたる。断面図は南北セクションの東面で，礫の流れは破線で示している。砂質土と砂礫がほぼ水平堆積し，所々に粘質土がブロックで混入している。SD25，SD62，SD63，SD115の流れがここに集結する。遺物には縄文土器，須恵器，緑釉陶器，土師器，中世土師器，珠洲，越前，中国製青磁，越中瀬戸，唐津，京焼風唐津，伊万里，瀬戸美濃本業焼，桶側板，漆器椀，柱，打製石斧，石臼，五輪塔，小柄が出土する。柱はほとんどが中央部分から出土し，最長3m余りである。底部を削りだし，運搬用の方形孔を穿っている。遺構の時期は，15世紀から17世紀と考えられる。

(3) 井戸

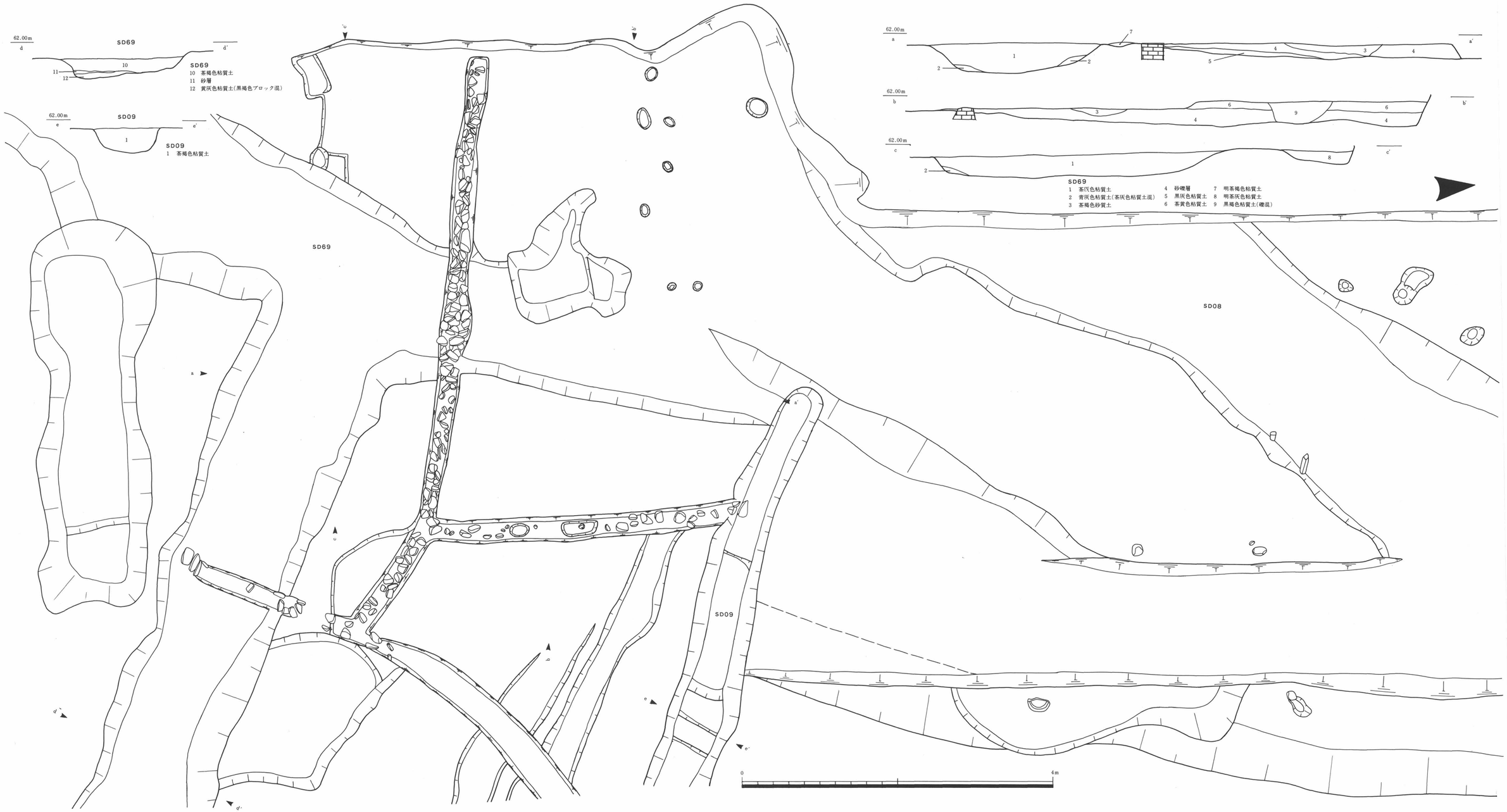
井戸は46基検出しているが時期が判明するものはわずかで，17～19世紀と考えられる。井戸には素堀りと石組みがあり，後者には，近世掘立柱建物に伴うと考えられるものもある。その構造は，角板状の木をほぞで方形に組み合わせ，その上に川原石を積み上げるものが多い。

15号井戸（SE15，第77図）

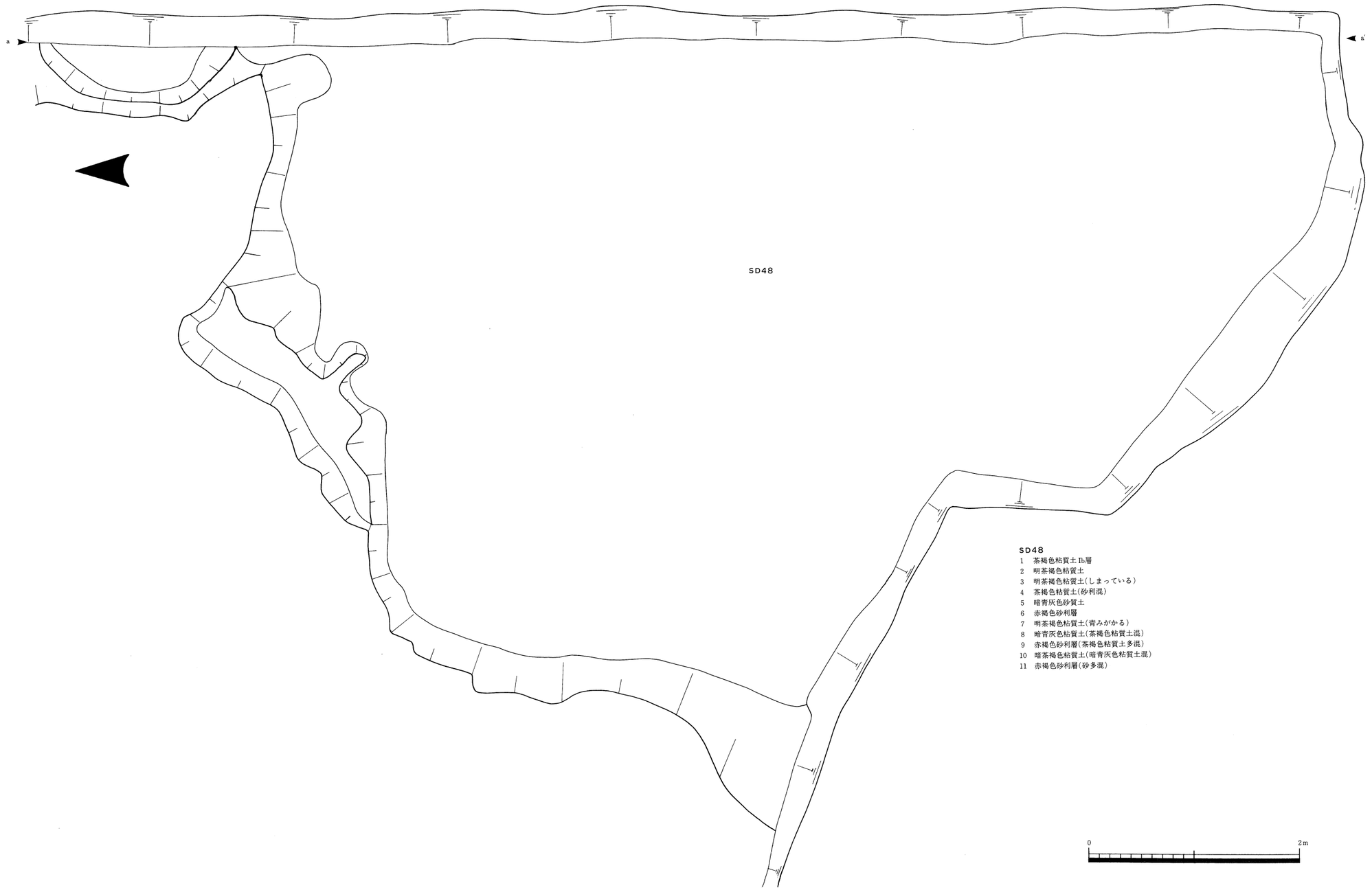
N地区南東隅に位置する素掘り井戸である。長軸150cm，短軸96cmの楕円形を呈する。深さは114cmを測る。断面は円筒形で，底面の北側が若干深くなっている。上層は灰褐色粘質土に黄褐色粘質土ブロック混じりの土で覆われる。円形板のみが出土する。

18号井戸（SE18，第77図）

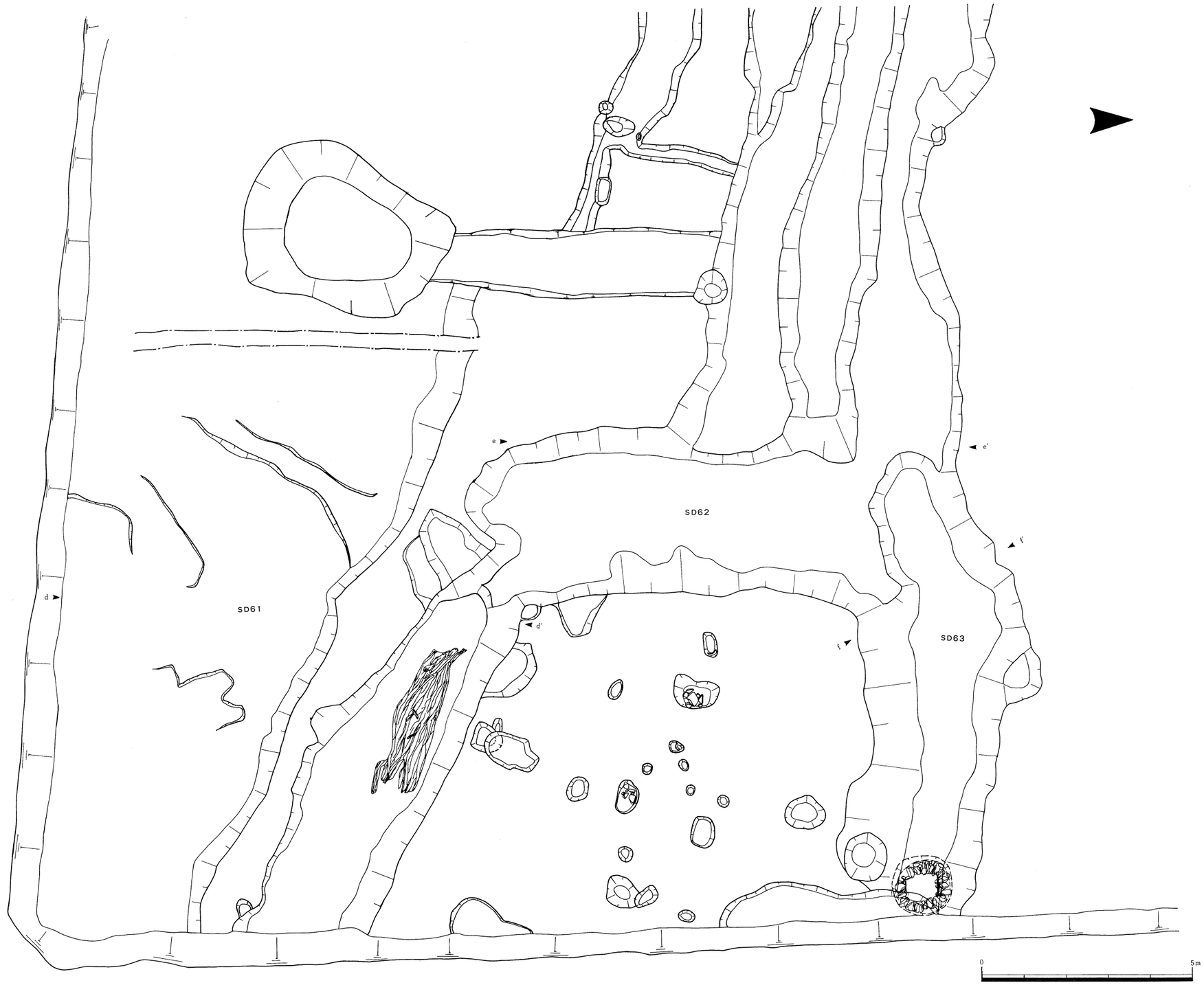
X90Y34に位置する素掘り井戸である。長軸112cm，短軸100cm，深さ184cmを測る。覆土は上層は黒



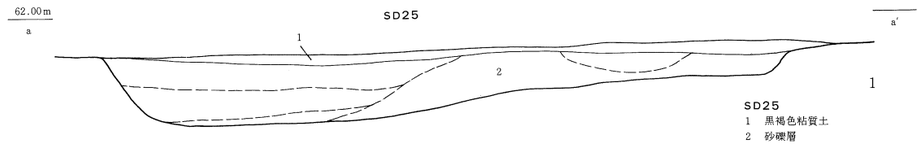
第72図　田尻遺跡 第一次調査 遺構実測図
SD08・SD09・SD69



第73図　田尻遺跡 第一次調査 遺構実測図
SD48

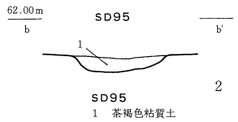


第74図　田尻遺跡 第一次調査 遺構実測図
SD61・SD62・SD63



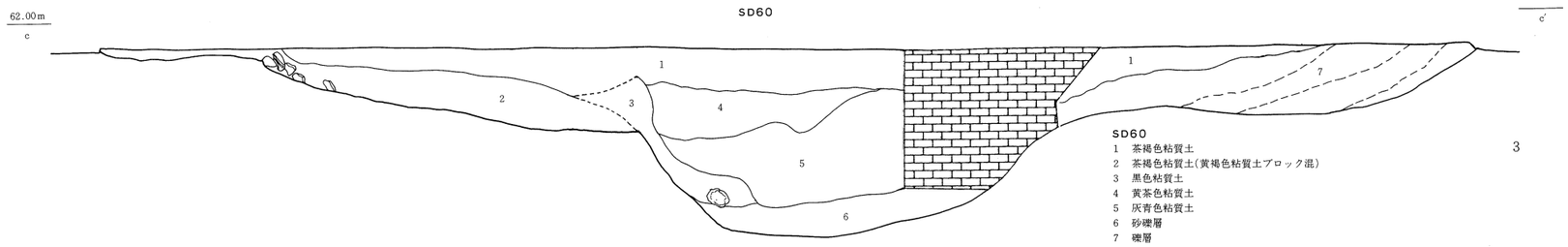
1

SD25
1　黒褐色粘質土
2　砂礫層



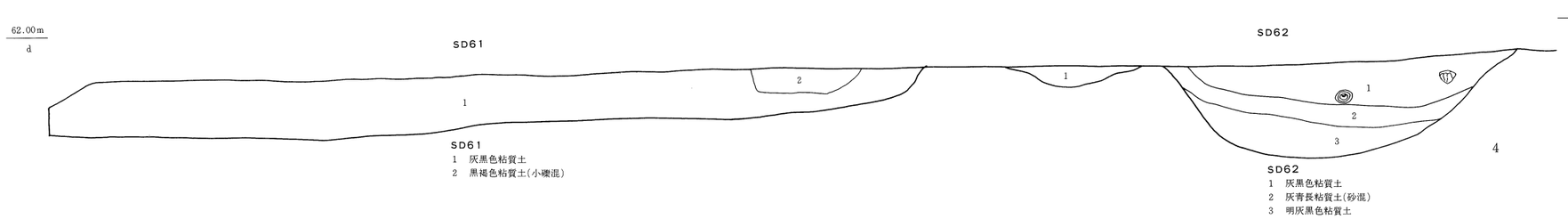
2

SD95
1　茶褐色粘質土



3

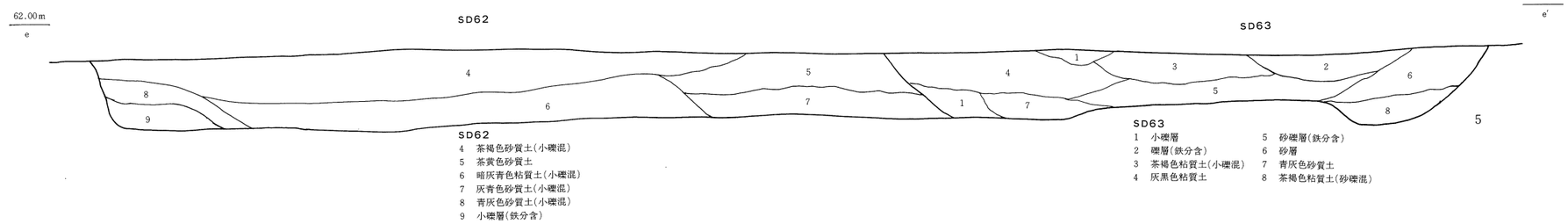
SD60
1　茶褐色粘質土
2　茶褐色粘質土(黄褐色粘質土ブロック混)
3　黒色粘質土
4　黄茶色粘質土
5　灰青色粘質土
6　砂礫層
7　礫層



SD61
1　灰黒色粘質土
2　黒褐色粘質土(小礫混)

4

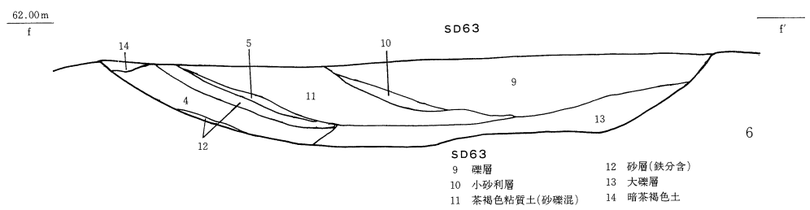
SD62
1　灰黒色粘質土
2　灰青長粘質土(砂混)
3　明灰黒色粘質土



SD62
4　茶褐色砂質土(小礫混)
5　茶黄色砂質土
6　暗灰青色粘質土(小礫混)
7　灰青色砂質土(小礫混)
8　青灰色砂質土(小礫混)
9　小礫層(鉄分含)

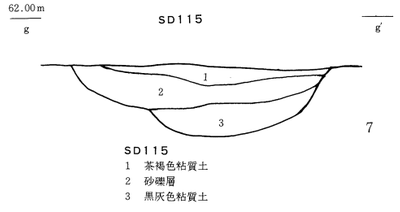
5

SD63
1　小礫層
2　礫層(鉄分含)
3　茶褐色粘質土(小礫混)
4　灰黒色粘質土
5　砂礫層(鉄分含)
6　砂層
7　青灰色砂質土
8　茶褐色粘質土(砂礫混)



6

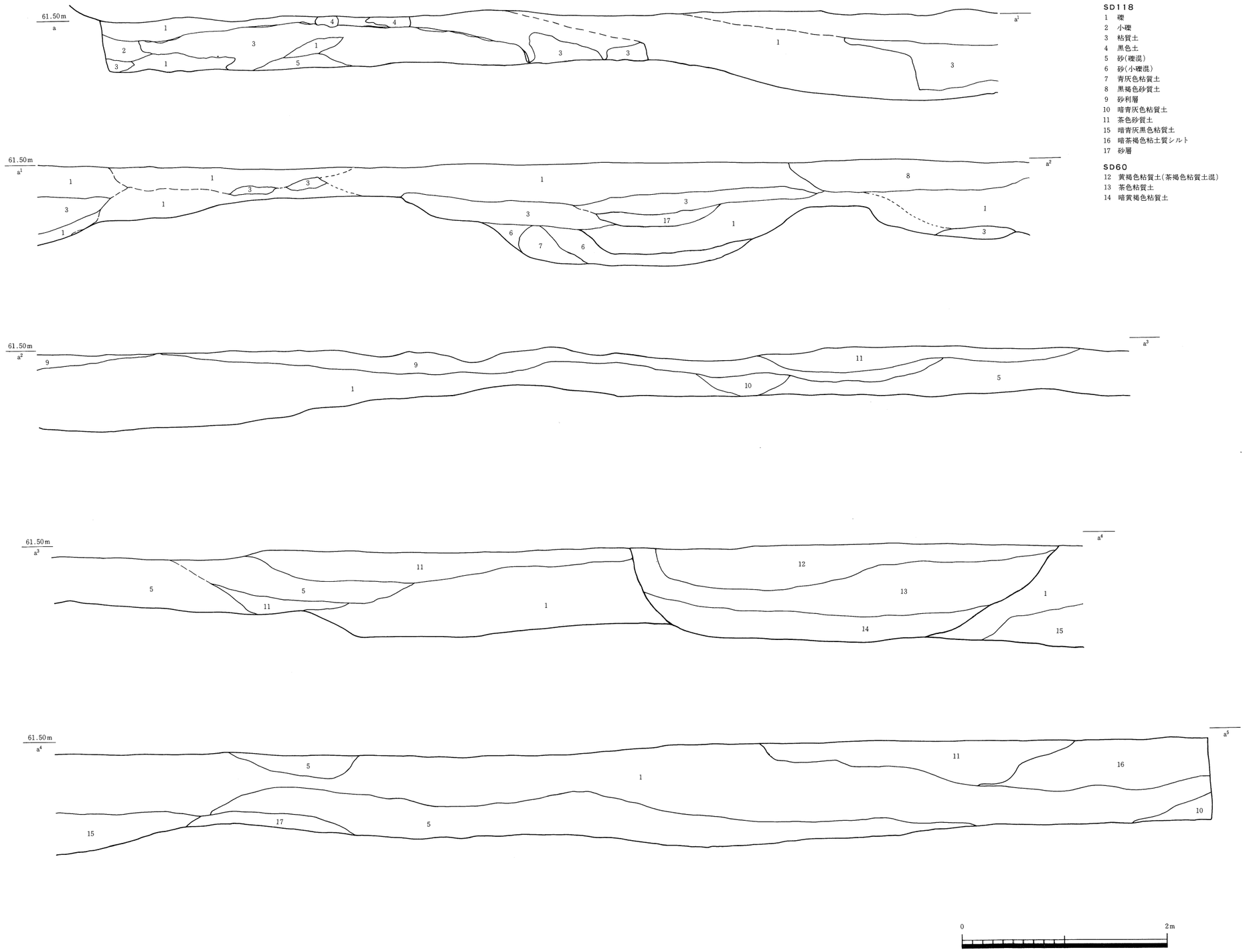
SD63
9　礫層
10　小砂利層
11　茶褐色粘質土(砂礫混)
12　砂層(鉄分含)
13　大礫層
14　暗茶褐色土



7

SD115
1　茶褐色粘質土
2　砂礫層
3　黒灰色粘質土

第75図　田尻遺跡 第一次調査 遺構実測図
1.SD25 2.SD95 3.SD60 4.SD61・SD62 5.SD62・SD63 6.SD63 7.SD115



SD118
1 礫
2 小礫
3 粘質土
4 黒色土
5 砂(礫混)
6 砂(小礫混)
7 青灰色粘質土
8 黒褐色砂質土
9 砂利層
10 暗青灰色粘質土
11 茶色砂質土
15 暗青灰黒色粘質土
16 暗茶褐色粘土質シルト
17 砂層

SD60
12 黄褐色粘質土(茶褐色粘質土混)
13 茶色粘質土
14 暗黄褐色粘質土

第76図　田尻遺跡 第一次調査 遺構実測図
SD118

灰色粘質土，下層は黄褐色粘質土と灰褐色土の混合層がみられた。遺物は，黒灰色粘質土層から須恵器，中世土師器，珠洲，中国製白磁，円形板がある。

32号・33号井戸（SE32・SE33，第77図）

X96Y33で検出した2基の素掘り井戸である。SE32はSE33に切られ，N地区東壁に切られるため平面形は不明である。覆土は上層が黒褐色粘質土，下層が黒色粘質土である。深さは190cmで，底面は砂礫層に達するが湧水はみられない。SE33はSK34に切られ，SE32を切る。断面は円筒形で覆土は上層が明黒色粘質土，下層は黒色粘質土である。深さは124cmで，底面は青灰色砂層に達するが湧水はみられない。遺物はSE32から縄文土器，珠洲，曲物，円形板，桶側板，箸，加工石，底面付近から柄杓が，SE33の上層からは柱が出土した。

36号井戸（SE36，第77図）

X97Y30で検出した素掘り井戸で，平面形は円形である。直径106cm，深さ175cmである。断面は中層部分で壁側への抉りがみられるが，それ以下は円筒形となっている。覆土は上層が黄褐色粘質土混じりの灰褐色粘質土，中層が灰褐色粘質土，下層が黒色粘質土である。遺物は越中瀬戸，唐津，加工木，石鏃が出土した。遺構の時期は16世紀から17世紀と考えられる。

44号井戸（SE44，第77図）

SE36の南東に位置する楕円形の素掘り井戸である。長軸110cm，短軸100cm，深さは174cmである。断面は南側が検出面から約10cm下まで緩くカーブを描くが，ほぼ円筒形を呈する。底面は北側が若干深くなっている。遺物は越中瀬戸，円形板，桶側板，底面から柄杓が出土した。

46号井戸（SE46，第78図）

SE18の東で検出した石組み井戸である。N地区東壁に接するため平面形は不明である。深さ約110cmで砂礫層に達する。20cm前後の川原石を螺旋状に8段積み上げている。覆土は明茶褐色粘質土である。石積みの裏込めは，井戸中の覆土と同一であった。下駄のみが出土した。

50号・51号井戸（SE50・SE51，第78図，図版89）

S地区X40Y27で検出した素掘り井戸である。SE50はSE51の西側に位置し，両者の切り合い関係はない。SE50は長軸180cm，短軸130cm，深さは60cmである。上層は鉄分を含んだ黒褐色粘質土で，下層は黒褐色粘質土に砂と青灰色粘質土が混入する。底面は礫層に達するが湧水はみられない。遺物は中世土師器，珠洲，箸，桶側板，銭貨，底面から漆器皿，曲物が出土する。遺構の時期は遺物から14世紀から16世紀と考えられる。SE51は長軸80cm，短軸60cmの楕円形を呈する。上層は黄褐色粘質土混じり黒褐色粘質土，下層は黒褐色粘質土混じりの青灰色粘土質である。箸のみが出土している。

57号井戸（SE57，第78図）

S地区X35Y35で検出した素掘り井戸である。平面は楕円形で，長軸82cm，短軸76cm，深さ90cmを測る。覆土は上層が締まった茶褐色粘質土，中層が鉄分を含んだ黄褐色粘質土，下層が暗青灰色粘質土で水平堆積する。底面は凹凸がある。遺物は出土していない。

59号井戸（SE59，第78図）

S地区X35Y36で検出した楕円形の素掘り井戸である。長軸74cm，短軸69cm，深さ79cmを測り，砂礫層に達するが湧水はみられない。覆土は上層が黄茶褐色粘質土，下層は灰黄色粘質土が混入する青灰色粘質土が水平堆積する。底面から円形板が2つに割れた状態で出土した。

64号井戸（SE64，第78図）

C地区X62Y30にあり，直径90cmの円形を呈する。礫層を掘り込み，深さ69cmを測る。埋土は砂礫

混じり黒褐色粘質土の単層で，礫は中央部に多くみられる。底面付近から円形板が出土した。他には折敷？，柱がある。

71号井戸（SE71，第78図，図版88）

SK49の東で検出した円形の素掘り井戸である。直径86cm，深さ68cmを測る。断面は円筒形である。上層から中層は黒褐色系の粘質土で，西から東に向かって深く堆積する。下層は灰褐色砂利層が水平に堆積する。中層には炭化した棒状木製品が西側にかたまって出土した。木製品を除去した4層から炭化した珠洲の擂鉢が出土した。他には縄文土器，箸，折敷，曲物，杭がある。

72号井戸（SE72，第79図）

SE71の南で検出した円形の石組み井戸である。直径161cm，深さ108cmを測る。深さ約50cmで礫層に達するが，湧水はみられない。川原石は底面付近では約40cmと大きく，上方へ20cm前後のものを左回り螺施状に積み上げている。掘形埋土は暗茶褐色粘質土である。遺物は出土していないが，位置的にSB03もしくはSB04に伴うものと考えられる。

74号井戸（SE74，第79図）

SE50の北西で検出した楕円形の素掘り井戸である。長軸90cm，短軸78cm，深さ128cmである。上層の一部は暗渠に切られ，覆土は砂利混じり暗青灰色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

75号井戸（SE75，第79図）

SE74の北西で検出し，SB03の柱穴SP602に接する。長軸105cm，短軸84cm，深さ85cmを測る。検出面で，10～20cmの川原石が穴の中央に重なって確認した。覆土は上層が暗青灰色粘質土に暗茶褐色粘質土が混入したもの，中層が暗青灰色粘質土，下層が暗青灰色砂層に少量の礫が混入するもので，ほぼ水平に堆積する。上中層の一部は暗渠によって切られる。遺物は越中瀬戸登窯期の椀が出土している。

77号井戸（SE77，第79図）

X35Y32で検出した井戸で，SK633に切られる。長軸140cm，短軸100cm，深さ83cmである。上層は青灰色粘質土が混入する暗黄褐色粘質土，下層は黒褐色粘質土が混入する暗青灰色粘質土である。下層には20～40cmの礫や五輪塔，石臼・石鉢が無造作に埋められている。また30cm四方の編竹状製品が北側底面に貼り付いた状態で出土した。

82号井戸（SE82，第79図）

X74Y33で検出した楕円形の素掘り井戸である。長軸82cm，短軸76cm，深さは86cmである。覆土は灰色系の粘質土と黒色系の粘質土がみられる。南側の下層には，20cm前後の礫が弧を描くように検出されたため柱穴の根固め石の可能性も考えられる。下層の黒灰色粘質土から珠洲Ⅴ～Ⅵ期の擂鉢が出土した。他に円形板，桶側板，16世紀の漆器皿がある。遺構の時期は14世紀から16世紀である。

87号井戸（SE87，第79図）

C地区のX73Y31で検出した楕円形の素掘り井戸である。長軸100cm，短軸70cm，深さ70cmを測る。SK86より新しい。覆土は上層が茶黄色粘質土，下層が礫混じり青灰色粘質土である。遺物は出土していない。

88号井戸（SE88，第80図）

SK86の床面から検出した楕円形の素掘り井戸である。SK86に切られる。長軸130cm，短軸95cm，深さ63cmである。覆土は上層が礫混じりの灰黒色粘質土，下層が礫混じりの暗灰黒色粘質土でともに水平堆積である。遺物は中世土師器の破片が出土しただけである。

92号井戸（SE92，第80図，図版85）

SK84の南で検出した円形の素掘り井戸である。直径は203cmと調査区中最大で，深さは80cmを測る。断面は擂鉢状を呈する。覆土は上層が黄茶色粘質土，下層が灰黒色粘質土である。深さ40～50cmには，川原石に混じって刳物匙，櫛，柄杓，漆器椀，箸，板状木製品が出土した。柄杓は中層の東側で正位で出土した。柄は身からはずれ，直径の中心からややずれた側板上縁にのった状態であった。柄杓の周囲上面には大小の川原石や板状加工木が出土している。樹種は側板はスギ，柄はアスナロである。他には須恵器，珠洲，中国製青磁が出土し，遺構の時期は15世紀から16世紀と考えられる。

柄杓はそれ自体が呪具といわれ，石川県美麻奈比古神社遺跡では井戸底から柄のない有蓋の柄杓が出土し，水神を納めた容器として転用されたと考えられている。また滋賀県大津市では２個の石を抱き合わせて井戸に投入する山神を祭る行事が今なお行われているという[注２]。当調査区ではこの遺構のほかSE32・SE44の底面中央からも正位で出土しており，祭祀的な意味を持つ可能性がある。

94号井戸（SE94，第81図，図版87）

X69Y32で検出した石組み井戸である。平面は楕円形で，長軸164cm，短軸142cmである。比較的小さな川原石を左回りに積み上げている。断面は円筒形であるが，南側は緩くカーブしながら北側は直角をなして底面となる。石積みの土台として，芯持ち材の中央から両端に向かって削り落とし先細りさせた材と材を重ねて方形に組んでいる。深さ約100cmで砂礫層に達するが，湧水はみられない。出土した瀬戸美濃から遺構の時期は18世紀から19世紀と考えられる。

96号井戸（SE96，第80図）

X66Y34で検出した平面形が楕円の素掘り井戸である。上面はSD60に切られる。長軸135cm，短軸130cmである。覆土は上層が褐色系の粘質土，下層が砂質土である。深さ約62cmで黄褐色砂質土に達するが，湧水はみられない。遺物は底面に川原石と木片がみられただけである。

101号井戸（SE101，第80図）

SD62とSD63に挟まれた台地上で検出されたものである。平面形は楕円で，長軸95cm，短軸80cm，深さ88cmである。覆土は礫混じりの茶褐色砂の単層である。円形板，桶側板が出土した。

112号井戸（SE112，第80図，図版88）

X58Y35で検出した円形の石組み井戸である。SD63の中層で確認した。直径142cm，深さ84cmである。検出面が礫層であるが湧水はみられない。石積みは右回りで３段のみ検出した。底面には，角板材が方形に組まれ，石積みの土台となっている。材の組み方は，片端を抉りもう一方をほぞにした４材を互い違いにはめ込んで枠とする。北辺の材下には，安定させるための石が差し込まれている。遺物は越前，石臼が出土した。16世紀から17世紀と考えられる。

113号井戸（SE113，第81図，図版86）

X53Y22で検出した楕円形の石組み井戸である。長軸110cm，短軸98cm，深さ60cmである。SD118に切られるため，石積みは下から３段分のみの検出である。比較的小さな石を，左回りに積み上げている。検出面から約40cmで段がついて，水溜部分となり，直径40cmを測る。掘形埋土は砂混じりの小礫である。遺物は中世土師器のみが出土した。

151号井戸（SE151，第81図）

SK150のほぼ床面で検出した楕円形の素掘り井戸である。長軸106cm，短軸88cm，深さは92cmである。覆土は暗青灰色粘質土に黒褐色粘質土が混入する単層で植物繊維を多く含む。遺物は石鉢のみである。

154号井戸（SE154，第81図）

X42Y23で検出した楕円形の素掘り井戸である。長軸93cm，短軸85cmである。深さは当地区最深の342cmで，若干の湧水がみられるがその地点は未確認である。覆土は上層が褐色系の粘質土に黄褐色または青灰色粘質土が混入したもの，下層が暗青灰色シルトである。遺物は瀬戸美濃？，越中瀬戸？，唐津，円形板，モモの種子が出土した。

(4) 土坑

土坑には円形，楕円形，方形，不整形のものがある。遺物量が少なく性格が不明瞭なものも多い。円形・楕円形の中には深さが約１ｍで，根固め石をもつため，柱穴になると考えられるものがある。方形，不整形の中には，床面がほぼ平坦で，覆土は単層のものが多くみられる。また建物の敷地内に位置し，土間と推測されるものもある。

13号土坑（SK13，第82図）

SB01の北，X90Y31で検出した不整形の土坑である。西側が浅いテラス状になり，中央部分が深くなる。検出面中央で５～10cmの川原石が密集しているのを確認した。覆土は全体に褐色系の粘質土で，黄褐色粘質土が混入する。遺物は土師器，中世土師器，珠洲が出土した。

14号土坑（SK14，第82図）

X89Y34で検出した深さ15cmの土坑である。東側をSK02，SD01に切られる。上面削平のため輪郭が一部途切れる。覆土は黒色粘質土の単層で，遺物は出土していない。

16号土坑（SK16，第82図）

X87Y30で検出した楕円形の土坑である。長軸97cm，短軸57cm，深さ35cmである。覆土は上層が黄褐色粘質土のブロックが少量混入する灰褐色粘質土，下層は灰褐色粘質土のブロックが少量混入する黄褐色粘質土である。遺物は出土していない。

19号土坑（SK19，第82図）

SB02の南，X86Y30で検出したもので，平面は楕円形である。長軸130cm，短軸95cmを測る。深さは東から西に緩やかに傾斜し，中央で最深67cmを測る。掘形中央に１本と東側の傾斜部分に２本，柱を検出したため柱穴と考えられる。覆土は黄褐色土のブロックが混入する灰褐色粘質土である。オニグルミの種子がある。

22号土坑（SK22，第82図）

Ｎ地区南の農道に切られる土坑である。楕円形を呈すると思われ，長軸82cmを測る。西側に向かって若干深くなり，最深で122cmを測る。唐津が出土した。

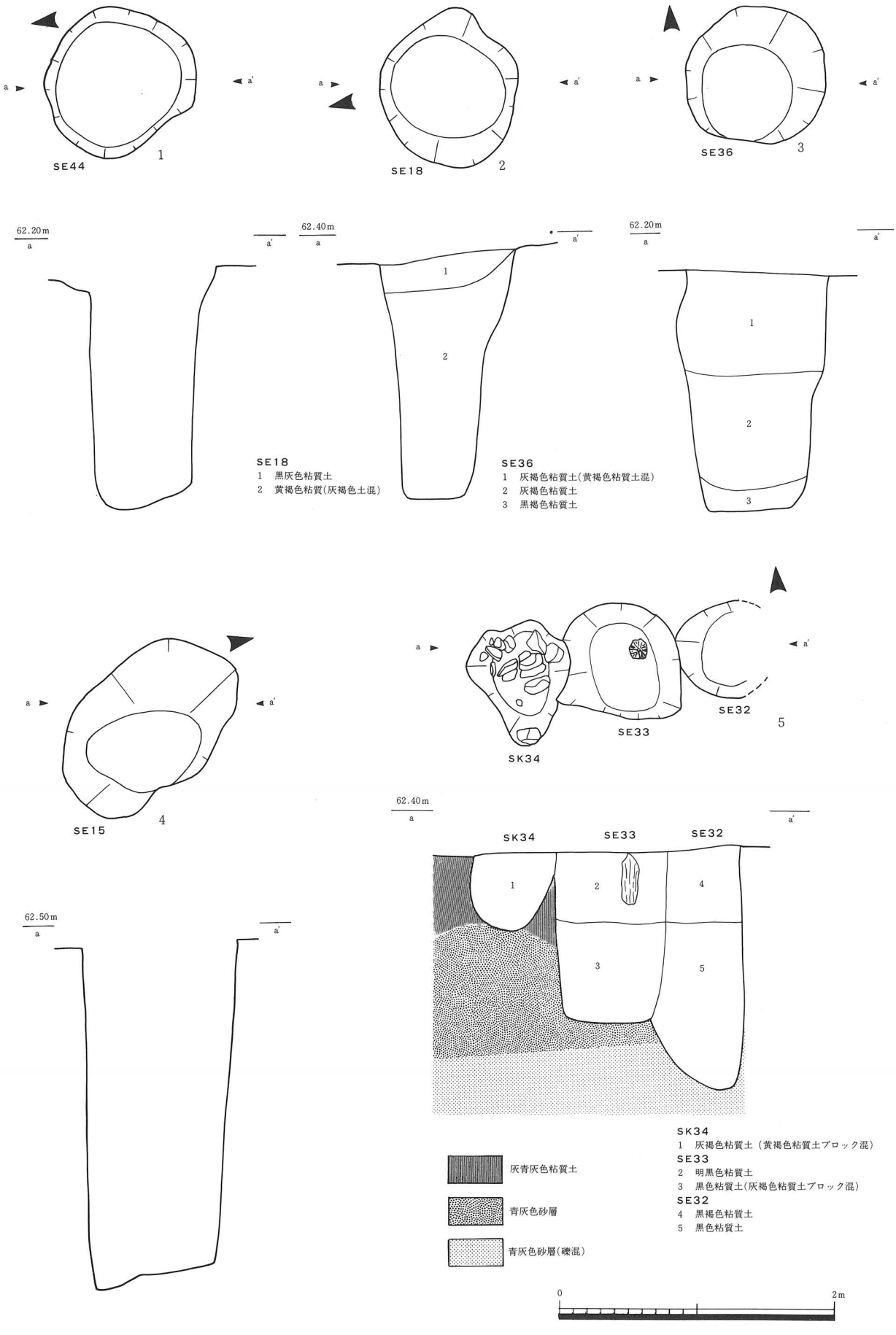
27号土坑（SK27，第83図）

SB02の南で検出したもので，楕円形を呈し長軸94cm，短軸52cmを測る。北から南へ傾斜し，最深で28cmを測る。覆土は２層あり，いずれも褐色系の粘質土に黄褐色粘質土が混入する。柱痕跡が認められるため，柱穴と考えられる。遺物は出土していない。

28号土坑（SK28，第82図）

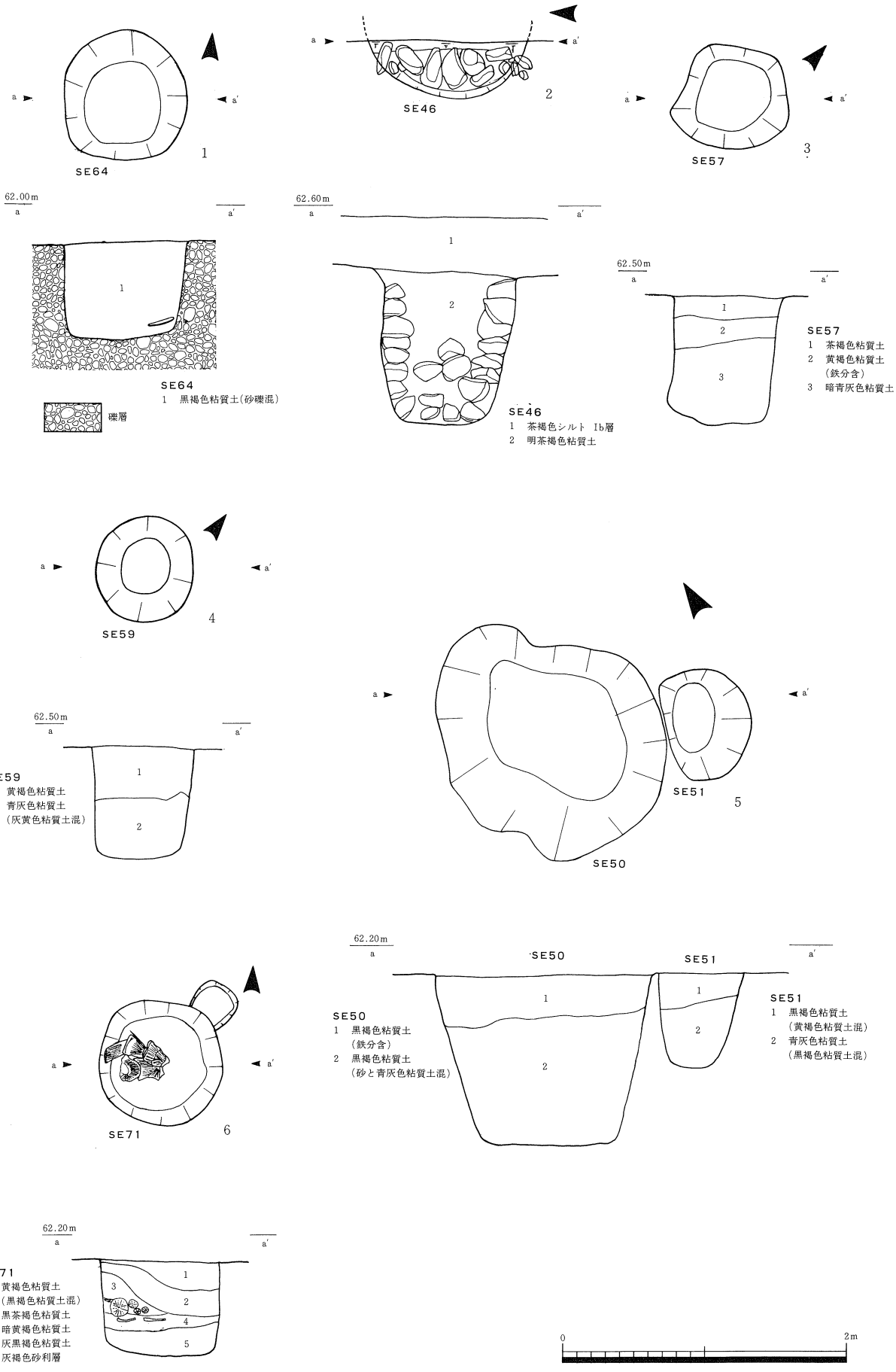
X88Y29で検出した長方形の土坑である。長辺165cm，短辺145cmを測る。床面は平坦で，壁は垂直に立ち上がる。覆土は暗黄灰色粘質土である。それを切るように土坑内の東寄りにSB02の柱穴と考えられる川原石の入った柱穴がみられる。覆土は黄褐色粘質土のブロックが混入した灰褐色粘質土である。SK28は中世土師器が出土したものの，SB02に付随したものと推測されるため，時期は16世紀から17世紀と考えられる。

30号土坑（SK30，第82図）



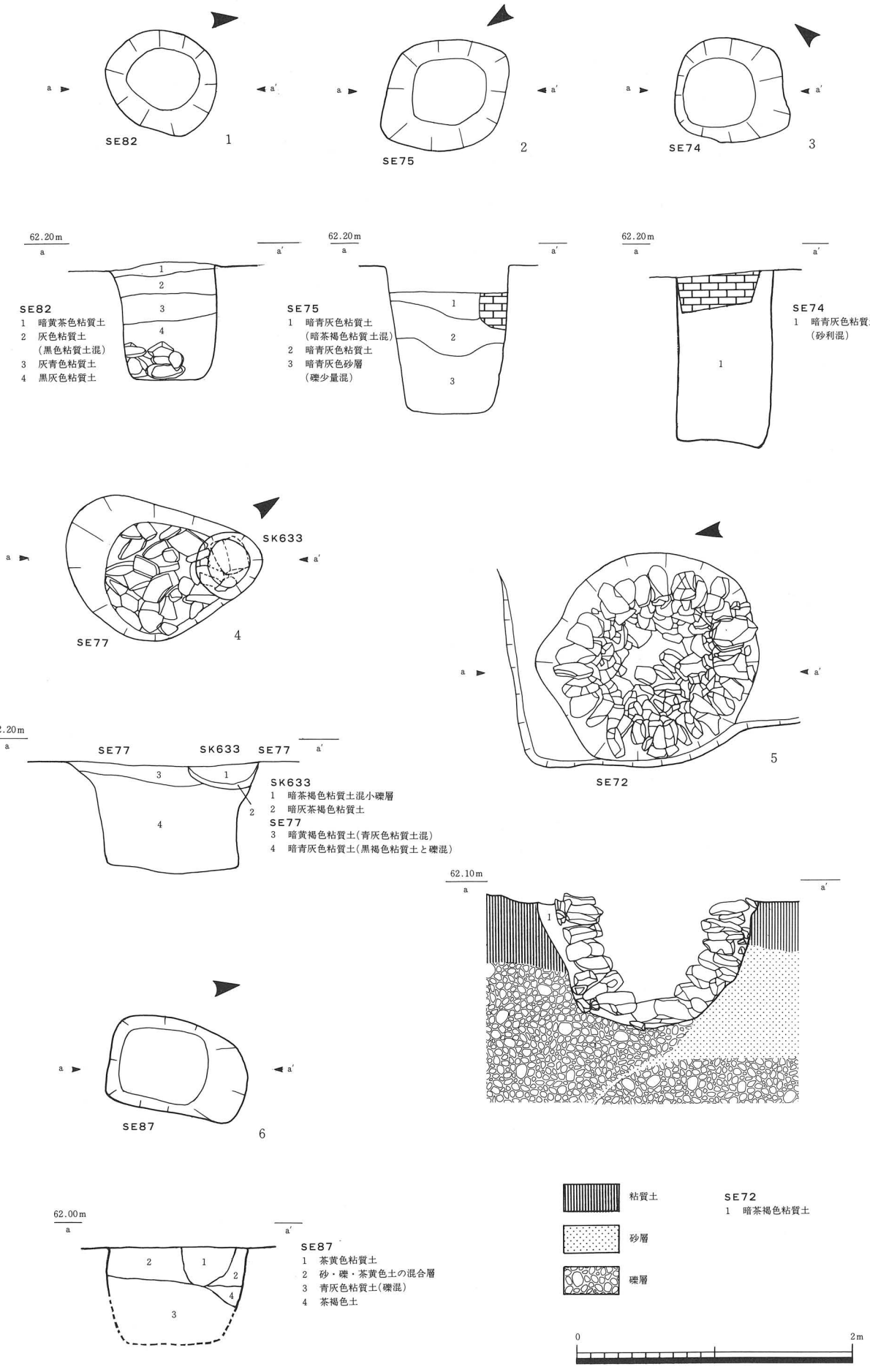
第77図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図

1.SE44 2.SE18 3.SE36 4.SE15 5.SE32・SE33



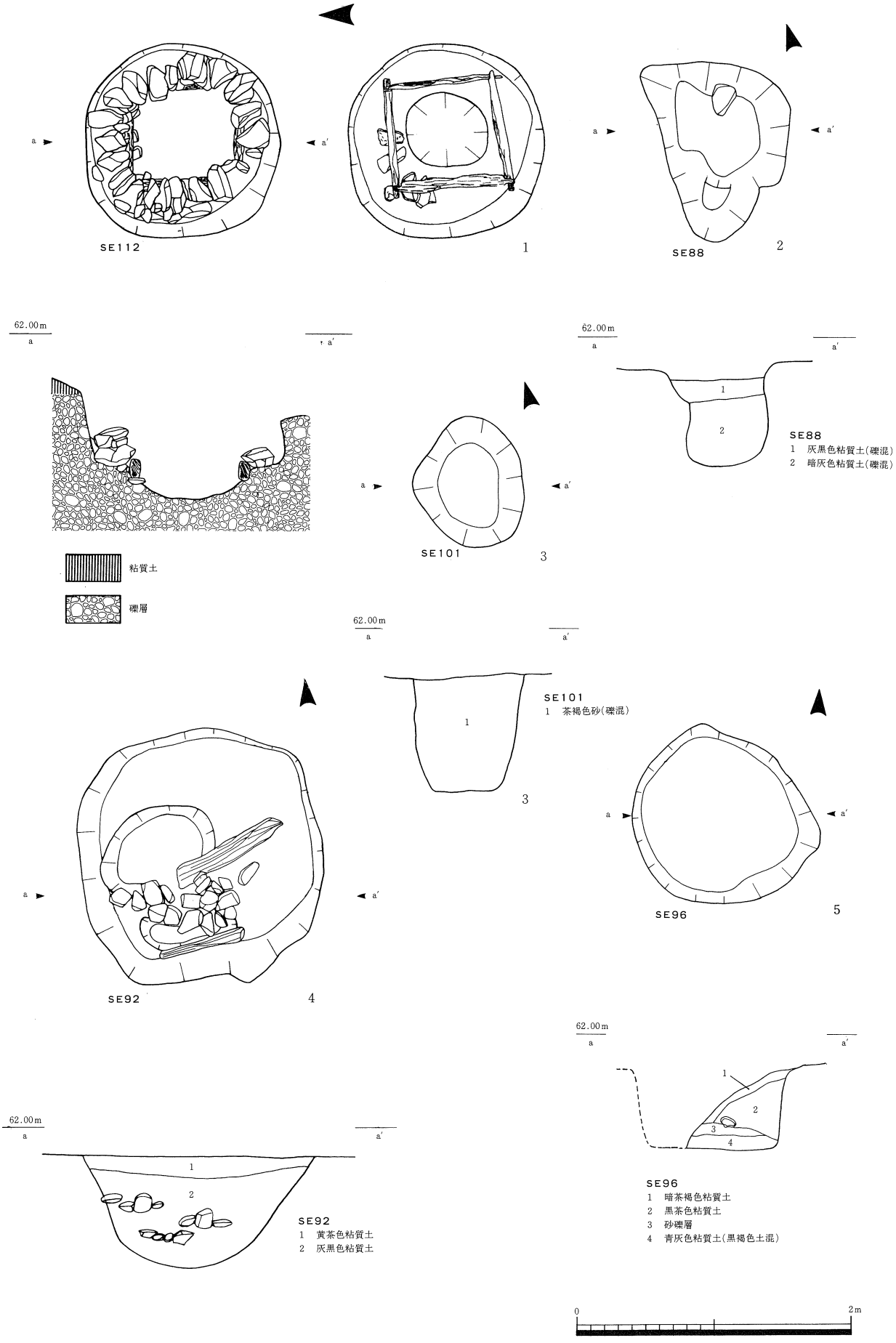
第78図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図

1.SE64 2.SE46 3.SE57 4.SE59 5.SE50・SE51 6.SE71



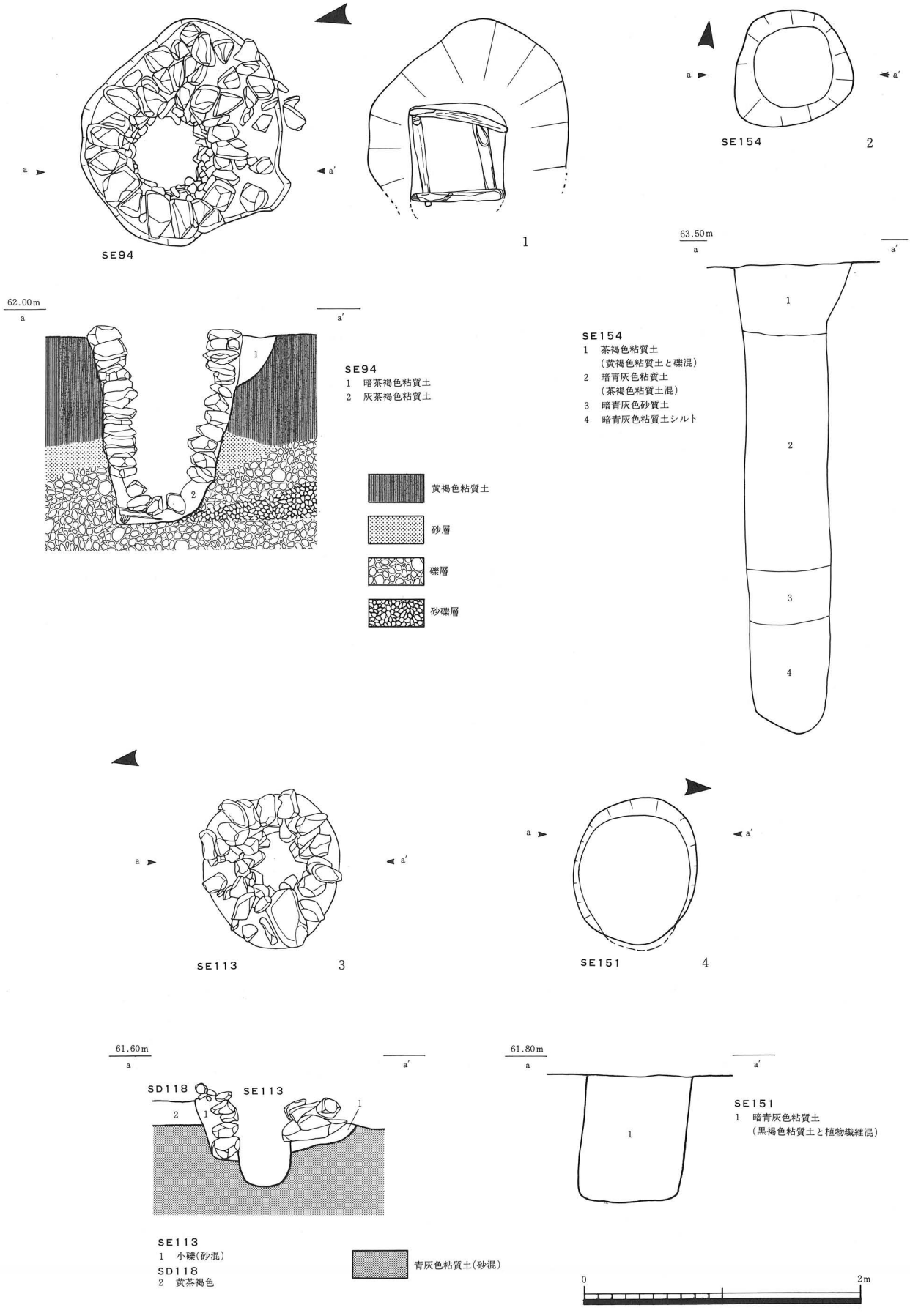
第79図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図

1.SE82 2.SE75 3.SE74 4.SE77 5.SE72 6.SE87



第80図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図

1.SE112 2.SE88 3.SE101 4.SE92 5.SE96



第81図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図
1.SE94 2.SE154 3.SE113 4.SE151

SB02の西に検出した楕円形の土坑である。長軸114cm，短軸108cm，深さ11cmである。覆土は灰褐色粘質土のブロックが混入した黒褐色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

39号土坑（SK39，第84図）

X95Y29～30で検出した長方形の土坑である。東西191cm，南北150cmを測る。深さは16cmで床面は平坦である。覆土は明黄灰色粘質土である。この土坑とSP559の覆土が同一であることから，これらは同時に存在していたものと考えられる。この土坑はSK558廃絶後につくられ，SB01の付属施設として機能していたと推測される。遺物は出土していない。遺構の時期は16世紀から18世紀である。

40号土坑（SK40，第83図）

X95Y30で検出した楕円形の土坑である。長軸78cm，短軸44cm，深さ40cmを測る。断面は西側は緩やかで，東側はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は灰黒色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

49号土坑（SK49，第86図）

X39～43Y27～34で検出した不整形の土坑である。北側は調査区壁によって切られる。深さは43cmである。覆土は黄褐色粘質土が混入する褐色系の粘質土である。中央部分に貼り床と考えられる締まった青黒色粘質土が堆積し，挿図中にはこの範囲を断面図から復原した。床面は平坦で，ここではSE123を，SK49の検出面では井戸など検出している。SE123廃絶後SK49が，SK49廃絶後SE124が構築されたものと考えられる。またSP740の東には集石がみられ，礎石の可能性も考えられる。遺物は縄文土器，須恵器，中世土師器，珠洲，越前，瀬戸美濃，中国製白磁，中国製染付，越中瀬戸，唐津，伊万里，漆器皿，桶側板，石鉢，銭貨，オニグルミの種子がある。SB03に伴う土間と考えたい。遺構の時期は17世紀から18世紀と考えられる。

52号土坑（SK52，第84図）

SE50の東，X40Y26で検出された長方形の土坑である。南北126cm，東西68cm，深さ60cmを測る。覆土は上層が灰茶褐色粘質土混じり黄褐色粘質土，下層が黒褐色粘質土混じりの青灰色粘質土である。遺物は下層から曲物が出土した。

53号土坑（SK53，第85図，図版90）

X37～40Y21～25で検出した楕円形の土坑である。他の土坑と切り合う可能性もあるが明確ではない。また南西隅で現代の撹乱によって切られる。東西750cm，南北540cm，深さ62cmである。断面の立ち上がりは緩やかで，床面はほぼ平坦である。覆土は同レベルでも一部異なるものの，褐色系の粘質土がほぼ水平堆積している。貼り床は確認できなかった。検出面ではSK601・SK603を確認している。1層を除去するとSK788・SK789・SK797を確認した。これらは柱根あるいは底面に根固め石を配している。SK53を掘削し，若干埋め戻したところに柱穴をつくり，再び土坑全体を埋めている。遺物には土師器，中世土師器，越前，土師質土器，越中瀬戸，木製品の栓がある。建物に付随する施設の可能性も考えられる。遺構の時期は17世紀から18世紀である。

58号土坑（SK58，第87図，図版90）

X34Y35で検出した楕円形の土坑である。東西144cm，南北98cmである。覆土は黄褐色粘質土あるいは褐色系の粘質土で，断面はほぼ垂直に立ち上がる。深さは中央から南が一段深くなり，52cmを測る。検出面ではこの部分に沿って礫を確認している。このため柱穴の可能性もある。遺物は瀬戸美濃，越中瀬戸，石臼が出土した。遺構の時期は16世紀から17世紀と考えられる。

70号土坑（SK70，第84図，図版90）

X31～33Y32～34で検出した方形の土坑である。南北423cm，東西255cm，深さ52cmを測る。遺構検出

面で20㎝程度の礫を確認した。覆土は褐色系の粘質土あるいは砂質土が水平堆積する。床面直上は，暗青灰色粘質土が約20㎝の厚さで面的に堆積するため，貼り床の可能性が考えられる。遺物は縄文土器，須恵器，唐津，陶器，種子にはトウガン・モモ・アカマツがある。位置的にSB04に伴うと考えられ，遺構の時期は16世紀から17世紀である。

73号土坑（SK73，第83図）

X38～39Y34～41で検出した土坑である。S地区の東壁に切られるが，平面形はほぼ方形である。南北374㎝，東西340㎝，深さ51㎝を測る。覆土は上層が黄褐色粘質土が混入する褐色系粘質土，下層が暗青灰色粘質土が混入する黒褐色粘質土であり，全体に小礫が若干混じる。床面は平坦であるが，3・4層が皿状に堆積し貼り床の可能性が考えられる。遺物には瀬戸美濃，越中瀬戸，唐津，石臼などがある。SB04の敷地内に位置することから，これに伴う施設と考えられ，時期は16世紀から17世紀である。

78号・79号土坑（SK78・SK79，第87図）

X36～40Y29～31で検出した長楕円形の2土坑で，SK78がSK79を切っている。これらはSB04のSP704の柱列に平行する。SK78は南北が775㎝，東西が68㎝，深さ30㎝を測る。覆土は褐色系の粘質土である。北隅に礫が密集する。遺物は珠洲，越中瀬戸が出土する。SK79は南北943㎝，東西100㎝，深さ35㎝を測る。覆土は上層が暗茶褐色粘質土混じりの黄褐色粘質土，下層が黄褐色粘質土と青灰色粘質土混じりの灰茶褐色粘質土である。遺物は土師質土器，越中瀬戸，唐津，伊万里？，石臼，石硯が出土した。遺構の時期は16世紀から17世紀と考えられる。

80号・81号土坑（SK80・SK81，第88図，図版91）

X76～82Y31～35で検出した2土坑で，SK80はSK81を切っている。SK80は調査区の東壁に切られるが，平面形は方形と推測される。昭和40年代の圃場整備によって削平された上面に盛土されている。覆土は全体に褐色系の粘質土で，下層には黒褐色粘質土で，床面は平坦である。遺物は須恵器，中世土師器，珠洲，越前，中国製青磁，唐津，石硯がある。遺構の時期は16世紀から18世紀である。SK81は南北310㎝，東西238㎝の長方形を呈し，深さ45㎝を測る。覆土は上層が黒色系の粘質土で，東側は試掘坑で切られる。下層は黄灰色粘質土で，床面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。両土坑とも貼り床は確認していない。

84号・85号・86号土坑（SK84・SK85・SK86，第89図）

X71～73Y30～33で検出した土坑である。SK84はSK85・86を切る方形の土坑で，南北305㎝，東西250㎝，深さ18㎝を測る。覆土は黒褐色粘質土の単層である。床面は平坦で，緩やかに立ち上がる。南東隅の覆土中に礫が密集しており，遺物は出土していない。SK85は検出面に大礫が散乱し，上層に黄褐色粘質土の部分と明黒色粘質土，下層は茶黄色粘質土が堆積する。床面は平坦である。遺物は出土しない。SK86はSE88を切り，SE87に切られる。覆土は茶黄色粘質土の単層で，床面は平坦である。SK85・SK86の覆土が茶黄色粘質土を主体とするものであることから切り合い関係があるもののほぼ同時に掘って埋め，そこにSK84が作られたものと考えられる。これらは主軸方向を同じくするSK89とも同時期に存在し同一の施設として機能していた可能性が推測される。遺物は出土していない。

89号土坑（SK89，第83図）

X72～73Y29～30で検出した長方形の土坑である。南北300㎝，東西250㎝，深さ22㎝を測る。東南隅に根固め石をもつ柱穴がみられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり，床面は平坦である。覆土は礫混じり灰色粘質土と茶褐色粘質土がみられ，一部床面上に灰黒色粘質土がみられる。遺物は出土していない。

93号土坑（SK93，第87図）

X70Y32で検出し，平面は楕円形である。南北98cm，東西64cm，深さ48cmである。覆土は黄茶色粘質土で，中央に柱痕跡と思われる灰色粘質土がみられるため柱穴と考えられる。この北側で検出した方形の土坑などと建物を構成する可能性が考えられるが，明らかではない。遺物は出土していない。

104号土坑（SK104，第90図）

SD62とSD63に挟まれた台地部分，X52Y33で検出した楕円形の土坑である。長軸134cm，短軸80cm，深さ21cmを測る。覆土は茶黄色粘質土の単層である。床面は平坦である。南側ではSE105を切っている。遺物は出土していない。

122号土坑（SK122，第90図）

X37Y36で検出した楕円形の土坑である。南北100cm，東西80cm，深さ69cmを測る。断面はU字形を呈する。覆土は上層が褐色系の粘質土，下層が褐色系の砂礫が水平堆積する。遺物は出土していない。

126号土坑（SK126，第90図）

X41～42Y36で検出した土坑である。調査区東壁に切られるため，平面形は不明である。覆土は上層が黄褐色粘質土のブロックが混入する茶褐色粘質土，下層が明茶褐色粘質土である。遺物は出土していない。

127号土坑（SK127，第90図）

X37Y36で検出した土坑である。調査区東壁に切られ，平面形は不明である。断面は緩やかなU字状を呈する。覆土は茶褐色粘質土が混入する暗黄褐色粘質土である。遺物は出土していない。

128号土坑（SK128，第90図）

SK127の南に位置する土坑で，調査区東壁に切られる。平面形は楕円形と推測され，南北98cmを測る。覆土は礫と砂利が混入する茶褐色粘質土である。遺物は出土していない。

150号土坑（SK150，第91図，図版91）

X34～36Y23～24で検出した方形の土坑である。南北590cm，東西295cm，深さ31cmを測り，南東部分に半円形の張り出し部分を持つ。北側は現代の撹乱によって切られている。覆土は上層が茶褐色粘質土と暗茶褐色土ブロックが混入する明黄褐色粘質土である。これを除去すると南西部分に灰層が認められた。灰は南西部ほぼ全面にみられ，著しく密集する部分がある。南側のみ下層に暗青灰色粘質土が認められた。床面はほぼ平坦で，この面でSE151を検出した。遺物は珠洲，中国製青磁，砥石，金属製品が出土している。遺構の時期は15世紀と考えられる。

652号土坑（SK652）

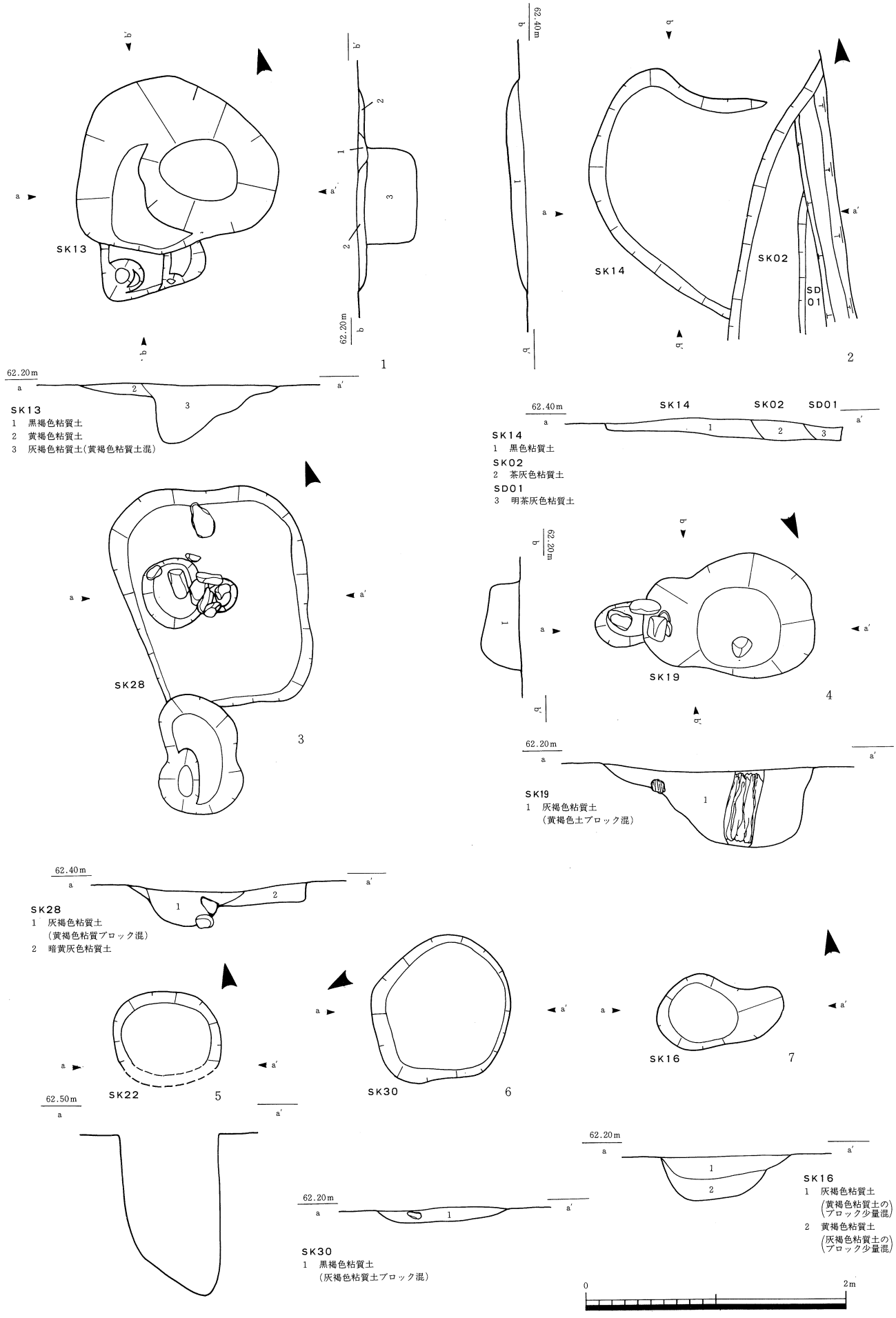
X74Y33で検出した楕円形の土坑である。長軸69cm，短軸65cmを測る。埋土は暗茶褐色の粘質土に大礫が混入する。遺物は須恵器，中世土師器，珠洲，越中瀬戸，円形板，漆器椀，桶側板などがある。

B　遺　物

(1)　建物

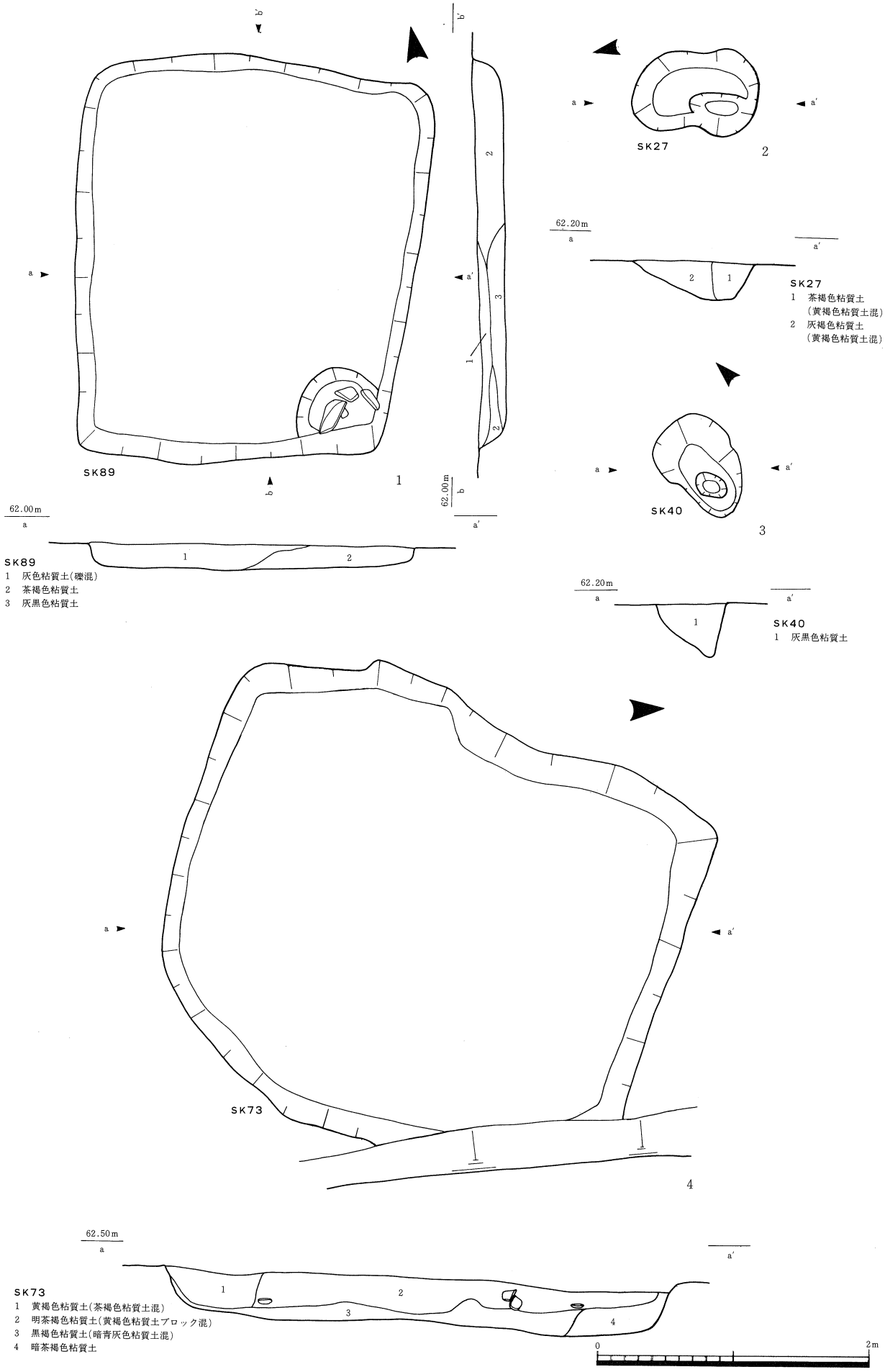
1号掘立柱建物（SB01，第92図，図版95・104）

1は瀬戸美濃天目茶椀の底部である。内反り高台で，外面に厚い錆釉，内面には鉄釉が施される。大窯Ⅱ期である[注3]。2は唐津皿の口縁部である。内外面とも藁灰釉が施される。時期は1580～1590年代である[注4]。3～6は芯持ち材の柱で上部は欠損する。3・6はSP38からの出土である。柱穴の中央に礫を配し，その南壁際に並んで検出された。ともに底部はほぼ水平に加工される。樹種は3がコナラ・クヌギ，6はクリである。4・5はともにSP590からの出土である。柱穴の中央に5を据え，

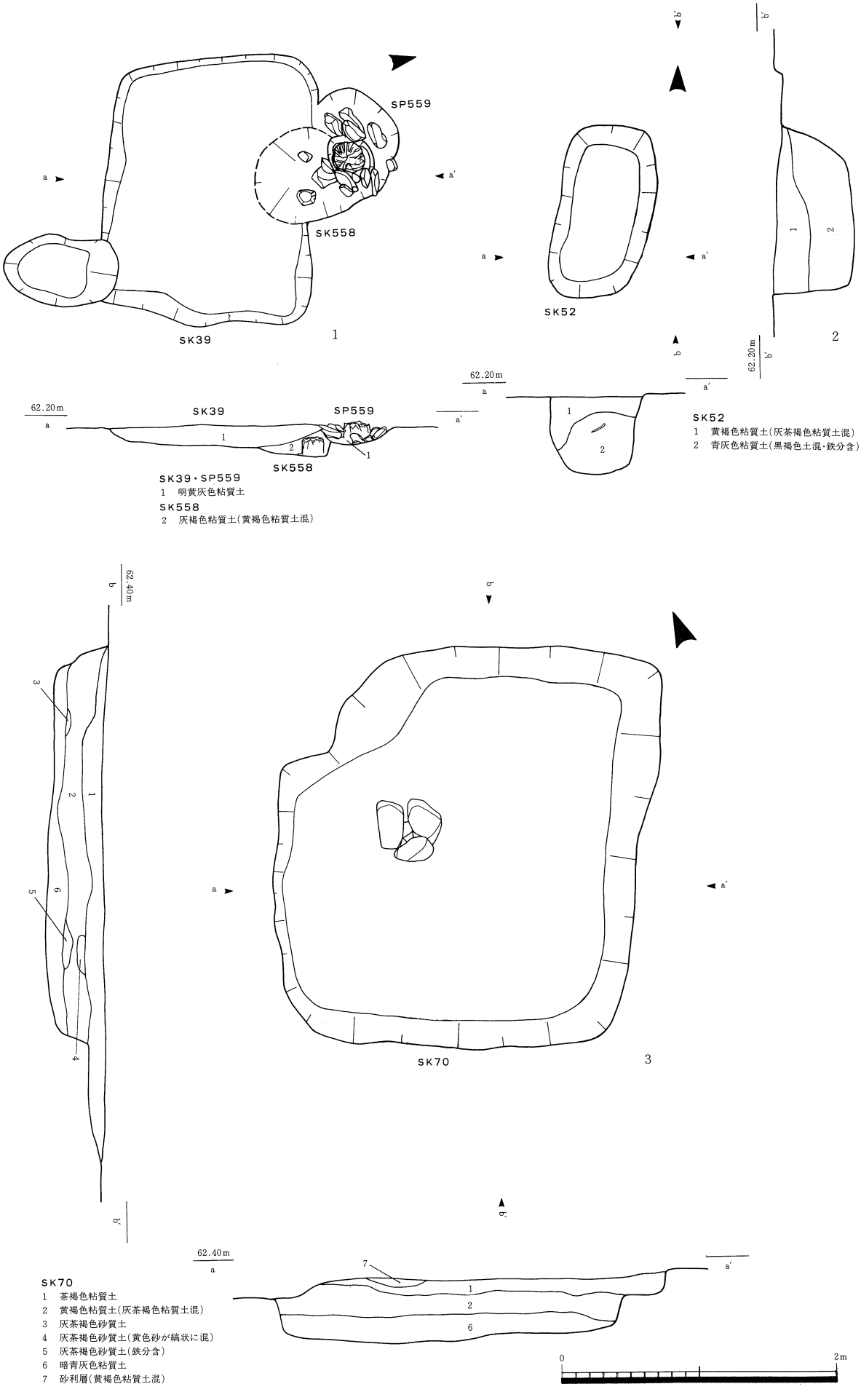


第82図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図

1.SK13 2.SK14 3.SK28 4.SK19 5.SK22 6.SK30 7.SK16

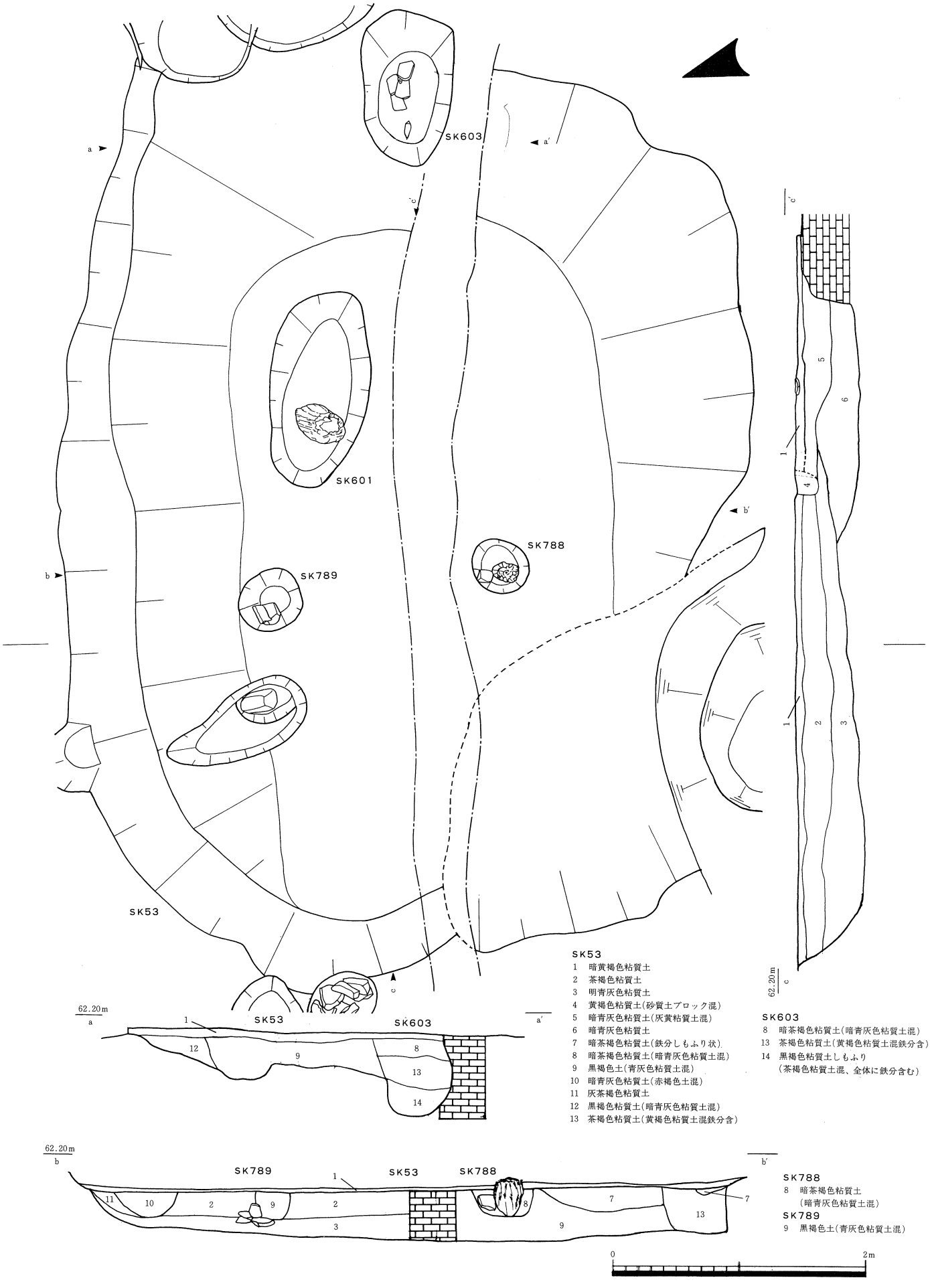


第83図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図
1.SK89 2.SK27 3.SK40 4.SK73



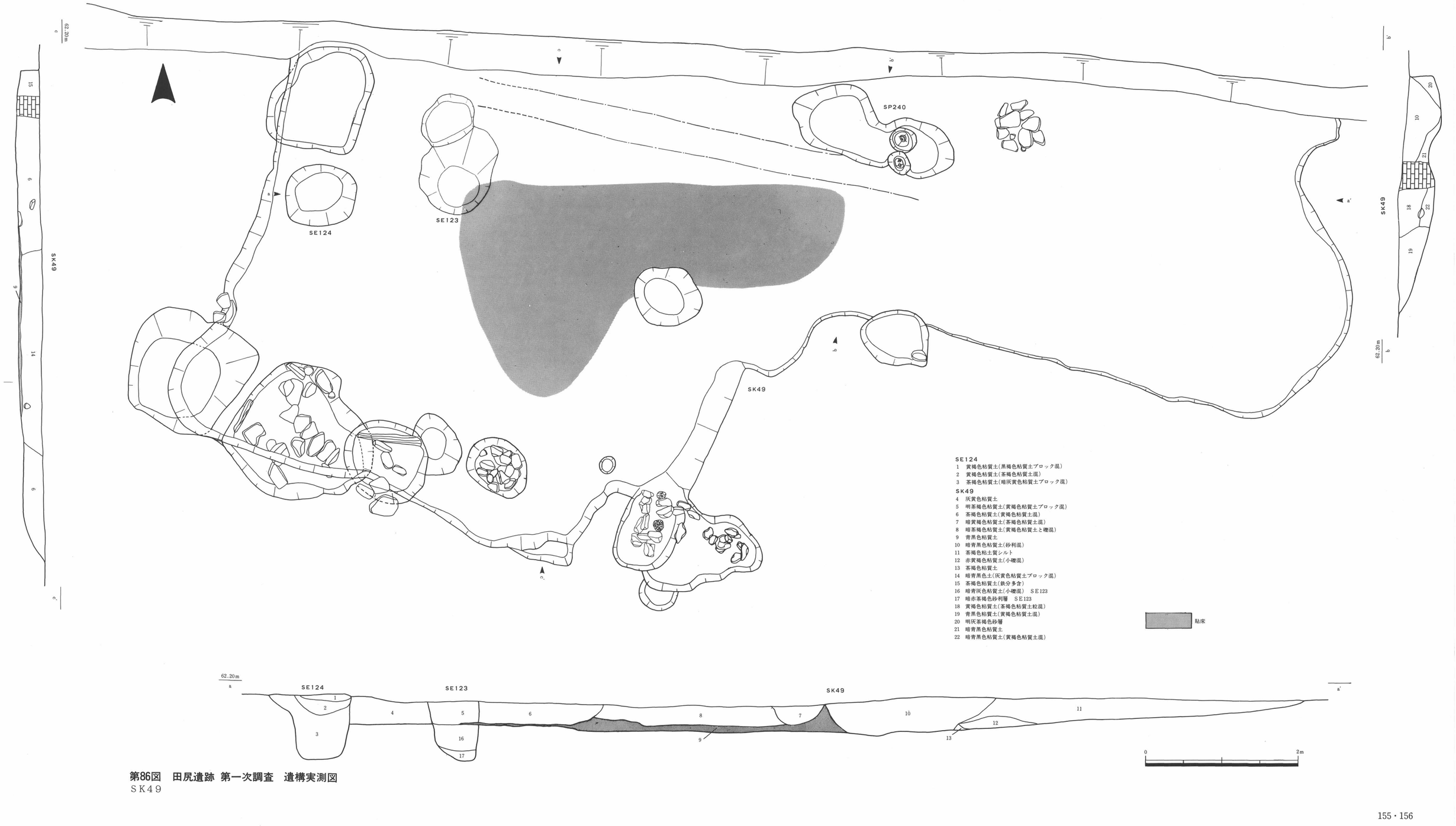
第84図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図

1.SK39　2.SK52　3.SK70

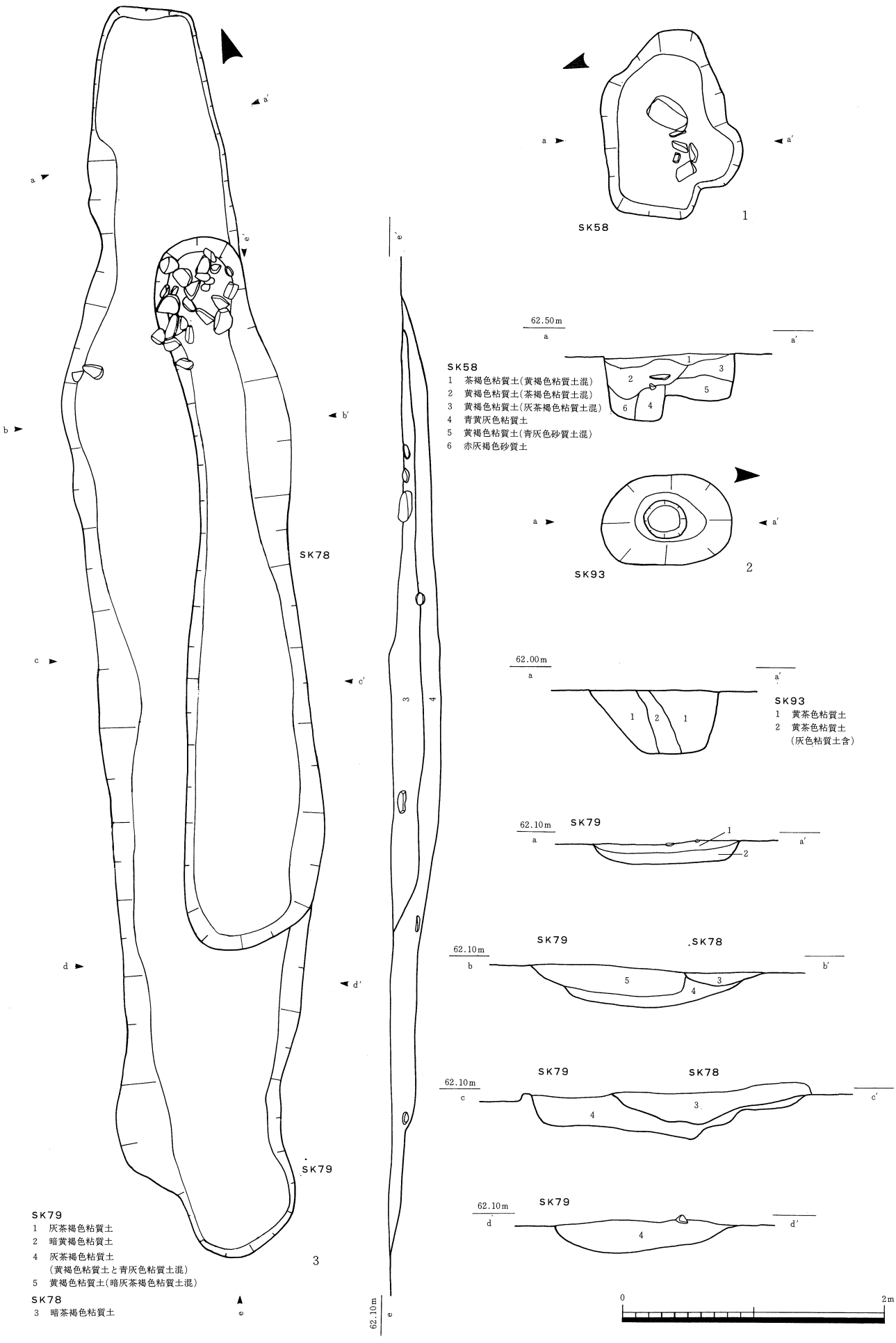


第85図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図

SK53

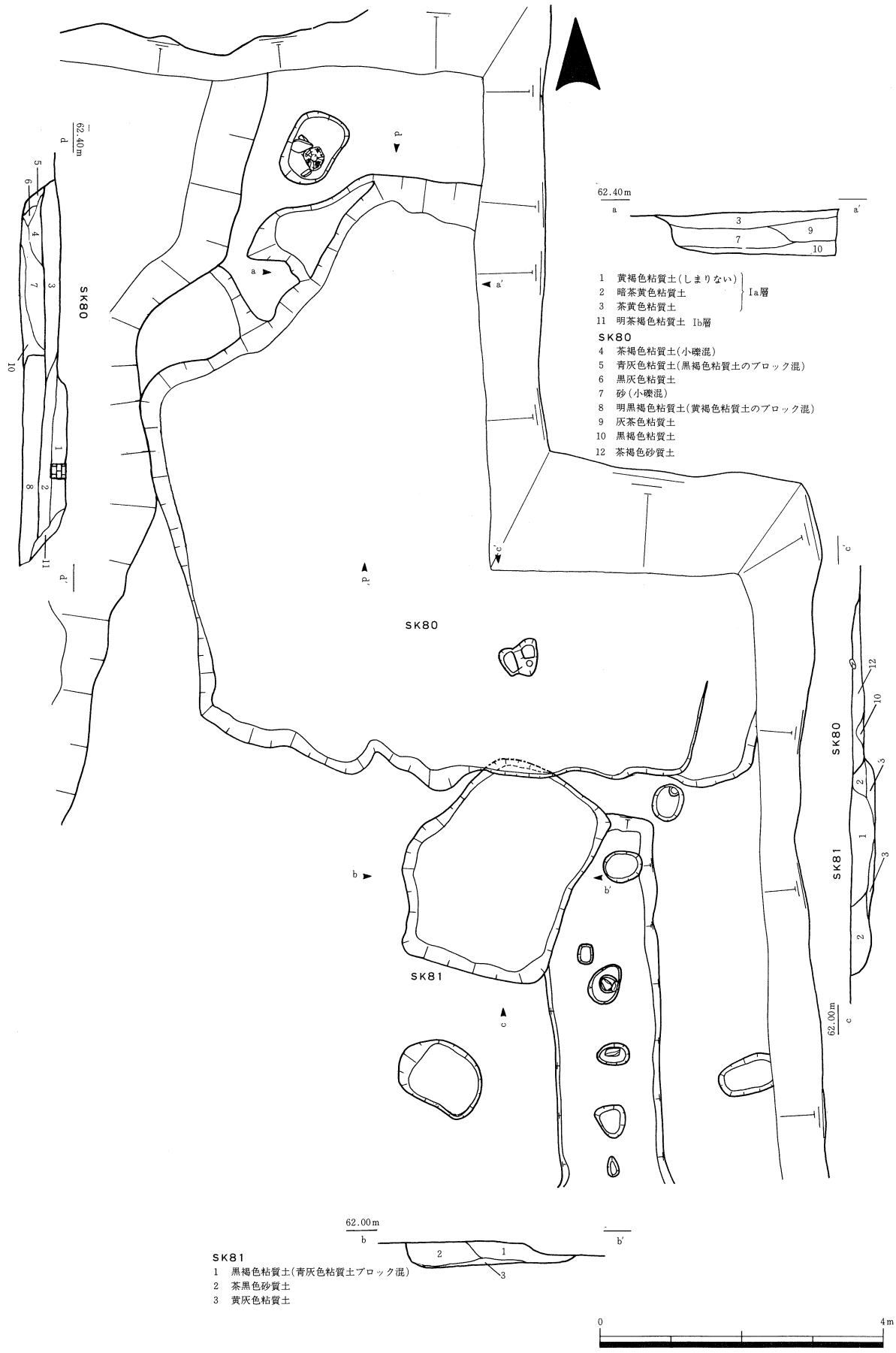


第86図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図
SK49



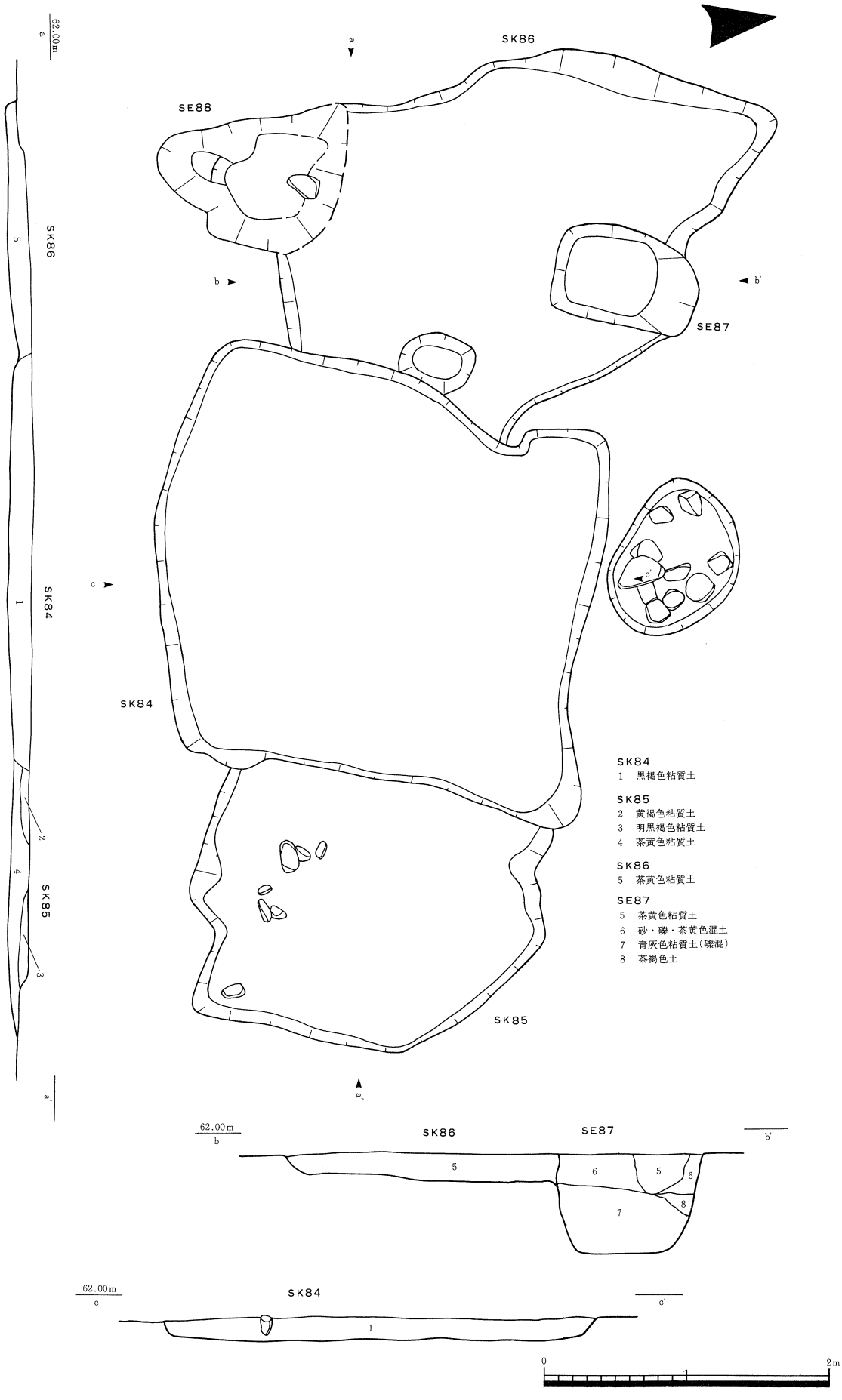
第87図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図

1.SK58　2.SK93　3.SK78・SK79

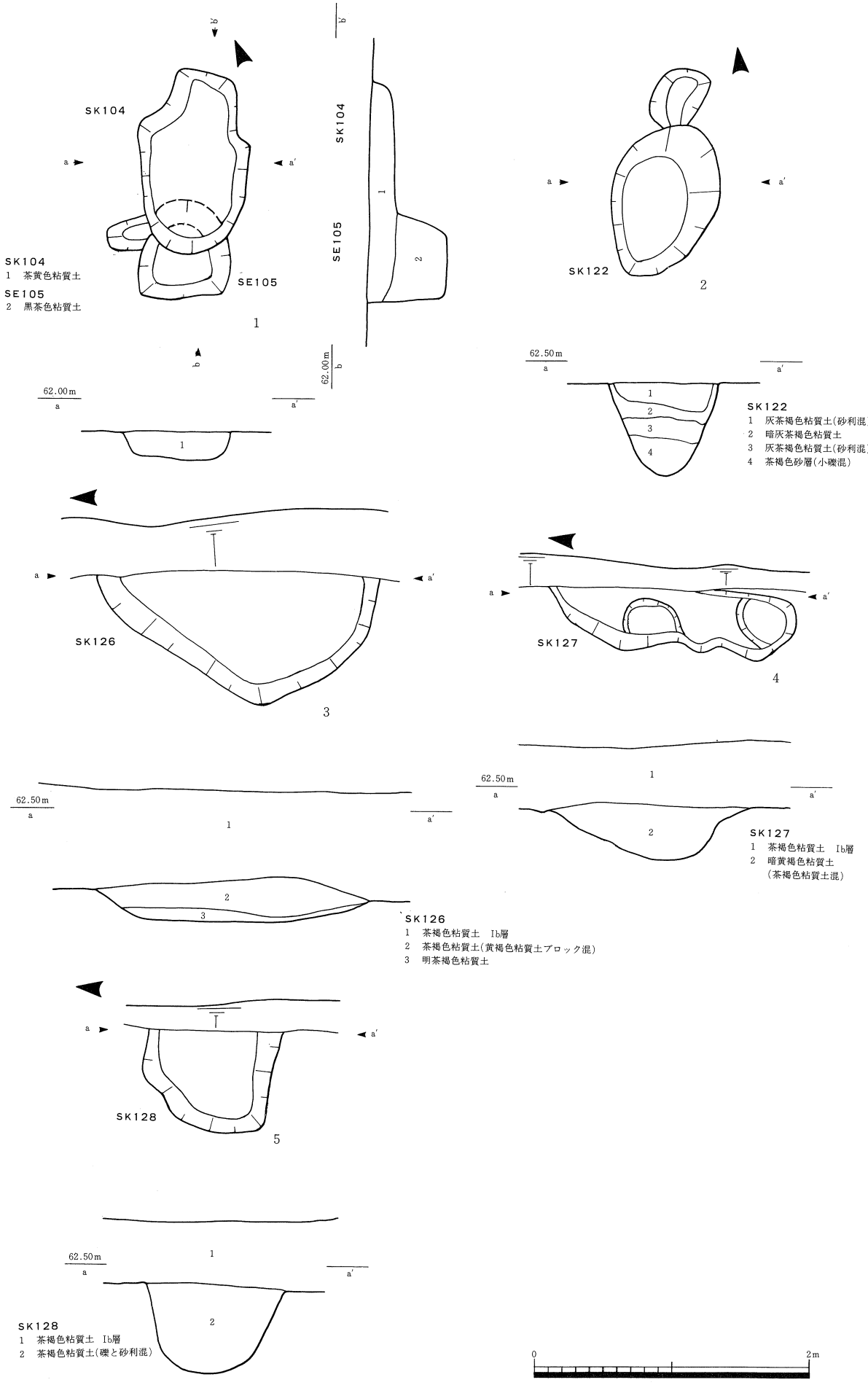


第88図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図

ＳＫ８０・ＳＫ８１

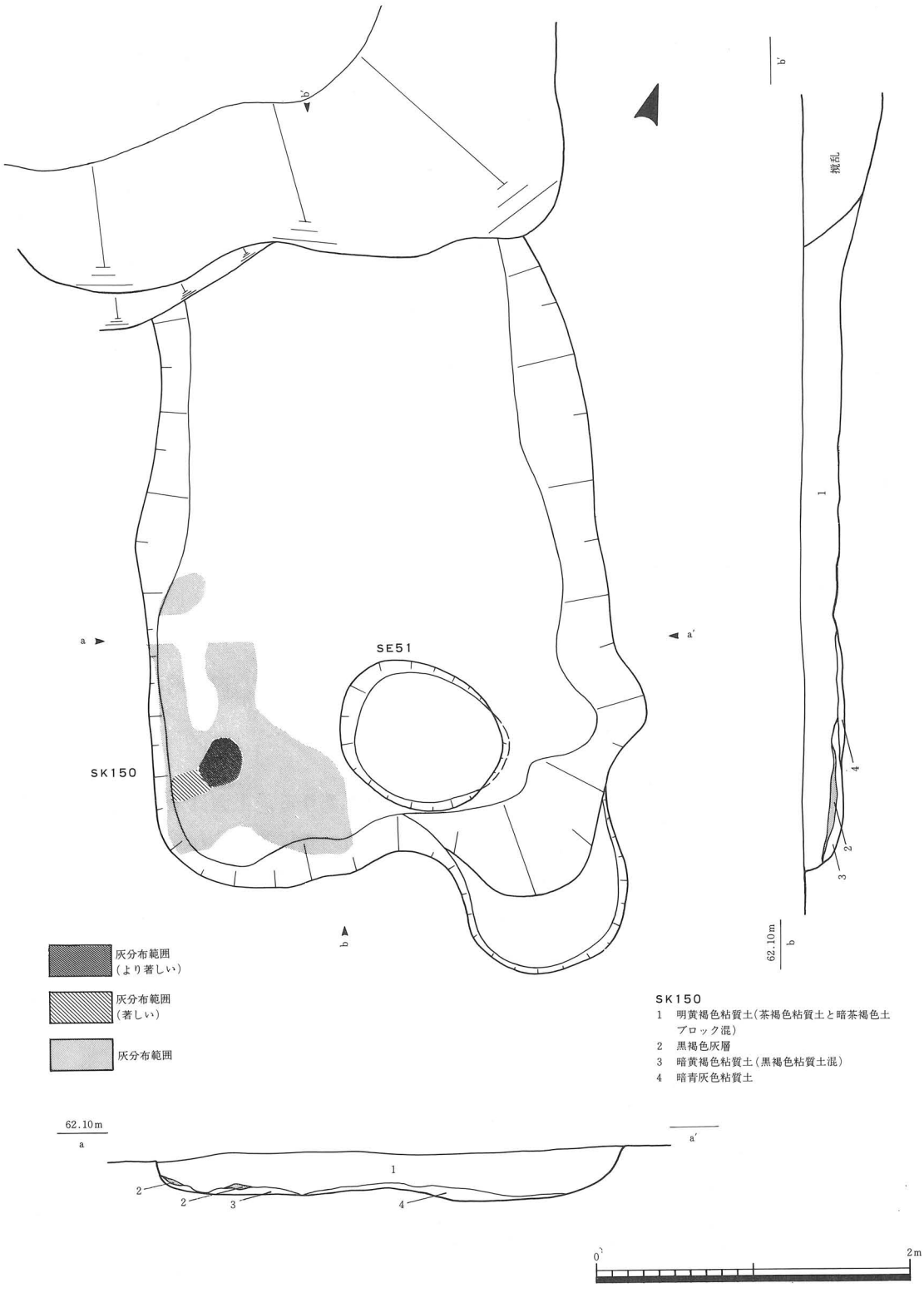


第89図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図
SK84・SK85・SK86



第90図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図

1.SK104 2.SK122 3.SK126 4.SK127 5.SK128



第91図　田尻遺跡 第一次調査　遺構実測図
SK150

周囲に根固め石を取り巻く。4は5の南側で横倒しの状態で検出された。底部はほぼ水平に加工され，中央がくびれる。5の底部は外周端を削り落とし，中央部はほぼ水平に加工される。

2号掘立柱建物（SB02，第93図）

7は越中瀬戸椀である。内外面とも鉄釉を施す。8は唐津皿である。体部からやや外反しながら立ち上がり，口縁部は緩やかな波状を呈する。内底面から外面体部にかけて灰釉が施される。底部はケズリの後ナデ調整される。時期は17世紀である。9は柱である。一部欠損するが芯持ち材と思われる。底部は一端を体部から斜めに削り，もう一端はほぼ水平に加工する。樹種はクヌギである。10はSP12の北側柱穴から出土した硯である。硯面は部分的に剝離している。硯縁は左側の一部，落潮から墨堂の一部が残存する。硯背は上下方向に線刻がみられるが，半分以上が剝離している。

3号掘立柱建物（SB03，第93図）

11はSP747から出土した芯持ち材の柱である。底面は側面から中央に削り込まれ，上部は欠損する。

4号掘立柱建物（SB04，第93図）

12はSP737から出土した柱である。柱は柱穴の南端で検出され，根固め石はみられなかった。底部は加工痕が顕著で，中央は側面から削られて尖る。樹種はクリである。

(2) 溝

8号溝（SD08，第94図，図版96・107・109）

13は口縁部が内湾ぎみに直立する伊万里染付碗である。器壁は薄く，口縁内面には四方襷文が描かれる。時期は18世紀末から19世紀初頭と考えられる[注5]。

14は北宋銭の元豊通寶である。初鋳は1078年である[注7]。

15は石臼の上臼である。側面は上端から下端にほぼ垂直に下りる。上面は全体に被熱をうけて黒変している。芯棒受けの上部は欠損する。挽き木は側面の四角い穴に差し込む，横打ち込み式である。目は8分画と推定され，12本の副溝がみられる[注6]。16は五輪塔の火輪部分である。一辺が推定で19.8cmを測る。空風輪との装着部は深く抉られ，軒反りがない。

17は田下駄である。台は縦に半割され，厚さは7㎜である。台裏には歯をつくり出した痕跡はみられない。前壺の右側には指圧痕が認められる。前壺は裏面から焼き，穿孔している。台裏に樹皮が残存するため，台表は芯部分である。樹種は広葉樹である。

9号溝（SD09，第94図，図版96・99・106）

18・19は石臼の上臼で，石材は凝灰角礫岩である。18は側面が上端から下端にほぼ垂直に下りる。目のパターンは不明であるが，芯棒受けから放射状に副溝がみられる。19は挽き木を取り付ける四角い穴が相対する位置に2つみられる。供給口，芯棒受けが残存し，8分画と思われる。目たてが行われているためか主溝の間隔・副溝の本数は不規則である。

20は唐津皿である。内面には銅緑釉を施し，内底面を蛇の目釉剝ぎする。4箇所に目跡を残す。体部外面には灰釉を施す。削りだし高台をもち，胎土は灰黄色を呈する。内野山西窯と思われ，時期は17世紀後半から18世紀である。21は伊万里陶胎染付碗である。胎土は灰白色を呈し，透明釉が施される。外面は唐草文が描かれる。18世紀前半である。

22は円形の蓋で，内面の外周は幅約1㎝の段がつき，一箇所に綴り皮がみられる。

25号溝（SD25，第95図，図版93）

23～26は縄文土器深鉢である。これらは全面にローリングを受けている。23は波頂部が三角状に尖り，口縁部に幅2～3㎜の3本の凹線文が巡る。胴部にも沈線の痕跡がみられる。八日市新保Ⅰ式で

ある[注8]。24は外面底部は黒く煤け，「２本越え２本潜り１本送り」[注9]の網代痕がみられる。加曽利Ｂ式である[注10]。25は３単位波状縁の波頂部である。口縁端部は若干内側につまむ。内面の貼付け突起は剝離するが，内外面とも十文字をきるように突起が存在したものと思われる。また体部上方には４本の凹線が巡り文様を構成する。この単位は突起部分から始まると思われ，４本の凹線を繋ぐ垂線がみとめられる。しかし，斜縄文によって擦り消されるため明確ではない。加曽利ＢⅡ式である。26は波状口縁をもつ。口縁端部は内側につまみ，平らな面をつくる。波底部には凸帯がつき，直下には刻みを巡らす。体部には隆帯がつく。井口Ⅰ式である[注11]。

48号溝（SD48，第95図，図版92・94・95）

27・28は須恵器である。27は有台杯で，高台は外側にふんばる形態である。時期は８世紀である。28は蓋のつまみ部分である。29は中世土師器である。摩滅部分が多いが，口縁部に一段ナデを施し，内底面の端を指で押さえるものと思われる。外底面は無調整である。色調は橙色を呈する。30は瀬戸美濃内禿皿である。内面底部の凸部が若干残存し，底部は削り込み高台である。内外面とも灰釉を施す。大窯Ⅲ期と考えられる。31は内外面とも体部には透明釉が施釉され，底面は露胎である。焼成は軟質である。白磁か。32は中国製青白磁，33は中国製青磁の碗である。32は内面に劃花文が施される。12世紀代である[注12]。33は体部が緩く内湾し，口縁部が外反する形態である。上田分類のＤ類にあたり，14世紀後半から15世紀前半である[注13]。34は珠洲甕の口縁部である。端部をやや外屈，垂下するものである。35は土師質土器の擂鉢である。口縁内面は凹線が巡る。体部から凹線に向かって９条１単位の卸目が施される。内外面とも粗れている。36は唐津の皿である。口縁部が緩く内湾しながら外上方に開く形態である。削りだし高台を有する。内面全体と外面上半は灰釉が施される。内外面底部にそれぞれ３箇所，砂目積み跡がある。17世紀である。

37は長方形の板状加工木である。中央部分に直径３㎜の孔が穿たれ，それを挟むように２箇所に綴り皮がみられる。材と材を結合させていたものと思われる。

60号溝（SD60，第95図，図版92・93）

38は土師器有台椀である。内底面は黒変しており，内黒の可能性がある。底部は貼付け高台で，外側にふんばる形態である。器種は不明である。内面底部は黒変している。39・40は須恵器杯である。ともに底部はヘラ切りである。39は有台杯である。８世紀前半である。40は内底面に製作時の爪痕がある。41は珠洲壺の底部である。内外面ともロクロナデが施され，底部切り離しは静止糸切りによる。42は越中瀬戸皿である。口縁部が屈曲し，口縁中央からやや外反する向付形態で，削り出し高台をもつ。見込み部分を除く内面から外面体部中央にかけて鉄釉が施される。登窯の製品である[注14]。43は唐津皿である。口縁部が緩く内湾しながら上に開く形態である。内面から外面口縁端部にかけて灰釉が施される。16世紀末から17世紀初頭である。45は鉢で，体部下半が丸みをもち，口縁部がやや外側に開く。高台の底面を除いて灰釉を施す。唐津か。44・46は伊万里染付碗である。44は高台端部の断面が逆三角形を呈し，露胎である。内底面には足付きハマの痕跡が４箇所みられる。時期は明治である。46は口縁部が直立する形態である。外面には草木文を描く。17世紀末から18世紀初頭である。

47は石臼の上臼である。裏面には円形のくぼみがみられる。また目は摩滅が激しく，分画パターンは不明である。挽き木は横打ち込み式である。石材は凝灰角礫岩である。

61号溝（SD61，第96図，図版92・94～96・100・103・109）

48は須恵器杯である。底部に高台の剝がれた痕跡がみられる。49・50は越中瀬戸皿である。49は口縁端部がやや外反し，端反り風の形態である。内底面の中央部は若干凹んでいる。内面体部から外面

体部上半は鉄釉が施される。50は口縁部が屈曲し，口縁中央から外反する向付形態である。削りだし高台で鉄釉が施される。内底面の露胎部分には重ね焼きの痕跡がみられる。51は碗の底部である。糸切りの後，高台部分が削り出され，体部の器壁は非常に薄い。外面高台部分を除いて白色の釉を施し，内底面は釉剝ぎする。中国製の白磁あるいは染付である。52は唐津皿の底部である。内外面とも灰釉を施す。高台に砂目積み跡が残る。1600～1630年である。53は京焼風唐津椀である。体部下方はやや丸みをもち，口縁部は若干外開きに立ち上がる。内外面とも透明釉，外面には緑色釉が施される。1660～1720年である。54は珠洲の甕である。短頸のくの字口縁をもち，頭部は円頭である。外面は頸基部より若干下から叩打され，内面はそれにあわせて当て具痕が残る。Ⅳ期に比定される[注15]。55は越前の甕である。頸部が長く直立する形態である。口縁端部は内外面の稜線から逆ハの字に広がる。SD62出土のものと接合できた。16世紀である[注16]。

56は口縁部が欠損する漆器椀である。高台の高さは約１㎝，腰部は丸みをもって立ち上がる形態である。内面は赤色漆，外面は黒色漆に赤色で文様が描かれる。高台裏は削られ，凹んでいる。樹種はブナまたはイヌブナである。57は芯持ち材の一端を方形に加工し，中央部からもう一端にかけては丸みをつけながら繊維方向に削りだしている。擂粉木と思われる。58・59は短冊形の板状で年輪方向に沿って内湾する。ともに外面にタガの痕跡がみられるため，桶側板と思われる。58は短辺の長さは上方より下方がやや短く，内面下方には底板に擦れたような痕跡がある。60は芯持ち材である。柱か。61は長方形の一長辺中央から斜めに切り落とした板状木製品である。

62は寛永通寶である。

62号溝（SD62，第96～98図，図版92～96・104・106～109）

63は縄文土器深鉢の底部である。内外面とも摩滅している。64・65は中世土師器皿である。64は口縁部に一段ナデを施す。器壁は薄く，体部は直線的に開き，口縁端部をつまみ上げる。内面調整は右回りにナデ抜かれ，外面底部は無調整である。外面には煤が付着する。色調は灰黄褐色を呈し，胎土には石英・角閃石が含まれる。65は内外面ともロクロナデを施し，底部は糸切り痕を残す。色調は浅黄橙色を呈し，胎土には石英・骨針・赤色酸化粒が含まれる。66は中国製白磁である。玉縁を有する碗の底部と考えられる。高台内部はわずかに削り出すもので，厚みがある。高台部分を除いて白磁釉が施される。太宰府分類のⅣ類にあたる。67・68は瀬戸美濃である。67は鉄釉の天目茶椀である。体部上方で屈曲して直立し，口縁端部は若干外側につまみ上げる。外面体部下半にサビ釉は施されない。大窯Ⅱ期である。68は皿で，内外面とも灰釉を施す。内底面には印花を押捺し，底部には輪ドチ痕が残る。大窯Ⅰ期あるいはⅡ期である。69は土師質土器の擂鉢である。口縁端部は外側を強くナデて面取りし，内面には凹線が巡る。卸目は凹線を越え口縁端部まで達する。70～76は越中瀬戸である。70～75は皿である。70は見込みに十六弁菊を押捺し，灰釉を施す。胎土は鈍い橙色を呈する。底部には記号のような墨書がある。71は直線的に立ち上がり，口縁端部外面を面取りする。見込みと底部を除いて灰釉が施される。削りだし高台である。胎土は鈍い黄橙色を呈する。72は見込みに釉止めの段をもち，削り込み高台を有する。灰釉を施す。胎土は鈍い褐色を呈する。73は71と同様に口縁端部を外側からおさえ，面取りする形態である。灰釉を施す。74・75は向付形態である。74は鉄釉，75は灰釉を施す。76は口縁の縁帯が短く折れる擂鉢である。内外面ともナデ調整で，錆釉が施される。卸目は８条１単位である。77～79は唐津である。77は内外面とも鉄釉が施された甕である。口縁部は肥厚して上端部は１㎝程度水平になり，垂下して端部はつまみ上げ内側に溝をつくる。内面は頸部はロクロナデ，胴部は同心円状の当て具痕がみられる。時期は16世紀末～17世紀初めである。78は内反り高台

の外端部を面取りし，体部は緩やかな丸みをもつ皿である。内面から外面下方まで灰釉が施される。外底面中央には５㎜程度の目跡がみられる。79は溝縁皿である。内面から外面口縁部に灰釉が施される。時期は1600～1630年代である。80は伊万里染付皿である。体部に丸みをもつ形態である。

81は台と歯を一木でつくる連歯下駄である。前歯は一部欠損し，後歯はすり減っている。壺は前後とも端側が欠損する。82は墨書木簡である。長さ17.2㎝と6.6㎝の板状で，後者は両面に墨書されている。この２片は接合できないが同一個体と思われる。大片は８文字書かれており，下２文字がひらがなの「さ」「も」と読める。小片は４文字書かれており，最初の文字が「年」あるいは「平」，最後の文字が「為」あるいは「条」であろう[注17]。

83・84は銭貨である。83は北宋銭の天聖元寶，初鋳は1023年である。84は寛永通寶である。

85・86・88は石臼である。85・86は下臼で約1/2残存する。85は８分画と推定される。下面は鑿痕がみられ，軸穴付近に若干煤が付着する。88は上臼で，８分画である。主溝の間隔と副溝の本数は不規則である。供給口，軸受けが残存する。側面には２箇所相対する位置に挽き木をはめ込む四角い穴がみられる。横打ち込み式である。

87・89は五輪塔である。87は火輪である。平面は正方形，断面は下方上台形を呈する。軒先は反り，棟線は逆ハの字に下りる。89は水輪である。体部はソロバン玉のように屈曲するもので，上下両平面は平坦に成形されている。

118号溝（SD118，第98～100図，図版92・94～96・100・105・107・109）

90は縄文土器深鉢の底部である。体部下方は強く抑えられ，斜縄文が施される。内面は被熱を受けて黒変する。底部中央には内面から穿孔した痕跡がみられる。91～93は須恵器である。91は高台が外側にふんばる有台杯である。92・93は壺の体部屈曲部である。92の胴部最大径は19㎝を測る。93は肩部に自然釉がかかる。94は緑釉陶器である。95～99は中世土師器皿である。95・96はロクロ成形，97～99は非ロクロ成形である。95は器壁が薄く，底部の糸切り痕はナデ消されているようである。色調はにぶい黄橙色を呈する。96は底径が5.6㎝，底部には糸切り痕を残す。色調は橙色を呈する。97・99は口縁部に二段ナデを施し，上段をつまみ上げるように撫でて二段の稜を明確している。口径は８㎝余りで，器壁が厚く，胎土には角閃石を含む。97は内面はハケ状工具で不定方向に撫でた後，口縁部に横撫でを施し，外面底部は無調整のものである。99は外面底部からの穿孔がみられる。98は口縁部に二段ナデを施すが，その稜が曖昧なものである。口径は13㎝，色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土には赤色酸化粒が混入する。100～102は珠洲である。100は擂鉢の口縁部である。口縁形態は内端に広い面を取り，櫛目波状文が加飾される。端部は三角形に引き出されている。胎土には骨針を含む。Ⅵ期である。101・102は甕の口縁部である。101は口縁部は短頸で，上端がほぼ水平となり，端部は円頭を呈する。体部外面は平行叩き，内面は当て具で叩打する。５㎜程度の白色粒を含む。Ⅳ期である。102はくの字状に外反する頸部である。Ⅰ～Ⅱ期である。103～105は越中瀬戸である。103・104は皿である。103は体部下半は丸みをもって立ち上がり，上部で外面を強く抑え，外に開くものである。見込みから体部にかけて９条の凹線が巡る。釉止めの段か。ここから外面体部中央まで灰釉が施される。104は外面体部下半を削りだし，中央に稜をつくる形態である。口縁上部を外面から抑え，端部はやや外反する。内底面中央は凹んでいる。鉄釉が施され，削りだし高台を有する。105は匣鉢である。底部は糸切り痕を残し，内外面にサビ釉を施す。106・107は唐津である。106は鉄絵を施す，いわゆる絵唐津の皿である。体部下半に丸みをもって立ち上がる。内外底面とも胎土目積み跡が４箇所ずつ残る。107は鉄釉の擂鉢である。口縁部は下方に凸帯が巡り，上部はわずかに肥厚して外反する形態

である。卸目は21条が1単位で左回りに施される。胎土の色調は赤褐色を呈する。

108は漆器椀である。高台は外側に踏ん張り，腰部から緩やかに立ち上がる形態である。口径と器高の比は4：1である。外面と内面の口縁端部は黒色漆，内面は赤色漆が施される。内底面は漆塗りのハケの痕が顕著である。近世のものと思われる。109～111は芯持ち材の柱である。109はX65～67Y12～14で出土した柱である。湾曲した材をそのまま利用したもので，長さは2m以上測る。底部は側面から削られ先端は尖り，このやや上部は深く抉られる。運搬時に縄を掛けていた部分か。110は底面外周部は外から内に向かって，中央部は一定方向に加工して先端を尖らせている。111の底面は平坦で，一定方向に加工される。

112・113は打製石斧である。112は両側縁が緩やかに内湾し，刃部が広がる撥型を呈する。113は両側縁がほぼ平行な短冊型を呈する。114は石臼の上臼である。上面端が一部欠損するが，供給口・軸受けは残存する。溝は摩滅しており，分画パターンは不明である。横打ち込み式である。115は五輪塔の空風輪である。空輪と風輪の直径はほぼ同じで，宝珠形頂部が突出し，欠首が大きく立つ。風輪には火輪に装着させるほぞがつくり出されるが，先端は欠損している。時期は14世紀である[注18]。

116は銅製小柄の柄である。

(3) 井戸

18号井戸（SE18，第101図，図版95）

117は中国製白磁皿である。体部は口縁部にかけて外開きに立ち上がり，口縁部内面の屈曲部に段をもつ形態と考えられる。底部は回転ケズリされる。内面と外面体部下方まで白磁釉が施され，ほかは露胎である。太宰府分類Ⅵ類1aにあたる。

118は自然石である。内外面とも部分的に被熱を受けて黒変する。

32号井戸（SE32，第101図，図版93・98）

119は縄文土器深鉢である。RL縄文を施す。外面は煤が付着する。

120は円形板である。円の中央部分である。短冊型の材を組み合わせたものか。121は曲物である。側板上端は欠損するが，下端の下縁を曲線的に抉って両角を落とすキメカキ技法[注19]がみられる。底板と側板を結合させる木釘の痕跡は，側板部分に4箇所みられる。側板はスギ，底板はスギまたはアスナロである。

36号井戸（SE36，第101図，図版107）

122は唐津椀である。内外面とも鉄釉が施され，外面には褐灰色の釉で文様が描かれる，いわゆる素麺手である。口縁部は直線的でやや外に開く形態である。時期は1590～1630年である。

123は縄文時代の石鏃である。石材はチャートである。

44号井戸（SE44，第101図）

124は越中瀬戸皿である。削りだし高台を有し，口縁部が直立に立ち上がる，いわゆる向付形態である。内外面の体部には鉄釉が施される。登窯の製品である。

125は井戸の底面から出土した柄杓の底板である。側板との結合に用いられた木釘が3箇所にみられる。側板は腐朽して形をとどめていない。127は円形板である。円の中央部分で，側面に木釘の痕跡をとどめることから，材と材を結合させていたものと思われる。また内面には孔が穿たれるが，外面まで達していない。

46号井戸（SE46，第101図，図版96）

128は連歯下駄である。台長が13.5cmと小ぶりであること，台表の指圧痕から子供の右足用と推定

される。左の後壺は欠損する。右後壺下方の台端に台表から台裏に穿孔の痕跡がある。木取りは，直径約40㎝のウリカエデの辺材部分から取ったと推定される。

50号井戸（SE50，第102図，図版94・100）

129は中世土師器皿である。ロクロナデを施す体部は，中央で若干屈曲し外に開く形態である。口縁端部外面は，かるく面取りされる。胎土はにぶい橙色を呈し，角閃石を含む。130は珠洲擂鉢である。体部はやや膨らみをもって立ち上がり，三角頭の内傾口縁をもつ。卸目は９条を１単位として左回りに施される。Ⅴ期に相当する。

131は漆器皿である。低い高台をもち，腰部からやや湾曲しながら外に開くものである。口径に対し器高が低い形態である。内外面とも黒色漆に赤色漆で鶴文が描かれる。樹種はブナである。時期は14～16世紀である。132は曲物である。本体部分下方にタガを巻き付けるものである。タガ部分上端は本綴じと小綴じが残る。上下縁にはキメカキ技法がみられる。底板の断面は台形を呈する。樹種は側板・底板ともスギである。131・132は並んで出土した。蓋と思われる円形板に覆い被さるように横たわっていた。

59号井戸（SE59，第102図）

133は円形板である。直径21.1㎝，厚さ0.8㎝を測る。板目木取りである。

64号井戸（SE64，第102図，図版98）

134～136は直径約18㎝の円形板である。134は1/3が残存する。弧の側面には木の節がみられる。直線部分の側面２箇所に木釘痕がみられ，材と材を結合させていたものと思われる。樹種はスギである。137・138はともに長方形の板状で一端に孔を穿つものである。

71号井戸（SE71，第103図，図版92・99・103）

139は縄文土器深鉢の底部である。LR縄文を施す。底部は網代圧痕があるが，摩滅しているため編み方は不明である。140は珠洲擂鉢である。多量の自然木や炭化木に混じって，井戸の中層から出土した。体部は直線的に立ち上がり，底部は静止糸切り痕を残す。体部下方から底部にかけて煤が付着する。卸目は10条１単位で左回りに施される。Ⅴ～Ⅵ期と考えられる。

141は折敷の底板である。長方形の角を切り落とした形態で，1/2残存する。外周にはほぼ等間隔に直径約２㎜の孔が穿たれる。孔際や板の中央部分には綴り皮を通した痕跡がみられる。樹種はスギである。142～145は箸である。長さは約20㎝，両端を削る両口箸である。断面は円形あるいは楕円形を呈する。

75号井戸（SE75，第103図，図版95）

146は越中瀬戸天目茶椀である。口縁部が屈曲して反り，端部を丸くおさめる。内外面とも鉄釉が施され，口縁端部の内外面に灰釉を施す。登窯の製品である。

77号井戸（SE77，第103図，図版103・106・108）

147は板状の加工木である。長方形の角を切り落として孔を穿ち，両面の外端は面取りされる。一端は欠損する。片面の孔の周囲は漆塗りで，両面とも切りキズがみられる。

148～151は石製品である。148は直径30㎝の下臼である。溝のパターンは８分画と思われる。凝灰角礫岩である。149～151は五輪塔である。149・150は地輪である。同一個体の可能性がある。151は水輪である。平面形は正円形で，断面はソロバン玉のように屈曲する。上下両面を平坦に成形する。下面は被熱を受けて黒変する。中央のほぞは欠損する。

82号井戸（SE82，第104図，図版101）

152は珠洲擂鉢の底部である。底部には静止糸切り痕が残る。卸目は9条1単位で左回りに施される。胎土には骨針を含む。Ⅴ～Ⅵ期と思われる。

153は漆器皿で，口径が推定9.7㎝，器高が2.2㎝を測る。内底面に橘文が描かれ，樹種はブナである。16世紀である。156は厚さ3.4㎝の円形板で，上下端は弧を描く。側面には木釘痕が3箇所みられる。桶底板の中央部分と思われ，材を結合させていたものと考えられる。154・155は板状の加工木である。

92号井戸（SE92，第104図，図版95・97・102・103）

157は中国製青磁碗である。体部が内湾しながら，口縁部が立ち上がる形態で，端部は丸くおさめる。外面体部に線描の細蓮弁文を施す。釉薬はにぶい黄色を呈する。断面に漆継ぎの痕跡が残る。上田分類のBⅣ類に相当する。

158～163は木製品である。158は漆塗りの梳櫛である。背が馬の背状のカーブを描き歯数が少ない。マンサク科の芯持ち材を用いている。159は漆器椀である。高台が低く，口径に対する器高の比が3：1の形態である。内外面に植物文を描く。16世紀である。160・161は同一個体の柄杓側板と柄である。同一個体と思われる。側板は欠損するため綴じ方は不明である。162は箸である。163は漆塗りの刳物匙である。柄と身の外面は加工痕が顕著で，柄の部分のケズリ方向は上から下である。身の内面にはハケ状の削り痕が認められる。

94号井戸（SE94，第104・105図，図版96）

165は瀬戸美濃染付の蓋である。内外面とも透明釉が施され，外面には文様が描かれる。時期は19世紀である。164は石積みの土台となる方形木枠の北辺である。芯持ち材をそのまま用いている。

101号井戸（SE101，第105図，図版98）

169は円形板である。1/2残存する。中央に円形の孔が穿たれる。内側の側面には木釘の痕跡が3箇所みられ，材同士を結合させていたものと思われる。樹種はネズコである。

112号井戸（SE112，第105図，図版95・106）

166は越前甕の底部である。表面は酸化しているため赤色を呈する。胎土には部分的に空気が入ったため，空洞となっている。底部は板目のような圧痕がみられる。

167は下臼である。直径30.6㎝を測り，溝のパターンは8分画である。石材は凝灰角礫岩である。

168は石積みの土台となる方形木枠の東辺である。ほぞをつくり出す一端は欠損する。

154号井戸（SE154，第105図，図版99）

170は体部中央を削り，口縁部は外反しながら丸くおさめる端反風の皿である。内外面とも灰釉が施される。瀬戸美濃か。171は越中瀬戸灰釉の皿である。172は唐津の皿である。口縁が緩く内湾しながら外に開く形態である。内外面とも灰釉が施される。時期は16世紀末～17世紀初めである。

173・174は円形板である。共に直径22㎝を測り，柾目取りである。174は周縁に綴り皮を残す。

(4) 土坑

19号土坑（SK19，第106図）

175～177は柱である。長楕円を呈するプランの中央に175が直立した状態で，またその西に176・177が横たわって出土した。175・177の底部は先端を尖らせるものである。すべて広葉樹である。

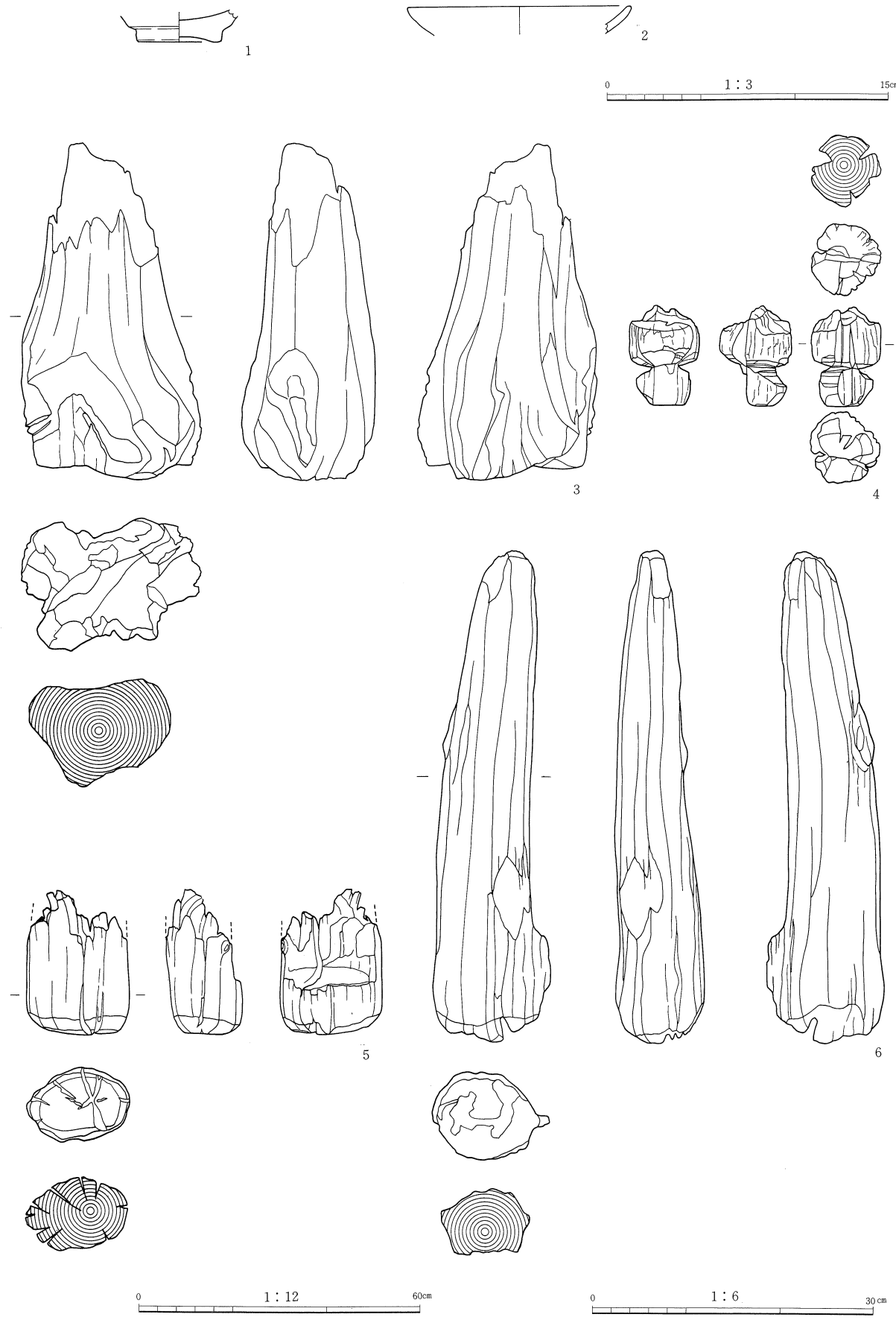
22号土坑（SK22，第106図）

178は口径36㎝を測る唐津灰釉の鉢である。口縁部は屈曲し外に開く形態である。

49号土坑（SK49，第106図，図版94・95・100・109）

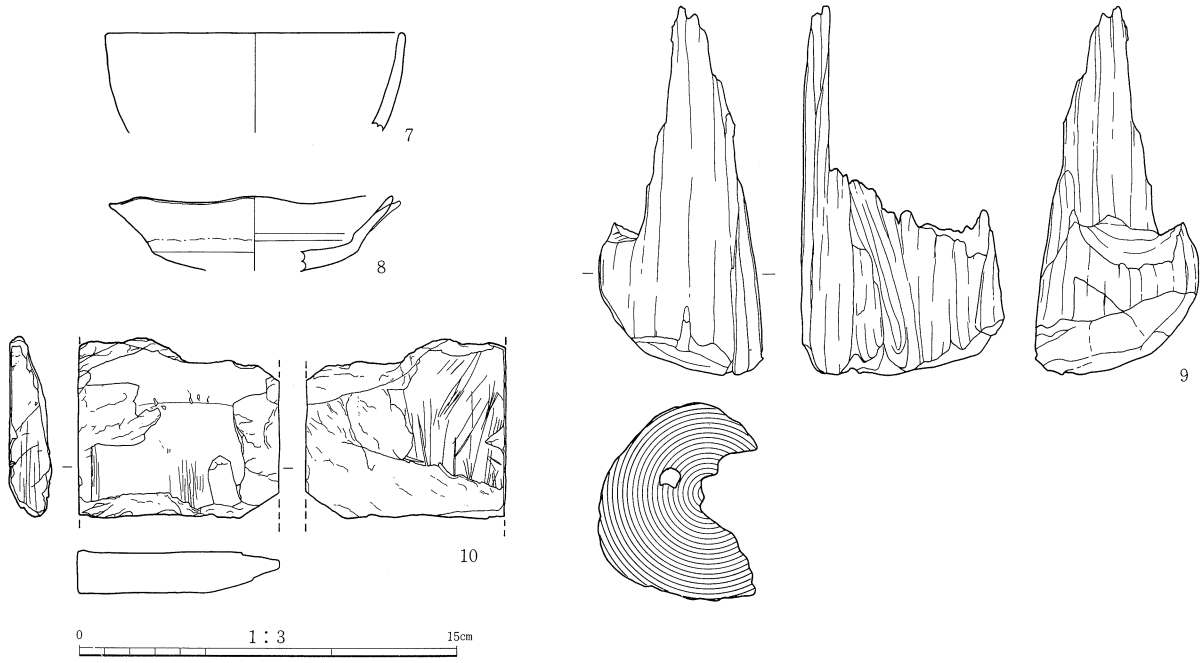
179は珠洲壺である。口縁の先端を水平に突出させる形態である。Ⅳ期である。180は瀬戸美濃皿で

SB01

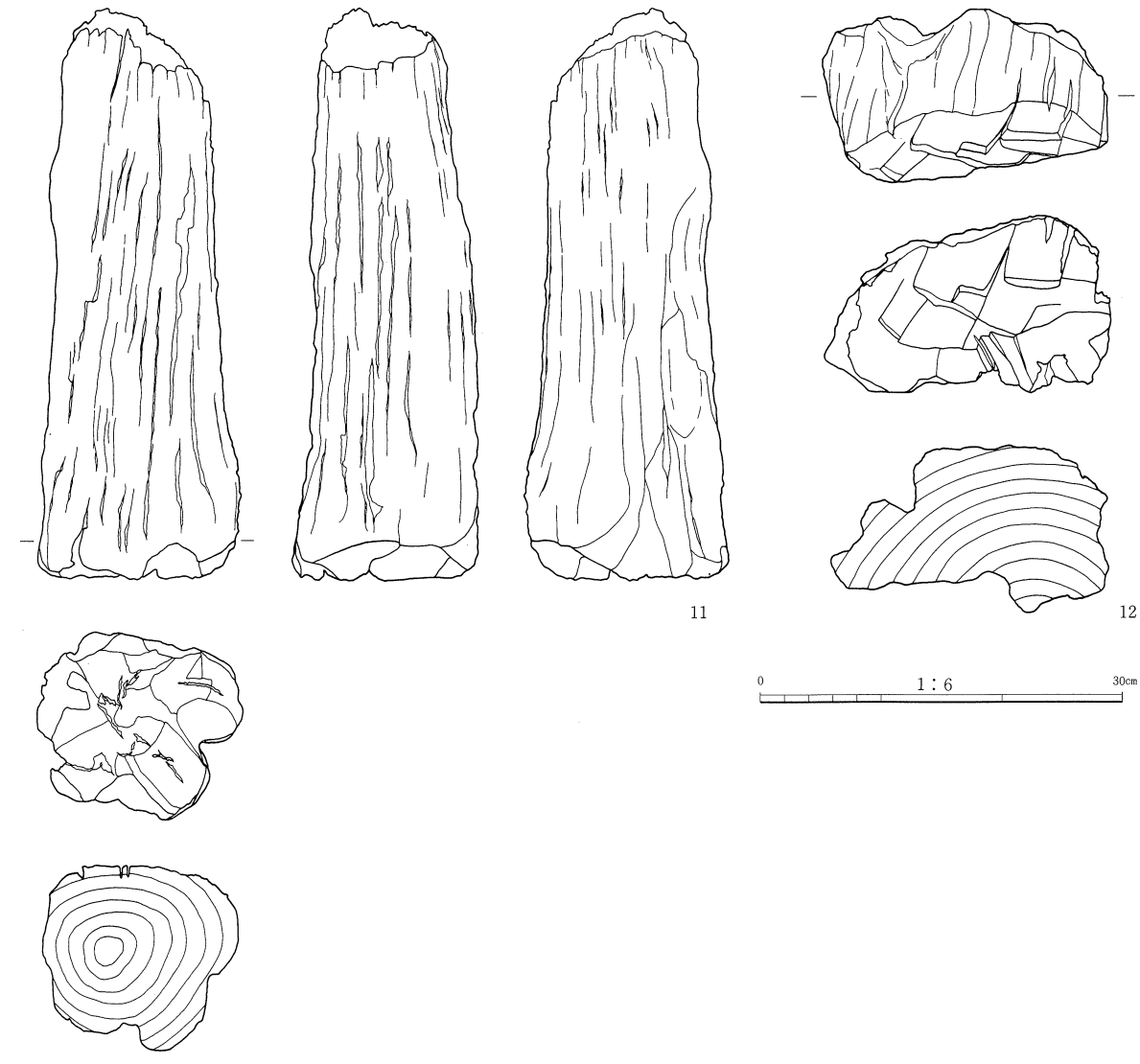


第92図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図1（1・2　1/3，3・4・6　1/6，5　1/12）

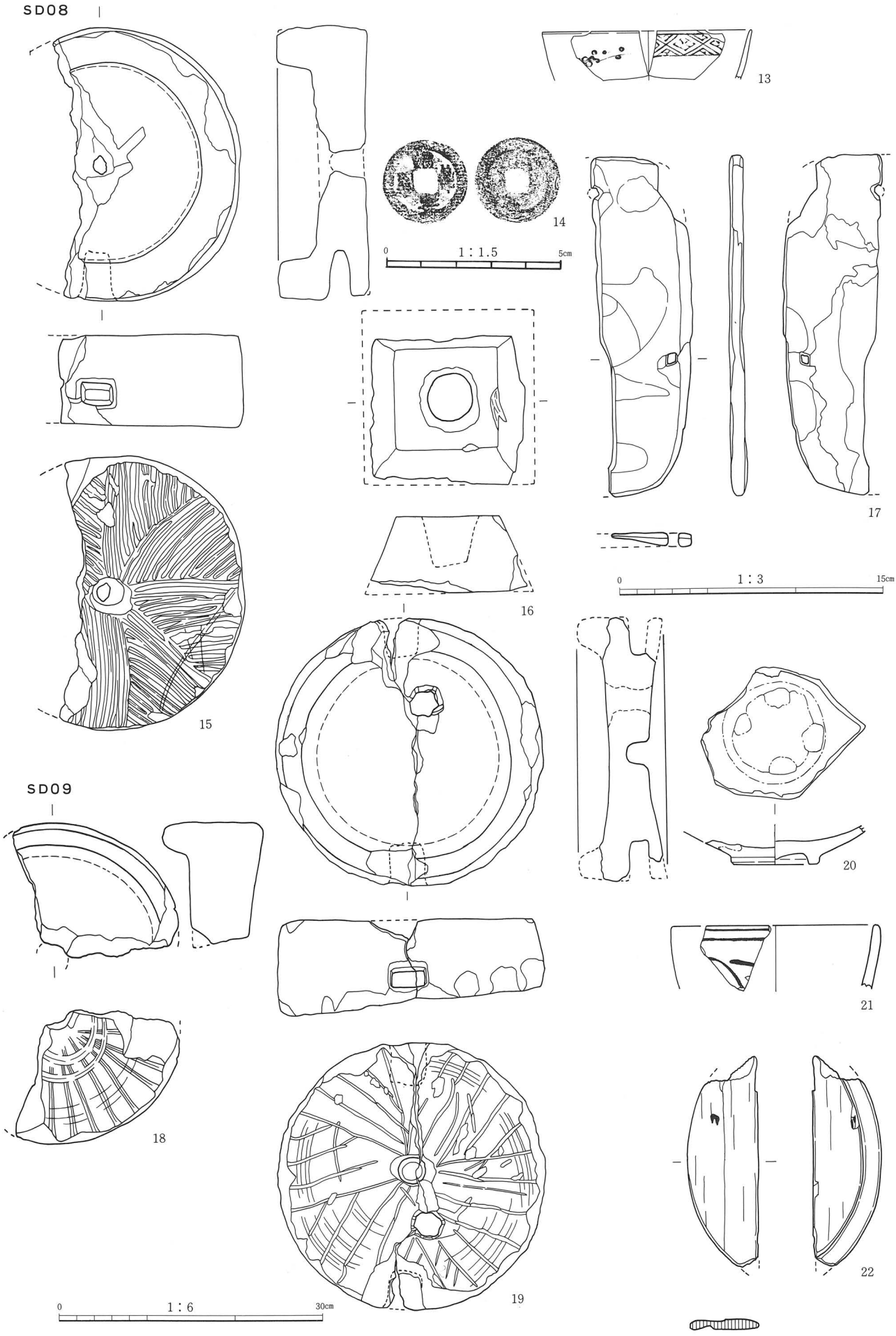
SB02



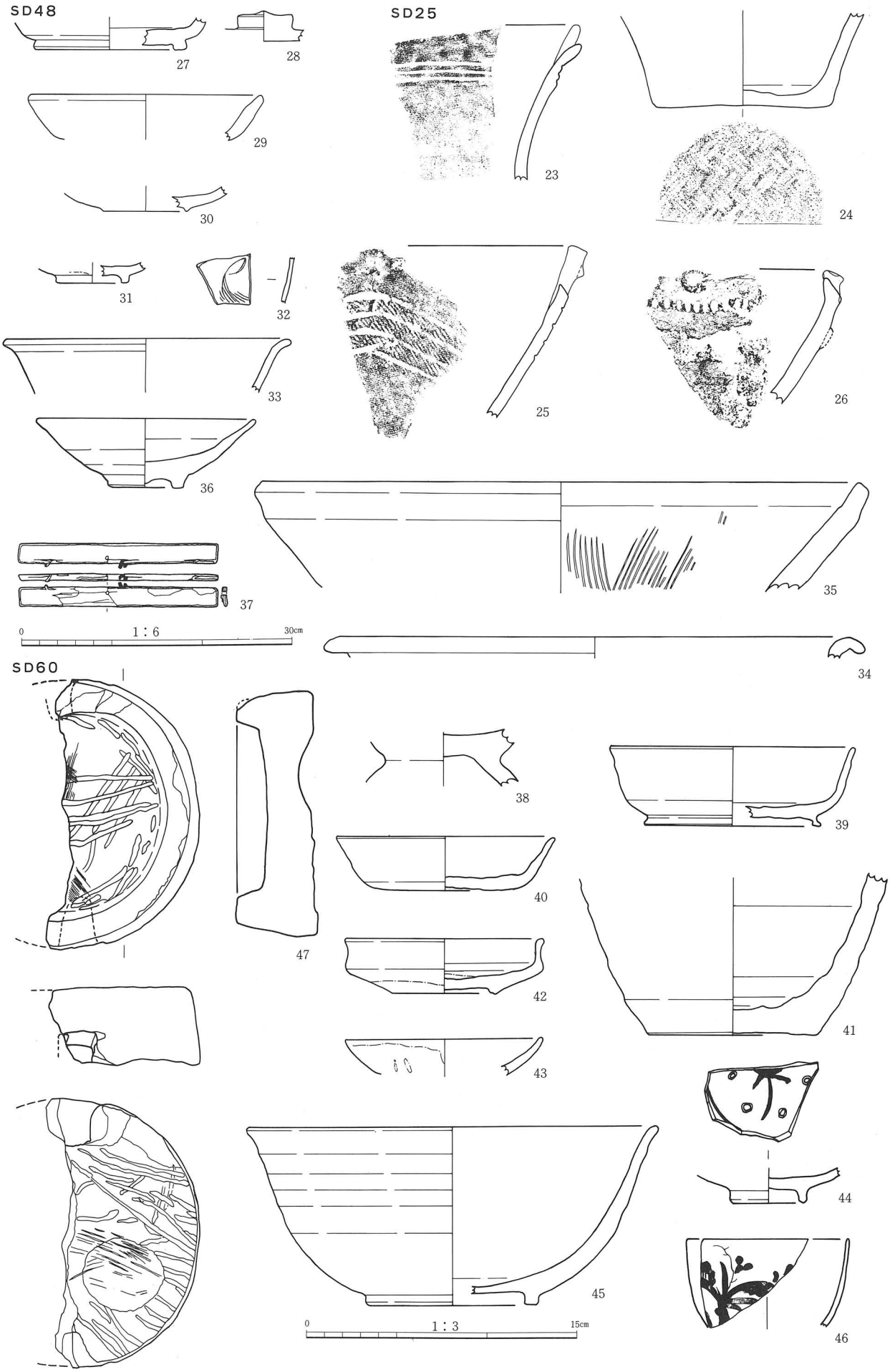
SB03



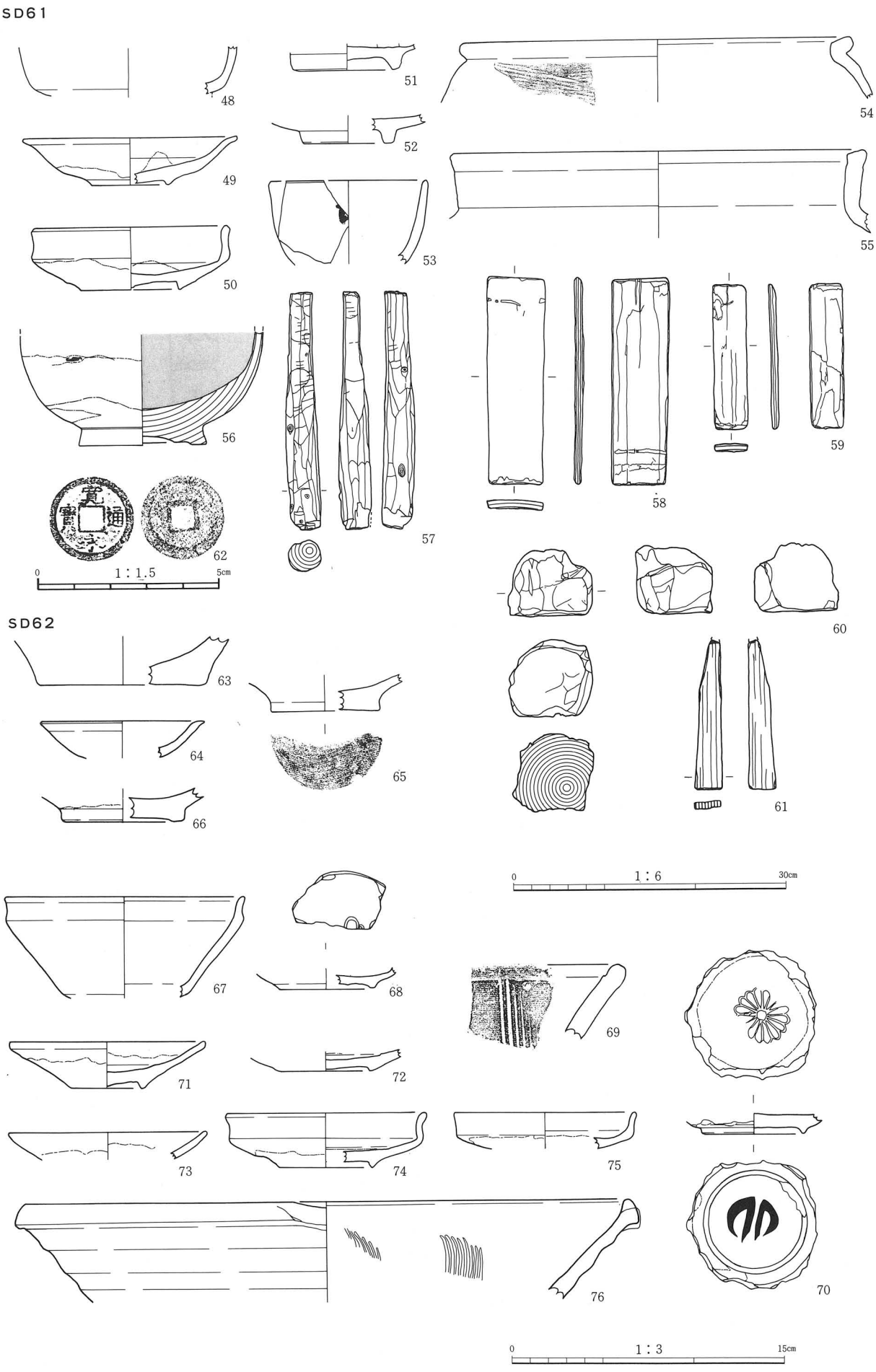
第93図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図２（7･8･10　1/3，9･11･12　1/6）



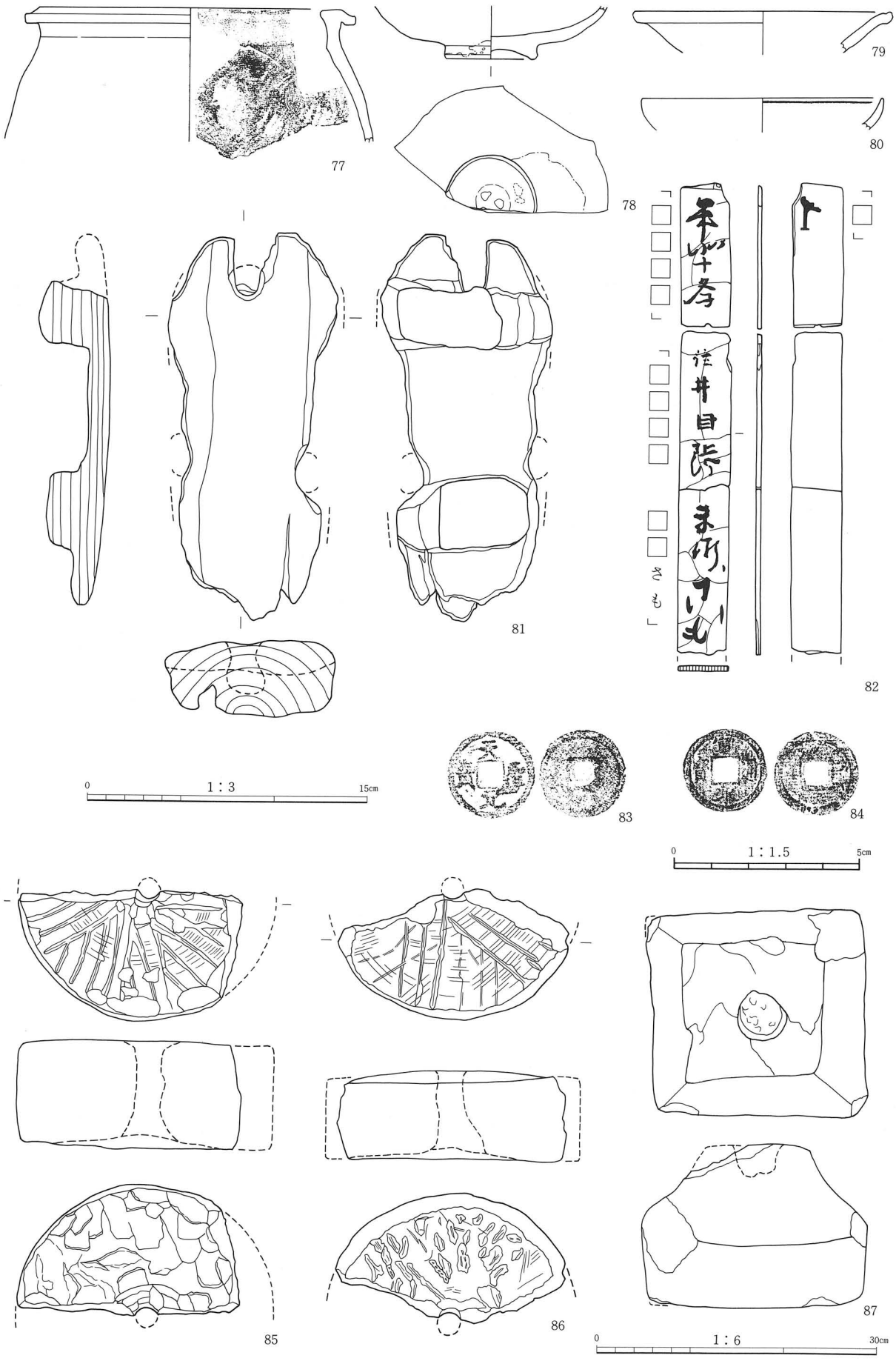
第94図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図３（13・17・20～22　1/3，14　2/3，15・16・18・19　1/6）



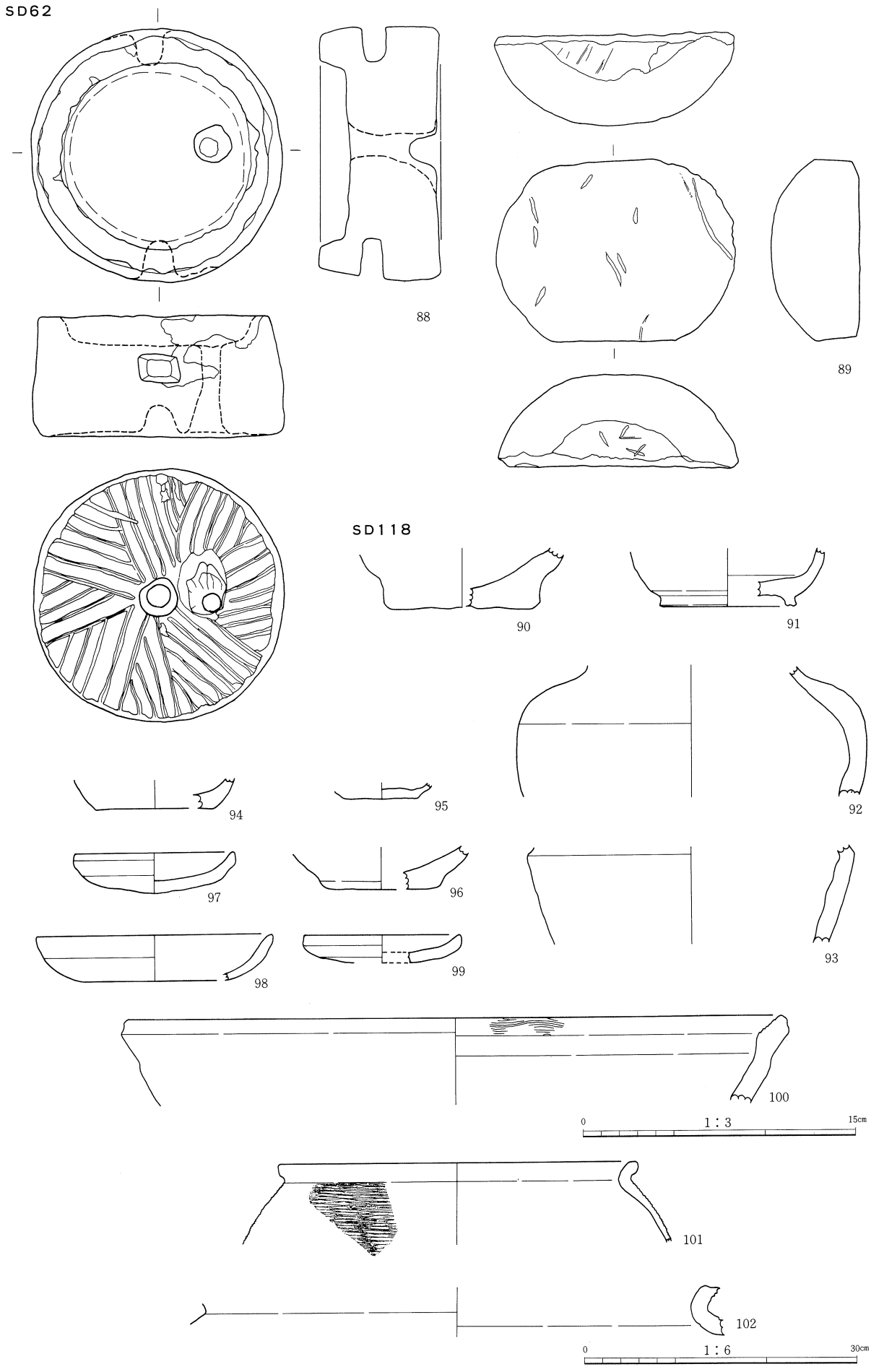
第95図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図４（1/3，34・37・47　1/6）



第96図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図５（48～53・56・63～76　1/3，62　2/3，54・55・57～61　1/6）

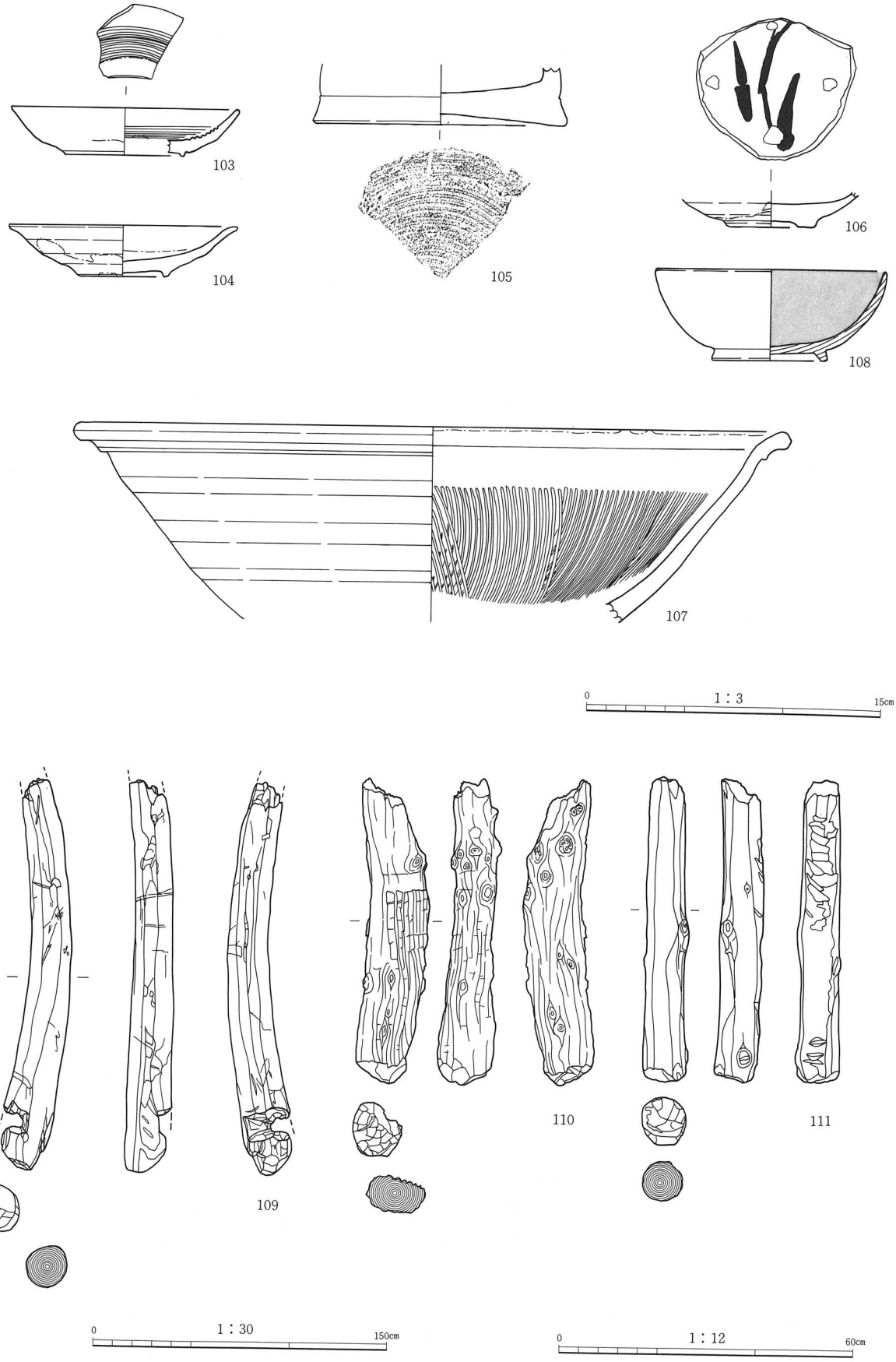


第97図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図６（77～82　1/3，83･84　2/3，85～87　1/6）



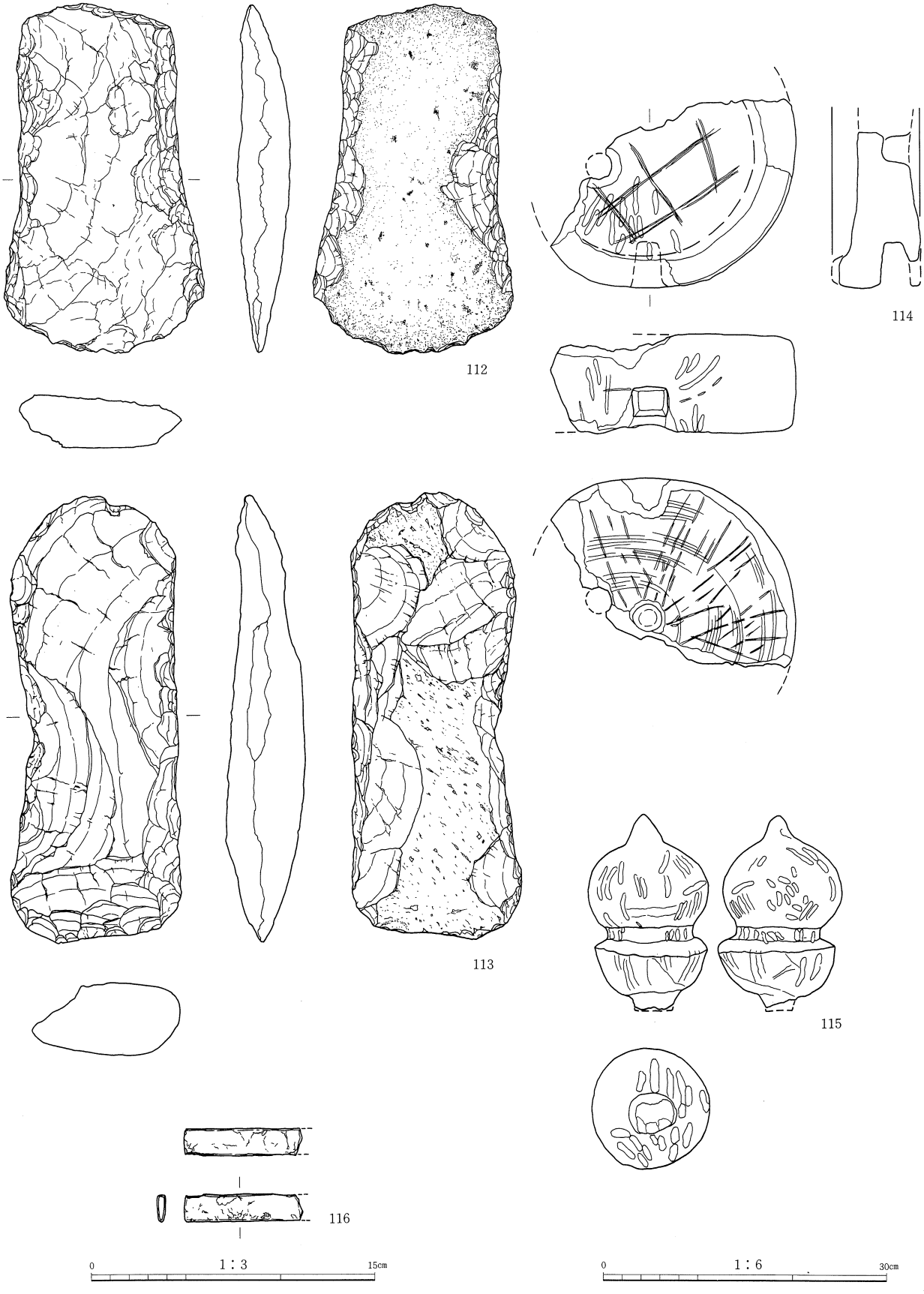
第98図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図７（88･89･101･102　1/6，90～100　1/3）

SD118

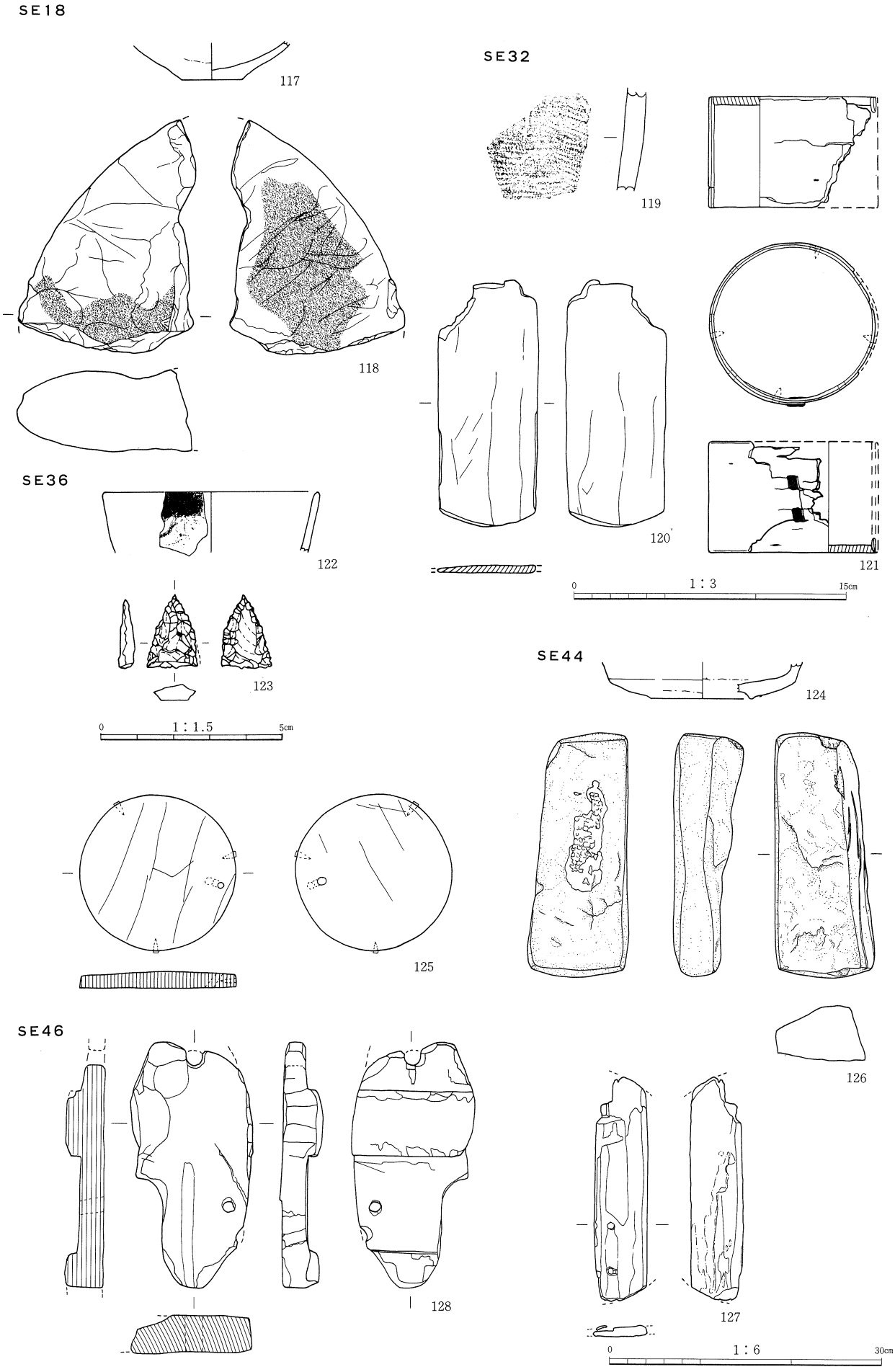


第99図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図８（103～108　1/3，109　1/30，110・111　1/12）

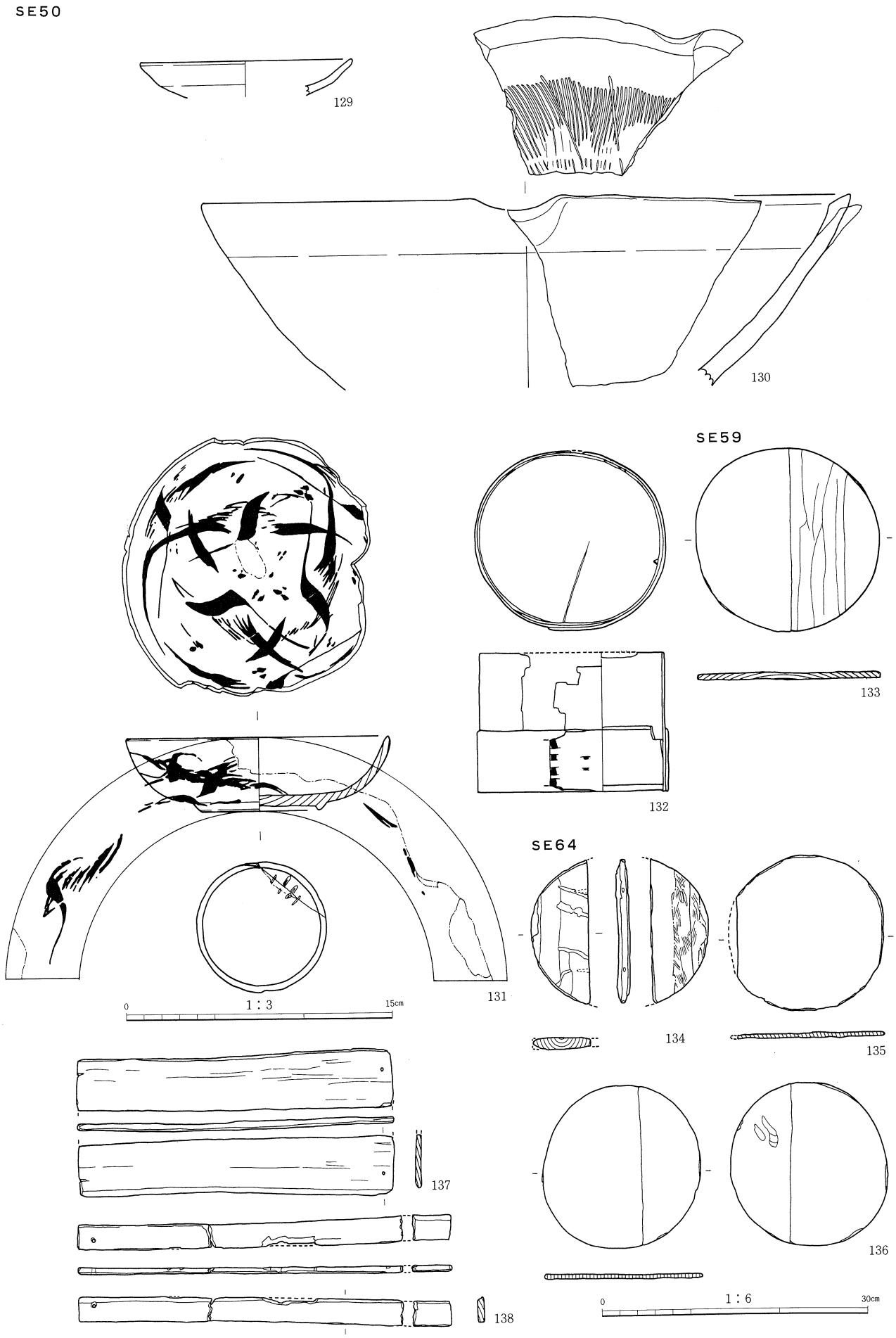
SD118



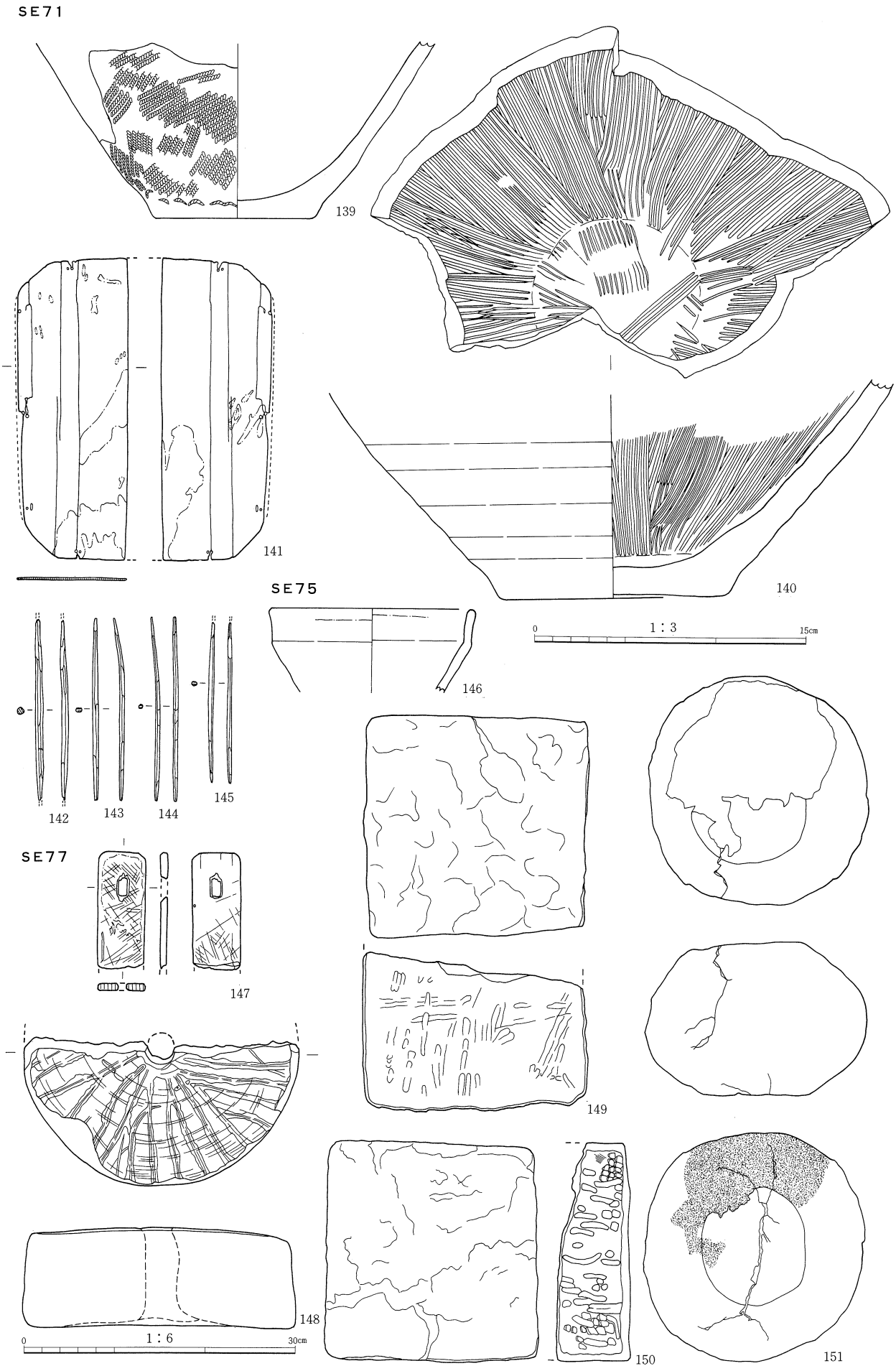
第100図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図９（1/3，114・115　1/6）



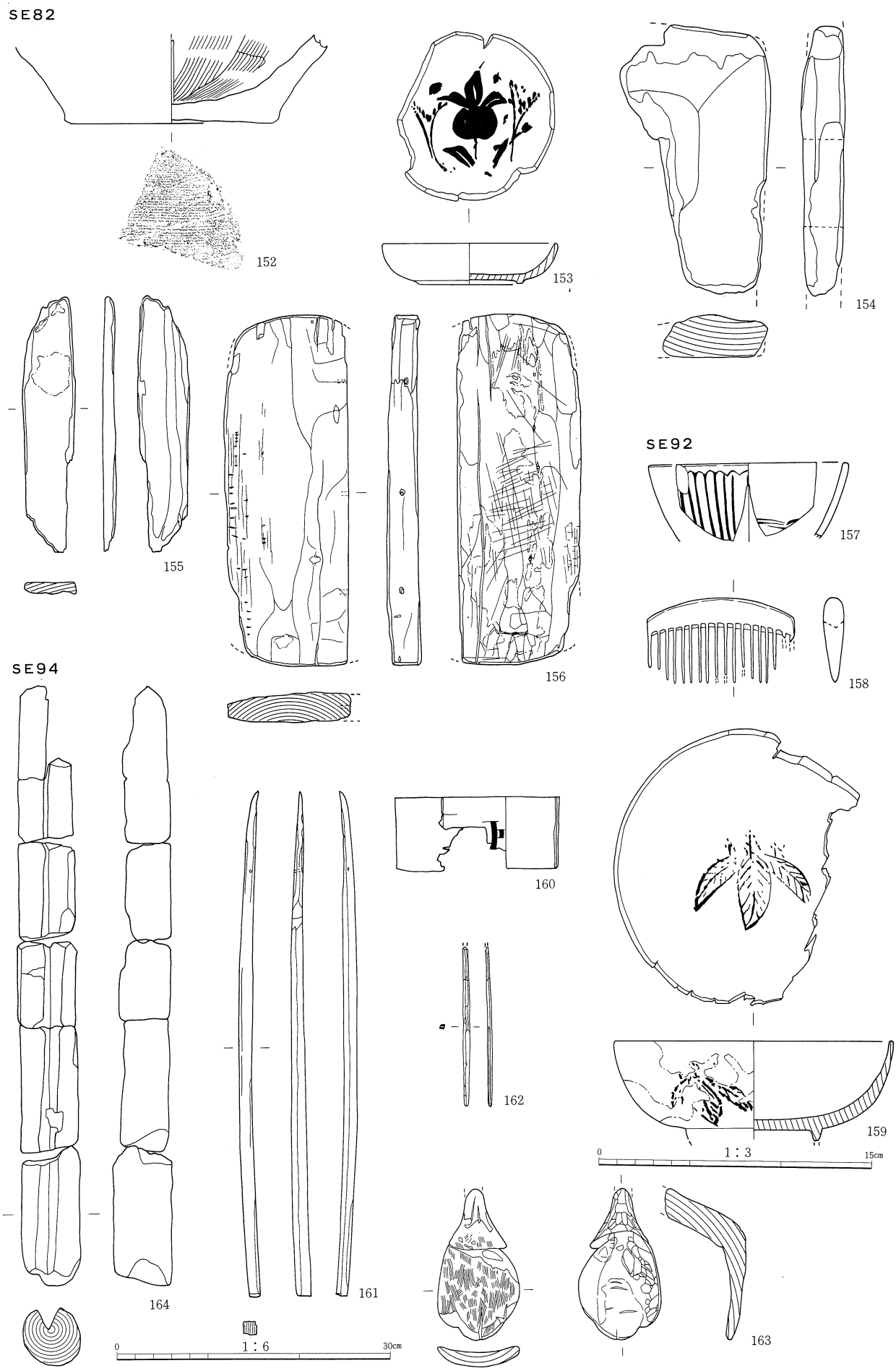
第101図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図10（117～122・124・125・128　1/3，123　2/3，126・127　1/6）



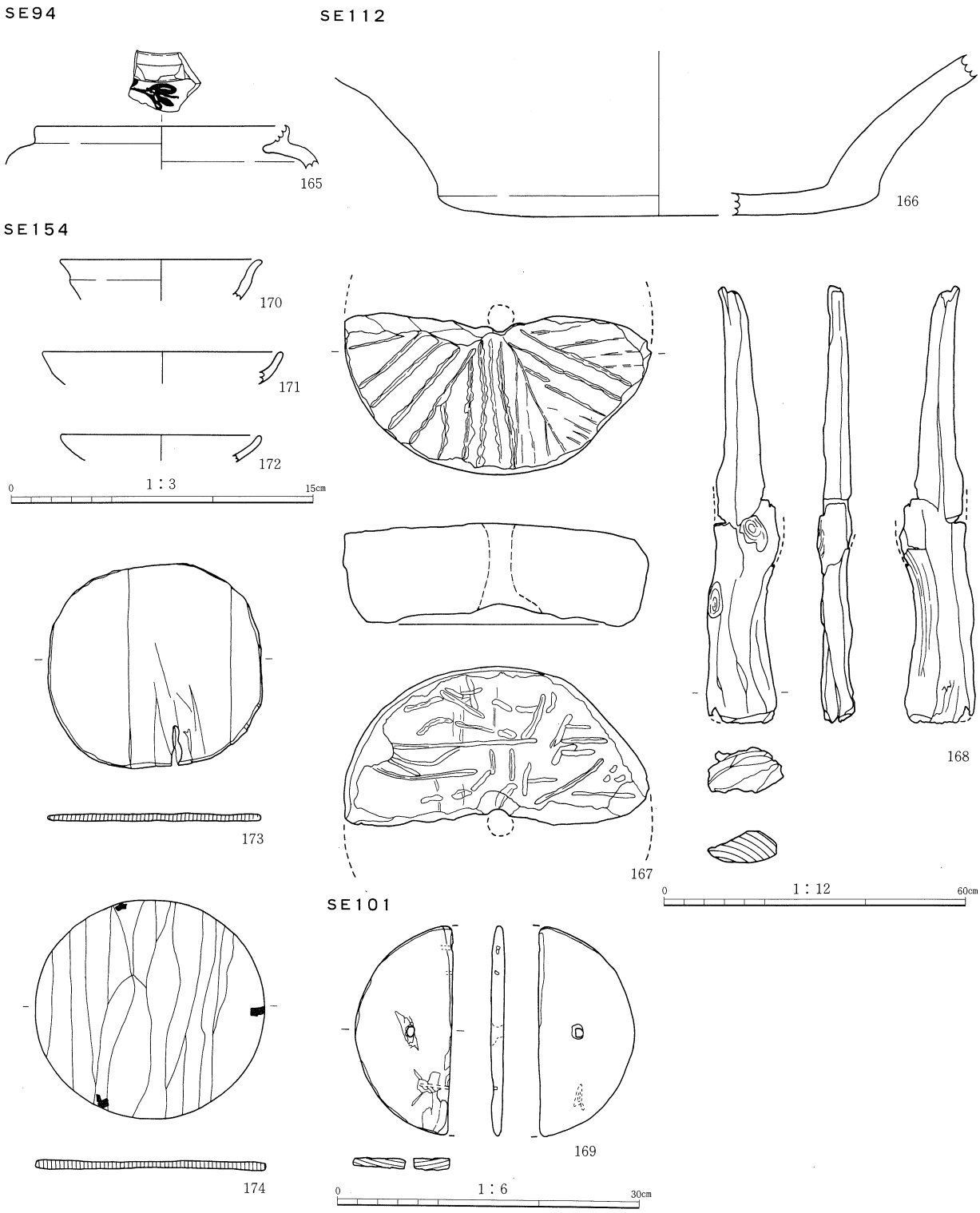
第102図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図11（1/3，132～138　1/6）



第103図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図12（139～141・146　1/3，142～145・147～151　1/6）



第104図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図13（152～154・157～160　1/3，155・156・161～164　1/6）



第105図　田尻遺跡（第１次調査）遺物実測図14（165～167·190～192 1/3, 168 1/12, 169·173·174 1/6）

ある。181は中国製白磁である。灰白色の釉が施される切り高台皿である。内面には重ね焼きの痕跡をとどめる。森田分類のＤ群に相当する[注20]。182～186は越中瀬戸である。182・183は内面と体部上半に鉄釉を施す丸椀である。部分的に灰釉が流しかけられる。184は体部下方から外に開く灰釉の皿である。185は底部は糸切りの後，高台を削り出す。内底面に若干鉄釉が付着するものの，全体に無釉である。火入れか。186は口縁帯が短く折れる擂鉢である。187は唐津である。口縁部が屈曲し直立する形態で，胎土目積期のものである。188は壺または瓶の底部である。外面下方に錆釉を施す。唐

津か。189は中国製染付皿である。外面には唐草文様を施す。時期は16世紀である。

190は端反りの漆器皿である。内面は赤色漆塗り，外面は赤色漆で文様が描かれる。樹種はブナで，柾目取りされる。時期は16世紀である。

191は元豊通寶である。

53号土坑（SK53，第107図，図版97・103）

192は栓である。193は長方形の板状である。短辺の一端は欠損するが，もう一端は幅３㎜程度の抉りが５箇所に入る。一長辺側面の二箇所に釘孔がみられる。表面に漆の痕跡が残る。

58号土坑（SK58，第107図，図版106）

194は瀬戸美濃志野の皿である。体部はやや内湾し，口縁端部を外につまむ形態である。大窯Ⅳ期または登窯Ⅰ期である。

195は石臼の上臼である。供給口，ものくばり，軸受けが残存し，くぼみは中央部分が若干凹んでいる。挽き木を装着させる方形孔は４箇所にみられる。溝の分画は明確ではない。石材は凝灰角礫岩である。

73号土坑（SK73，第107図，図版92・95）

196は瀬戸美濃縁釉小皿である。窖窯末期である。197・198は唐津灰釉の皿である。198は体部中位で外に屈曲する形態である。内面の体部中位に段をもつ。内外面底部に砂目積み跡を残す。199は椀である。漆継ぎの痕跡をとどめる。胎土は柔らかく，オリーブ黄色を呈し，透明釉が施釉される。京焼風唐津あるいは唐津と思われる。200は越中瀬戸擂鉢である。口縁帯を垂下させる形態で，錆釉を施す。

201は石臼の下臼である。直径30㎝，高さ８㎝を測る。溝の分画パターンは不明。凝灰岩である。

78号土坑（SK78，第107図，図版92）

202は越中瀬戸擂鉢である。口縁帯を垂下させる形態である。体部はロクロナデ，底部は糸切り痕を残す。全面に錆釉を施す。卸目は10条１単位左回りに施される。

79号土坑（SK79，第108図，図版93・109）

205は越中瀬戸擂鉢である。206は唐津灰釉の皿で，内外面底部に砂目積み跡をとどめる。

207～209は石製品である。207・208は硯の海部分である。ともに海の部分と硯側に墨痕が認められる。泥岩である。209は下臼である。上面の溝は摩滅している。石材は凝灰角礫岩である。

80号土坑（SK80，第107図，図版109）

203は珠洲擂鉢である。口縁端部は方頭を呈し外傾する。Ⅳ期である。

204は石硯の墨堂部分で，硯縁は大部分が欠損する。硯背に線刻が認められる。石材は泥岩である。

150号土坑（SK150，第108図，図版94・95）

210は珠洲擂鉢である。口縁は内端に約２㎝の広い面を取り，櫛目波状文帯を巡らす。Ⅵ期である。211は中国製青磁の碗あるいは杯である。高台底部は釉剝ぎされる。外面は比較的細かい貫入がみられる。

212は砥石である。泥岩である。

652号土坑（SK652，第108図，図版94・101）

213は須恵器杯の底部である。214～217は珠洲である。214は壺である。頸部は長く外反する。端部はやや丸みをもった方頭である。Ⅲ期である。215は甕である。胎土は灰白色を呈する。５㎜程度の白色粒を含み，粗雑である。体部の所々は土器片と漆を埋め込み，底部は木片と漆で補修されている。

216は擂鉢である。内外面は被熱を受けて黒変する。卸目は12条一単位で左回りで体部に施される。外面底部は静止糸切りである。Ⅵ期である。218は越中瀬戸皿である。口縁部が屈曲し，直立する向付形態である。219は漆器椀である。体部に丸みをもつ形態である。外面から内面口縁端部まで黒色漆，内面は赤色漆が施される。断面には繊維状のものが付着し，布着せと思われる。

C　その他の遺物

(1) 土器（第109～110図，図版92～96）

縄文土器（220）　深鉢の底部である。表面は摩滅しており，調整は不明である。

土師器（221・224）　221は鍋である。口縁部は外傾し端部を面取りする形態である。外面にはカキメを施す。8世紀後半から9世紀前半である。224は内面を燻した後，磨きを施すいわゆる内黒椀である。底部外面はヘラケズリである。8世紀中頃である。

須恵器（222・223）　222は壺の肩部で，沈線が巡る。223は甕の口縁部である。外面は3条の沈線を巡らせ，その間に櫛描き波状文を施す。

中世土師器（225）　一段ナデを施し，外面底部は無調整である。胎土はにぶい黄橙色を呈する。

珠洲（226）　短頸のくの字口縁をもち，端部は方頭を呈する甕である。Ⅴ期である。

瀬戸美濃（227～229）　227は鉄釉を施した天目茶椀の底部である。削りだし輪高台で，濃い錆釉を施す。大窯Ⅰ期に相当する。228は体部が内湾し，中央部で屈曲する皿である。口縁端部は欠損する。灰釉が施される。大窯Ⅰ期またはⅡ期である。229は志野の小杯である。体部中央は丸みをもち，口縁部は若干外屈して端部を丸くおさめる。長石釉が施される。

中国製青磁（230・231）　ともに碗の底部で，内底面に劃花文を施す。230は高台の内側が釉剝ぎされる。231は高台は下端内外に面が取られ，内側を削り込み，底部は厚みのあるつくりである。内面は露胎で，外面は幅の広い蓮弁文を施す。上田分類のBⅡ類に相当する。

中国製白磁（232）　器壁が薄く，口縁部が外に開く皿である。時期は15世紀である。

越中瀬戸（233～237）　233・234は灰釉の皿である。233は削り出し高台で，内面中央は若干凹んでいる。234は付高台を有する。内面は体部にソギを巡らせ，底面に16弁菊を押捺する。235は鉄釉の壺である。236・237は擂鉢である。全面に錆釉を施し，底部に糸切り痕を残す。卸目は左回りに施される。236の体部下端に指頭圧痕がみられる。

唐津（238～247）　238・239は椀である。体部が内湾し，外に開く丸椀である。口縁端部は外に面取りされる。高台の外面を面取りし，内面を削り出す。内面全体と外面体部下半に鉄釉を施す。239は白土を刷毛で塗り，縞状の文様を施す。240～244は灰釉の皿である。240は削りだし高台を有し，口縁部が外に開く形態である。内面には砂目跡がみられる。243は内底面に胎土目跡がみられ，外面底部には墨書がみられる。241・242・244は溝縁皿である。241・242は灰釉が施され，砂目跡がみられる。244は口径24.4cmと大ぶりで，鉄釉を施し，灰釉を流しがけする。245は甕である。口縁部は肥厚して，上端は幅広になる。内外面とも鉄釉が施される。246は鉄釉の壺である。外面は被熱を受けているためか黒変している。247は小杯である。内面全体と外面体部下半まで灰釉を施す。内底面に砂目跡がある。

伊万里（250～254）　250は皿で，内底面にコンニャク印判による五弁花が施される。

251～254は碗である。251は体部が内湾し，口縁部が直立する形態である。252・253は陶胎染付で，外面に唐草文を描く。254は体部下半が丸みをもって立ち上がる形態である。外面体部には松のコンニャク印判が施される。

そのほかには248は内外面に灰釉を施す鉢である。胎土は灰オリーブ色で堅く締まっており，在地

窯で製作されたものと考えられる。

(2) 木製品（第111～113図，図版97～105）

255～257は一木づくりの連歯下駄で，平面は隅丸の長方形を呈する。後歯は欠損あるいは摩滅が著しい。前壺は台幅の中央に，後壺は後歯の前側に穿たれる。255は台表の下方５箇所に焼印のようなものがみられる。257は台表の前壺と後壺の中間に直径・深さとも５㎜の孔を穿つ。258・259は円形板である。258は材同士を木釘で結合させるものである。ヒノキの柾目取りで，漆塗りである。259は直径27.4㎝を測り，切りキズが顕著である。260は曲物である。側板の破損が激しいため，推定で復原した。側板と底板は綴り皮と木釘で結合される。底板内面は漆塗りである。261は折敷の底板である。長方形の一端を切り落とすものである。短軸の外周には木釘が打たれたと思われる孔が，長軸部分には綴り皮の痕跡がみられる。内外面とも切りキズが顕著である。スギの柾目取りである。262は自在鉤である。上方になる部分は長方形の孔が穿たれ，下方は瓢箪型に抉られる。樹種は針葉樹である。263・264は漆器椀である。263は高台の高いもので，内底面に文様が描かれる。底部には長方形のキズがみられ，ロクロの爪痕の可能性がある。264は高台が５㎜で，体部が内湾しながら外に開く形態である。内外ともに文様が描かれ，体部に穿孔される。265は漆器皿で，高台をわずかに削りだし，口径に対して器高が低いものである。口縁端部は欠損する。266～271は箸である。一端が欠損するものもあるが，両端を削り出す両口箸である。断面は，長方形または楕円形を呈するものがある。272～276は柱である。272～275は底部の中央を尖らすものである。運搬時に縄を掛けたと思われる方形の孔が体部にみられる。276は底部は丸みをつけながら削りだし，側面に抉りを入れるものである。

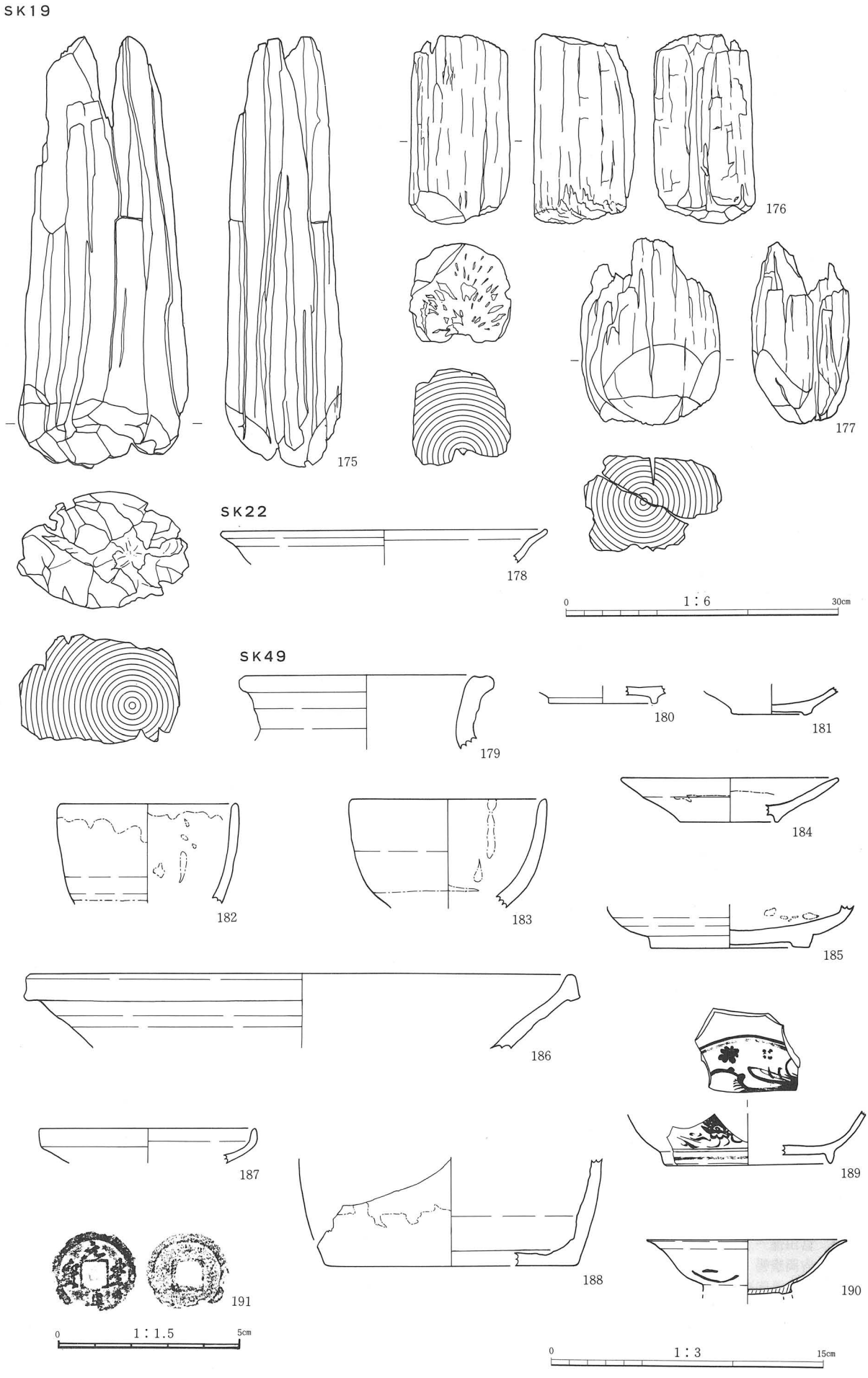
(3) 石製品（第113図，図版105・108）

277は磨製石斧で，部分的に自然の礫面を残す。砂岩である。278は短冊形の打製石斧である。安山岩である。279は五輪塔の火輪である。平面形は正方形を呈する。屋根が高く，軒先が真反りである。14世紀と考えられる。上方には風輪のほぞを装着させる円形孔が彫り込まれる。凝灰角礫岩である。

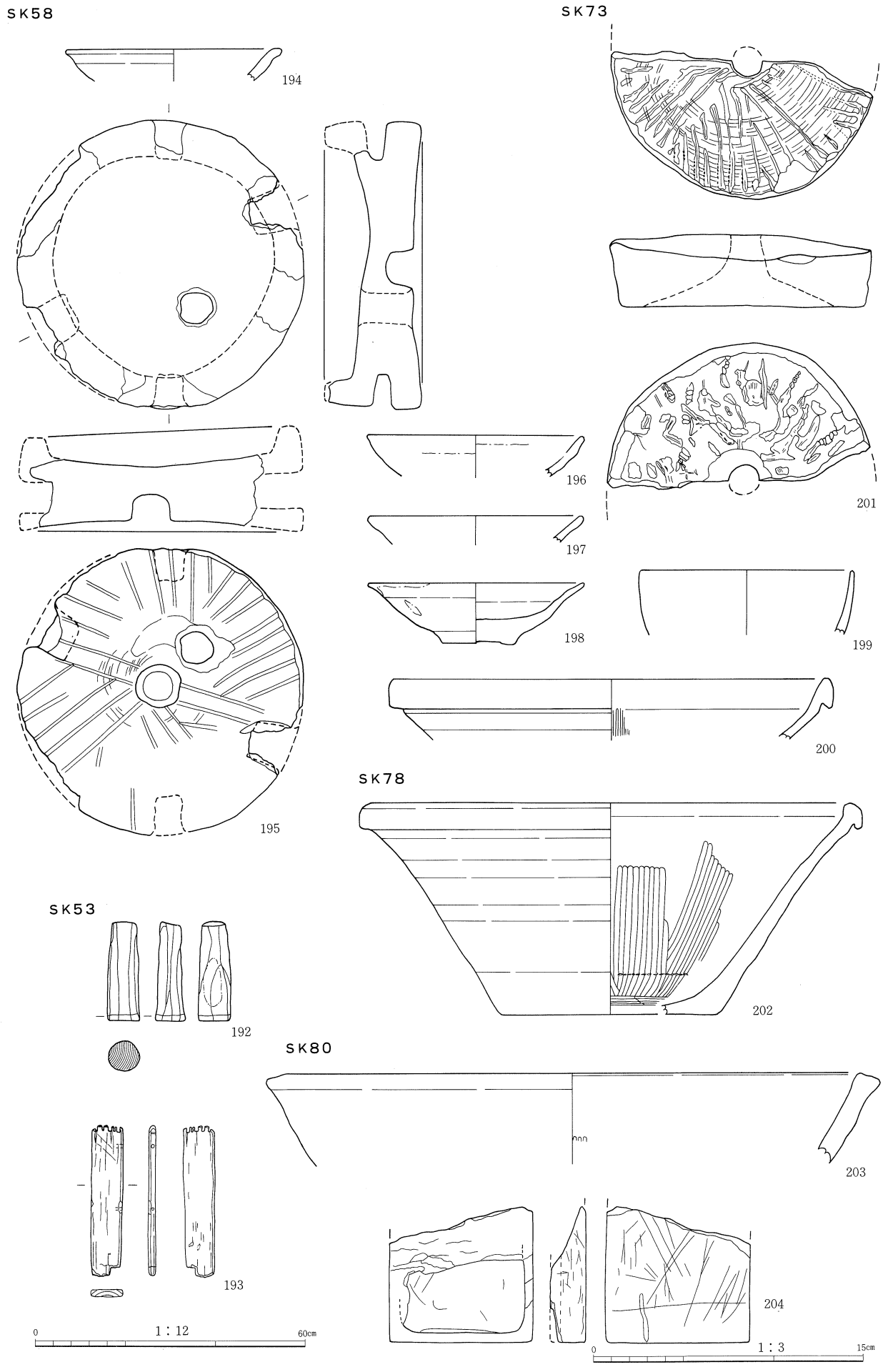
(4) 金属製品（第113図）

280は銭貨である。腐食が激しいため判読できない。（横山和美）

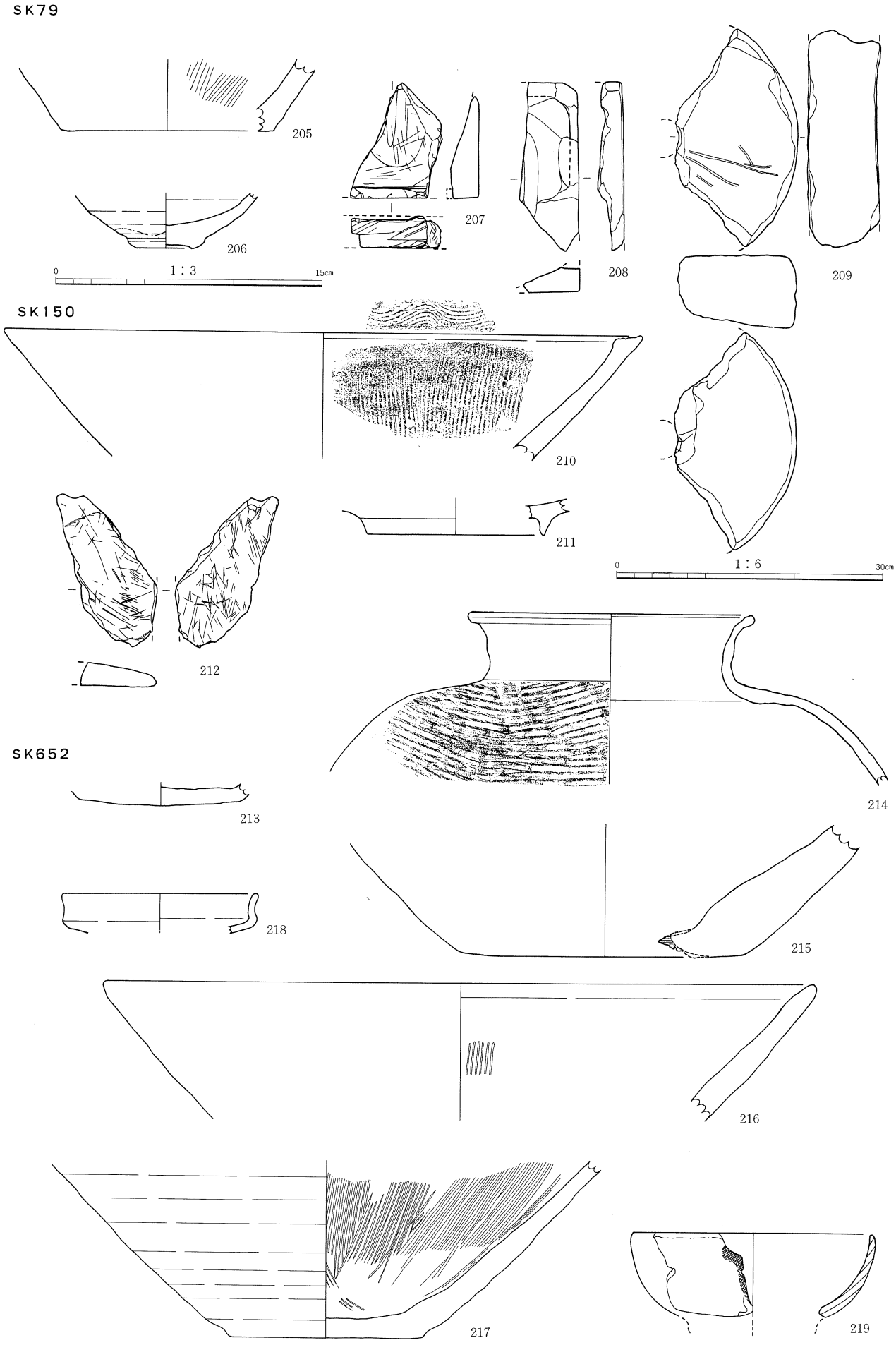
注１　福野町史編纂委員会 1991 『福野町史 通史編』
注２　石川県穴水町教育委員会 1991 「美麻奈比古神社前遺跡」『西川島』
注３　瀬戸市史編纂委員会 1993 『瀬戸市史Ⅳ』
注４　大橋康二 1988 『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社
注５　大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布－発掘資料を中心として」『国内出土肥前陶磁』九州陶磁文化館
注６　臼の部分名称は以下の文献を参考にした。
　　三輪茂雄 1978 『ものと人間の文化史 25 臼』㈶法政大学出版局
注７　兵庫埋蔵銭調査会 1994 『中世の出土銭』
注８　野々市町 教育委員会 1983 『野々市町御経塚遺跡』
注９　荒木ヨシ 1979「縄文時代の網代編み」『物質文化第17号』
注10　小林達雄・小川忠博 1990 『縄文土器大観４』 小学館
注11　小島俊彰 1988 「井口式土器様式」『縄文文化の研究４』雄山閣
注12　山本信夫 1988 「北宋期貿易陶磁の編年－太宰府出土例を中心として」『貿易陶磁研究』NO.8
注13　上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』NO．2
注14　宮田進一 1988 「越中瀬戸の窯資料(1)」『大境 12号』富山考古学会
注15　吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
注16　福井県陶芸館 1986 『越前名陶展』
注17　奈良大学水野正好教授の赤外線透視による判読の結果
注18　井口村史編纂委員会 1995 「池尻石塔群」『井口村史 下巻（史料編）』
注19　西村 歩 1994「曲物細部技法」『奈良大学文化財学論集』奈良大学文化財学論集刊行会
注20　森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』NO．2



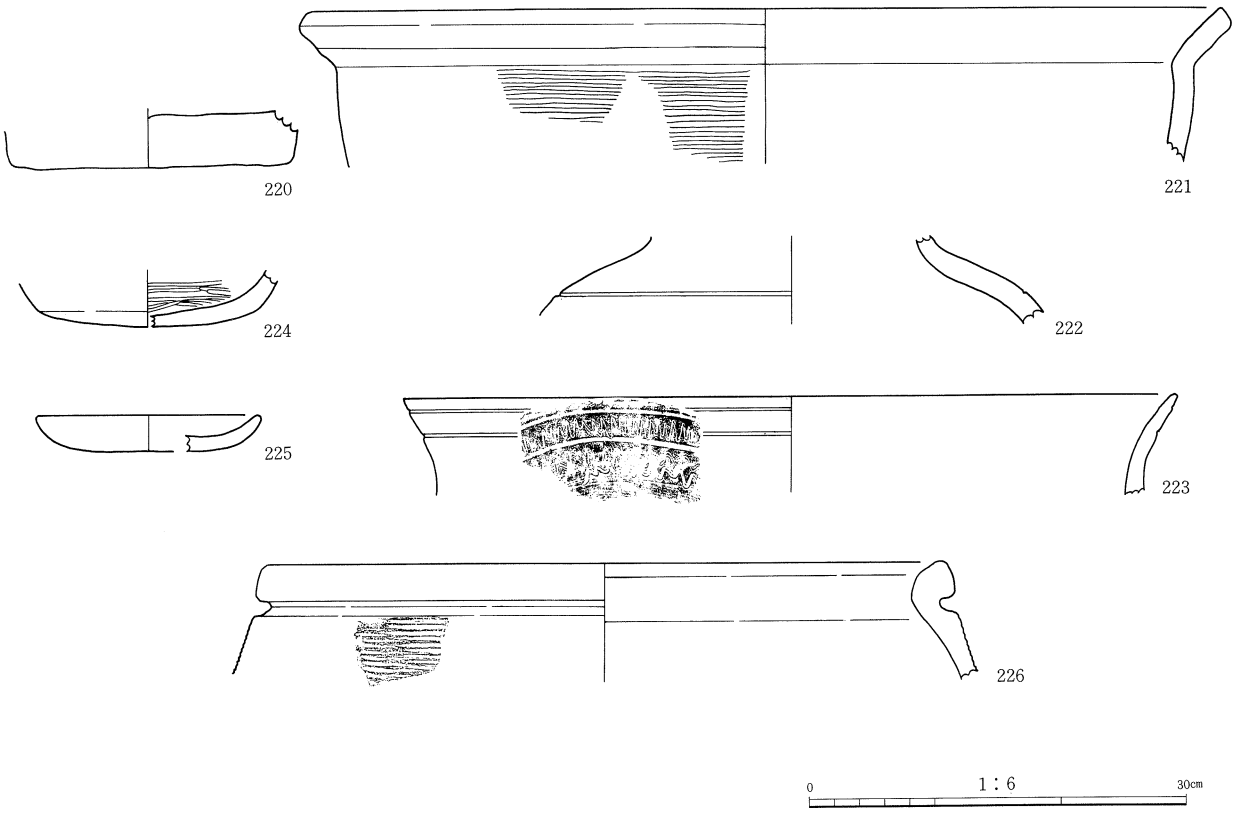
第106図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図15（175～177　1/6，178～190　1/3，191　2/3）

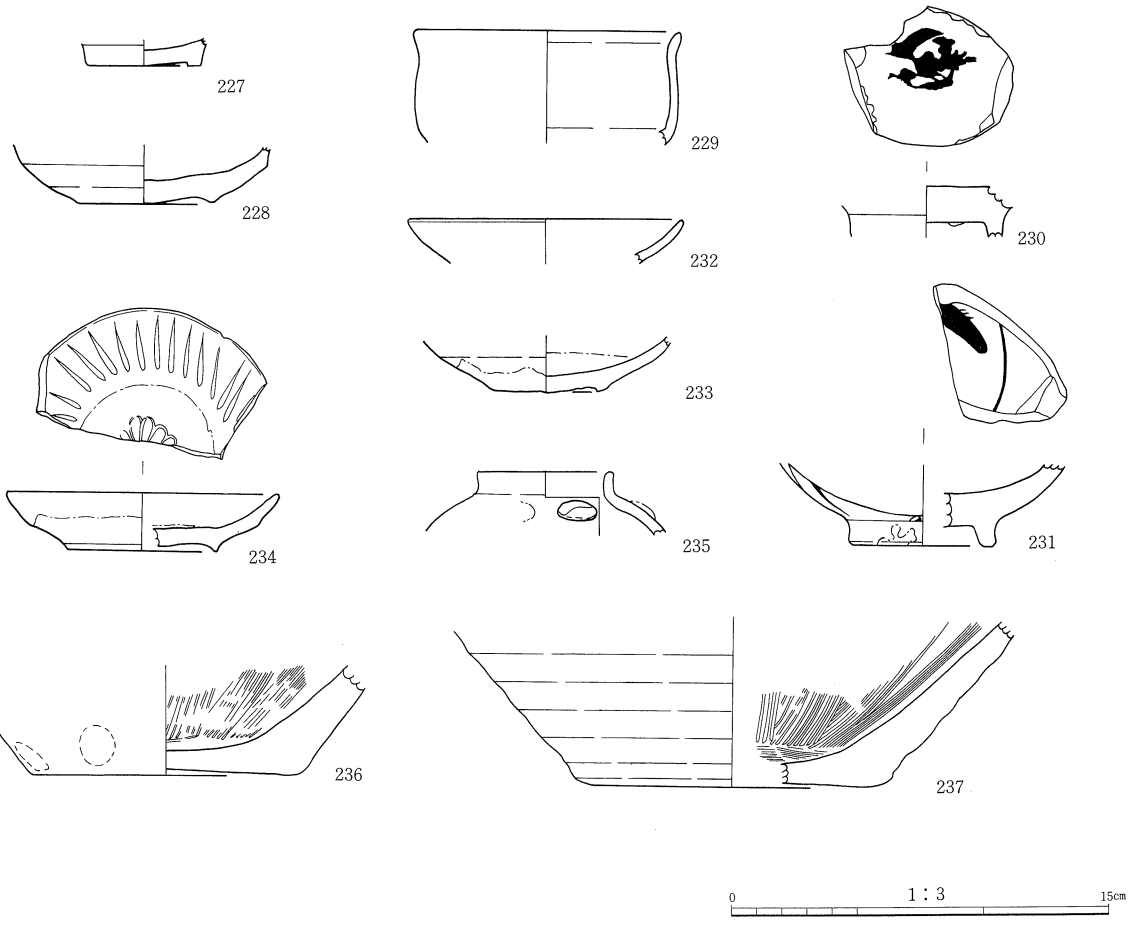


第107図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図16（1/3，192・193・195・201　1/12）

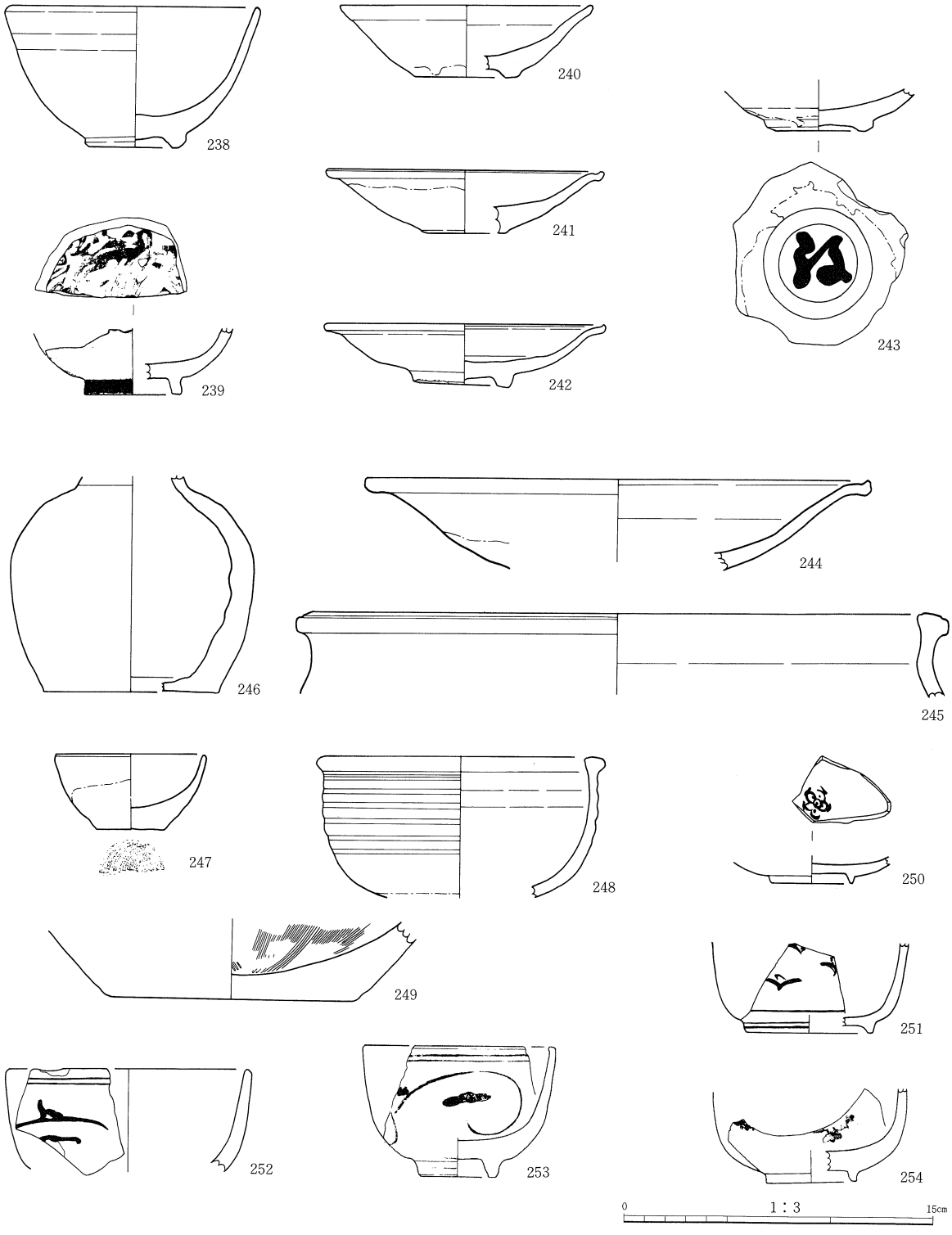


第108図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図17（1/3，209　1/6）

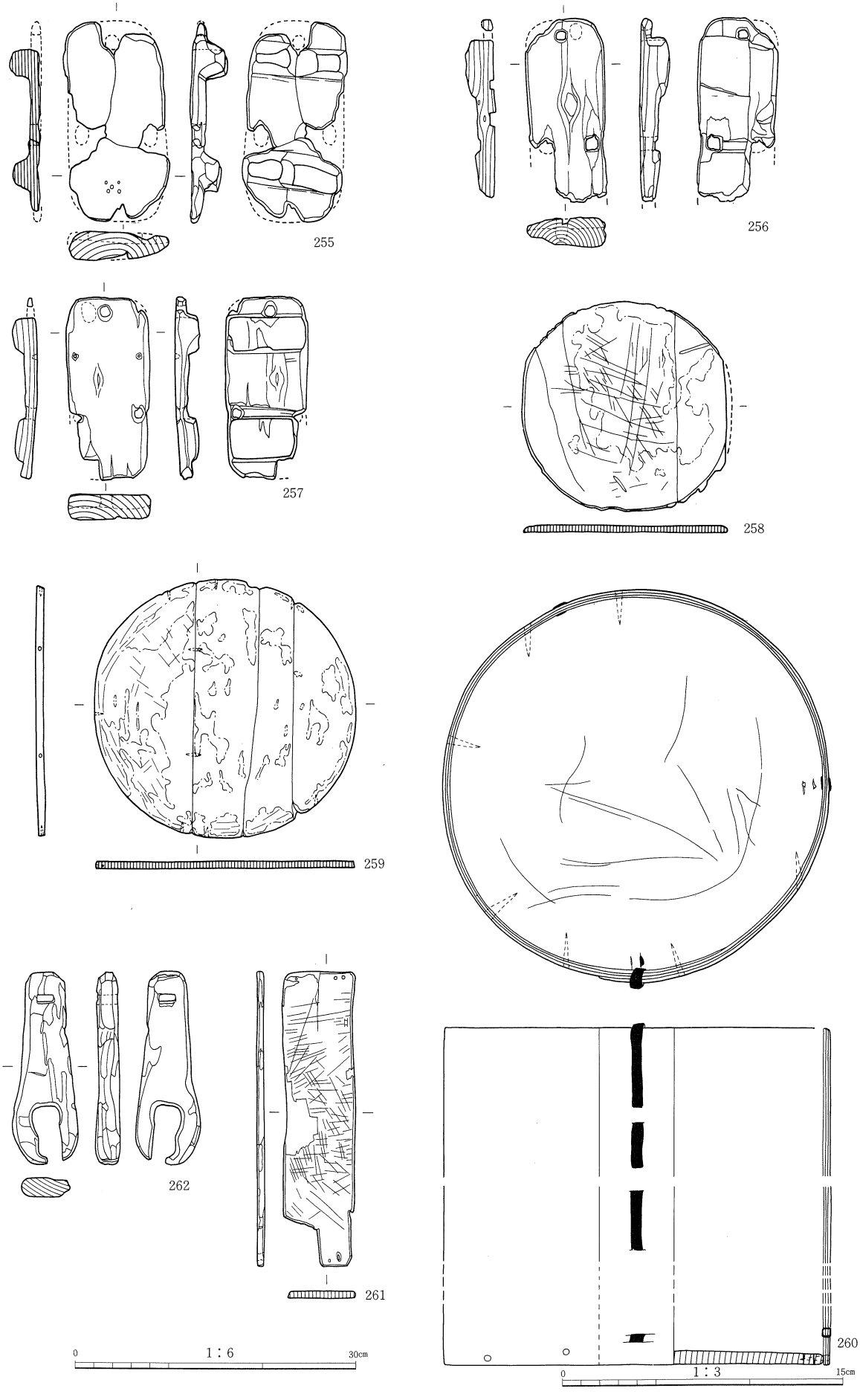




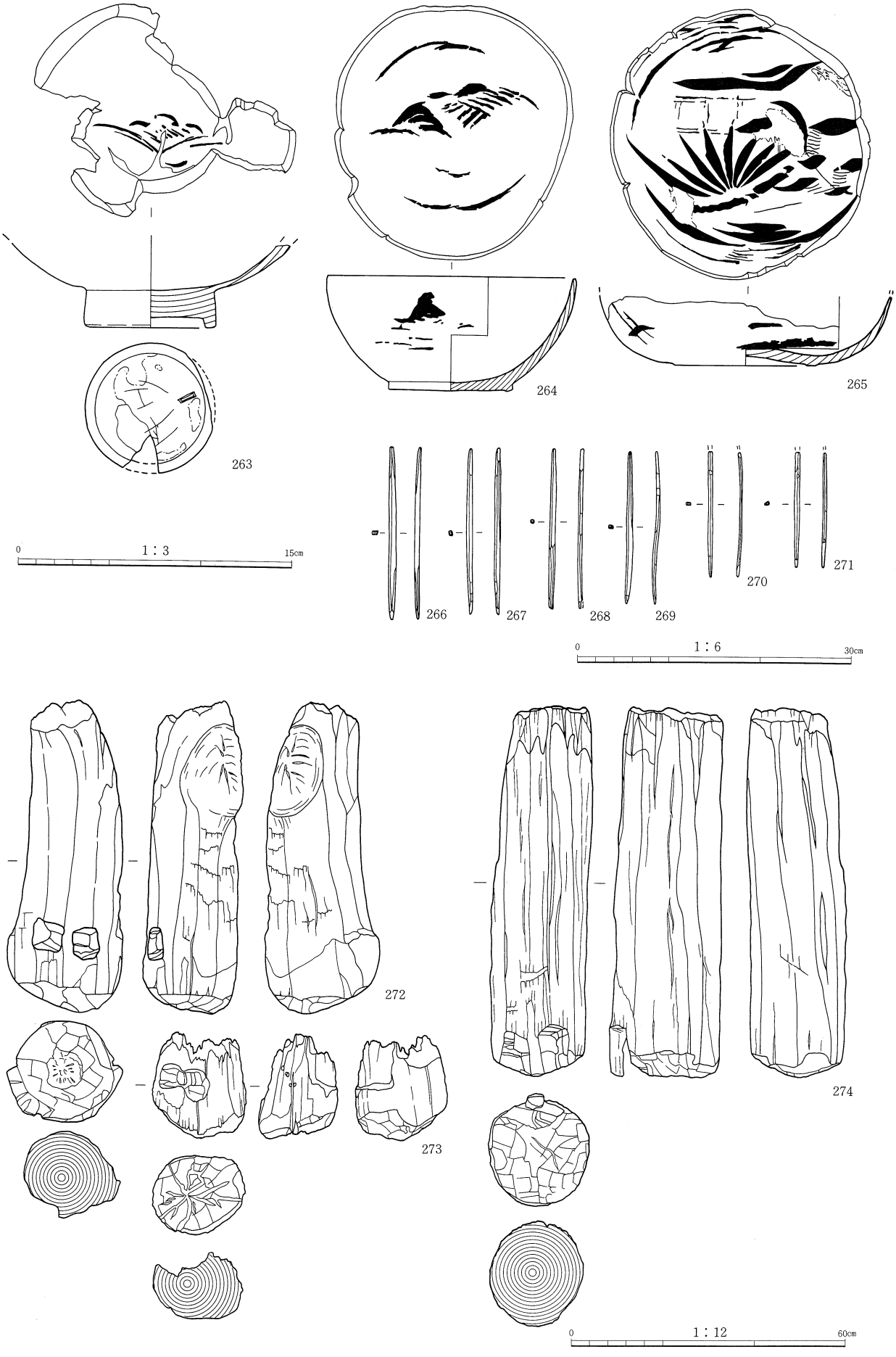
第109図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図18（1/3，223・226　1/6）



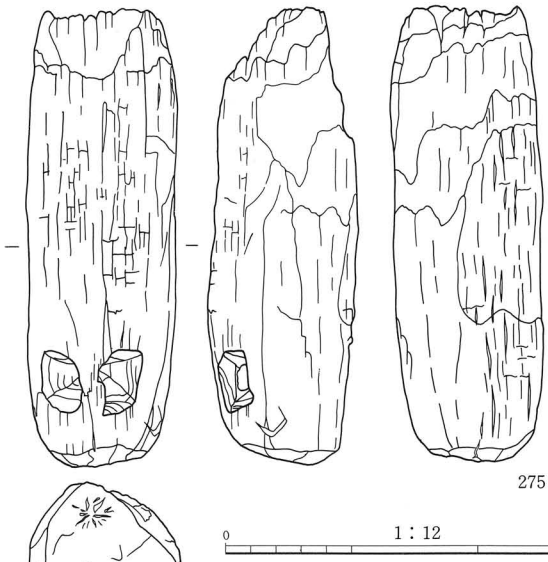
第110図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図19（1/3）

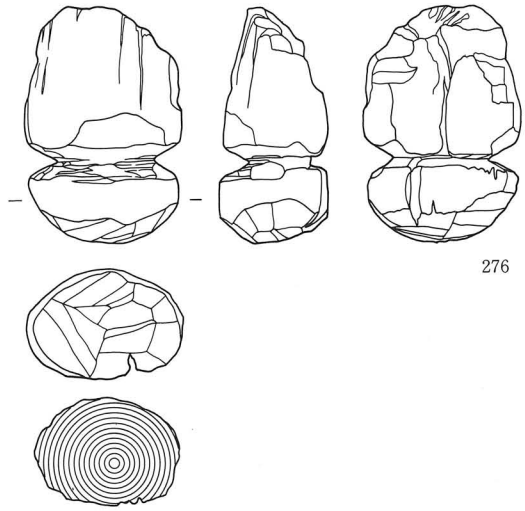


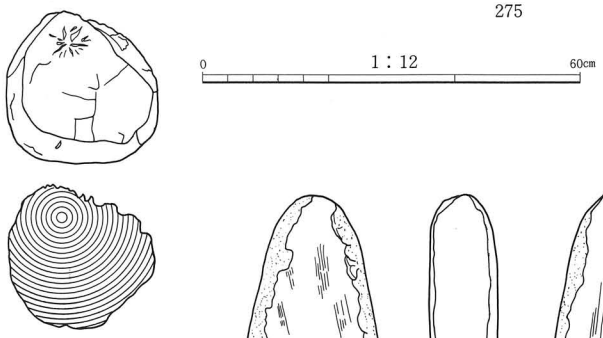
第111図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図20（255～259・261・262　1/6，260　1/3）

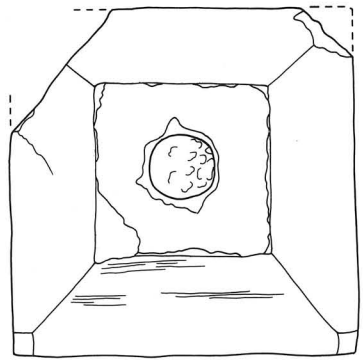


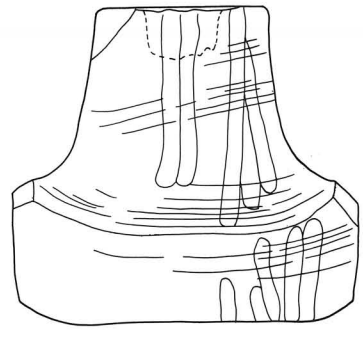
第112図　田尻遺跡 第一次調査　遺物実測図21（1/3，266～271　1/6，272～274　1/12）

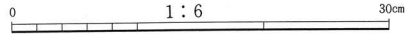


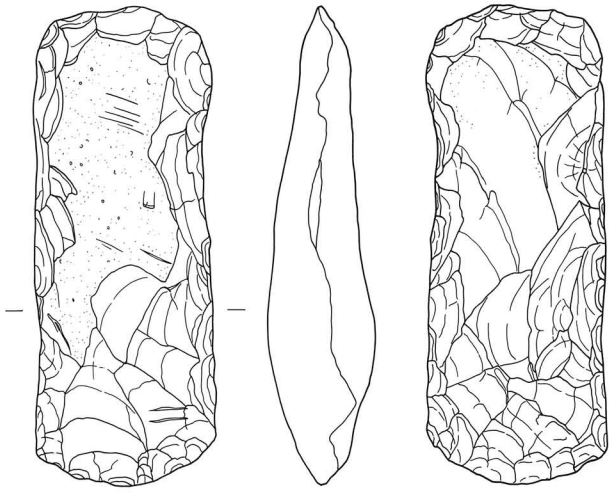


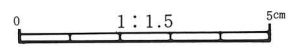












第113図　田尻遺跡 第一次調査 遺物実測図22（275　1/12，276・279　1/6，277・278　1/3，280　2/3）

3　遺跡の概要（第二次調査）

A　概　要

調査区は大井川と山田川の合流点から約２㎞南下した，大井川右岸の河岸段丘上に立地する。この西側には大井川の自然堤防がのびる。現況は昭和40年代に圃場整備された水田が広がっている。旧地形図から，この東側は俗に「仁王堂」「乙女田」と称されていたことが窺える。また調査区の北，福野町教育委員会調査区との境界に沿って東西に走る町道は，明治時代の絵図にはすでにこの地域の主要道として機能していたことが記されている。

確認された遺構は住居址，掘立柱建物，溝，土坑，井戸，方形周溝状遺構で，主体となる時期は12世紀後半から15世紀前半である。掘立柱建物は北東部に12棟，中央西部に６棟，南東部に３棟検出した。溝とともに大小の区画を形成するもの，区画溝を伴わないものがある。遺構の分布は密集部分と希薄部分が明瞭である。中央西ブロックの北側，南東ブロックの西側には遺構は検出されていない。

掘立柱建物は各ブロックで複雑に重複しているが，柱穴同士の切り合いはほとんどみられない。また遺物も出土しないため，時期決定は遺構の配置関係に重点をおいて行った。また北東部では，壁際に柱穴をもつ住居址を検出している。溝には南北，東西に流れるものがあり，区画溝と考えられるものがある。井戸は素掘りのものと，上部に石組み下部に曲物を積み上げたものがある。素掘りのものには，廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる節抜きの竹を埋納する井戸がある。土坑には楕円形のもの，方形のもの，不整形のものがあり，掘立柱建物の内部施設と考えられるものもある。このほか，一辺約３ｍの方形マウンド状の周囲に幅２ｍの溝を巡らせた方形周溝状遺構を検出した。

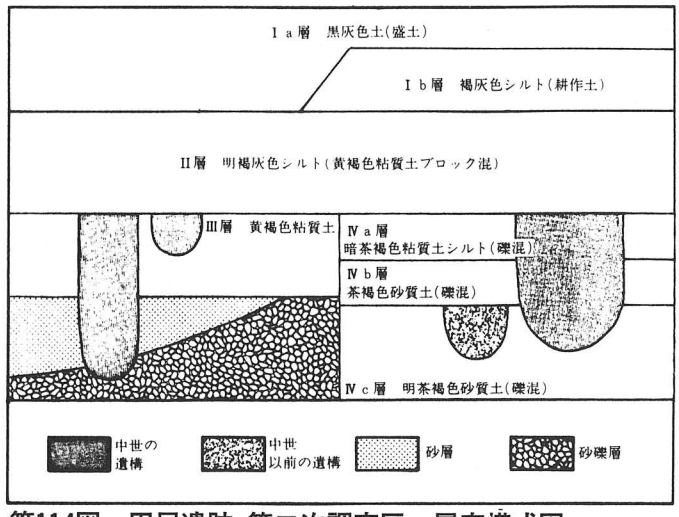
遺物は溝，井戸，土坑からが多く，建物の柱穴からはほとんど出土しない。土器陶磁器は大部分が古代から中世のものである。木製品には容器類や箸があり，特に後者はSK141から大量に出土する。金属製品は銭貨がほとんどで井戸などから出土する。

B　調査経過

調査区は路線内の調査のため幅約50ｍ，長さ約120ｍで南北にのびる。ボックス工事にかかるX275から北側1000㎡をＡ地区，南側4700㎡をＢ地区とした。平成３年４月25日，Ａ地区から調査を開始した。Ａ地区の北側，福野町教育委員会調査区の境となるの町道を重機で撤去，農繁期にかかるためこの北側に仮設道を設置した。農繁期が終了した５月中旬から西側に残していた農道と，仮設道を撤去した。調査は７月22日までの延べ43日間で終了した。Ｂ地区は平成３年５月13日から10月17日までの延べ84日間で終了した。耕作土の除去は重機，包含層は人力によって掘削を行った。航空測量はＡ地区と，Ｂ地区は面積的な関係で３回に分けて，計４回行った。

C　土　層

標高は南端で61.0ｍ，北端で60.6ｍを測る。南から北へ，東から西へ緩やかに傾斜する。基本層序はⅠa層：黒灰色土（盛土），Ⅰb層：褐灰色シルト（耕作土），Ⅱ層：



第114図　田尻遺跡 第二次調査区　層序模式図

黄褐色粘質土のブロックが混入する明褐色粘質土シルト（遺物包含層）で，深さは北から南に向かって浅くなる。Ⅲ層：黄褐色粘質土で遺構検出面となる。X251Y42から幅約20ｍで北西方向にⅣa層：礫混じりの暗茶褐色粘土質シルトを確認した。この下層にⅣb層：礫混じりの茶褐色砂質土，Ⅳc層：礫混じり明茶褐色砂質土がみられ，Ⅳa層とⅣc層でも遺構を検出した。Ⅳa層で検出した遺構はⅢ層のそれと同時期（12世紀後半～15世紀前半）である。Ⅳc層はⅣa層よりも古いが，遺構から遺物が出土していないため，明確な時期は不明である。Ⅳa層からは縄文土器，須恵器，中世土師器，打製石斧が出土する。Ⅳb層以下は遺物が出土しなかったため自然堆積層と判断し，Ⅳc層までを確認した。この部分は谷状地形と呼称し，挿図中では下端を一点破線で表現する。

4　遺構と遺物

A　遺　構

(1)　建物

長方形の土坑の周囲に柱穴を持つ住居址と，掘立柱建物25棟を検出した。掘立柱建物は大きく３つのブロックに集中する。柱穴からは遺物がほとんど出土しないため，遺構の切り合い，区画溝と建物等の位置的なセット関係を時期決定の判断材料とした。柱掘形の覆土は，黄褐色粘質土のブロックが混入する黒褐色粘質土で，黒褐色粘質土の柱痕跡が残るものもある。溝を伴って大小の区画を形成するもの，溝に区画されないものがある。北東部分は12棟検出した。SD34に伴って大区画を形成するもの，SD87にともなって小区画を形成するもの，これらに該当しないものが存在する。中央西部分では６棟が重複する。新旧関係は不明であるが，SD178を伴って大区画を形成すると考えられる。南東部分では３棟検出できた。SD185に伴って大区画を形成するもの，SD183にともなって小区画を形成するものがある。大区画の時期は12世紀後半から13世紀前半，小区画の時期は13世紀後半から14世紀と考えたい。また溝に区画されない掘立柱建物も検出しており，これらは切り合い関係などから15世紀前半に比定したい。

１号住居址（SB01，第115図，図版110）

X265～268Y39～42で検出した。長辺662㎝，短辺503㎝，深さ81㎝の長方形の土坑の周囲や壁下に柱穴をもつ。SK141・SB12・SB14・SB15に切り合い関係で負け，SK137には勝つ。覆土は上層が黄灰色粘質土が混入する黒灰色粘質土である。下層は上層土に青灰色粘質土と拳大の礫が混入するものである。貼床と考えられる覆土は確認されなかったが，西寄りの中央部下層には藁のような植物繊維がみられ，土座敷痕跡と考えられる。またそれとほぼ同レベルの東側には，板状木製品が多数出土した。土坑中央で検出した柱穴の底面は植物繊維層より上層にある。このほか，南北壁の立ち上がり部分，土坑内や外周にも柱穴を検出した。前者は柱の上端が土坑の中央に集中するよう斜めに掘られている。柱穴の平面形は楕円形で，長軸20～50㎝，短軸19～38㎝，深さ５～40㎝を測り，柱間は不規則である。また東辺部分には柱穴が希薄であるため，ここに出入口を設けていたと考えられる。遺物は縄文土器，土師器，須恵器，中世土師器，珠洲，中国製白磁，中国製青磁，漆器，木片や箸，南壁付近から樹種の異なる２本の柱が出土した。また花粉分析の結果，モモ・オニグルミ・トチノキが確認されている。SB10がこの部分まで広がり，これに付属する竪穴状土坑の可能も考えられたが，周囲に柱穴を配し，柱穴が斜めに掘られることから単独の住居址と考えた。遺物から13世紀の遺構と考えられ，掘立柱建物との共存が推測される。

2号掘立柱建物（SB02，第116・117図，図版111）

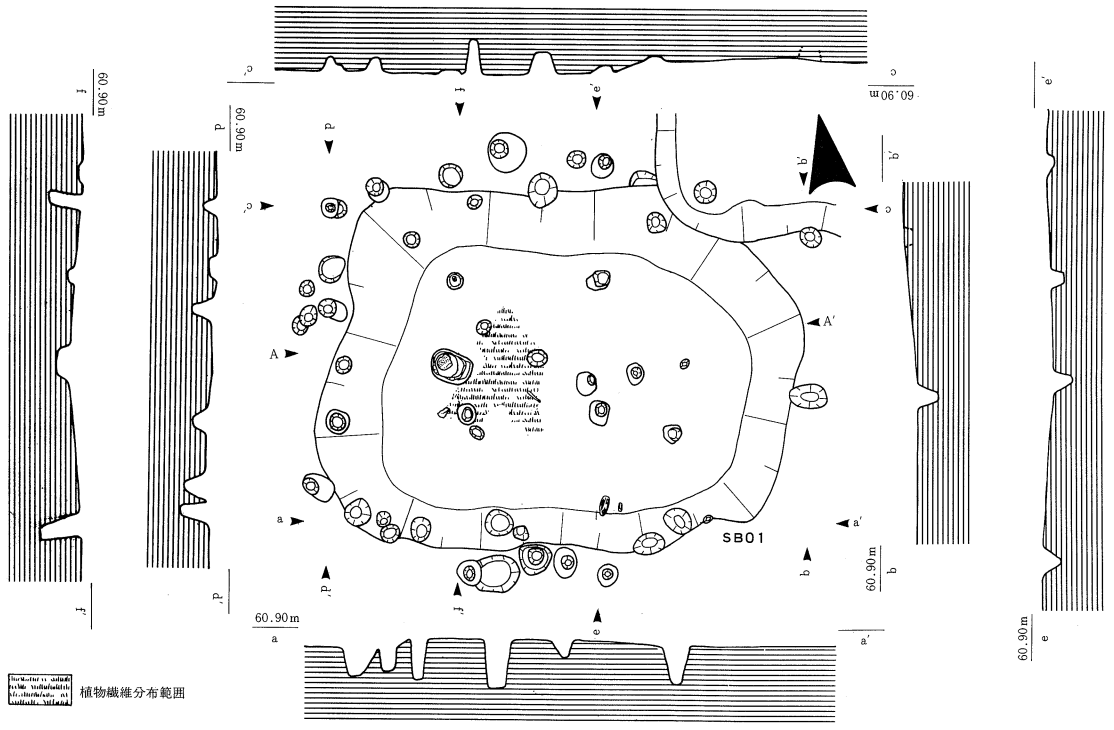
X279～283Y30～32で検出した2間×2間の総柱建物である。SB03と重複し，SD25・SD43・SK56より新しい。ハ三柱穴を確認できなかったが，SD34より新しいと推測される。桁行5.4m×梁行4.45m，平面積24m²である。主軸は真北方向である。柱掘形は長軸24～38cm，短軸24～34cmである。深さは19～47cmである。イ一二，ロ一～三，ハ二柱穴で直径20cm程度の柱痕跡を確認した。SB03との新旧関係は不明であるが，規模が類似するため建て替えが行われたものと考えられる。遺物は出土していないが，位置的には溝に区画されないため15世紀前半と考えられる。

3号掘立柱建物（SB03，第116・117図，図版111）

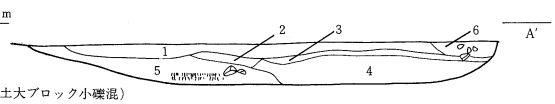
2間×2間の総柱建物である。SB02と重複し，大区画を形成するSD34と切り合い関係で勝つ。SB02と桁行の柱間をほぼ同じにする。桁行5.44m×梁行4.75m，平面積は26m²である。主軸は真北方向である。柱掘形は長軸34～50cm，短軸30～36cmである。深さは平均53cmである。イ三柱穴を除いてすべてに柱痕跡が確認された。遺物はハ二柱穴から須恵器が出土した。SB02とは柱穴同士の切り合いがないため新旧関係は不明であるが，SB02との建て替えが考えられる。遺構の時期は，15世紀前半と考えられる。

4号掘立柱建物（SB04，第116・118図，図版111）

調査区最北で検出された2間×1間の側柱建物である。桁行4.6m×梁行1.62m，平面積7m²である。主軸はN-80°-Wである。柱掘形は長軸20～44cm，短軸20～24cmの円形で，深さは10～23cmである。



SB01
1　黒灰色土（黄灰色粘質土混・鉄分多含）
2　黒灰色粘質土（鉄分多含）
3　黒灰色粘質土（黄灰色粘質土ブロック混）
4　黒灰色粘質土（青灰色粘質土小ブロック混）
5　黒灰色粘質土（青灰色粘質土大ブロックと黄灰色粘質土大ブロック小礫混）
6　灰黒褐色粘質土（黒褐色粘質土と黄褐色粘質土ブロック混）



第115図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
SB01

ロ三柱穴を除く柱穴に柱痕跡が確認された。遺物はイ三柱穴から中世土師器が出土した。

5号掘立柱建物（SB05，第119・120図，図版111）

X277～281Y38～42で検出した4間×2間の総柱建物である。SB06と重複関係にあり，SD87・SX49と切り合い関係で勝つ。桁行8.84m×梁行5.12m，平面積45㎡である。主軸はN-74°-Wである。柱掘形は長軸24～54㎝，短軸22～42㎝，深さは平均38㎝である。ロ一柱穴を除いて柱痕跡を確認した。イ三柱穴の底面には石が置かれていた。遺物はイ三五，ロ二四柱穴から中世土師器，イ二柱穴から中世土師器と珠洲が出土した。この建物の内部施設としてSK21・SK22が考えられる。遺構の時期は切り合い関係から15世紀前半と考えられる。

6号掘立柱建物（SB06，第119・120図，図版112）

4間×3間の総柱建物で，北側ではSB05と南側ではSB07と重複する。桁行8.36m×梁行5.91mである。四・五列の柱間が1.75mと他よりも短い。平面積は49㎡である。主軸方向N-90°-Wである。柱掘形は長軸28～118㎝，短軸22～66㎝，深さは平均29㎝である。遺物はイ二四・ハ二・ニ一四柱穴から中世土師器が出土した。

7号掘立柱建物（SB07，第119・121図，図版112）

3間×3間の総柱建物で，南側ではSB11と北側ではSB06と重複するある。SB06・SB11と重複し，SK23とは切り合い関係で負ける。桁行7.56m×梁行6.88m，平面積52㎡である。桁行柱間のうち，二・三列の柱間は2.35mと他より狭くなっている。柱掘形の長軸は32～68㎝，短軸は24～48㎝，深さは平均27㎝である。主軸方向はN-6°-Eである。遺物はイ四柱穴から珠洲，ロ一柱穴から中世土師器，ハ二柱穴から中世土師器，珠洲が出土した。SD87の西辺とSB08に平行することから，これらの遺構と同時期（13世紀後半から14世紀）に存在した可能性が考えられる。

8号掘立柱建物（SB08，第122・123図，図版113）

X272～276Y33～37で検出した3間×3間の総柱建物である。SB10と重複し，SD55と切り合い関係で勝つ。桁行6.4m×梁行6.23m，平面積は40㎡である。主軸方向はN-4°-Eである。桁行柱間は2.1mと等間隔である。イ三柱穴は確認できなかった。柱掘形は長軸28～40㎝，短軸24～36㎝，深さは平均18㎝である。イ四柱穴は底面に石を検出した。ハ四柱穴から珠洲が出土している。桁行方向に平行する長方形の土坑SK62は，この建物の内部施設の可能性が考えられる。SB08はSD87・SB07と主軸方向がほぼ同じことから同時期（13世紀後半から14世紀）に存在したと考えられる。

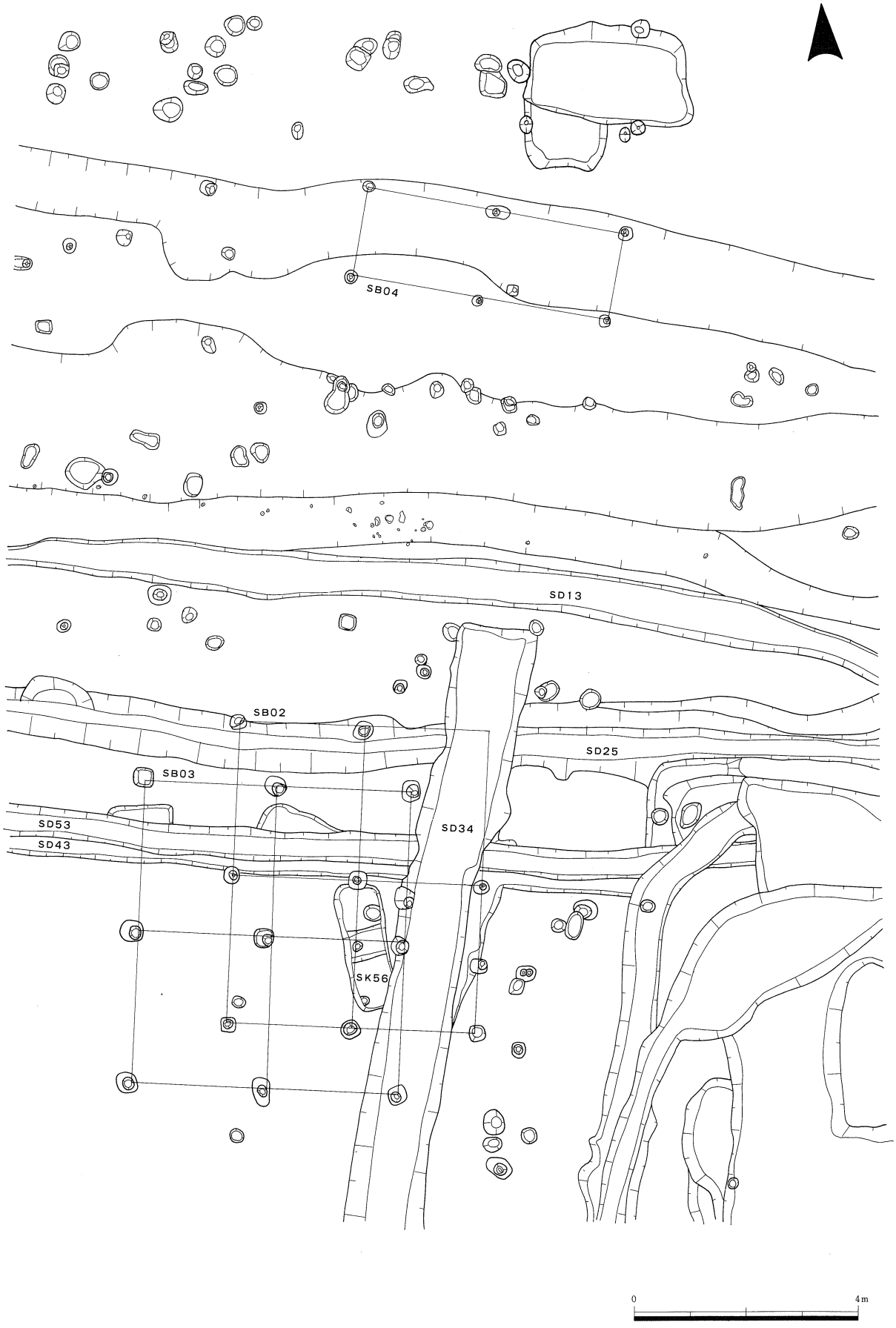
9号掘立柱建物（SB09，第122・123図，図版113）

X271～276Y30～33で検出した2間×2間の総柱建物である。SB10と重複し，大小の区画を形成するSD34・SD87に切り合い関係で勝つ。桁行5.1m×梁行4.9m，平面積は25㎡である。柱掘形は長軸32～58㎝，短軸32～48㎝，深さは平均23㎝である。主軸方向はN-10°-Eの南北棟である。遺物は出土していないが，切り合い関係から15世紀前半の遺構と考えられる。

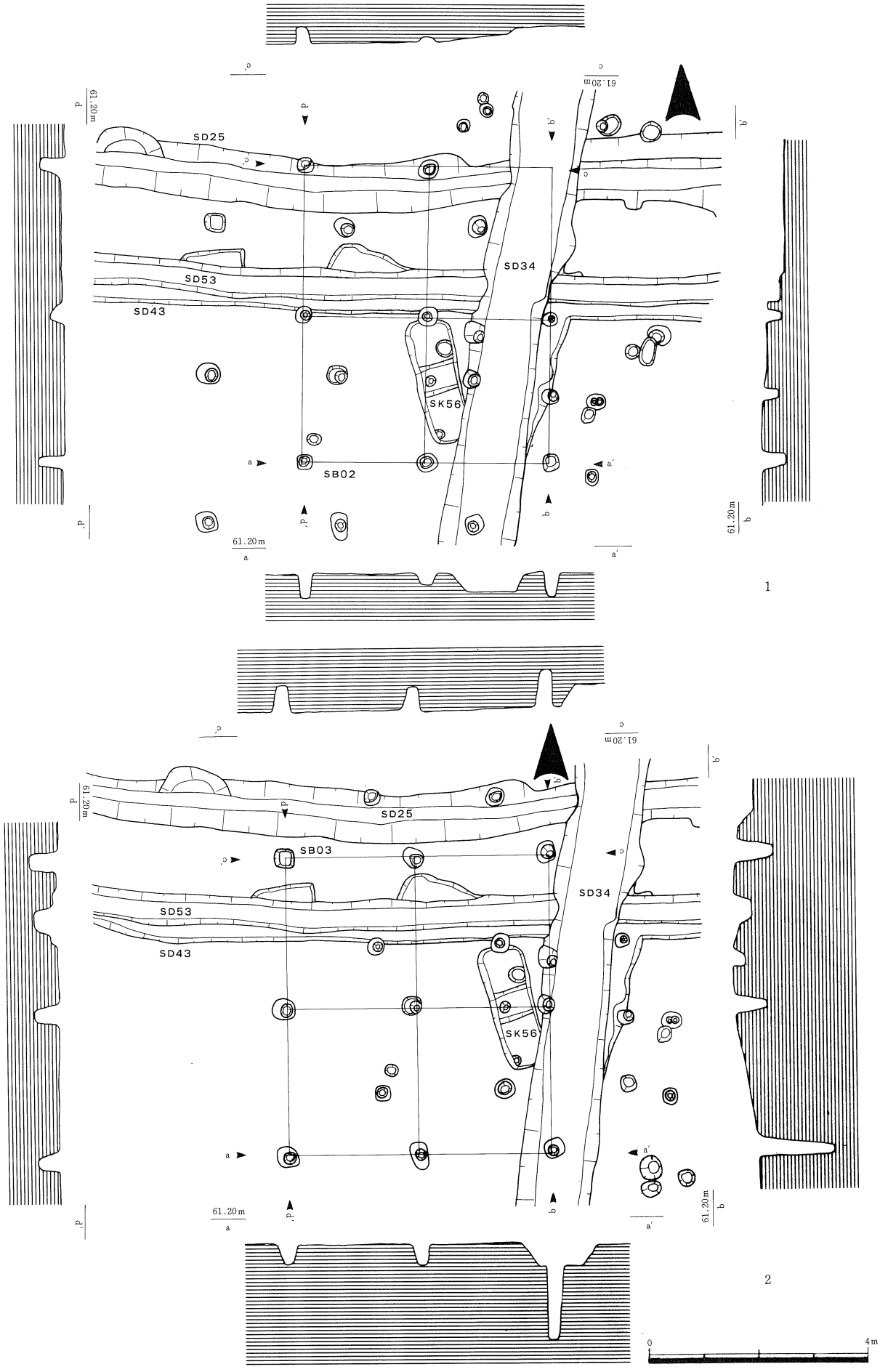
10号掘立柱建物（SB10，第122・124図，図版113）

SB08・SB09と重複する6間×4間の総柱建物である。ニ四・ホ四・ロ一～三柱穴は確認できなかった。切り合い関係でSD55に勝ち，SD87に負ける。桁行15.25m×梁行9.3m，平面積142㎡である。柱掘形は長軸33～73㎝，短軸26～61㎝，深さ12～42㎝である。イ六・ロ七・ハ五七柱穴から中世土師器が出土している。主軸方向はN-10°-Eで，SD34の長辺とほぼ平行することから，これらが同時期（12世紀後半から13世紀前半）に存在したものと考えられる。

11号掘立柱建物（SB11，第125・126図）

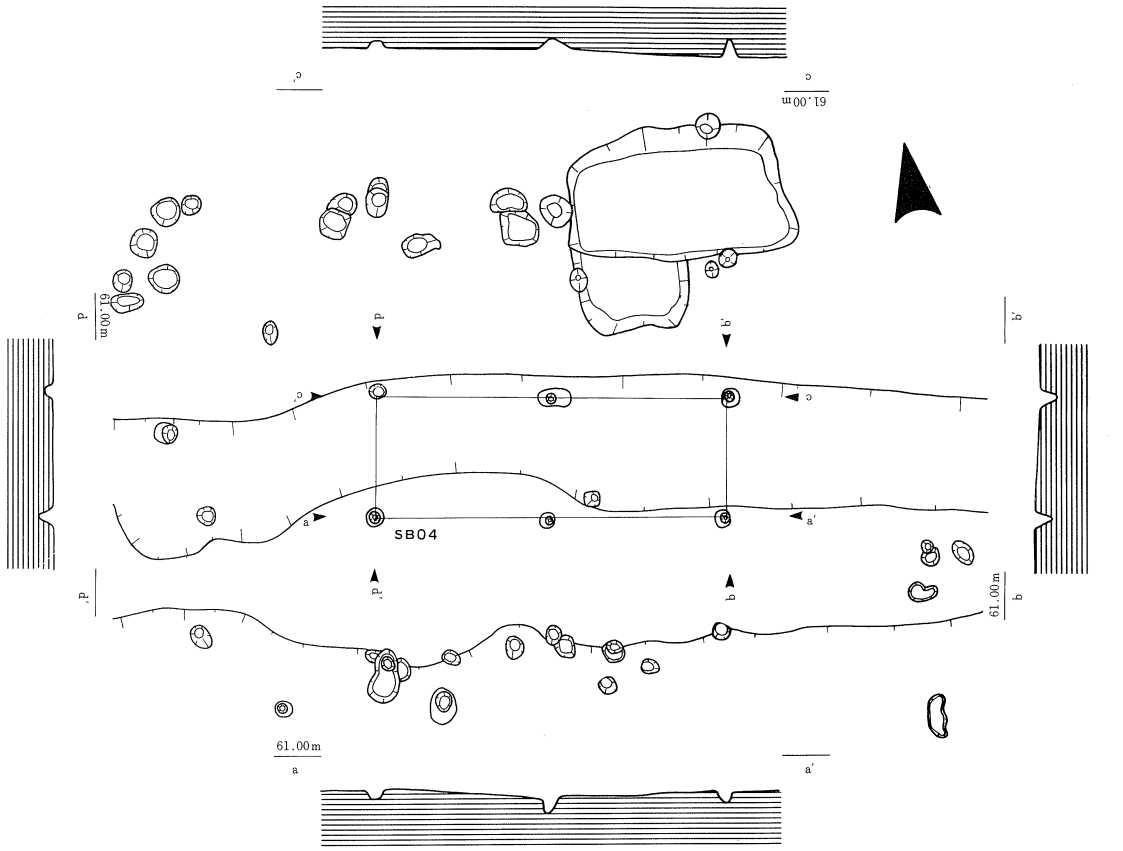


第116図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
ＳＢ０２～ＳＢ０４



第117図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図

1.SB02　2.SB03



第118図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
SB04

X268～274Y36～43で検出した。調査区東壁に切られるが，東にのびると考えられる。5間×4間の総柱建物である。SB07と重複し，SD87・SE123に切り合い関係で勝つ。桁行12.06m×梁行10.57m，平面積127㎡である。柱掘形は長軸28～84cm，短軸22～55cm，深さは平均21cmである。主軸方向はN-80°-Wである。イ四柱穴から須恵器・土師器，ロ五柱穴から中世土師器が出土している。

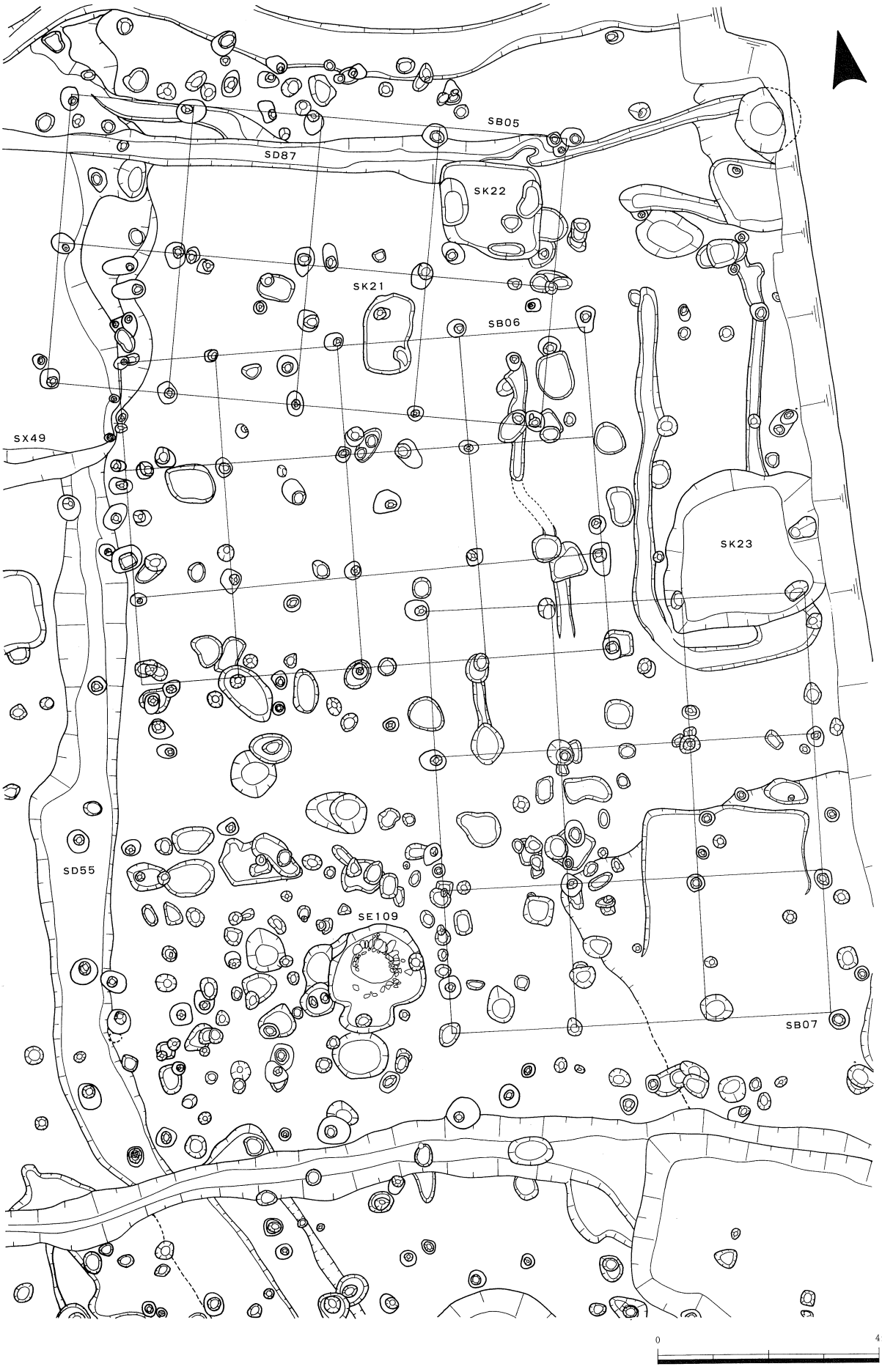
12号掘立柱建物（SB12，第125・127図，図版114）

X267～271Y36～40で検出した3間×2間の総柱建物である。SB11・SB13と重複し，ロ一・イ一柱穴はそれぞれSE123・SB01を切る。桁行6.38m×梁行5.82m，平面積37㎡である。主軸方向はN-74°-Wである。柱掘形は長軸23～39cm，短軸23～34cmで楕円形のものと方形のものがある。深さは10～21cmである。主軸方向はN-74°-Wである。柱間は平均すると桁行が2.13m，梁行が2.91mである。ロ二～四・ハ三四柱穴から中世土師器が出土している。

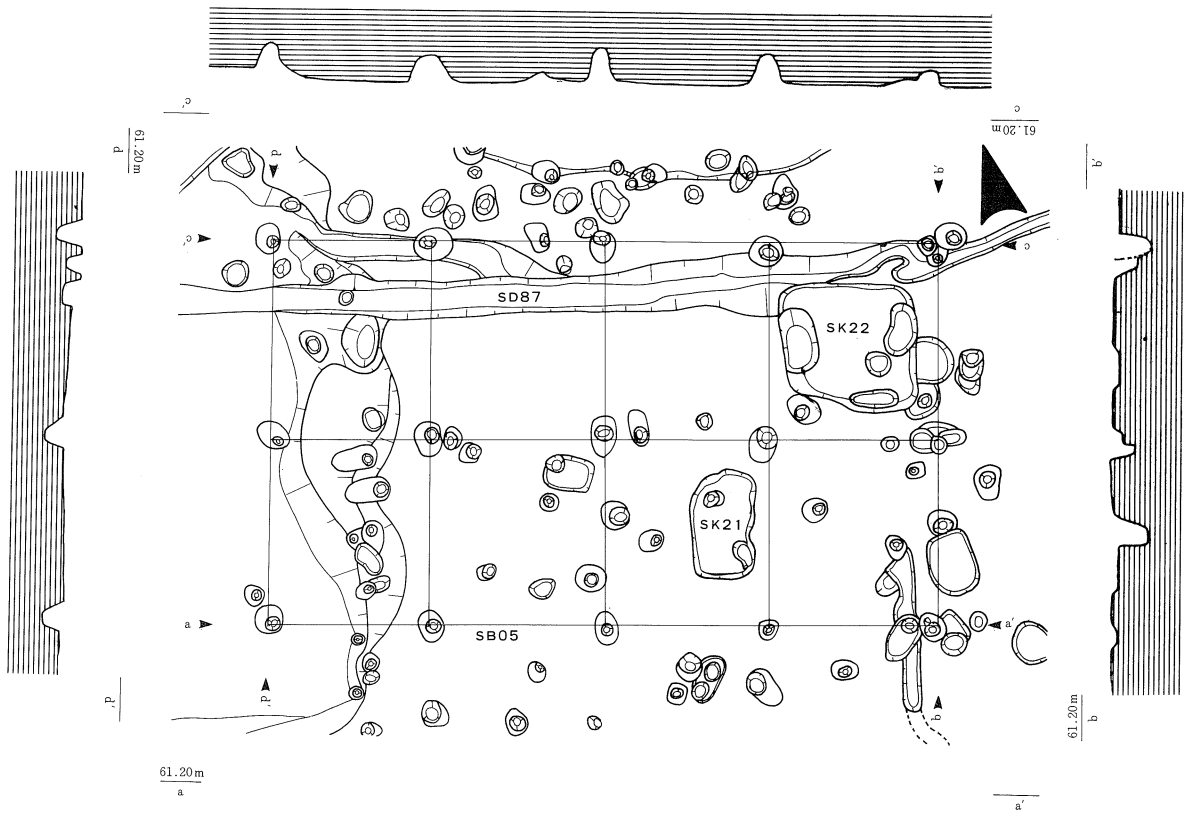
13号掘立柱建物（SB13，第125・127図，図版114）

SB11・SB12と重複する3間×2間の総柱建物である。ハ一柱穴は確認できなかった。桁行6.15m×梁行4.15m，平面積26㎡である。柱掘形は長軸15～46cm，短軸14～38cm，深さは平均15cmである。柱穴の平面形は楕円形である。主軸方向はN-71°-Wである。ハ四柱穴から中世土師器が出土している。ロ二柱穴はSB11のイ五柱穴に切られる。遺構の時期は15世紀前半と考えられる。

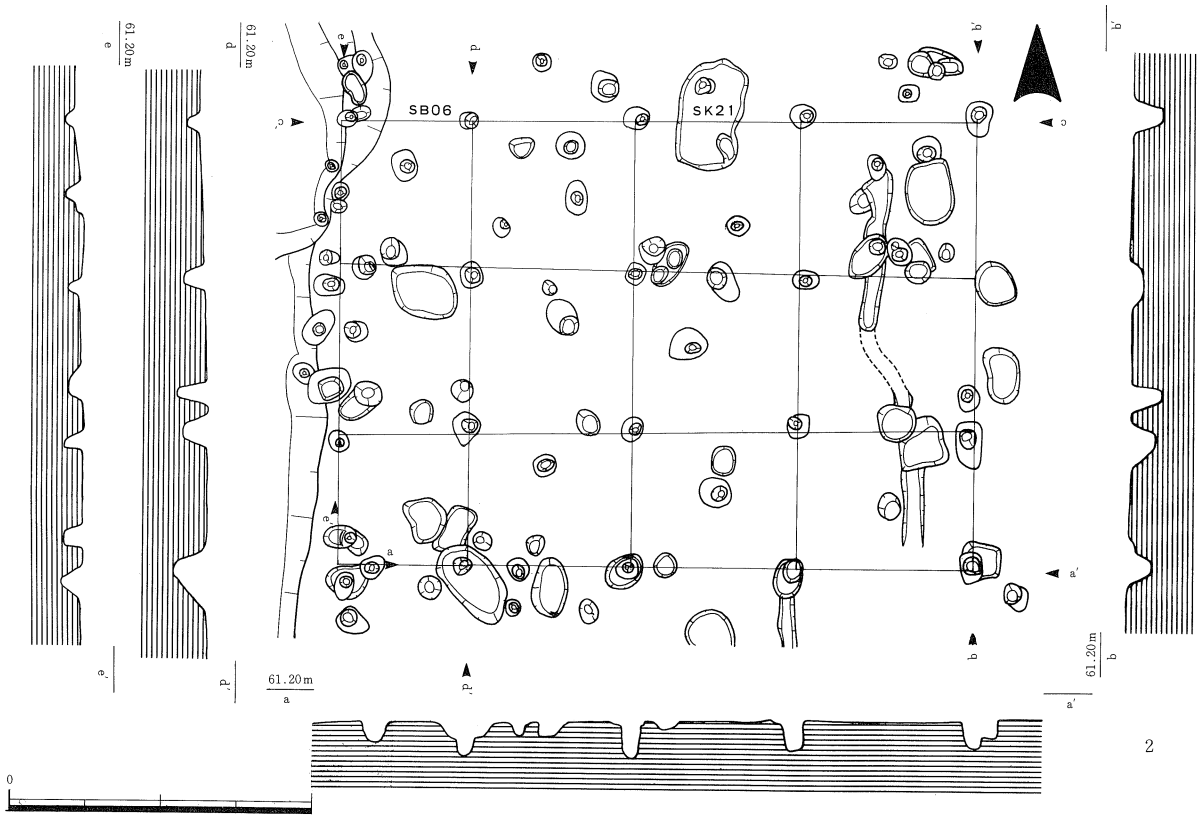
14号掘立柱建物（SB14，第125・128図，図版114）



第119図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
SB05～SB07



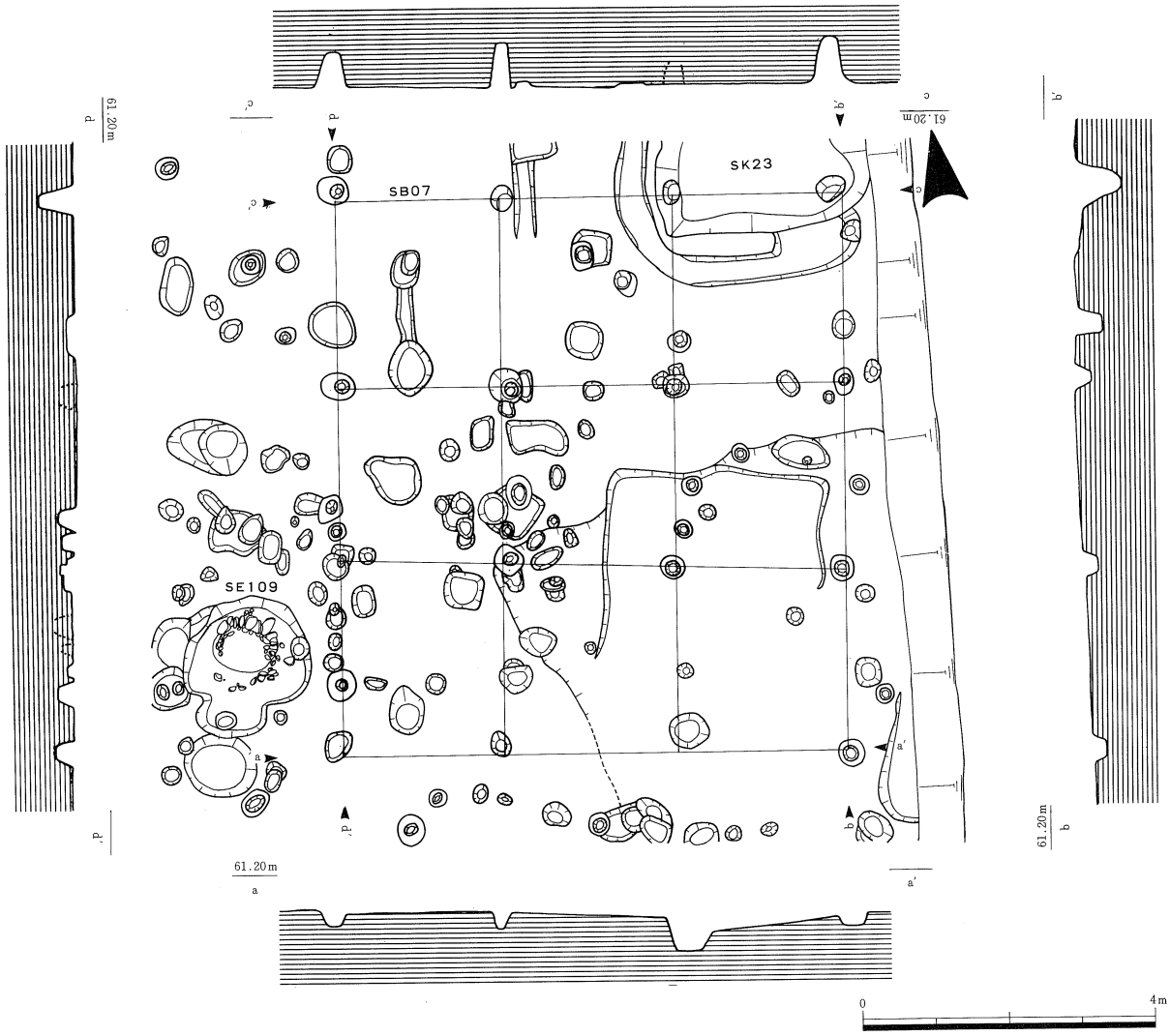
1



2

第120図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図

1.SB05　2.SB06



第121図　田尻遺跡(第二次調査)遺構実測図

SB07

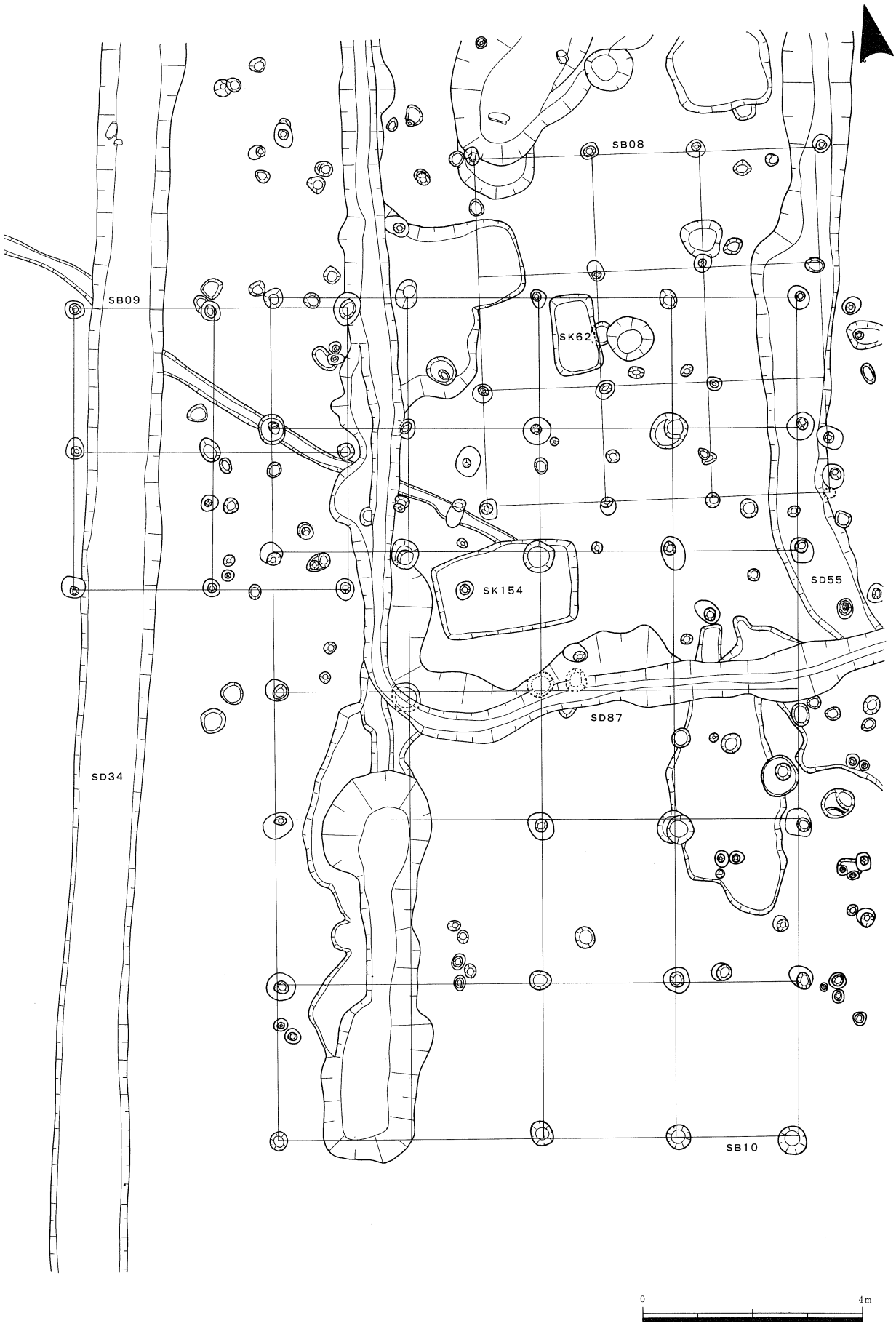
X262～266Y40～42で検出し，SB15・SB16と重複する3間×3間の総柱建物である。SB01・SK137・SK167とは切り合い関係で勝つ。桁行7.1m×梁行5.75m，平面積41㎡である。柱掘形は長軸22～37㎝，短軸21～33㎝，深さ平均22㎝で，平面は円形あるいは楕円形である。桁行は二三柱間が，梁行はロハ柱間が長くなっている。主軸方向はN-12°-Eである。ロ一・ハ三・ニ四から中世土師器が出土した。13世紀後半から14世紀である。

15号掘立柱建物（SB15，第125・128図，図版114）

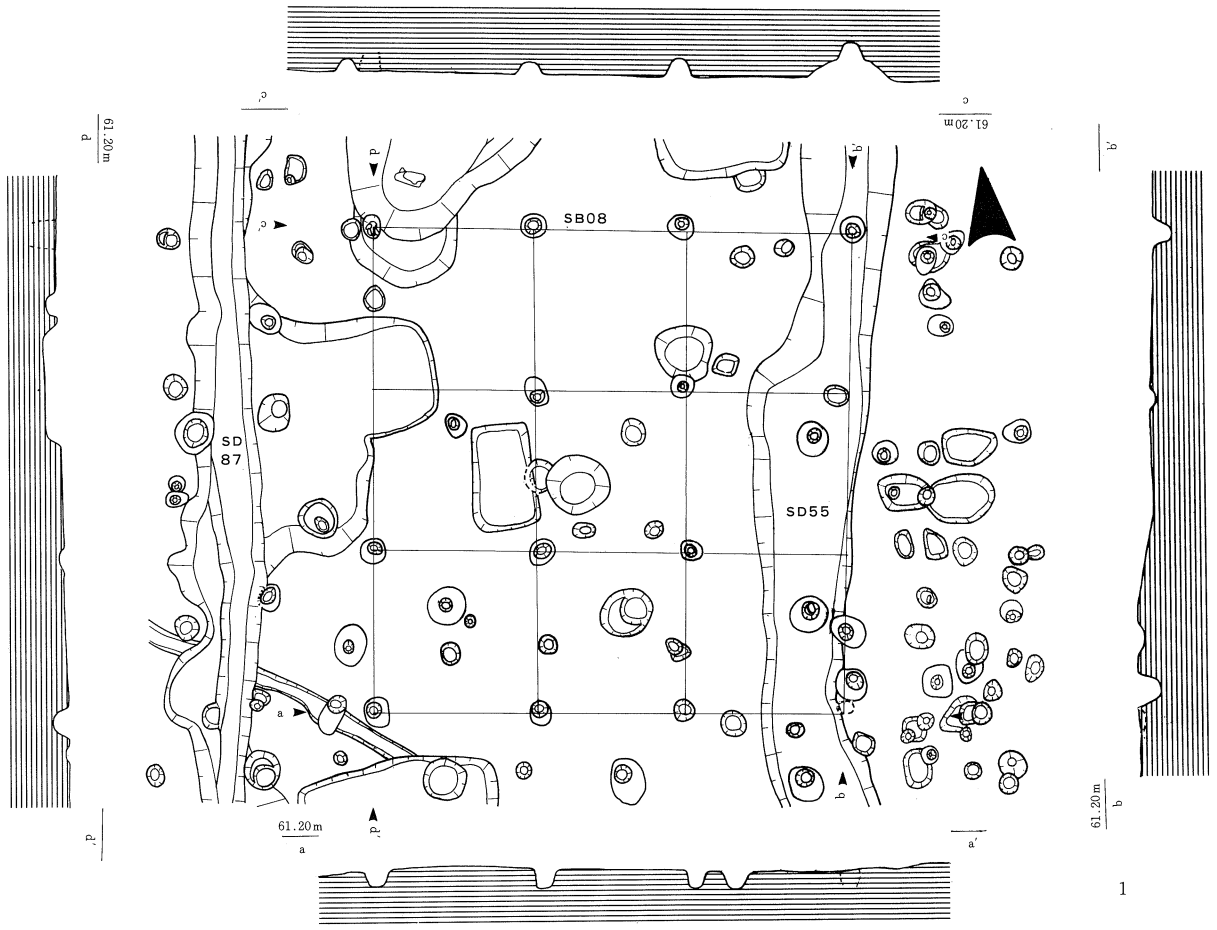
SB14・SB16と重複する2間×2間の総柱建物である。SB01・SK137・SK167とは切り合い関係で勝っている。桁行4.19m×梁行4.14m，平面積17㎡である。柱掘形は長軸19～50㎝，短軸18～38㎝，深さ平均23㎝の楕円形である。ロ三柱穴は確認できなかった。イ二・ロ二・ハ一二柱穴は柱痕跡を確認した。主軸方向はN-77°-Wである。遺物は出土していない。

16号掘立柱建物（SB16，第125・129図）

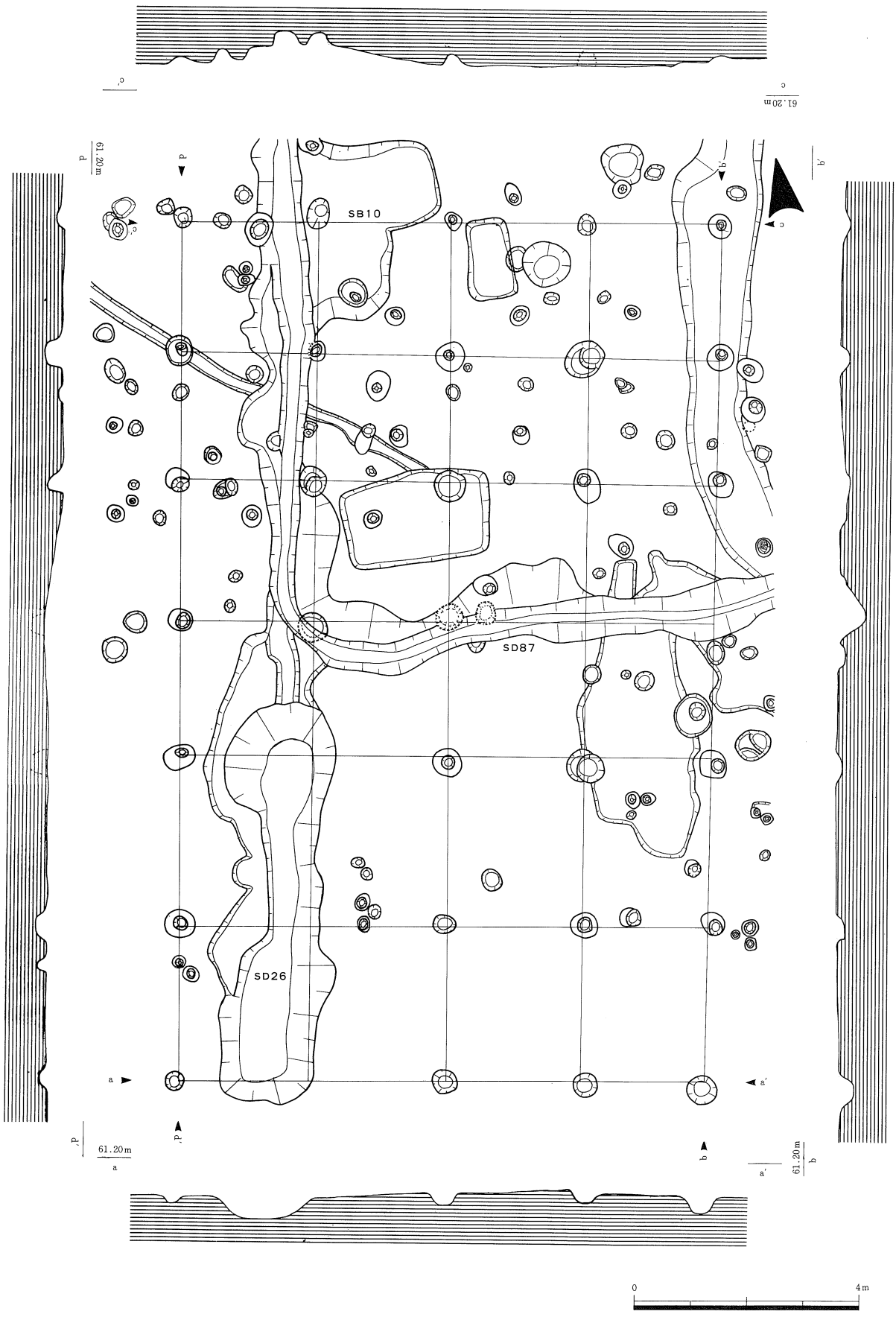
SB14・SB15と重複する4間×3間の総柱建物である。ハ二柱穴は，SK167に切られる。桁行9.46m×梁行7.62m，平面積72㎡である。柱掘形は長軸20～60㎝，短軸20～52㎝，深さは平均23㎝である。イ一・ニ一～三柱穴に柱痕跡を確認した。主軸方向はN-83°-Wである。ニ一柱穴から縄文土器，土師器が出土している。



第122図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
ＳＢ０８～ＳＢ１０

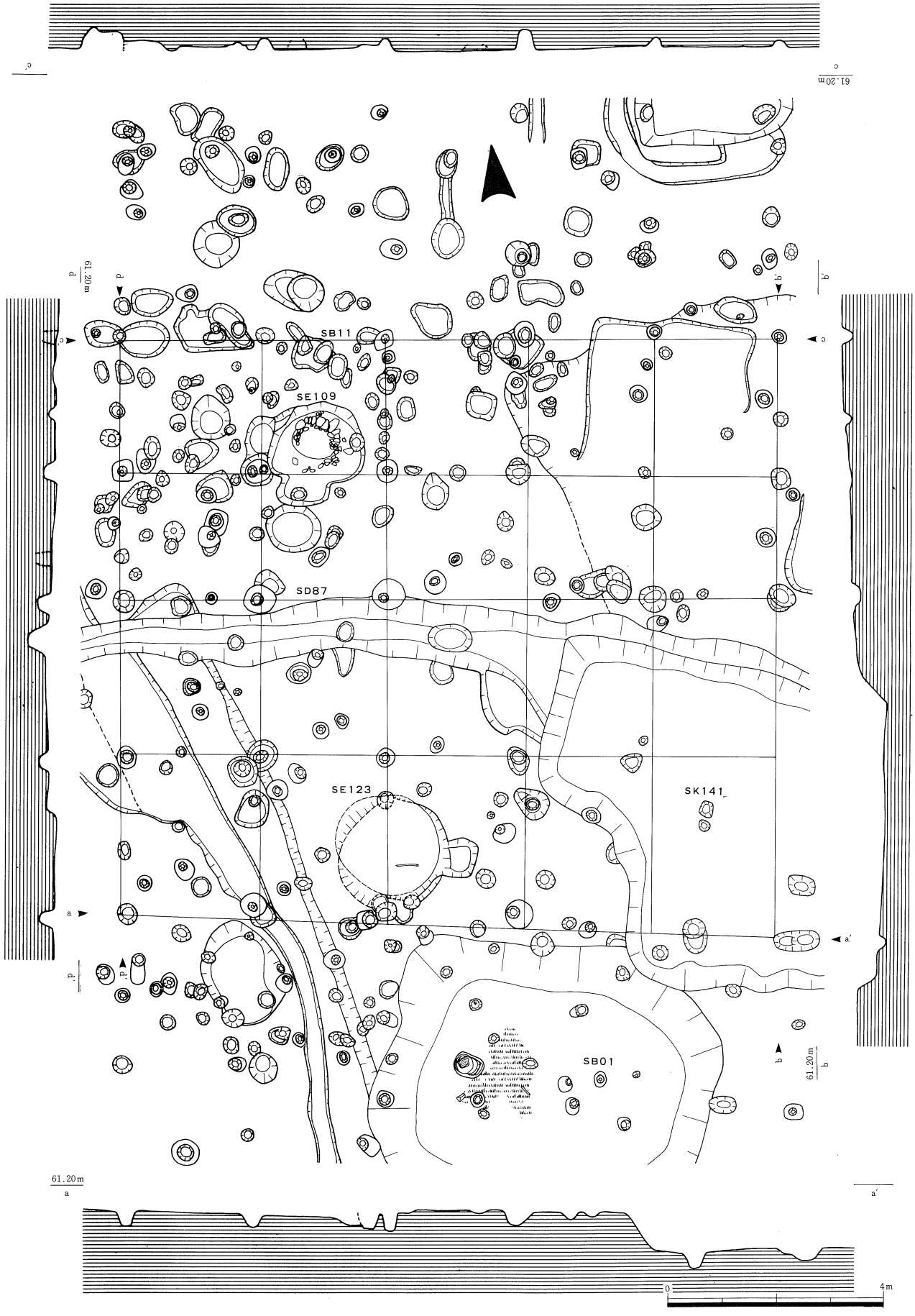


第123図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
1.SB08　2.SB09

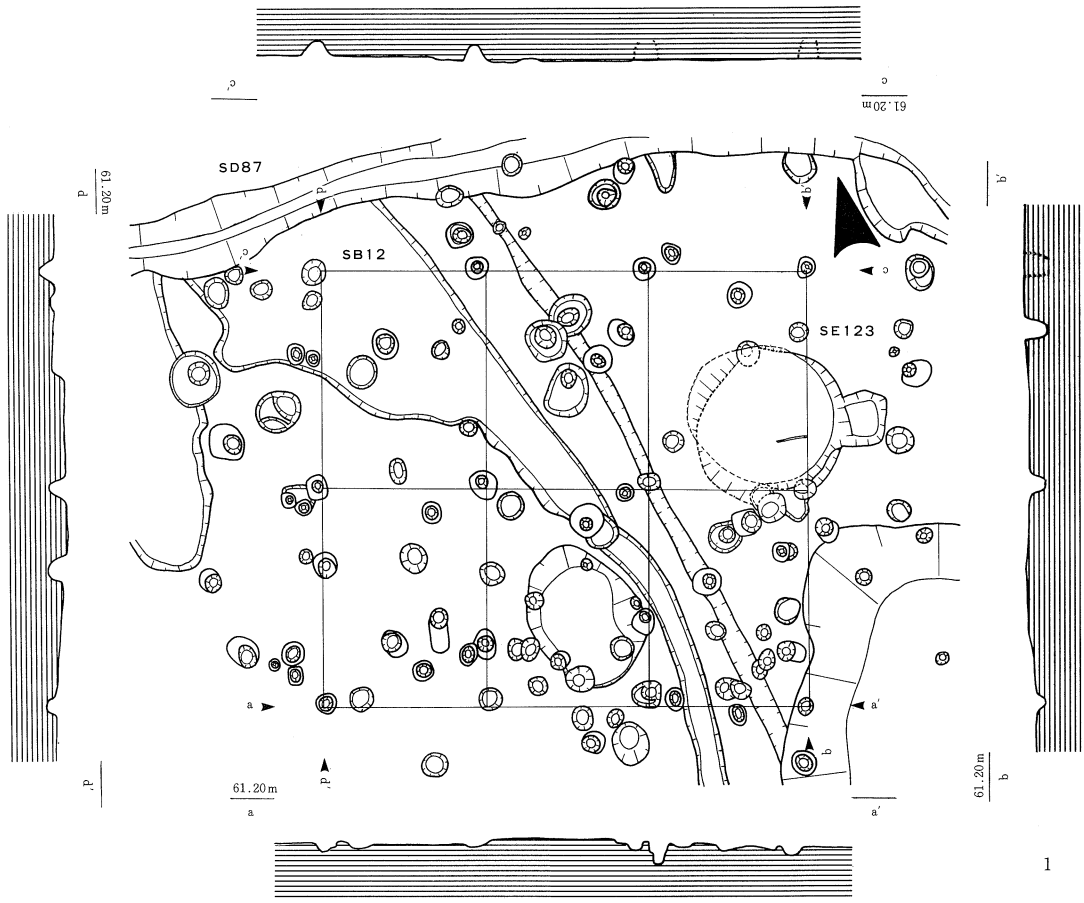


第124図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
SB10

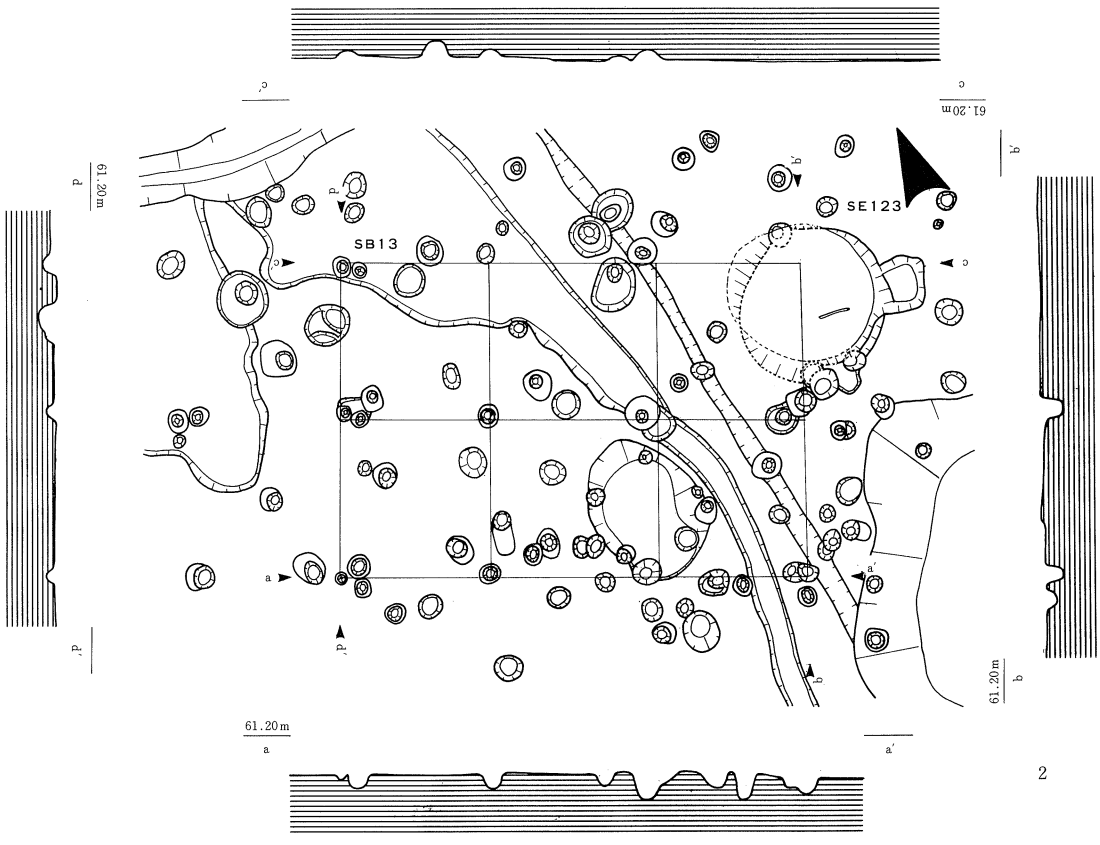
第125図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
SB11～SB16



第126図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
SB11



1

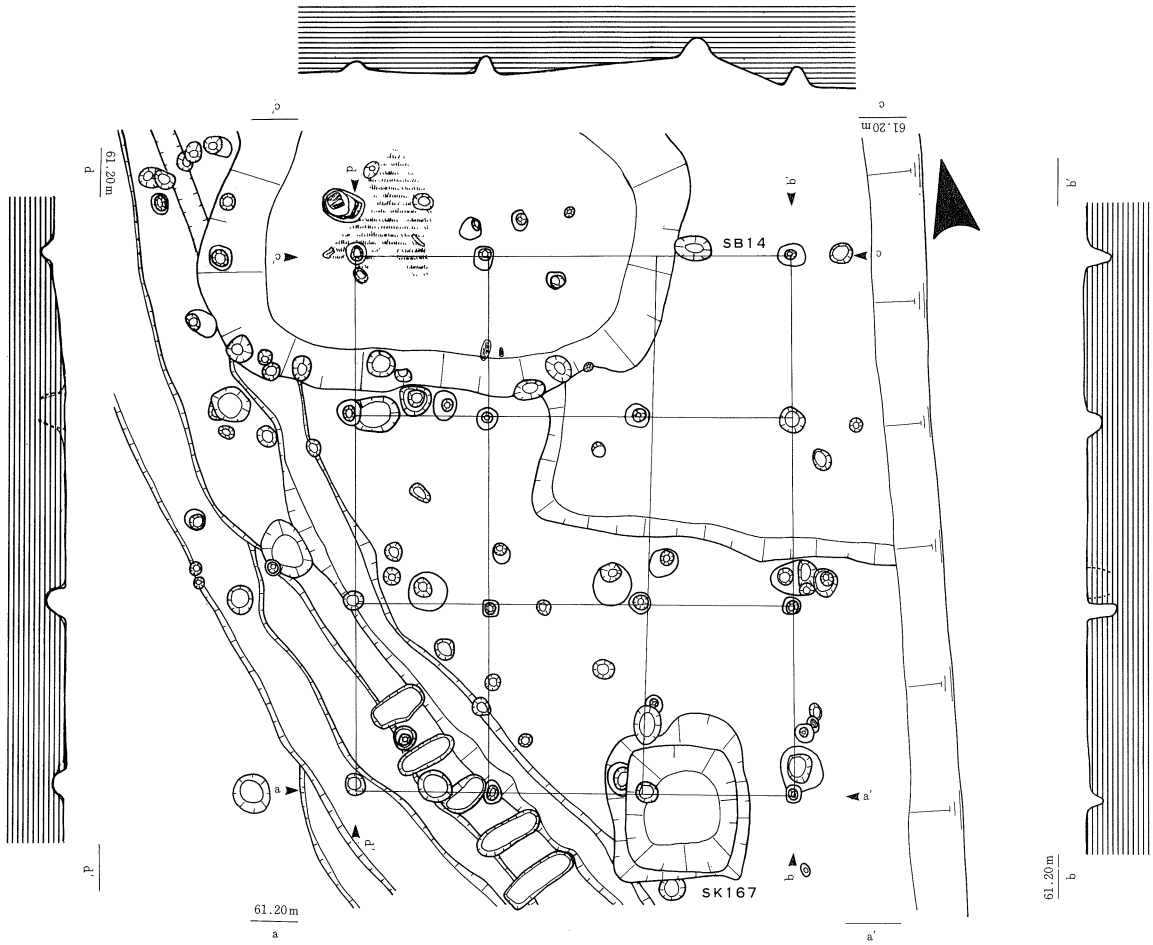


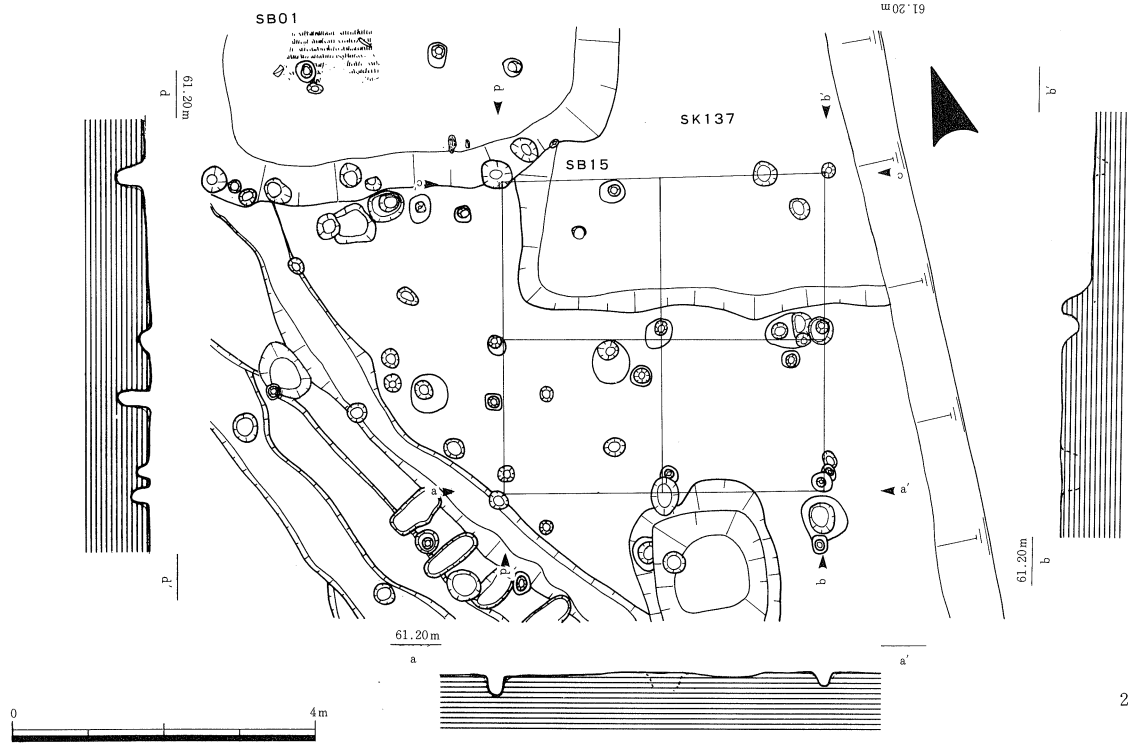
2

0 4m

第127図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図

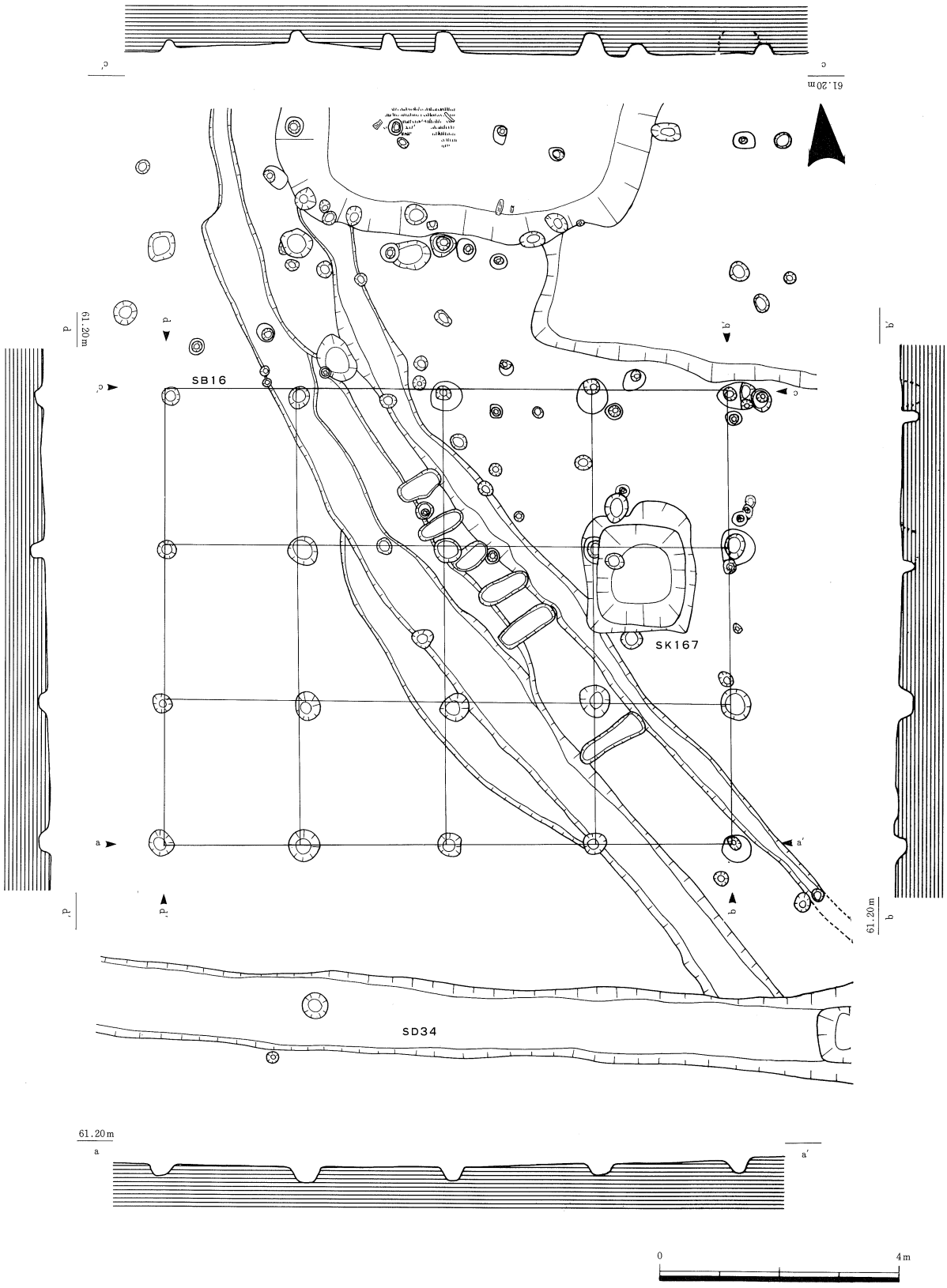
1.SB12　2.SB13





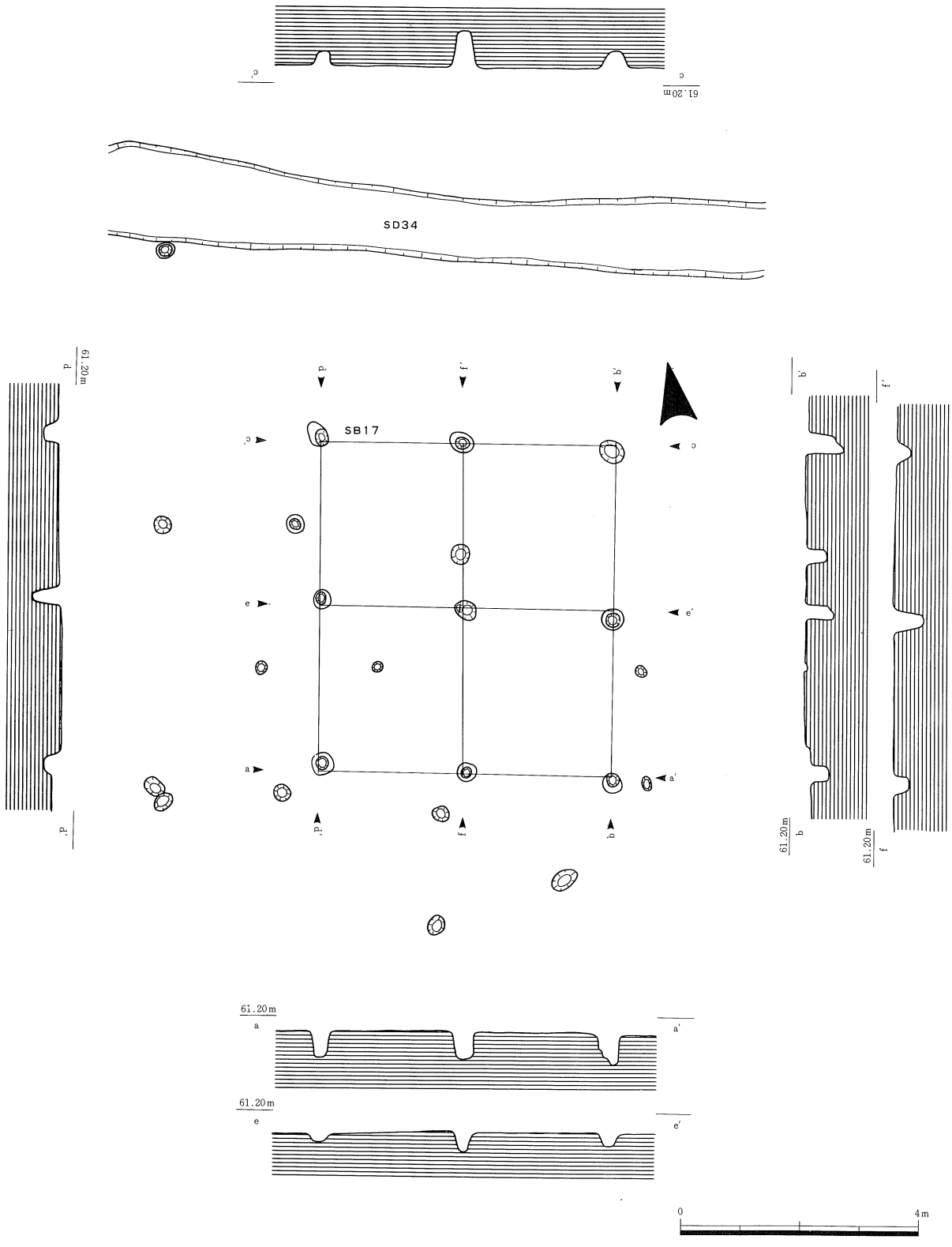
第128図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図

1.SB14　2.SB15



第129図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図

ＳＢ１６



第130図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
SB17

17号掘立柱建物（SB17，第130図，図版114）

X255～259Y31～34で検出した2間×2間の総柱建物である。桁行5.5m×梁行4.45m，平面積24㎡である。柱掘形は長軸31～44cm，短軸28～35cm，深さは平均22cmである。主軸方向はN-11°-Eである。他の遺構との重複関係はなく，周辺に遺構はほとんど確認されない。また遺物は出土していない。溝を意識して建てられていないため，溝に区画されない時期（15世紀前半）に相当すると考えられる。

18号掘立柱建物（SB18，第131・132図，図版115）

X244～248Y39～41で検出した総柱建物である。調査区東壁に断ち切られるため，ハ三四柱穴は確認できなかったが，3間×2間あるいは東にのびると思われる。四列柱穴はSD183を跨ぎ，SB19・SB20と重複するが，新旧関係は不明である。桁行7.54m×梁行4.66m，平面積35㎡である。柱掘形は長軸28～44cm，短軸29～35cm，深さは平均21cm，平面は円形である。主軸方向はN-13°-Eである。ハ二柱穴から中世土師器が出土した。SD185に区画されると考えられ，時期は12世紀後半から13世紀前半が考えられる。

19号掘立柱建物（SB19，第131・132図，図版115）

SB18・SB20と重複する3間×3間の総柱建物である。ハ二三柱穴はSB20のハ三四柱穴を切る。桁行6.76m×梁行5.61m，平面積38㎡である。柱掘形は長軸18～57cm，短軸16～41cm，深さは平均17cmである。桁行柱間はほぼ等間隔で，平均2.25mである。梁行柱間はロハ列間が他より広く，2.3mである。柱穴の平面は楕円形で，イ一三，ロ二～四，ニ一二四で柱痕跡を確認した。主軸方向はN-13°-Eである。遺物は出土していない。SD183に区画されると考えられ，時期は13世紀後半から14世紀である。

20号掘立柱建物（SB20，第131・133図，図版115）

SB18・SB19と重複する4間×3間の総柱建物である。SB19に切られる。ニ五柱穴は確認できなかった。イ一四柱穴はSD183に切られるため，大区画を形成するSD185に伴うものと考えられる。桁行10.24m×梁行7.36m，平面積75㎡である。柱掘形は長軸20～65cm，短軸14～45cm，深さは平均22cmである。平面は円形あるいは楕円形である。主軸方向はN-15°-Eである。遺物は出土していない。時期は12世紀後半から13世紀前半である。

21号掘立柱建物（SB21，第134・135図，図版115）

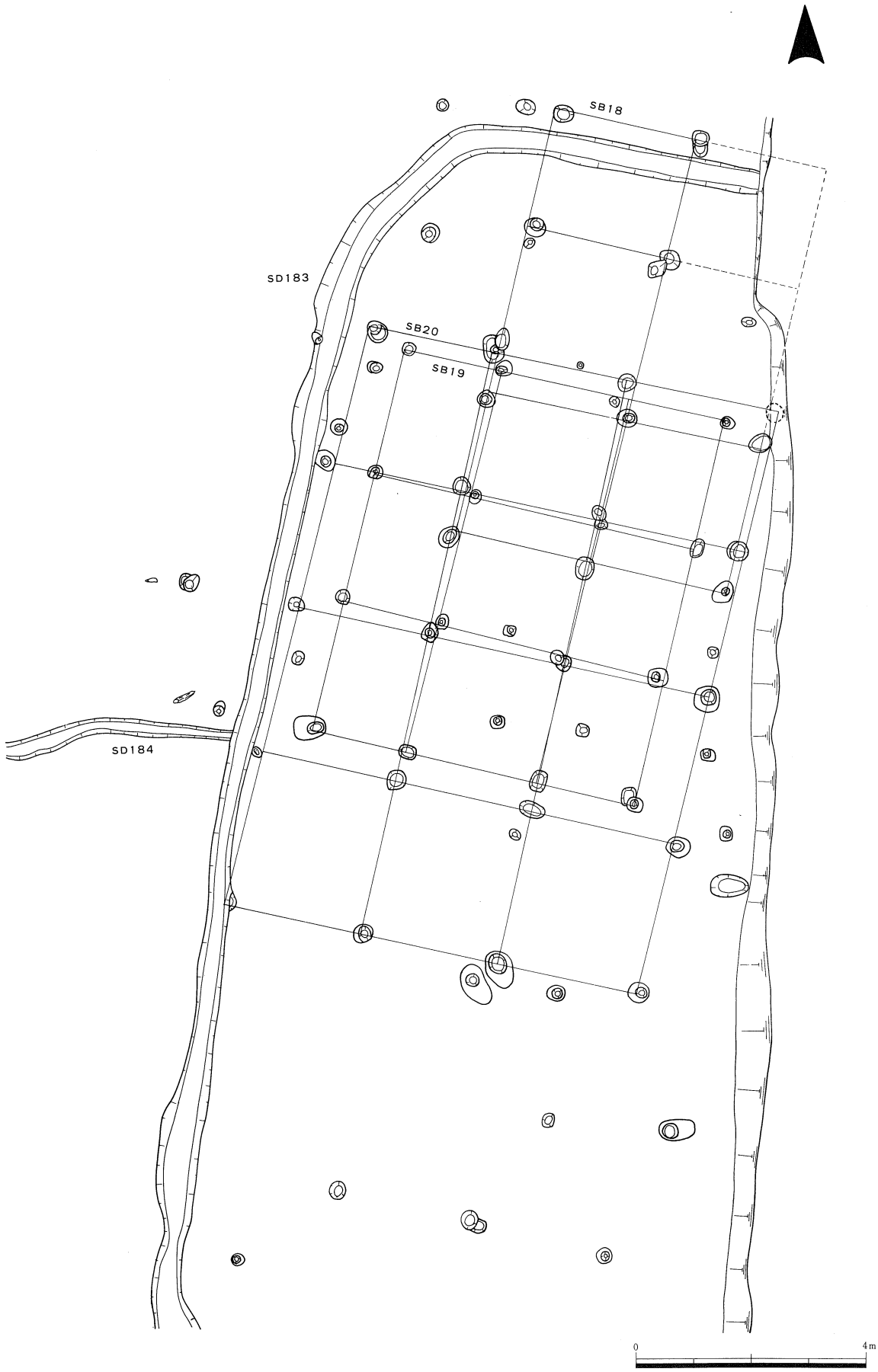
X261～264Y22～24で検出した3間×2間の総柱建物である。SB22・SB23と重複するが，新旧関係は不明である。桁行5.2m×梁行4.22m，平面積22㎡である。梁行柱間はロハ列間がイロ・ハニ列間の約1/3になっている。柱掘形は長軸25～50cm，短軸19～31cm，深さは17～40cmである。主軸方向はN-78°-Wである。遺物は出土していない。SD178に区画されるため12世紀後半から13世紀前半に比定できる。

22号掘立柱建物（SB22，第134・135図，図版115）

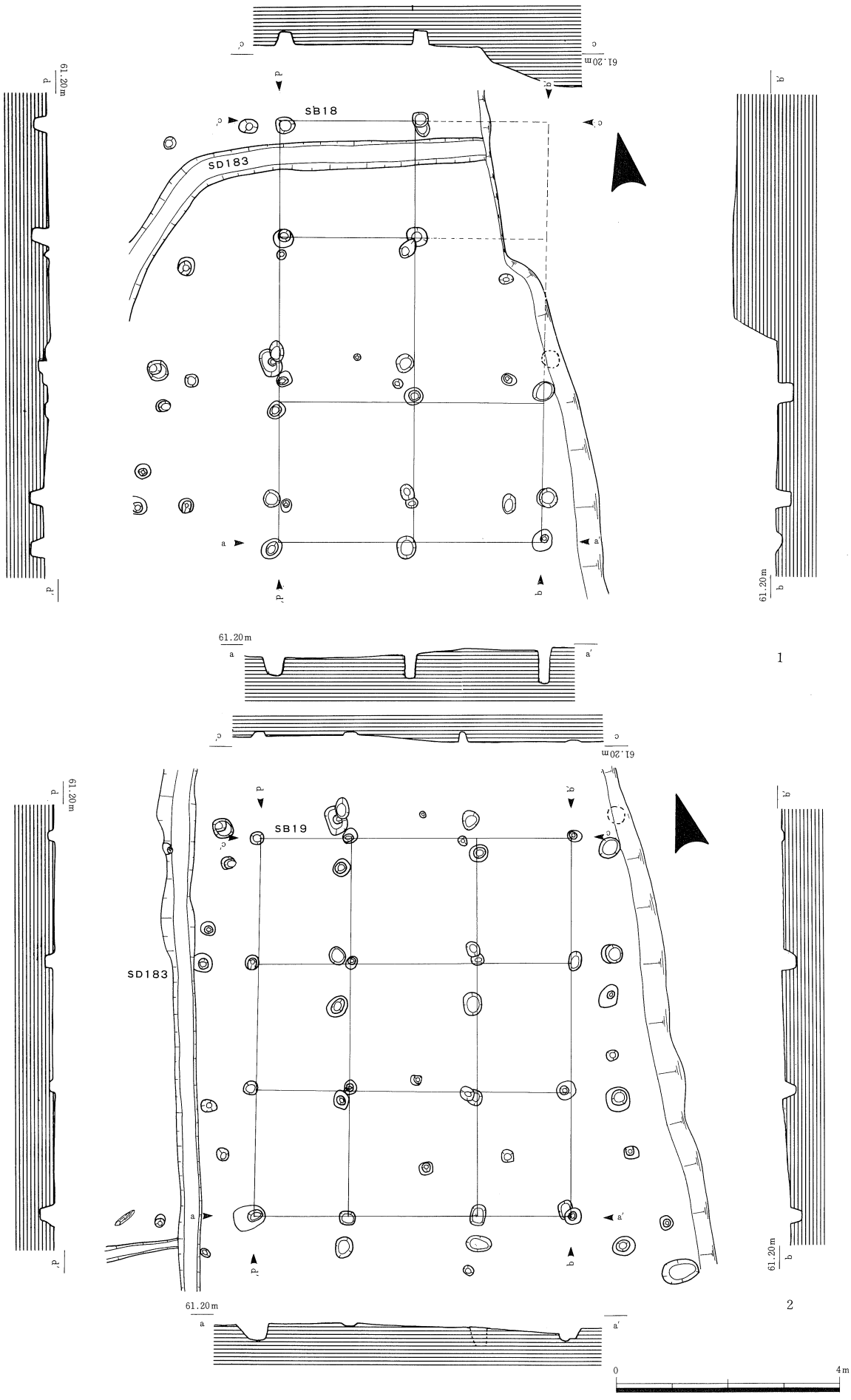
SB21・SB23～SB26と重複する3間×2間の総柱建物である。位置的なものから，SK177が伴なう可能性が考えられる。桁行7.6m×梁行5.02m，平面積38㎡である。桁行柱間二三列間は一二列間と三四列間より狭くなっている。柱掘形は長軸29～37cm，短軸26～35cm，深さは平均23cmである。平面は円形あるいは楕円形である。主軸方向はN-17°-Eで，遺物は出土していない。SD178に区画されるため12世紀後半から13世紀前半に比定できる。

23号掘立柱建物（SB23，第134・136図，図版115）

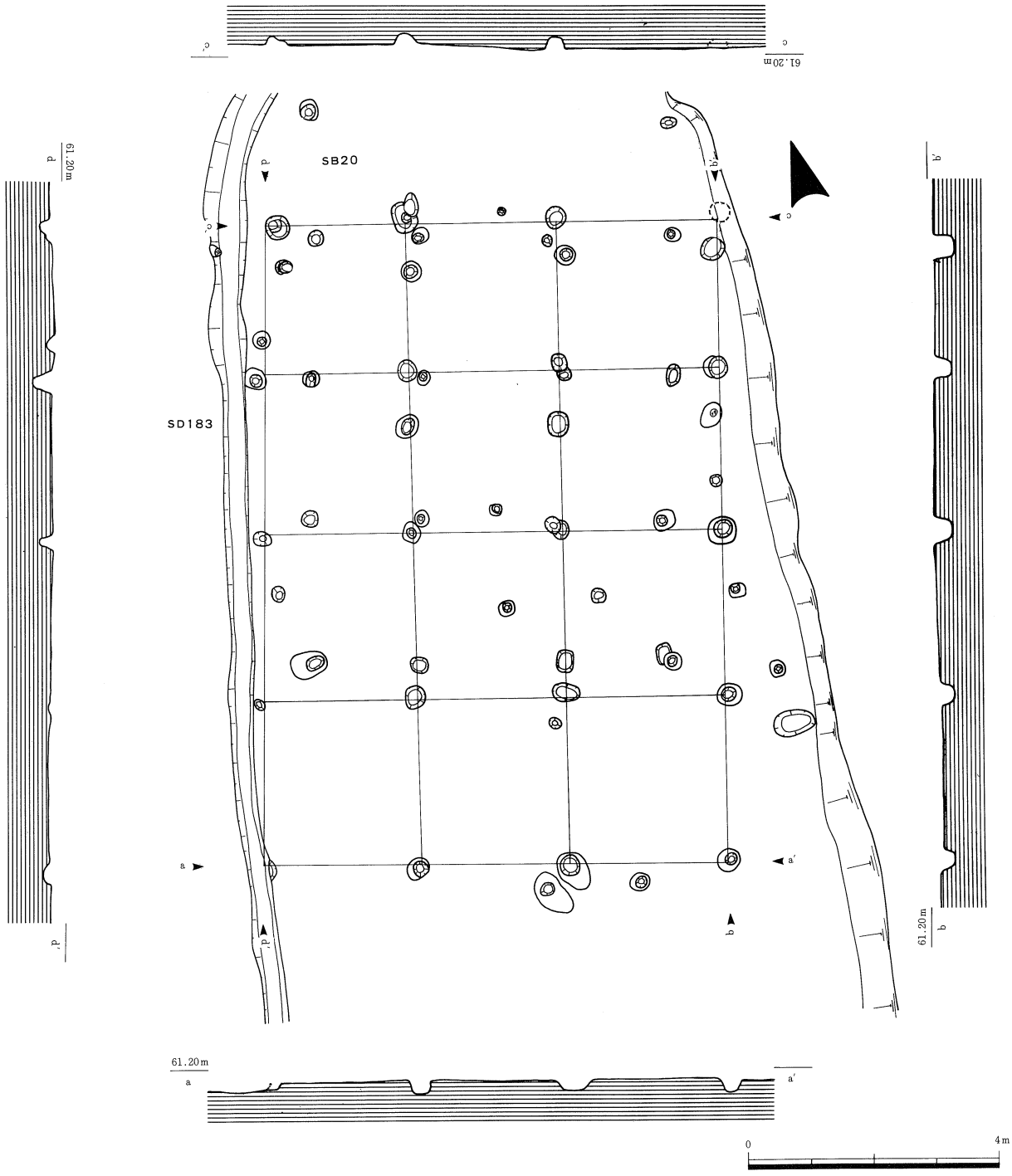
X258～264Y22～26で検出した4間×2間で東に1間分の張り出しを持つ総柱建物である。ハ三柱穴は確認できなかった。SB21・SB22・SB24～SB26と重複するが，新旧関係は不明である。桁行10.25m×梁行4.7m，平面積は張り出しを含めて53㎡である。柱掘形は長軸28～45cm，短軸24～40cm，深さは平均27cm



第131図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
ＳＢ１８～ＳＢ２０



第132図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
1.SB18　2.SB19



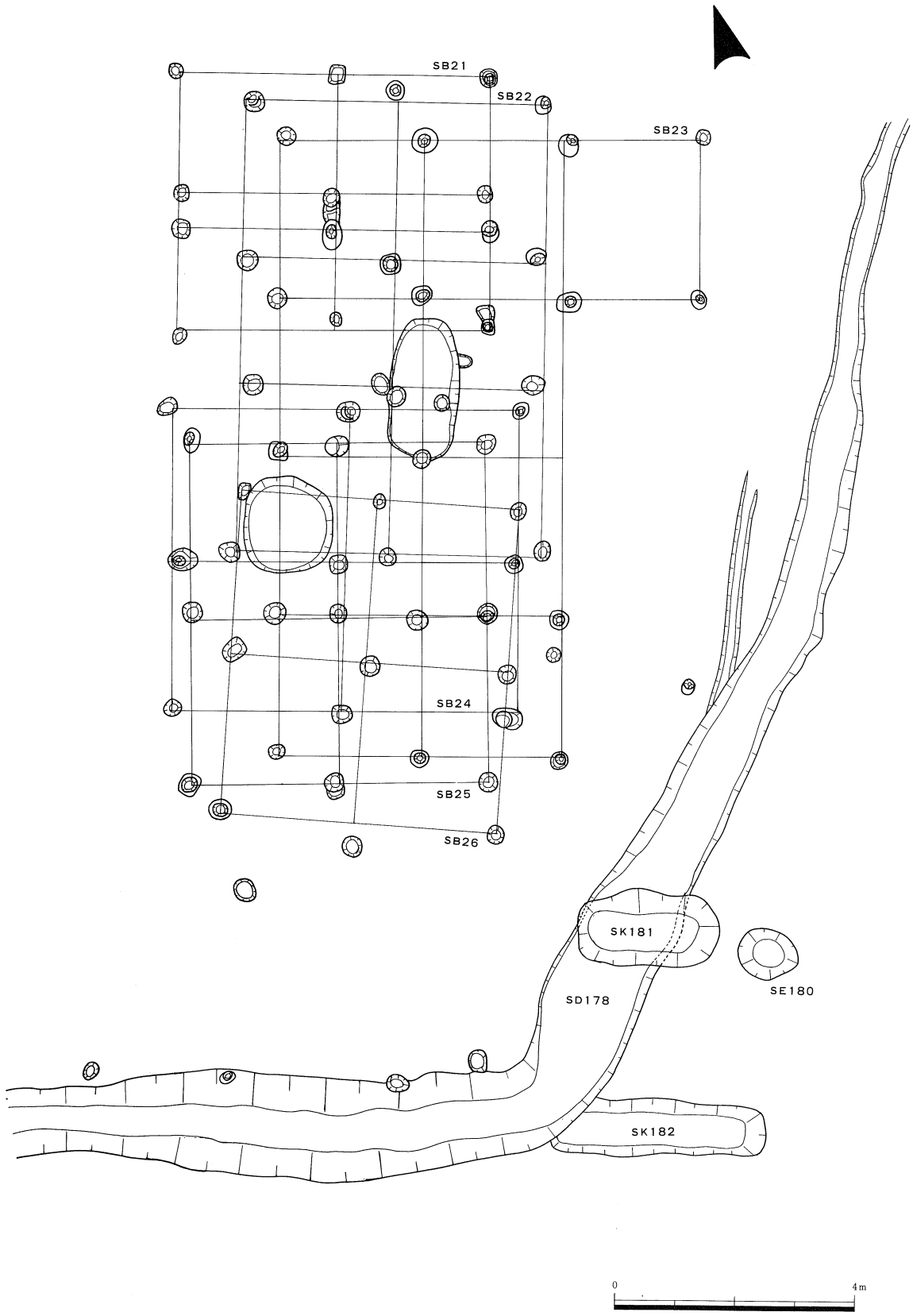
第133図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図

SB20

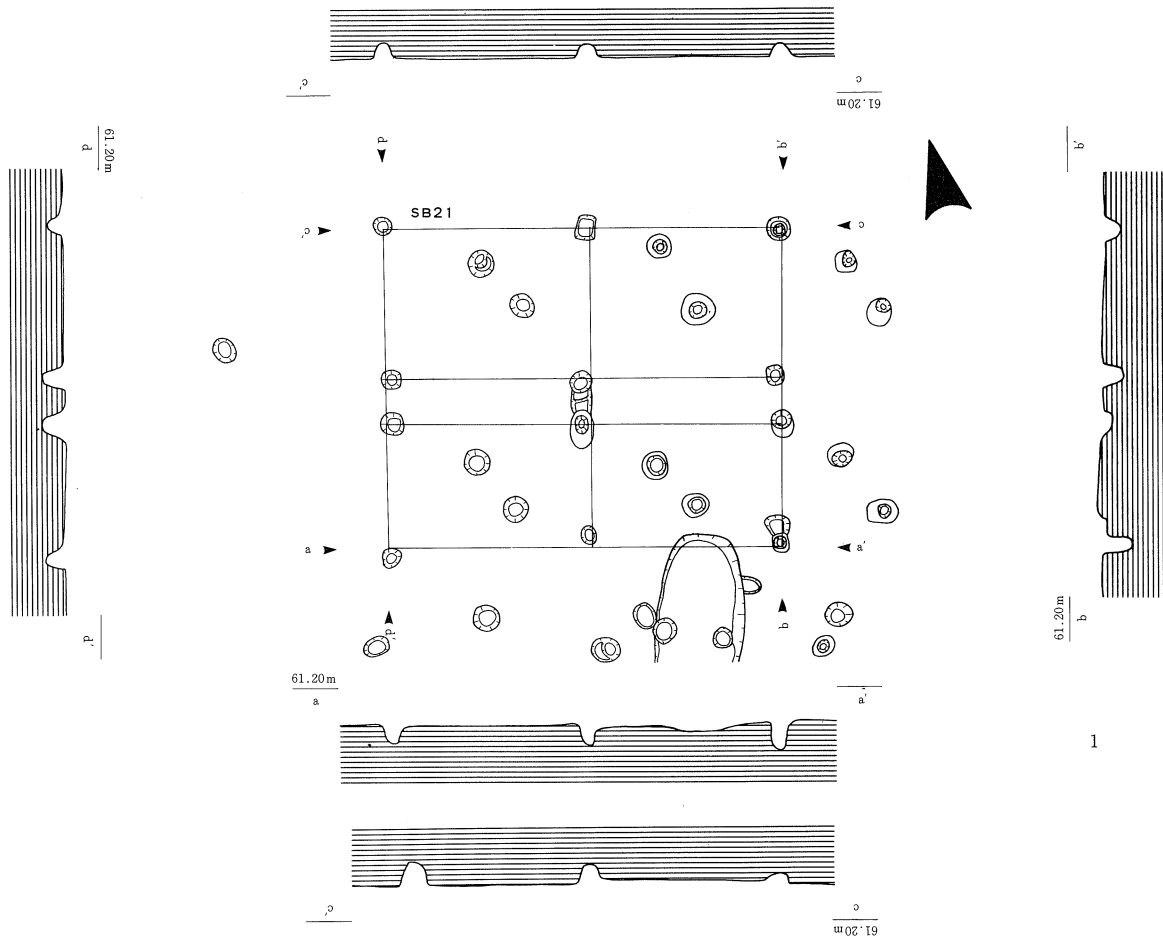
である。平面は楕円形あるいは方形である。柱痕跡を確認できたのはイ三・ロ一四五・ハ一二四五・ニ四柱穴である。主軸方向はN-18°-Eである。遺物は出土していない。SD178に区画されるため12世紀後半から13世紀前半に比定できる。

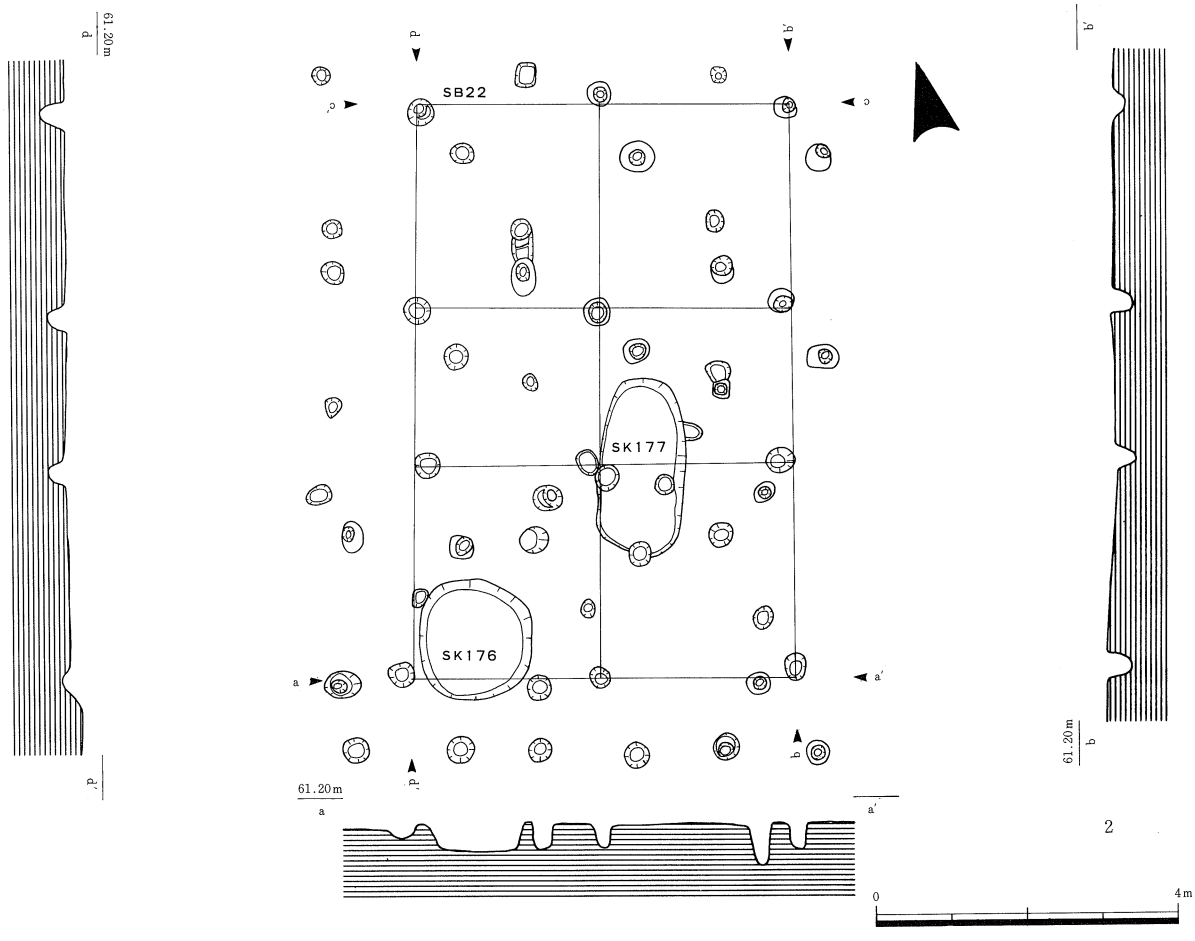
24号掘立柱建物（SB24，第134・136図，図版115）

SB22・SB23・SB25・SB26と重複する2間×2間の総柱建物である。建物どうしの新旧関係は不明である。桁行5.65m×梁行5.05m，平面積29㎡である。柱掘形は長軸28～52cm，短軸23～36cm，深さは平均37cmである。主軸方向はN-77°-Wである。SD178に区画されるため12世紀後半から13世紀前半に比定できる。

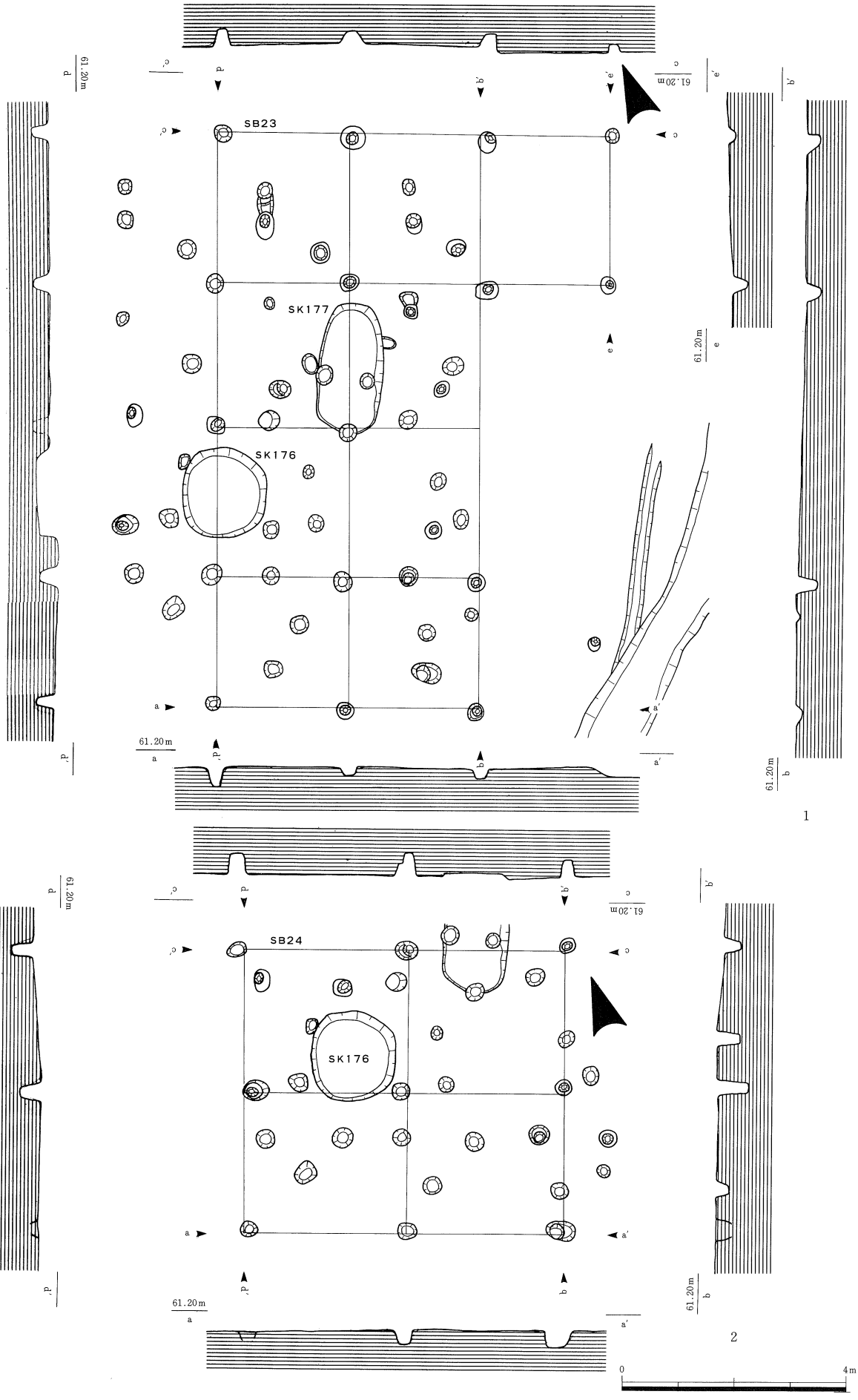


第134図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
ＳＢ２１～ＳＢ２６



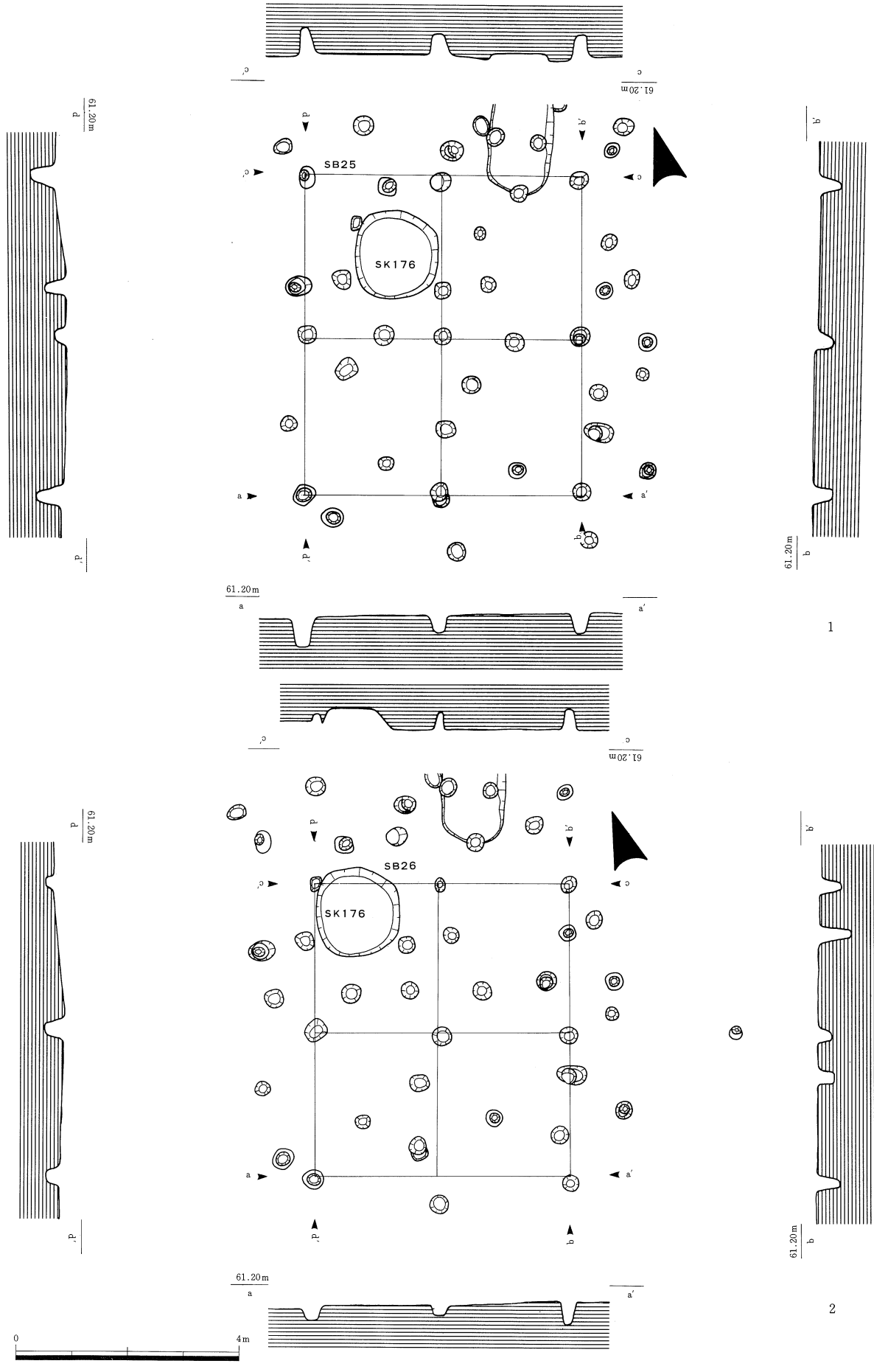


第135図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
1.SB21　2.SB22



第136図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図

1.SB23　2.SB24



第137図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図

1.SB25　2.SB26

25号掘立柱建物（SB25，第134・137図，図版115）

SB22～SB24・SB26と重複する２間×２間の総柱建物である。主軸方向はN-13°-Eの南北棟である。桁行5.78ｍ×梁行4.92ｍ，平面積28㎡である。柱掘形は長軸31～41㎝，短軸29～34㎝，深さは平均31㎝である。遺物は出土していない。位置関係からSK176がこの建物に伴うものと考えられる。SD178に区画されるため12世紀後半から13世紀に比定できる。

26号掘立柱建物（SB26，第134・137図，図版115）

SB22～SB25と重複する２間×２間の総柱建物である。桁行5.29ｍ×梁行4.54ｍ，平面積24㎡である。ロ一柱穴は確認できなかった。柱掘形は長軸26～40㎝，短軸19～35㎝で，円形あるいは楕円形を呈する。深さは13～41㎝を測る。柱痕跡を確認できたのは，イ一柱穴のみである。主軸方向はN-12°-Eで南北に向く。遺物は出土していない。SD178区画されるため12世紀後半から13世紀前半に比定できる。

(2) 溝

溝には東西・南北方向のものがあり，前者はA地区の北側に集中する。また「逆コ」の字状・「L」字状に流路をとるものは掘立柱建物を区画する。時期はほとんどが中世で町道下で検出した溝には近世のものもある。

13号溝（SD13，第138・139図）

X281Y40～44で検出した溝で，東から西へ流れる。X282Y39でSD25に，X283Y37で福野町調査区から流れる南北溝に切られる。X282Y38で二股に分かれ，SX49に流れ込む可能性も考えられる。覆土は黒褐色粘質土である。最大幅88㎝，最小幅22㎝，深さ18㎝である。須恵器，中世土師器，珠洲，温石が出土している。遺構の時期は12世紀と考えられる。

25号溝（SD25，第138・139図）

X282Y39でSD13と切り合い，その西側では並行する東西溝である。調査区の中央ではSD34に切られ，西端ではSD214を切る。SD25は最大幅97㎝，深さは東側ほど深く，最大で46㎝を測る。覆土は鉄分を含んだ灰茶褐色土である。遺物は須恵器，土師器，中世土師器，珠洲が出土している。遺構の時期は，切り合いから12世紀と考えられる。

26号溝（SD26）

X272Y33でSD87に切られる。これより以北では，SD87の下層の流れに相当すると推測される。交差地点での深さはSD87と変わらないが，約２ｍ南下した部分から急に深くなり，直進約６ｍで終結する。最大幅230㎝，最深60㎝を測る。断面はU字形を呈するもので，西側が緩い段状となって中央部で深く落ち込む。SD87が逆コの字状の流路をとる以前の段階では，逆L字状に流れていたものと考えられる。遺物は中世土師器・珠洲が出土している。時期は12世紀後半～13世紀前半である。

34号溝（SD34，第138・139図，図版117）

X284Y33から南進し，X261Y28で東折し調査区外にのびるL字状の溝である。北東部分の建物群を区画すると考えられる溝である。SD25・SD43・SD53・SK56を切るが，SD178とは切り合い関係が不明確であった。最大幅169㎝，深さ49㎝である。断面はU字形である。覆土は上層が鉄分を含む黒茶褐色土，下層は褐色土のブロックが混入する黒色土で，水が流れた痕跡は認められない。遺物は土師器，須恵器，中世土師器，珠洲が出土した。遺構の時期は12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

43・53号溝（SD43・SD53，第138・139図）

SD43はSD25の南に平行して流れる東西溝で，SD53を切り，SD34・SD54・SX49に切られる。幅14～30㎝，深さ８～25㎝を測る。断面は緩やかなU字形である。覆土は灰黄褐色土である。遺物は須恵

器，中世土師器が出土した。SD53は幅50～59cm，深さ30～47cmを測る。覆土は褐色系の土で，断面は逆台形状である。遺物は出土していない。遺構の切り合いから時期はともに12世紀と考えられる。

54号溝（SD54，第138・139図，図版116）

X279～282Y34～35で検出した溝で，SX49とSD87に切られる。最大幅118cm，深さ34cmを測る。覆土は上層が灰茶褐色土，下層は灰茶褐色粘質土である。遺物は出土していない。

55号溝（SD55，第138・139図）

X278Y38でSX49に切られ南進し調査区外へのびる溝である。またSD87の南辺に切られる。最大幅160cm，最小幅33cm，深さは18cmを測る。覆土はSX49との切り合い付近では，Ⅲ層がブロックで混入する褐色系の粘質土である。この埋土からはⅠ～Ⅱ期の珠洲擂鉢が出土する。南では砂質土が多く，水が流れていたことを想定させる。遺物はほかに土師器，須恵器，中世土師器が出土している。時期は12世紀である。

87号溝（SD87，第138・139図，図版115・116）

北東部分で検出した建物を区画する逆コの字状の溝である。X280Y44から西進し，X281Y35で若干の膨らみをもって南折し，X271Y33から東折し調査区外にのびる。SD54を切り，SB05，SB09，SK22，SK141に切られる。X281Y35では直進するSD26を切る。覆土は，黄褐色ブロックが混入する灰茶褐色粘質土と灰黒色粘質土の2時期の流れが認められ，おそらく後者がSD26に続く流れと考えられる。遺物のうち12世紀後半に相当するものは，この流れに伴うものと考えられる。

またSK141との切り合い部分の検出面には川原石の集積がみられる。これはSD87がある程度埋まった段階でSK141がつくられ，SK141の廃絶時に再びSD87を埋めたものと考えられる。最大幅約190cm，最小幅32cm，最深59cmを測る。北辺は幅狭で深い。断面はほぼ逆台形を呈する。西辺は部分的にテラス状となる。遺物は縄文土器？，須恵器，中世土師器，八尾，珠洲，中国製白磁，中国製青磁，粘土塊，砥石，取手金具？が出土した。遺構の時期は13世紀後半から14世紀である。

178号溝（SD178，第138図）

X263Y28でSD34と交差し，X255Y23で西折する。中央部分西側で検出した建物群を区画する溝と考えられる。SD34との新旧関係は確認できなかったが，SD34との交差地点では極めて幅狭となるため同時存在かあるいはSD34に切られるものである。最大幅168cm，最小幅40cm，最深33cmを測る。断面は緩やかなU字形を呈する。覆土は茶褐色系の砂・粘質土の順で緩やかなレンズ状の堆積をみせる。SK181に切られ，SK182を切る。遺物は中世土師器，珠洲が出土した。12世紀後半から13世紀前半である。

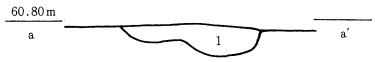
183号溝（SD183，第140図，図版116）

B地区の南東部分で検出した逆L字状の溝で，X237Y36で終結する。SB19を囲み，SB18と重複し，SB20を切る。最大幅80cm，最小幅34cm，深さ40cmを測る。覆土は上層が黒褐色粘質土，下層が黄灰色粘質土が混入する黒灰色粘質土の水平堆積である。X247Y39付近の東肩に貼り付くようにほぼ完形の中世土師器皿が4点出土した。ほかには土師器，須恵器，珠洲が出土している。遺構の位置関係からSD87などと同時期に存在し小区画を形成するものと考えられる。遺構の時期は13世紀後半から14世紀である。

184号溝（SD184，第138図）

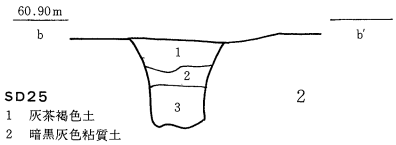
X243Y35～37で検出したSD183とSD185を繋ぐ東西溝である。両溝との切り合い関係は確認できなかったため，3溝は同時に存在する時期があったものと考えられる。最大幅35cm，最小幅17cm，深さ16cmを測る。断面はU字形で，覆土は黒褐灰色粘質土の単層である。遺物は出土していない。遺構の時期は13世紀から14世紀である。

185号溝（SD185，第138図）



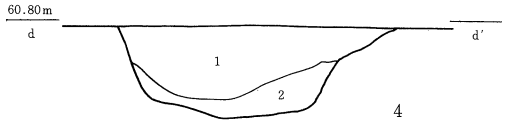
SD13
1　黒灰褐色粘質土

1



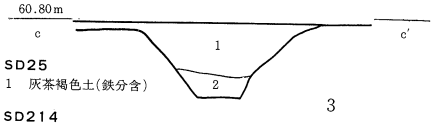
SD25
1　灰茶褐色土
2　暗黒灰色粘質土
（黄褐色粘質土ブロック混）
3　暗灰色粘質土

2



4

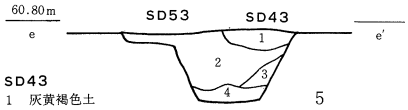
SD34
1　黒茶褐色土(鉄分含)
2　黒色土(褐色土ブロック混)



SD25
1　灰茶褐色土(鉄分含)

3

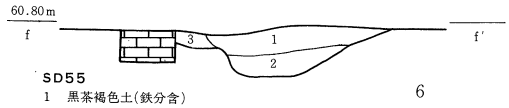
SD214
2　黒茶褐色土(鉄分含)



SD43
1　灰黄褐色土

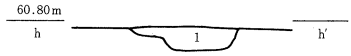
5

SD53
2　灰黒褐色土(褐色土ブロック混)
3　灰褐色土
4　黒色土(褐色土混)



SD55
1　黒茶褐色土(鉄分含)
2　黒茶褐色土
（黄褐色土ブロック混）
3　灰茶褐色土
（黄褐色土ブロック混，鉄分含，しまりない）

6

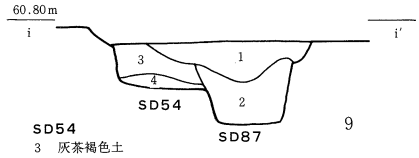


SD87
1　黒灰褐色粘質土
（黄褐色粘質土と炭化物混）

8

SD55
4　暗茶褐色粘質土シルト(礫混)　Ⅳa層
5　灰黒砂質土
6　灰色砂質土

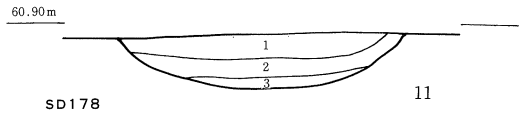
7



SD54
3　灰茶褐色土
4　黒茶褐色粘質土

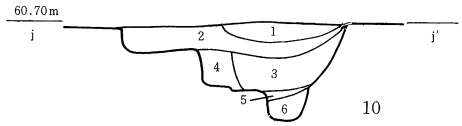
9

SD87
1　灰茶褐色土(黄褐色ブロック混，鉄分含)
2　灰黒色粘質土



SD178
1　灰茶褐色粘質土(鉄分含)
2　暗茶褐色粘質土(砂混)
3　暗茶褐色砂(小礫混)

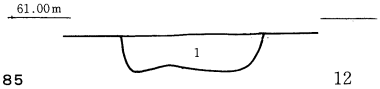
11



SD87
1　黒褐色粘質土
2　黒褐色粘質土(黄褐色粘質土多量混)
3　黒褐色粘質土(黄褐色粘質土少量混)
5　黄灰色砂質土
6　黒灰色粘質土

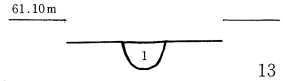
SK121
4　黄褐色粘質土(黒褐色土少量混)

10



SD185
1　黒褐灰色粘質土

12

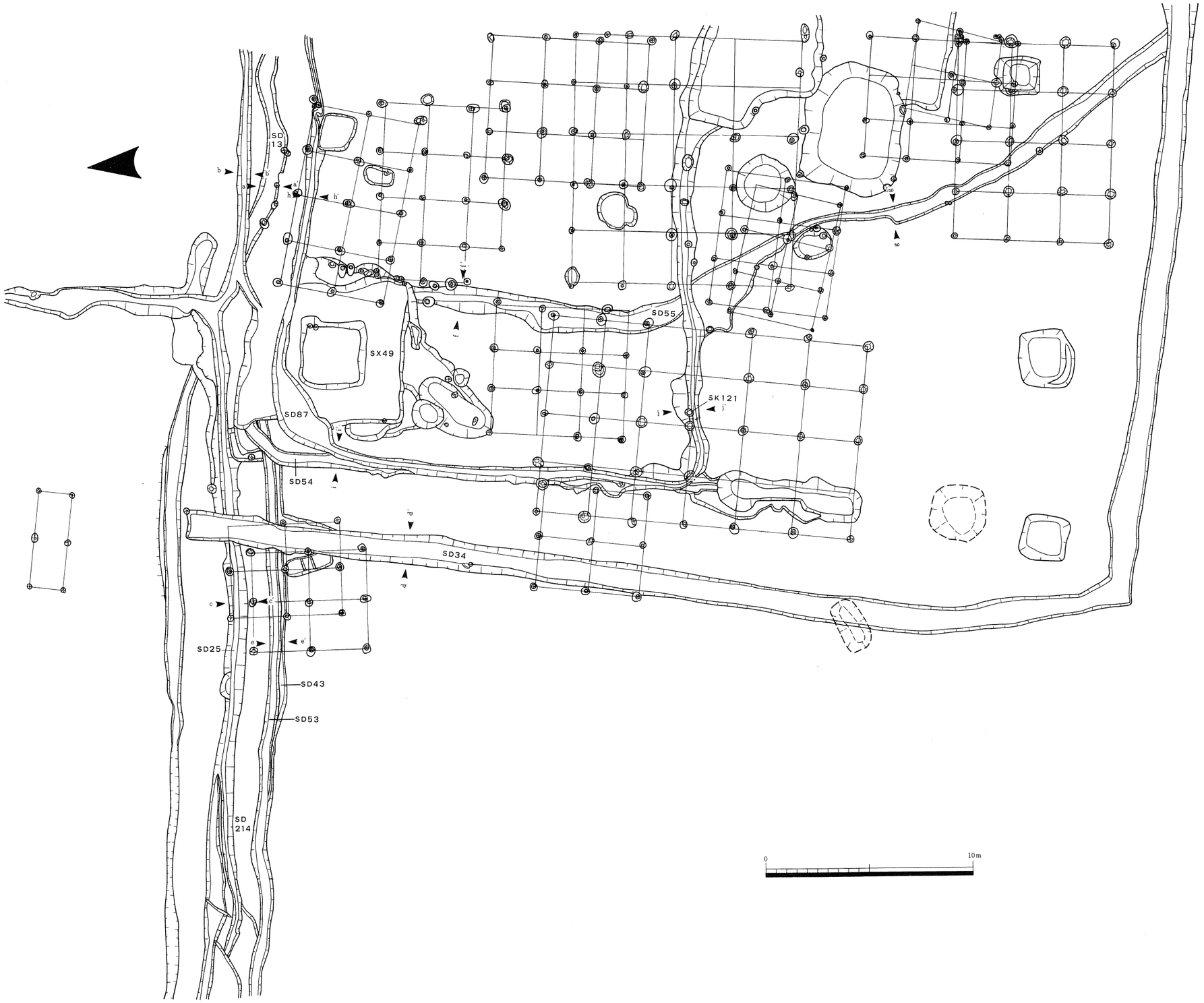


SD184
1　黒褐灰色粘質土
（黄灰色粘質土混）

13

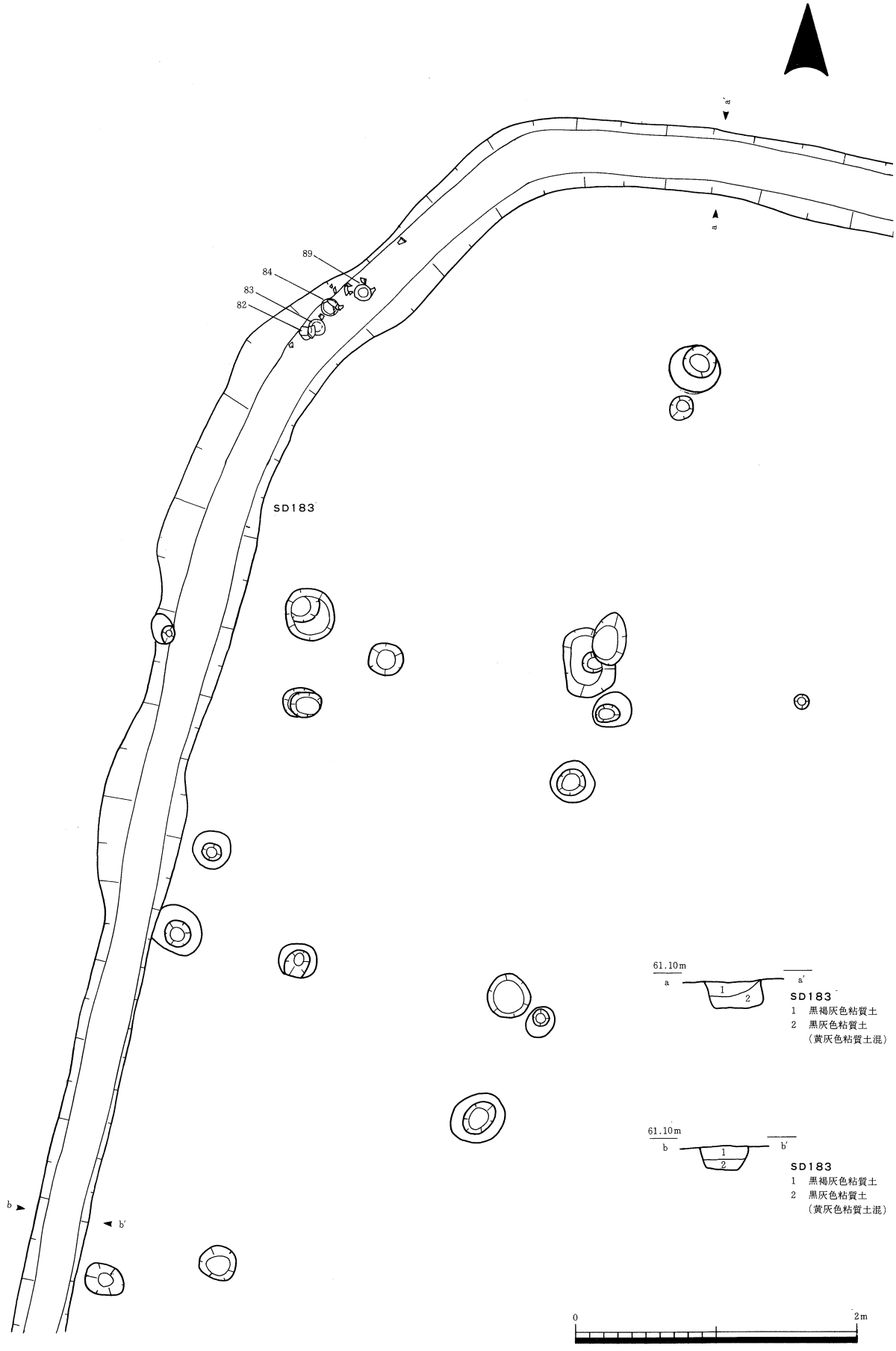
第138図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図

1.SD13 2.SD25 3.SD214 4.SD34 5.SD43・SD53 6･7.SD55 8.SD87 9.SD54・SD87
10.SK121 11.SD178 12.SD185 13.SD184



第139図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図

SD13・SD25・SD34・SD43・SD53・SD54・SD55・SD87・SD214



第140図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
SD183

B地区南東部分で検出した逆L字状の溝である。福野町教育委員会調査区までのびている。SB18・SB20を囲み，大区画を形成すると考えられる。最大幅115cm，最小幅57cm，深さ49cmを測る。断面はほぼ逆台形で，底面は凹凸がある。覆土は黒褐灰色粘質土の単層である。出土遺物は縄文土器，中世土師器，八尾，珠洲，モモの核である。SD34・SD178と同時に存在し，大区画を形成したものと考えられるため，時期は12世紀後半から13世紀前半と考えたい。

(3) 井戸

井戸は建物数に対して少なく，4基のみ検出した。素掘りが3基，上部石積み下部曲物積み上げのものが1基ある。掘立柱建物とセット関係になると考えられるものもある。

33号井戸（SE33，第141図）

X280Y44の耕作土直下で検出した素掘り井戸である。調査区の東壁に切られるが，平面は円形である。直径118cm，深さ313cmを測る。覆土は1層が黄褐色粘質土ブロック混じりの暗灰褐色粘質土，2層が黄褐色粘質土ブロック混じりの暗黒灰褐色粘質土，3層が青灰色粘土ブロック混じりの暗黒灰色粘質土，4層が暗黒色粘質土である。断面はほぼU字形を呈するが，3層と4層の境界で若干幅狭となり，底面に向かってすぼまる。底面は砂礫層に達するが湧水はみとめられなかった。中世土師器が出土している。また種実遺体同定でオニグルミの核が確認された。SD87に切り合いで勝つため，時期は15世紀前半である。

109号井戸（SE109，第142図，図版117）

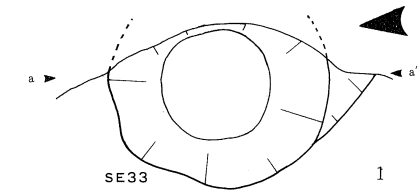
X273Y39で検出した，長軸205cm，短軸89cmの楕円形の井戸である。深さ220cmを測る。上部は石積み，下部は直径約60cmの曲物を5段積み上げる構造である。南側に方形の張り出し部分を持つ。検出面では上部構造の崩壊した石が散在し，約20cm掘り下げて石の並びを確認した。上部の石積みを除去すると井戸を構築するためにつくられたものであろうか，底面に石を据えた柱穴を検出した。掘形の断面は上部構造で2段掘りされ，下部構造ではほぼ円筒形を呈する。水溜は掘形の底部より若干下がっている。また上から3段目の曲物の掘形には川原石がおさえとして用いられ，最下段のものは上部に帯があり，3ヶ所にへぎ板を差し込んでいる。

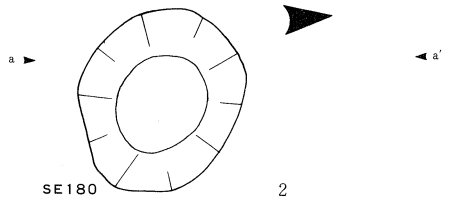
掘形埋土は上部構造部分で灰青色粘質土が混入する黒褐色系の粘質土，下部構造では灰青色粘質土である。灰青色粘質土は地山土でもあるため，井戸を掘削後，その土をそのまま埋め戻したと考えられる。井戸中の覆土は最下層が褐色砂質土，その他は灰黒色粘質土を基調としたものである。前者は使用時の覆土，後者は川原石や漆器椀・皿，曲物，箸がみられ廃棄時の埋土と考えられる。石積み中には須恵器・珠洲がみられる。13世紀後半～14世紀と考えられ，小区画を形成する掘立柱建物に伴う可能性がある。ほかに中世土師器，中国製青磁なども出土している。

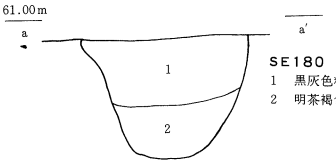
123号井戸（SE123，第141図，図版118）

X269Y39で検出した円形の素掘り井戸である。直径約282cm，深さ244cmで砂礫層に達する。調査中に井戸の壁が崩れたため挿図には一部推定の平面プランを示した。遺構検出面から約50cmで，廃絶時の祭祀と考えられる長さ約170cmの節を抜いた竹を検出した。竹は先端を尖らせ，遺構の中央よりやや東寄りから中心に向かって挿し立てられる。中央部分には板状木製品が貼り付いていた。竹の直下には下端が一部欠損する直径23cmの曲物を据えている。

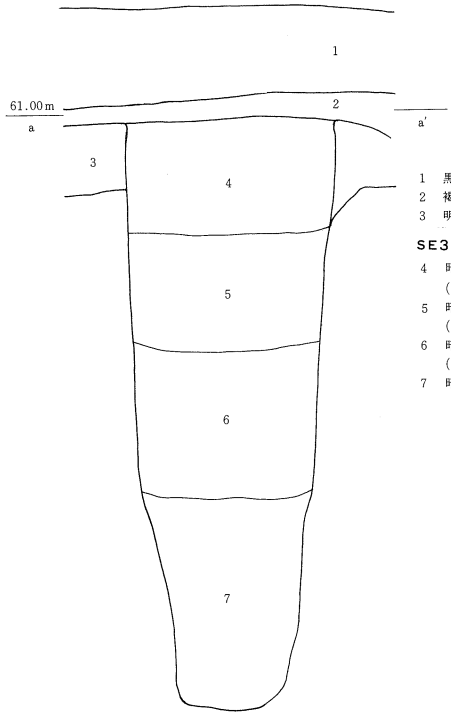
覆土は1層が黄灰色粘質土が混入する黒灰色粘質土，2層が黒灰色粘質土で埋土と考えられる。3層は青灰色粘土で，井戸の使用時に堆積したものと思われる。遺物は1層と2層で須恵器，中世土師器，八尾，珠洲，中国製青磁，土錘が，3層からは13世紀以降の中世土師器が出土している。このほ





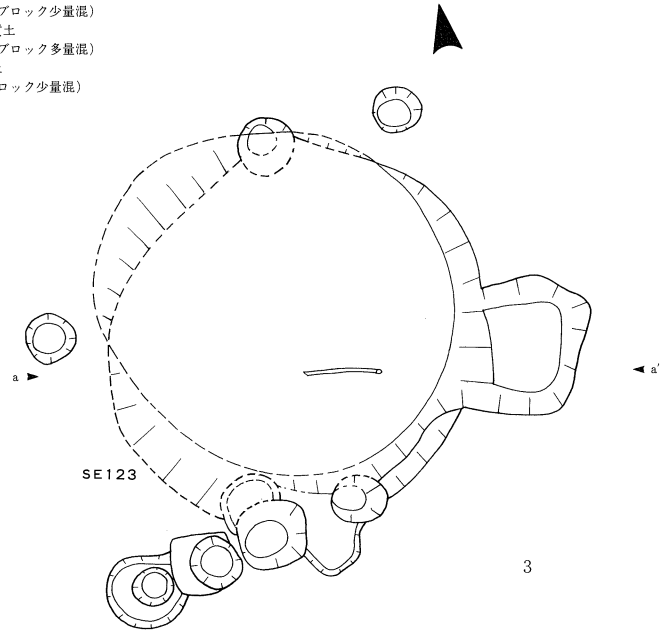


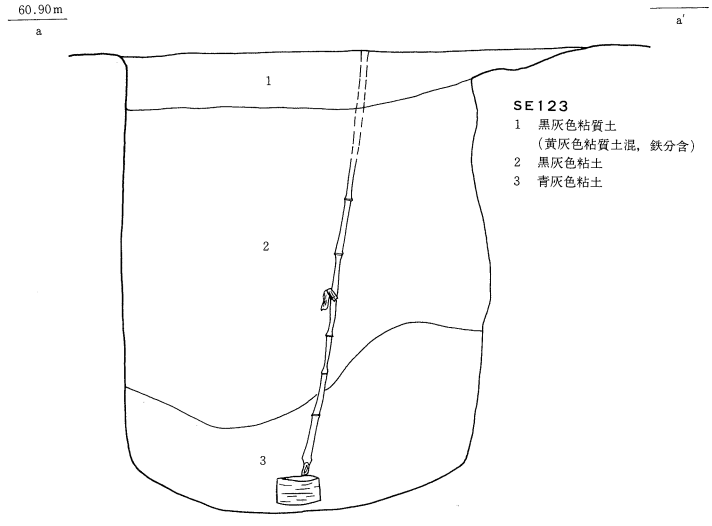
SE180
1　黒灰色粘質土(小礫混)
2　明茶褐色粘色土シルト(小礫混)



1　黒灰色土　Ia層
2　褐灰粘質土シルト(鉄分少し含む，しまりない)　Ib層
3　明褐色粘質土シルト(黄褐色粘土ブロック混)　II層

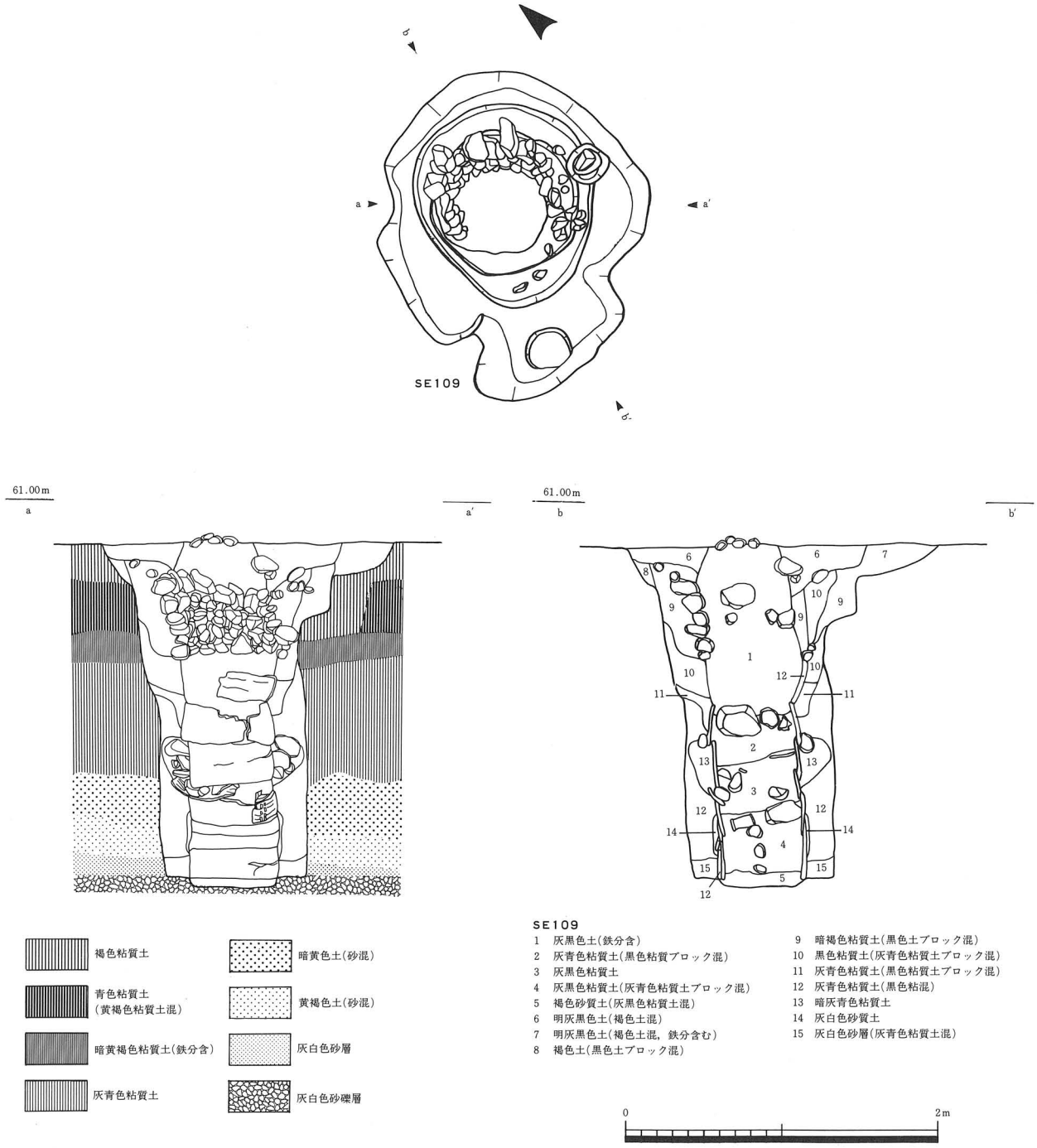
SE33
4　暗灰褐色粘質土
(黄褐色粘質土ブロック少量混)
5　暗黒灰褐色粘質土
(黄褐色粘質土ブロック多量混)
6　暗黒灰色粘質土
(青灰色粘土ブロック少量混)
7　暗黒色粘質土





SE123
1　黒灰色粘質土
(黄灰色粘質土混，鉄分含)
2　黒灰色粘土
3　青灰色粘土

第141図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
1.SE33　2.SE180　3.SE123



第142図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図

SE109

か曲物，円形板，漆器椀，箸，鍬身，宋銭5枚が出土した。また科学分析の結果からモモ・オニグルミの核，甲虫の外骨格が確認された。モモは辟邪の木といわれ，井戸に悪霊が侵入するのを防ぐために投入されたものと思われる。甲虫は同定結果からおそらくコガネムシと推定され，遺跡周辺には広葉樹が多かったと考えられる。遺構の時期は12世紀後半から13世紀で，大区画を形成する建物に伴うと考えられる。

180号井戸（SE180，第141図）

X256Y25で検出したものである。平面は楕円形で，東西102cm，南北84cmを測る。覆土は上層が小

礫が混入する黒灰色粘質土，下層が小礫が混入する明茶褐色粘質土シルトである。深さ64cm，底面は砂礫層に達するが湧水はみとめられない。遺物は出土していない。

(3) 土坑

土坑には楕円形，方形のものがみられる。ほとんどは第Ⅲ層で検出されたが，谷状地形が埋没していく段階でつくられた土坑もみられる。断面はU字状あるいは逆台形状を呈し，深さは20cm～１ｍを測る。位置関係から掘立柱建物の内部施設と推測されるものがある。

20号土坑（SK20，第143図）

X277Y36で検出した方形の土坑である。東西186cm，南北160cm，深さ13cmを測る。覆土は鉄分を含む暗褐色土の単層である。床面は平坦である。遺物は中世土師器，中国製青磁が出土した。

21号土坑（SK21，第143図，図版118）

X278Y40で検出した長方形の土坑である。南北150cm，東西76cm，深さ12cmを測る。覆土は炭化物を多く含む黒灰褐色粘質土である。底面では土坑と同一埋土の２柱穴を検出した。中世土師器の破片が出土した。SB05に伴う土坑と考えられ，時期は15世紀前半である。

22号土坑（SK22，第143図）

X279Y42で検出した方形の土坑である。SD87に切り合いで勝つ。東西178cm，南北154cm，深さ12cmを測り，柱を避けるように掘られている。覆土は黒灰色粘質土の単層である。床面はほぼ平坦である。遺物は中世土師器が出土した。SB05に伴う土坑と考えられる。時期は15世紀前半である。

23号土坑（SK23，第143図，図版118）

X275～276Y43～44で検出した土坑である。SB06の柱穴を切る。調査区東壁に切られるが，平面はほぼ方形と思われる。覆土は３層に分かれて皿状に堆積し，深さ60cmを測る。１層は黄褐色土粒が混入する黒褐色土，２層は灰褐色土のブロックが混入する黒褐色土，３層は灰褐色粘質土のブロックが混入する暗黒褐色粘質土である。遺物は珠洲？，中世土師器が出土した。また土坑の北辺に切られ北上するSD36と，南辺に切られ西辺とSB06に平行して北上するSD28を検出している。溝底のレベルは地形の傾斜に併せて変化し，現存する深さは前者が５cm程度，後者は南辺で接する部分で最深22cmを測る。覆土は土坑の１層と同一で，水が流れた痕跡は看取されなかった。しかし，溝は土坑内で作業を行うにあたって何らかの取り水施設として機能していた可能性も考えられる。遺物は出土していない。

56号土坑（SK56，第143図，図版120）

X281Y31で検出した長方形の土坑である。SD34・SB02の柱穴に切られる。南北228cm，東西77cm，深さ31cmを測る。覆土は１層は鉄分を含む灰茶褐色土，２層は鉄分を含む黒茶褐色土，３層は褐色ブロックが混入する黒茶褐色土の３層が皿状に堆積する。床面は平坦であるが，中央部東西方向に溝状の段がみられる。遺物は出土していない。切り合い関係から12世紀代と考えられる。

137号土坑（SK137，第145図，図版119）

X264～267Y41～43で検出した土坑である。SB01・SK141と調査区東壁に切られる。そのため平面プランは不明である。検出面ではSB14・SB15の柱穴を確認している。覆土は黄褐色あるいは青灰色の粘質土が混入する黒褐色系の粘質土がほぼ水平堆積する。床面は平坦である。遺物は縄文土器，土師器，須恵器，中世土師器，珠洲，漆器椀が出土した。遺構の時期は12世紀後半から13世紀である。

141号土坑（SK141，第145図）

X268～270Y41～43で検出した土坑である。調査区東壁に切られるため，平面プランは不明である。SD87・SB01・SK137と切り合い関係で勝っている。覆土は青灰色粘質土が混入する褐色系の粘質土で，

調査中は悪臭が漂っていた。中層から下層にかけて箸や木片が多量に出土する。深さは99cmを測り，床面はほぼ平坦である。遺物は土師器，須恵器，中世土師器，八尾，珠洲，土錘，下駄の歯？，漆器椀・皿，箸，円形板，曲物・側板などが出土した。花粉分析からオニグルミ，モモ，イネ，オオムギ，ソバ，ギシギシ属が確認されている。SB11の内部施設として機能していたものか。13世紀から14世紀である。

166号土坑（SK166，第144図，図版120）

X262～263Y34～35で検出した方形の土坑である。調査区中央部分にあたる谷状地形のⅣa層を掘り込んでいる。東西289cm，南北274cm，深さ48cmである。覆土は酸化鉄を含んだ黒色土に円礫が多く混入する単層である。南辺に浅い段がつく。床面は平坦である。遺物は土師器，中世土師器，珠洲，中国製白磁が出土した。

167号土坑（SK167，第144図，図版119）

X263Y41で検出した方形の土坑である。南北224cm，東西194cm，深さ90cmである。断面はU字形を呈し，床面は平坦である。覆土は1層が砂混じりの灰茶褐色粘質土に黄褐色粘質土と黒褐色粘質土がブロックで混入し，縄文土器が出土している。2層は鉄分を含む灰茶褐色粘質土，3層は鉄分を含む灰黒色粘質土である。ほかに須恵器，中世土師器，中国製白磁が出土した。

175号土坑（SK175，第144図，図版121）

SD34がL字に屈曲する部分，X263Y30で検出した方形の土坑である。南北224cm，東西223cm，深さ65cmを測る。谷状地形の覆土Ⅳc層を掘り込んでいる。覆土は1層が黒褐色粘質土，2層は礫が混入する黄灰褐色粘質土である。遺物は須恵器，中世土師器，珠洲が出土した。

176号土坑（SK176，第144図，図版119）

X260Y22で検出した楕円形の土坑である。南北161cm，東西149cm，深さ40cmを測る。覆土は上層が黄灰色粘質土が混入する黒色粘土，下層が灰色砂礫である。遺物は出土していない。中央西部分の建物群中に位置し，いずれかに伴うものと考えられる。

177号土坑（SK177，図版121）

X261Y23で検出した楕円形の土坑である。南北228cm，東西114cm，深さ16cmを測る。中世土師器が出土した。これも中央西部分の建物群中に位置するため，このいずれかに伴うものと考えられる。

181号土坑（SK181，第144図，図版120）

X226Y24で検出した楕円形の土坑である。SD178に切り合いで勝つ。東西234cm，南北126cm，深さ63cmを測る。覆土は1層が砂礫混じり灰茶褐色粘質土，2層が明茶褐色砂質土，3層が明茶褐色粘質土がほぼ水平堆積する。須恵器，中世土師器，珠洲が出土した。

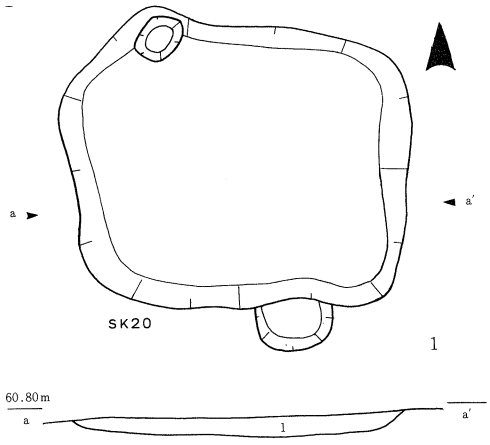
182号土坑（SK182，第144図）

SK181の南に位置する長方形の土坑である。SD178と重複し，切り合いで負ける。覆土は1層が灰茶褐色粘質土，2層が黄褐色粘質土のブロックが混入する灰茶褐色粘質土である。東西355cm，南北96cm，深さ28cmを測る。遺物は中世土師器，珠洲，粘土塊が出土した。大区画を形成するSD178をSD34に繋ぐ以前は，東西方向の区画溝として機能していたものか。12世紀後半から13世紀と考えられる。

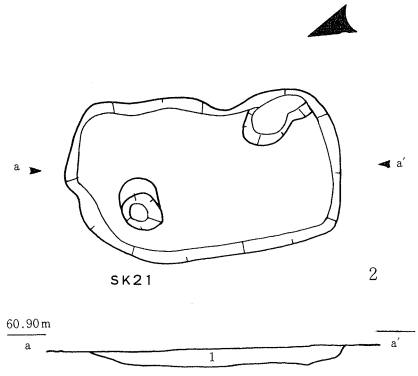
(5) 方形周溝状遺構

49号土坑（SX49，第145図）

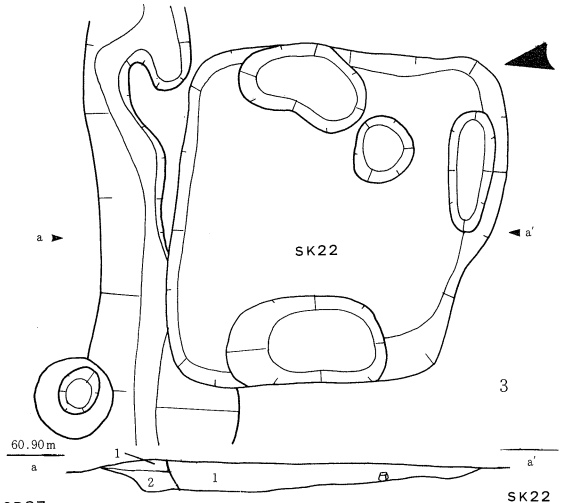
X278～282Y35～38で検出した方形周溝状遺構である。一辺約7mの方形を呈し，その内側に幅2mの溝を持つ。中央は一辺約3mの方形のマウンド状となっている。マウンドの北辺は浅い段を有する。平坦な検出面は後世の削平によるもので，本来盛り土が存在したものと考えられる。マウンドの中央



SK20
1 暗褐色土(鉄分含)

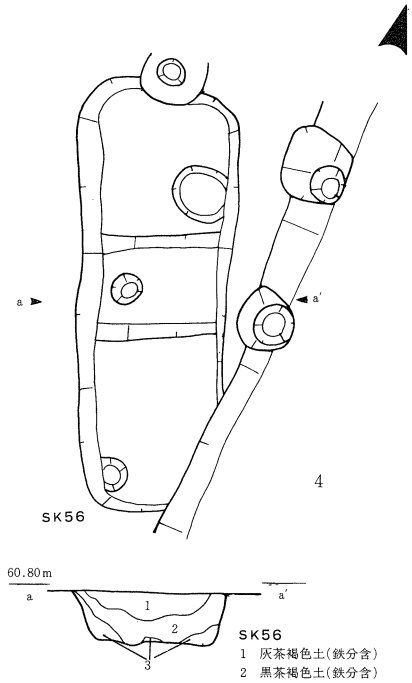


SK21
1 黒灰褐色粘質土(炭化物多量混)

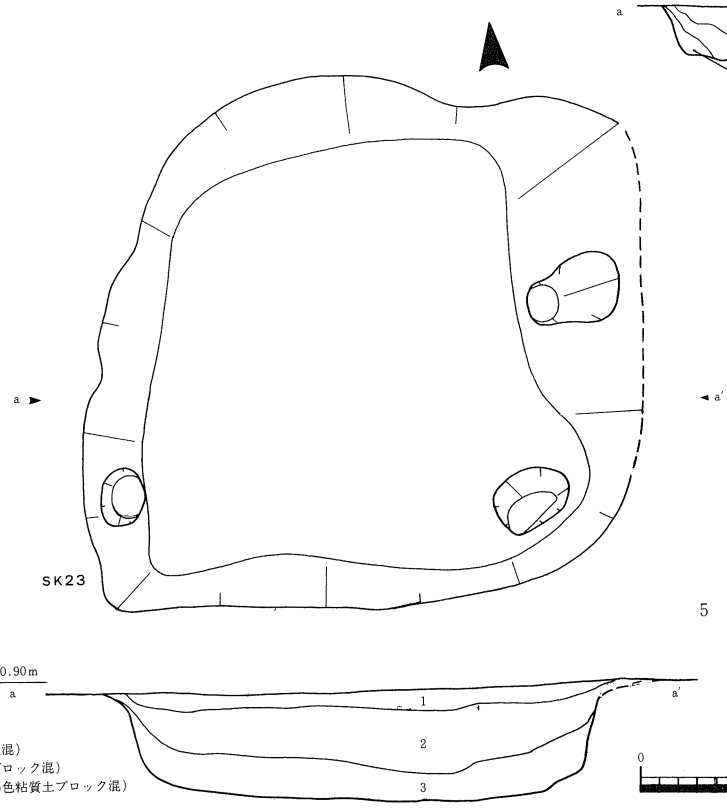


SD87
1 茶褐色粘質土
2 黒灰褐色粘質土(黄褐色粘質土ブロック混)

SK22
1 黒灰色粘質土



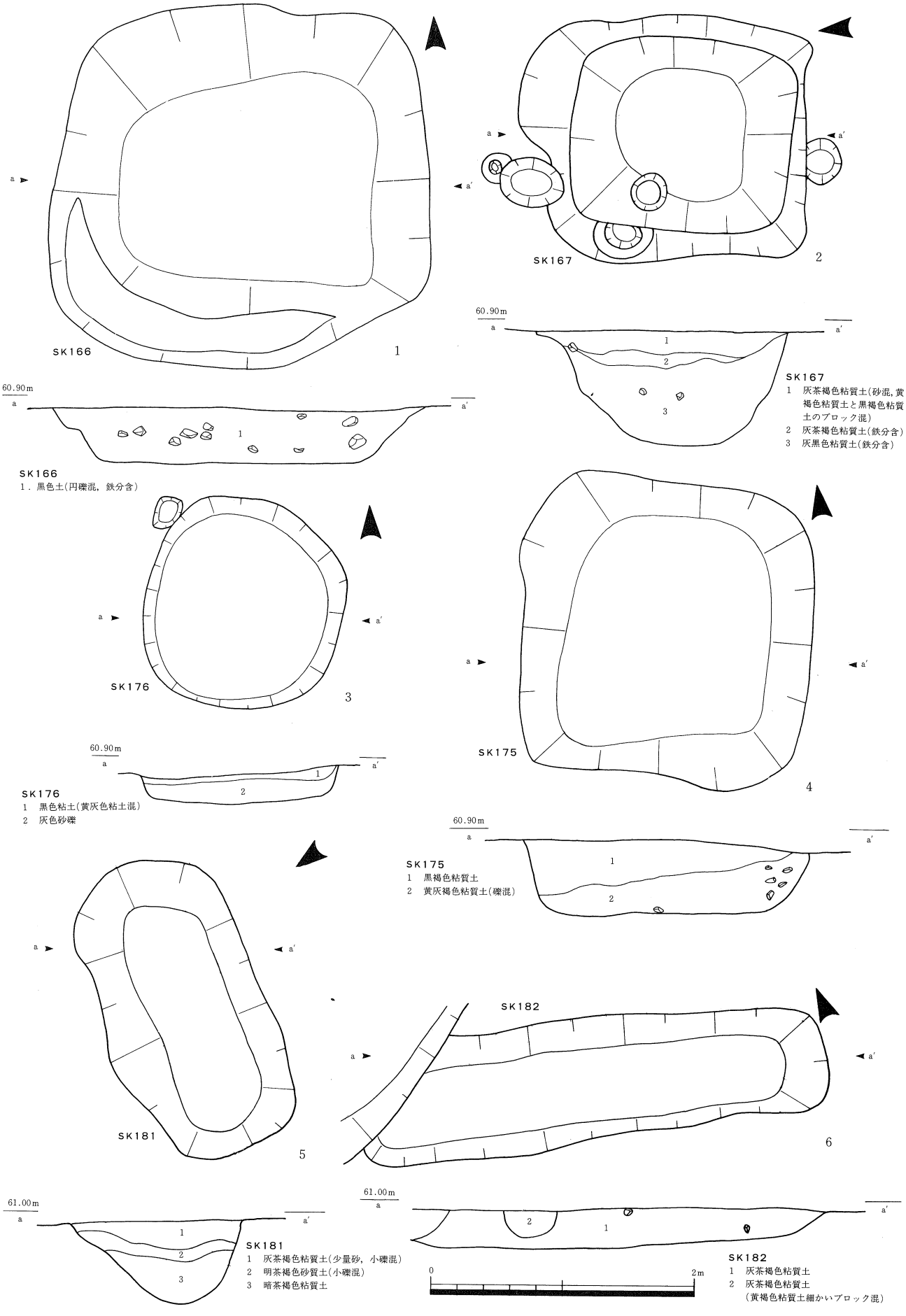
SK56
1 灰茶褐色土(鉄分含)
2 黒茶褐色土(鉄分含)
3 黒茶褐色土(褐色土ブロック混)



SK23
1 黒褐色土(黄褐色土粒混)
2 黒褐色土(灰褐色土ブロック混)
3 暗黒褐色粘質土(灰褐色粘質土ブロック混)

第143図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図

1.SK20　2.SK21　3.SK22　4.SK56　5.SK23



第144図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図

1.SK166 2.SK167 3.SK176 4.SK175 5.SK181 6.SK182

第145図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図

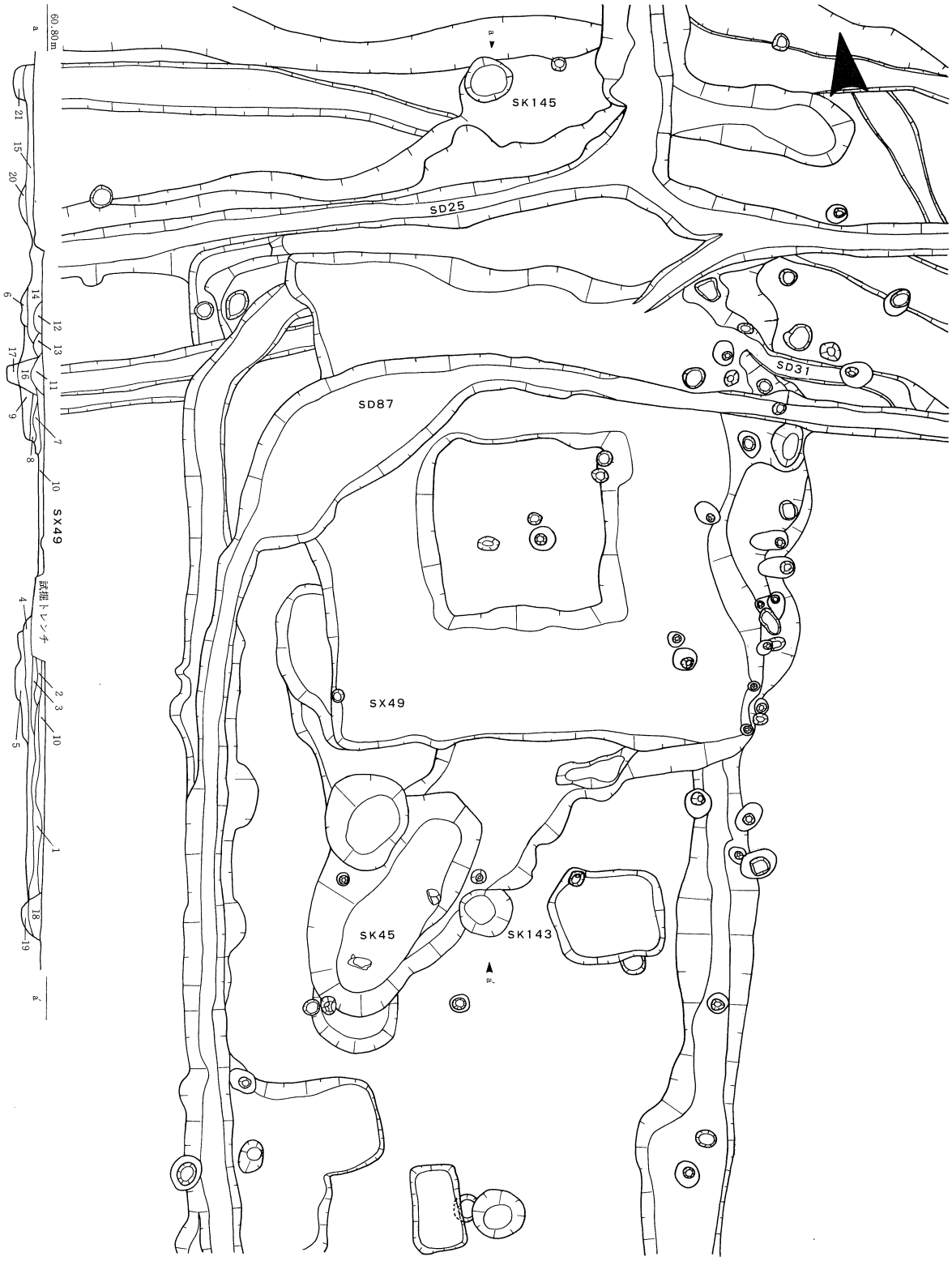
SK137・SK141

と北東隅には柱穴がみられるが，土坑墓に相当するものは確認できなかった。廃絶過程は第一段階として，溝部分に黒灰色系の粘質土が水平堆積し，南辺に接するSK45も同時に埋められる。SK45は南端の突出部で深くなり，SX49の南辺付近ではこれとほぼレベルを同じくする。また壁の立ち上がり部分の凹凸が激しい。この底面からは30㎝程度の礫が数個出土している。以上のことから，SK45はSX49に付属する施設と考えられる。第一段階でマウンド部分の盛り土が削平され，この土が溝部分やSK45を埋めたものと推測されることから，SK45で検出した礫はマウンド部分に積まれていた可能性が考えられる。第二段階ではSD87がつくられ，第三段階で再びSX49の溝部分・マウンド部分，SD87が10～14層の土で埋めもどされる。第四段階で，SK45の東にSK143がつくられる。またSX49の北側に位置するSD25・SK145は，ある程度埋まった後，おそらく第三段階と時を同じくして灰色シルトで埋められる。SX49からは縄文土器，土師器，須恵器，中世土師器，中国製白磁，SK45からは土師器，須恵器，中世土師器，珠洲が出土した。遺構の時期は９世紀から12世紀後半が考えられる。

このような方形周溝状遺構の性格として，土坑墓・火葬墓・庚申塚・火葬塚等が考えられるが[注1]，SX49の土層堆積状況は灰・焼土層は認められず，骨片や銭貨などは出土していない。マウンド部分には柱穴が検出できたことから，木製あるいは石製の塔婆が立てられ塚として機能していた可能性が考えられる。こうした情景は『餓鬼草子』[注2]をはじめとする絵巻物に描かれている。この調査区からは石塔となる五輪塔などは出土しない。これは遺構廃絶時に移動されたために出土しなかったか，あるいは木製塔婆が樹立されたが腐食したものと考えられる。

いま一つ推察できることは，SX49と交差するSD25・SD31から取り水を行った可能性である。SX49と２溝の新旧関係は覆土から確認できなかったが，SD25は遺物や他遺構との切り合いからSX49と同時に存在することが判明している。SX49の溝部分の覆土からは水が流れた形跡は確認されていないが，仮にこれらの溝から取り水を行っていたとすれば，時期は前後するが『一遍上人絵伝』[注3]にみられる次のような事例が想像できる。第七巻「関寺での情景」において，池の中に方形の島をつくり，そこに仮屋を建てて念仏踊りを踊る僧達がいる。方形島の一辺から岸に板橋を架け，周囲にはこれを拝む人々がいる。絵図に描かれた島は，SX49のマウンド部分の規模に類似すると推測される。遺跡近隣における時宗の活動は，13世紀の終わりに浄阿が小矢部川水運の要地である野尻郷の念仏勧を行ったことに始まる[注4]。野尻郷は田尻遺跡が所在する山田郷の北東側に接する部分である。時宗は港湾などの交通を重視し，ことに舟運を中心とした中世の交通体系と深い関わりを持っていたため[注4]一帯を布教の地としたのであろう。SX49は時宗開創以前に存在したため方形島の事例はあくまでも仮定であり，SX49の性格を断定することは困難である。しかしいずれにしてもSX49と同時期の遺構は当財団調査区・福野町教育委員会調査区ともにほとんど確認できなかったことから，この地が該期に特殊な空間として存在していたことが推測される。（横山和美）

注１　伊佐智法 1992 「田尻遺跡の方形周溝状遺構」『埋蔵文化財年報(3)』財団法人富山県文化振興財団
注２　小松茂美 1987 『餓鬼草子　地獄草子　病草子　九相誌絵巻 日本の絵巻７』中央公論社
注３　小松茂美 1990 『一遍上人絵伝 日本の絵巻20』中央公論社
注４　富山県 1994 『富山県史 通史編Ⅱ 中世』



SX49
1　黒褐色粘質土(鉄分多含)
2　暗茶灰色土(黄灰色粘土ブロック混)
3　暗黒褐色粘質土
4　暗黒灰褐色土(黄灰色粘土ブロック混)
5　黒灰色粘質土(青灰色粘土ブロック混)
6　黒灰色粘質土(青灰色粘質土混，鉄分含)
7　黄褐色粘質土
8　黒灰褐色粘質土(鉄分少含)
9　淡黒灰色粘質土(青灰色粘土ブロック混)
10　暗黒褐色土(鉄分少含)
11　黒褐色土(鉄分多含)
12　黒褐色土(黄灰色粘質土ブロック混)
13　黒褐色土(黄灰色粘質土ブロック小混)
14　暗黒褐色土(鉄分多含)
15　黒灰色シルト

SD87
16　黒灰色粘質土
17　黒灰色粘質土(青灰色粘質土少含)

SK143
18　黒灰褐色粘質土(黄灰色粘土ブロック混)
19　黒灰色粘質土(灰色粘土ブロック多混)

SD25
20　暗黒灰色シルト(青灰色粘土ブロック混)

SK145
21　灰黒色粘質土　SK145

0　4m

第146図　田尻遺跡 第二次調査 遺構実測図
SX49

B 遺 物

(1) 建 物

1号住居址（SB01，第147・148図，図版122・128・133）

1は縄文土器深鉢である。地紋に条痕文を施し，4本の沈線の間に押し引き列点文を施す。晩期中葉のものである。

2・3は須恵器である。2は双耳瓶の耳の部分である。3は鉢である。口縁端部は内側に折り曲げ，つまみ出す。内外面をロクロ撫でし，外面下方の一部に横方向の削りを施す。胎土に海綿骨針を含む。

4は内黒土師器椀である。底外面に回転糸切り痕が残る。

5～17は中世土師器皿である。5はロクロ成形で，底外面に右回転の糸切り痕を残す。石英，骨針を含む。6～17は非ロクロ成形である。口縁部は横撫で，底外面は無調整である。直径約12～14cmのものには，口縁部から底部にかけて緩やかに内湾するもの（6～10）と，見込みの端を内側から押し出すもの（11～13）がある。14・15は小皿で，内面を撫でた後，口縁部を横撫でする。底外面は無調整である。16は底部近くの器壁が厚く，口縁部へ向かって細くなる。体部がほぼ垂直に立ち，平底を呈する形態の口縁部であろう。17は大皿で，口径は約18cmを測る。

18～20は珠洲である。18は甕で，頸部はやや短く，口縁部は嘴状に挽き出される。Ⅰ～Ⅱ期に比定される[注1]。外面の叩きは細かく，3cm幅に12条を数える。19・20は擂鉢である。19は，口縁部下にやや膨らみをもち，口縁外端をわずかに挽き出す形態である。Ⅲ期に比定される。20は底外面に回転糸切り痕が残る。内面は擦れて滑らかになっている。

21～33は木製品である。21は端部が丸く加工され，断面は正方形である。部分的に漆が残る。何かの柄であろうか。22は用途不明の製品である。薄い板状で先端が尖り，小孔がある。23～31は箸である。23・27・28・31はやや幅広で偏平であり，その他は断面が円形に近い。32・33は住居址の南端付近で横倒しになった状態で出土しており，柱の可能性がある。32は表面に樹皮が残り，上端は欠損，下端は芯に向かって削り尖らせる。33も表面に樹皮が残るが，両端は欠損しているため加工痕はみられない。

5号掘立柱建物（SB05，第148図）

34・35は中世土師器である。見込みを一方向に撫でた後，口縁部に一段の撫でを施す。底外面は無調整である。34は小皿で，浅く平坦に成形する。35は直径12cm前後で，見込みの端を内面から指で押し出す。両者とも黒変がみられる。

36は珠洲擂鉢である。端部は外傾する。珠洲Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

6号掘立柱建物（SB06，第148図）

37は中世土師器皿である。口縁部は横撫でし，底外面は無調整である。

7号掘立柱建物（SB07，第148図）

38は珠洲擂鉢である。口縁端部は外傾する。胎土は粗い砂粒や，5mm大の白色礫粒を含む。Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

10号掘立柱建物（SB10，第148図）

39は中世土師器皿である。口縁部を横撫でし，見込みの端を内側から押し出す。底外面は無調整である。

11号掘立柱建物（SB11，第148図，図版127）

40は須恵器杯蓋である。頂部は偏平で，段がつき，口縁端部に向かって薄くなる。回転撫で調整を

施す。外面全面及び内面頂部の直径約10㎝の範囲には自然釉が掛からず，重ね焼きをしたものと考えられる。

12号掘立柱建物（SB12，第148図，図版126）

41・42は中世土師器皿である。見込みを撫でた後，口縁部に一段の横撫でを施す。42は右回りに撫で，外側へ撫で抜いた痕跡がみられる。底外面は無調整である。

(2) 溝

13号溝（SD13，第149図，図版126・130）

43は須恵器杯である。口径は約16㎝を測り，やや大型である。44は須恵器鉄鉢であろうか。底外面に糸切り痕を残す。

45～47は中世土師器皿である。見込みを撫でた後，口縁部に横撫でを施し，底外面は無調整である。45は外面の横撫で幅が狭く，底部はやや角張り，逆台形状になる。46は口縁部外面の横撫で直下で折れて底部となる。47は小皿で，器壁が非常に薄いものである。

48は温石である。厚さ1.2㎝の薄い板状で，両面に擦痕がある。石材は滑石である。

25号溝（SD25，第149図，図版127）

49は須恵器杯蓋である。頂部は平坦で，篦切り後回転撫でを施す。縁端部は断面三角形を呈する。

50は土師器長胴甕である。調整は磨耗のため不明である。口縁部は外傾し，端部は上方へつまみ上げ内面に段がつく。

26号溝（SD26，第149図，図版126・128）

51～53は中世土師器皿である。51は外面に灯心油痕と思われる煤が垂下している。見込みを撫でた後，口縁部を横撫でし，端部にやや弱く面をとる。底外面は無調整である。52は，見込みを刷毛状工具で撫でた後，口縁部に二段の横撫でを施す。底外面は無調整である。53は，口縁部を横撫でし，外面は無調整である。52・53は胎土に角閃石を含む。

54・55は珠洲擂鉢である。54は，やや内湾気味に立ち上がり，口径に対して器高が高い腰高の器体である。口縁端面は外傾する。器壁は口縁部に近づくにつれ薄くなる。卸目は，直線的に施されるものの中に一部波状のものがみられる。一単位は，2.8㎝幅に12条を数える。底外面に静止糸切り痕が残る。Ⅱ期に比定される。55は特に内面のロクロ目が顕著で，波状の卸目をいれる。卸目の一単位は，８㎜幅に８条を数える。Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

34号溝（SD34，第150図，図版127・128）

56は須恵器杯蓋である。頂部は平坦で，回転篦削りを施し，縁端部は回転撫でを施す。

57は非ロクロ成形の土師器である。大型の皿状の器種の底部であるが，外面に，幅約1.5㎝の輪高台状の剝離痕があり，高坏の可能性がある。調整は不定方向に撫で，指頭圧痕が残る。

58・59は中世土師器皿である。非ロクロ成形の小皿で，口縁部に横撫でを施し，底外面は無調整である。

60・61は珠洲である。60は甕である。口縁部は嘴状に挽き出す。Ⅰ～Ⅱ期に比定される。61は擂鉢である。口縁部は，端面が外傾し，内端を爪状に尖らせる。Ⅱ期に比定される。

55号溝（SD55，第150図）

62は珠洲擂鉢である。口縁部は端面が水平で，内端部がわずかに肥厚する。Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

87号溝（SD87，第150・151図，図版126・128・129）

63・64は須恵器である。63は杯蓋である。口縁部から頂部に向かって外反し，縁端部は鋭く折れて

断面三角形を呈する。64は甕である。口縁端面は水平で，外端部を挽き出す。

65～71は中世土師器皿である。非ロクロ成形で，口縁部を横撫でし，底外面は無調整である。65～69・71は見込みを撫でた後，口縁部に一段の横撫でを施し，底外面は無調整である。口縁部から底部に向かって緩やかに内湾するものが多いが，見込みの端を内側から押し出すもの（69・71）もある。後者は前者に比べて器壁が厚く，特に口縁部下で肥厚する。68は器壁がやや厚く，二段の撫でを施す。胎土には角閃石が含まれる。

72は中国製白磁碗である。口縁部が外反し，端部は水平になるもので，太宰府分類Ⅴ類4に相当する[注2]。12世紀中頃から後半のものである。

73～78は珠洲である。73～77は擂鉢である。器体は直線的に開き，口縁部は水平（73・75・76），または外傾（74・77）する。卸目は，一単位につき，73は1.3㎝幅に5条，74は2.7㎝幅に13条，75は2.5㎝幅に11条，76は2.6㎝幅に15条を数え，75は一条が太く深く刻み込まれている。76は焼成があまく内面が磨滅しているが，その他は堅緻である。73はⅡ～Ⅳ期に，74～77はⅣ期に比定される。78は甕である。器体は肩が球状に張り出し，頸部は短く，口縁部はやや上向きに嘴状に挽き出す。外面叩きは細かく，3㎝幅に約10条を数える。Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

79は銅製品である。遺構上面から出土した。一端はほぼ平坦に加工され，もう一端は欠損しており，割れ口にのみ緑青がみられる。リング状で断面は正方形であり，形状から取手金具等の部品かと考えられるが，正確な用途は不明である。

178号溝（SD178，第151図，図版126）

80は中世土師器皿である。見込みを撫でた後，口縁部に横撫でを施す。口縁端部は外方に面をとる。底外面は無調整である。

81は珠洲擂鉢である。口縁部は，端面が外傾し内端部を爪状に仕上げる。焼成は堅緻で，ロクロ目が顕著である。Ⅱ期に比定される。

183号溝（SD183，第151図，図版123）

82～91は中世土師器皿である。82～84・89はほぼ完形で，溝内の一地点に寄り集まった状態で出土したものである。見込みを撫でた後，口縁部に横撫でを施す。横撫では，右回りに外方へ撫で抜くものが多い（84・85・87・89・91）。底外面は無調整であるが，板状圧痕を残すもの(89)もある。

(3) 井戸

109号井戸（SE109，第152図，図版127・129・131～133）

92は中世土師器皿である。口縁部に横撫でを施す。

93は須恵器壺である。肩部外面にカキ目を施す。口縁部は外傾し，端部は外方に肥厚する。

94は珠洲擂鉢である。SE109の井戸側は石積みであり，これは石と一緒に積まれたものである。器体は膨らみをもち，口縁端部は内傾する。卸目は，一単位が2.5㎝幅に11条を数え，密に施される。胎土に8㎜大の白色礫粒を含む。Ⅳ期に比定される。

95～97は漆器である。95・96は椀で，内外面ともに黒色漆塗りである。96は底外面に「＋」の刻線がある。97は皿である。炭粉渋下地に内外面黒色漆塗りである。底外面に5箇所ロクロの爪痕が残る。

98～100は箸である。いずれも幅広で偏平である。

101は加工木である。一端は削って細くし，孔を穿つが，その先は欠損している。もう一端は割れている。部材であろうか。

102～106は曲物である。102は直径16.4㎝の小型の曲物である。側板は2重乃至3重になっており，

内綴じである。内面はケビキされ，本綴じ部分には外面ケビキもある。内面に黒色漆を塗る。103～106は直径約60cmで，ほとんど同じ大きさである。すべて内綴じであり，内面にケビキをいれるが，外面ケビキはみられない。これらは井戸側として使用されていたものである。井戸内では，曲物は5段積まれており，下から103，104，105，106の順に積まれ，最上段は割れた側板のみ残っていた。103は，15箇所に釘穴がみられるが，その間隔は不規則である。また，3箇所にへぎ板が差し込まれていた。104・106にも釘穴があり，井戸側に転用されたものと考えられる。106は内側にのみ綴り皮が残っている。また，102は下から二段目の井戸側(104)の内部から出土した。

123号井戸（SE123，第153図，図版124・125）

107は須恵器杯である。口径は約9cmの小型の杯である。

108～123は中世土師器皿である。108～117は口縁部に横撫でを施し，底外面は無調整である。底部まで残存する113～116でみると，見込みの撫では，すべて口縁部の横撫でに先行している。111は器壁が薄く，見込みの端を押し出すことによって，口縁部は強く外反している。端部は丸くおさめるものが多いが，115は外方に面をとっている。110は口縁部外面の一部に煤が付着する。118は，体部は内湾しつつほぼ垂直に立ち上がり，平底を呈する。口縁部から底部の際までを横撫でする。底外面は平滑で，刷毛状の工具痕が残る。これは1cm幅に8条の平行な浅い条線となって残っているもので，焼成前に接地面に敷かれたものの痕跡かもしれないが，不明である。119～123は小皿である。口縁部に横撫でを施し，底外面は無調整である。119は右回りに横撫でし，外方へ撫で抜く。119・121は口縁端部に面をとる。

124は中国製青磁碗である。内面の一部に片切り彫りの劃花文と思われる文様がみられる。

125は土錘である。縁に丸みを持った円柱状で，両端は削り取って面をとる。表面は，全面を縦方向に細かく削って成形している。

126は曲物である。側板は一重であり，タガは上・下に巻かれる。クレゾコで釘は8本打ち込まれており，特に側板とタガを重ねて3重になる打合せ部分は大（約4mm）・小（約3mm）の木釘で留め，その他は粗い間隔で留める。綴じ方は，外綴じの可能性もあるが，残存状態が悪く不明である。側板には内面ケビキがあるが，タガにはない。側板と底板は柾目材を用いるが，タガは板目材である。

127は円形板で，8箇所に釘痕がみられるため底板と考えられる。縁は，斜めに削られている。一部焼けて炭化した部分がある。直径約1cmの穴状に窪む部分があるが，貫通はしていない。

128は板状の加工木である。厚さ4mmの薄い板状で，端が丸く加工されている。

129は鍬身である。縦に割れ，中央から半分以上欠損している。端部は鉄刃装着のためか，両面から削り尖らせる。一面は表面が欠けているが，もう一面は下半を横方向に削っている。籾殻が付着していた。樹種はクヌギで柾目材を用いる。

130～144は箸である。断面が丸または隅丸の正方形のものと，偏平なもの（132・133・141・142）がある。両端が折れずに残っているものは，すべて両方を尖らせる両口箸である。

145～149は銅銭である。145は咸平元寶，146は嘉祐通寶，147は元禧通寶，148は紹聖元寶，149は元祐通寶である。

(4) 土坑

21号土坑（SK21，第154図，図版126）

150・151は中世土師器皿である。見込みを撫でた後，口縁部に横撫でを施す。150は横撫で直下で折れて底部となるが，151は見込みの端を押し出し，外面の横撫で下が外方へ膨らむ。

23号土坑（SK23，第154図，図版126）

152～154は中世土師器皿である。口縁部に横撫でを施し，底外面は無調整である。154は底部に小孔を穿つ。

137号土坑（SK137，第154図，図版129）

155は土師器椀である。内面は磨滅し調整は不明であるが，底外面は回転糸切り痕を残す。

156・157は中世土師器皿である。縁部に横撫でを施し，底外面は無調整である。156は内面に煤が付着する。

158～160は珠洲擂鉢である。158・159は，口縁端部が外傾し，159は端面が肉厚で丸みを帯びる。Ⅰ～Ⅱ期に比定される。160は底外面に静止糸切り痕が残る。卸目は1.6㎜幅に6条を数える。

141号土坑（SK141，第154～156図，図版126・129～133）

161・162は須恵器である。161は杯蓋のつまみ部分で，偏平な形態である。162は杯身で，回転撫で調整を施す。

163～175は中世土師器皿である。163は，器壁が厚く，胎土に角閃石を含む。口縁部にやや形骸化した二段撫でを施す。底外面は無調整である。163～166・169・170は，口縁部から底部にかけて緩やかに内湾しつつ立ち上がる。見込みを撫でた後，口縁部を横撫でし，底外面は無調整である。167・171は横撫で直下で折れ，底部となる。見込みを撫でた後，口縁部に横撫でを施す。167は，見込みの撫では，一般的な一方向の撫でではなく弧を描いて手前に引き戻すように撫でている。底外面は無調整で，板状圧痕が残る。168は，見込みの端を押し出し，横撫で直下が外方へ膨らむ。口縁部は外反し，端部は上に引き上げる。底外面は無調整である。172～175は小皿である。見込みを撫でた後，口縁部を横撫でし，底外面は無調整である。172・175は口縁部から底部にかけて緩やかに内湾する。175は胎土に角閃石を含む。173・174は横撫で直下で折れ，底部となる。173は底外面に煤が付着する。

176～179は珠洲擂鉢である。176は内湾気味に立ち上がり，口縁部は端面が水平になる。177は口縁端部は外傾し，外面が肥厚する。卸目は，一単位が1.5㎝幅に8条を数え，疎らに施される。特に内面のロクロ目が顕著に残る。Ⅰ～Ⅱ期に比定される。179は，器体が直線的に開き，口縁部は端面が水平になる。口縁部の内側に沈線が一条みられる。卸目は，一単位が2㎝幅に8条を数える。Ⅳ期に比定される。

180は土錘である。一部縦方向の削りがみられるが，大部分は指押さえにより成形している。円柱形で，端部は削り取って面をとる。

181・182は漆器皿である。両者とも，内外面に炭粉渋下地，黒色漆を塗るが，底外面には塗らない。材はケヤキの柾目材を用いる。

183は下駄の歯であろうか。上部が欠損しており，どんな構造であったかは不明である。スギ材を用いる。

184は円形板である。2箇所に釘穴がみられることから，底板と考えられる。

185～208は箸である。185～188・190～192は断面が円形を呈する。193～198・202・203は断面がほぼ正方形を呈する。199・200・206～208は偏平で断面は長方形を呈する。189・201・204・205は偏平で断面は長楕円または不整形を呈する。先端が残っているものはすべて削られて細く尖る。197は一端が部分的に焼け焦げている。

209～213は加工木である。209は，上部が欠損し，縦方向にも割れている。下部は芯に向かって削り尖らせる。残存している部分での最大の厚みは約9㎝を測る。形状から柱または杭の一部と考えら

れる。210は，断面楕円形の棒状で，全面を縦方向に削っている。上端は横方向に削り，下端は縦，横方向の段状に切り取っている。211は，断面が隅丸三角形の棒状で，両端は削って仕上げる。ほぼ中央に方形の孔が貫通している。断面形を二等辺三角形とすると，孔は頂点寄りにあり，孔の付近は両面とも底辺寄りの部分に細かな傷がみられわずかにくびれていることから，縄などを通して底辺側へ引いたものとも推測される。212は，一辺約８㎝の正方形で，四隅の角を切り落としている。厚さ２㎜の柾目材を使用する。213は薄い板状で，片面にケビキ状の切り込みがみられる。厚さ３㎜の柾目材を使用する。

166号土坑（SK166，第156図，図版129）

214は中国製白磁碗である。見込みに沈線状の段をもつ。釉は，内面全面及び，外面の底部際までかかる。胎土は灰白色を呈し，黒色の細粒を含む。太宰府分類Ⅴ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半のものと考えられる。

167号土坑（SK167，第156図，図版129）

215は須恵器杯蓋である。縁端部は断面三角形を呈する。

216は中国製白磁碗である。口縁部は玉縁状になる。胎土は灰白色を呈し，黒色の細粒を若干含む。太宰府分類Ⅳ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半のものと考えられる。

175号土坑（SK175，第156図）

217は珠洲擂鉢である。器体は内湾気味に立ち上がり，口縁部は端面が水平で，外端が突出する。特に内面のロクロ目が顕著である。Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

181号土坑（SK181，第156図，図版126）

218～222は中世土師器皿である。底部から口縁部にかけて緩やかに内湾する形態である。見込みを撫でた後，口縁部を横撫でし，底外面は無調整である。218は内面に煤が付着する。218・221・222は胎土に角閃石が含まれる。

182号土坑（SK182，第156図，図版126）

223～226は中世土師器皿である。223・224は，ロクロ成形で底外面に回転糸切り痕を残す。225・226は底部から口縁部にかけて緩やかに内湾する形態である。口縁部を横撫でし，底外面は無調整である。226は内面に刷毛状撫でがみられる。225・226は胎土に角閃石を含む。

227は珠洲甕の底部である。

(5) 方形周溝状遺構

49号土坑（SX49，第157図，図版125）

228～233は中世土師器皿である。228は柱状高台で，底外面には右回転の糸切り痕がある。229はロクロ成形の皿である。体部はやや内湾気味に開く。230・231は器壁が厚く，230は口縁部に二段の横撫でを施す。底外面は無調整である。両者とも胎土に角閃石が多く含まれる。232・233は，小皿で，見込みを撫でた後，口縁部を横撫でする。底外面は無調整である。

234は中国製白磁皿である。内面底部はほぼ平坦で，見込みに沈線状の段がある。底部は平坦で，やや上げ底状にし，体部との境は明瞭である。体部は全面に釉がかかるが，底外面は剝ぎ取っている。胎土は灰白色を呈し，黒色の細粒を若干含む。

(6) 谷状地形（第157図，図版127・129・130）

235～239は縄文土器である。235～237・239は深鉢である。235は，地紋は条痕文で，２条の沈線の間に押し引き列点文を施す。晩期中葉のものである。236は条痕文を施す。晩期中葉のものである。

237は底部で，後期末から晩期のものであろう。239は縦に近い斜め方向の条痕文を施す。後期末または晩期のものであろう。238は浅鉢である。地紋は条痕文で，沈線の間に押し引き列点文を施す。晩期中葉のものである。

240・241は中世土師器皿である。見込みを撫でた後，横撫でを施す。底外面は無調整である。底部から口縁部にかけて緩やかに内湾しつつ立ち上がる。

242は中国製青磁碗である。外面に片切り彫りの鎬蓮弁文がある。太宰府分類では龍泉窯系青磁碗Ⅰ類5bに相当し，1220～1260年のものと考えられる。

243・244は打製石斧である。243は短冊形，244は分銅型を呈する。片面に自然礫面を残し，側縁部及び刃部に細かな剝離痕がみられる。石材は，243は安山岩，244は凝灰岩である。

245は安山岩製の凹基無茎石鏃である。基部中央の抉りによって，左右に逆刺を作り出している。

C　その他の遺物

(1) 土器・陶磁器（第158～162図，図版126～130）

縄文土器（246）　246は深鉢である。外面は撫で，内面は横方向のミガキを施す。外面及び断面に粘土接合痕がみられる。晩期中葉のものである。

土師器（247・248）　247は椀である。底外面に回転糸切り痕が残る。248は小甕である。外面はロクロ撫で，内面にはカキ目を施す。底外面は糸切り痕が残る。

須恵器（249～279）　249～253は杯蓋である。249は，頂部に篦切り痕を残し，体部は撫で調整を施す。外面に杯身口縁部，内面に杯身高台が接するように置かれたと思われる重ね焼痕がある。縁端部は折り曲げ，断面方形を呈する。250は頂部篦切り後撫でている。頂部は平坦で稜をもち，縁端部は小さく折り曲げる。251・252は頂部から縁部にかけて緩やかに湾曲し，全面ロクロ撫でを施す。縁端部は断面三角形を呈する。253は体部は緩やかに湾曲し，縁端部は折り曲げる。全面撫でを施す。254～261は高台杯である。ロクロ撫で調整を施し，回転篦切りである。254は外面に，高台を張り付けた接合痕がみられる。底外面に「大」の墨書がある。263～270は無台杯である。263・264・268～270は無高台の杯である。268～270は体部が大きく開く形態である。268・269は回転篦切り，270は静止糸切りである。262・265～267は杯で，高台の有無は不明である。回転撫でを施す。267は体部に3条の沈線をもつ。271は器種不明である。ロクロ撫で調整を施し，底部内面は一方向の撫でを施す。底外面には静止糸切り痕が残る。272は鉄鉢で，体部はやや内湾し，口縁端部はほぼ水平に面をなす。回転撫で調整を施す。273～275は壺である。273は肩部が丸みをもって張り出す。内外面に回転撫でを施す。274・275は体部下半から底部にかけての破片で，高台は欠損している。274は回転撫で，275は体部外面に回転篦削りを施す。276～279は甕である。276は口頸部で，緩やかに外反して開き，端部は水平に面を取る。口径は24cm前後である。回転撫でを施す。277～279は頸部から肩部にかけての破片である。277は，頸部に回転撫でを施し，肩部は外面に平行叩き，内面に同心円当て具痕がみられる。頸部直下から自然釉がかかる。278は頸部に回転撫でを施す。肩部外面は自然釉がかかり，内面は部分的に剝離している。279は，頸部に回転撫でを施し，肩部外面に平行叩き及びカキ目，内面は同心円当て具痕が残る。

中世土師器（280～324）　280～324は皿である。280～290はロクロ成形で，体部は緩やかに内湾しつつ開くものが多い。底部内面はなだらかに落ちてほぼ平坦になるものと，中央部がやや盛り上がるものがある。全面に回転撫でを施し，底外面は回転糸切りである。ロクロの回転方向がわかるものはすべて右回転である。280～282は柱状高台をもち高台周辺まで丁寧に回転撫でを施す。316は胎土に

角閃石を含み，黒変がみられる。291～324は非ロクロ成形である。291・292は器壁が厚く，幅広の二段撫でが形骸化したものと思われ，胎土に角閃石を含む。293～295は口縁部に幅の狭い横撫でを施す。293は直線的に開き，294・295は底部から口縁部にかけて緩やかに内湾し立ち上がる。296～305は，見込みの端を内面から押し出すもので，外面の口縁部下がやや膨れるものと，底部に丸みをもち口縁部が直立するもの（299・305）がある。見込みを撫でた後，口縁部を横撫でし，底外面は無調整である。306～323は小皿である。306・307は口縁部に二段撫でを施す。口縁部は面を取るように上方へつまみ上げ，断面三角形を呈する。307は内面に刷毛状の撫でを施す。胎土に角閃石を含む。308は，内面に刷毛状の撫でを施した後，口縁部を横撫でする。内面は平坦で，口縁部は短く立ち上がる。胎土に角閃石を含む。309～322は，平坦またはやや丸みをもつ底部に，短い口縁部がつく。見込みを撫でた後，口縁部に横撫でを施し，底外面は無調整である。横撫では右回りで，外方へ向かって撫で抜くものが多い。323は，平坦な底部と直立する口縁部をもつ。底部は，外面では角張るが，内面は緩やかに内湾する。器壁が非常に薄く，底部は内外面から指で挟んで押さえるように成形し，指頭圧痕が残るが，器面は軽く撫でている。口縁部内外面に，煤が流れたように付着している。324は，口径約17㎝に復元され，大型の皿の可能性があるが，破片であるため正確な計測値は不明である。胎土に角閃石を含む。

八尾（325・326）　325・326は甕である。325はN字状を呈する口縁部で，端部は長く垂下せず，13世紀後半頃に位置づけられる。外面には灰オリーブ色の自然釉がかかり，断面は黄灰色を呈するが，焼成具合により色調は二層に分かれる。326は底部である。内面は篦で撫でる。底外面には篦を差し込んで器体を起こしたと思われる痕跡がある。色調は内外面にぶい黄橙色を呈するが，断面は焼成により三層に分かれ中央部は黄灰色を呈する。325・326とも胎土に白色粒を多く含み，焼成は良好である。

珠洲（327～353）　327・332は甕で，327は砂底である。332は口縁部が鋭く外屈，垂下する形態で，Ⅰ～Ⅱ期に比定される。328～331は壺である。328は小壺で，肩が張り，口縁部は外湾しつつ短く立ち上がり，端部は先細りする。肩部に波状文をめぐらし，その上から約５㎜の幅でカキ目状の沈線が入るが，文様を意図したものかは不明である。329は胴部に大きく弧を描く波状文を施す。底外面には糸切り痕が残るが，回転または静止糸切りの別は判然としない。330は口頸部で，弧状に外反し，口縁部は方頭を呈し端部が外傾する。端面は板小口状器具で強く撫で回し，中央が沈線状にくぼむ。333～353は擂鉢である。口縁部の形態は，水平口縁で先細り方頭におさめるもの（334～338・340），外傾口縁で内端を爪状に仕上げたもの(339)，端面がやや外傾し，端部が丸みを帯びる方頭(341・342)，外傾口縁で端部が著しく拡張する方頭(343)，水平口縁でやや拡張した端面に波状文を施すもの(344)がある。338は，縦位の波状文を1.3㎝幅に11条の繊細な原体を用いて疎らに施す。334～338・340はⅠ～Ⅱ期に，341・342はⅡ期に，339はⅡ～Ⅲ期に，343はⅣ期に，344はⅤ期に比定される。345は底外面回転糸切り，346・349～352は静止糸切りである。

中国製白磁（354～358）　354はいわゆる口禿の碗で，太宰府分類Ⅸ類に相当し，1250年～1330年のものと考えられる。355は皿である。口縁部は内湾し，器壁は薄い。釉は黄色味が強く，極薄くかかる。太宰府分類Ⅵ類１aに相当し，1060～1160年のものと考えられる。356は皿である。体部はほぼ直線的に開き，口縁部はわずかに外反する。口縁部の外面に沈線状の段がある。釉は灰白色を呈する。見込みの釉は掻き取り，外面体部下半には施釉しない。357は碗である。高台は外面を直に，内面を斜めに削り出す。釉は内面全体に薄くかけられ，外面には施釉しない。細かな貫入がみられる。太宰府分類Ⅱ類に相当し，1060～1160年のものと考えられる。358は碗である。高台の幅は広く，削り出しが浅いため，底部の器壁は厚い。胎土は粗く，黄色味の強い灰白色を呈する。釉は灰黄色を呈し，

貫入があり，内面にのみ施される。太宰府分類Ⅳ類１に相当し，1060～1160年のものと考えられる。

中国製青磁（359～362）359・360は碗である。359は外面に片切り彫りの鎬蓮弁がある。太宰府分類Ⅰ類５bに相当し，1220～1260年のものと考えられる。360は，内面に片切り彫りの劃花文がある。太宰府分類Ⅰ類２に相当し，1160～1230年のものと考えられる。361は太宰府分類杯Ⅲ類に相当する。口縁部は外反して平坦な面を成し，端部は上方へ折れる。明緑灰色の釉が内外面に厚くかかる。362は，いわゆる稜花皿で，口縁端部を波状に浅く削り込む。15世紀のものと考えられる。

越中瀬戸（364）　364は匣鉢である。外面と，内面の口縁部に鉄釉を施す。

瀬戸美濃（365）　365は徳利の頸部であろうか。下端は粘土を接いだ部分で割れているようである。外面に鉄釉を施す。

信楽（366）　366は灯明皿である。内面全面及び外面の口縁部にのみ透明釉がかけられ，細かな貫入がみられる。体部上半は回転撫で，下端から底外面にかけて回転削りを施す。口縁部には灯心油痕が付着しており，特に釉がかかっていない部分に厚く付着している。19世紀以降のものである。

灰釉陶器（367）　367は段皿である。内面に縁帯をもち，内面のみに薄く施釉する。

瀬戸本業（369）　369は椀である。胎土はやや黄みがかった灰白色を呈する。内外面に染付がある。

伊万里（370）　370は陶胎染付椀である。胎土は灰色で，釉もやや暗い灰色に焼きあがっている。18世紀前半のものと考えられる[注３]。

唐津（371～373）　371は溝縁皿で，内外面に灰釉がかかる。372は内野山西窯系の皿である。内面に銅緑釉，外面体部に灰釉を施し，内面は蛇の目釉剝ぎする。高台部分に砂目が残る。373は擂鉢である。卸目は密に施され，内外面全面に錆釉を施す。高台は付け高台である。

陶器（363・374）　363は壺である。四耳壺の口頸部であろう。頸部は体部から緩やかに外湾して立ち上がり，口縁部は玉縁である。外面全面と内面口縁部に灰釉がかかる。胎土には砂粒や気泡がみられるが，焼成は堅緻である。374は小型の壺である。水滴であろうか。鉄絵の上から透明度の高い釉を薄くかける。釉は内面全面及び外面の体部上半にかかる。回転撫で調整を施し，回転糸切りである。

磁器（368）　368は碗である。胎土は灰白色で緻密であり，堅緻である。内外面に染付がある。

(2)　木製品（第163図，図版133）

375は，加工痕は認められないが，柱痕跡状の覆土中から直立した状態で出土しており，柱が腐朽したものの可能性がある。376も加工痕はみられないが，出土状況から柱穴の礎板の可能性があると考えられる。ただし，375・376が出土した小土坑は，建物を構成する柱穴ではない。

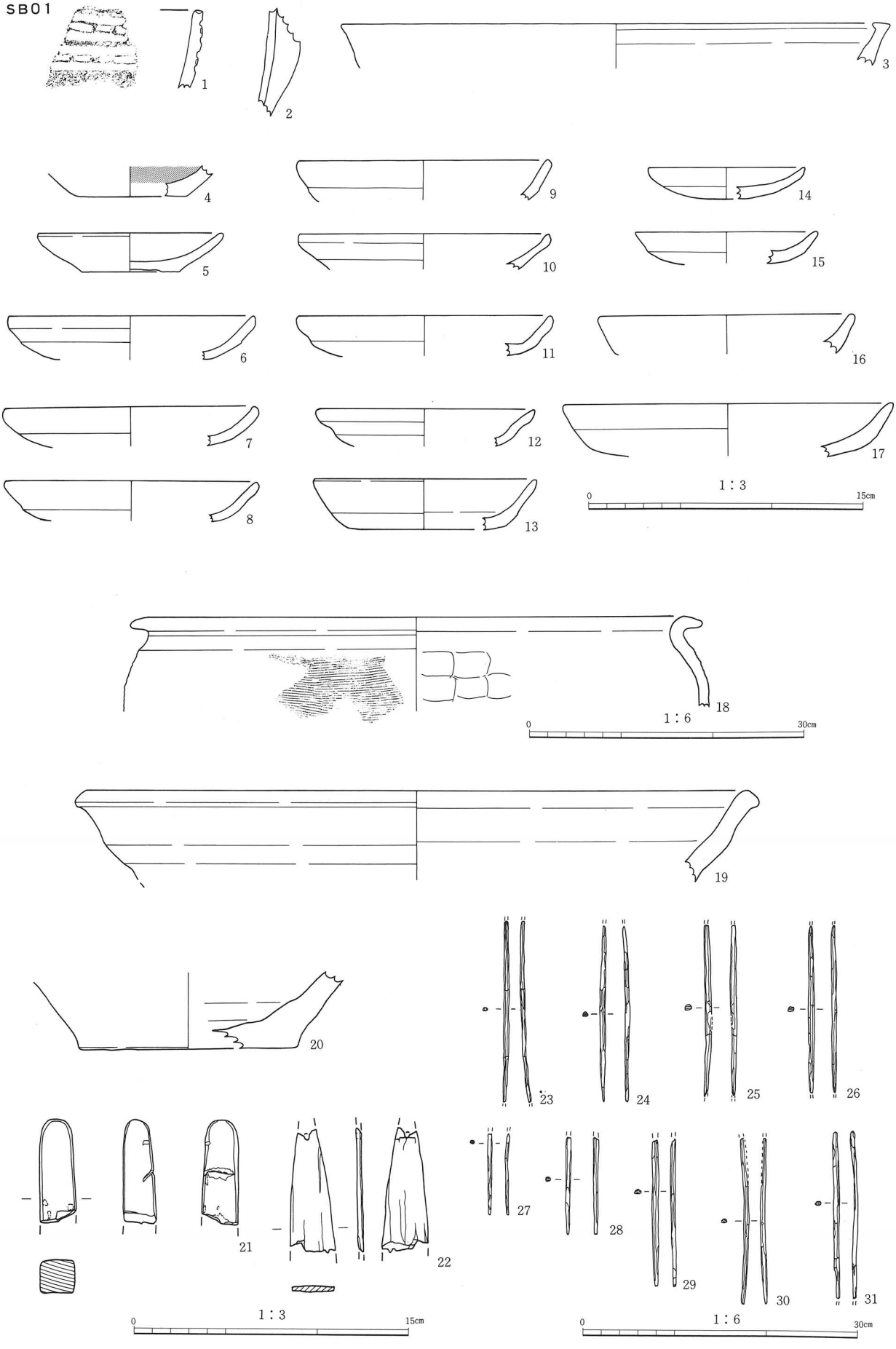
(3)　石製品（第163図，図版130）

377は石臼である。下臼で，心棒受けがみられるが欠損している。摺り面はほぼ水平で，すり減っているため目のパターンは不明である。

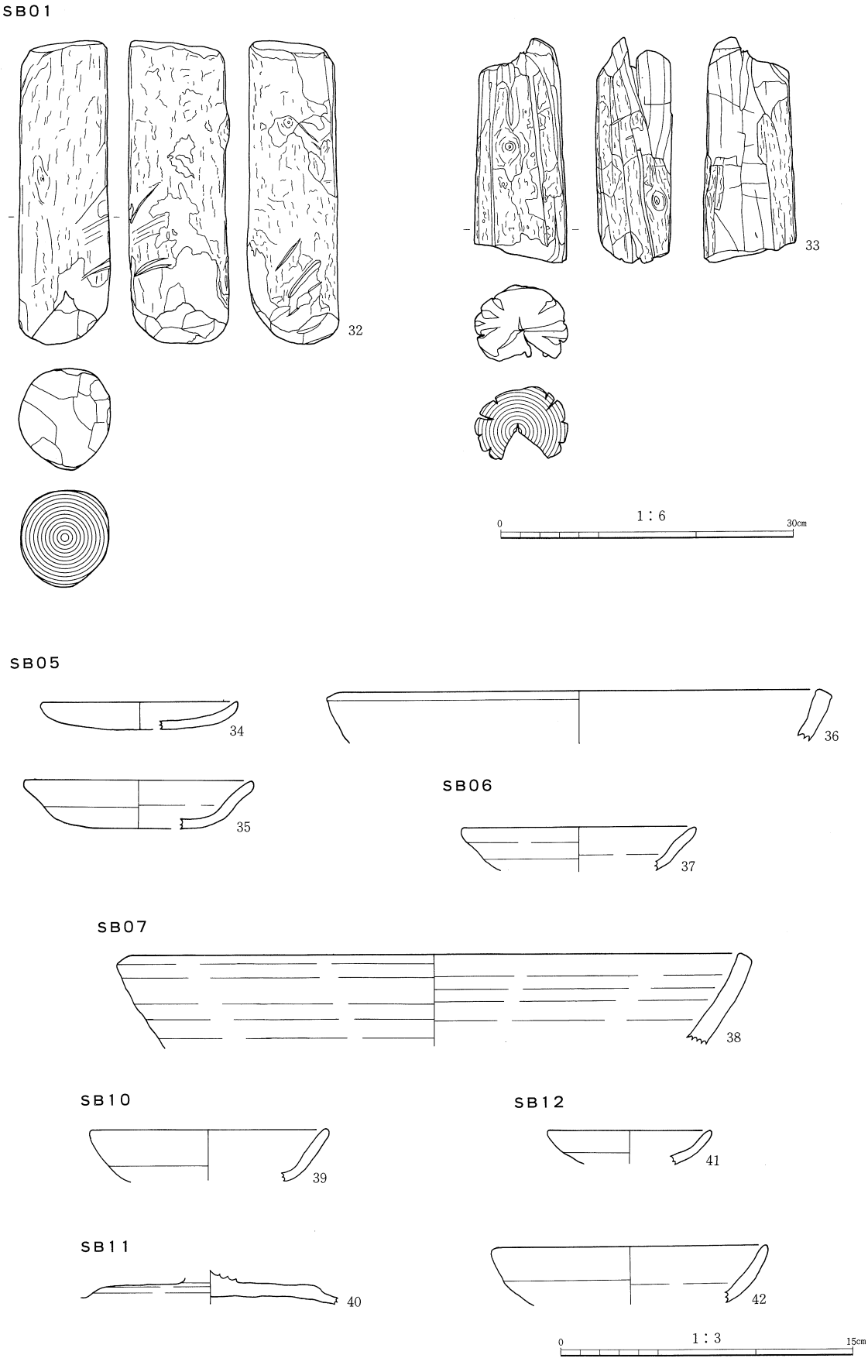
(4)　金属製品（第163図，図版130）

378～383は銅銭である。378・379・382は寛永通寶で，前二者は裏面に青海波文がある。380は政和通寶である。381は文久永寶で裏面に青海波文がある。383は元禄通寶である[注４]。　（越前慎子）

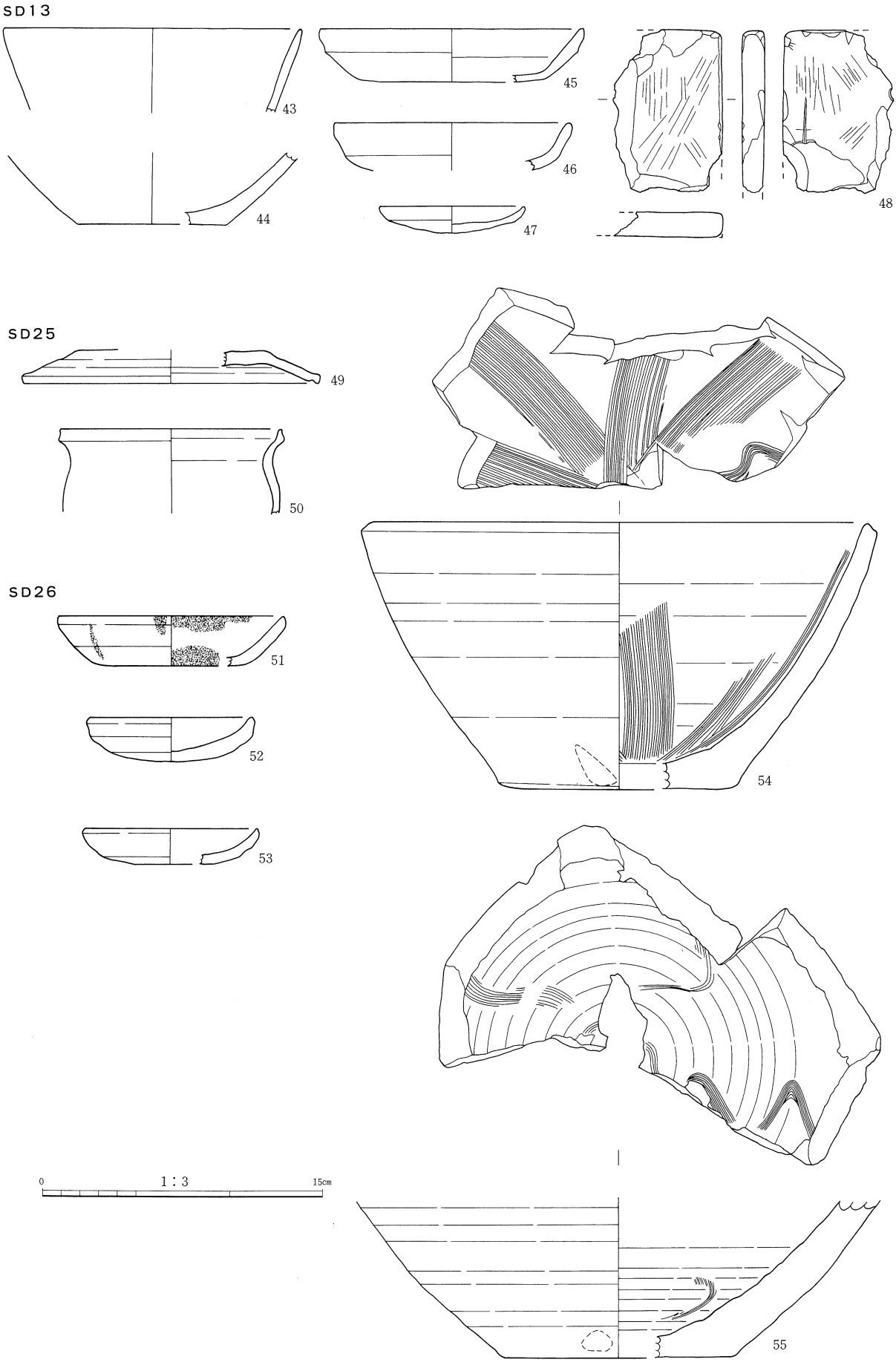
注１　珠洲の時期区分とその年代については以下の文献を参考にした。
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
注２　横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４
山本信夫 1988 「北宋期貿易陶磁器の編年－太宰府出土例を中心として－」『貿易陶磁研究』No.8
注３　大橋康二 1988 『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布－発掘資料を中心として－」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館
注４　兵庫県埋蔵銭調査会 1994 『中世の出土銭』



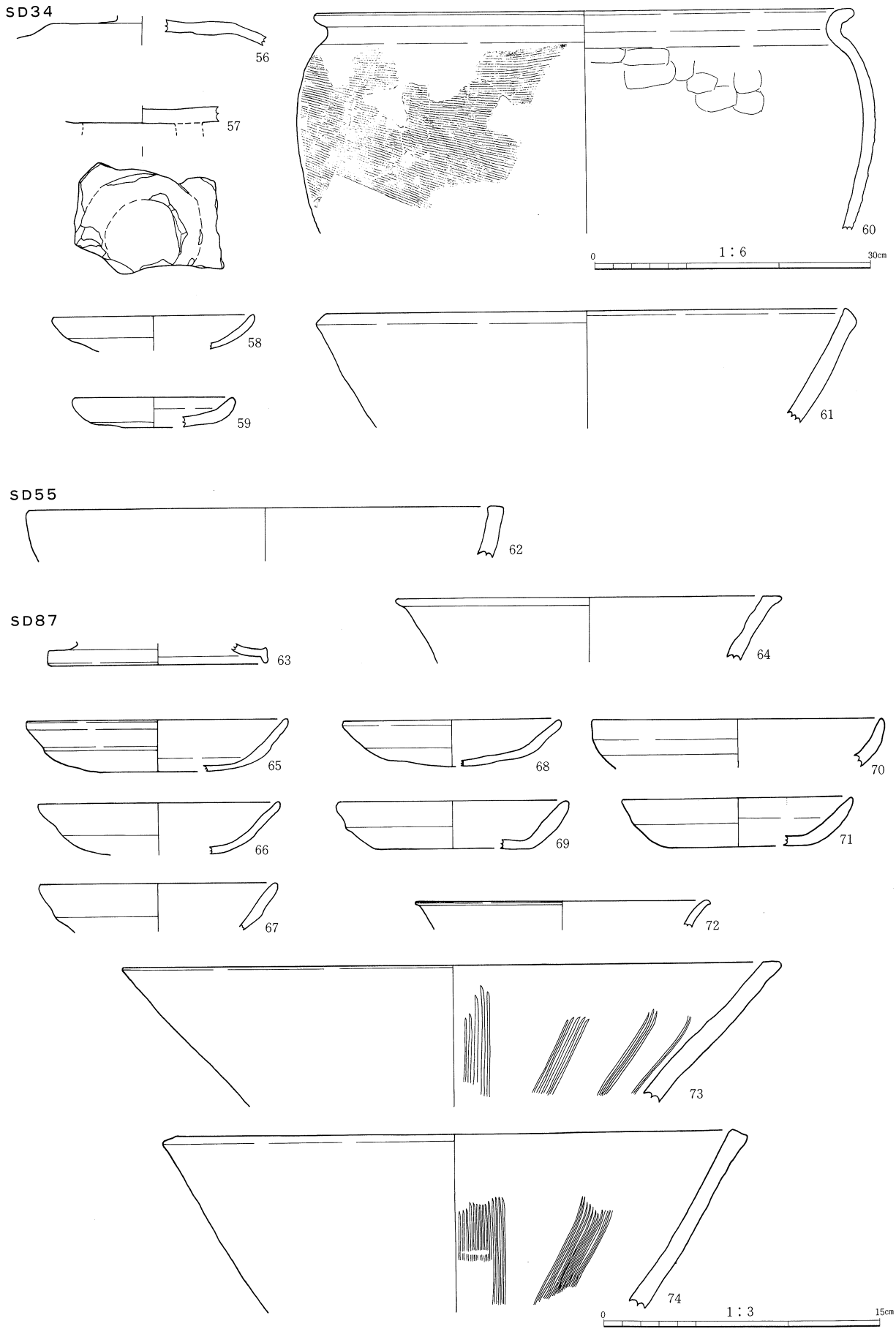
第147図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図１（1/3，18･23～31　1/6）



第148図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図２（1/3，32･33　1/6）

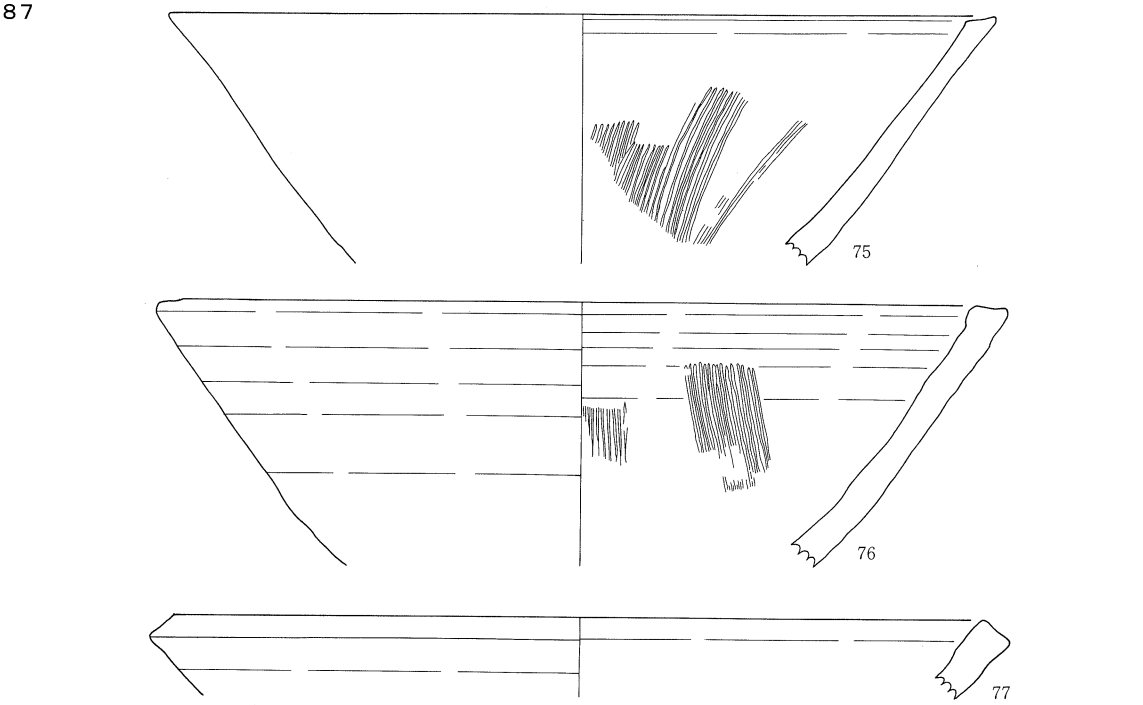


第149図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図３（1/3）

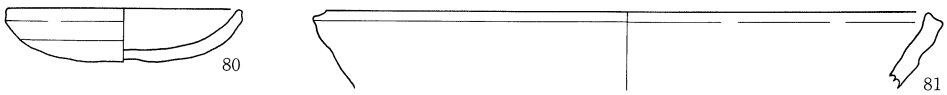


第150図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図４（1/3，60　1/6）

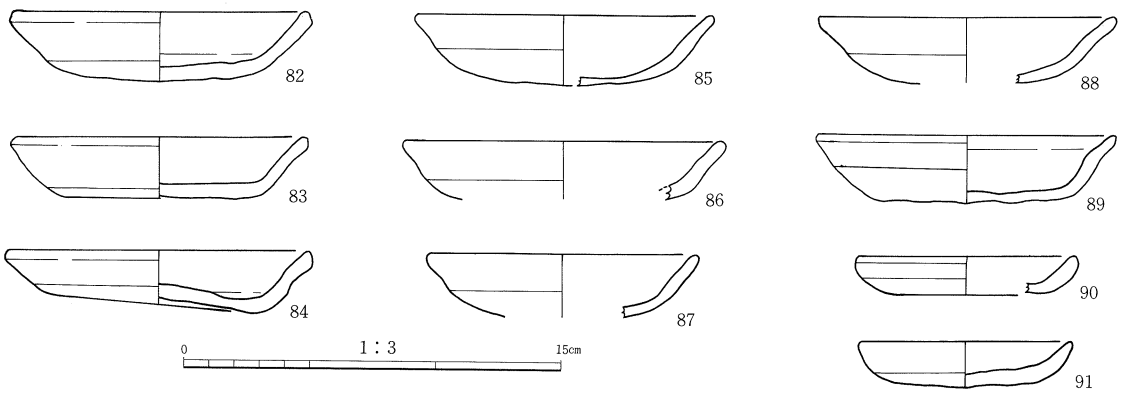
SD87



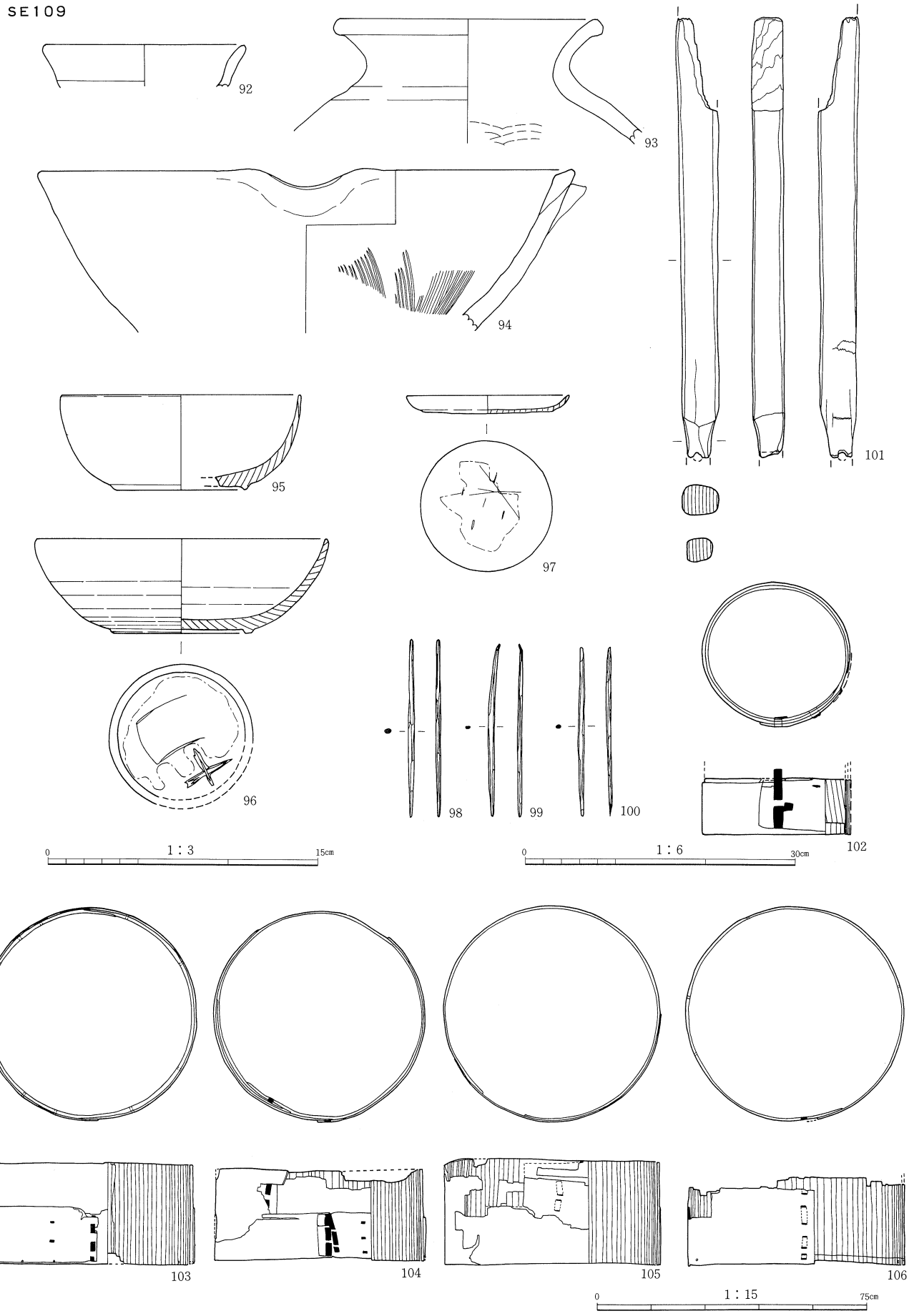
SD178



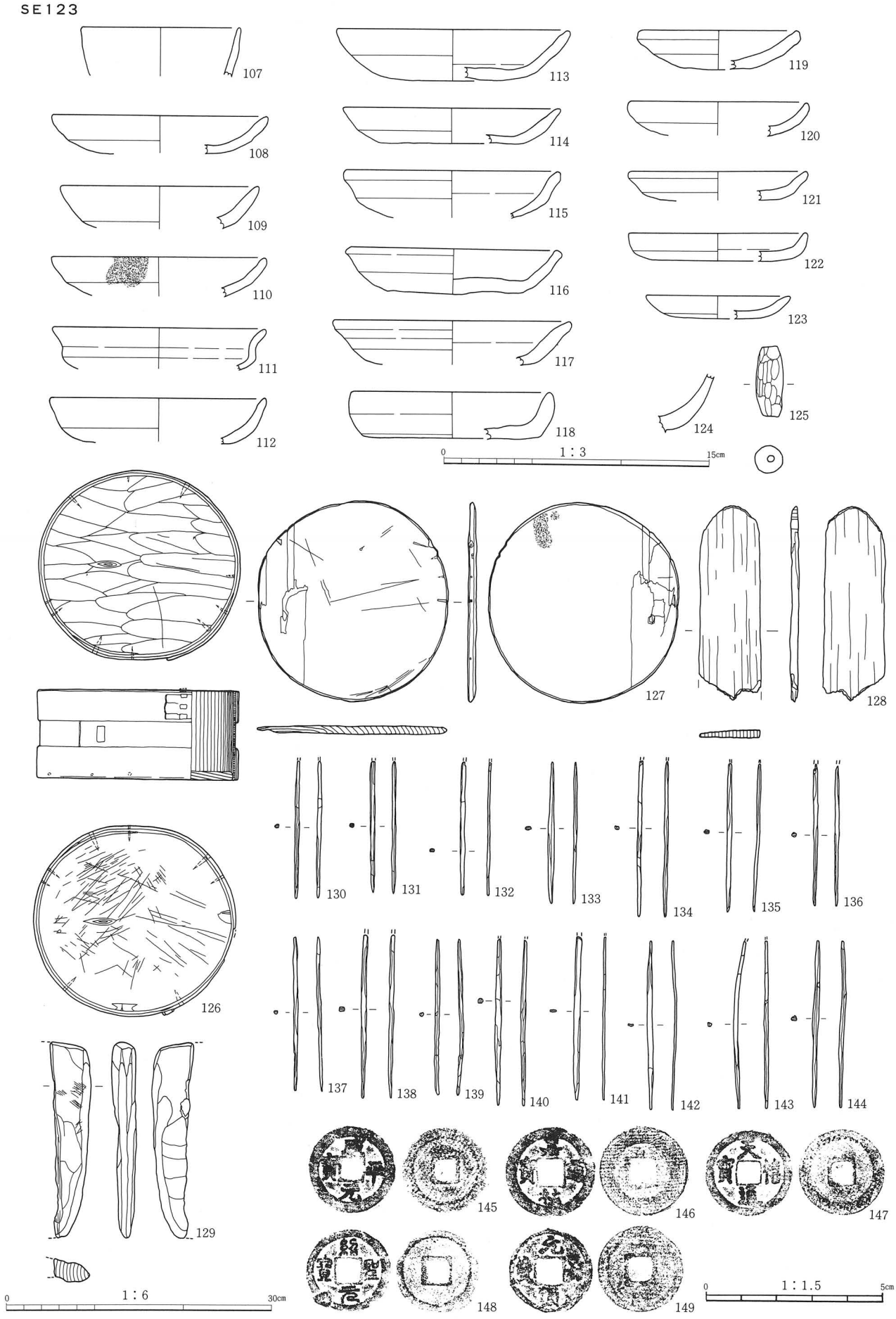
SD183



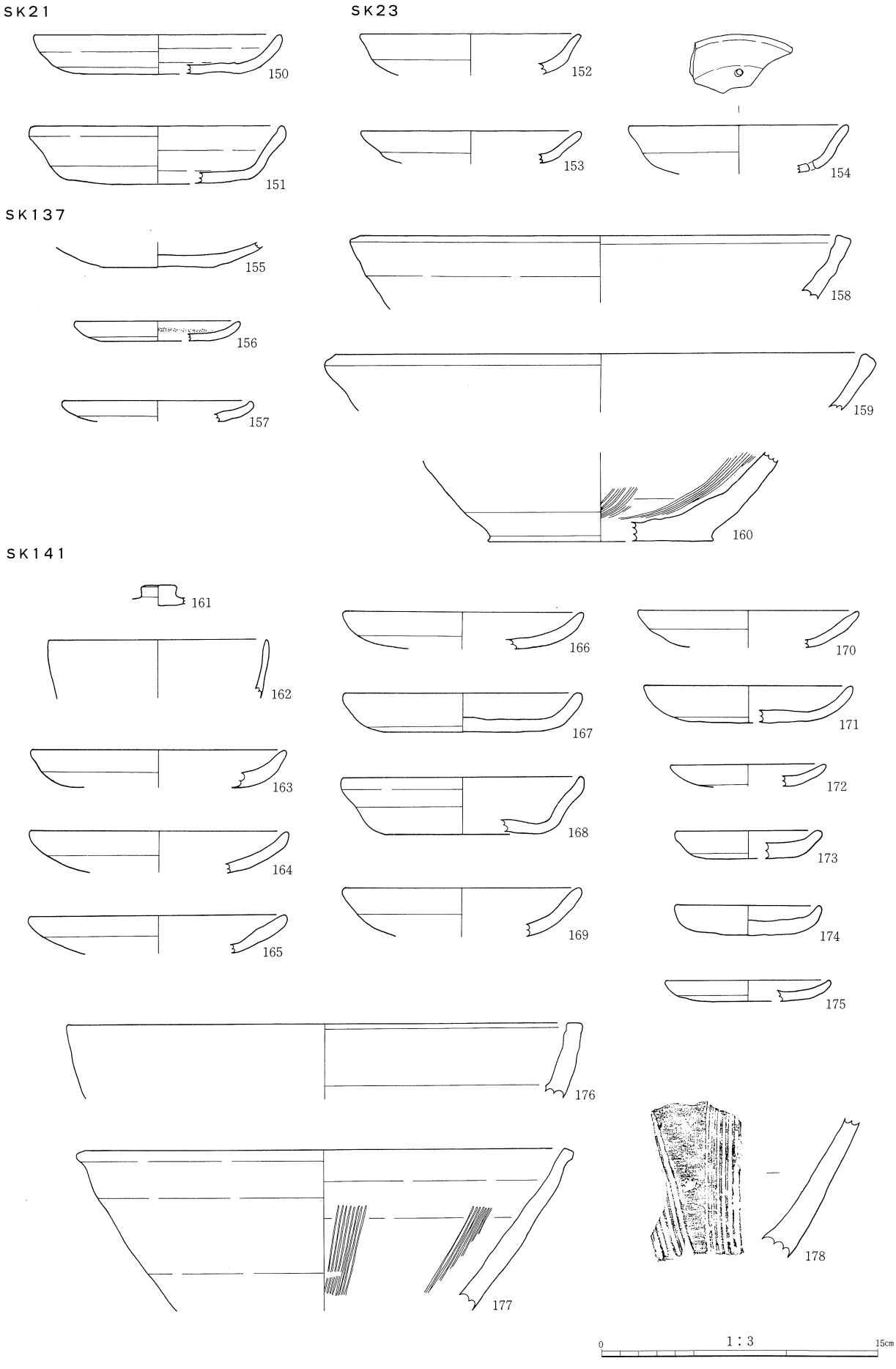
第151図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図５（1/3，78　1/6）



第152図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図６（1/3，98～100・102　1/6，103～106　1/15）

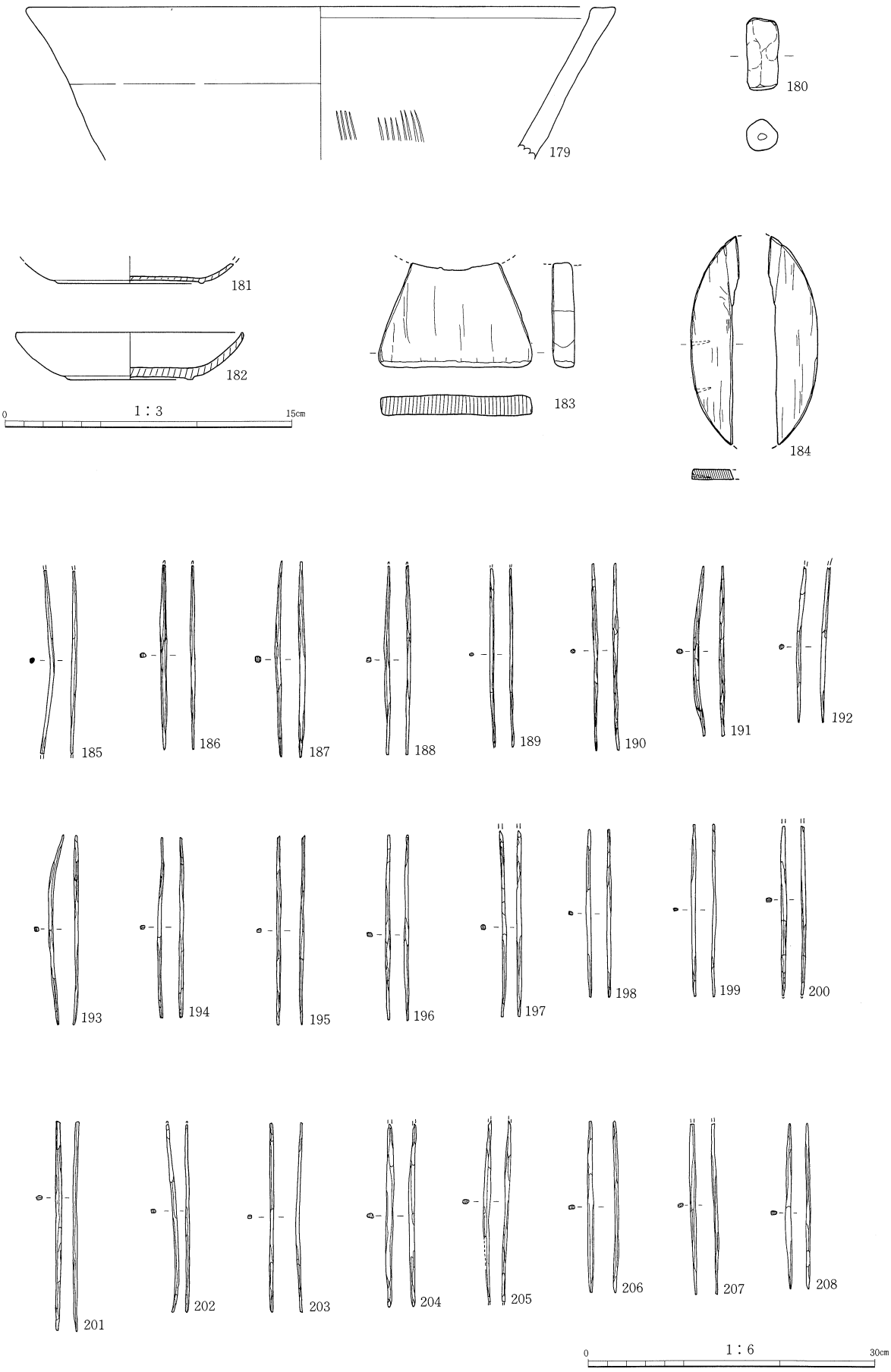


第153図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図７（1/3，126・127・129～144　1/6，145～149　2/3）



第154図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図８（1/3）

SK141



第155図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図９（1/3，183～208　1/6）

SK141

209

210

211

212

213

SK166

214

SK167

215

216

SK175

217

SK181

218

219

220

221

222

SK182

223

224

225

226

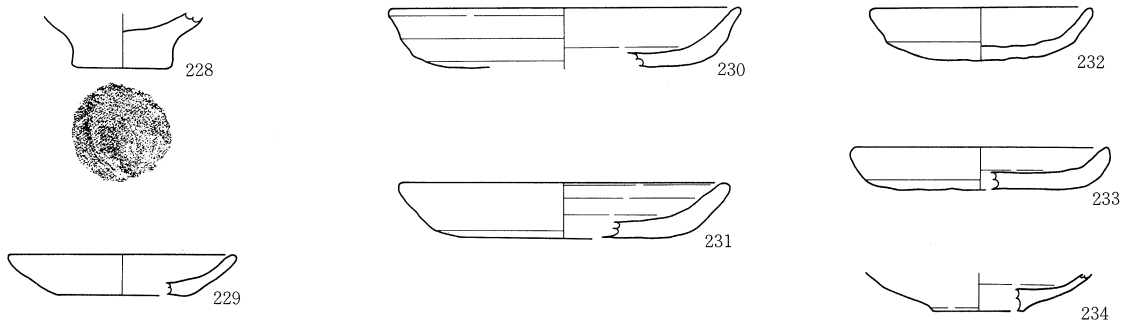
227

1：3

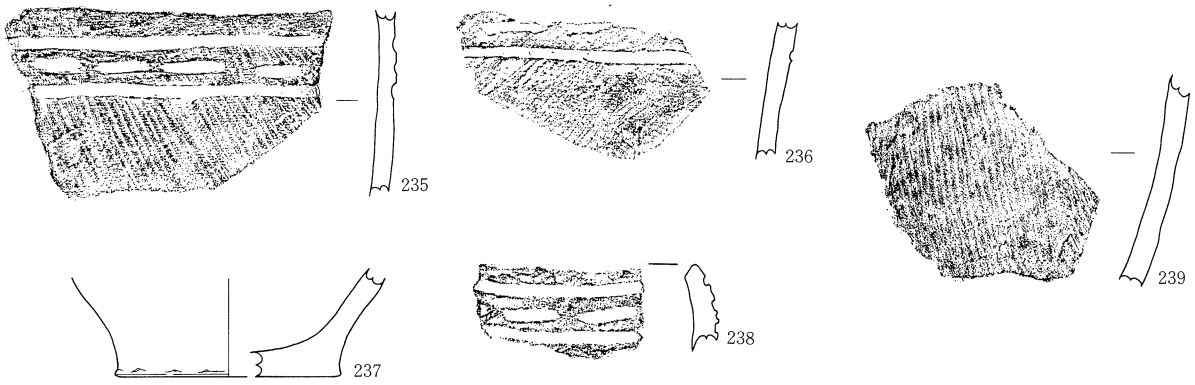
0 15cm

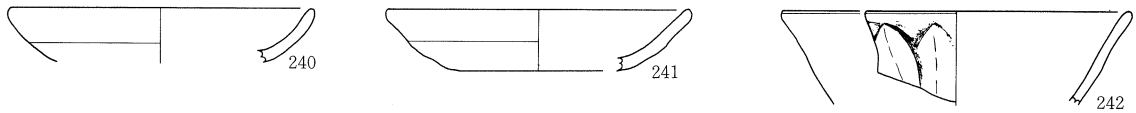
第156図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図10（1/3）

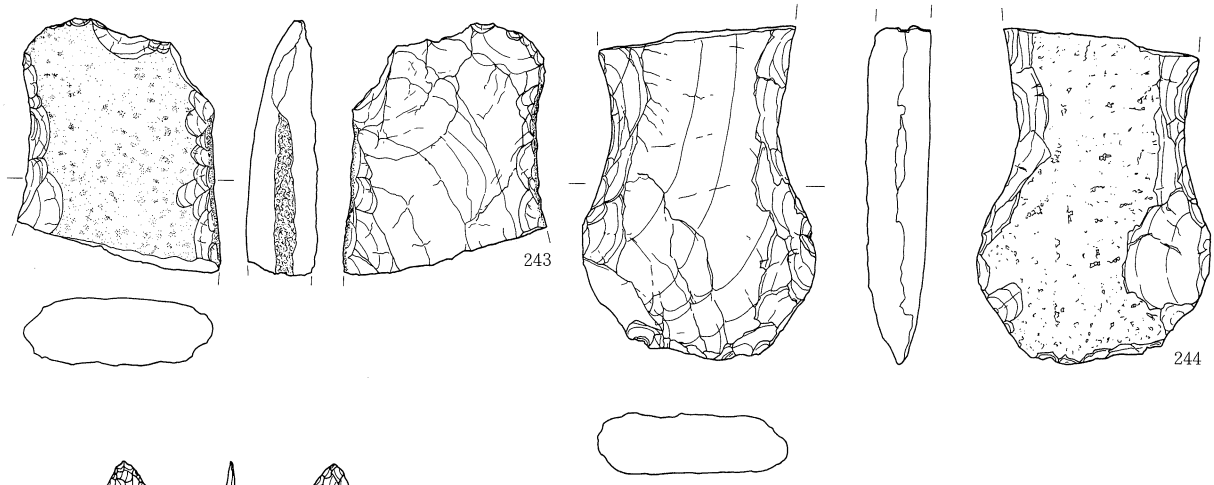
SX49

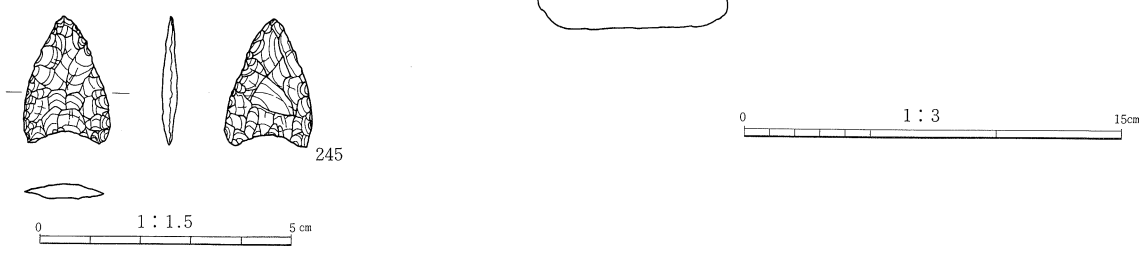


谷状地形

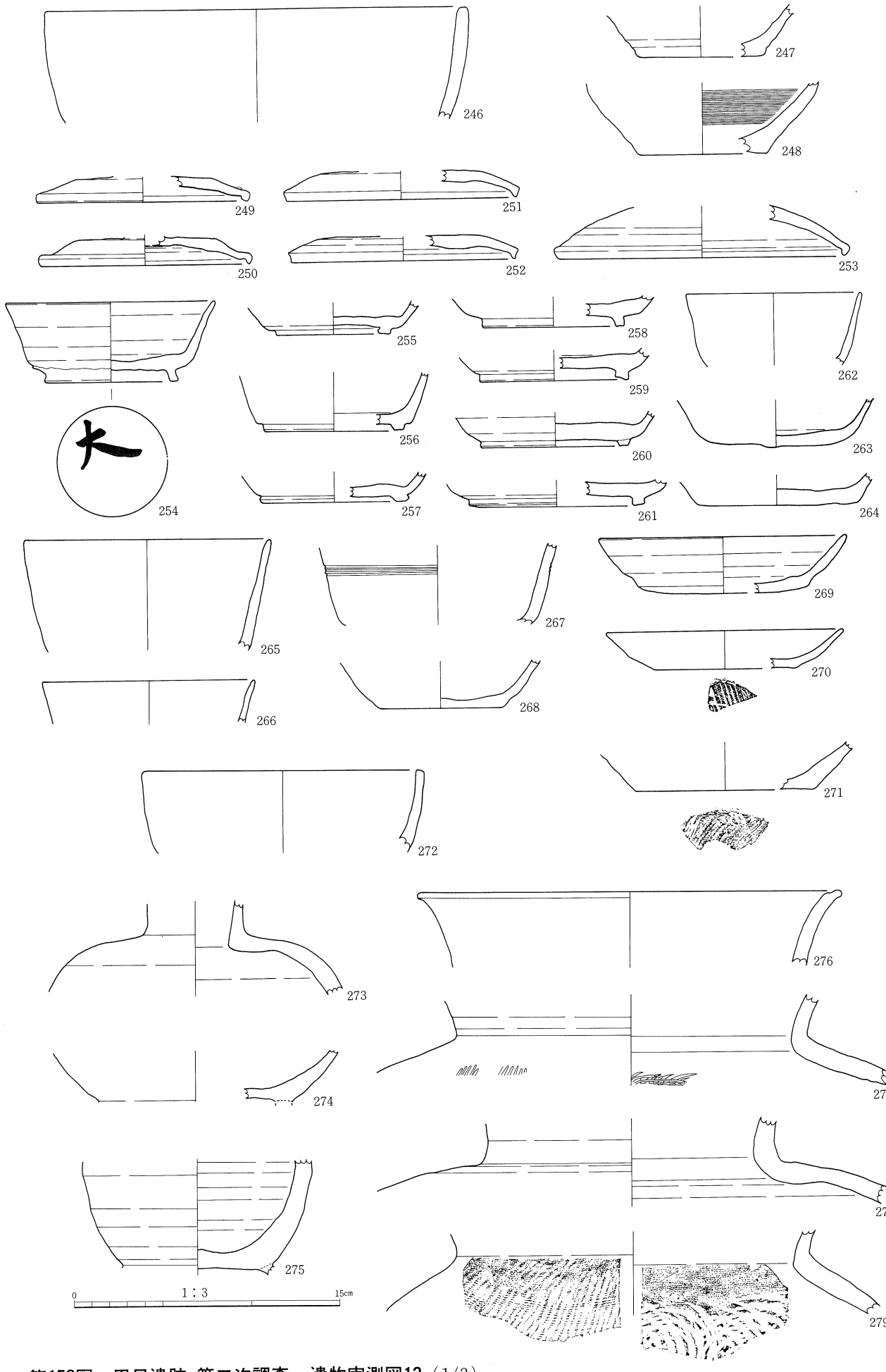




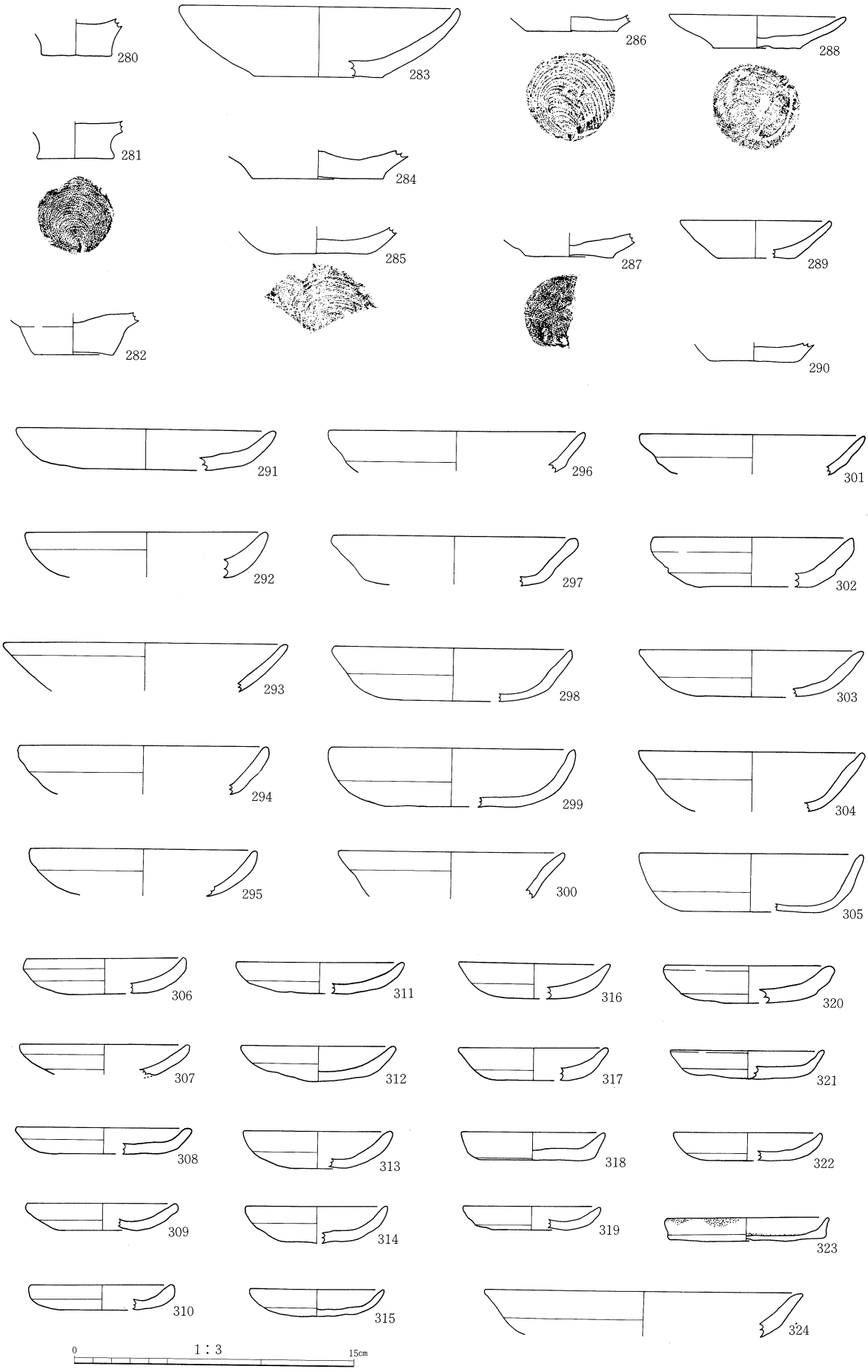




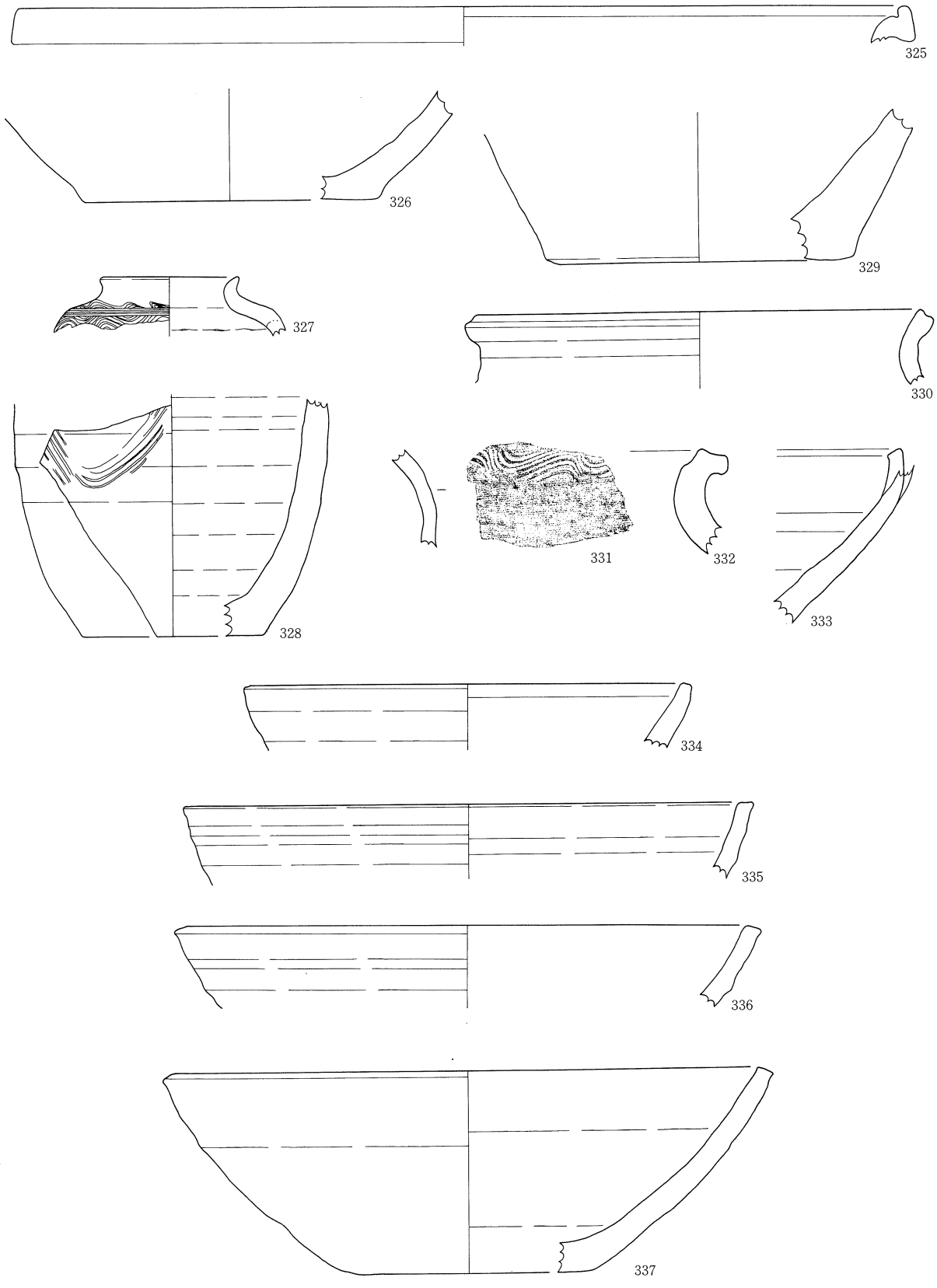
第157図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図11（1/3，245　2/3）



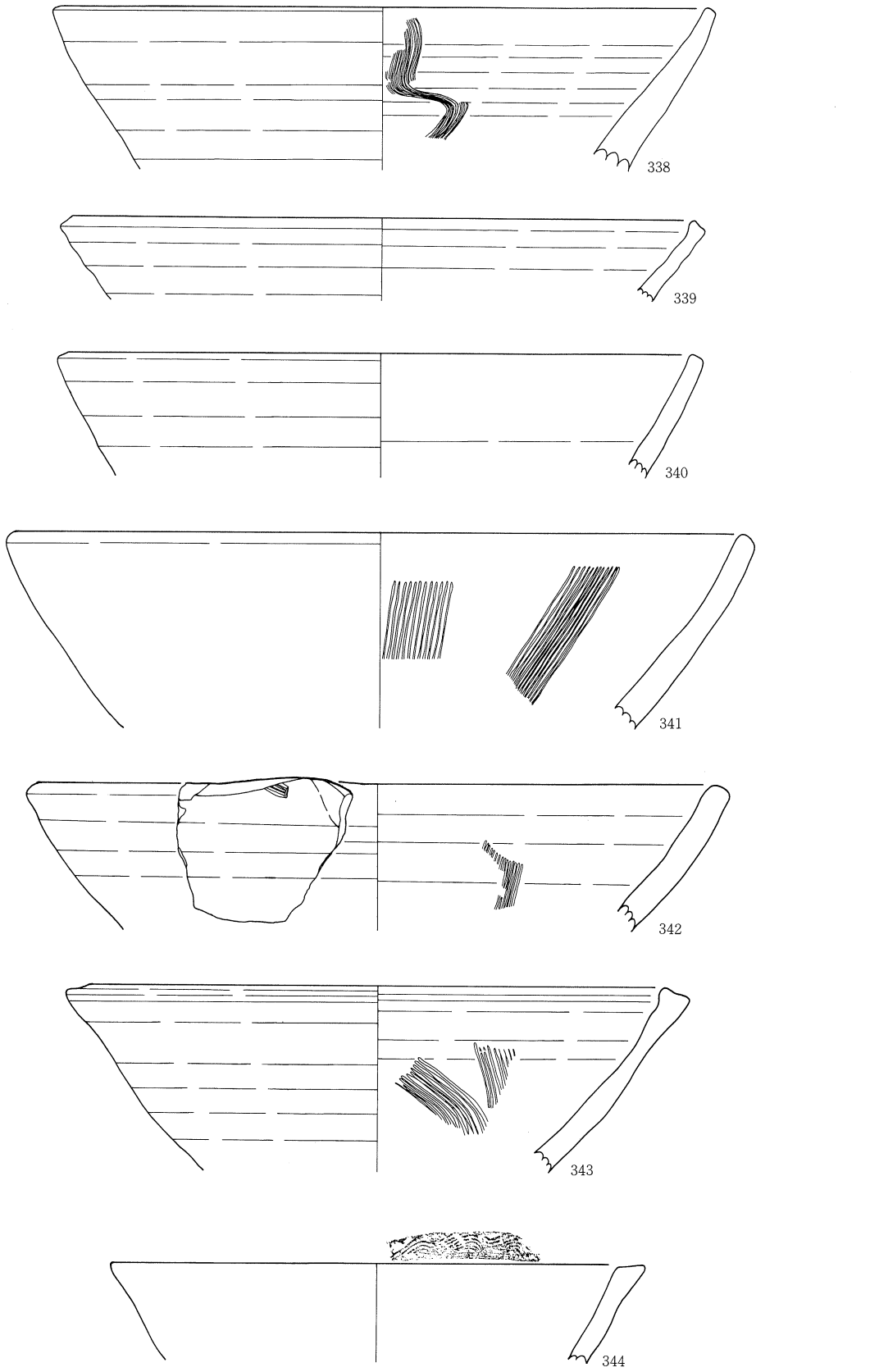
第158図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図12（1/3）



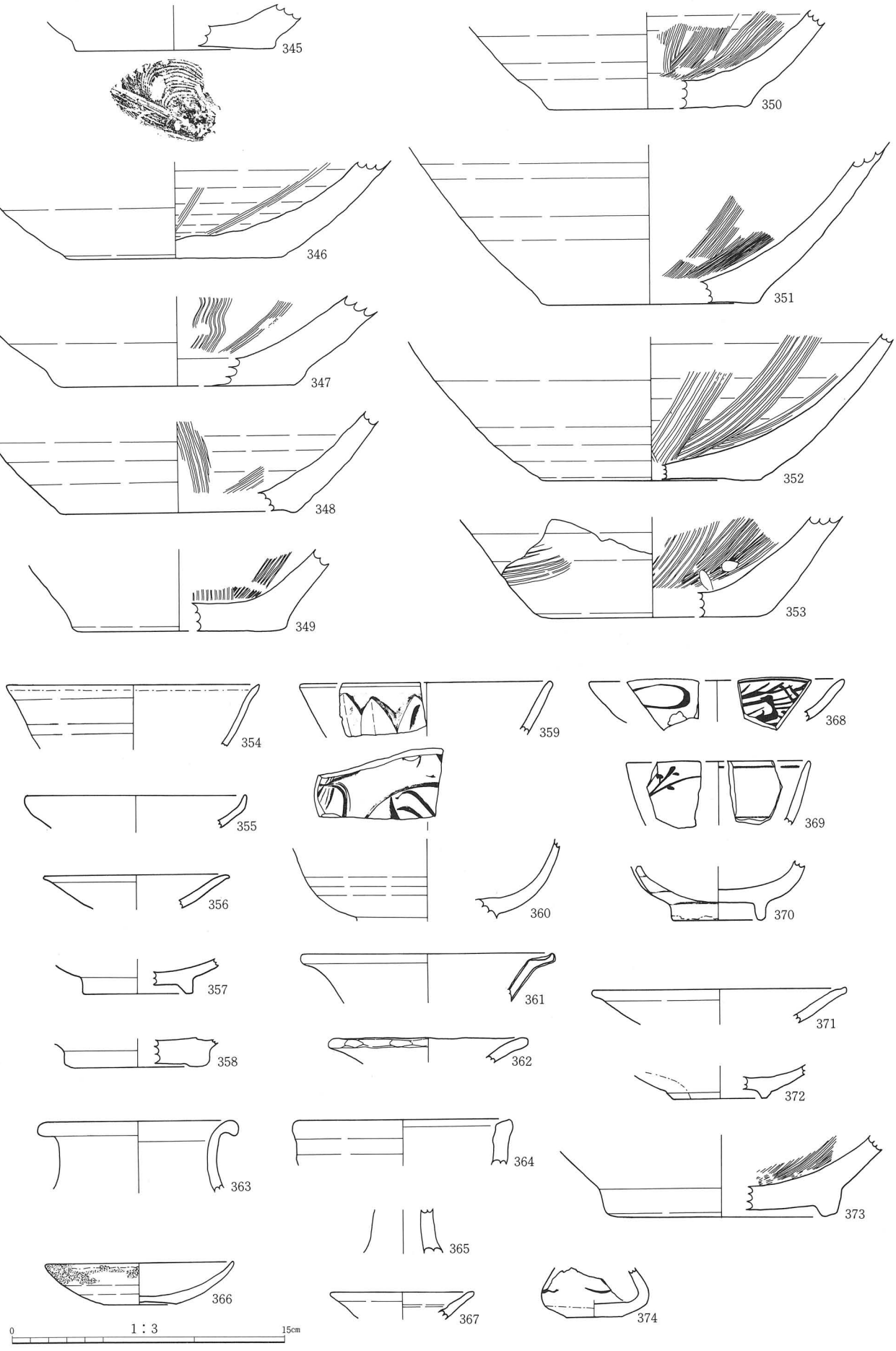
第159図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図13（1/3）



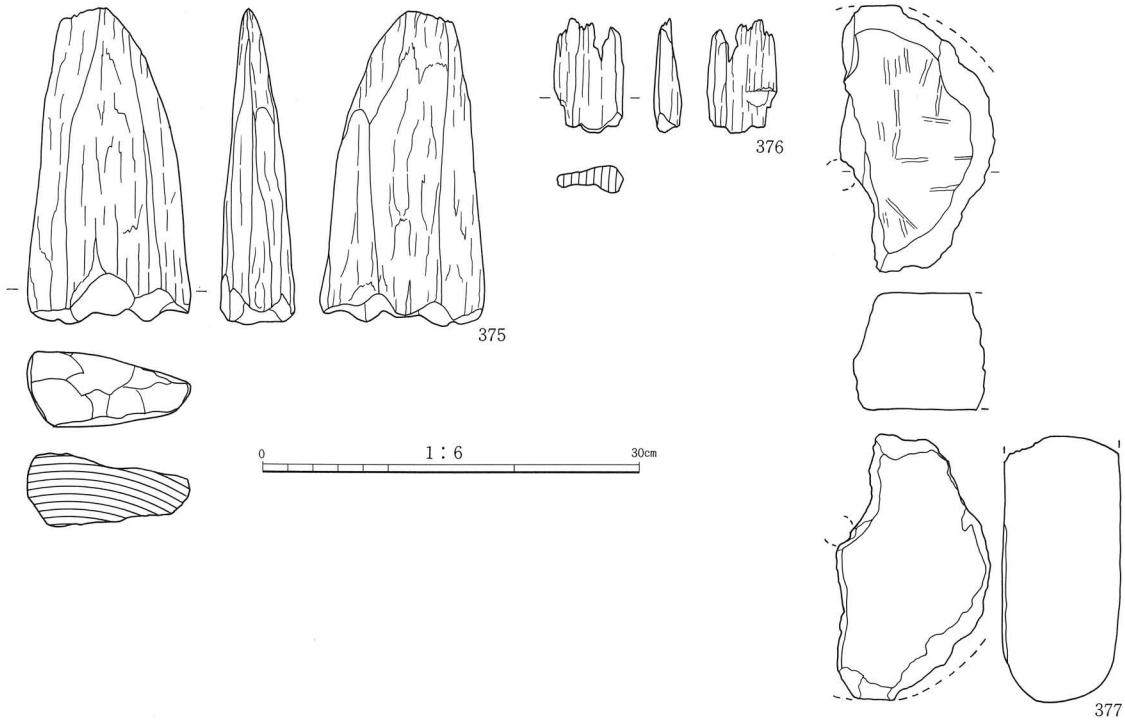
第160図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図14（1/3）

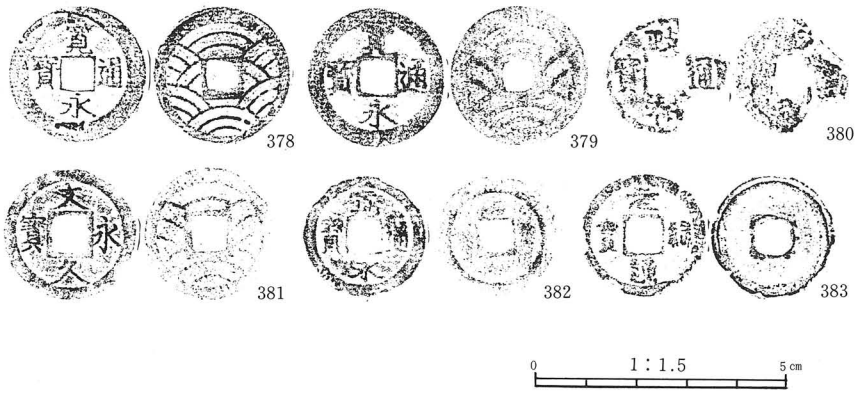


第161図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図15（1/3）



第162図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図16（1/3）





第163図　田尻遺跡 第二次調査　遺物実測図17（1/6，378～383　2/3）

5 まとめ

当遺跡は平成2年度（第一次調査）・平成3年度（第二次調査）に遺跡の南西部分と中央部分の調査を行った。第一次調査では近世主体の，第二次調査では中世前期を主体とする遺構を検出している。ここではこれらを一括し，遺跡の集落変遷について概観する。

中世以前

第一次調査区における中近世の遺構や第二次調査区の谷状地形の覆土から散漫ではあるが，縄文後・晩期の土器や石器が出土する。この時期の遺構は確認されなかったが，周辺部に集落跡の存在が推測される。

古代の遺物は8世紀～9世紀の須恵器・土師器が出土しているが，いずれも包含層や中近世の遺構覆土からである。また第二次調査区外北東に古代の遺物が広範囲にわたって分布するため，ここに該期の遺構の中心部が存在すると思われる。

中　世

遺構は第一次調査区N地区以北で主体となる。福野町教育委員会調査区においても13～14世紀の集落跡が確認されている。12世紀後半～15世紀前半の存続が考えられる中世前期の遺構は，谷状地形埋没後に形成されたものと考えられる。25棟の掘立柱建物は大きく3ブロックに分かれ，各々数棟が重複する。柱穴からは遺物がほとんど出土しないため，溝・井戸・土坑などとのセット関係を重視し，推定した遺構の帰属時期をⅠ～Ⅳ期に区分して変遷図に示した。掘立柱建物は時期別ではⅡ期に9棟，Ⅲ期に4棟，Ⅳ期に6棟の存在が確認されている。これらはすべて総柱でうち6割が南北棟である。Ⅱ～Ⅳ時期で最も多い方位はN-0°-EからN-20°-Eであり，Ⅲ期においては4棟とも南北棟である。南北棟の建物は屋奥まで採光できるため中世の建物には多く，西風をさえぎるため東向きの家が多いという砺波平野の地理的環境を裏付けるものと考えられる[注3]。桁行きと梁行きの関係はⅡ期は5.2～15.25×4.22～9.30m，Ⅲ期は6.40～7.60m×5.61～6.88m，Ⅳ期は5.10～8.84m×4.15～5.12m，平面積はⅡ期は22～142m²とばらつくが，Ⅲ期は37～52m²，Ⅳ期は24～45m²で時代と共に建物の規模は縮小する傾向にある。またⅣ期には土坑を伴うSB05がみられる。土坑の埋土には貼り床や炭化物などはみられないため，性格は不明である。

遺物は中世土師器，珠洲，八尾，中国製白磁・青磁，木製品，金属製品などで，12世紀後半から14世紀のものが多く，15世紀前半のものはほとんどない。

Ⅰ期（12世紀後半以前）　この時期の遺構はA地区の東西溝と方形周溝状遺構SX49，これに切られるSD55がある。SX49はマウンド部分に塔婆が立てられ塚として機能していたと考えられる。周辺には建物の存在は確認されなかったため，特殊な空間であった可能性が推測される。また谷状地形が埋まっていく時期でもある。

Ⅱ期（12世紀後半～13世紀前半）　建物に溝が伴い，大区画を形成する時期である。SD34，SD178，SD185にSB01・SB10，SB21～SB26，SB20が伴い，北東，中央西，南東の3ブロックを形成する。北東ブロックではSD34に棟方向がほぼ平行する大型掘立柱建物SB10と，住居址SB01，SE123を当期に比定した。2つの建物は構造が異なることから，例えばSB10が主屋，SB01が作業場といった機能的な違いが想像される。SE123は廃絶時に竹筒を埋納する井戸で，このような発掘例は広島県草戸千軒町遺跡で13世紀後半から16世紀初頭にかけて12例[注1]，兵庫県加茂遺跡（16～17世紀）で1例みられる。これは井鎮めと考えられており[注2]，文献では江戸時代の『増補咒咀重宝記大全』に「古井戸廃絶時に，

唐竹を逆にして井戸中に立てる慣習があり，広く一種のまじないとして広まっていた」ことが記され，『和漢三才図絵』には「古井を埋める時は毒気を抜くこと」を強調している。広島県では，水神の出入りを助けるためあるいはガス抜きとして竹を立てる慣習が現在も残っているという。

中央西ブロックではほぼ同じ位置に2間×2間が3棟，2間×3間・3間×2間・4間×2間が1棟ずつ計6棟が重複し，建て替えが考えられる。柱穴同士の切り合いはなく，出土遺物もないため前後関係は不明である。またSD178の前段階の流れと考えられるSK182も存在する。

南東ブロックには3棟検出できたが，溝との切り合いを考慮すると4間×3間のSB20が相当する。

Ⅲ期（13世紀後半～14世紀）　前段階の建物と区画溝は廃絶，新たにSD87，SD183を伴うSB07・SB08，SB19が小区画を形成する時期である。SB07・SB08はSD87を伴い，これらの主軸方向はほぼ一致する。この建物は共に3間×3間で，平面積はSB07が52㎡，SB08が40㎡と前者が広い。またSD87の前段階の流れであるSD26とそれに伴う建物の存在も考えられるが，事実関係からセット関係は言及できない。井戸はSE109を伴う。この区画外南には13世紀代に比定できるSB01も存在する。

南東部にはSD183に区画されるSB19が存在する。SD183はSD184によってSD185に接続する時期が考えられることから，前段階との間に3溝が同時に存在する段階が推察される。

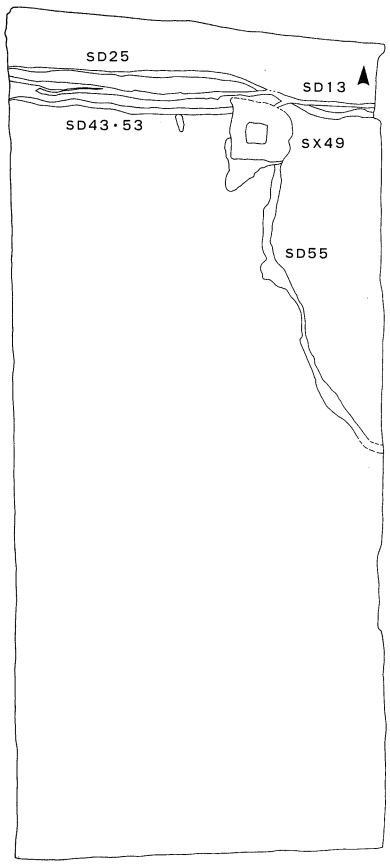
Ⅳ期（15世紀前半）　建物が溝に区画されない時期である。前述した区画溝と切り合いで勝つSB02・SB03・SB05・SB09が調査区北半に点在する。SB02とSB03は規模や主軸方向がほぼ一致することから建て替えられたものと考えられる。SB17はSD34・SD185の南辺と北辺間に位置するが溝を意識しないものと考えられる。井戸はSE33が伴う。これ以後の遺構は検出していない。

近世

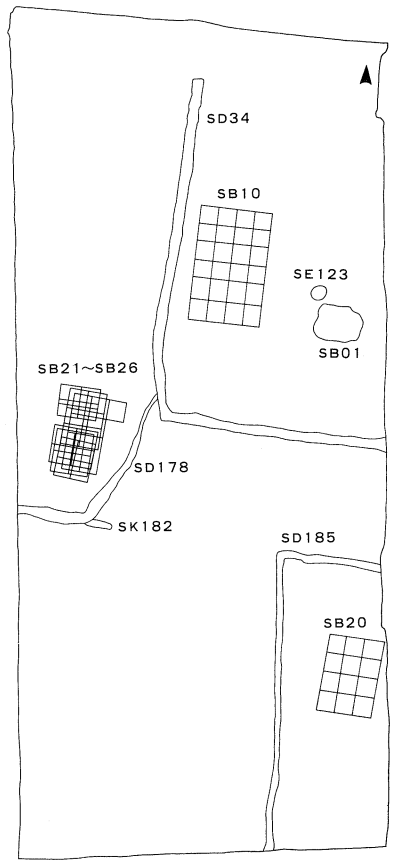
中世末から近世の遺構は第一次調査区で確認しており，第二次調査では該期のものはほとんど検出していない。地区の西側は権現堂川の氾濫原，東側はこれに流れ込む数条の溝が舌状台地をなし，集落を形成する。その中心部は調査区外東に存在するものと思われ，明確な景観はつかめていない。また遺構出土の遺物は縄文土器から近世陶磁器までの時期幅を持ち，遺物のみでは遺構の時期決定が不可能なものもある。中世のように時期を細分できないため，大まかな流れのみを述べる。

溝は東から西，南から北に流路を取り，中世から近世を主体とする。SD08・SD09とSD25で形成された台地上には近世掘立柱建物SB01と3間×2間の側柱建物SB02を検出した。前者が16～18世紀，後者が16～17世紀と考えられる。これらはSD07で区画され，同時存在の可能性も考えられる。SD25とSD63，SD62とSD63の台地上には土坑のみが確認でき，おそらく調査区外東に建物の存在が推測される。S地区SD48（旧権現堂川）の北側にも近世掘立柱建物SB03・SB04を検出している。前者が17～18世紀，後者が16～17世紀と考えられる。同時期に存在する可能性はそれぞれSB01・SB02・SB04，SB01・SB03である。建物における柱穴の特徴はSB02にみられる布掘溝や大部分にみられる根固め石あるいは礎石を持つものである。井戸は概ね15世紀から19世紀に比定できる。柄杓が出土し祭祀的な意味を持つ素掘り井戸SE92，SB03あるいはSB04に伴うと考えられる石組み井戸SE72などがある。調査区は集落の西端であること，用水によって建物が途切れるなど全容は明らかにできなかったが，ここで遺構の性格について若干の検討を試みる。近世の福光には藩倉が設けられ，古くから開けていた水運により米等物資の運搬が行われていた。山田川は城端まで四石，大井川は梅原まで四石半の舟行可能であったという[注4]。現在，C地区拡張区の西側に大井川から権現堂川への分岐点があり，当時から変化がないとすれば，ここで物資の積み出し・積み卸しといった作業が行われていたのではないだろうか。そう考えると，ここで検出した建物は舟運に関する施設であったことが推測される。

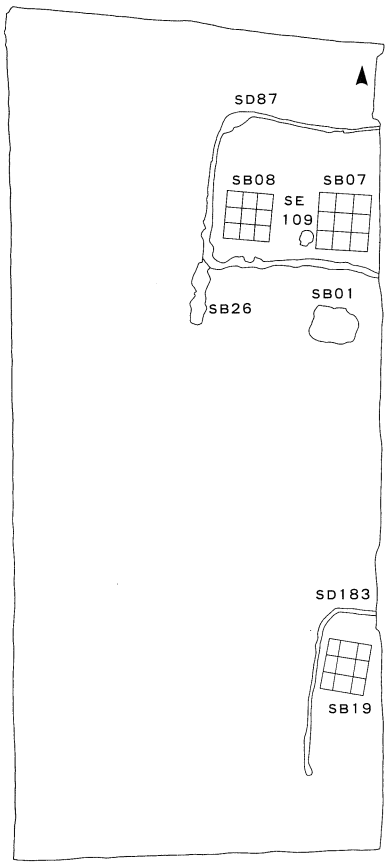
Ⅰ期
（12世紀後半以前）



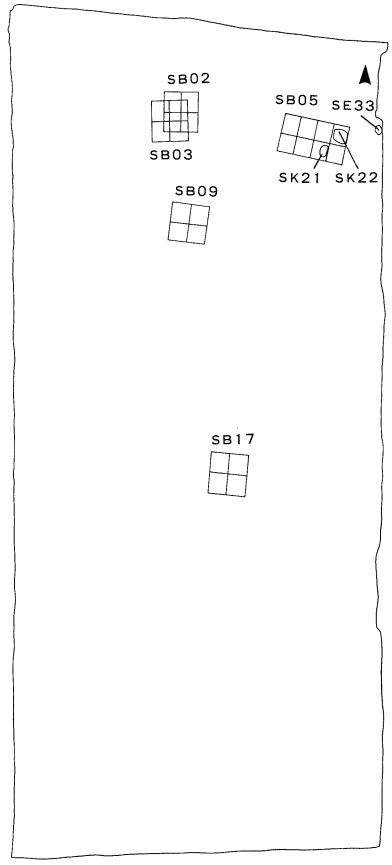
Ⅱ期
（12世紀後半～13世紀前半）



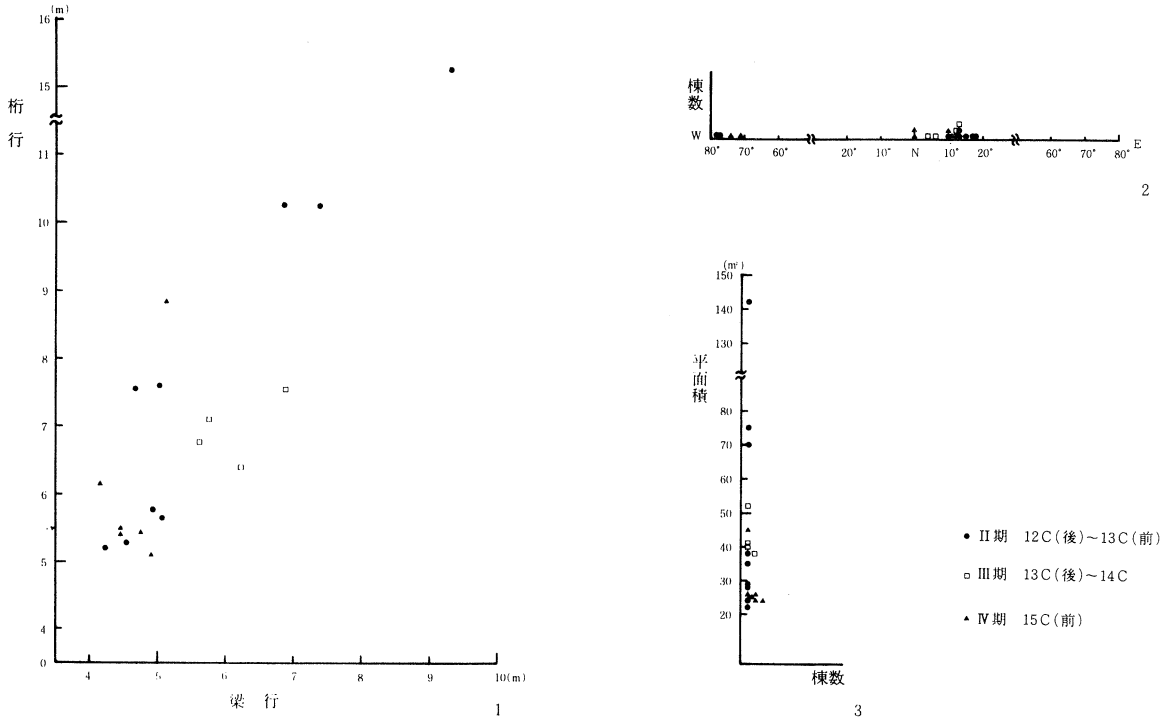
Ⅲ期
（13世紀後半～14世紀）



Ⅵ期
（15世紀前半）



第164図　中世の遺構変遷図（第二次調査区）



第165図　中世の掘立柱建物計測図（第二次調査区）
1.桁行・梁行　2.建物方位　3.平面積

中世における砺波平野の開発は平野の周縁部が先行する。集落の広がりを示唆する遺跡や五輪塔は遺跡周辺では小矢部川・山田川の合流点付近や両川沿いにみられる。これは元和五年（1619年）平野全域の家高を記載した「元和五年利波郡家高新帳」から作成した家高分布密度に矛盾しない[注5]。また1481年田屋河原の戦い後，真宗王国となり，寺院は真言宗から一向宗へ転宗・転移することで未開の地が開発された例もみられ，一向宗と耕地の展開が深い関わりをみせている。

田尻は山田野の末端にあたる台地で，西方を小矢部川，東方を山田川が低く流れ，水利を得にくい地形となっている。そのため開発は，17世紀後半に加賀藩費によって小矢部川上流から山田新用水が開かれてからである。『山田新田文書』によると，地元十村の連繋と近在農村から入植した二，三男によって新開高・畑直高をあわせて二千四百石を越えたこと，また屋敷の配置について「其村定の内ちりじりに」と今日みられる散居制がすでに成立していたことが窺える[注6]。散居制の起源としては条里遺制説・加賀藩創始説などが唱えられていたが，現在では村松茂樹氏の自然環境説が共通理解を得ている。庄川河道が固定し，旧河道を含めて開発が進行した近世には成立しており，場所によっては中世まで遡るといわれるが，今回の調査ではそれを明確に証明することはできなかった。開発は中世前期に大井川と山田川の合流点に近い第二次調査区で先行し，中世末から近世には第一次調査区に集落が形成され，俗に乙女田と称される第二次調査区一帯は水田域になっていたことが想定される。

（横山和美）

注1　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1990『草戸千軒町遺跡ー第44·45次発掘調査概要』
注2　水野正好1976「竹筒を残した一井とその秘呪」『草戸千軒NO.36』
注3　富山県文化振興財団 1994『梅原胡摩堂遺跡遺構編』
注4　富山県1973『富山県史 民俗編』
注5　金田章裕1985『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂
注6　富山県1982『富山県史 通史編Ⅲ 近世上』

第23表　田尻遺跡 第一次調査　掘立柱建物一覧

挿　図	図　版	地　区	遺構番号	平 面 形	規模：長	規模：短	規模：深	出　土　遺　物	備　考	時　期
67		N	SB01(SP05)	楕円	132	78	34	土師器，唐津？		
67	79	N	SB01(SP38)	円	90		(40)	中世土師器,越中瀬戸,伊万里？,柱(3·6)		
67		N	SB01(SP41)	楕円	105	68	(37)			
67		N	SB01(SP42)	楕円	90	33	25	桶側板		
67	79	N	SB01(SP45)	楕円	85	62	18	伊万里		16C～18C
67		N	SB01(SP534)	楕円	122	67	36	瀬戸美濃(1)		
67		N	SB01(SP537)	円	37		21			
67		N	SB01(SP552)	楕円	37	28	26			
67	79	N	SB01(SP559)	楕円	80	(58)	(15)			
67		N	SB01(SP563)	楕円	32	22				
67		N	SB01(SP566)	円	16			中世土師器，唐津(2)		
67		N	SB01(SP572)	楕円	37	30	(5)			
67		N	SB01(SP590)	楕円	45	42	(10)	柱(4·5)	SB01(SP590)＜SK544	
68·69	79·80	N	SB02(SP12)	楕円	324	48	100	唐津(8)，石硯(10)	SB02(SP12)＜SD11	
68	79	N	SB02(SP17)	楕円	140	51		中世土師器，珠洲		
68	79	N	SB02(SP26)	楕円		(52)		縄文土器，珠洲，伊万里		
68·69	79·80·81	N	SB02(SP29)	楕円	304	58	(47)	中世土師器，円形板		
68	79·81	N	SB02(SP517)	楕円	33	24		中世土師器		
68	79	N	SB02(SP524)	楕円	100	46	(34)	中世土師器，柱(9)		
68	79	N	SB02(SP527)	楕円	60	52	(27)	越中瀬戸(7)		16C～17C
70	81·82	S	SB03(SP152)		180	124	116			
70	81·82	S	SB03(SP602)	方	153	146	156		SP602＜SK49	17C～18C
70	81·82	S	SB03(SP730)	楕円	100	79	84			
70	81·82	S	SB03(SP732)					柱	SP732＞SP730	
70	81·82	S	SB03(SP740)	楕円	35	30				
70	81·82	S	SB03(SP747)	楕円	83	70	(100)	柱(11)，曲物	SB03(SP747)＞SE130	
70	81·82	S	SB03(SP760)	楕円	130	120	50			
70	81·82	S	SB03(SP771)	楕円	154	76	50	越中瀬戸(233)		
70	81·82	S	SB03(SP774)	楕円	46	45	65			
70	81·82	S	SB03(SP806)	楕円	32	28	7			
71	81·82	S	SB04(SP639)	楕円	63	54	(17)			
71	81·82	S	SB04(SP684)	楕円	64	54	30			
71	81·82	S	SB04(SP704)	楕円	61	52	16			
71	81·82	S	SB04(SP737)	楕円	40	28	(15)	柱(12)		
71	81·82	S	SB04(SP738)	方	146	65	77			16C～17C
71	81·82	S	SB04(SP745)	不整形	100	41	22			

第24表　田尻遺跡 第一次調査　溝一覧

挿　図	図版	地区	遺構番号	流　路	規模：幅	規模:深	出　土　遺　物	備　考	時　期
82		N	SD01		(120)	10～97	中世土師器，珠洲，唐津，伊万里	SD01＞SE24，SK02	
		N	SD07	北西→南東	24～88	1～13	中国製青磁		
72		N	SD08	北→南	266～454	16～102	須恵器，中世土師器，珠洲，越前，伊万里(13)，唐津，加工木，箸，田下駄(17)，石臼(15)，五輪塔(16)，銭貨(14)		近世～近代
72		N	SD09	北→南	320	33～61	中世土師器，珠洲，越前，唐津(20)，伊万里(21)，磁器，蓋(22)，円形板，石臼(18･19)		近世～近代
68･69		N	SD11		12～28	2～7			
		N	SD20		36～48	4～15	唐津(247)	SD20＞SD25	
75	84	N	SD25	北→南	(350)～(730)	17～49	縄文土器(23～26)，珠洲，越前，唐津	SD25＜SD60,SK521	15C～17C
73	85	S	SD48	南→北	(802)～(1000)	35～130	須恵器(27･28)，中世土師器(29)，珠洲(34)，越前，瀬戸美濃(30)，中国製白磁，中国製白磁?(31)，中国製青白磁(32)，中国製青磁(33)，土師質土器(35)，越中瀬戸，唐津(36)，くるみ，松ぼっくり，曲物側板，加工木(37)，加工木(桶？)，桶側板，種子(アカマツ)	権現堂川の旧河川	15C～17C
75		C	SD60	東→西	(400)～(565)	24～129	土師器(38)，須恵器(39･40)，珠洲(41)，越前，越中瀬戸(42)，唐津(43)，唐津?(45)，伊万里(44･46)，近代陶磁器，石臼(47)，金属製品	現代溝，SD60＞SD25･95･118	現代
74･75		C	SD61	東→西	(1000)	50～78	須恵器(48)，中世土師器，珠洲(54)，越前(55)，中国製白磁or染付？(51)，越中瀬戸(49･50)，唐津(52)，京焼風唐津(53)，唐津or福岡，伊万里，桶側板(58･59)，折敷？，曲物側板，擂粉木(57)，加工木(61)，漆器椀(56)，柱？(60)，銭貨(62)，種子(エゴノキ属･オニグルミ)	越前(55)はSD62出土のものと接合	15C～17C
74･75	84	C	SD62	東→西	(177)～(450)	31～60	縄文土器(63)，中世土師器(64･65)，珠洲，越前(55)，瀬戸美濃(67･68)，中国製白磁(66)，中国製青磁，土師質土器(69)，越中瀬戸(70～76)，唐津(77～79)，伊万里(80)，桶側板，木簡(82)，下駄(81)，漆器椀，石臼(85･86･88)，五輪塔(87･89)，銭貨(83･84)	SD62＜SD63，越前(55)はSD61出土のものと接合	15C後～17C
74･75	84	C	SD63	東→西	(252)～(422)	12～64	縄文土器，珠洲	SD63＞SD62,SE112	16C～17C
72		C	SD69		143～240	17～33	越前		
75		C	SD95	東→西	40～560	7～12		SD95＜SD60	
75		C	SD115			17～46			
76	85	C	SD118				縄文土器(90)，須恵器(91～93)，緑釉陶器(94)，中世土師器(95～99)，珠洲(100～102)，越前，中国製青磁，越中瀬戸(103～105)，瀬戸本業，唐津(106･107)，京焼風唐津，伊万里，漆器椀(108)，柱(109～111)，桶側板，打製石斧(112･113)，石臼(114)，五輪塔(115)，小柄の柄(116)	権現堂川の氾濫原	15C～17C

第25表　田尻遺跡 第一次調　井戸一覧

挿　図	図　版	地　区	遺構番号	平面形	規模：長	規模：短	規模：深	出　土　遺　物	備　考	時　期	最終レベル	湧水レベル
77		N	SE15	楕円	(150)	(96)	114	円形板			59.86	
77		N	SE18	楕円	112	100	184	須恵器，中世土師器，珠洲，中国製白磁(117)，円形板，自然石(118)			60.46	
		N	SE24	楕円	(110)	75	91	中世土師器，珠洲，円形板，桶側板，箸(267～271)	SE24＜SD01			
77		N	SE32	楕円	70	(40)	190	縄文土器(119)，珠洲，円形板(120)，桶側板，柄杓，箸，曲物(121)，加工石	SE32＜SE33		60.38	
77		N	SE33	楕円	90	77	124	柱，桶側板	SE32＜SE33＜SK34		60.96	
77		N	SE36	円	106		175	越中瀬戸，唐津(122)，加工木，石鏃(123)		16C～17C	60.16	
77		N	SE44	楕円	110	100	174	越中瀬戸(124)，桶側板，柄杓(底板)(125)，円形板(127)，自然石(126)			60.22	
78		N	SE46	楕円	102	(40)	(110)	下駄(128)			61.16	
68·69		N	SE47	楕円	302	52	72	越前，曲物側板			61.40	
78	89	S	SE50	楕円	180	130	(60)	中世土師器(129)，珠洲(130)，円形板，箸，桶側板，漆器皿(131)，加工木，曲物(132)，銭貨			60.80	
78·91		S	SE51	楕円	80	60	(71)	箸			61.32	
		S	SE54	楕円	138	108	73	縄文土器，中国製白磁(232)				
		S	SE55	楕円	84	71	70	唐津(242)，折敷底板(261)				
78		S	SE57	楕円	82	76	90				61.50	
78		S	SE59	楕円	74	69	79	円形板(133)			61.54	
78		C	SE64	円	90		(69)	円形板(134～136)，加工木(137·138)，折敷?，柱			61.04	
78	88	S	SE71	円	86		68	縄文土器(139)，珠洲(140)，箸(142～145)，折敷(底板)(141)，曲物側板，杭			61.34	
79	86	S	SE72	円	161		108			16C～18C	61.04	
79		S	SE74	楕円	90	78	128				60.72	
79		S	SE75	楕円	105	84	85	越中瀬戸(146)		17C～18C	60.96	
79	89	S	SE77	楕円	140	100	83	加工木(板状)(147)，編竹状製品，石臼(148)，五輪塔(149～151)，石鉢	SE77＜SK633		61.22	
79		C	SE82	楕円	82	76	86	珠洲(152)，漆器皿(153)，加工木(154·155)，円形板(156)，桶側板		14C～16C	61.20	
79·89		C	SE87	楕円	100	70	70		SE87＞SK86		61.02	
80·89		C	SE88	楕円	130	95	63	中世土師器	SE88＜SK86		61.06	
80	85	C	SE92	円	203		80	須恵器，珠洲，中国製青磁(157)，漆器椀(159)，柄杓(160)，柄杓の柄(161)，加工木，刳物匙(163)，曲物側板，円形板，箸(162)，櫛(158)		15C～16C	60.98	
81	87	C	SE94	楕円	164	142	140	瀬戸美濃(165)，唐津，井戸枠(164)		18C～19C	60.44	
80		C	SE96	楕円	135	130	(62)				61.16	
80		C	SE101	楕円	95	80	88	桶側板，円形板(169)			60.80	
		C	SE105	楕円	70	65	60	唐津	SE105＜SK104			
80	88	C	SE112	円	142		84	越前(166)，井戸枠(168)，石臼(167)	SE112＜SD63	16C～17C	60.80	
81	86	C	SE113	楕円	110	98	60	中世土師器	SE113＜SD118		60.76	
		C	SE114	円	90		117	下駄				
86		S	SE123	楕円	117	95	72		SE123＜SK49		61.16	
86		S	SE124	楕円	92	80	51	瀬戸美濃(228)	SE124＞SK49		61.18	
		S	SE130	楕円	76	70	67	桶側板，円形板，曲物(260)	SE130＜SB03(SP747)			
81		S	SE151	楕円	106	88	92	石鉢	SE151＜SK150		60.74	
81		S	SE154	楕円	93	85	342	瀬戸美濃?(170)，越中瀬戸?(171)，唐津(172)，種子(モモ)，円形板(173·174)			59.94	
		S	SE157	楕円	116	100	66	漆器椀(264)				
		N	SE515	楕円	88	74	199	中世土師器，越前，漆器皿(265)，円形板(258·259)，箸(266)				

第26表　田尻遺跡 第一次調査　土坑一覧 (1)

挿　図	図 版	地 区	遺構番号	平面形	規模：長	規模：短	規模：深	出　土　遺　物	備　考	時　期
82		N	SK02		82		15	中世土師器，珠洲，越前，中国製青磁，唐津，伊万里，伊万里?	SK02＜SD01	
82		N	SK13	不整形	152	134	48	土師器，中世土師器，珠洲		
82		N	SK14	楕円	(165)	(126)	15		SK14＜SK02	
82		N	SK16	楕円	97	57	(35)			
82		N	SK19	楕円	130	95	67	柱(175～177)，種子(オニグルミ)		
82		N	SK22	楕円	82	(73)	122	唐津(178)		
83		N	SK27	楕円	94	52	28		SK27＞SK28	
68･69･82		N	SK28	長方形	165	145	(69)	中世土師器	SK28＜SK27	16C～17C
82		N	SK30	楕円	114	108	11			
77		N	SK34	楕円	85	75	56		SK34＜SE33	
67・84		N	SK39	長方形	191	150	16			16C～18C
83		N	SK40	楕円	78	44	40			
86		S	SK49	不整形	1560	(680)	43	縄文土器，須恵器，中世土師器，珠洲(179)，越前，瀬戸美濃(180)，中国製白磁(181)，越中瀬戸(182～186)，唐津(187･188)，中国製染付(189)，伊万里，漆器皿(190)，桶側板，石鉢，銭貨(191)，種子(オニグルミ)	SK49＜SE123	17C～18C
84		S	SK52	長方形	126	68	60	曲物側板，曲物		
85	90	S	SK53	楕円	(750)	540	62	土師器，中世土師器，越前，土師質土器，越中瀬戸，栓(192)，加工木(193)	SK53＜SK601・603・788・789・792	17C～18C
87	90	S	SK58	楕円	144	98	52	瀬戸美濃(194)，越中瀬戸，石臼(195)		16C～17C
		C	SK66	楕円	590	290	58	縄文土器(220)，唐津(246)		
84	90	S	SK70	方	423	255	52	縄文土器，須恵器，唐津，陶器，種子(トウガン･モモ･アカマツ)		16C～17C
83		S	SK73	方	374	340	51	瀬戸美濃(196)，越中瀬戸(200)，唐津(197･198)，京焼風唐津(199)，石臼(201)		16C～17C
87		S	SK78	長楕円	775	68	30	越中瀬戸(202)，珠洲	SK78＞SK79	16C～17C
87		S	SK79	長楕円	943	100	35	土師質土器，越中瀬戸(205)，唐津(206)，伊万里？，石臼(209)，石硯(207･208)	SK79＜SK78	16C～17C
88		C	SK80	方?	(900)	(900)	67	須恵器，中世土師器，珠洲(203)，越前，中国製青磁，唐津，石硯(204)	SK80＞SK81	16C～18C
88	91	C	SK81	長方形	(310)	238	45		SK81＜SK80	
89		C	SK84	方	305	250	18			
89		C	SK85	楕円	243	186	14			
89		C	SK86	楕円	300	242	20		SE87＞SK86＞SE88	
83		C	SK89	長方形	300	250	22			
87		C	SK93	楕円	98	64	48			
90		C	SK104	楕円	134	80	21			
		C	SK109	方	177	130	18	唐津(244)，下駄(256･257)，曲物		
90		S	SK122	楕円	100	80	69			

第26表　田尻遺跡 第一次調査　土坑一覧 (2)

挿　図	図 版	地 区	遺構番号	平面形	規模：長	規模：短	規模：深	出　土　遺　物	備　考	時　期
90		S	SK126		204	95	27			
90		S	SK127		(178)	(38)	27			
90		S	SK128	楕円	(98)	(71)	59			
91	91	S	SK150	方	(590)	295	31	珠洲(210)，中国製青磁(211)，砥石(212)，金属製品	SK150＞SE151	15C
	91	S	SK158	楕円	(67)	50	67	中世土師器，瀬戸美濃？，自在鉤(262)，漆器椀(263)，茶臼？		
	83	N	SK501	楕円	60	26	19			
		N	SK509	楕円	(103)	(85)	32	中世土師器，柱(273)		
	83	N	SK521	円	60		(75)	越中瀬戸，柱(274)	SK521＞SD25	
	79	N	SK539	楕円	42	28	(26)	柱		
		N	SK542	円	50		48	下駄(255)		
67		N	SK544	楕円	93	56	(36)	中世土師器	SK544＞SB01(SP590)	
		N	SK558		66	60	(25)	石臼	SK558＜SK39	
67		N	SK567	楕円	38	25				
		N	SK591	楕円	17	14		柱(276)		
85	83	S	SK601	楕円	155	80	(53)	柱(272)，銭貨(280)	SK601＞SK53	
85		S	SK603	楕円	123	73	63	円形板	SK603＞SK53	
71	83	S	SK606	楕円	108	90	30			
71		S	SK621	楕円	27	25	52			
79		S	SK633	円	50		82		SK633＞SE77	
		C	SK652	楕円	69	65	(20)	須恵器(213)，中世土師器，珠洲(214～217)，越中瀬戸(218)，円形板，漆器椀(219)，桶側板，加工木		
		C	SK653	楕円	82	77	(19)	珠洲，瀬戸美濃，加工木，石杵		
		C	SK676	楕円	35	30	(35)	柱(275)		
		S	SK729	楕円	90	48	(66)	瀬戸美濃(227)，越中瀬戸(236)，唐津		
	82	S	SK739	円	71					
85		S	SK788	楕円	47	40	(11)	柱	SK788＞SK53	
85		S	SK789	楕円	52	47	(17)		SK789＞SK53	
		S	SK791	楕円	148	58	38	越中瀬戸(234)		
		S	SK792	楕円	64	45	19	瀬戸美濃(229)	SK792＞SK53	

第27表　田尻遺跡 第一次調査　土器・陶磁器一覧 (1)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
1	95	N	SB01 (SP534)			瀬戸美濃	天目茶椀		大窯Ⅱ期			45			鉄釉・錆釉	10YR3/1	黒褐色	にぶい黄橙色	錆釉2.5YR4/2灰赤色
2		N	SB01 (SP566)			唐津	皿		1580～1590年	120					藁灰釉	10Y8/1	灰白色	灰黄色	
7		N	SB02 (SP527)			越中瀬戸	椀			117					鉄釉	7.5YR4/2	灰褐色	黄灰色	
8		N	SB02 (SP012)			唐津	皿		17C	116					灰釉	7.5Y7/1	灰白色	灰オリーブ色	
13		N	SD08			伊万里	碗		18C末～19C初頭	120				染付	透明釉			灰白色	染付5PB6/3くすんだ青色
20	96	N	SD09	X086Y026付近		唐津	皿		17C後～18C			51			銅緑釉・灰釉	2.5B5/3	くすんだ青色	灰黄色	灰釉7.5Y7/2灰白色胎土目　内野山西窯蛇の目釉剝
21		N	SD09			伊万里	碗		18C前半	116				染付	透明釉			灰白色	陶胎染付5G6/1緑灰色
23	93	C	SD25	X078Y028	砂礫層	縄文土器	深鉢	八日市新保Ⅰ式	後期末									橙色	
24	93	C	SD25	X070Y026		縄文土器	深鉢	加曽利B式				96						にぶい褐色	網代痕(２本越え２本潜り１本送り)
25	93	C	SD25	X076Y029	砂礫層	縄文土器	深鉢	加曽利BⅡ式										にぶい黄色	
26	93	C	SD25	X070Y024		縄文土器	深鉢	井口Ⅰ式	後期中葉									灰黄褐色	
27		S	SD48		上層	須恵器	杯B		8C			85						灰色	
28	94	S	SD48	X028Y036		須恵器	杯蓋											灰色	
29		S	SD48	X028Y036		中世土師器	皿			128									橙色
30		S	SD48	X026Y033		瀬戸美濃	内禿皿		大窯Ⅲ期			46			灰釉	7.5Y7/3	浅黄色	灰白色	
31		S	SD48		上層	中国製白磁？	皿？					40			透明釉			灰白色	
32		S	SD48	X028Y036		中国製青白磁	碗		12C					劃花文	青白磁釉	2.5GY7/1	明オリーブ灰色	灰白色	
33	95	S	SD48		上層	中国製青磁	碗	上田D類	14C後半～15C前半	157					青磁釉	10GY5/2	くすんだ緑色	灰白色	龍泉窯系
34	94	S	SD48	X028Y035		珠洲	甕			600								青灰色	
35	95	S	SD48	X024Y036		土師質土器	擂鉢			340								浅黄橙色	石英
36	92	S	SD48		上層	唐津	皿		17C	120	38	39			灰釉	5Y6/2	灰オリーブ色	灰黄色	砂目
38		C	SD60	X066Y023		土師器			10C後半～11C前半								浅黄橙色		内黒か？
39	92	C	SD60	X066Y030		須恵器	高台杯		8C前半	134	44	98						灰色	
40	92	C	SD60	X066Y021		須恵器	無台杯			120	30	76						灰白色	
41	92	C	SD60	X068Y018他		珠洲	壺					92						灰色	
42	92	C	SD60	X064Y032		越中瀬戸	皿		登窯期	109	30	59			鉄釉	7.5YR3/3	暗褐色	橙色	
43		C	SD60	X069Y030		唐津	皿		16C末～17C初頭	109					灰釉	7.5Y6/1	灰色	黄灰色	
44		C	SD60	X066Y030		伊万里	碗		明治			40		染付	透明釉			灰白色	染付5PB4/8青色　足付きハマ痕

第27表　田尻遺跡 第一次調査　土器・陶磁器一覧 (2)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
45	93	C	SD60	X063Y034		唐津？	鉢			226	99	93			灰釉	2.5Y6/3	にぶい黄色	黄灰色	
46		C	SD60	X063Y034		伊万里	碗		17C末～18C初	90				染付	透明釉			灰白色	染付2.5PB7/3うす青色
48		C	SD61	X049Y032		須恵器	高台杯											灰色	
49	95	C	SD61	X048Y029		越中瀬戸	皿			118	26	42			鉄釉	7.5YR3/1	黒褐色	浅黄橙色	
50	92	C	SD61	X048Y029		越中瀬戸	皿		登窯期	106	34	56			鉄釉	5YR3/2	暗赤褐色	灰白色	重ね焼
51		C	SD61	X050Y029		中国製白磁？	碗					61			白磁釉？	7.5GY8/1	灰色	灰白色	蛇の目釉剝
52		C	SD61	X051Y026		唐津	皿		1600～1630年			48			灰釉	2.5GY7/1	明オリーブ灰色	灰白色	砂目
53	96	C	SD61			京焼風唐津	椀		1660～1720年	86					透明釉			灰白色	緑色釉2.5GY5/3
54	94	C	SD61			珠洲	甕		Ⅳ期	440								灰色	石英
55	95	C	SD61	X050Y030	灰黒色粘質土	越前	甕		16C	460					自然釉	2.5Y5/3	黄褐色	灰白色	
55	95	C	SD62	X056Y028	灰黒色粘質土	越前	甕			16C	460				自然釉	2.5Y5/3	黄褐色	灰白色	
63		C	SD62	X054Y030	小礫層	縄文土器	深鉢					90						にぶい橙色	
64	94	C	SD62	X062Y031	上層	中世土師器	皿			90			6				灰黄褐色		煤付着　角閃石　石英
65	94	C	SD62	X057Y025	灰黒色粘質土	中世土師器	皿					60					浅黄橙色		石英　骨針　赤色酸化粒
66		C	SD62	X052Y030	灰黒色粘質土	中国製白磁	碗	太宰府Ⅳ類				68			白磁釉	7.5Y8/1	灰白色	灰白色	
67	95	C	SD62	X051Y033		瀬戸美濃	天目茶椀		大窯Ⅱ期	130					鉄釉	5YR2/2	黒褐色	灰黄色	
68		C	SD62	X056Y031	小礫層	瀬戸美濃	皿		大窯Ⅰ～Ⅱ期			52		印花	灰釉	7.5Y6/3	オリーブ黄色	灰白色	輪ドチ痕
69		C	SD62	X052Y031		土師質土器	擂鉢		15C～16C									灰黄褐色	石英
70	95	C	SD62	X057Y025	灰黒色粘質土	越中瀬戸	皿					55		印花	灰釉	5Y7/2	灰白色	にぶい橙色	墨書
71	92	C	SD62	X052Y031		越中瀬戸	皿			107	26	42			灰釉	5Y7/2	灰白色	にぶい黄橙色	
72		C	SD62	X055Y030		越中瀬戸	皿					50			灰釉	7.5Y7/2	灰白色	にぶい褐色	
73		C	SD62	X063Y031	上層	越中瀬戸	皿			108					灰釉	7.5Y7/2	灰白色	にぶい黄橙色	
74		C	SD62	X062Y031	上層	越中瀬戸	皿			110	30	50			鉄釉	5YR4/2	灰褐色	にぶい黄橙色	
75	95	C	SD62	X055Y030		越中瀬戸	皿			98					灰釉	7.5Y7/2	灰白色	灰白色	
76		C	SD62			越中瀬戸	擂鉢			344					錆釉	10YR4/4	褐色	にぶい黄橙色	
76		C	SD62	X056Y028	Ⅰ層	越中瀬戸	擂鉢			344					錆釉	10YR4/4	褐色	にぶい黄橙色	
77	96	C	SD62	X063Y031	上層	唐津	甕		16C末～17C初	178					鉄釉	10YR4/2	灰黄褐色	褐灰色	
78	93	C	SD62	X057Y026		唐津	皿					50			灰釉	7.5Y7/1	灰白色	灰白色	底部に目痕？
79		C	SD62	X054Y030	小礫層	唐津	溝縁皿		1600～1630年	140					灰釉	7.5Y7/2	灰白色	灰色	
80		C	SD62	X054Y030	小礫層	伊万里	皿			130				染付	透明釉			灰白色	染付 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色
90		C	SD118	X070Y018		縄文土器	深鉢					80						黄褐色	
91	94	C	SD118	X074Y016		須恵器	高台杯		8C～9C			76						灰色	
92		C	SD118	X051Y022		須恵器	壺											灰色	

第27表　田尻遺跡 第一次調査　土器・陶磁器一覧 (3)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
93	95	C	SD118	X075Y015		須恵器	壺											灰白色	
94		C	SD118	X060Y018		緑釉陶器						66						灰白色	
95	94	C	SD118	X082Y025		中世土師器	皿					40						にぶい黄橙色	石英
96	94	C	SD118	X065Y020		中世土師器	皿					56						橙色	
97	94	C	SD118	X053Y017		中世土師器	皿			88	22		12					灰黄褐色	角閃石
98	94	C	SD118	X076Y012		中世土師器	皿			130	25		13					にぶい黄橙色	赤色酸化粒
99	94	C	SD118	X078Y011		中世土師器	皿			86			12					にぶい黄褐色	角閃石　穿孔か
100		C	SD118	X075Y015		珠洲	擂鉢		Ⅵ期	366				櫛目波状文				灰色	骨針
101	94	C	SD118	X051Y022		珠洲	甕		Ⅳ期	400								灰オリーブ色	
102		C	SD118	X051Y022		珠洲	甕		Ⅰ～Ⅱ期									黄灰色	
103	95	C	SD118	X082Y025	砂層	越中瀬戸	皿			116	24	60			灰釉	2.5Y8/1	灰白色	橙色	
104	92	C	SD118	X051Y022		越中瀬戸	皿			117	25	43			鉄釉	10YR3/1	黒褐色	灰黄褐色	
105	95	C	SD118	X065Y017		越中瀬戸	匣鉢			130					錆釉	10YR4/3	にぶい黄褐色	浅黄色	
106	96	C	SD118	X081Y025		唐津	皿		1580～1600年			44		鉄絵	灰釉	7.5Y7/1	灰白色	灰白色	鉄絵7.5Y3/1オリーブ黒色
107		C	SD118	X076Y013		唐津	擂鉢			370					鉄釉	10R1.7/1	赤黒	赤褐色	
117	95	N	SE18			中国製白磁	皿	太宰府Ⅵ類1a	11C後半～12C前半			34			白磁釉	7.5Y6/2	灰オリーブ色	灰白色	
119	93	N	SE32			縄文土器	深鉢											にぶい黄橙色	赤色酸化粒
122		N	SE36			唐津	椀		1590～1630年	100				そうめん手	鉄釉	10YR2/1	黒色	灰黄褐色	そうめん手10YR5/1褐灰色
124		N	SE44			越中瀬戸	皿					56			鉄釉	10YR4/2	灰黄褐色	にぶい黄橙色	
129	94	S	SE50		中層下他	中世土師器	皿			120								にぶい橙色	角閃石
130	94	S	SE50			珠洲	擂鉢		Ⅴ期	364								褐灰色	内外面黒変
139	92	S	SE71			縄文土器	深鉢					87						浅黄色	煤付着
140	92	S	SE71			珠洲	擂鉢		Ⅴ～Ⅵ期			124						オリーブ黒色	煤付着
146	95	S	SE75			越中瀬戸	天目椀		登窯期	112					鉄釉･灰釉	10YR3/3	暗褐色	灰オリーブ色	灰釉5Y8/4淡黄色
152		C	SE82			珠洲	擂鉢		Ⅴ～Ⅵ期									灰色	骨針
157	95	C	SE92			中国製青磁	碗	上田BⅣ類	15C後半～16C初	107				蓮弁文	青磁釉	2.5Y6/4	にぶい黄色	灰黄褐色	漆継
165	96	C	SE94			瀬戸美濃	蓋		19C					染付	透明釉			灰色	染付5Y2/1黒色
166	95	C	SE112			越前	甕								自然釉	10YR5/3	にぶい黄褐色	灰白色	
170		S	SE154			瀬戸美濃？	皿			98					灰釉	7.5GY7/1	明緑灰色	灰色	
171		S	SE154			越中瀬戸？	皿		大窯期	118					灰釉	2.5Y5/6	黄褐色	黄灰色	
172		S	SE154			唐津	皿		16C後半～17C初	100					灰釉	7.5Y7/1	灰白色	灰白色	
178		N	SK22			唐津	鉢			360					灰釉	7.5Y7/1	灰白色	灰白色	
179	94	S	SK49	X042Y030	下層	珠洲	壺		Ⅳ期	140								灰色	

第27表　田尻遺跡 第一次調査　土器・陶磁器一覧 (4)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
180		S	SK49	X042Y030	上層	瀬戸美濃	Ⅲ		大窯Ⅰ～Ⅱ期			60			灰釉	10Y8/2	灰白色	灰白色	
181	95	S	SK49	X041Y026	上層	中国製白磁	切り高台Ⅲ	森田D群	15C			44			白磁釉	N8/0	灰白色	灰白色	重ね焼痕
182	95	S	SK49	X043Y032		越中瀬戸	丸椀			96					鉄釉･灰釉	10YR3/2	黒褐色	灰白色	灰釉5Y8/2灰白色
183		S	SK49	X042Y028	上層	越中瀬戸	丸椀			106					鉄釉･灰釉	10YR4/1	褐灰色	にぶい黄褐色	灰釉10YR6/4にぶい黄橙色
184		S	SK49	X041Y029	上層	越中瀬戸	Ⅲ			119	24	54			灰釉	2.5Y7/4	浅黄色	橙色	
185		S	SK49			越中瀬戸	火入れ？					88			鉄釉	10YR3/3	暗褐色	にぶい黄橙色	重ね焼痕
186	95	S	SK49	X042Y029	上層	越中瀬戸	擂鉢		17C	304					錆釉	5YR5/3	にぶい赤褐色	にぶい黄橙色	
187		S	SK49	X043Y030	上層	唐津	Ⅲ		1580～1600年	120					灰釉	7.5Y7/1	灰白色	灰白色	
188		S	SK49	X043Y029	上層	唐津	壺か瓶？					140			錆釉	10YR5/3	にぶい黄褐色	明黄褐色	
189		S	SK49	X042Y028	上層	中国製染付	Ⅲ		16C			90		染付	透明釉			灰白色	染付7.5B6/3青灰色
194		S	SK58		上層	瀬戸美濃	志野Ⅲ		大窯Ⅳ～登窯Ⅰ期	120					灰釉	2.5Y8/1	灰白色	灰黄色	
196	95	S	SK73		上層	瀬戸美濃	緑釉小Ⅲ		窖窯末期	118					灰釉	5Y8/2	灰白色	灰白色	
197		S	SK73		上層	唐津	Ⅲ		1590～1630年	118					灰釉	2.5GY7/1	明オリーブ灰色	灰白色	
198	92	S	SK73		上層	唐津	Ⅲ		1600～1630年	119	33	40			灰釉	7.5Y6/2	灰オリーブ色	灰黄色	砂目
199		S	SK73			京焼風唐津	椀			120					透明釉			オリーブ黄色	漆継
200	95	S	SK73			越中瀬戸	擂鉢			248					錆釉	10YR4/4	褐色	にぶい黄橙色	
202	92	S	SK78		上層	越中瀬戸	擂鉢		17C前半	280	117	120			錆釉	10YR4/3	にぶい黄褐色	黄橙色	
203		C	SK80	X078Y031		珠洲	擂鉢		Ⅳ期	340								黄灰色	
205		S	SK79			越中瀬戸	擂鉢					118			錆釉	5YR5/3	にぶい赤褐色	にぶい黄橙色	
206	93	S	SK79			唐津	Ⅲ		1600～1630年			44			灰釉	7.5Y7/1	灰白色	浅黄色	砂目
210	94	S	SK150		上層	珠洲	擂鉢		Ⅵ期	360				波状文				灰色	
211	95	S	SK150		下層	中国製青磁	碗か杯					100			青磁釉	10GY7/2	緑みの灰色	灰白色	龍泉窯系
213	94	C	SK652			須恵器	無台杯											灰白色	
214	94	C	SK652			珠洲	壺		Ⅲ期	161								灰色	漆継布痕
215	94	C	SK652			珠洲	甕		Ⅴ～Ⅵ期			162						灰白色	土器片と木で漆継
216	94	C	SK652			珠洲	擂鉢		Ⅵ期	400								灰白色	
217		C	SK652			珠洲	擂鉢		Ⅳ～Ⅴ期			110						褐灰色	内外面黒変
218		C	SK652			越中瀬戸	Ⅲ			119					鉄釉	7.5YR4/3	褐色	灰白色	
220	93	C	SK66	X078Y025	灰黒色粘質土	縄文土器	深鉢					111						灰白色	石英　赤色酸化粒
221	94	C		X074Y024	Ⅰ層	土師器	鍋		8C後半～9C前半	370			22					灰黄褐色	石英
222		N		X086Y028	Ⅰ層	須恵器	壺											灰白色	
223	94	N			Ⅰ層	須恵器	甕		8C前半	620				波状文				灰色	
224	94	N	SK10			土師器	内黒椀		8C中頃			86						灰黄色	角閃石

第27表　田尻遺跡 第一次調査　土器・陶磁器一覧 (5)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
225		N			Ⅰ層	中世土師器	皿			88	14							にぶい黄橙色	
226		S		X035Y036	Ⅰ層	珠洲	甕		Ⅴ期	560								灰色	
227	95	S	SK729		下層	瀬戸美濃	天目茶椀		大窯Ⅰ期			45			鉄釉・錆釉	2.5Y3/1	黒褐色	浅黄橙色	錆釉5PB6/1青灰色
228	93	S	SE124		中層	瀬戸美濃	皿		大窯Ⅰ～Ⅱ期			53			灰釉	5Y6/3	オリーブ黄色	灰黄色	
229	95	S	SK792			瀬戸美濃志野	小杯		16C末～17C	104					長石釉	5Y7/1	灰白色	淡黄色	
230	95	C		X075Y025	Ⅰ層	中国製青磁	碗		15C～16C					劃花文	青磁釉	7.5GY7/1	明緑灰色	灰白色	
231		C			Ⅰ層	中国製青磁	碗	上田BⅡ類	14C後半～15C前半			56		劃花文蓮弁文	青磁釉	10GY5/3	くすんだ緑色	灰白色	
232	95	S	SE54			中国製白磁	皿		15C	108					白磁釉	2.5Y8/2	灰白色	灰白色	
233	95	S	SB03 (SP771)		上層	越中瀬戸	皿					46			灰釉	5Y6/2	灰オリーブ色	にぶい橙色	
234	95	S	SK791		中層	越中瀬戸	皿			108	23	59		印花	灰釉	5Y6/3	オリーブ黄色	灰白色	
235	95	N		X090Y029	Ⅰ層	越中瀬戸	壺			54					鉄釉	10YR3/3	暗褐色	黄灰色	
236	92	S	SK729		上層	越中瀬戸	擂鉢					104			錆釉	7.5YR6/4	にぶい橙色	にぶい黄橙色	
237	92	S		X042Y035	Ⅰ層	越中瀬戸	擂鉢					122			錆釉	7.5YR6/4	にぶい橙色	にぶい黄橙色	
238	92	C			Ⅰ層	唐津	椀			119	68	49			鉄釉	5Y3/1	オリーブ黒色	暗灰黄色	
239		N		X095Y026	Ⅰ層	唐津	椀		17C～18C			48		刷毛目	鉄釉	5Y4/1	灰色	灰色	白泥7.5Y7/1灰白色
240	93	S			Ⅰ層	唐津	皿		1600～1630年	122		48			灰釉	5Y6/2	灰オリーブ色	オリーブ黄色	砂目
241	96	C		X048Y025	Ⅰ層	唐津	溝縁皿		1600～1630年	133	30	40			灰釉	5Y6/3	オリーブ黄色	灰黄色	砂目
242	93	S	SE55			唐津	溝縁皿		17C	136	29	45			灰釉	2.5Y6/2	灰黄色	灰黄色	砂目
243		S			Ⅰ層	唐津	皿		1580～1600年			52			灰釉	7.5Y7/1	灰白色	灰白色	墨書　胎土目
244	96	C	SK109			唐津	溝縁皿		17C前	244					鉄釉・灰釉	5YR3/3	暗赤褐色	灰黄色	灰釉2.5Y8/1灰白色
245		C			Ⅰ層	唐津	甕		1580～1600年	316					鉄釉	10YR4/3	にぶい黄褐色	灰白色	
246	92	C	SK66	X078Y025		唐津	壺					85			鉄釉	7.5YR4/3	褐色	褐灰色	二次被熱？
247	93	N	SD20			唐津	小杯		1600～1630年	72	36	32			灰釉	5Y5/2	灰オリーブ色	黄灰色	砂目
248	93	N		X092Y027	Ⅰ層	陶器	鉢		近世以降	140					灰釉	5Y6/4	オリーブ黄色	灰オリーブ色	
249		N		X101Y032	Ⅰ層	唐津？	擂鉢					118						にぶい橙色	
250	96	N		X095Y026	Ⅰ層	伊万里	皿		1690～1780年			40		染付	透明釉			灰白色	染付2.5PB5/6くすんだ青色　コンニャク印判
251	96	N		X086Y024	Ⅰ層	伊万里	碗		18C			60		染付	透明釉			灰白色	染付7.5B6/3青灰色
252	96	S		X092Y027	Ⅰ層	伊万里	碗		1690～1780年	120				染付	透明釉			灰白色	陶胎　染付5G6/1緑灰色
253	93	N		X090Y029	Ⅰ層	伊万里	碗		1690～1780年	90	64	36		染付	透明釉			灰色	陶胎　染付5B7/1明青灰色
254	93	N		X101Y029	Ⅰ層	伊万里	碗		1690～1780年			44		染付	透明釉			灰白色	染付5B7/1明青灰色　コンニャク印判
	93	C	SD63	X057Y031	砂礫層	縄文土器	深鉢											浅黄橙色	
	92	C	SK90			唐津	皿		1580～1600年	112	25	40		鉄絵	灰釉	7.5Y7/1	灰白色	灰白色	鉄絵7.5Y5/1灰色　胎土目

第27表　田尻遺跡 第一次調査　土器・陶磁器一覧 (6)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
	92	C	SE91			唐津	皿		1580～1600年	112	25	40		鉄絵	灰釉	7.5Y7/1	灰白色	灰白色	鉄絵7.5Y5/1灰色　胎土目
	95	C	SD107	X055Y025		中国製染付？	碗		明末？					染付	透明釉			灰白色	染付7.5B7/3青灰色
	93	C	SK116			唐津	皿		1580～1600年	112	30	40		鉄絵	灰釉	7.5Y7/1	灰白色	灰白色	鉄絵7.5Y5/1灰色
	96	N	SK549			唐津	椀					46		刷毛目	鉄釉	10YR6/3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	白泥2.5Y8/3淡黄色漆継ぎ
	96	N	SK549			唐津	擂鉢		1690～1735年	322					鉄釉	5YR4/2	灰褐色	黄灰色	
	94	C	SK665			珠洲	擂鉢		Ⅴ～Ⅵ期	335								灰オリーブ色	
	94	N		X089Y031	Ⅰ層	珠洲	擂鉢		Ⅰ期									灰白色	

第28表　田尻遺跡 第一次調査　木製品一覧 (1)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	長さ	幅(高さ)	厚さ(直径)	樹種	木取り	年輪幅	塗膜	樹種写真	年代	整理番号	特記事項
3		N	SB01(SP38)			柱	(35.8)	18.0	15.0	コナラ・クヌギ	芯持ち			8		900065	
4	104	N	SB01(SP590)			柱	(10.6)		7.5	イヌブナ・ブナ	芯持ち	1-3.5				900332-2	
5		N	SB01(SP590)			柱	(30.8)		21.8	クヌギ	芯持ち	1-2				900332-1	
6		N	SB01(SP38)			柱	(52.3)	12.4	9.4	クリ	芯持ち	4				900074	
9		N	SB02(SP524)			柱	(29.1)		16.0	クヌギ	芯持ち	1-3				900320	
11		S	SB03(SP747)			柱	(94)	32.0	30.4		芯持ち					900086	
12		S	SB04(SP737)			柱	(14.0)	23.2	14.5	クリ		2-5				900265	
17	96	N	SD08			田下駄	19.3	(5.3)	0.9	不明(ニレ科・マメ科?)	柾目			17		900097	田下駄か?
22	99	N	SD09			蓋	(12.0)	4.0	0.5	スギ		0.5-0.8				900311	綴り皮
37		S	SD48			加工木(板状)	22.2	2.2	0.7	スギ		0.9				900099	綴り皮
56	100	C	SD61	X049Y030		漆器椀	(13.3)	(6.1)	7.0	ブナ・イヌブナ		1.0-3.0	6-50			900127	外一黒/赤　内一赤
57	103	C	SD61	X048Y029		擂粉木	26.1		3.4	針葉樹	芯持ち	3		5		900005	
58		C	SD61	X048Y031		桶(側板)	22.6	6.1	0.9							900172	タガの痕
59		C	SD61	X049Y032	上層	桶(側板)	(16.0)	3.6	0.7	スギ	板目	1.0				900176	タガの痕
60		C	SD61		上層	柱?	(7.4)	9.0	8.4		芯持ち					900098	
61		C	SD61			加工木(板状)	(16.4)	2.9	0.7							900308	
81		C	SD62	X057Y026		下駄	(20.7)	(9.0)	4.1	樹脂細胞を有する針葉樹(スギなど)		2.3-3				900108	
82	104	C	SD62	X053Y031	上層	木簡	(25.3)	2.8	0.2	スギ		0.3-0.6				900023	墨書
108	100	C	SD118	X054Y021		漆器椀	11.8	4.6	5.8	不明(ケヤキ?)		<0.5	4-07		近世	900129	内一赤　外一黒
109	105	C	SD118			柱	(200.0)		21.0		芯持ち					900080	
110		C	SD118			柱	(124.0)	24.0	12.8		芯持ち					900081	
111	105	C	SD118			柱	(123.4)		16.8		芯持ち					900077	
120		N	SE32			円形板	(13.4)	5.4	0.4	不明(樹脂細胞を有する針葉樹)	柾目	0.8-1.2				900169	渋跡
121	98	N	SE32			曲物		6.1	9.3	側板スギ、底板スギ・アスナロ		0.5	6-18			900153	渋塗か?木釘　キメカキ
125		N	SE44			枘杓(底板)		0.9	8.6	底板ネズコ、木釘樹脂細胞を有する針葉樹(スギなど)		0.5-1				900154	木釘　有孔
127		N	SE44			円形板	(24.0)	5.8	1.1	スギ	板目	1				900170	木釘痕　有孔
128	96	N	SE46			下駄	13.5	6.6	2.2	ウリカエデ		0.8-1.2				900107	右足用?穿孔
131	100	S	SE50		下層	漆器皿	14.7	4.1	6.8	ブナ		2.2	4-15, 6-55		14～16C	900134	黒/赤　鶴文　高台裏キズ
132		S	SE50			曲物		15.7	21.4	タガ側板スギ、本体側板スギ、底板スギ	タガ側板板目、本体側板柾目、底板柾目	1.0, 0.3-0.7, 0.5				900151	綴り皮　キメカキ
133		S	SE59			円形板		0.8	21.1	不明(スギ?)	板目					900146	

第28表　田尻遺跡 第一次調査　木製品一覧 (2)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	長さ	幅(高さ)	厚さ(直径)	樹種	木取り	年輪幅	塗膜	樹種写真	年代	整理番号	特記事項
134		C	SE64			円形板	(16.2)	6.4	1.4	スギ	板目	2.0				900171	漆塗り　木釘
135	98	C	SE64			円形板		0.6	17.5	不明(樹脂細胞を有する針葉樹)	柾目	0.3				900175①	渋痕
136	98	C	SE64			円形板		0.6	18.4	不明(スギ?)	柾目					900175②	渋塗り?
137		C	SE64			加工木(板状)	35.7	6.5	0.7							900278-1	有孔
138		C	SE64			加工木(板状)	42.0	2.8	0.7							900278-2-2	有孔
141	99	S	SE71			折敷(底板)	33.2	12.1	0.1	スギ	柾目	0.7-1.0				900004	渋塗り?有孔
142		S	SE71			箸	(20.0)		0.8							900033④	
143	103	S	SE71			箸	20.15		0.6							900033③	
144		S	SE71			箸	20.4		0.4	スギ・ヒノキ						900033②	
145	103	S	SE71			箸	(17.75)		0.55							900033①	
147	103	S	SE77			加工木(板状)	(12.9)	5.3	0.7							900247	漆塗り　有孔　切りキズ
153	101	C	SE82			漆器皿	(9.7)	2.2	5.7	ブナ		1.0-1.5	6-28		16C	900128	内－黒／赤　外－黒 内－たちばな文
154		C	SE82			加工木(板状)	(14.8)	(8.2)	2.4							900174③	
155		C	SE82			加工木(板状)	(28.0)	(5.6)	1.3							900174②	漆塗り
156		C	SE82			円形板	38.3	13.5	3.4	スギ		3.0				900174①	渋又は漆痕　木釘痕
158	97	C	SE92			櫛	8.0	4.7	1.1	マンサク科(イスノキ?)	芯持ち	1		16		900038	漆塗り
159	102	C	SE92			漆器椀	(15.3)	5.5	7.1	ブナ・イヌブナ			6-51		16C	900130	内外－植物文
160		C	SE92			柄杓		4.05		スギ	柾目					900145	
161		C	SE92			柄杓の柄	55.4	1.5	1.5	アスナロ		0.7				900155	小孔
162	103	C	SE92			箸	(17.5)		0.65							900267	
163	102	C	SE92			刳物匙	(10.0)	8.9	3.0	カキノキ(シナノガキ?)			6-03			900006	漆塗り
164		C	SE94			井戸枠(組板)	(65.6)		6.7	リンゴ属	芯持ち	6		11		900042	
168		C	SE112			井戸枠(組板)	(87)	13.6	6.4	トネリコ属				13		900047	
169	98	C	SE101			円形板	20.8	9.6	1.2	ネズコ						900178	渋塗り　有孔　木釘痕
173	99	S	SE154		下層	円形板		0.7	22.0		柾目					900149	切りキズ
174	99	S	SE154		下層	円形板		0.8	22.8	スギ・アスナロ	柾目	0.9-2.0				900148	綴り皮
175		N	SK19			柱	(47.2)	17.6	12.0	ヌルデ	芯持ち	2.5				900073	
176		N	SK19			柱	(20.7)	11.1	11.0	クヌギ	芯持ち	2-3				900317	
177		N	SK19			柱	(20.5)		15.3	ケンポナシ	芯持ち					900316	束の柱
190	100	S	SK49		上層	漆器皿	11.0	3.0	(4.8)	ブナ	柾目	0.5-1.5	6-54		16C	900133	外－黒／赤　内－赤
192	97	S	SK53			栓	10.9		3.5	不明(針葉樹)		2.0				900008	漆の痕
193	103	S	SK53			加工木(特殊形)	(16.5)	3.5	0.7	ヒノキ	板目	2				900248	
219	101	C	SK652			漆器椀	13.7	(4.7)	(7.0)	ウコギ科	柾目			12		900126	布着せ　外－黒　内－赤
255		N	SK542			下駄	(21.4)	10.5	(3.8)	不明		3				900106	台表に焼印?

第28表　田尻遺跡 第一次調査　木製品一覧 (3)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	長さ	幅(高さ)	厚さ(直径)	樹種	木取り	年輪幅	塗膜	樹種写真	年代	整理番号	特記事項
256	97	C	SK109			下駄	(19.5)	8.3	2.9	針葉樹(スギ・ヒノキアスナロなど)		4.0				900110②	
257	97	C	SK109			下駄	19.4	8.8	2.6	針葉樹(ネズコなど)		1.5-4				900110①	有孔
258	98	N	SE515			円形板		0.7	22.4	スギ・アスナロ	柾目	0.3-1.2				900144	漆塗りの痕？
259	98	N	SE515			円形板		0.7	27.4	ヒノキ	柾目	0.8-1.5	底6-21			900143	漆痕　木釘痕　切りキズ
260		S	SE130			曲物		18	20.6	側板不明(スギ？)、底板スギ			側板6-14			900150	渋塗り　漆塗り(底板内面)　木釘　綴り皮
261	99	S	SE55			折敷(底板)	31.5	7.4	0.7	スギ	柾目	0.8				900009	木釘痕　渋塗り　切りキズ　綴り皮
262		S	SK158			自在鉤	20.3	6.8	2.6	樹脂細胞を有する針葉樹		0.3-3.0		4		900016	
263	100	S	SK158			漆器椀	14.9	(4.5)	7.2	ブナ		1.6	6-53		16C	900132	内－黒／赤　ろくろの爪跡か？
264	102	S	SE157			漆器椀	14.0	6.2	6.8	ブナ・イヌブナ		1.0-2.0	6-52		16C	900131	黒／赤　穿孔
265	101	N	SE515			漆器皿	(14.6)	(3.8)	7.9	ブナ	柾目	1-2.5	6-29		16C	900125	内外－黒／赤　草木文
266	103	N	SE515			箸	18.9		0.6							900032	
267		N	SE24			箸	18.2		0.5							900031①	
268		N	SE24			箸	(17.55)		0.55							900031⑤	
269	103	N	SE24			箸	16.8		0.6							900031②	
270		N	SE24			箸	(13.7)		0.5							900031③	
271		N	SE24			箸	(12.7)		0.55							900031④	
272	104	S	SK601			柱	(67.8)		24.8		芯持ち					900087	
273		N	SK509			柱	(33.3)	30.4	12.8		芯持ち					900066	
274	104	N	SK521			柱	(79.7)		22.9		芯持ち					900067	
275	105	C	SK676			柱	(71.4)	23.2	21.6		芯持ち					900078	
276	104	N	SK591			柱	(18.7)		11.5	ブナ	芯持ち	1-3.5				900070	
	97	C	SE114			下駄	22.9	9.6	5.4	ネズコ	芯持ち	5				900109	右足用

第29表　田尻遺跡 第一次調査　石製品一覧

番　号	図　版	地　区	遺構番号	座　標	層　位	種　類	長	幅	厚	重	石　材	特　記　事　項
10		N	SB02(SP12)			石硯	(7.1)	8.0	1.7	128.3	泥岩	
15	107	N	SD08			石臼(上)		10.4	31.2	8200	凝灰岩	横打ち込み式　8分画　上面被熱
16	109	N	SD08	X097Y027		五輪塔(火)	(19.8)	(19.4)	8.6	3100	凝灰岩	
18		N	SD09			石臼(上)		11.4	(30.0)	3300	凝灰角礫岩	
19	106	N	SD09			石臼(上)		10.8	30.4	9500	凝灰角礫岩	横打ち込み式　8分画
47		C	SD60			石臼(上)		(9.0)	30.0	4300	凝灰角礫岩	横打ち込み式
85	107	C	SD62	X054Y030		石臼(下)		11.6	(27.0)	6000	凝灰岩？	スス付着
86		C	SD62			石臼(下)		9.4	(27.2)	3700	凝灰角礫岩	
87	108	C	SD62	X056Y030	上層	五輪塔(火)	23.0	22.2	17.6	13000	凝灰角礫岩	
88	106	C	SD62	X057Y029	灰黒色粘質土	石臼(上)		13.2	28.1	14500	凝灰岩	横打ち込み式
89		C	SD62			五輪塔(水)		19.9	(26.2)	5500	凝灰岩	
112	105	C	SD118	X065Y020		打製石斧	18.5	10.6	2.7	658.9	凝灰岩？	
113	105	C	SD118	X064Y021		打製石斧	23.6	9.0	4.3	1074.5	安山岩	
114	107	C	SD118	X063Y017		石臼(上)		9.2	(30.0)	4500	凝灰角礫岩	横打ち込み式
115	109	C	SD118	X057Y021		五輪塔(空風)		(20.8)	12.6	3200	凝灰岩	
118		N	SE18			自然石	(13.0)	(9.6)	4.5	581.6		
123	107	N	SE36			石鏃	1.9	1.5	0.5	1	チャート	
126		N	SE44			自然石	26.8	11.0	7.4	3000		
148	106	S	SE77			石臼(下)		10.4	30.4	7500	凝灰角礫岩	8分画
149		S	SE77			五輪塔(地)	24.8	24.6	(18.0)	18200	凝灰岩	
150		S	SE77			五輪塔(地)	24.4	23.6	(8.6)	6500	凝灰岩	
151	108	S	SE77			五輪塔(水)		17.0	25.0	12500	凝灰岩	被熱をうけて黒変する
167	106	C	SE112			石臼(下)		10.0	30.6	6700	凝灰角礫岩	8分画
195	106	S	SK58		下層	石臼(上)		10.8	32.0	9900	凝灰角礫岩	
201		S	SK73		下層	石臼(下)		8.0	(30.0)	3800	凝灰岩	
204	109	C	SK80	X081Y032		石硯	(7.5)	(8.0)	(2.0)	154.4	泥岩	
207	109	S	SK79			石硯	(6.5)	(5.1)	1.8	51.7	泥岩	砥石に転用　墨痕
208	109	S	SK79			石硯	(9.5)	(3.2)	1.4	47.8	泥岩	墨痕
209		S	SK79		下層	石臼(下)		8.0	(30.0)	3050	凝灰角礫岩	
212		S	SK150		上層	砥石	(8.6)	(5.7)	(1.3)	60.5	泥岩	
277	105	S		X036Y026	Ⅰ層	磨製石斧	15.3	6.2	2.6	361.8	砂岩	
278	105	N		X092Y027	Ⅰ層	打製石斧	19.0	7.1	4.3	803.0	安山岩	
279	108	C			Ⅰ層	五輪塔(火)	27.6	27.6	25.2		凝灰角礫岩	
	107	C	SK653			石杵		(7.2)	4.5	250	凝灰岩	
	109	C	SD118	X056Y023		五輪塔		32.0	21.3	12800	凝灰岩	

第30表　田尻遺跡 第一次調査　金属製品一覧

番　号	図　版	地　区	遺構番号	座　　標	層　　位	種　類	長	幅	厚	重	材　質	特　記
14	109	N	SD08	X087Y025付近		銭貨	2.4		0.09	2.95	銅	元豊通寶
62	109	C	SD61	X050Y030	上層	銭貨	2.4		0.07	4.60	銅	寛永通寶
83	109	C	SD62	X053Y030		銭貨	2.4		0.06	2.48	銅	天聖元寶
84	109	C	SD62	X053Y030		銭貨	2.3		0.07	2.56	銅	寛永通寶
116		C	SD118	X083Y025		小柄の柄	6.3	1.4	0.4	5.0	銅	
191	109	S	SK49	X043Y026	下層	銭貨	2.2		0.13	2.33	銅	元豊通寶
280		S	SK601		下層	銭貨	1.7		0.07	1.01	銅	
	109	S	SE50		上層	銭貨	2.4		0.15	3.83	銅	元寶通寶

第31表　田尻遺跡 第二次調査　住居址一覧

挿図	図版	地区	遺構番号	長(cm)	短(cm)	深(cm)	床面積(m²)	床標高(m)	出土遺物	備考	時期
115	110	B	SB01	662	503	81	33	59.3	縄文土器(1)，須恵器(2)，須恵器?(3)，内黒土師器(4)，中世土師器(5～17)，珠洲(18～20)，柄?(21)，加工木(22)，箸(23～31)，柱(32·33)漆器椀(95)	SK137＜SB01＜SK141·SB12·14·15	13C

第32表　田尻遺跡 第二次調査　掘立柱建物一覧 (1)

挿図	図版	地区	遺構番号	桁行柱間	梁行柱間	桁行長 cm	桁行長 尺	桁行長 平均cm	梁行長 cm	梁行長 尺	梁行長 平均cm	平面積(m²)	桁行柱間 cm(尺)	梁行柱間 cm(尺)	棟方向	方位	柱形式	出土遺物	備考	時期
116·117	111	A	SB02	2	2	540	18.0	270	445	14.8	223	24	260(8.7),280(9.3)	220(7.3),225(7.5)	南北棟	N	総柱		SB02＞SD25·43,SK56	15C前半
116·117	111	A	SB03	2	2	544	18.1	272	475	15.8	238	26	266(8.9),278(9.3)	235(7.8),240(8)	南北棟	N	総柱	須恵器	SB03＞SD34	15C前半
116·118	111	A	SB04	2	1	460	15.0	230	162	5.4	—	7	230(7.7),230(7.7)	162(5.4)	東西棟	N80°W	側柱	中世土師器		
119·120	111	A	SB05	4	2	884	29.5	221	512	17.1	256	45	229(7.6),214(7.1),229(7.6),212(7.1)	248(8.3),264(8.8)	東西棟	N74°W	総柱	中世土師器(34·35)，珠洲(36)	SB05＞SD87,SX49 SK21·22を伴う	15C前半
119·120	112	A	SB06	4	3	836	27.9	209	591	19.7	197	49	230(7.7),219(7.3),212(7.1),175(5.8)	186(6.2),200(6.6),205(6.8)	東西棟	N90°W	総柱	中世土師器(37)	SB06＜SK23	
119·121	112	B	SB07	3	3	756	25.2	252	688	22.9	229	52	268(8.9),235(7.8),253(8.4)	219(7.3),238(7.9),231(7.7)	南北棟	N6°E	総柱	中世土師器,珠洲(38)	SB07＜SK23	13C後半～14C
122·123	113	A	SB08	3	3	640	21.0	210	623	20.8	208	40	215 (7.2)，210 (7)，215(7.2)	211 (7)，194 (6.5)，218(7.3)	南北棟	N4°E	総柱	珠洲	SB08＞SD55	13C後半～14C
122·123	113	B	SB09	2	2	510	17.0	255	490	16.3	245	25	250(8.3),260(8.7)	253(8.4),237(7.9)	南北棟	N10°E	総柱		SB09＞SD34·87	15C前半
122·124	113	B	SB10	6	4	1525	50.8	254	930	31.0	233	142	273(9.1),304(10.1),240 (8) ,248 (8.3) ,230(7.7),230(7.7)	233(7.8),242(8.1),235(7.8),220(7.3)	南北棟	N10°E	総柱	中世土師器(39)	SD55＜SB10＜SD87	12C後半～13C前半
125·126		B	SB11	5	4	1206	40.2	241	1057	35.2	264	127	244(8.1),230(7.7),263(8.8),226(7.5),261(8.7)	244(8.1),234(7.8),284(9.5),295(9.8)	東西棟	N80°W	総柱	土師器,須恵器(40)中世土師器	SB11＞SB13,SD87,SE123	
125·127	114	B	SB12	3	2	638	21.3	213	582	19.4	291	37	202(6.7),220(7.3),216(7.2)	292(9.7),290(9.7)	東西棟	N74°W	総柱	中世土師器(41·42)	SB12＞SE123,SB01	
125·127	114	B	SB13	3	2	615	20.5	205	415	13.8	208	26	195(6.5),220(7.3),200(6.7)	206(6.9),209(7)	東西棟	N71°W	総柱	中世土師器	SB13＜SB11	15C前半
125·128	114	B	SB14	3	3	710	23.7	237	575	19.2	192	41	249(8.3),250(8.3),211(7)	175(5.8),201(6.7),199(6.6)	南北棟	N12°E	総柱	中世土師器	SB14＞SB01,SK137·167	13C後半～14C
125·128	114	B	SB15	2	2	419	14.0	210	414	13.8	207	17	205(6.8),214(7.1)	200(6.7),214(7.1)	東西棟	N77°W	総柱		SB15＞SB01,SK137·167	
125·129		B	SB16	4	3	946	31.5	237	762	25.4	254	72	226(7.5),250(8.3),243(8.1),227(7.6)	244(8.1),258(8.6),260(8.7)	東西棟	N83°W	総柱	縄文土器,土師器	SB16＜SK167	
130	114	B	SB17	2	2	550	18.3	275	445	14.8	223	24	272(9.1),278(9.3)	240(8),205(6.8)	南北棟	N11°E	総柱			15C前半
131·132	115	B	SB18	3	2	754	25.1	251	466	15.5	155	35	252(8.4),294(9.8),208(6.9)	242(8.1),224(7.5)	南北棟	N13°E	総柱	中世土師器	東にのびる	12C後半～13C前半
131·132	115	B	SB19	3	3	676	22.5	225	561	18.7	187	38	226(7.5),228(7.6),222(7.4)	170(5.7),230(7.7),161(5.4)	南北棟	N13°E	総柱		SB19＞SB20	13C後半～14C

第32表　田尻遺跡 第二次調査　掘立柱建物一覧 (2)

挿図	図版	地区	遺構番号	桁行柱間	梁行柱間	桁行長 cm	桁行長 尺	桁行長 平均cm	梁行長 cm	梁行長 尺	梁行長 平均cm	平面積 (㎡)	桁行柱間 cm(尺)	梁行柱間 cm(尺)	棟方向	方位	柱形式	出土遺物	備考	時期
131・133	115	B	SB20	4	3	1024	34.1	256	736	24.5	245	75	259(8.6),265(8.8),260(8.7),240(8)	251(8.4),237(7.9),248(8.3)	南北棟	N15°E	総柱		SB20＜SB19,SD183	12C後半～13C前半
134・135	115	B	SB21	2	3	520	17.3	260	422	14.1	211	22	253(8.4),267(8.9)	163(5.4),61(2),198(6.6)	東西棟	N78°W	総柱			12C後半～13C前半
134・135	115	B	SB22	3	2	760	25.3	253	502	16.7	251	38	278(9.3),212(7.1),261(8.7)	250(8.3),246(8.2)	南北棟	N17°E	総柱			12C後半～13C前半
134・136	115	B	SB23	4	2	1025	34.2	256	470	15.7	228	53	230(7.7),265(8.8),260(8.7),270(9)	234(7.8),230(7.7)	南北棟	N18°E	総柱			12C後半～13C前半
134・136	115	B	SB24	2	2	565	18.8	283	505	16.8	253	29	276(9.2),289(9.6)	250(8.3),255(8.5)	東西棟	N77°W	総柱			12C後半～13C前半
134・137	115	B	SB25	2	2	578	19.3	289	492	16.4	246	28	283(9.4),295(9.8)	243(8.1),249(8.3)	南北棟	N13°E	総柱			12C後半～13C前半
134・137	115	B	SB26	2	2	529	17.6	265	454	15.1	227	24	260(8.7),269(9)	219(7.3),235(7.8)	南北棟	N12°E	総柱			12C後半～13C前半

第33表　田尻遺跡 第二次調査　溝一覧

挿図	図版	地区	遺構番号	流路	規模：幅	規模：深	出土遺物	備考	時期
138・139	A		SD13	東→西	22～ 88	2～18	須恵器(43・44)，中世土師器(45～47)，珠洲(78)，温石(48)	SD13＜SD25	12C
138・139・146		A	SD25	東→西	38～ 97	8～46	須恵器(49)，土師器(50)，中世土師器，珠洲	SD25＜SD34	12C
		A・B	SD26	北→南	260	28～ 60	中世土師器(51～53)，珠洲(54・55)	SD26＜SD87	12C後半～13C前半
		A・B	SD28		25～120	6～22		SD28＜SK23	
		A	SD29	東→西	35～ 86	6～12	須恵器，中世土師器(280)，珠洲，八尾，中国製青磁(359)		
		A	SD31		27～ 53	－	珠洲，灰釉陶器(367)		
		A	SD32	南→北	58～151	6～43	須恵器，土師器，珠洲(333)，中国製白磁		
138・139	117	A・B	SD34	南→北	95～169	4～49	須恵器(56)，土師器(57)，中世土師器(58・59)，珠洲(60・61)	SB09＞SD34＞SB03,SD25・43・53,SK56	12C後半～13C前半
		A	SD36	南→北	22～ 46	4～ 7		SD36＜SK23	
138・139		A	SD43	東→西	14～ 30	8～25	須恵器，中世土師器	SD53＜SD43＜SD34,SX49	12C
		A	SD46	東→西	93～111	14～25	須恵器(254・266)		
138・139		A	SD53	東→西	50～ 59	30～47		SD53＜SD43	12C
138・139	116	A	SD54	南→北	62～118	9～34		SD54＜SD87,SX49	
138・139		A・B	SD55	南→北	33～160	3～28	土師器，須恵器，中世土師器，珠洲(62)	SD55＜SB08・10	
138・139・146	115・116	A・B	SD87		32～190	8～59	縄文土器？，須恵器(63・64)，中世土師器(65～71)，八尾，珠洲(54・73～78)，中国製白磁(72)，中国製青磁，取手金具？(79)，粘土塊，砥石	SB10,SD54＜SD87＜SB05・09・11,SK22・121・141	13C後半～14C
138		B	SD178		40～168	3～33	中世土師器(80)，珠洲(81)	SK181＞SD178＞SK182	12C後半～13C前半
140	116	B	SD183		34～ 80	10～40	須恵器，土師器，中世土師器(82～91)，珠洲	SD183＞SB20	13C後半～14C
138		B	SD184	東→西	17～ 35	11～16			13～14C
138		B	SD185		57～115	16～49	縄文土器，中世土師器，八尾，珠洲，種子(モモ)		12C後半～13C前半
138・139		A	SD214	東→西	40～110	1～16	須恵器(252)	SD214＜SD25	13C

第34表　田尻遺跡 第二次調査　井戸一覧

挿　図	図　版	地　区	遺構番号	平面形	規模：長	規模：短	規模：深	出　　土　　遺　　物	備　　考	時　　期	最終レベル	湧水レベル
141		A	SE33	円	118		313	中世土師器，種子(オニグルミ)	SE33＞SD87	15C前半	57.84	
142	117	B	SE109	楕円	203	89	219	須恵器(9,)，中世土師器(92)，珠洲(94)，中国製青磁，加工木(101)，漆器皿(97)，漆器椀(96)，箸(98～100)，曲物(102)，井戸枠(曲物)(103～106)	上部石積み，下部曲物5段積上 SE109＜SK125	13C後半～14C	58.54	
141	118	B	SE123	円	282		244	須恵器(107)，中世土師器(108～123)，八尾，珠洲，中国製青磁(124)，土錘(125)，漆器椀，曲物(126)，円形板(127)，加工木(128)，鍬身(129)，箸(130～144)，銭貨(145～149)，種子(モモ・オニグルミ)，甲虫	息抜きの竹 SE123＜SB11·12	12C後半～13C	58.26	
141		B	SE180	楕円	102	84	64				60.26	

第35表　田尻遺跡 第二次調査　土坑一覧

挿図	図版	地区	遺構番号	平面形	規模：長	規模：短	規模：深	出土遺物	備考	時期
		A	SK04	円	30		30	中世土師器		
143		A	SK20	方	186	160	13	中世土師器，中国製青磁		
143	118	A	SK21	方	150	76	12	中世土師器(150·151)		15C前半
143		A	SK22	方	178	154	12	中世土師器	SK22＞SD87	15C前半
143	118	A·B	SK23	方	(291)	283	60	中世土師器(152～154)，珠洲？	SK23＞SD28·36,SB06·07	
146		A	SK45	楕円	398	185	59	土師器，須恵器(273·276)，中世土師器，珠洲(337)	SK45＞SK59	
		A	SK48	円	23		17	須恵器(269)		
143	120	A	SK56	方	228	77	31		SK56＜SB02,SD34	12C
		B	SK59	楕円	(140)	(62)	28	須恵器，中世土師器(320)	SK59＜SK45	
		B	SK65	円	26		14	銭貨(383)		
		B	SK99					中世土師器(290·291)		
	121	B	SK110	楕円	35	31		柱(375)		
		B	SK113	円	31		17	中世土師器(303)，珠洲		
		B	SK118	楕円	74	69	24	中世土師器(321)，粘土塊		
139		B	SK121	楕円	39	36			SK121＜SD87	
		B	SK125	楕円	101	85	9	中世土師器(283)	SK125＞SE109	
	121	B	SK135	楕円	81	58	26	中世土師器(228·322)		
		B	SK135	楕円	81	58	26	中世土師器(288·322)		
145	119	B	SK137					縄文土器，土師器(155)，須恵器，中世土師器(156·157)，珠洲(158～160)，漆器椀	SK137＜SB01,SK141	12C後半～13C
145	119	B	SK141		(653)	(460)	(99)	土師器，須恵器(161・162)，中世土師器(163～175)，八尾，珠洲(176～179)，土錘(180)，漆器皿(181·182)，下駄の歯？(183)，円形板(184)，箸(185～208)，加工木(209·211～213)，柄(210)，桶側板，たきぎ？，曲物側板，漆器椀，種子(オニグルミ・モモ・イネ・オオムギ・ソバ・ギシギシ属)	SK141＞SB01,SD87,SK137	13C～14C
146		B	SK143	楕円	87	82	34			
146		A	SK145	楕円	79	72	32			
		B	SK165		56	40	18	礎板(376)		
144	120	B	SK166	方	289	274	48	土師器，中世土師器，珠洲，中国製白磁(214)	谷状地形Ⅳa層を掘り込む	
144	119	B	SK167	方	224	194	90	縄文土器，須恵器(215)，中世土師器，中国製白磁(216)	SK167＞SB16	
144	121	B	SK175	方	224	223	65	須恵器，中世土師器，珠洲(217)		
144	119	B	SK176	楕円	161	149	40			
	121	B	SK177	楕円	228	114	16	中世土師器		
144	120	B	SK181	楕円	234	126	63	須恵器，中世土師器(218～222)，珠洲	SK181＞SD178	
144		B	SK182	長方	355	96	28	中世土師器(223～226)，珠洲(227)，粘土塊	溝か，SK182＜SD178	12C後半～13C
146		A	SX049	方	809	688	23	縄文土器，土師器，須恵器，中世土師器(228～233)，中国製白磁(234)	方形周溝状遺構 SX49＜SB05	9C～12C後半

第36表　田尻遺跡 第二次調査　土器・陶磁器一覧 (1)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
01	122	B	SB01	X267Y040		縄文土器	深鉢		晩期中葉					条痕文・押引列点文				にぶい黄橙色	
02	122	B	SB01	X268Y039		須恵器	双耳瓶											黄灰色	墨付着？
03	122	B	SB01	X267Y040		須恵器？	鉢？			300								黄灰色	骨針
04	122	B	SB01	X267Y040		内黒土師器	椀					60						にぶい黄橙色	石英
05	122	B	SB01	X267Y038		中世土師器	皿			100	21	52						淡黄色	石英　骨針
06	122	B	SB01	X200Y033	上層	中世土師器	皿			134			14					浅黄色	石英
07	122	B	SB01	X267Y041	上層	中世土師器	皿			136			14					灰黄褐色	石英
08	122	B	SB01	X266Y039		中世土師器	皿			138			15					にぶい黄橙色	
09	122	B	SB01	X267Y040		中世土師器	皿			138			15					にぶい黄褐色	骨針
10	122	B	SB01	X276Y040	下層	中世土師器	皿			136			14					灰黄色	骨針
11	122	B	SB01	X266Y038		中世土師器	皿			138			14					灰黄色	
12	122	B	SB01	X268Y039		中世土師器	皿			118			14					にぶい黄橙色	骨針
13	122	B	SB01	X267Y039		中世土師器	皿			120	28		19					にぶい黄橙色	骨針
14	122	B	SB01	X266Y039		中世土師器	皿			84	17		10					灰黄色	
15	122	B	SB01	X267Y040		中世土師器	皿			98			11					にぶい黄橙色	石英
16	122	B	SB01			中世土師器	皿			138			11					暗灰黄色	
17	122	B	SB01	X266Y040		中世土師器	大皿			178			13					浅黄橙色	石英
18	128	B	SB01	X267Y040		珠洲	甕		Ⅰ～Ⅱ期	622								灰色	
19	122	B	SB01	X267Y040		珠洲	擂鉢		Ⅲ期	372								灰色	
20	122	B	SB01	X268Y040		珠洲	擂鉢		Ⅰ期			120						黄灰色	
34		B	SB05			中世土師器	皿			100	14		10					灰黄褐色	黒変　石英
35		A	SB05			中世土師器	皿			118	25		14					灰黄褐色	黒変　石英
36		A	SB05			珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期	260								灰白色	
37		A	SB06			中世土師器	皿			120			16					浅黄橙色	石英
38		B	SB07			珠洲	擂鉢		Ⅰ期	324								灰色	
39		B	SB10			中世土師器	皿			120			18					灰黄褐色	黒変
40	127	B	SB11	X269Y035		須恵器	杯蓋											灰色	
41		B	SB12			中世土師器	皿			84			11					灰黄褐色	
42	126	B	SB12			中世土師器	皿			140			17					灰黄色	石英　骨針
43		A	SD13	X283Y037		須恵器	杯			160								灰色	
44		A	SD13	X283Y030		須恵器	鉄鉢？		8～9C			80						にぶい褐色	
45	126	A	SD13	X281Y040		中世土師器	皿			140	28		12					灰黄褐色	石英　骨針
46		A	SD13	X281Y040		中世土師器	皿			127			18					にぶい黄橙色	赤色酸化粒
47	126	A	SD13	X281Y040		中世土師器	皿			78	14		7					にぶい黄橙色	煤付着
49	127	A	SD25	X282Y033	暗黒灰色粘質土	須恵器	杯蓋			158								黄灰色	
50		A	SD25	X283Y029	灰茶褐色土	土師器	長甕			121								にぶい橙色	石英

第36表　田尻遺跡 第二次調査　土器・陶磁器一覧 (2)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
51	126	B	SD26	X270Y031		中世土師器	皿			120	27		16					にぶい黄橙色	煤付着　石英
52	126	B	SD26	X269Y032		中世土師器	皿			88	24		18					浅黄色	角閃石　石英
53		B	SD26	X269Y032		中世土師器	皿			92	19		15					黄褐色	角閃石
54	128	B	SD26	X269Y032		珠洲	擂鉢		Ⅱ期	276	142	128						灰色	
54	128	A	SD87	X282Y041		珠洲	擂鉢		Ⅱ期	276	142	128						灰色	
55	128	B	SD26	X268Y033		珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期			124						灰色	煤付着　指頭圧痕
56	127	B	SD34	X283Y033	下層	須恵器	杯蓋											黄灰色	墨付着？
57		B	SD34	X263Y028		土師器	高杯？											暗灰黄色	石英
58		B	SD34	X259Y042		中世土師器	皿			109			12					にぶい橙色	
59		B	SD34	X263Y028		中世土師器	皿			87	16		13					にぶい黄橙色	石英
60	128	A	SD34	X278Y031		珠洲	甕		Ⅰ～Ⅱ期	589								灰色	
61		A	SD34	X276Y031	中層	珠洲	擂鉢		Ⅱ期	294								灰白色	
62		A	SD55	X279Y038	黒茶褐色土	珠洲	擂鉢		Ⅰ期	260								灰白色	
63		B	SD87	X279Y042		須恵器	杯蓋			120								灰色	
64		A	SD87	X277Y033	下層	須恵器	甕			210								黄灰色	
65		B	SD87	X271Y034		中世土師器	皿			140	28		16					にぶい黄橙色	
66		B	SD87	X275Y033		中世土師器	皿			132			18					にぶい黄橙色	
67		B	SD87			中世土師器	皿			128			18					にぶい橙色	石英
68		B	SD87	X271Y035		中世土師器	皿			117	25		15					にぶい黄橙色	角閃石
69	126	B	SD87	X271Y033		中世土師器	皿			124	26		14					にぶい黄褐色	石英　煤付着
70		B	SD87	X270Y041		中世土師器	皿			158			19					にぶい黄橙色	角閃石
71	126	A	SD87	X280Y037		中世土師器	皿			126	26		14					橙色	石英　赤色酸化粒
72		B	SD87	X271Y035		中国製白磁	碗			160					白磁釉	7.5Y7/1	灰白色	灰白色	
73	129	B	SD87	X270Y041		珠洲	擂鉢		Ⅱ～Ⅳ期	360								灰色	
74		B	SD87	X271Y038	上層	珠洲	擂鉢		Ⅳ期	320								灰色	
75	129	B	SD87	X270Y041		珠洲	擂鉢		Ⅳ期	330								灰色	
76		B	SD87	X270Y041		珠洲	擂鉢		Ⅳ期	336								灰白色	
77		B	SD87	X271Y038		珠洲	擂鉢		Ⅳ期	341								灰色	
78	128	A	SD13	X281Y040		珠洲	甕		Ⅰ～Ⅱ期	590								灰色	
78	128	A	SD26	X269Y031		珠洲	甕		Ⅰ～Ⅱ期	590								灰色	
78	128	B	SD87	X271Y040		珠洲	甕		Ⅰ～Ⅱ期	590								灰色	
80	126	B	SD178	X255Y022		中世土師器	皿			92	21		13					橙色	
81		B	SD178		上層	珠洲	擂鉢		Ⅱ期	250								灰色	
82	123	B	SD183			中世土師器	皿			116	28		20					灰白色	石英
83	123	B	SD183			中世土師器	皿			115	24		20					浅黄橙色	
84	123	B	SD183			中世土師器	皿			120	21		14					淡黄色	石英

第36表　田尻遺跡 第二次調査　土器・陶磁器一覧 (3)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
85	123	B	SD183			中世土師器	皿			118	28		14					にぶい橙色	赤色酸化粒
86		B	SD183			中世土師器	皿			126			15					灰黄色	
87		B	SD183			中世土師器	皿			106			15					にぶい橙色	
88		B	SD183			中世土師器	皿			118			15					にぶい橙色	石英　赤色酸化粒
89	123	B	SD183			中世土師器	皿			119	27		14					浅黄橙色	赤色酸化粒
90	123	B	SD183			中世土師器	皿			85	15		9					灰黄色	
91	123	B	SD183			中世土師器	皿			84	18		12					暗灰黄色	石英　骨針
92		B	SE109			中世土師器	皿			110			20					にぶい橙色	
93	127	B	SE109			須恵器	壺			150								灰白色	
94	129	B	SE109			珠洲	擂鉢		Ⅳ期	300								灰色	
107		B	SE123		黒灰色粘土	須恵器	杯			90								灰色	
108		B	SE123		上層	中世土師器	皿			120			14					灰黄褐色	黒変
109	124	B	SE123		黒灰色粘土	中世土師器	皿			111			20					にぶい黄橙色	石英
110		B	SE123		黒灰色粘土	中世土師器	皿			120			14					灰黄褐色	石英　煤付着
111	124	B	SE123		黒灰色粘土	中世土師器	皿			120			17					にぶい黄橙色	
112		B	SE123		黒灰色粘土	中世土師器	皿			120			17					にぶい黄橙色	石英　煤付着
113		B	SE123		黒灰色粘土	中世土師器	皿			130	29		15					にぶい黄橙色	
114	124	B	SE123			中世土師器	皿			122	20		14					にぶい黄橙色	石英
115	124	B	SE123			中世土師器	皿			120			15					暗灰黄色	石英　骨針
116	124	B	SE123		青灰色粘土	中世土師器	皿			118	26		14					にぶい黄橙色	石英　黒変
117	124	B	SE123		黒灰色粘土	中世土師器	皿			134			16					灰褐色	石英
118	124	B	SE123		黒灰色粘土	中世土師器	皿			110	26		24					暗灰黄色	石英
119	124	B	SE123		上層	中世土師器	皿			86	22		14					にぶい黄橙色	石英　赤色酸化粒
120		B	SE123		黒灰色粘土	中世土師器	皿			100			12					にぶい黄橙色	
121		B	SE123		黒灰色粘土	中世土師器	皿			100			12					灰褐色	石英　黒変
122		B	SE123		黒灰色粘土	中世土師器	皿			100	15		10					にぶい黄橙色	煤付着
123	124	B	SE123			中世土師器	皿			80	13		11					にぶい黄橙色	骨針
124	124	B	SE123		黒灰色粘質土	中国製青磁	碗							劃花文	青磁釉	5Y6/3	オリーブ黄色	灰白色	
125	124	B	SE123		黒灰色粘土	土錘					40							にぶい橙色	
150		A	SK21			中世土師器	皿			134	21		18					にぶい黄橙色	黒変
151	126	A	SK21			中世土師器	皿			136	32		22					にぶい黄橙色	石英　黒変
152		A	SK23		中層	中世土師器	皿			118			14					にぶい黄橙色	角閃石　石英　赤色酸化粒
153		A	SK23			中世土師器	皿			119			12					にぶい黄橙色	
154	126	A	SK23		上層	中世土師器	皿			118			14					にぶい橙色	骨針　石英　穿孔　煤付着
155		B	SK137		上層	土師器	皿					60						にぶい黄褐色	骨針　石英　赤色酸化粒

第36表　田尻遺跡 第二次調査　土器・陶磁器一覧 (4)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
156		B	SK137			中世土師器	皿			88	11		8					にぶい橙色	骨針　石英　赤色酸化粒　煤付着
157		B	SK137	X266Y042		中世土師器	皿			102			8					にぶい黄橙色	骨針　赤色酸化粒
158		B	SK137		中層	珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期	273								灰色	
159		B	SK137	X266Y042	上層	珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期	300								灰白色	
160	129	B	SK137	X266Y042	上層	珠洲	擂鉢					122						灰色	
161		B	SK141	X270Y042	下層	須恵器	杯蓋											灰色	
162		B	SK141	X268Y043	中層	須恵器	杯			120								黄灰色	
163		B	SK141	X270Y042	上層	中世土師器	皿			136			18					灰黄色	石英　角閃石　黒変
164		B	SK141	X268Y043	中層	中世土師器	皿			138			13					明褐灰色	赤色酸化粒
165		B	SK141	X268Y043	上層	中世土師器	皿			138			11					浅黄橙色	石英
166		B	SK141		下層	中世土師器	皿			128			13					浅黄橙色	骨針　石英　赤色酸化粒
167	126	B	SK141			中世土師器	皿			126	21		18					灰黄褐色	石英
168		B	SK141	X269Y041		中世土師器	皿			130	31		16					灰白色	骨針　石英　赤色酸化粒
169		B	SK141		上層	中世土師器	皿			127			14					浅黄橙色	赤色酸化粒
170		B	SK141			中世土師器	皿			118			10					暗灰黄色	石英
171		B	SK141		下層	中世土師器	皿			112	20		17					にぶい橙色	骨針　石英　赤色酸化粒
172		B	SK141	X268Y043		中世土師器	皿			84			11					暗灰黄色	石英
173		B	SK141	X271Y042	下層	中世土師器	皿			78	15		12					浅黄色	赤色酸化粒　黒変　煤付着
174	126	B	SK141	X270Y043	下層	中世土師器	皿			78	16							にぶい黄橙色	赤色酸化粒　煤付着
175		B	SK141	X271Y041		中世土師器	皿			88	11		8					にぶい黄橙色	角閃石　石英
176		B	SK141	X268Y043	中層	珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期	280								灰色	
177	129	B	SK141			珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期	270								灰白色	
178		B	SK141			珠洲	擂鉢		Ⅳ～Ⅵ期									灰色	
179	129	B	SK141		下層	珠洲	擂鉢		Ⅳ期	310								灰色	煤付着
180	130	B	SK141	X270Y041	上層	土錘					38							にぶい黄色	
214	129	B	SK166			中国製白磁	碗	大宰府Ⅴ類	11C後半～12C前半			66			白磁釉	7.5Y8/1	灰白色	灰白色	
215		B	SK167		上層	須恵器	杯蓋			112								灰色	
216	129	B	SK167			中国製白磁	碗	大宰府Ⅳ類	11C後半～12C前半	140					白磁釉	7.5Y7/1	灰白色	灰白色	
217		B	SK175		上層	珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期	283								灰色	
218		B	SK181			中世土師器	皿			138			17					灰黄褐色	骨針　石英　角閃石　煤付着　黒変

第36表　田尻遺跡 第二次調査　土器・陶磁器一覧 (5)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
219		B	SK181		上層	中世土師器	皿			90			11					橙色	赤色酸化粒
220		B	SK181			中世土師器	皿			88	19		11					にぶい黄橙色	石英
221		B	SK181		上層	中世土師器	皿			88	16		11					にぶい橙色	石英　角閃石
222	126	B	SK181		上層	中世土師器	皿			93	16		11					にぶい橙色	角閃石　石英　赤色酸化粒
223		B	SK182		灰茶褐色粘質土	中世土師器	皿					84						灰白色	石英
224	126	B	SK182		灰茶褐色粘質土	中世土師器	皿			99	18	52						にぶい黄橙色	骨針　石英
225		B	SK182		灰茶褐色粘質土	中世土師器	皿			158			18					褐灰色	石英　角閃石
226		B	SK182		灰茶褐色粘質土	中世土師器	皿			88	16		13					灰褐色	石英　角閃石
227		B	SK182		灰茶褐色粘質土	珠洲	甕					120						灰白色	
228	125	A	SX49	X278Y037	下層	中世土師器	皿					40						にぶい黄橙色	石英
229	125	A	SX49	X278Y037	下層	中世土師器	皿			90	16	50						にぶい黄橙色	石英
230	125	A	SX49	X280Y037	暗黒褐色粘質土	中世土師器	皿			138	23		21					にぶい黄橙色	角閃石　黒変
231	125	A	SX49	X279Y037	暗黒褐色粘質土	中世土師器	皿			130	22		19					暗灰黄色	角閃石　黒変
232	125	A	SX49	X277Y038	下層	中世土師器	皿			86	21		13					橙色	石英　骨針
233	125	A	SX49	X278Y036	中層	中世土師器	皿			100	17		13					暗灰黄色	石英　黒変
234	125	A	SX49	X281Y037	下層	中国製白磁	皿					36			白磁釉	7.5Y7/2	灰白色	灰白色	
235	127	B	谷状地形	X258Y035	Ⅳa層	縄文土器	深鉢		晩期中葉					条痕文・押引列点文				にぶい黄橙色	
236	127	B	谷状地形	X258Y035	Ⅳa層	縄文土器	深鉢		晩期中葉					条痕文				オリーブ褐色	
237	127	B	谷状地形	X255Y039		縄文土器	深鉢		後期末or晩期			90						にぶい黄橙色	
238	127	B	谷状地形	X259Y037		縄文土器	浅鉢		晩期中葉					条痕文・押引列点文				暗灰黄色	
239	127	B	谷状地形	X258Y035	Ⅳa層	縄文土器	深鉢		後期末or晩期					条痕文				暗灰黄色	
240		B	谷状地形	X256Y037		中世土師器	皿			120			14					にぶい黄橙色	石英
241		B	谷状地形	X271Y031		中世土師器	皿			120	24		13					にぶい黄橙色	石英
242	129	A	谷状地形	X276Y027		中国製青磁	碗	大宰府Ⅰ類5b	1220～1260年	138				蓮弁文	青磁釉	5Y6/3	オリーブ黄色	灰色	
246	127	B		X256Y093		縄文土器	深鉢		晩期中葉	240								灰オリーブ色	
247	127	B		X270Y035	Ⅱ層	土師器	椀		9～10C			70						灰黄褐色	墨付着？
248	127	A		X286Y027	Ⅱ層	土師器	小甕		8C後半～10C			70						にぶい黄橙色	

第36表　田尻遺跡 第二次調査　土器・陶磁器一覧 (6)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
249		A		X283Y038	Ⅱ層	須恵器	杯蓋		8C	120								灰色	重ね焼痕
250		B		X262Y040	Ⅱ層	須恵器	杯蓋			120								黄灰色	
251		A		X286Y023	Ⅱ層	須恵器	杯蓋		8C	134								灰色	
252		A	SD214	X284Y023	下層	須恵器	杯蓋		8C	126								灰色	
253		B		X270Y043	Ⅱ層	須恵器	杯蓋			167								灰色	
254	127	A	SD46	X282Y039		須恵器	杯		8C	118	45	76						灰白色	底外面に「大」の墨書
255		A		X278Y037	Ⅱ層	須恵器	高台杯					64						灰色	
256		B			Ⅰ層	須恵器	高台杯		8C			80						灰オリーブ色	
257		B		X259Y034	Ⅱ層	須恵器	高台杯					84						灰色	
258		A			Ⅰ層	須恵器	高台杯					80						灰色	
259		B		X262Y039	Ⅱ層	須恵器	高台杯		8C			84						灰色	
260		A		X284Y037	Ⅱ層下	須恵器	高台杯					82						オリーブ灰色	
261		B		X265Y036	Ⅱ層	須恵器	高台杯					100						灰色	
262		B		X266Y038	Ⅱ層	須恵器	杯		8C	98								灰色	
263		B		X266Y024	Ⅱ層	須恵器	無台杯					62						灰色	
264		A		X285Y025	Ⅱ層	須恵器	無台杯					90						灰白色	
265		B		X266Y042	Ⅱ層	須恵器	杯		8C	138								灰色	
266		A	SD46	X282Y039		須恵器	杯			120								灰白色	
267		A		X280Y041	Ⅱ層	須恵器	杯		8C									灰色	
268		B		X268Y042	Ⅱ層	須恵器	無台杯					70						灰白色	墨付着？
269		A	SK48		黒灰色粘質土	須恵器	無台杯			140	32	96						灰白色	
270		B		X254Y035	Ⅱ層	須恵器	無台杯		10C	134	22	80						灰色	
271		A		X283Y039	Ⅱ層	須恵器？						100						灰白色	
272		B		X270Y034	Ⅱ層	須恵器	鉄鉢			160								灰白色	
273		A	SK45			須恵器	壺											灰色	
274		A		X283Y032	Ⅱ層	須恵器	壺											灰色	
275		B		X258Y036	Ⅱ層	須恵器	壺											灰色	
276		A	SK45			須恵器	甕			240								黄灰色	
277		A		X284Y034	Ⅱ層	須恵器	甕											灰色	
278		B		X242Y035他	Ⅱ層	須恵器	甕											灰白色	
279		B		X272Y035	Ⅱ層	須恵器	甕											灰オリーブ色	
280		A	SD29	X285Y030		中世土師器	皿					37						にぶい黄橙色	赤色酸化粒
281		A		X285Y024	Ⅱ層	中世土師器	皿					42						浅黄橙色	石英
282	126	A	SK04		茶褐色粘質土	中世土師器	皿					44						灰白色	
283	126	B	SK125			中世土師器	皿			148	37	68						にぶい黄橙色	骨針　石英　赤色酸化粒
284		B		X260Y022	Ⅱ層	中世土師器	皿					70						にぶい黄褐色	石英　角閃石　黒変

第36表　田尻遺跡 第二次調査　土器・陶磁器一覧 (7)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
285		B			Ⅰ層	中世土師器	皿					56						浅黄橙色	
286		B		X262Y026	Ⅱ層	中世土師器	皿					49						にぶい褐色	石英
287		A		X278Y037	Ⅱ層	中世土師器	皿					46						にぶい黄橙色	石英
288	126	B	SK135			中世土師器	皿			96	17	47						黄橙色	石英
289		B		X271Y042	Ⅱ層	中世土師器	皿			80	20		42					にぶい黄褐色	石英　赤色酸化粒
290		B	SK99	X270Y043	黒褐色に青灰色粘質土混	中世土師器	皿					46						浅黄橙色	骨針
291		B	SK99	X270Y043	黒褐色粘質土に青灰色粘質ブロック混	中世土師器	皿			140	22		17					にぶい黄褐色	角閃石　黒雲
292		B		X269Y028	Ⅱ層	中世土師器	皿			128			9					にぶい黄橙色	角閃石
293		B		X262Y040	Ⅱ層	中世土師器	皿			150			7					にぶい橙色	石英
294		A		X279Y057	Ⅱ層	中世土師器	皿			132			14					灰黄褐色	
295		A		X280Y040	Ⅱ層	中世土師器	皿			122			12					にぶい黄褐色	
296		A		X280Y041	Ⅱ層	中世土師器	皿			136			17					にぶい橙色	石英
297		A		X277Y041	Ⅱ層	中世土師器	皿			130			15					灰白色	
298		B		X268Y038	Ⅱ層	中世土師器	皿			126	28		14					にぶい橙色	
299		A		X278Y041	Ⅱ層	中世土師器	皿			130	31		18					にぶい橙色	石英
300		B		X271Y042	Ⅱ層	中世土師器	皿			120			10					にぶい黄橙色	
301		A		X278Y038	Ⅱ層	中世土師器	皿			120			12					浅黄橙色	石英
302		B		X265Y040	Ⅱ層	中世土師器	皿			106	26		19					浅黄橙色	赤色酸化粒
303		B	SK113			中世土師器	皿			120	25		15					灰黄褐色	
304		B		X275Y033	Ⅱ層	中世土師器	皿			120			15					にぶい橙色	赤色酸化粒
305		A		X278Y040	Ⅱ層	中世土師器	皿			120	31		21					にぶい黄橙色	石英
306		B		X270Y042	Ⅱ層	中世土師器	皿			84	19		12					にぶい黄橙色	
307		B		X277Y040	Ⅱ層	中世土師器	皿			90			14					にぶい橙色	角閃石
308		A		X277Y031	Ⅱ層	中世土師器	皿			92	14		7					にぶい黄橙色	角閃石
309		B		X267Y039	Ⅱ層	中世土師器	皿			80	14		9					にぶい黄橙色	
310		B		X234Y035	Ⅱ層	中世土師器	皿			76	13		8					にぶい黄橙色	赤色酸化粒
311		B		X261Y029	Ⅱ層	中世土師器	皿			90	17		11					にぶい黄橙色	石英
312		A		X282Y037	Ⅱ層	中世土師器	皿			82	19		9					にぶい褐色	角閃石
313		B		X258Y042	Ⅱ層	中世土師器	皿			80	21		11					にぶい橙色	
314		B		X271Y038	Ⅱ層	中世土師器	皿			76	20		10					にぶい黄橙色	石英
315		B		X170Y092	Ⅱ層	中世土師器	皿			72	15		10					浅黄橙色	
316		A		X277Y042	Ⅱ層	中世土師器	皿			80	19		11					にぶい橙色	石英　角閃石
317		B		X273Y042	Ⅱ層	中世土師器	皿			80	17		12					にぶい黄橙色	石英　雲母？
318		B		X265Y039	Ⅱ層	中世土師器	皿			76	15		14					にぶい橙色	石英

第36表　田尻遺跡 第二次調査　土器・陶磁器一覧 (8)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
319		B		X264Y041	Ⅱ層	中世土師器	皿			74	13		10					にぶい黄橙色	石英
320		A	SK59			中世土師器	皿			90	20		15					にぶい橙色	角閃石
321	126	B	SK118			中世土師器	皿			80	15		11					にぶい黄橙色	赤色酸化粒
322		B	SK135			中世土師器	皿			78	15		11					灰白色	骨針　石英　粘土接合痕
323	126	A		X282Y040	Ⅱ層	中世土師器	皿			86	12		9					にぶい橙色	煤付着
324		B		X244Y031	Ⅱ層	中世土師器	大皿			170			15					にぶい橙色	角閃石　石英
325	129	B		X270Y040	Ⅱ層	八尾	甕		13C後半	460					自然釉	5Y6/2	灰オリーブ色	黄灰色	
326	129	A		X276Y043	Ⅱ層	八尾	甕		13C～14C			150			自然釉	10YR7/3	にぶい黄橙色	黄灰色	
327		A		X283Y035	Ⅱ層	珠洲	甕					160						灰色	
328	128	B		X265Y032	Ⅱ層	珠洲	壺			72								灰色	
329	128	A		X280Y035	Ⅱ層	珠洲	壺					92						灰色	
330	128	B		X244Y037	Ⅱ層	珠洲	壺		Ⅰ～Ⅱ期	240								灰色	
331	128	B		X269Y036	Ⅱ層	珠洲	壺											灰色	
332	128	B			Ⅰ層	珠洲	甕		Ⅰ～Ⅱ期									灰色	
333		A	SD32		上層	珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期									灰色	
334		B		X267Y029	Ⅱ層	珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期	230								灰色	
335		A		X281Y037	Ⅱ層	珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期	292								灰色	
336		B		X265Y039	Ⅱ層	珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期	300					自然釉	N3/0	暗灰色	灰色	
337		A	SK45	X277Y035		珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期	312	103	120						灰黄色	
338		B		X246Y036他	Ⅱ層	珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期	320								灰色	
339		B		X234Y032	Ⅱ層	珠洲	擂鉢		Ⅱ～Ⅲ期	312								灰色	
340		B		X234Y037	Ⅱ層	珠洲	擂鉢		Ⅰ～Ⅱ期	314								灰色	
341		B		X262Y030	Ⅱ層	珠洲	擂鉢		Ⅱ期	360								灰色	
342	129	B		X257Y038	Ⅱ層	珠洲	擂鉢		Ⅱ期	340								灰色	
343		B		X273Y037	Ⅱ層	珠洲	擂鉢		Ⅳ期	300								灰白色	
344		B		X268Y040	Ⅱ層	珠洲	擂鉢		Ⅴ期	260				波状文				灰白色	
345		B		X270Y030	Ⅱ層	珠洲	擂鉢		Ⅰ期			110						灰白色	
346		A		X282Y041	Ⅱ層	珠洲	擂鉢					120						灰色	
347		A		X281Y043	Ⅱ層	珠洲	擂鉢					128						灰白色	
348		A		X284Y030	Ⅱ層	珠洲	擂鉢					128						灰白色	
349		B		X236Y039	Ⅱ層	珠洲	擂鉢		Ⅳ～Ⅴ期			110						灰色	
350		B		X251Y033	Ⅱ層	珠洲	擂鉢					108						灰色	
351		A		X282Y040	Ⅱ層	珠洲	擂鉢					120						灰白色	
352		B		X268Y035	Ⅱ層	珠洲	擂鉢					120						灰色	
353		B		X249Y035	Ⅱ層	珠洲	擂鉢					120						灰色	

第36表　田尻遺跡 第二次調査　土器・陶磁器一覧 (9)

番号	図版	地区	遺構番号	座標	層位	種類	器種	分類	年代	口径	器高	底径	横撫で幅	文様	釉薬	釉調(記号)	釉調(和名)	胎土	特記事項
354	129	A		X276Y029	Ⅱ層	中国製白磁	碗	Ⅸ類	1250～1330年	140					白磁釉	N8/0	灰白色	灰白色	
355		A		X276Y042	Ⅱ層	中国製白磁	皿	Ⅵ類1a	1060～1160年	120					白磁釉	2.5Y8/2	灰白色	灰白色	
356		B		X266Y030	Ⅱ層	中国製白磁	皿			100					白磁釉	10Y7/1	灰白色	灰白色	
357	129	B		X270Y039	Ⅱ層	中国製白磁	碗	Ⅱ類	1060～1160年			60			白磁釉	7.5Y7/1	灰白色	灰白色	
358	129	B		X251Y020	Ⅱ層	中国製白磁	碗	Ⅳ類1	1060～1160年			78			白磁釉	2.5Y7/2	灰黄色	灰白色	
359	129	A	SD29	X284Y032		中国製青磁	碗	Ⅰ類5b	1220～1260年	140				鎬蓮弁文	青磁釉	2.5GY6/1	オリーブ灰色	灰白色	
360	129	A		X276Y032	Ⅱ層	中国製青磁	碗	Ⅰ類2	1160～1230年					劃花文	青磁釉	5Y6/3	オリーブ黄色	灰色	
361	129	B		X269Y039	Ⅱ層	中国製青磁	杯	Ⅲ類		138					青磁釉	5G7/1	明緑灰色	灰白色	龍泉窯系
362	129	A		X282Y042	Ⅱ層	中国製青磁	皿		15C	110					青磁釉	7.5GY6/1	オリーブ灰色	灰白色	龍泉窯系
363	129	B		X268Y039	Ⅱ層	陶器	四耳壺			112					褐釉	7.5Y6/3	オリーブ黄色	灰白色	
364	129	A		X286Y025	Ⅱ層	越中瀬戸	匣鉢		登窯	117					鉄釉	7.5YR3/2	黒褐色	灰白色	
365	129	B		X239Y040	Ⅱ層	瀬戸美濃	徳利？								鉄釉	5YR4/2	灰褐色	灰白色	
366	130	A		X285Y033	Ⅱ層	信楽	灯明皿		19C	102	23	38			透明釉			灰白色	煤付着
367		A	SD31	X280Y039		灰釉陶器	段皿		10～11C	80					灰釉	5Y7/1	灰白色	灰白色	
368		A		X282Y029	Ⅱ層	磁器	皿			140				染付	透明釉			灰白色	染付2.5PB7/3うす青色
369	130	B		X260Y027	Ⅱ層	瀬戸本業	椀		19C	100				染付	透明釉			灰白色	染付5BG6/1緑灰色
370	130	A		X284Y038	Ⅱ層	伊万里	碗		18C前			51		染付	透明釉			灰色	陶胎染付 染付10GY5/1
371	130	B		X252Y038	Ⅱ層	唐津	溝緑皿		1600～1630年	140					灰釉	7.5Y5/2	オリーブ灰色	灰色	
372	130	A		X282Y043	Ⅱ層	唐津	椀		1700～1760年			52			銅緑釉 灰釉	5G5/1	緑灰色	灰白色	内野山西窯系 蛇の目釉剝 砂目 灰釉5Y7/1 灰白色
373	130	A		X285Y031	Ⅱ層	越中瀬戸	擂鉢					127			錆釉	10YR4/3	赤褐色	にぶい橙色	
374	130	B		X270Y028	Ⅱ層	陶器	水滴？					31		鉄絵	灰釉	5Y6/2	灰オリーブ色	灰色	鉄絵N2/0黒色
	122	B	SB01	X277Y040	下層	珠洲	甕		Ⅰ～Ⅱ期									灰白色	
	130	A		X285Y030	Ⅱ層	磁器									白磁釉	N8/0	灰白色	灰白色	煤付着

第37表　田尻遺跡 第二次調査　木製品一覧 (1)

番号	図版	地区	遺構番号	座　標	層位	種　類	長さ	幅(高さ)	厚さ(直径)	樹　種	木取り	年輪幅	樹種写真	塗　膜	整理番号	特記事項
021	122	B	SB01			柄？	(5.7)	2.0	1.8						910081	漆が部分的に残る
022	122	B	SB01			加工木(特殊形)	(6.9)	2.5	0.3						910078	有孔
023		B	SB01	X276Y041	下層	箸	(19.5)		0.5	スギ					910042①	
024	122	B	SB01	X267Y039		箸	(19.3)		0.6						910074	
025	122	B	SB01	X276Y041	下層	箸	(18.6)		0.7						910042②	
026	122	B	SB01	X267Y039	下層	箸	(18.3)		0.6						910079	
027		B	SB01			箸	(8.9)		0.45						910077③	
028		B	SB01	X267Y040		箸	(10.6)		0.55						910040	
029		B	SB01			箸	(16.1)		0.65						910077②	
030		B	SB01	X266Y038		箸	(18.0)		0.6						910045	
031	122	B	SB01			箸	(18.2)		0.6						910077①	
032	133	B	SB01			柱	(31.2)		10.3	不明(ウリハダカエデ・コブシ・アサダ)		2.5-6	15		910071①	
033	133	B	SB01			柱	(23.2)		9.5	カツラ		2-6			910071②	
095	132	B	SE109			漆器椀	13.3	5.3	7.6	ケヤキ	斜柾目			4-16	910016	内外－黒
096	132	B	SE109			漆器椀	16.3	5.3	8.0	トチノキ		1.0-2.5		6-79	910014	内外－黒　底外面に「＋」の刻線
097	132	B	SE109			漆器皿	9.0	1.0	7.3		柾目			4-17,6-32	910009	底部にロクロの爪跡
098		B	SE109			箸	19.7		0.7						910011	
099		B	SE109			箸	19.2		0.65						910025①	
100		B	SE109			箸	(18.7)		0.6	スギ					910025②	
101	133	B	SE109			加工木	(24.5)	2.1	1.8		柾目				910018	有孔
102	131	B	SE109			曲物		6.2	16.4	側板スギ・アスナロ、底板不明(樹脂細胞を有する針葉樹)	側板板目	0.5			910008	
103	131	B	SE109			井戸枠(曲物)		28.0	58.5	外側の側板スギ、皮紐不明(bark)					910303	木釘痕
104	131	B	SE109			井戸枠(曲物)		25.6	58.4	スギ					910305	木釘痕
105		B	SE109			井戸枠(曲物)		29.2	59.8	スギ					910302	
106		B	SE109			井戸枠(曲物)		23.4	60.0	外側の側板スギ、内側の側板不明(樹脂細胞・スギ型分野壁孔を有する針葉樹)					910304	木釘痕
126	125	B	SE123		青灰色粘土	曲物		10.0	22.9	タガ側板スギ、本体側板スギ・アスナロ、底板スギ、木釘スギ	タガ側板板目、本体側板柾目、底板柾目	1.0,0.4 -1.0,1.0			910022	
127	125	B	SE123		黒灰色粘質土	円形板		0.9	22.4	スギ		0.5-2.0			910002	木釘
128	125	B	SE123			加工木	(11.0)	3.5	0.4		柾目				910052	
129	124	B	SE123		青灰色粘土	鍬身	(22.1)	(4.2)	2.6	クヌギ	柾目				910023	
130		B	SE123		青灰色粘土	箸	(15.6)		0.49						910031⑤	
131		B	SE123		青灰色粘土	箸	(14.8)		0.5						910031⑥	
132		B	SE123		黒灰色粘質土	箸	(15.1)		0.55	スギ					910028③	

第37表　田尻遺跡 第二次調査　木製品一覧 (2)

番号	図版	地区	遺構番号	座　標	層位	種　類	長 さ	幅(高さ)	厚さ(直径)	樹　種	木 取 り	年輪幅	樹種写真	塗　膜	整理番号	特 記 事 項
133		B	SE123		青灰色粘土	箸	15.9		0.75						910031⑧	
134		B	SE123		青灰色粘土	箸	(17.65)		0.45						910029①	
135		B	SE123		青灰色粘土	箸	(16.75)		0.55						910029④	
136		B	SE123		青灰色粘土	箸	(16.0)		0.55						910031⑨	
137	124	B	SE123		青灰色粘土	箸	17.4		0.5						910031①	
138		B	SE123		青灰色粘土	箸	(18.4)		0.6						910029②	
139	124	B	SE123		青灰色粘土	箸	17.55		0.55						910031②	
140		B	SE123		青灰色粘土	箸	(18.8)		0.65						910031③	
141		B	SE123		黒灰色粘質土	箸	(18.4)		0.7						910028①	
142		B	SE123		青灰色粘土	箸	19.05		0.65						910031④	
143		B	SE123		黒灰色粘質土	箸	(18.85)		0.5						910028②	
144		B	SE123		青灰色粘土	箸	18.8		0.65						910029③	
181	132	B	SK141			漆器皿	(10.6)	(1.1)	7.6	ケヤキ	柾目	1-2		6-30	910001	
182	132	B	SK141	X270Y042	下層	漆器皿	11.9	2.4	6.5	ケヤキ	柾目	0.6		6-31	910003	
183	131	B	SK141			下駄？	(11.0)	16.0	2.2	スギ		1.5-3			910046	
184		B	SK141			円形板	(21.8)	(4.3)	1.0						910084	木釘痕
185		B	SK141		下層	箸	(19.3)		0.5						910061②	
186		B	SK141			箸	(19.1)		0.7						910049①	
187		B	SK141	X271Y042	下層	箸	20.7		0.6						910034①	
188		B	SK141	X270Y042	下層	箸	(19.9)		0.5						910033②	
189		B	SK141			箸	(18.8)		0.4						910049②	
190		B	SK141	X268Y042		箸	19.65		0.55						910041⑤	
191		B	SK141	X271Y041		箸	17.9		0.63						910035⑮	
192		B	SK141	X268Y042		箸	(16.3)		0.55						910041⑨	
193		B	SK141	X271Y041		箸	19.9		0.5						910035⑧	
194		B	SK141	X270Y042	下層	箸	(18.9)		0.48						910033③	
195		B	SK141			箸	(19.8)		0.45						910076②	
196		B	SK141			箸	19.4		0.5						910083④	
197		B	SK141			箸	(19.5)		0.55						910083⑤	焼け
198		B	SK141	X271Y042	下層	箸	17.6		0.5						910034②	
199		B	SK141	X271Y042	下層	箸	18.1		0.48						910034③	
200		B	SK141	X271Y041		箸	(17.7)		0.55						910035①	
201		B	SK141	X271Y041		箸	22.0		0.6						910035⑬	
202		B	SK141	X271Y041		箸	(19.7)		0.45						910035⑨	
203		B	SK141	X268Y042		箸	19.85		0.45						910041③	
204		B	SK141	X271Y041		箸	(19.2)		0.8						910035⑯	
205		B	SK141		下層	箸	(19.0)		0.6						910061①	

第37表　田尻遺跡 第二次調査　木製品一覧 (3)

番号	図版	地区	遺構番号	座　標	層位	種　類	長さ	幅(高さ)	厚さ(直径)	樹　種	木取り	年輪幅	樹種写真	塗　膜	整理番号	特記事項
206		B	SK141			箸	17.95		0.65						910076①	
207		B	SK141		下層	箸	(17.9)		0.6						910082④	
208		B	SK141		下層	箸	16.4		0.62						910082②	
209	133	A	SK141			加工木	(11.5)	9.2	4.6	ホオノキ・コブシ		1-2	10		910054	
210		B	SK141		下層	柄	(13.6)	3.0	2.9	イロハモミジ	柾目	1			910065	
211		B	SK141	X271Y041		加工木	16.2	4.0	3.0	スギ	柾目				910006	有孔
212	133	B	SK141			加工木(板状)	(8.0)	7.8	0.2		柾目				910062	
213	133	B	SK141			加工木(板状)	7.8	2.8	0.3		柾目				910085	
375		B	SK110			柱	(25.0)		13.0						910070	
376	133	B	SK165			礎板？	(8.6)		(5.4)						910069	

第38表　田尻遺跡 第二次調査　石製品一覧

番　号	図　版	地　区	遺構番号	座　標	層　位	種　類	長	幅	厚	重	石　材
048	130	A	SD13	X284Y034		温　石	(8.6)	(5.8)	1.2	116.7	滑　石
243	130	B	谷状地形	X260Y034		打製石斧	(10.2)	(8.0)	2.8	286.9	安山岩
244	130	B	谷状地形			打製石斧	(13.4)	9.2	2.4	475.8	凝灰岩
245	130	B	谷状地形	X260Y037		石　鏃	2.5	1.7	0.3	1.2	安山岩
377	130	B		X267Y038	Ⅱ層	石臼（下）		9.2	(21.1)	4330.0	

第39表　田尻遺跡 第二次調査　金属製品一覧

番　号	図　版	地　区	遺構番号	座　標	層　位	種　類	長	幅	厚	重	材　質	特　記
079	130	A	SD87			取手金具？	4.9	0.5	0.5	7.1	銅	
145	124	B	SE123		黒灰色粘土	銭貨	2.6		0.08	2.90	銅	咸平元寶
146	124	B	SE123		黒灰色粘土	銭貨	2.5		0.09	3.28	銅	嘉祐通寶
147	124	B	SE123		青灰色粘土	銭貨	2.4		0.1	3.73	銅	元禧通寶
148	124	B	SE123		青灰色粘土	銭貨	2.4		0.12	3.90	銅	紹聖元寶
149	124	B	SE123		黒灰色粘土	銭貨	2.4		0.1	3.34	銅	元祐通寶
378	130	A		X282Y042	Ⅱ層	銭貨	2.7		0.1	4.44	銅	寛永通寶
379	130	A		X282Y042	Ⅱ層	銭貨	2.7		0.1	4.79	銅	寛永通寶
380	130	A		X279Y034		銭貨	2.3		0.1	0.93	銅	政和通寶
381	130	A		X285Y029	Ⅱ層	銭貨	2.6		0.06	2.75	銅	文久永寶
382	130	A		X282Y042	Ⅱ層	銭貨	2.4		0.12	3.55	銅	寛永通寶
383	130	B	SK65			銭貨	2.4		0.12	2.66	銅	元禄通寶

平成８年３月31日発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第８集

梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡
梅原安丸遺跡・田尻遺跡 **発掘調査報告**

―東海北陸自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告Ⅲ―

（第一分冊）

編集・発行　財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
〒930　富山市五福4384番１号
TEL　0764-42-4229

印　刷　日　興　印　刷